仙台市文化財調査報告書第242集

# 高田B遺跡

第1分冊　本文編

2000年3月

仙台市教育委員会
宮城県道路公社

仙台市文化財調査報告書第242集

# 高　田　B　遺　跡

第1分冊　本　文　編

2000年3月

仙台市教育委員会
宮城県道路公社

# 序　文

日頃より本市の文化財保護行政に関しまして、ご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。仙台市は人口100万人を擁し、宮城県都としてのみならず東北地方の中枢都市として飛躍的な発展を遂げており、21世紀へ向けての文化財行政の指針作成や体制整備も求められてきております。

さて、仙台市東郊の田園地帯を東西に貫く仙台南部道路は、東北自動車道と仙台東部道路を繋ぐ道路網の一つであり、2001年の宮城国体を目指し、整備が急がれていました。この計画を受けた計画路線上に該当する地域の分布調査により、当遺跡の存在が確認されたことから、発掘調査を実施いたしました。平成３年度から５年度に行われた発掘調査では、縄文時代から近世に至る時代の遺構・遺物が多数発見され、特に縄文・弥生時代および中世から近世にかけての資料は極めて重要なものであり、仙台平野の歴史を考える上で、新しい知見が得られるものと考えております。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のための一助となれば幸いです。

発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。

平成12年３月

仙台市教育委員会
教育長　小　松　弥　生

# 例　言

1．本書は、仙台市教育委員会が実施した、仙台南部道路の建設工事II期事業に伴う高田B遺跡の発掘調査成果についてまとめたものである。

2．本書は6分冊からなり、第1分冊が本文・遺構編、第2分冊が分析・考察編、第3分冊が遺物図版編1（土器・土製品）、第4分冊が遺物図版編2（木製品・石器・石製品・金属製品）、第5分冊が観察表編、第6分冊が写真図版編となっている。

3．報告書刊行のための遺物整理、本書の編集は荒井　格・赤澤靖章が行った。

4．第1分冊の第2章第1節　仙台平野の地形環境変化と高田B遺跡　については東北大学大学院理学研究科地理学教室の松本秀明氏に執筆していただいた。それ以外は荒井・赤澤が執筆し、遺構は荒井・赤澤、土器・土製品は赤澤、木製品・石器・石製品・金属製品は荒井が担当した。第2分冊のまとめの執筆は荒井・赤澤が分担して行った。

5．第2分冊の自然科学分析については下記の方々・機関に依頼して分析・執筆をしていただいた。

第1章　仙台市高田B遺跡出土木材の樹種と木材利用
東北大学理学部付属植物園　鈴木三男氏　　農林水産省森林総合研究所　能城修一氏

第2章　高田B遺跡より出土した大型植物化石　古代の森研究舎　吉川純子氏

第3章　土器底部についた木葉痕の種類　古代の森研究舎　吉川純子氏

第4章　高田B遺跡の花粉分析　岡山理科大学自然科学研究所　守田益宗氏

第5章　仙台市高田B遺跡におけるプラント・オパール分析　㈱古環境研究所

第6章　仙台市高田B遺跡出土の漆製品の塗膜構造調査　京都造形芸術大学文化財科学研究室　岡田文男氏

第7章　仙台市高田B遺跡から産出した昆虫化石群集と古環境　愛知県立明和高等学校　森　勇一氏

第8章　仙台市高田B遺跡の火山灰分析　㈱古環境研究所

6．石器・石製品の石材は、東北大学理学部助手　石川賢一氏に鑑定していただいた。

7．陶磁器類の鑑定は文化財課　佐藤　洋が行った。また、土師器・須恵器の整理では文化財課　小川淳一の協力を得た。

8．弥生土器の容量は北陸学院短期大学　小林正史氏に測定していただいた。

9．発掘調査および資料の整理に際し、次の方々から多くの指導・助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略）。

相澤清利　阿刀弘史　阿部博志　安藤広道　飯塚武司　猪狩忠雄　石井扶美子　石川賢一　石川日出志　石黒立人　石田浩司　上原真人　臼井直之　及川　司　扇崎　由　太田昭夫　大谷弘幸　大友 透　岡崎正雄　岡田文男　岡本孝之　岡部裕俊　岡安雅彦　尾関清子　甲斐博幸　木村有作　工楽善通　黒崎　直　楠　正勝　小井川和夫　甲元眞之　木幡成雄　小林正史　近藤　敏　斎野裕彦　佐藤信行　佐藤嘉広　設楽博己　下條信行　白鳥良一　菅谷通保　鈴木隆康　鈴木三男　須田良平　須藤 隆　高島好一　高谷和生　田崎博之　谷口　肇　都築恵美子　手塚均　直井孝一　中川律子　中富　洋　能城修一　野中　仁　早坂春一　樋上　昇　比佐陽一郎　深澤芳樹　藤原妃敏　穂積裕昌　村上由美子　望月由佳子　森 勇一　守田益宗　松本秀明　矢島敬之　山口譲治　山下平重　山田昌久　吉川純子　吉田秀享　吉本健一　出土木器研究会　東北大学考古学研究室　東北歴史資料館　弥生土器を語る会

10．本遺跡の調査成果については、すでに現地説明会資料や市史・雑誌などに内容の一部が紹介されているが、本

書の記載内容がそれらに優先する。

11. 調査・整理に関する一切の資料は仙台市教育委員会が保管している。

# 凡　例

1．本書で使用した国土地理院発行の地形図には、図名、縮尺を明記した。

2．図中および本文記載の方位の北は、すべて真北である。

3．本書中の土色の記述には『標準　土色帖』（小山正忠・竹原秀雄　1973）を使用した。

4．調査において検出された遺構については以下の遺構略号を使用し、各遺構ごとに番号を付した。

SB　掘立柱建物跡　　SD　溝跡　　SI　竪穴住居跡・竪穴遺構　　SK　土坑

SR　自然流路跡　　SX　性格不明遺構　　P　ピット

5．出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、各遺物ごとに番号を付した。

A　縄文土器　　B　弥生土器　　C　土師器(非ロクロ)　　D　土師器(ロクロ)

E　須恵器　　I　陶器　　J　磁器　　K　石器・石製品

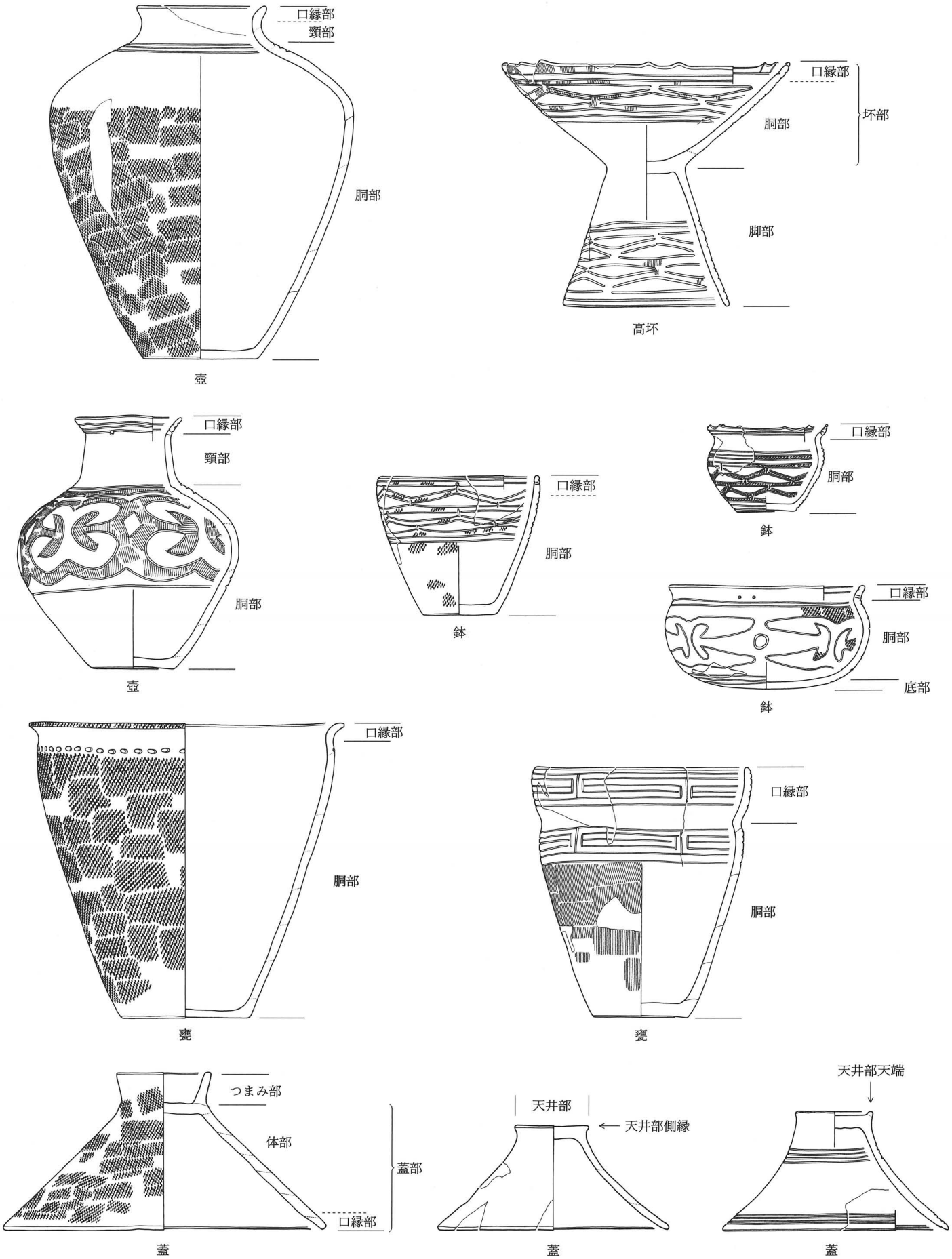
L　木製品　　N　金属製品　　P　土製品　　T　土師質土器

U　瓦質土器

なお、石器についてはある程度、種別に登録を行い、遺物記号Kの後に小文字アルファベットを付けて表示した（例　Ka、Kc、Ke、…）。

6．縄文土器、弥生土器に施された文様のうち並行直線文という名称を用いたものがある。これは直線的に描かれた沈線が、2本以上並んだものをさしている。通常、「平行」の漢字を当てる場合が多いが、中期後半の同時描きによる平行沈線文と区別させる意図から、「並行」の漢字を使用することとした。

7．土器の各部位呼称は別図で示したように用いた。


口縁部
頸部
胴部
壺
口縁部
胴部
坏部
脚部
高坏
口縁部
頸部
胴部
壺
口縁部
胴部
鉢
口縁部
胴部
鉢
口縁部
胴部
底部
鉢
口縁部
胴部
甕
口縁部
胴部
甕
つまみ部
体部
蓋部
口縁部
蓋
天井部
天井部側縁
蓋
天井部天端
蓋

弥生土器の部位呼称

# 第１分冊　本文編目次

序文
例言
凡例

第１章　調査に至る経緯……1
第１節　調査原因……1
第２節　調査要項……4

第２章　遺跡の立地と環境……7
第１節　仙台平野の地形環境変化と高田Ｂ遺跡……松本　秀明……7
１．仙台平野北部地区の微地形分布……7
２．仙台平野北部地区の沖積層と最終氷期最寒冷期以降の海水準変動……11
(1)　仙台平野北部地区の沖積層……11　(2)　最終氷期最寒冷期以降の海水準変動……11
(3)　仙台平野の海岸線位置の変化……11
３．約6,000年前以降の海水準の微変動と仙台平野の拡大過程……11
(1)　浜堤列の形成と海水準微変動……11　(2)　海水準の微変動と仙台平野の地形発達……12
４．仙台平野北部の微地形と高田Ｂ遺跡……13
第２節　歴史的環境……14

第３章　調査の方法と概要……18
第１節　追加確認調査……18
第２節　本調査……19
１．調査区の設定……19
２．調査経過……20
平成３年度……20　平成４年度……21
平成５年度……22
３．測量の基準……22
４．遺物の取り上げ・写真記録……23

第４章　基本層序……24

第５章　検出遺構と出土遺物……26
第１節　縄文時代の遺構と遺物……26
第２節　弥生時代の遺構と遺物……28
１．第VI層上面検出遺構と出土遺物……28
(1)　溝跡……28　(2)　土坑……31

(3) 性格不明遺構……43　(4) ピット……51
(5) 自然流路跡……51　(6) 畦畔状遺構……125
2．第VI層出土遺物……125
3．第Ｖｃ層出土遺物……127
4．第Ｖｂ層出土遺物……151
5．第Ｖａ層出土遺物……159
6．第Ｖ層出土遺物……159
第３節　古墳時代の層の遺物……160
1．ＳＲ１自然流路跡出土遺物……160
(1) 12層出土遺物……160　(2) 11層出土遺物……166
(3) 10層出土遺物……166　(4) ９層出土遺物……166
(5) ８層出土遺物……167　(6) ７層出土遺物……179
(7) ６層出土遺物……180
2．ＳＲ２自然流路跡出土遺物……180
(1) ６層出土遺物……180　(2) ５層出土遺物……181
第４節　平安時代の遺構と遺物……181
1．検出遺構……181
(1) 溝跡……181　(2) 畦畔状遺構……182
2．ＳＲ１自然流路跡出土遺物……183
(1) ５層出土遺物……183　(2) ４層出土遺物……184
(3) ３層出土遺物……184　(4) ２層出土遺物……185
(5) １層出土遺物……185
3．ＳＲ２自然流路跡出土遺物……185
(1) ４層出土遺物……185　(2) ３層出土遺物……186
(3) ２層出土遺物……186　(4) １層出土遺物……186
第５節　中世の遺構と遺物……186
1．第IVａ層下面検出遺構と出土遺物……186
(1) 掘立柱建物跡……186　(2) 溝跡……189
(3) 土坑……214　(4) ピット……214
2．第IVａ層上面検出遺構と出土遺物……214
(1) 水田跡……214　(2) 溝跡……223
(3) 土坑……224　(4) 性格不明遺構……224
3．第IVａ層出土遺物……225
4．第IVｂ層出土遺物……232
第６節　近世の遺構と遺物……233
1．第IIｃ層上面検出遺構と出土遺物……233
(1) 水田跡……233　(2) 溝跡……237
(3) 土坑……239　(4) 性格不明遺構……239

2．第II c 層出土遺物 ……239
3．第II b 層上面検出遺構 ……241
4．第II b 層出土遺物 ……243
5．第II a 層下面検出遺構と出土遺物……244
6．第II a 層上面検出遺構と出土遺物……246
(1) 水田跡 ……246　(2) 溝跡 ……270
(3) 土坑 ……270
7．第II a 層出土遺物 ……272
第７節　その他の遺物……273

# 挿図目次


第１図　調査区位置図 ……2
第２図　遺跡の範囲と調査区配置図 ……3
第３図　仙台平野北部の微地形 ……8
第４図　仙台平野北部の地盤高図 ……9
第５図　海浜の模式断面図 ……9
第６図ａ　仙台湾岸における最終氷期最寒冷期以降の海面変動曲線……10
第６図ｂ　仙台湾における後氷期の海水準微変動……10
第７図　仙台平野の海岸線と地形変化……10
第８図　浜堤列の形成と海水準微変動……12
第９図　仙台平野の海面微変動と地形発達……12
第10図　高田Ｂ遺跡周辺の遺跡……15
第11図　追加確認調査区設定図……18
第12図　調査区設定図……20
第13図　グリッド設定図……23
第14図　SI1 竪穴住居跡……26
第15図　第Ⅵ層上面遺構全体図……29
第16図　SD48・49 溝跡、SK35 土坑 ……32
第17図　SK6～12・15～18・21・23 土坑 ……39
第18図　SK19・30～32・39・42・45・47・56～58・62 土坑 ……40
第19図　SK59～61・63～66・68・69 土坑 ……41
第20図　SK13・14・37 土坑、SX1～３・９・10・15・16性格不明遺構……52
第21図　SK20・24・26・27・29 土坑、SX ４～８・14性格不明遺構 ……53
第22図　SK48 土坑、SX17～20・23・24・42・44 性格不明遺構 ……54
第23図　SK40・46 土坑、SX26～29・45・47 性格不明遺構 ……55
第24図　SK67 土坑、SX30～41・46 性格不明遺構 ……56
第25図　SR1 自然流路跡断面図 ……59
第26図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況(1)……60
第27図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況(2)……61
第28図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況(3)……62
第29図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況(4)……63
第30図　SD19 溝跡、SR2 自然流路跡断面図 ……117
第31図　SR2 自然流路跡８層木製品出土状況(1) ……118
第32図　SR2 自然流路跡８層木製品出土状況(2) ……119
第33図　SR2 自然流路跡検出杭断面図 ……120
第34図　SR1 自然流路跡12・８・７層木製品出土位置図 ……161
第35図　SR1 自然流路跡12層木製品出土状況 ……162
第36図　SR1 自然流路跡８層木製品出土状況(1) ……169
第37図　SR1 自然流路跡８層木製品出土状況(2) ……170
第38図　SR1 自然流路跡８層木製品出土状況(3) ……171
第39図　ＳＲ１自然流路跡検出杭断面図(1) ……172
第40図　ＳＲ１自然流路跡検出杭断面図(2) ……173
第41図　ＳＲ１自然流路跡検出杭断面図(3) ……174
第42図　畦畔状遺構 ……182
第43図　SD18 溝跡 ……182
第44図　第Ⅳａ層下面遺構全体図 ……187
第45図　SB1・２掘立柱建物跡 ……190
第46図　SB1・２掘立柱建物跡他断面図 ……191
第47図　SD5 溝跡木製品出土状況 ……194
第48図　SD5 溝跡検出杭断面図(1) ……195
第49図　SD5 溝跡検出杭断面図(2) ……196
第50図　SD5～15・17・20・21・28～30・38 溝跡断面図 ……209
第51図　SD39・41・42・44・45 溝跡断面図、SK50 土坑 ……210

第52図　第Ⅳa層上面遺構全体図 ……217
第53図　水田跡水口 ……219
第54図　SD32 溝跡 ……221
第55図　SD33 溝跡 ……222
第56図　SD 4・36・47溝跡、SK53 土坑、
SX43 性格不明遺構断面図 ……224
第57図　第Ⅱc層上面遺構全体図 ……235
第58図　SD31・34 溝跡断面図、SK51・
55 土坑、SX25 性格不明遺構 ……238
第59図　第Ⅱb層上面遺構全体図 ……242
第60図　第Ⅱa層下面遺構全体図 ……245
第61図　SD35・43 溝跡断面図 ……245
第62図　第Ⅱa層上面遺構全体図 ……247
第63図　SD 2・3・26溝跡断面図、
第1～3水口 ……250
第64図　水田跡、SD 2 溝跡木製品出土状況 ……252
第65図　水田跡、SD 2 溝跡検出杭断面図 ……253
第66図　SD 2 溝跡検出杭断面図 ……254
第67図　SD26・28 溝跡木製品出土状況 ……262
第68図　SD28 溝跡木製品出土状況 ……263
第69図　SD26 溝跡検出杭断面図 ……264
第70図　SD28 溝跡検出杭断面図(1) ……265
第71図　SD28 溝跡検出杭断面図(2) ……266
第72図　SD26 溝跡出土材列、
SK 2～5・49土坑 ……271

# 表　目　次

第1表　遺跡地名表……14
第2表　第Ⅳa層上面水田跡
水田区画計測表 ……215
第3表　第Ⅱc層上面水田跡
水田区画計測表 ……234
第4表　第Ⅱb層上面水田跡
水田区画計測表 ……242
第5表　第Ⅱa層上面水田跡
水田区画計測表 ……249

# 第２分冊　分析・考察編目次

## 例　　言


第１章　仙台市高田Ｂ遺跡出土木材の樹種と木材利用 ……鈴木三男・能城修一……1
同定された樹種の記載 ……1
弥生中期の自然木の組成と想定される古植生 ……18
弥生中期の木材利用と自然木組成との比較 ……19
農具の用材 ……19　　その他の木製品・加工材 ……19
自然木組成との比較 ……19
古墳時代の木材利用 ……20
近世の木製品の樹種組成 ……20
木材の伐採時期の推定 ……21
第２章　高田Ｂ遺跡より出土した大型植物化石 ……吉川純子 ……67
１．はじめに ……67
２．時代別の出土傾向および周辺の環境 ……67
３．植物利用 ……68
４．土器底部に残る木葉痕との関連性 ……69
５．特筆すべき分類群 ……69
第３章　土器底部についた木葉痕の種類 ……吉川純子・赤澤靖章 ……83
葉縁部の残る木葉痕 ……83
葉縁部のない木葉痕 ……83
結語 ……84
第４章　高田Ｂ遺跡の花粉分析 ……守田益宗 ……93
はじめに ……93
試料および方法 ……93
結果および考察 ……93
第５章　仙台市、高田Ｂ遺跡におけるプラント・オパール分析 ……古環境研究所 ……109
１．はじめに ……109
２．試料 ……109
３・分析法 ……109
４・分析結果 ……109
５．考察 ……110
(1)　稲作の可能性 ……110　　(2)　古環境の推定 ……110
６．まとめ ……111
第６章　仙台市高田Ｂ遺跡出土の漆製品の塗膜構造調査 ……岡田文男 ……119
１．はじめに ……119

2．調査試料 ……119
3・調査の方法と結果 ……119
3.1　赤色顔料 ……119
3.2　塗膜の構造 ……119
(1)　木製品表面と土器外面に塗布された漆塗膜 ……119
①　木製品 ……119　②　土器 ……120
(2)　土器底部の漆付着物 ……120
(3)　不明塗膜 ……121
(4)　いぶし土器の断面 ……121
4．考察 ……121
5．まとめ ……122
第7章　仙台市高田B遺跡から産出した昆虫化石群集と古環境 ……森　勇一 ……127
1．はじめに ……127
2．試料および分析方法 ……127
3．昆虫化石群集 ……127
4．昆虫相から推定される古環境 ……127
弥生時代中期 ……128　中世 ……129
第8章　仙台市、高田B遺跡の火山灰分析 ……古環境研究所 ……135
1．はじめに ……135
2．地質層序 ……135
3．テフラ検出分析 ……135
(1)　分析試料と分析方法 ……135　(2)　分析結果 ……136
4．テフラ組成分析 ……136
(1)　分析資料と分析方法 ……136　(2)　分析結果 ……136
5．屈折率測定 ……136
6．考察 ……137
7．まとめ ……137
第9章　縄文時代と弥生時代の遺構について ……赤澤靖章 ……143
1．縄文時代の遺構 ……143
2．弥生時代の遺構 ……143
第10章　出土土器の概要 ……赤澤靖章 ……147
1．出土土器の登録 ……147
2．縄文の分類 ……147
(1)　同一型が2本おきに現れる縄文 ……147　(2)　同一型が3本おきに現れる縄文 ……148
(3)　同一型が4本おきに現れる縄文 ……148
3．縄文土器 ……148
4．弥生土器 ……149
(1)　土器の分類 ……149　(2)　土器の特徴 ……151

(3) 編年的位置 ……151
5．土師器・須恵器 ……153
(1) SR 1自然流路跡12層出土土器 ……153
(2) SR 1自然流路跡8層出土土器 ……153
(3) SR 1自然流路跡7層出土土師器・須恵器 ……153
(4) SR 1自然流路跡5・4・3層出土土師器・赤焼土器 ……153
(5) SR 2自然流路跡4層出土土師器・赤焼土器 ……153
第11章 弥生時代中期の木製品 ……荒井 格 ……161
第1節 木製品の組成 ……161
第2節 器種ごとの分類と製作工程 ……162
1．斧直柄の分類と製作工程 ……162
2．直柄平鍬の分類と製作工程 ……165
3．泥除 ……168
4．「掘り棒状木製品」 ……170
5．紐綴じの容器 ……173
第3節 木製品の利用樹種 ……173
第12章 弥生時代中期の石器組成と概要 ……荒井 格 ……179
第1節 石器の組成 ……179
第2節 器種ごとの分類と製作工程 ……180
1．石庖丁の分類と製作工程 ……180
(1) 石庖丁の分類 ……180
(2) 石庖丁の製作工程 ……183
(3) 石庖丁のまとめ ……184
2．石斧の分類と製作工程 ……186
(1) 太型蛤刃石斧 ……186
(2) 扁平片刃石斧 ……187
(3) ノミ形石斧 ……188
3．玉類の製作工程 ……189
(1) 管玉の製作工程 ……189
(2) 勾玉の製作工程 ……192
第3節 大型板状石器 ……192
第13章 古墳時代の木製品 ……荒井 格 ……201
第1節 古墳時代前期の木製農具 ……201
第2節 古墳時代中期の木製農具 ……204
第14章 中世から近世にかけての遺構変遷 ……荒井 格 ……209
第1節 中世の遺構 ……209
1．第IVa層下面の遺構群 ……209
2．第IVa層上面の遺構 ……210
第2節 近世の遺構 ……212
1．第IIc層水田跡 ……212
2．第IIb層水田跡 ……213

3．第IIａ層水田跡 ……213
第3節　中世から近世の土地利用の変遷 ……214
第15章　まとめ ……221
1．縄文時代 ……221
2．弥生時代 ……221
3．古墳時代 ……222
4．中世～近世 ……223
参考・引用文献 ……224

# 第３分冊　遺物図版編１目次


第 1 図　SI1 竪穴住居跡、SD6・19・30・44 溝跡出土縄文土器…… 1
第 2 図　SK19・37 土坑、SX2 性格不明遺構、SR1 自然流路跡13層(1)出土縄文土器…… 2
第 3 図　SR1 自然流路跡13層出土縄文土器(2) …… 3
第 4 図　SR1 自然流路跡13層出土縄文土器(3) …… 4
第 5 図　SR1 自然流路跡13層出土縄文土器(4) …… 5
第 6 図　SR1 自然流路跡13(5)・12・８層、SR2 自然流路跡９・７層出土縄文土器…… 6
第 7 図　SR2 自然流路跡８・６・２層、第VI層(1)出土縄文土器…… 7
第 8 図　第VI(2)・Ｖｃ層西地区(1)出土縄文土器 … 8
第 9 図　第Ｖｃ層西地区(2)・Ｖｃ層東地区出土縄文土器…… 9
第 10 図　第Ｖｂ・Ｖａ・Ⅳａ・Ⅳ・Ⅱ・Ⅰ層出土縄文土器……10
第 11 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(1) ……11
第 12 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(2) ……12
第 13 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(3) ……13
第 14 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(4) ……14
第 15 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(5) ……15
第 16 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(6) ……16
第 17 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(7) ……17
第 18 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(8) ……18
第 19 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(9) ……19
第 20 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(10) ……20
第 21 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(11) ……21
第 22 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(12) ……22
第 23 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(13) ……23
第 24 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(14) ……24
第 25 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(15) ……25
第 26 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(16) ……26
第 27 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(17) ……27
第 28 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(18) ……28
第 29 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(19) ……29
第 30 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(20) ……30
第 31 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(21) ……31
第 32 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(22) ……32
第 33 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(23) ……33
第 34 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(24) ……34
第 35 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(25) ……35
第 36 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(26) ……36
第 37 図　第Ｖｃ層西地区出土弥生土器(27) ……37
第 38 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(1) ……38
第 39 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(2) ……39
第 40 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(3) ……40
第 41 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(4) ……41
第 42 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(5) ……42
第 43 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(6) ……43
第 44 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(7) ……44
第 45 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(8) ……45
第 46 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(9) ……46
第 47 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(10) ……47
第 48 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(11) ……48
第 49 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(12) ……49
第 50 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(13) ……50
第 51 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(14) ……51
第 52 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(15) ……52
第 53 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(16) ……53
第 54 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(17) ……54
第 55 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(18) ……55
第 56 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(19) ……56
第 57 図　第Ｖｃ層東地区出土弥生土器(20) ……57
第 58 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(1) ……58
第 59 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(2) ……59
第 60 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(3) ……60
第 61 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(4) ……61
第 62 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(5) ……62
第 63 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(6) ……63
第 64 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(7) ……64
第 65 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(8) ……65
第 66 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(9) ……66
第 67 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(10) ……67
第 68 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(11) ……68
第 69 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(12) ……69
第 70 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(13) ……70
第 71 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(14) ……71
第 72 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(15) ……72
第 73 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(16) ……73
第 74 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(17) ……74
第 75 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(18) ……75
第 76 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(19) ……76
第 77 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(20) ……77
第 78 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(21) ……78
第 79 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(22) ……79
第 80 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(23) ……80
第 81 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(24) ……81
第 82 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(25) ……82
第 83 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(26) ……83
第 84 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(27) ……84
第 85 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(28) ……85
第 86 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(29) ……86
第 87 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(30) ……87
第 88 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(31) ……88

第 89 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(32) ……89
第 90 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(33) ……90
第 91 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(34) ……91
第 92 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(35) ……92
第 93 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(36) ……93
第 94 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(37) ……94
第 95 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(38) ……95
第 96 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(39) ……96
第 97 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(40) ……97
第 98 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(41) ……98
第 99 図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(42) ……99
第100図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(43) …100
第101図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(44) …101
第102図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(45) …102
第103図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(46) …103
第104図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(47) …104
第105図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(48) …105
第106図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(49) …106
第107図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(50) …107
第108図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(51) …108
第109図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(52) …109
第110図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(53) …110
第111図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(54) …111
第112図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(55) …112
第113図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(56) …113
第114図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(57) …114
第115図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(58) …115
第116図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(59) …116
第117図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(60) …117
第118図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(61) …118
第119図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(62) …119
第120図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(63) …120
第121図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(64) …121
第122図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(65) …122
第123図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(66) …123
第124図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(67) …124
第125図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(68) …125
第126図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(69) …126
第127図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(70) …127
第128図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(71) …128
第129図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(72) …129
第130図　SR1 自然流路跡13層出土弥生土器(73) …130
第131図　SR1 自然流路跡13(74)・12・8 層出土
弥生土器 ……131
第132図　SR2 自然流路跡 8・7・6 層出土
弥生土器(1) ……132
第133図　SR2 自然流路跡 9・8・7 層出土
弥生土器(2) ……133
第134図　第Ⅴb 層出土弥生土器(1)……134
第135図　第Ⅴb 層出土弥生土器(2)……135
第136図　第Ⅴb 層出土弥生土器(3)……136
第137図　第Ⅴb 層出土弥生土器(4)……137
第138図　SX47 性格不明遺構、SD13・
19・26・30 溝跡、第Ⅵ・Ⅴa・
Ⅳb・Ⅳ層出土弥生土器 ……138
第139図　SR1 自然流路跡12層出土土師器(1) ……139
第140図　SR1 自然流路跡12層出土土師器(2) ……140
第141図　SR1 自然流路跡12層出土土師器(3) ……141
第142図　SR1 自然流路跡12層出土土師器(4) ……142
第143図　SR1 自然流路跡 8 層出土土師器 ……143
第144図　SR1 自然流路跡 7 層出土
土師器・須恵器 ……144
第145図　SR1 自然流路跡 5・4・3・7～3・
8～7 層、SR2 自然流路跡 4 層、
第Ⅰ層出土土師器・赤焼土器 ……145
第146図　SD2 溝跡出土陶磁器類(1) ……146
第147図　SD2 (2)・5 (1)溝跡出土陶磁器類 ……147
第148図　SD5 (2)・9・10溝跡出土陶磁器類 ……148
第149図　SD26・28 (1)溝跡出土陶磁器類 ……149
第150図　SD28 溝跡出土陶磁器類(2) ……150
第151図　SD30・44 溝跡出土陶磁器類 ……151
第152図　SK2 土坑、第Ⅳa・Ⅳ・Ⅱc・Ⅱb・
Ⅱa 層出土陶磁器類 ……152
第153図　SR1 自然流路跡13・8・3・8～7 層、
SR2 自然流路跡 7 層、SD42 溝跡、
SX4 性格不明遺構出土土製品 ……153
第154図　赤色顔料で彩色された土器(1)……154
第155図　赤色顔料で彩色された土器(2)……155
第156図　赤色顔料で彩色された土器(3)……156
第157図　赤色顔料で彩色された土器(4)……157
第158図　赤色顔料で彩色された土器(5)……158
第159図　赤色顔料で彩色された土器(6)……159
第160図　赤色顔料で彩色された土器(7)……160
第161図　赤色顔料で彩色された土器(8)……161
第162図　赤色顔料で彩色された土器(9)……162
第163図　赤色顔料で彩色された土器(10)……163

# 第４分冊　遺物図版編２目次

## 例　言

## 凡　例


第１図　弥生時代中期の木製品類 (1) …… 1
第２図　弥生時代中期の木製品類 (2) …… 2
第３図　弥生時代中期の木製品類 (3) …… 3
第４図　弥生時代中期の木製品類 (4) …… 4
第５図　弥生時代中期の木製品類 (5) …… 5
第６図　弥生時代中期の木製品類 (6) …… 6
第７図　弥生時代中期の木製品類 (7) …… 7
第８図　弥生時代中期の木製品類 (8) …… 8
第９図　弥生時代中期の木製品類 (9) …… 9
第10図　弥生時代中期の木製品類 (10) ……10
第11図　弥生時代中期の木製品類 (11) ……11
第12図　弥生時代中期の木製品類 (12) ……12
第13図　弥生時代中期の木製品類 (13) ……13
第14図　弥生時代中期の木製品類 (14) ……14
第15図　弥生時代中期の木製品類 (15) ……15
第16図　弥生時代中期の木製品類 (16) ……16
第17図　弥生時代中期の木製品類 (17) ……17
第18図　弥生時代中期の木製品類 (18) ……18
第19図　弥生時代中期の木製品類 (19) ……19
第20図　弥生時代中期の木製品類 (20) ……20
第21図　弥生時代中期の木製品類 (21) ……21
第22図　弥生時代中期の木製品類 (22) ……22
第23図　弥生時代中期の木製品類 (23) ……23
第24図　弥生時代中期の木製品類 (24) ……24
第25図　弥生時代中期の木製品類 (25) ……25
第26図　弥生時代中期の木製品類 (26) ……26
第27図　弥生時代中期の木製品類 (27) ……27
第28図　弥生時代中期の木製品類 (28) ……28
第29図　弥生時代中期の木製品類 (29) ……29
第30図　弥生時代中期の木製品類 (30) ……30
第31図　弥生時代中期の木製品類 (31) ……31
第32図　弥生時代中期の木製品類 (32) ……32
第33図　弥生時代中期の木製品類 (33) ……33
第34図　弥生時代中期の木製品類 (34) ……34
第35図　弥生時代中期の木製品類 (35) ……35
第36図　弥生時代中期の木製品類 (36) ……36
第37図　弥生時代中期の木製品類 (37) ……37
第38図　弥生時代中期の木製品類 (38) ……38
第39図　弥生時代中期の木製品類 (39) ……39
第40図　弥生時代中期の木製品類 (40) ……40
第41図　弥生時代中期の木製品類 (41) ……41
第42図　弥生時代中期の木製品類 (42) ……42
第43図　弥生時代中期の木製品類 (43) ……43
第44図　弥生時代中期の木製品類 (44) ……44
第45図　弥生時代中期の木製品類 (45) ……45
第46図　弥生時代中期の木製品類 (46) ……46
第47図　弥生時代中期の木製品類 (47) ……47
第48図　弥生時代中期の木製品類 (48) ……48
第49図　弥生時代中期の木製品類 (49) ……49
第50図　弥生時代中期の木製品類 (50) ……50
第51図　弥生時代中期の木製品類 (51) ……51
第52図　弥生時代中期の木製品類 (52) ……52
第53図　弥生時代中期の木製品類 (53) ……53
第54図　弥生時代中期の木製品類 (54) ……54
第55図　弥生時代中期の木製品類 (55) ……55
第56図　弥生時代中期の木製品類 (56) ……56
第57図　弥生時代中期の木製品類 (57) ……57
第58図　弥生時代中期の木製品類 (58) ……58
第59図　弥生時代中期の木製品類 (59) ……59
第60図　弥生時代中期の木製品類 (60) ……60
第61図　弥生時代中期の木製品類 (61) ……61
第62図　弥生時代中期の木製品類 (62) ……62
第63図　弥生時代中期の木製品類 (63) ……63
第64図　弥生時代中期の木製品類 (64) ……64
第65図　弥生時代中期の木製品類 (65) ……65
第66図　弥生時代中期の木製品類 (66) ……66
第67図　弥生時代中期の木製品類 (67) ……67
第68図　弥生時代中期の木製品類 (68) ……68
第69図　弥生時代中期の木製品類 (69) ……69
第70図　弥生時代中期の木製品類 (70) ……70
第71図　弥生時代中期の木製品類 (71) ……71
第72図　弥生時代中期の木製品類 (72) ……72
第73図　弥生時代中期の木製品類 (73) ……73
第74図　弥生時代中期の木製品類 (74) ……74
第75図　弥生時代中期の木製品類 (75) ……75
第76図　弥生時代中期の木製品類 (76) ……76
第77図　弥生時代中期の木製品類 (77) ……77
第78図　弥生時代中期の木製品類 (78) ……78
第79図　弥生時代中期の木製品類 (79) ……79
第80図　弥生時代中期の木製品類 (80) ……80
第81図　弥生時代中期の木製品類 (81) ……81
第82図　弥生時代中期の木製品類 (82) ……82
第83図　古墳時代前期の木製品類 (1) ……83
第84図　古墳時代前期の木製品類 (2) ……84
第85図　古墳時代前期の木製品類 (3) ……85
第86図　古墳時代前期の木製品類 (4) ……86
第 87 図　古墳時代前期の木製品類 (5)……87
第 88 図　古墳時代前期の木製品類 (6)……88
第 89 図　古墳時代前期の木製品類 (7)……89
第 90 図　古墳時代前期の木製品類 (8)……90
第 91 図　古墳時代前期の木製品類 (9)……91
第 92 図　古墳時代前期の木製品類 (10)……92

第 93 図　古墳時代中期の木製品類 (1)……93
第 94 図　古墳時代中期の木製品類 (2)……94
第 95 図　古墳時代中期の木製品類 (3)……95
第 96 図　古墳時代中期の木製品類 (4)……96
第 97 図　古墳時代中期の木製品類 (5)……97
第 98 図　古墳時代中期の木製品類 (6)……98
第 99 図　古墳時代中期の木製品類 (7)……99
第100図　古墳時代中期の木製品類 (8)……100
第101図　古墳時代中期の木製品類 (9)……101
第102図　古墳時代中期の木製品類 (10)……102
第103図　古墳時代中期の木製品類 (11)……103
第104図　古墳時代中期の木製品類 (12)……104
第105図　古墳時代中期の木製品類 (13)……105
第106図　古墳時代中期の木製品類 (14)……106
第107図　古墳時代中期の木製品類 (15)……107
第108図　古墳時代中期の木製品類 (16)……108
第109図　古墳時代中期の木製品類 (17)……109
第110図　古墳時代中期の木製品類 (18)……110
第111図　古墳時代中期の木製品類 (19)……111
第112図　古墳時代中期の木製品類 (20)……112
第113図　古墳時代中期の木製品類 (21)……113
第114図　古墳時代中期の木製品類 (22)……114
第115図　古墳時代中期の木製品類 (23)・
後期の木製品類 (1)……115
第116図　古墳時代後期の木製品類 (2)……116
第117図　古墳時代後期の木製品類 (3)・
平安時代の木製品類 ……117
第118図　SD 2 溝跡出土木製品類 (1) ……118
第119図　SD 2 溝跡出土木製品類 (2) ……119
第120図　SD 2 溝跡出土木製品類 (3) ……120
第121図　SD 2 溝跡出土木製品類 (4) ……121
第122図　SD 2 溝跡出土木製品類 (5) ……122
第123図　SD 2 溝跡出土木製品類 (6) ……123
第124図　SD 2 溝跡出土木製品類 (7) ……124
第125図　SD 2 溝跡出土木製品類 (8) ……125
第126図　SD 2 溝跡出土木製品類 (9) ……126
第127図　SD 5 溝跡出土木製品類 (1) ……127
第128図　SD 5 溝跡出土木製品類 (2) ……128
第129図　SD 5 溝跡出土木製品類 (3) ……129
第130図　SD26 溝跡出土木製品類 (1) ……130
第131図　SD26 溝跡出土木製品類 (2) ……131
第132図　SD26 溝跡出土木製品類 (3) ……132
第133図　SD26 溝跡出土木製品類 (4) ……133
第134図　SD26 溝跡出土木製品類 (5) ……134
第135図　SD26 溝跡出土木製品類 (6) ……135
第136図　SD26 溝跡出土木製品類 (7) ……136
第137図　SD28 溝跡出土木製品類 (1) ……137
第138図　SD28 溝跡出土木製品類 (2) ……138
第139図　SD28 溝跡出土木製品類 (3) ……139
第140図　SD28 溝跡出土木製品類 (4) ……140
第141図　SD28 溝跡出土木製品類 (5) ……141
第142図　SD28 溝跡出土木製品類 (6) ……142
第143図　SD28 溝跡出土木製品類 (7) ……143
第144図　SD28 溝跡出土木製品類 (8) ……144
第145図　SD28 溝跡出土木製品類 (9) ……145
第146図　SD28 溝跡出土木製品類 (10) ……146
第147図　SD28 溝跡出土木製品類 (11) ……147
第148図　SD28 溝跡出土木製品類 (12) ……148
第149図　SD30 溝跡出土木製品類 ……149
第150図　SD44 溝跡出土木製品類 ……150
第151図　第Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ層出土石器 ……151
第152図　第Ⅱｃ層出土石器 ……152
第153図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (1)……153
第154図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (2)……154
第155図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (3)……155
第156図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (4)……156
第157図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (5)……157
第158図　第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器 (6)……158
第159図　第Ⅳ層出土石器 ……159
第160図　第Ⅳｂ層出土石器 ……160
第161図　第Ⅳｂ・Ⅴ・Ⅴａ層出土石器 ……161
第162図　第Ⅴｂ層出土石器 (1)……162
第163図　第Ⅴｂ層出土石器 (2)……163
第164図　第Ⅴｂ層出土石器 (3)……164
第165図　第Ⅴｂ層出土石器 (4)……165
第166図　第Ⅴｂ層出土石器 (5)……166
第167図　第Ⅴｂ層出土石器 (6)……167
第168図　第Ⅴｂ層出土石器 (7)……168
第169図　第Ⅴｂ層出土石器 (8)……169
第170図　第Ⅴｂ層出土石器 (9)……170
第171図　第Ⅴｂ層出土石器 (10)……171
第172図　第Ⅴｃ層出土石器 (1)……172
第173図　第Ⅴｃ層出土石器 (2)……173
第174図　第Ⅴｃ層出土石器 (3)……174
第175図　第Ⅴｃ層出土石器 (4)……175
第176図　第Ⅴｃ層出土石器 (5)……176
第177図　第Ⅴｃ層出土石器 (6)……177
第178図　第Ⅴｃ層出土石器 (7)……178
第179図　第Ⅴｃ層出土石器 (8)……179
第180図　第Ⅴｃ層出土石器 (9)……180
第181図　第Ⅴｃ層出土石器 (10)……181
第182図　第Ⅴｃ層出土石器 (11)……182
第183図　第Ⅴｃ層出土石器 (12)……183
第184図　第Ⅴｃ層出土石器 (13)……184
第185図　第Ⅴｃ層出土石器 (14)……185
第186図　第Ⅴｃ層出土石器 (15)……186
第187図　第Ⅴｃ層出土石器 (16)……187
第188図　第Ⅴｃ層出土石器 (17)……188
第189図　第Ⅴｃ層出土石器 (18)……189
第190図　第Ⅴｃ層出土石器 (19)……190
第191図　第Ⅴｃ層出土石器 (20)……191
第192図　第Ⅴｃ層出土石器 (21)……192

第193図　第Ｖｃ層出土石器 (22)……193
第194図　第Ｖｃ層出土石器 (23)……194
第195図　第Ｖｃ層出土石器 (24)……195
第196図　第Ｖｃ層出土石器 (25)……196
第197図　第Ｖｃ層出土石器 (26)……197
第198図　第Ｖｃ層出土石器 (27)……198
第199図　第Ｖｃ層出土石器 (28)……199
第200図　第Ｖｃ層出土石器 (29)……200
第201図　第Ｖｃ層出土石器 (30)……201
第202図　第Ｖｃ層出土石器 (31)……202
第203図　第Ｖｃ層出土石器 (32)……203
第204図　第Ｖｃ層出土石器 (33)……204
第205図　第VI層出土石器 (1)……205
第206図　第VI層出土石器 (2)……206
第207図　SI 1 竪穴住居跡出土石器 ……207
第208図　SI 1 竪穴住居跡、SX47 性格不明遺構出土石器……208
第209図　SK 5 ・16・20・32・62・63・66土坑、SD47 溝跡出土石器 ……209
第210図　SX 9 性格不明遺構、Pit 8 ・19・26・92・181・235・240・260出土石器……210
第211図　SD 2 溝跡出土石器 (1) ……211
第212図　SD 2 溝跡出土石器 (2) ……212
第213図　SD 4 ・ 5 溝跡出土石器 ……213
第214図　SD 5 溝跡出土石器 ……214
第215図　SD 6 ・ 7 溝跡出土石器 ……215
第216図　SD12・13 溝跡出土石器 ……216
第217図　SD13 溝跡出土石器 ……217
第218図　SD13・15・19 溝跡出土石器 ……218
第219図　SD23・24・25 溝跡出土石器 ……219
第220図　SD26・28 溝跡出土石器 ……220
第221図　SD30 溝跡出土石器 (1) ……221
第222図　SD30 溝跡出土石器 (2) ……222
第223図　SD36・39・42・44 溝跡出土石器 ……223
第224図　SD44 溝跡出土石器 ……224
第225図　第VI層、SD44 溝跡、SX23 性格不明遺構出土石器 ……225
第226図　SR 1 自然流路跡 1 ・ 3 ・ 4 層出土石器 ……226
第227図　SR 1 自然流路跡 5 層出土石器 ……227
第228図　SR 1 自然流路跡 6 ・ 1 ～ 7 ・ 6 ～ 7 ・ 7 層出土石器 ……228
第229図　SR 1 自然流路跡 8 層出土石器 ……229
第230図　SR 1 自然流路跡 8 ・ 3 ～ 8 ・9b 層出土石器 ……230
第231図　SR 1 自然流路跡12層出土石器 (1) ……231
第232図　SR 1 自然流路跡12層出土石器 (2) ……232
第233図　SR 1 自然流路跡12層出土石器 (3) ……233
第234図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (1) ……234
第235図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (2) ……235
第236図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (3) ……236
第237図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (4) ……237
第238図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (5) ……238
第239図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (6) ……239
第240図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (7) ……240
第241図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (8) ……241
第242図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (9) ……242
第243図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (10) ……243
第244図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (11) ……244
第245図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (12) ……245
第246図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (13) ……246
第247図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (14) ……247
第248図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (15) ……248
第249図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (16) ……249
第250図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (17) ……250
第251図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (18) ……251
第252図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (19) ……252
第253図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (20) ……253
第254図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (21) ……254
第255図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (22) ……255
第256図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (23) ……256
第257図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (24) ……257
第258図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (25) ……258
第259図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (26) ……259
第260図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (27) ……260
第261図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (28) ……261
第262図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (29) ……262
第263図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (30) ……263
第264図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (31) ……264
第265図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (32) ……265
第266図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (33) ……266
第267図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (34) ……267
第268図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (35) ……268
第269図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (36) ……269
第270図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (37) ……270
第271図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (38) ……271
第272図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (39) ……272
第273図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (40) ……273
第274図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (41) ……274
第275図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (42) ……275
第276図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (43) ……276
第277図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (44) ……277
第278図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (45) ……278
第279図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (46) ……279
第280図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (47) ……280
第281図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (48) ……281
第282図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (49) ……282
第283図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (50) ……283
第284図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (51) ……284
第285図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (52) ……285
第286図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (53) ……286
第287図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (54) ……287

第288図　SR 1 自然流路跡13層出土石器 (55) ……288
第289図　SR 2 自然流路跡
2・3・4・6 層出土石器……289
第290図　SR 2 自然流路跡 7 層出土石器 (1) ……290
第291図　SR 2 自然流路跡 7 層出土石器 (2) ……291
第292図　SR 2 自然流路跡 7 層出土石器 (3) ……292
第293図　SR 2 自然流路跡 8 層出土石器 ……293
第294図　表面採集・表土出土石器 ……294
第295図　高田 B 遺跡出土金属製品 (1) ……295
第296図　高田 B 遺跡出土金属製品 (2) ……296
第297図　高田 B 遺跡出土金属製品 (3) ……297

# 第５分冊　遺物観察表編目次


第１表　縄文土器観察表１……１
第２表　縄文土器観察表２……２
第３表　縄文土器観察表３……３
第４表　縄文土器観察表４……４
第５表　弥生土器観察表１……４
第６表　弥生土器観察表２……５
第７表　弥生土器観察表３……６
第８表　弥生土器観察表４……７
第９表　弥生土器観察表５……８
第10表　弥生土器観察表６……９
第11表　弥生土器観察表７……10
第12表　弥生土器観察表８……11
第13表　弥生土器観察表９……12
第14表　弥生土器観察表10……13
第15表　弥生土器観察表11……14
第16表　弥生土器観察表12……15
第17表　弥生土器観察表13……16
第18表　弥生土器観察表14……17
第19表　弥生土器観察表15……18
第20表　弥生土器観察表16……19
第21表　弥生土器観察表17……20
第22表　弥生土器観察表18……21
第23表　弥生土器観察表19……22
第24表　弥生土器観察表20……23
第25表　弥生土器観察表21……24
第26表　弥生土器観察表22……25
第27表　弥生土器観察表23……26
第28表　弥生土器観察表24……27
第29表　弥生土器観察表25……28
第30表　弥生土器観察表26……29
第31表　弥生土器観察表27……30
第32表　弥生土器観察表28……31
第33表　弥生土器観察表29……32
第34表　弥生土器観察表30……33
第35表　土師器・赤焼土器・須恵器観察表１……34
第36表　土師器・赤焼土器・須恵器観察表２……35
第37表　陶磁器類観察表１……35
第38表　陶磁器類観察表２……36
第39表　陶磁器類観察表３……37
第40表　土製品観察表１……37
第41表　土製品観察表２……38
第42表　木製品観察表１（弥生時代中期の木製品
　　－斧膝柄－）……39
第43表　木製品観察表２（弥生時代中期の木製品
　　－斧直柄－）……39
第44表　木製品観察表３（弥生時代中期の木製品
　　－直柄平鍬－１）……40
第45表　木製品観察表４（弥生時代中期の木製品
　　－直柄平鍬－２）……41
第46表　木製品観察表５（弥生時代中期の木製品
　　－直柄叉鍬－）……41
第47表　木製品観察表６（弥生時代中期の木製品
　　－鍬直柄？－）……41
第48表　木製品観察表７（弥生時代中期の木製品
　　－組合せ鋤－）……41
第49表　木製品観察表８（弥生時代中期の木製品
　　－叉鋤？－）……42
第50表　木製品観察表９（弥生時代中期の木製品
　　－泥除－）……42
第51表　木製品観察表10（弥生時代中期の木製品
　　－掘り棒・掘り棒状木製品－）……42
第52表　木製品観察表11（弥生時代中期の木製品
　　－掘り棒状木製品－）……43
第53表　木製品観察表12（弥生時代中期の木製品
　　－棒状木製品－）……43
第54表　木製品観察表13（弥生時代中期の木製品
　　－竪杵－）……43
第55表　木製品観察表14（弥生時代中期の木製品
　　－横槌－）……43
第56表　木製品観察表15（弥生時代中期の木製品
　　－臼？－）……43
第57表　木製品観察表16（弥生時代中期の木製品
　　－容器－）……44
第58表　木製品観察表17（弥生時代中期の木製品
　　－その他の木製品－１）……44
第59表　木製品観察表18（弥生時代中期の木製品
　　－その他の木製品－２）……45
第60表　木製品観察表19（弥生時代中期の木製品
　　－その他の木製品－３）……46
第61表　木製品観察表20（古墳時代前期の
　　木製品）……46
第62表　木製品観察表21（古墳時代前期～中期の
　　木製品）……47
第63表　木製品観察表22（古墳時代中期の
　　木製品１）……47
第64表　木製品観察表23（古墳時代中期の
　　木製品２）……48
第65表　木製品観察表24（古墳時代後期の
　　木製品）……48
第66表　木製品観察表25（平安時代の木製品）……49
第67表　木製品観察表26（中世の木製品
　　－漆器－）……49
第68表　木製品観察表27（中世の木製品
　　－下駄－）……49

第69表　木製品観察表28（中世の木製品
－その他の木製品－１）……49
第70表　木製品観察表29（中世の木製品
－その他の木製品－２）……50
第71表　木製品観察表30（近世の木製品
－漆器－）……50
第72表　木製品観察表31（近世の木製品
－下駄－）……51
第73表　木製品観察表32（近世の木製品
－その他の木製品－１）……51
第74表　木製品観察表33（近世の木製品
－その他の木製品－２）……52
第75表　木製品観察表34（近世の木製品
－その他の木製品－３）……53
第76表　木製品観察表35（近世の木製品
－その他の木製品－４）……54
第77表　木製品観察表36（近世の木製品
－その他の木製品－５）……55
第78表　石器観察表１（打製石器－Ka－１）……56
第79表　石器観察表２（打製石器－Ka－２）……57
第80表　石器観察表３（打製石器－Ka－３）……58
第81表　石器観察表４（打製石器－Ka－４）……59
第82表　石器観察表５（打製石器－Ka－５）……60
第83表　石器観察表６（打製石器－Ka－６）……61
第84表　石器観察表７（打製石器－Ka－７）……62
第85表　石器観察表８（礫石器－Kc－１）……63
第86表　石器観察表９（礫石器－Kc－２）……64
第87表　石器観察表10（礫石器－Kc－３）……65
第88表　石器観察表11（礫石器－Kc－４）……66
第89表　石器観察表12（礫石器－Kc－５）……67
第90表　石器観察表13（石製品－Kd－１）……67
第91表　石器観察表14（石製品－Kd－２）……68
第92表　石器観察表15（石製品－Kd－３）……69
第93表　石器観察表16（石庖丁－Ke－１）……69
第94表　石器観察表17（石庖丁－Ke－２）……70
第95表　石器観察表18（石庖丁－Ke－３）……71
第96表　石器観察表19（石庖丁－Ke－４）……72
第97表　石器観察表20（石斧－Kf－１）……72
第98表　石器観察表21（石斧－Kf－２）……73
第99表　石器観察表22（石斧－Kf－３）……74
第100表　石器観察表23（大型板状石器
－Kg－１）……74
第101表　石器観察表24（大型板状石器
－Kg－２）……75
第102表　石器観察表25（大型板状石器
－Kg－３）……76
第103表　石器観察表26（石鏃－Kh－１）……76
第104表　石器観察表27（石鏃－Kh－２）……77
第105表　石器観察表28（石鏃－Kh－３）……78
第106表　石器観察表29（石鏃－Kh－４）……79
第107表　石器観察表30（石錐－Ki－１）……79
第108表　石器観察表31（石錐－Ki－２）……80
第109表　石器観察表32（石匙－Kj－）……80
第110表　金属製品観察表……81
第111表　銭貨観察表……82

# 第６分冊　写真図版目次

## 例　言

## 巻頭写真図版


１．現在の高田Ｂ遺跡（1999年撮影）……１
２．SI １竪穴住居跡－縄文時代後期中葉－ ……１
３．SR １自然流路跡（右）と
　　SR ２自然流路跡（左）の合流地点 …２
４．第VI層上面遺構検出状況……２
５．SX19（手前）・23（奥）性格不明遺構……３
６．弥生時代遺物包含層調査風景……３
７．第IV a 層下面検出遺構 ……４
８．第IV a 層下面検出遺構と今泉遺跡 ……４
９．第IV a 層上面検出水田跡 ……５
10．SR １自然流路跡13層出土状況１ ……５
11．SR １自然流路跡13層出土状況２ ……６
12．SR １自然流路跡13層出土状況３ ……６
13．SR １自然流路跡13層出土状況４ ……７
14．SR １自然流路跡13層出土状況５ ……７
15．SR １自然流路跡13層Ｌ－49 出土状況 ……８
16．SR １自然流路跡13層Ｌ－147 出土状況 ……８
17．弥生土器集合写真－第Ｖｃ層西地区出土……９
18．弥生土器集合写真－第Ｖｃ層東地区出土……９
19．弥生土器集合写真……９
20．弥生土器集合写真－高坏……10
21．弥生土器集合写真－丸底鉢……10
22．弥生土器集合写真－甕Ｉ類……10
23．弥生土器集合写真－甕II・III類……11
24．弥生土器集合写真－蓋……11
25．弥生土器集合写真
　　－赤色顔料で彩色された土器……11
26．弥生土器集合写真－壺……12
27．石器（弥生時代中期）……12
28．石包丁（弥生時代中期）……13
29．石包丁の製作工程……13
30．石斧（弥生時代中期）……13
31．太型蛤刃石斧の製作工程……14
32．ノミ型石斧の製作工程……14
33．玉類（弥生時代中期）……15
34．玉類の製作工程……15
35．大型板状石器（弥生時代中期）……16
36．大型板状石器（弥生時代中期）……16


## 写真図版


写真１　縄文時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(1)……１
写真２　縄文時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(2)……２
写真３　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(1)……３
写真４　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(2)……４
写真５　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(3)……５
写真６　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(4)……６
写真７　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(5)……７
写真８　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(6)……８
写真９　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(7)……９
写真10　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(8)……10
写真11　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(9)……11
写真12　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(10)……12
写真13　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(11)……13
写真14　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(12)……14
写真15　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(13)……15
写真16　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(14)……16
写真17　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(15)……17
写真18　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(16)……18
写真19　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(17)……19
写真20　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(18)……20
写真21　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(19)……21
写真22　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(20)……22
写真23　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(21)……23
写真24　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(22)……24
写真26　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(24)……26
写真27　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
　　検出遺構と遺物出土状況(25)……27

写真28　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(26)……28
写真29　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(27)……29
写真30　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(28)……30
写真31　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(29)……31
写真32　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(30)……32
写真33　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(31)……33
写真34　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(32)……34
写真35　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(33)……35
写真36　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(34)……36
写真37　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(35)……37
写真38　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(36)……38
写真39　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(37)……39
写真40　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(38)……40
写真41　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(39)……41
写真42　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(40)……42
写真43　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(41)……43
写真44　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(42)……44
写真45　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(43)……45
写真46　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(44)……46
写真47　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(45)……47
写真48　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(46)……48
写真49　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(47)……49
写真50　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(48)……50
写真51　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(49)……51
写真52　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(50)……52
写真53　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(51)……53
写真54　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(52)……54
写真55　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(53)……55
写真56　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(54)……56
写真57　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(55)……57
写真58　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(56)……58
写真59　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(57)……59
写真60　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(58)……60
写真61　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(59)……61
写真62　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(60)……62
写真63　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(61)……63
写真64　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(62)……64
写真65　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(63)……65
写真66　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(64)……66
写真67　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(65)……67
写真68　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(66)……68
写真69　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(67)……69
写真70　弥生時代の遺構と遺物－第VI層上面
検出遺構と遺物出土状況(68)……70
写真71　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖｃ層遺物出土状況(1)……71
写真72　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖｃ層遺物出土状況(2)……72
写真73　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖｃ層遺物出土状況(3)……73
写真74　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖｃ層遺物出土状況(4)、
第Ｖｂ層遺物出土状況(1)　……74
写真75　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖｂ層遺物出土状況(2)　……75
写真76　弥生時代の遺構と遺物
－第Ｖ層遺物出土状況、
古墳時代の遺物出土状況(1)……76
写真77　古墳時代の遺物出土状況(2)……77
写真78　古墳時代の遺物出土状況(3)……78

写真79　古墳時代の遺物出土状況(4)、
古代の遺構(1)……79
写真80　古代の遺構(2)、中世の遺構と遺物－第IV a 層
下面検出遺構と遺物出土状況(1)……80
写真81　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(2)……81
写真82　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(3)……82
写真83　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(4)……83
写真84　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(5)……84
写真85　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(6)……85
写真86　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(7)……86
写真87　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(8)……87
写真88　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(9)……88
写真89　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(10)……89
写真90　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(11)……90
写真91　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(12)……91
写真92　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(13)……92
写真93　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(14)……93
写真94　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(15)……94
写真95　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(16)……95
写真96　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面
検出遺構と遺物出土状況(17)……96
写真97　中世の遺構と遺物－第IV a 層下面検出
遺構と遺物出土状況(18)、第IV a 層
上面検出遺構と遺物出土状況(1)……97
写真98　中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(2)……98
写真99　中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(3)……99
写真100 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(4) ……100
写真101 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(5) ……101
写真102 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(6) ……102
写真103 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(7) ……103
写真104 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(8) ……104
写真105 中世の遺構と遺物－第IV a 層上面検出
遺構と遺物出土状況(9)、近世の遺構
と遺物－第II c 層上面検出遺構(1) …105
写真106 近世の遺構と遺物
－第II c 層上面検出遺構(2) ……106
写真107 近世の遺構と遺物
－第II c 層上面検出遺構(3) ……107
写真108 近世の遺構と遺物
－第II c 層上面検出遺構(4) ……108
写真109 近世の遺構と遺物
－第II c 層上面検出遺構(5) ……109
写真110 近世の遺構と遺物
－第II c 層上面検出遺構(6)、
第II b 層上面検出遺構(1) ……110
写真111 近世の遺構と遺物
－第II b 層上面検出遺構(2) ……111
写真112 近世の遺構と遺物
－第II b 層上面検出遺構(3)、
第II a 層上面検出遺構と遺物
出土状況(1) ……112
写真113 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(2) ……113
写真114 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(3) ……114
写真115 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(4) ……115
写真116 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(5) ……116
写真117 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(6) ……117
写真118 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(7) ……118
写真119 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(8) ……119
写真120 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(9) ……120
写真121 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(10) ……121
写真122 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(11) ……122
写真123 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(12) ……123
写真124 近世の遺構と遺物－第II a 層上面
検出遺構と遺物出土状況(13) ……124
写真125 SI 1 竪穴住居跡、SD19 溝跡、SK19
土坑、SR 1 自然流路跡13層出土
縄文土器 ……125
写真126 SI 1 自然流路跡13・8 層、SR 2 自然流路跡
6・8 層、第VI層出土縄文土器 ……126

写真127 第VI・Ｖｃ層西地区・Ｖｃ層東地区・Ｖｂ・IVａ・IV・II・Ｉ層出土縄文土器 ……127
写真128 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器１ ……128
写真129 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器２ ……129
写真130 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器３ ……130
写真131 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器４ ……131
写真132 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器５ ……132
写真133 第Ｖｃ層西地区出土弥生土器６ ……133
写真134 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器１ ……134
写真135 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器２ ……135
写真136 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器３ ……136
写真137 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器４ ……137
写真138 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器５ ……138
写真139 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器６ ……139
写真140 第Ｖｃ層東地区出土弥生土器７ ……140
写真141 SR １自然流路跡13層出土弥生土器１ …141
写真142 SR １自然流路跡13層出土弥生土器２ …142
写真143 SR １自然流路跡13層出土弥生土器３ …143
写真144 SR １自然流路跡13層出土弥生土器４ …144
写真145 SR １自然流路跡13層出土弥生土器５ …145
写真146 SR １自然流路跡13層出土弥生土器６ …146
写真147 SR １自然流路跡13層出土弥生土器７ …147
写真148 SR １自然流路跡13層出土弥生土器８ …148
写真149 SR １自然流路跡13層出土弥生土器９ …149
写真150 SR １自然流路跡13層出土弥生土器10 …150
写真151 SR １自然流路跡13層出土弥生土器11 …151
写真152 SR １自然流路跡13層出土弥生土器12 …152
写真153 SR １自然流路跡13層出土弥生土器13 …153
写真154 SR １自然流路跡13層出土弥生土器14 …154
写真155 SR １自然流路跡13層出土弥生土器15 …155
写真156 SR １自然流路跡13層出土弥生土器16 …156
写真157 SR １自然流路跡13層出土弥生土器17 …157
写真158 SR １自然流路跡13層出土弥生土器18 …158
写真159 SR １自然流路跡13層出土弥生土器19 …159
写真160 SR １自然流路跡13層出土弥生土器20 …160
写真161 SR １自然流路跡13層出土弥生土器21 …161
写真162 SR １自然流路跡13層出土弥生土器22、SD19溝跡、第Ｖｂ、Ｖａ・IVｂ出土弥生土器 ……162
写真163 SR ２自然流路跡９・８・７層、SX47性格不明遺構出土弥生土器 …163
写真164 SR １自然流路跡12層出土土師器１ ……164
写真165 SR １自然流路跡12層出土土師器２ ……165
写真166 SR １自然流路跡12層出土土師器３・８層出土土師器 ……166
写真167 SR １自然流路跡８～７・７～３層出土土師器 ……167
写真168 SR １自然流路跡７・４・３層、SR ２自然流路跡４層出土土師器・赤焼土器 ……168
写真169 SD ２・５・26・28溝跡、第IVａ層出土陶磁器類 ……169
写真170 SX ４性格不明遺構、SR1自然流路跡13・10・８・８～７・３層、SR2自然流路跡７層、第Ｖｃ層西地区・第Ｖｃ層東地区・Ｖｂ・IV・IIｂ層出土土製品 ……170
写真171 弥生時代中期の木製品類１ ……171
写真172 弥生時代中期の木製品類２ ……172
写真173 弥生時代中期の木製品類３ ……173
写真174 弥生時代中期の木製品類４ ……174
写真175 弥生時代中期の木製品類５ ……175
写真176 弥生時代中期の木製品類６ ……176
写真177 弥生時代中期の木製品類７ ……177
写真178 弥生時代中期の木製品類８ ……178
写真179 弥生時代中期の木製品類９ ……179
写真180 弥生時代中期の木製品類10 ……180
写真181 弥生時代中期の木製品類11 ……181
写真182 弥生時代中期の木製品類12 ……182
写真183 弥生時代中期の木製品類13 ……183
写真184 弥生時代中期の木製品類14 ……184
写真185 弥生時代中期の木製品類15 ……185
写真186 弥生時代中期の木製品類16 ……186
写真187 弥生時代中期の木製品類17 ……187
写真188 弥生時代中期の木製品類18 ……188
写真189 弥生時代中期の木製品類19 ……189
写真190 弥生時代中期の木製品類20 ……190
写真191 弥生時代中期の木製品類21 ……191
写真192 弥生時代中期の木製品類22 ……192
写真193 弥生時代中期の木製品類23 ……193
写真194 弥生時代中期の木製品類24 ……194
写真195 弥生時代中期の木製品類25 ……195
写真196 弥生時代中期の木製品類26 ……196
写真197 弥生時代中期の木製品類27 ……197
写真198 弥生時代中期の木製品類28 ……198
写真199 弥生時代中期の木製品類29 ……199
写真200 弥生時代中期の木製品類30 ……200
写真201 弥生時代中期の木製品類31 ……201
写真202 弥生時代中期の木製品類32 ……202
写真203 弥生時代中期の木製品類33 ……203
写真204 弥生時代中期の木製品類34 ……204
写真205 弥生時代中期の木製品類35 ……205
写真206 弥生時代中期の木製品類36 ……206
写真207 弥生時代中期の木製品類37 ……207
写真208 弥生時代中期の木製品類38 ……208
写真209 弥生時代中期の木製品類39 ……209
写真210 弥生時代中期の木製品類40 ……210
写真211 弥生時代中期の木製品類41 ……211
写真212 弥生時代中期の木製品類42 ……212
写真213 弥生時代中期の木製品類43 ……213
写真214 弥生時代中期の木製品類44 ……214
写真215 弥生時代中期の木製品類45 ……215

写真216 弥生時代中期の木製品類46 ……216
写真217 弥生時代中期の木製品類47 ……217
写真218 弥生時代中期の木製品類48 ……218
写真219 弥生時代中期の木製品類49 ……219
写真220 弥生時代中期の木製品類50 ……220
写真221 弥生時代中期の木製品類51 ……221
写真222 弥生時代中期の木製品類52 ……222
写真223 弥生時代中期の木製品類53 ……223
写真224 弥生時代中期の木製品類54 ……224
写真225 弥生時代中期の木製品類55 ……225
写真226 弥生時代中期の木製品類56 ……226
写真227 弥生時代中期の木製品類57 ……227
写真228 弥生時代中期の木製品類58 ……228
写真229 弥生時代中期の木製品類59 ……229
写真230 弥生時代中期の木製品類60 ……230
写真231 弥生時代中期の木製品類61 ……231
写真232 弥生時代中期の木製品類62 ……232
写真233 弥生時代中期の木製品類63 ……233
写真234 弥生時代中期の木製品類64 ……234
写真235 弥生時代中期の木製品類65 ……235
写真236 弥生時代中期の木製品類66 ……236
写真237 弥生時代中期の木製品類67 ……237
写真238 古墳時代前期の木製品類１ ……238
写真239 古墳時代前期の木製品類２ ……239
写真240 古墳時代前期の木製品類３ ……240
写真241 古墳時代前期の木製品類４、
前期～中期の木製品類 ……241
写真242 古墳時代中期の木製品類１ ……242
写真243 古墳時代中期の木製品類２ ……243
写真244 古墳時代中期の木製品類３ ……244
写真245 古墳時代中期の木製品類４ ……245
写真246 古墳時代中期の木製品類５ ……246
写真247 古墳時代中期の木製品類６ ……247
写真248 古墳時代中期の木製品類７ ……248
写真249 古墳時代中期の木製品類８ ……249
写真250 古墳時代中期の木製品類９ ……250
写真251 古墳時代中期の木製品類10 ……251
写真252 古墳時代後期の木製品類、
平安時代の木製品類 ……252
写真253 SD ２溝跡出土木製品類１ ……253
写真254 SD ２溝跡出土木製品類２ ……254
写真255 SD ２溝跡出土木製品類３ ……255
写真256 SD ２溝跡出土木製品類４ ……256
写真257 SD ２溝跡出土木製品類５・
SD ５溝跡出土木製品類１ ……257
写真258 SD ５溝跡出土木製品類２ ……258
写真259 SD26 溝跡出土木製品類１ ……259
写真260 SD26 溝跡出土木製品類２ ……260
写真261 SD26 溝跡出土木製品類３ ……261
写真262 SD26 溝跡出土木製品類４ ……262
写真263 SD28 溝跡出土木製品類１ ……263
写真264 SD28 溝跡出土木製品類２ ……264
写真265 SD28 溝跡出土木製品類３ ……265
写真266 SD28 溝跡出土木製品類４ ……266
写真267 SD28 溝跡出土木製品類５ ……267
写真268 SD28 溝跡出土木製品類６・
SD30・44 溝跡出土木製品類 ……268
写真269 第Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ層出土石器 ……269
写真270 第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器１ ……270
写真271 第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器２ ……271
写真272 第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器３ ……272
写真273 第Ⅳ・Ⅳａ層出土石器４ ……273
写真274 第Ⅳｂ層出土石器 ……274
写真275 第Ⅴａ層出土石器・第Ⅴｂ層
出土石器１ ……275
写真276 第Ⅴｂ層出土石器２ ……276
写真277 第Ⅴｂ層出土石器３ ……277
写真278 第Ⅴｂ層出土石器４ ……278
写真279 第Ⅴｂ層出土石器５ ……279
写真280 第Ⅴｂ層出土石器６ ……280
写真281 第Ⅴｃ層出土石器１ ……281
写真282 第Ⅴｃ層出土石器２ ……282
写真283 第Ⅴｃ層出土石器３ ……283
写真284 第Ⅴｃ層出土石器４ ……284
写真285 第Ⅴｃ層出土石器５ ……285
写真286 第Ⅴｃ層出土石器６ ……286
写真287 第Ⅴｃ層出土石器７ ……287
写真288 第Ⅴｃ層出土石器８ ……288
写真289 第Ⅴｃ層出土石器９ ……289
写真290 第Ⅴｃ層出土石器11 ……290
写真291 第Ⅴｃ層出土石器12 ……291
写真292 第Ⅴｃ層出土石器13 ……292
写真293 第Ⅴｃ層出土石器14 ……293
写真294 第Ⅴｃ層出土石器15 ……294
写真295 第Ⅴｃ層出土石器16 ……295
写真296 第Ⅴｃ層出土石器17 ……296
写真297 第Ⅴｃ層出土石器18 ……297
写真298 第Ⅴｃ層出土石器19 ……298
写真299 第Ⅵ層出土石器 ……299
写真300 SI １竪穴住居跡、
SX47 性格不明遺構出土石器 ……300
写真301 SK ５・16・20・32・62・63・66土坑、
SD47 溝跡・Pit 出土石器 ……301
写真302 SD ２溝跡出土石器 ……302
写真303 SD ２・４・５溝跡出土石器 ……303
写真304 SD ４・５・６・７・12・13溝跡
出土石器 ……304
写真305 SD13・15 溝跡出土石器 ……305
写真306 SD19・23・24・25・26 溝跡出土石器 …306
写真307 SD26・28・30 溝跡出土石器 ……307
写真308 SD30・36・39・42 溝跡出土石器 ……308
写真309 SD44 溝跡出土石器 ……309

写真310 第VI層、SD44 溝跡、
SX23 性格不明遺構出土石器 ……310
写真311 SR 1 自然流路跡 1 ・ 3 ・ 4 ・ 5 層
出土石器 ……311
写真312 SR 1 自然流路跡 5 ・ 6 ・ 1 ～ 7 ・
6 ～ 7 ・ 7 ・ 8 ・8a 層出土石器 ……312
写真313 SR 1 自然流路跡 8 ・8b 層 ……313
写真314 SR 1 自然流路跡 3 ～ 8 ・9b・12 層
出土石器 ……314
写真315 SR 1 自然流路跡12層出土石器 ……315
写真316 SR 1 自然流路跡13層出土石器 1 ……316
写真317 SR 1 自然流路跡13層出土石器 2 ……317
写真318 SR 1 自然流路跡13層出土石器 3 ……318
写真319 SR 1 自然流路跡13層出土石器 4 ……319
写真320 SR 1 自然流路跡13層出土石器 5 ……320
写真321 SR 1 自然流路跡13層出土石器 6 ……321
写真322 SR 1 自然流路跡13層出土石器 7 ……322
写真323 SR 1 自然流路跡13層出土石器 8 ……323
写真324 SR 1 自然流路跡13層出土石器 9 ……324
写真325 SR 1 自然流路跡13層出土石器10 ……325
写真326 SR 1 自然流路跡13層出土石器11 ……326
写真327 SR 1 自然流路跡13層出土石器12 ……327
写真328 SR 1 自然流路跡13層出土石器13 ……328
写真329 SR 1 自然流路跡13層出土石器14 ……329
写真330 SR 1 自然流路跡13層出土石器15 ……330
写真331 SR 1 自然流路跡13層出土石器16 ……331
写真332 SR 1 自然流路跡13層出土石器17 ……332
写真333 SR 1 自然流路跡13層出土石器18 ……333
写真334 SR 1 自然流路跡13層出土石器19 ……334
写真335 SR 1 自然流路跡13層出土石器20 ……335
写真336 SR 1 自然流路跡13層出土石器21 ……336
写真337 SR 1 自然流路跡13層出土石器22 ……337
写真338 SR 1 自然流路跡13層出土石器23 ……338
写真339 SR 1 自然流路跡13層出土石器24 ……339
写真340 SR 1 自然流路跡13層出土石器25 ……340
写真341 SR 1 自然流路跡13層出土石器26 ……341
写真342 SR 1 自然流路跡13層出土石器27 ……342
写真343 SR 1 自然流路跡13層出土石器28 ……343
写真344 SR 1 自然流路跡13層出土石器29 ……344
写真345 SR 2 自然流路跡 2 ・ 3 ・ 4 ・ 6 ・ 7 層
出土石器 ……345
写真346 SR 2 自然流路跡 7 層出土石器 ……346
写真347 SR 2 自然流路跡 7 ・ 8 層出土石器 ……347
写真348 表面採集・表土出土石器 ……348
写真349 高田Ｂ遺跡出土金属製品 1 ……349
写真350 高田Ｂ遺跡出土金属製品 2 ……350

# 本　　文

# 第１章　調査に至る経緯

## 第１節　調査原因

高田Ｂ遺跡は、仙台市域南端を東西方向に延びる仙台南部道路の建設工事Ⅱ期事業に先立って実施された試掘調査によって発見された遺跡である。試掘調査当時、仙台南部道路は「仙台南有料道路」と呼称され、昭和56年２月に供用開始されていた。

Ⅱ期事業は「仙台南有料道路」東端の太白区郡山から更に東へ延伸し若林区今泉へと至る事業で、昭和62年12月に採択されている。当時、宮城県の交通体系の動脈ともいえる国道４号線をはじめとして仙台市域を通る主要幹線道路の交通量は飽和状態に達しており、さらに仙台空港および仙台港の国際化へ向けた整備が具体化されるに及び、仙台湾地区における交通体系の抜本的な見直しが求められるようになった。その骨格となる幹線道路が亘理町と石巻市を結ぶ「仙台湾高規格道路」である。仙台南部道路は、この高速交通体系の一環として仙台湾高規格道路と東北縦貫自動車道を直結する役割を果たすものと位置付けられ、仙台市域を東西に通過する交通を適切に誘導し、通行の円滑化と交通の安全をはかることによって地域産業経済の発展に寄与することが期待された。

Ⅱ期区間は平成６年３月に供用開始されており、現在、仙台南部道路では平成10年度に船渡前遺跡の発掘調査が終了した、太白区山田から東北縦貫自動車道までの区間の工事（建設工事Ⅲ期事業）が進められている（吉岡・佐藤　1999）。このⅢ期事業によって仙台湾高規格道路と東北縦貫自動車道の直結が完了する。

本遺跡周辺では、試掘調査以前は、北方約200m に古代の土器が散布する高田遺跡（現在、高田Ａ遺跡）と、北東方向約100m に中世の城館によって特徴づけられる今泉遺跡が知られているのみであった。平成元年、宮城県文化財保護課によってカルバートボックス部分などの本線敷を横断する構造物設置箇所で試掘調査が行われ、弥生時代の遺物包含層が確認された。

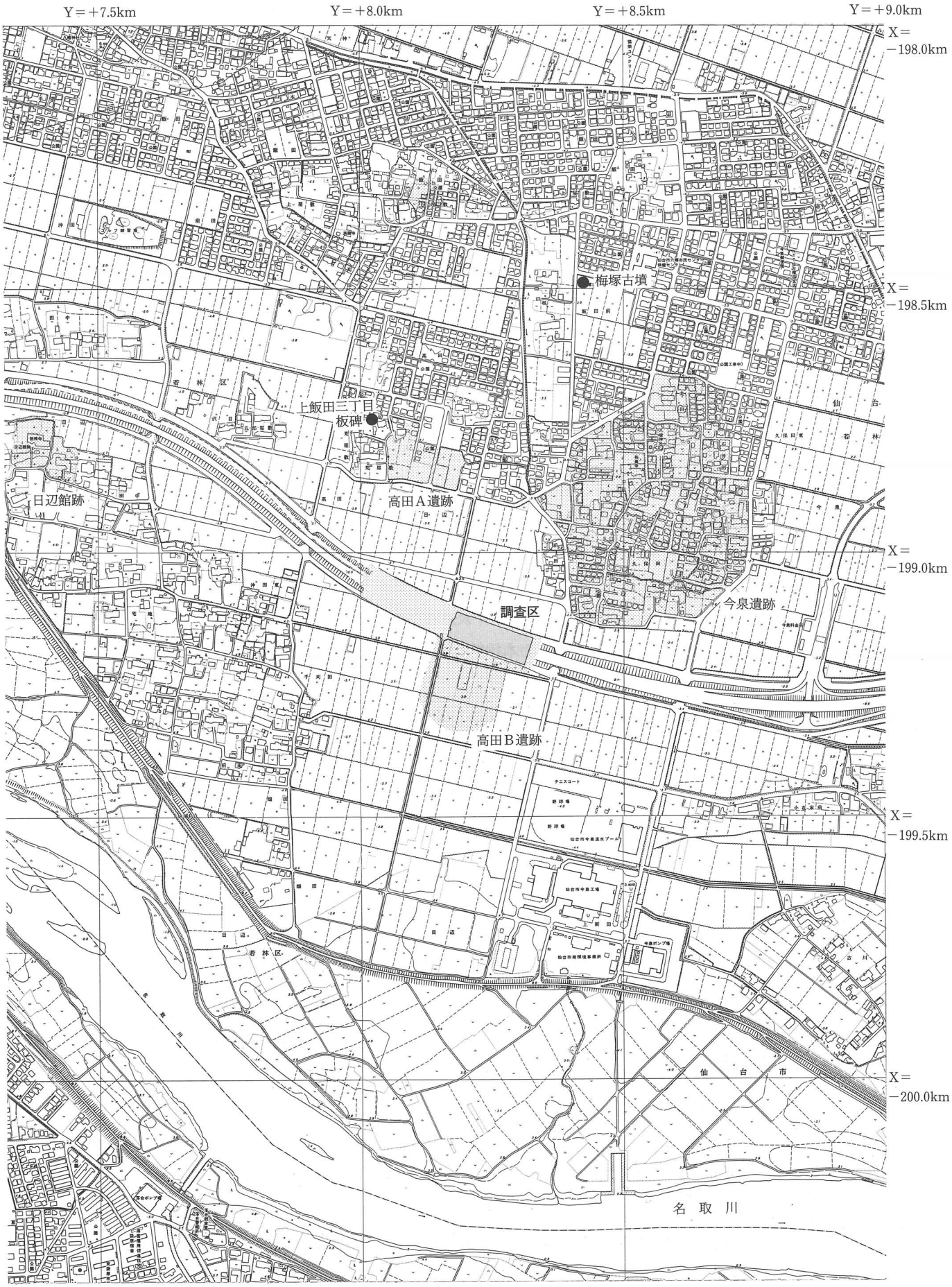
翌平成２年、宮城県文化財保護課は本線敷と現市道との交差部分の事前調査を実施し、併行して本線敷部分で２条のトレンチによる遺跡範囲確認調査を行った。事前調査の結果、弥生時代の遺物包含層は中期中葉桝形式期１時期にほぼ限定できることが明らかになり、範囲確認調査では本線敷を南北に横断する自然流路跡が確認された。その時期は出土遺物により桝形式期の可能性が指摘され、植物遺体の保存状態が良好であったことから木製品などの出土も予想された（近藤　1991）。

以上の平成元年から２年にかけての調査結果をもとに、宮城県文化財保護課と仙台市文化財課は事業主体者である宮城県道路公社と計画路線や建設工法の変更を含む協議を行った。しかし西側の既存インターチェンジおよび仙台湾高規格道路との接続部が固定されていることから路線変更は難しく、また、予定地の買収が完了していたこと、事業費が膨大になることなどから工法変更も困難と判断された。この協議結果に基づき、計画路線にかかわる遺跡範囲の発掘調査を実施することとなった。

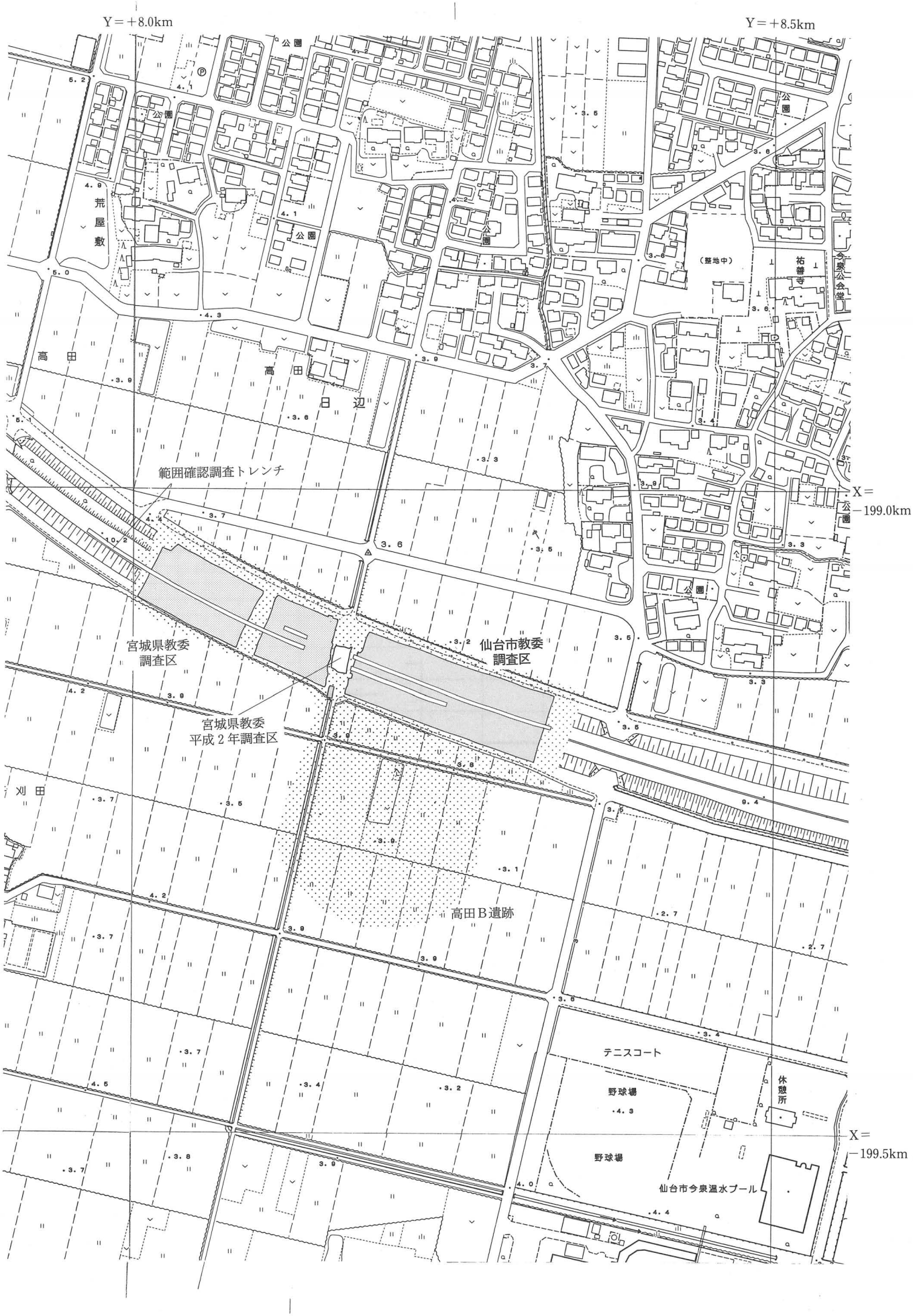
調査対象域が約２万 m²と広大であったため、平成２年に本線敷との交差部分の事前調査が行われた現市道を境として、西半部を宮城県文化財保護課が、東半部を仙台市文化財課がそれぞれ担当して調査を実施することとした。宮城県文化財保護課が担当した対象域西半部の調査結果については、平成６年３月に報告書が刊行されている（高橋ほか　1994）。

仙台市文化財課による発掘調査は、平成３年５月15日に着手し、平成５年10月15日にすべての現地作業を終了した。

なお、本遺跡は、当初、北方約200m に位置する高田遺跡と同一遺跡名で呼称されていたが、両遺跡の距離が離れていることと、主体となる時代と性格も異なることなどから、平成４年度、北側の高田遺跡を「高田Ａ遺跡」とし、




第１図　調査区位置図（10,000分の１）




第２図　遺跡の範囲と調査区配置図（4,000分の１）

本遺跡を「高田Ｂ遺跡」として新規登録されている。

## 第２節　調査要項

遺 跡 名：高田Ｂ遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－214，宮城県遺跡地名表登載番号01440）

所 在 地：仙台市若林区日辺字千刈田

調査期間：1991年（平成３年）５月15日～1993年（平成５年）10月15日

調査主体：仙台教育委員会

教育長　東海林　恒英

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

**（平成３年度）**

課長　　早坂　春一

調査第一係長　加藤　正範

調査第二係長　田中　則和

調査担当職員

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 荒井　格 | | | | | | | | | | | | |
| 佐藤　甲二 | | | | | | | | | | | | |
| 斎野　裕彦 | | | | | | | | | | | | |
| 金森　安孝 | | | | | | | | | | | | |
| 熊谷　裕行 | | | | | | | | | | | | |

**（平成４年度）**

課長　　白鳥　良一

調査第一係長　加藤　正範

調査第二係長　田中　則和

調査担当職員

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 荒井　格 | | | | | | | | | | | | |
| 渡部　紀 | | | | | | | | | | | | |
| 菅原　裕樹 | | | | | | | | | | | | |
| 平間　亮輔 | | | | | | | | | | | | |
| 吉岡　恭平 | | | | | | | | | | | | |
| 工藤信一郎 | | | | | | | | | | | | |
| 佐藤　洋 | | | | | | | | | | | | |
| 五十嵐康洋 | | | | | | | | | | | | |

（平成５年度）

課長　　白鳥　良一

調査第一係長　田中　則和

調査第二係長　結城　慎一

調査担当職員

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 荒井　格 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | | | | | |
| 五十嵐康洋 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | | | | | |
| 神成　裕志 | ― | ― | ― | | | | | | | | | |
| 赤澤　靖章 | ― | ― | ― | ― | ― | ― | ― | | | | | |
| 工藤信一郎 | | | | | ― | ― | ― | | | | | |

調査面積：8,800m²　（調査対象面積　11,200m²）

調査参加者

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 相澤　深雪 | 相原　恭子 | 相原妥各子 | 相原　春子 | 相原　　曜 | 相原やす子 |
| 赤間　淳子 | 赤間　　眸 | 浅見　しげ | 芦田　悦子 | 芦野　徳松 | 芦野ヒデ子 |
| 安部　文子 | 阿部　君子 | 阿部　志う | 阿部としみ | 阿部　葉子 | 阿部　美香 |
| 阿部ヨシ子 | 天田早智子 | 安藤　　繁 | 安藤　理子 | 飯島とよ子 | 飯田　美加 |
| 石射　京子 | 石部すえ子 | 磯田　知江 | 板橋　和子 | 板橋　禮子 | 板宮　秀子 |
| 市川由美子 | 伊藤　晋也 | 伊藤ノリ子 | 伊藤　秀浩 | 伊藤ひとみ | 伊東　裕輔 |
| 井鳥喜久代 | 氏家　陸子 | 海野　　侶 | 江志　幸美 | 遠藤　　元 | 遠藤せい子 |
| 遠藤　徳子 | 遠藤ゆかり | 遠藤由喜子 | 遠藤　　良 | 遠藤　良子 | 大江千恵子 |
| 太田　明子 | 大槻　幹子 | 大友　君江 | 大友　幸子 | 大友　潤子 | 大友とし子 |
| 大友よし江 | 大沼　宗子 | 大宮イサク | 岡田　牧子 | 岡野　信子 | 尾形　陽子 |
| 奥田美津子 | 奥山　栄子 | 長田八重子 | 小澤　和美 | 女川　昭三 | 小野　京子 |
| 小野さよ子 | 小野寺久美子 | 小畑　和子 | 片桐　米子 | 片倉　洋子 | 加藤　利子 |
| 金丸　英稔 | 嘉村　恭子 | 川上ほなみ | 川村　秋子 | 川村　久美 | 河村サクラ |
| 川村　輝美 | 環貫　邦子 | 菊地あき子 | 菊地　亮範 | 菊池　郁栄 | 菊地　和江 |
| 菊地　妙子 | 貴田　節子 | 日下　啓子 | 熊谷　博枝 | 倉又　芳子 | 黒田　照子 |
| 慶長　隆之 | 慶長　照子 | 河野　襲治 | 小平　　修 | 後藤　靖子 | 後藤　芳蔵 |
| 小林いと子 | 小林　悦子 | 近藤とも子 | 金野　静子 | 昆野　剛彦 | 斎　ふみ子 |
| 斎藤かつ子 | 斉藤　和子 | 斎藤かほる | 斉藤キミ子 | 斉藤　知子 | 斎藤　葉子 |
| 佐伯まち子 | 榊田祐理子 | 坂田美枝子 | 佐々木荘二 | 佐々木紀子 | 佐々木瑞枝 |
| 佐竹志女子 | 佐竹　安子 | 佐藤　和子 | 佐藤サダヨ | 佐藤すみ子 | 佐藤　千晴 |
| 佐藤てる子 | 佐藤　敏夫 | 佐藤　利子 | 佐藤としゑ | 佐藤とみ子 | 佐藤ノリ子 |
| 佐藤　久栄 | 佐藤　弘子 | 佐藤満喜子 | 佐藤　正子 | 佐藤まゆみ | 佐藤みち子 |
| 佐藤八重子 | 佐藤ゆう子 | 佐藤　洋一 | 佐藤　喜子 | 佐藤リキ子 | 次田　良吉 |
| 志野　薫理 | 篠原　宣子 | 篠原　良子 | 柴崎　　賢 | 庄子みさ子 | 庄司　唯子 |

菅井　妙子　菅井　則子　菅田マサ子　菅原　裕子　菅原みどり　鈴木　藍子
鈴木　敦子　鈴木　和子　鈴木　幸子　鈴木ちさ子　鈴木　博美　鈴木ゆう子
鈴木ヨシノ　関口　国生　相馬　泰子　曽根ちよ子　高橋　厚子　高橋あや子
高橋　香子　高橋　順子　高橋　妙子　高橋　昌子　高橋美枝子　高橋　勇助
高橋　由美　高橋　好子　高屋　　純　高山美喜子　滝　　昌子　武田　吾郎
武田れい子　竹中くに子　只木恵美子　橘　　英子　田中　スエ　種田ふくよ
玉上なみ子　棕沢　純子　丹野　一枝　丹野　正彦　千田　清志　千葉　　武
土田ケイ子　土屋みどり　津谷　貞子　寺田ユウ子　中島　弘美　中野真樹子
中野　美紀　中村　昌代　中村アサ子　中村　道子　中村　洋子　永井ますみ
長岡　幸子　永沢　幸枝　永野　文江　永橋　幹子　新沼よしえ　西　　鈴代
二瓶　和也　能登屋悠子　芳賀　惠子　芳賀　倫子　箱石　和子　橋本　房子
蜂谷　悦子　服部　和恵　早坂　英子　早坂香代子　針生あき子　針生とし子
針生ゑなよ　萬代　保子　樋口さち子　菱沼りつ子　日高　裕子　日野　尚子
平久　　覚　平塚美智子　平間　良子　深瀬　嶺子　福原　実佳　藤原三和子
古川　景一　古沢　正子　古山　明美　星　　豊子　本田　　孝　本田　光子
本間しづえ　松井としの　松浦たか子　松本　明子　三浦　孝子　三浦　利彦
三塚　利夫　水沼美江子　湊　久美子　南　たか子　峯岸きみえ　嶺岸　みへ
宮崎　幸子　宮崎美弥子　宮澤　晴美　武蔵美代子　武者　文子　武藤　信子
村上のぶ子　目黒スセノ　目黒裕美子　茂垣　艶子　望月　由理　門馬　和宏
門間たま子　門間由起子　安原多美子　谷津　和子　谷津ミツ子　山口香代子
山口　桂子　山田久美子　山田　沢子　山田　聰子　山田　哲子　山田　陽子
鎗水　芳子　横山　敏恵　吉田カチ子　吉田　浩子　依田　光子　我妻　亀三
和栗　清江　渡辺かほる　渡邉　貞子　渡部　　智　渡辺　純子　渡邉　信子
渡辺富佐江　渡邉眞紀子　渡辺美津子　渡邉　康子　渡邊裕美子　　(287名)

整理作業参加者

相澤せい子　相沢美佐子　相原　　曜　芦田　美夏　安孫子一成　安部　文子
荒木めぐみ　有路　尚子　飯田　美加　砂金よしえ　石射　京子　石船　清隆
泉谷　美江　板宮　秀子　伊藤　晋也　伊東　順子　伊東　裕輔　臼井美津子
大滝　理恵　岡田　牧子　小野　妙子　小山　大輔　門脇　和美　金澤　君代
柄沢千佳子　川田　哲夫　川原　真紀　川村　秋子　菊地あき子　菊地　亮範
菊地　啓子　喜多津和野　久城　将子　車田　　敦　黒田　照子　小林いと子
今野　順子　昆野　剛彦　酒井　　淳　佐々木紀明　佐藤てる子　佐藤　久栄
佐藤　美紀　雫石　良子　篠原　宣子　庄司　潤子　菅原　帝子　杉舩比佐子
鈴木すみえ　曽根ちよ子　高橋　朝子　高橋　尚子　高橋　由美　高屋　　純
高山美喜子　玉上なみ子　棕沢　純子　塚田　尚子　東海林かづ子　萩生田芳子
橋本　房子　早坂香代子　久松　舞子　菱沼りつ子　深瀬　嶺子　藤沢　牧子
藤原　弘明　星　　豊子　湊　久美子　茂垣　艶子　望月　由理　山田　哲子
鎗水　芳子　横山　敏恵　吉川　陽子　吉崎美香子　若生恵美子　渡邉眞紀子
渡邊裕美子　　(79名)

# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　仙台平野の地形環境変化と高田Ｂ遺跡

東北大学大学院理学研究科地理学教室　松本　秀明

### １．仙台平野北部地区の微地形分布

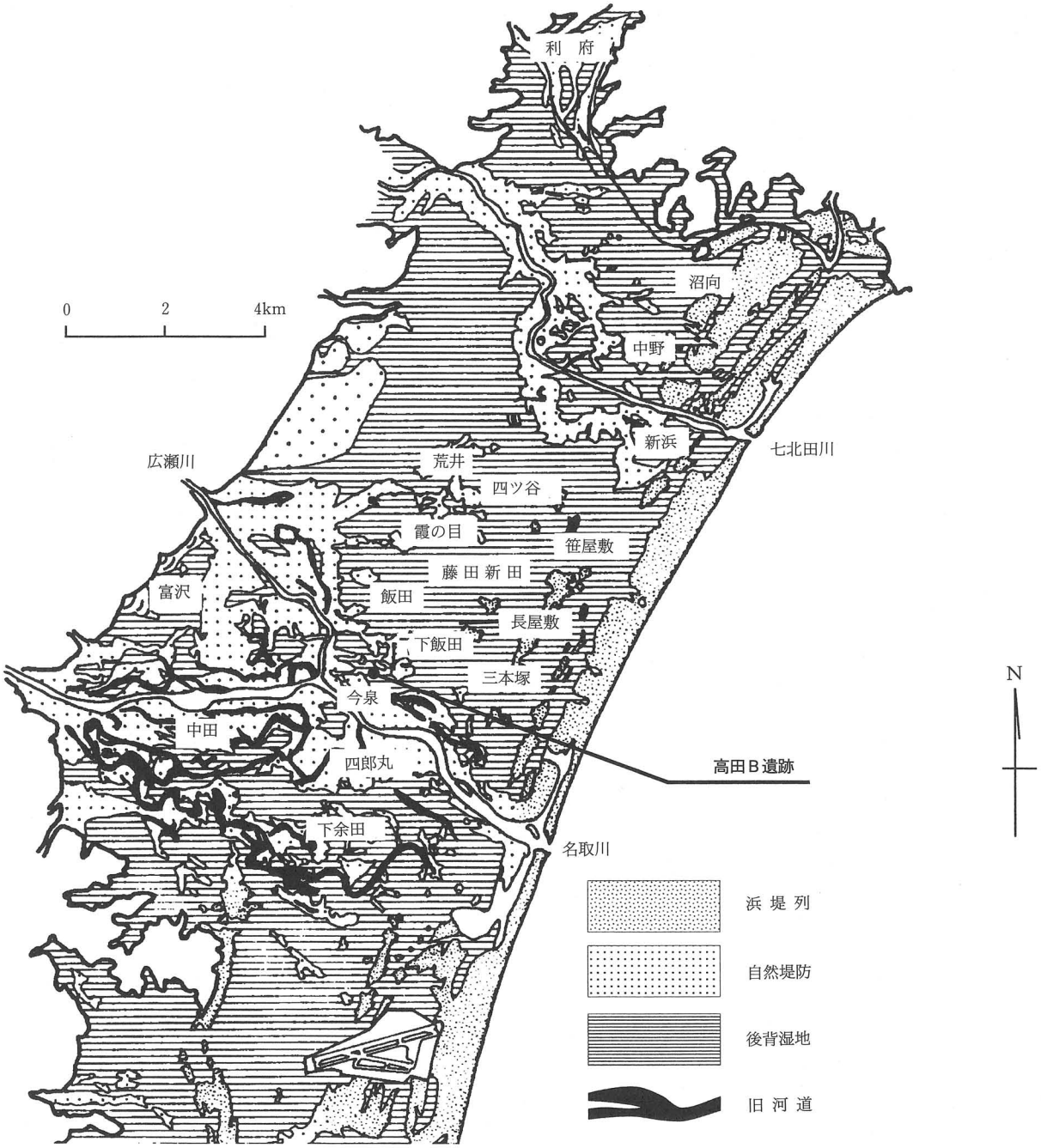
仙台平野は宮城県利府町から山元町に至る南北約50km の臨海沖積平野である。地下には約２万年前とされる最終氷期最寒冷期から約6,000年前までの海水準急上昇期およびその後の微変動を伴う相対的海水準安定期を通じて堆積した20～40m の沖積層が堆積している。仙台平野には北から七北田川、名取川および阿武隈川が流入し、地表には自然堤防、旧河道、浜堤列、後背湿地などの微地形が明瞭に認められる。

七北田川および名取川が流下する仙台平野北部地区（第３図）の東西幅は約８ km であり、西縁部は活断層としての長町－利府線および高舘丘陵に縁取られる。大部分の地盤高は５ m 以下であるが、名取川および支流の広瀬川が平野部へ流入する部分には2.5/1000程度の勾配を持つ緩やかな扇状地が広がり、これらの扇頂部にあたる名取川の栗木橋および広瀬川の広瀬橋付近の海抜は15m に達する。両河川の扇状地の下流端はおおよそ８～５ m の等高線で縁取られ、それより海側は、勾配１/1000以下の低平な低地が広がっている（第４図）。

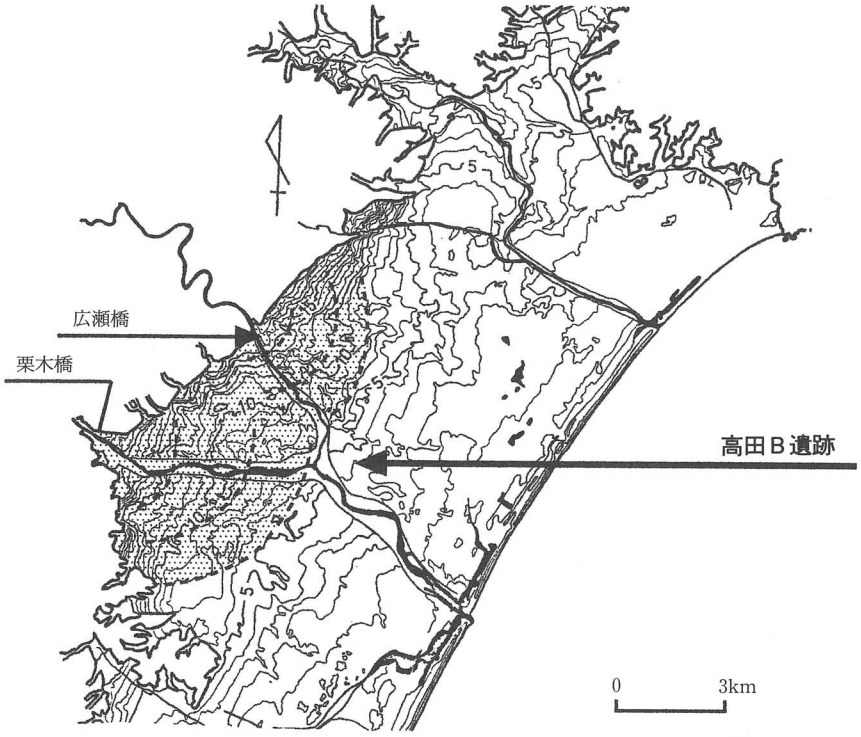
自然堤防は、現在の両河川の流路付近を中心に明瞭に発達するが、とくに名取川および広瀬川の扇状地においては、面的に広い範囲に発達している。また名取川右岸の中田、四郎丸、下余田付近には名取川の河道変遷の痕跡を示す旧河道群とともに自然堤防が複雑に発達している。広瀬川左岸では、荒井方面、霞の目方面、飯田方面および今泉方面へそれぞれ自然堤防が発達している。自然堤防は河川の氾濫時に河道両岸あるいは溢流流路に沿って、主に河川の浮流土砂が堆積し形成された地形であり、シルトないし淘汰不良な細粒砂で構成され、後背湿地に対して0.5～１ m 前後の比高をもつ。

旧河道は、名取・広瀬両河川の扇状地上では、幅20～40m で細長く屈曲する窪地として明瞭に追跡され、海抜５ m 未満の地域では後背湿地表面に、連続する帯状の浅い凹地として確認される。多くの場合、これらの旧河道には河道放棄後の泥質な堆積物が2.5～4.0m の層厚で堆積している。

浜堤列は、後背湿地からの比高0.5～1.5m 程度で、海岸線にほぼ平行に延びる砂質堆積物からなる微高地として数列分布している。これらの浜堤列は連続性や曲率の違い、浜堤列間に広がる後背湿地（堤間湿地）堆積物の層厚、堤間湿地下底の C-14 年代値などに基づき３列に区分されている（松本、1984）。内陸側から第Ｉ浜堤列、第II浜堤列、第III浜堤列として整理され、第Ｉ浜堤列は、沼向－中野－四ッ谷－神屋敷－藤田新田－下飯田東部を通過し、第II浜堤列は新浜－笹屋敷－長屋敷－三本塚に連なる。第III浜堤列は現在の海浜地帯を含む幾筋かの砂堆で構成されており、全体の幅は約１ km である。いずれの浜堤列も七北田川、名取川の河道付近で分断されており、内陸側の列ほど地表での連続性は乏しい。浜堤列は、汀線およびその背後に形成された砂堆から成り、例えば現在の海岸線に沿う砂堆は、第5図に示されるように、海側から汀線、前浜、後浜、小規模砂丘として細分される。前浜は、波の打ち上げによってもたらされた淘汰不良な中粒～粗粒砂（平均粒径0.3～１ mm）からなり、後浜および小規模砂丘は主に飛砂（風成砂）として内陸へ移動した淘汰の良好な細粒砂（平均粒径0.25mm 前後）からなる。このように浜堤列を構成する砂層のうち相対的に海抜の高い位置にあたる後浜および小規模砂丘の部分は淘汰の良い細粒砂で構成され、汀線に近い前浜部分では比較的淘汰の悪い中～粗粒砂で構成されている。現在内陸に位置する第Ｉ、第II浜堤列、第III浜堤列の一部は浜堤列を構成する砂堆の頂部が後背湿地上に一部露出していることにより、その




第3図　仙台平野北部の微地形

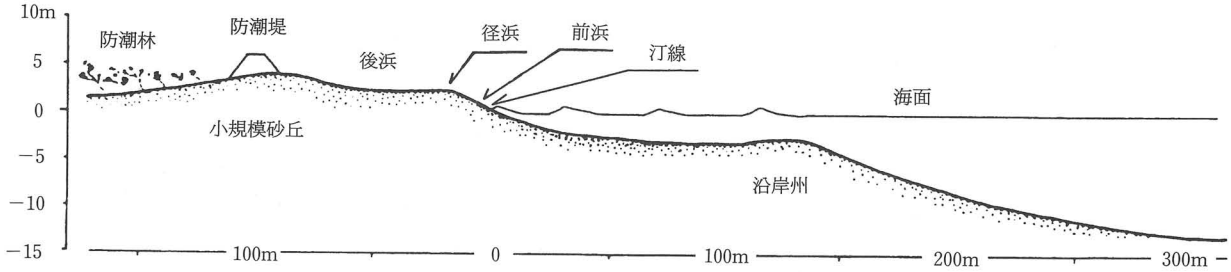



（アミかけ部分：扇状地）

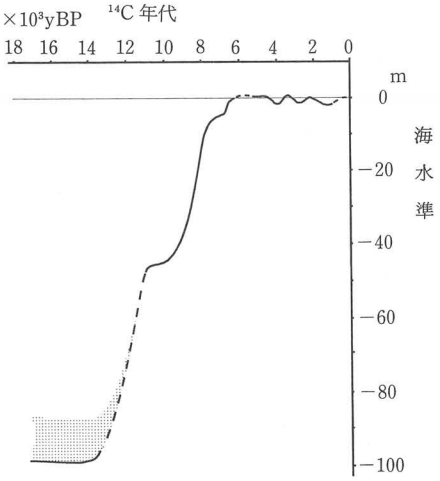
第４図　仙台平野北部の地盤高図

存在が確認される。したがって、現在地表部で確認される浜堤列は、浜堤列を構成する砂層のうち、淘汰良好な細粒砂（風成砂）からなる砂堆として認識される。各浜堤列を構成する砂層は堤間湿地堆積物（層厚１～2.5m）下において連続した堆積構造をもつ(後述する第８図参照)。これら地表で認められる浜堤列の形成年代は堤間湿地堆積物下底のＣ-14年代測定結果から、第Ｉ浜堤列が約5,000～4,500年前、第II浜堤列は2,200～1,700年前、第III浜堤列は約700年前以降であることが知られている。仙台平野の他にも、東北地方では青森県田名部平野、秋田県八郎潟南部平野、宮城県石巻平野などにおいても明瞭な浜堤列が発達しており、その形成年代には共通性が認められている(松本、1984)。

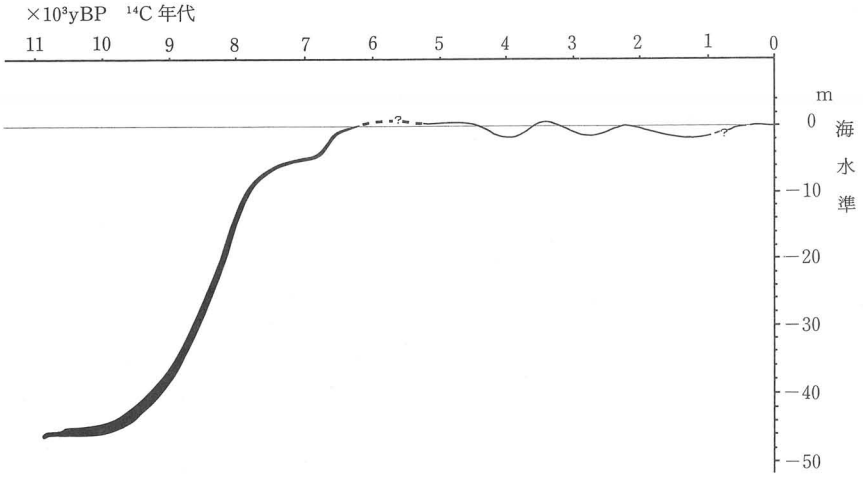
後背湿地は、自然堤防および浜堤列からなる微高地に囲まれた低湿な凹地部であり、度重なる洪水時において河川水が長時間滞留することにより泥質堆積物が堆積し、地下水位が地表付近にあることから、湿地帯（谷地）を形成し、腐植物を多く含んだ泥炭質粘土層が堆積している。泥炭質粘土層の層厚は浜堤列が分布する地帯においては１～2.5m 前後（堤間湿地堆積物）であるが、第Ｉ浜堤列よりさらに内陸部の扇町やその北部、山王以北においては10m を越える層厚をもち、いわゆる軟弱地盤地帯を形成している。



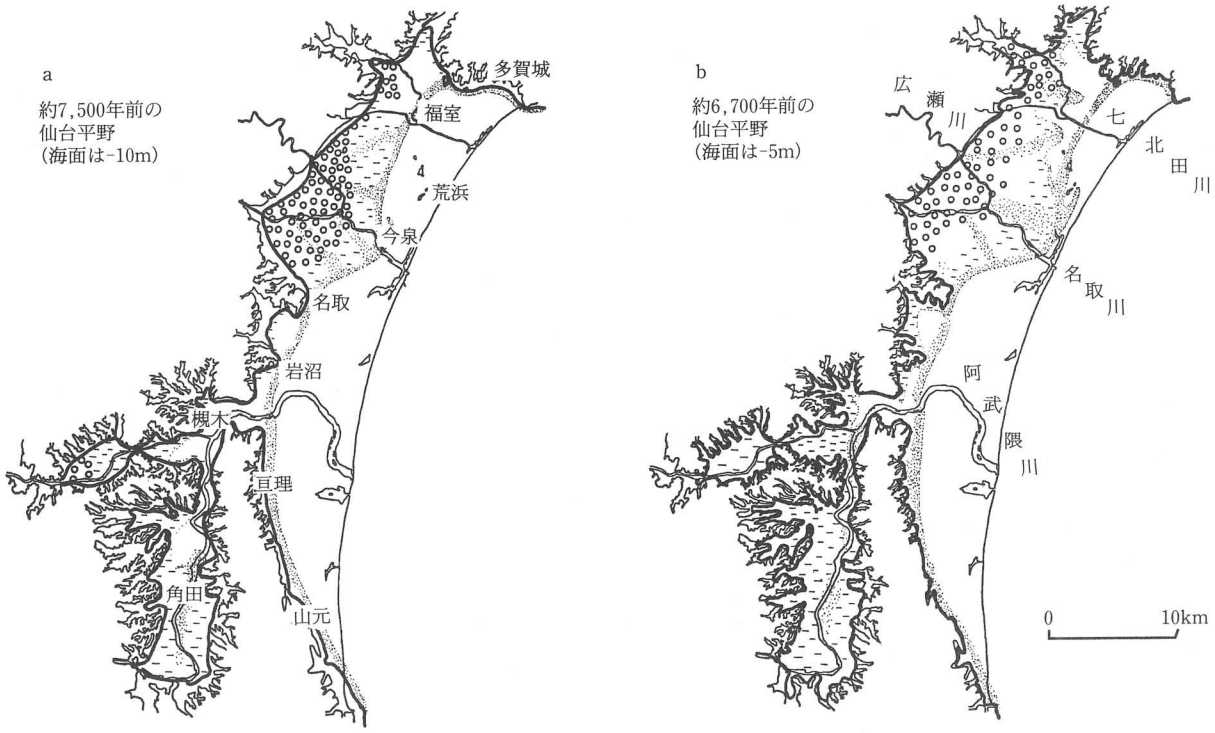

第５図　海浜の模式断面図




第６図ａ　仙台湾岸における最終氷期最寒冷期以降の海面変動曲線




第６図ｂ　仙台湾における後氷期の海水準微変動




第７図　仙台平野の海岸線と地形変化

## 2．仙台平野北部地区の沖積層と最終氷期最寒冷期以降の海水準変動

### (1) 仙台平野北部地区の沖積層

仙台平野の沖積層は20～40mの層厚を持ち、下位から埋積下部層、埋積中部層および埋積上部層に区分されている。埋積下部層は主として砂礫層からなりその一部は最終氷期最寒冷期前後に堆積した沖積層基底礫層(井関、1975)に対比される。埋積中部層は、現海水準下15～30mに堆積する粘土層である。これは腐植物を多量に混入する陸成堆積物である沖積陸成粘土層とマガキなどの貝殻を混入する内湾（潟湖）成堆積物である沖積海成粘土層に細分される。埋積上部層は現海水準下20m以浅に堆積し、下部から貝殻片が混入する沖積海成砂層、貝殻片を含まず淘汰の良い風成砂（飛砂）から成る沖積風成砂層および腐植物を含む陸成層である沖積層上部粘土層に細分されている(松本、1994)。

### (2) 最終氷期最寒冷期以降の海水準変動

仙台湾岸の沖積層や仙台湾の海底から採取されたC-14年代試料をもとに、最終氷期最寒冷期以降の海水準変動が復元されている（第6図a，b：松本・伊藤、1998)。これによれば、今から16,000年前から14,000年前の海水準は、－97m付近にあり、その後、急速に海水準は上昇し約1万年前前後に－45m付近で一時的な停滞期を経て、約6,000年前には現在とほぼ同様の水準まで到達した。当時の海面の高さは海抜1 m前後であり、それを大きく上まわることはなかったと考えられる。その後海水準は、1～2 m程度の上下振動を繰り返しながら現在に至る。

### (3) 仙台平野の海岸線位置の変化

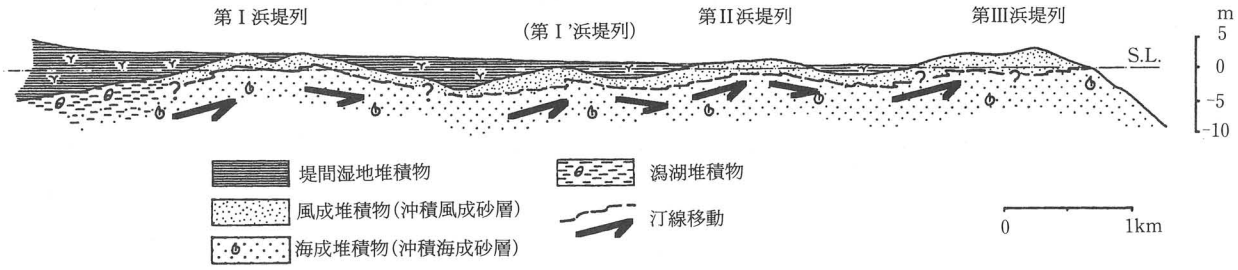
沖積層の堆積断面図において、陸上での堆積物である沖積層基底礫層・沖積陸成粘土層・沖積最上部粘土層と、海成層である沖積海成粘土層・沖積海成砂層との堆積境界の立体的な分布および海水準変動曲線から、最終氷期以降の仙台平野の海岸線位置の変化が求められる。海水準が－10mに達する約7,500年前は、仙台平野の形成過程においてもっとも海岸線が内陸側に後退していた時期であり、仙台平野北部においては、当時の海岸線は福室、今泉、中田付近を通過する砂浜として存在しており、七北田川沿いの岩切から山王にかけての地区には内湾（潟湖）が広がっていたと考えられる(第7図a)。また、約6,700年前になると海水準は－5 m付近に達するが、この頃には次第に海岸線は海側へ前進し、仙台平野は拡大を開始している（第7図b)。

## 3．約6,000年前以降の海水準の微変動と仙台平野の拡大過程

### (1) 浜堤列の形成と海水準微変動

約6,000年前以降、海面の急激な上昇はすでに収まり、これに伴い、各河川の河口から排出された土砂は砂浜を発達させ、海岸線が急速に前進を開始した。これと同時期に海水準は周期的に小さな振動を繰り返した。すなわち、約5,000年前から4,000年前にかけて海面は低下、また、3,500年前にかけて上昇、2,800年前にかけて低下、2,000年前にかけて上昇、1,200年前にかけて低下、その後現在にかけて上昇した（第7図b)。

約6,000年前以降の海水準の微変動により、海浜汀線部～浅海底に堆積した沖積海成砂層と、淘汰良好な飛砂からなる沖積風成砂層は、海岸線に平行な軸を持つ波状の境界面を形成しながら海側へ順次堆積している(第8図)。したがって、沖積平野に認められる浜堤列については以下のように要約される。約6,000年前以降の海水準の上下振動により海浜砂堆はその高度を変化させながら海側へ堆積・成長してきた。地表で認められる浜堤列は、そのうち約5,000年前（第Ⅰ浜堤列)、約2,000年前（第Ⅱ浜堤列）および700年前～現在（第Ⅲ浜堤列）の相対的に高い海水準期の海浜砂堆の頂部が現在の地表面に列状に露出している地形である。さらに、各浜堤列の間には、後背湿地性の泥炭を含む堆積物が充填され堤間湿地が形成されたものである。



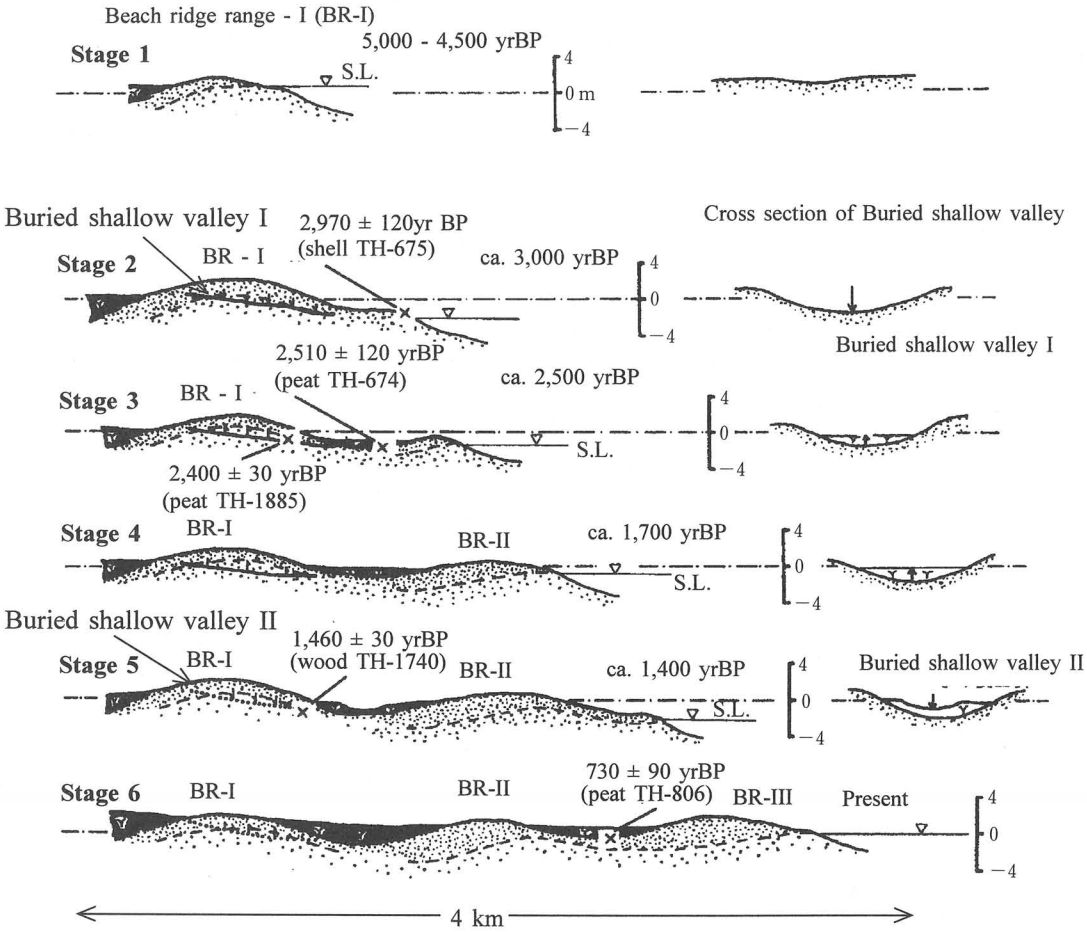

第８図　浜堤列の形成と海水準微変動

## (2)　海水準の微変動と仙台平野の地形発達

約6,000年前以降の海水準の微変動は、沖積平野の表面の地形発達に大きな影響を与えたと考えられる。例えば、河川水位や地下水位はその影響を直接的に受け、海水準の上昇期には河川水位は上昇し氾濫を生じやすい状況を作り出し、洪水堆積物を河道周辺に供給し、一方、海水準の低下期には河川水位の低下にとどまらず、川底の侵食をも生じさせていたと考えられる。１～２ｍの河床の低下は、河川と河岸との地形境界を明瞭にし、さらに侵食による新たな水路の発生原因ともなりうる。

第９図は、仙台平野の拡大過程における、浜堤列や浅谷および地形変化を模式化したものである（Matsumoto, 1999）。

Stage １：海水準の上昇により第Ⅰ浜堤列が形成された。当時の海水準は現在を基準として＋１ｍ付近に達したと考えられる。




第９図　仙台平野の海面変動と地形発達

Stage 2：海水準はわずかに低下するとともに海岸線が前進した。第Ⅰ浜堤列やその他の地表面上を流下していた河川はこのときに河床の低下が生じた（buried shallow valley Ⅰの形成）。

Stage 3、4：海水準の上昇により第Ⅱ浜堤列が成長し、buried shallow valley Ⅰは後背湿地性堆積物により埋積された。

Stage 5：海水準は低下し、再び河床の低下が生じた（buried shallow valley Ⅱの形成）。

Stage 6：海水準の上昇により、約700年前頃から第Ⅲ浜堤列が成長し始め、buried shallow valley Ⅱは後背湿地性堆積物により埋積された。

## 4．仙台平野北部の微地形と高田Ｂ遺跡

高田Ｂ遺跡は、名取川の河口から約5 km上流の左岸側約0.8km地点に位置し、名取・広瀬両河川の現在の合流点から約1.2km下流にあたる。両河川の形成する扇状地末端から下流側に約1km弱の地点に位置し、名取川左岸日辺付近に見られる自然堤防の東方0.3km、第Ⅰ浜堤列の内陸側1.5km地点にあたる。これらのことから、同遺跡は5,000～4,500年前に形成されていた第Ⅰ浜堤列背後の後背湿地に、名取川またはその派川から供給された洪水堆積物によって形成された細砂～シルト質の地盤上に位置しているものと考えられる。この洪水堆積物からなる微高地は形成後、現在までの間に多ければ4回、すなわち約4,000年前、2,400年前、約1,600年前および約800年前頃にあたる4回の海水準の低下期において、河川部分を中心に下刻・侵食された可能性がある。遺跡地内を通過する自然河川もこれら4つの時期のいずれか、あるいは各時期に下刻作用がおよんだために深く彫り込まれた可能性が高い。現在ではそれらが後背湿地の拡大により後背湿地性の泥質堆積物により埋積されていると考えられる。

井関弘太郎（1975）：沖積層基底礫層について．地学雑誌、81、247-264

松本　秀明（1981）：仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化．地理学評論、54、72-85

松本　秀明（1984）：海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動．地理学評論、57、720-738

松本　秀明（1994）：仙台平野の成り立ち．仙台市史特別編１　自然、仙台市史編纂委員会、264-277

松本　秀明・伊藤　晶文（1998）：宮城県沖積平野における後氷期の海面変動．日本地理学会発表要旨集、53、392-393

Matsumoto、H.（1999）：Late Holocene Sea-level Fluctuations in the Sendai Coastal Plain, Northeastern Japan. Proceeding of Japan-Korea Geomorphological Conference, 87-90

## 第２節　歴史的環境

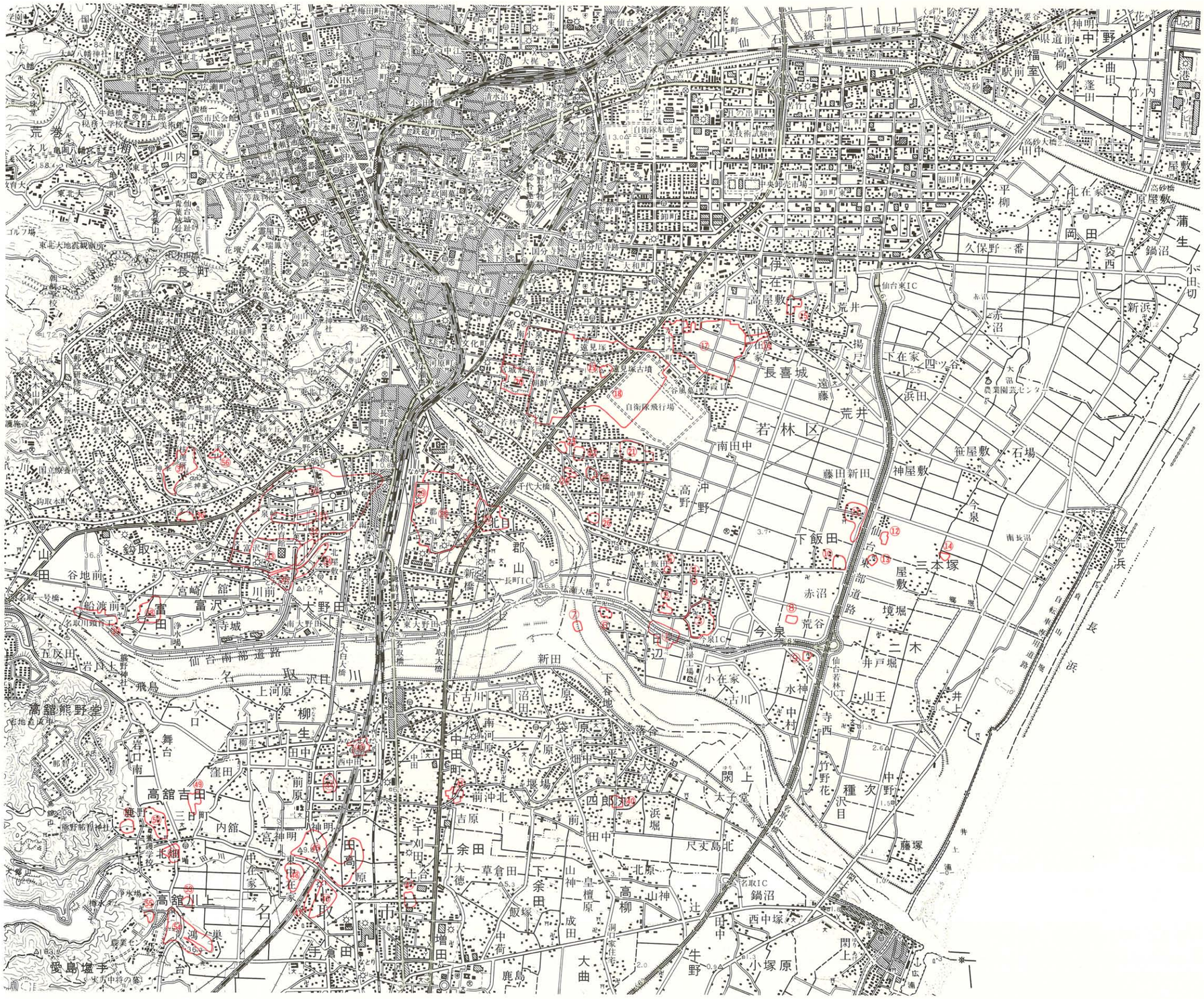
高田Ｂ遺跡の周辺には縄文時代から近世にかけての遺跡が分布している（第10図）。

縄文時代の遺跡としては隣接する今泉遺跡がある。本遺跡と同様に後・晩期の遺物が出土している。

弥生時代の遺跡は前時代に比べ、若干数が増加する。今泉遺跡、南小泉遺跡、藤田新田遺跡、中在家南遺跡、押口遺跡などがある。今泉遺跡では土坑1基が見つかり、中期の土器や石庖丁、太型蛤刃石斧などが出土している。約３ km 北方の自然堤防上にある南小泉遺跡では、前期～後期にかけての遺物が出土している。なかでも中期中葉の資料が良好で、しばしばこの時期の検討資料として取上げられている。昭和14、15年の調査では竪穴や合せ口土器棺などが見つかり、それぞれ竪穴住居跡や墓跡群の存在が考えられている。中在家南遺跡と押口遺跡は約４ km 北方にある。発掘調査により押口遺跡からは中期中葉の遺物、中在家南遺跡からは少量の前期・後期の遺物と大量の中期中葉の遺物が出土した。中在家南遺跡で見つかった自然流路跡は、蛇行を繰り返しながら押口遺跡の自然流路跡へつながることがわかった。この他、中在家南遺跡の自然堤防上からは墓跡群が見つかっている。自然流路跡の脇に包含層が形成されているなど本遺跡と類似点が多く、比較検討する上でも興味深い遺跡である。約４ km 北東

| No | 遺跡名 | 立地 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 1 | 高田Ｂ遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 縄文、弥生、古墳、平安、中世、近世 |
| 2 | 高田Ａ遺跡 | 自然堤防 | 奈良、平安 |
| 3 | 今泉遺跡 | 自然堤防 | 縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 4 | 梅塚古墳 | 自然堤防 | 古墳？ |
| 5 | 上屋敷遺跡 | 自然堤防 | 古墳、奈良、平安 |
| 6 | 日辺館遺跡 | 自然堤防 | 中世 |
| 7 | 日辺遺跡 | 河川敷 | 古墳 |
| 8 | 築道遺跡 | 自然堤防 | 奈良、平安 |
| 9 | 二木館跡遺跡 | 浜堤 | 中世 |
| 10 | 下飯田遺跡 | 浜堤 | 古墳、奈良、中世 |
| 11 | 藤田新田遺跡 | 浜堤 | 弥生、古墳、平安 |
| 12 | 屋敷東遺跡 | 浜堤 | 古墳、奈良、平安 |
| 13 | 下飯田薬師堂古墳 | 浜堤 | 古墳 |
| 14 | 岡崎囲遺跡 | 浜堤 | 中世、近世 |
| 15 | 押口遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 16 | 中在家南遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 弥生、古墳、平安、中世、近世 |
| 17 | 仙台東郊条里跡 | 後背湿地 | 奈良、平安 |
| 18 | 南小泉遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 19 | 遠見塚古墳 | 自然堤防 | 古墳 |
| 20 | 若林城跡 | 自然堤防 | 古墳、平安、中世、近世 |
| 21 | 沖野城跡 | 自然堤防 | 中世 |
| 22 | 神柵遺跡 | 自然堤防 | 奈良、平安 |
| 23 | 砂押Ｉ遺跡 | 自然堤防 | 古墳、奈良、平安 |
| 24 | 砂押II遺跡 | 自然堤防 | 古墳、奈良、平安 |
| 25 | 中柵西遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 26 | 河原越遺跡 | 自然堤防 | 古墳、奈良、平安 |
| 27 | 北目城跡 | 自然堤防 | 縄文後、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 28 | 郡山遺跡 | 自然堤防 | 縄文後・晩、弥生中、古墳（末期）、奈良（初期） |
| 29 | 西台畑遺跡 | 自然堤防 | 縄文、弥生中、古墳 |
| 30 | 富沢遺跡 | 後背湿地 | 後期旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 31 | 泉崎浦遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 縄文、弥生、古墳、平安、近世 |
| 32 | 下ノ内浦遺跡 | 自然堤防 | 縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世 |
| 33 | 山口遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 縄文早・中～晩、弥生中、古墳、奈良、平安、中世 |
| 34 | 六反田遺跡 | 自然堤防 | 縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、近世 |
| 35 | 下ノ内遺跡 | 自然堤防 | 縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世 |
| 36 | 原遺跡 | 丘陵麓 | 弥生、古墳、平安 |
| 37 | 芦ノ口遺跡 | 丘陵 | 縄文早、弥生、平安 |
| 38 | 南ノ東遺跡 | 自然堤防 | 弥生、平安 |
| 39 | 船渡前遺跡 | 自然堤防 | 縄文、弥生、奈良、平安 |
| 40 | 戸ノ内遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安、中世 |
| 41 | 後河原遺跡 | 自然堤防、後背湿地 | 弥生、奈良、平安、中世、近世 |
| 42 | 沢目遺跡 | 浜堤 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 43 | 安久東遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世 |
| 44 | 栗遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 45 | 清水遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 46 | 原遺跡 | 自然堤防 | 縄文、弥生、古墳、奈良、平安 |
| 47 | 野来遺跡 | 自然堤防 | 弥生、奈良、平安 |
| 48 | 元中田遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 49 | 高畑遺跡 | 自然堤防 | 弥生、古墳、奈良、平安 |
| 50 | 鹿野東遺跡 | 自然堤防 | 縄文、弥生、古墳、奈良、平安 |
| 51 | 真坂遺跡 | 自然堤防 | 縄文中～後、弥生中、古墳、奈良、平安 |
| 52 | 川上遺跡 | 自然堤防 | 縄文後、弥生中、奈良、平安、中世 |
| 53 | 八反田遺跡 | 後背湿地 | 弥生 |
| 54 | 今熊野遺跡 | 丘陵 | 縄文早・前～晩、弥生、古墳、奈良、平安 |
| 55 | 金剛寺貝塚 | 丘陵 | 縄文前～後・晩 |
| 56 | 土手内遺跡 | 丘陵 | 縄文、弥生、古墳、奈良、平安 |

第１表　遺跡地名表




(国土地理院1/50,000「仙台」を複製)

第10図　高田Ｂ遺跡周辺の遺跡

の藤田新田遺跡は約5,000～4,500年前頃に形成された浜堤上にある。大正年間、耕作中に中期中葉の壺が出土した。近年調査が行われ、自然流路跡が２本見つかっているが、弥生時代にも流れていた可能性を指摘している。本遺跡よりも海岸線に近い位置にあり、かつ集落跡の存在も考えられていることから、未解明ながら重要な遺跡である。

仙台市内において、弥生時代の遺跡として登録されているものは40箇所を数える。その大部分は平野部に立地し、遺跡の分布は南隣の名取市域にも広がっている。その中でも密度が高いのは、仙台市南部の太白区富沢周辺である。高田Ｂ遺跡はそこから約５ km 海岸部へ寄ったところに位置する。

弥生時代前期の遺物を出土する遺跡は少なく、南小泉遺跡、郡山遺跡、安久東遺跡、長岫遺跡、高田Ｂ遺跡、名取市の十三塚遺跡や原遺跡などがある。長岫遺跡は仙台市の北方を流れる七北田川流域の丘陵部に立地する。この流域は弥生時代の遺跡が空疎な地域である。加えて、市内で前期の遺跡が丘陵部に立地するのは現在のところ長岫遺跡だけである。

弥生時代中期になると遺跡数は増加し、特に中期中葉が際立つ。主なものに船渡前遺跡、富沢遺跡、下ノ内浦遺跡、山口遺跡、西台畑遺跡、郡山遺跡、南小泉遺跡、中在家南遺跡、押口遺跡、藤田新田遺跡、今泉遺跡、高田Ｂ遺跡、名取市原遺跡などがある。富沢遺跡では中期中葉以前から後期にかけての水田跡が見つかっている。詳細な調査と分析により当時の稲作のようすが明らかになりつつある。名取市原遺跡では墓跡群や遺物包含層、河川跡などが見つかっている。墓跡群では土器棺墓が県内で最も多い17基検出された。

弥生時代後期では、これまで平野部で多く見つかっていた遺跡が丘陵部へも分布域を広めている。主な遺跡としては原遺跡、土手内遺跡、富沢遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡などがある。原遺跡では楕円形と方形の竪穴住居跡、土手内遺跡では楕円形の竪穴住居跡が見つかっている。後期の住居跡の発見例は少なく、貴重なものである。下ノ内浦遺跡では土器棺墓や土坑墓で構成される墓跡や竪穴遺構が見つかっている。水田跡は富沢遺跡、山口遺跡などから検出されている。

高田Ｂ遺跡周辺の古墳時代の遺跡は、前時代に比べさらに増加する。集落跡と考えられる散布地のほか、下飯田薬師堂古墳や梅塚古墳なども造営されている。古代についても、本遺跡周辺に集落跡と考えられる散布地が確認されている。

中世･近世では城館跡や集落跡が点在する。その中で今泉遺跡は発掘調査により多数の遺構や遺物が発見された。そして、12世紀代に屋敷がつくられ、南北朝時代に城館として改変・整備され、近世では集落という変遷が推定されている。

# 第３章　調査の方法と概要

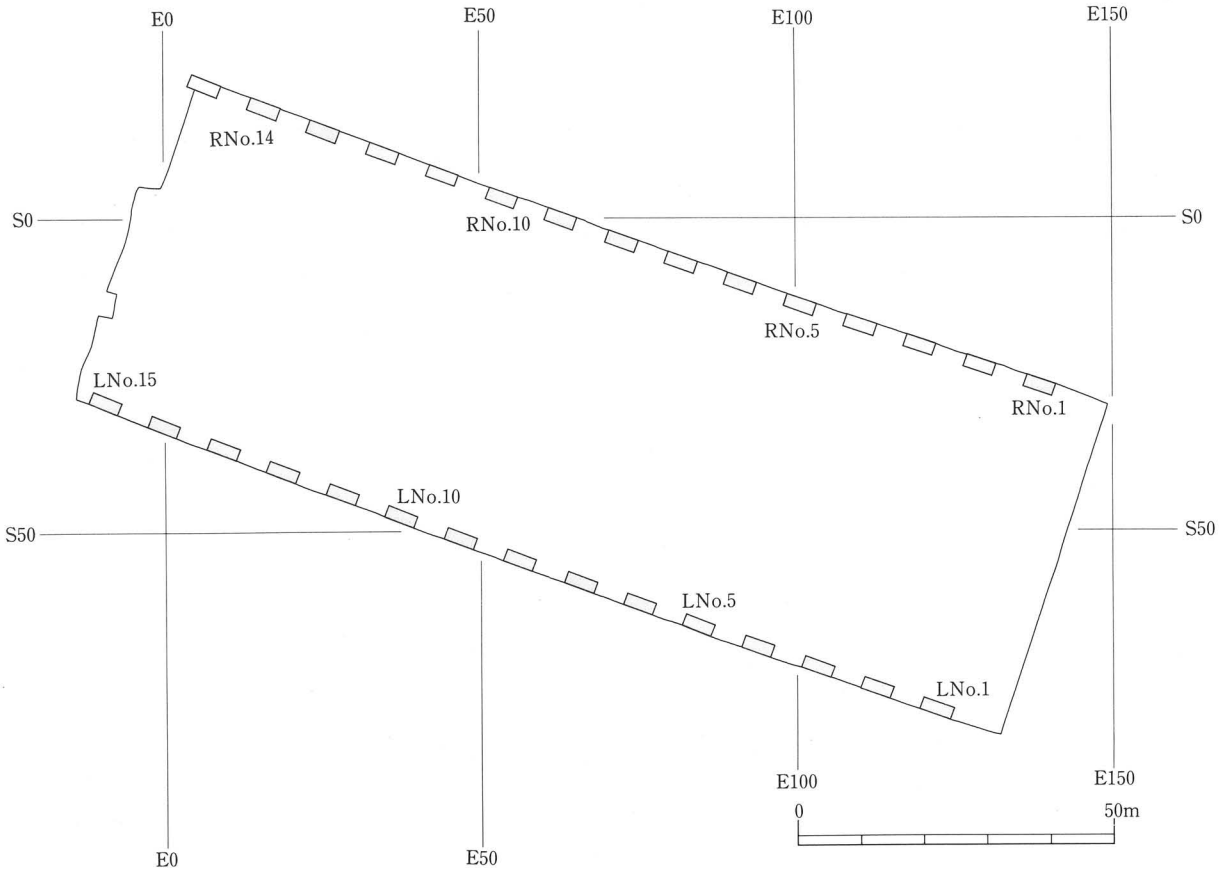
## 第１節　追加確認調査

宮城県道路公社および宮城県文化財保護課との協議をもとに、平成３年５月15日、発掘調査に着手した。

平成２年度に実施された遺跡範囲確認調査では、調査対象域の東西両端に弥生時代中期中葉桝形式期の遺物包含層、中央には同時期と考えられる自然流路跡の存在が確認されていた。しかし、東西方向に設けられた２条の範囲確認トレンチはそれぞれ３ｍと幅が狭く、しかも調査対象域の中央に近接して設定されていたため、遺物包含層の範囲や自然流路跡の方向・幅・深さ、他時期の遺構・遺物の有無については明らかにはされなかった。したがって、範囲確認調査結果が必ずしも対象域の全体像を示すものではない可能性が考えられた。また、平成３年８月には調査終了時期を確定することで宮城県道路公社と協議がなされており、調査の見通しを立てるためにも、より詳細な情報を得る必要があった。そのため調査開始にあたって追加の確認調査を行い、対象域全体の状況を把握することにつとめた。

追加確認調査は、２ｍ×５ｍの東西方向に長いトレンチを対象域の北縁と南縁に５ｍおきに設定して行った。それぞれ15箇所、計30箇所の調査区である。設定位置は、隣接地が水田であることから漏水のおそれが考えられたため、作業用通路の確保も兼ね、境界から約６ｍ離した位置とした（第11図）。

調査は重機で表土を除去した後、人力で層ごとに掘り下げ、層理面で遺構検出作業を行った。遺構が検出された場合、その面で一旦作業を中断して検出状況の写真撮影を行った後、掘り込んで試掘トレンチ内を完掘した。調査




第11図　追加確認調査区設定図

記録として完掘状況の写真撮影、平面図の作成、レベル記入を行った。

出土遺物は層位ごとに取り上げた。層位名はトレンチ間で層相を検討し、同一の層と判断された場合は共通の層位名を与え、判断が難しい場合には各トレンチ内で別々に層位名を付けた。いずれも仮層位名とし、本調査開始時に層位名の整理を行った。

5月15日から7月25日までの約2ヵ月間で、設定した30箇所のトレンチのうち29箇所について調査を行った。その結果、宮城県文化財保護課による範囲確認調査成果に加え、以下の知見が得られた。

① 範囲確認調査で南北方向と想定されていた自然流路跡の他に、もう1条の流路跡が存在する。

② 新たに確認された流路跡は、調査対象域の南側を蛇行しながら東西方向に延びている。

③ 自然流路跡の深さは現地表面より2～2.5mである。

④ 自然流路跡堆積土最下層は、弥生時代中期中葉桝形式期の土器・石器・木製品などの多量の遺物を含んでいる。

⑤ 弥生時代桝形式期の遺物を含む自然流路跡堆積土より上層には、古墳時代中期の遺物を含む層がある。

⑥ ⑤の結果から、自然流路跡の堆積土には、他にも時期の異なる遺物を含む層が存在する可能性が考えられる。

⑦ 自然流路跡堆積土の上部に水田土壌に類似する層がみられる。上面に灰白色火山灰をのせており、平安時代の水田跡の可能性がある。

⑧ 自然流路跡が完全に埋没した後、調査対象域全体に3～4時期の水田跡が広がっている。時期は中世から近世と考えられ、水路を伴っている。

⑨ 縄文時代後期および晩期の土器がわずかに出土しており、それぞれの時期の遺構・遺物包含層が存在する可能性が考えられる。

## 第2節　本調査

追加確認調査の結果、調査対象域全体に中世から近世と考えられる3～4時期の水田跡が広がっており、人力による全域の掘り下げが必要であることが明らかになった。また、自然流路跡は2条存在し、現地表面から底面までの深さは2～2.5mであることが確認された。さらに堆積土中に弥生時代中期を中心とした土器・石器・木製品などの多量の遺物を含んでいることから、調査にあたって多くの労力が必要と判断された。そのため公募によって発掘調査作業員の増員をはかり、調査体制の整備を行って本調査へ移行した。

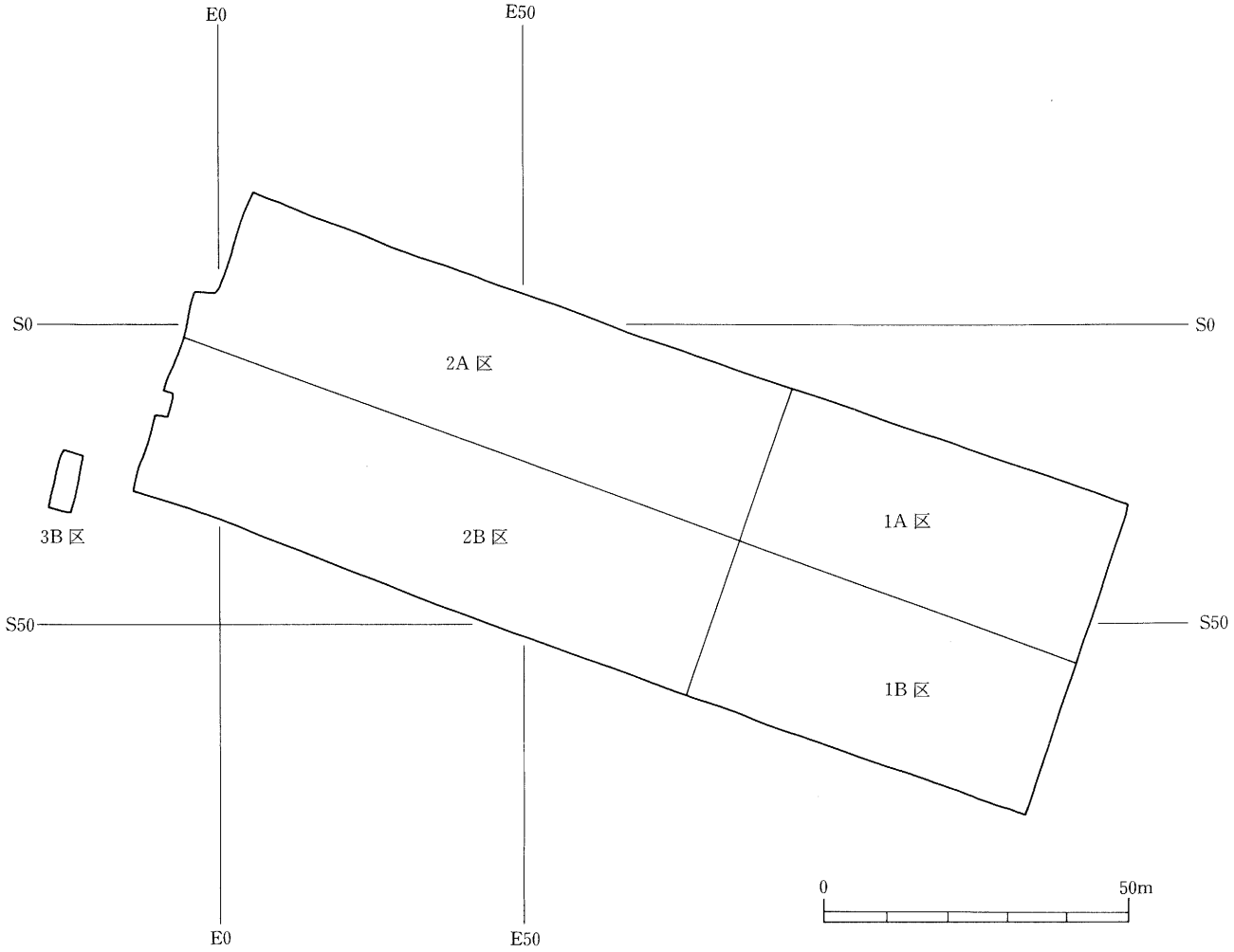
### 1．調査区の設定

調査対象域は、平成2年度の宮城県文化財保護課による範囲確認調査によって遺跡の範囲とされた東西約160m、計画道路路線幅にあたる南北約70mの面積約11,200m²である。

調査区の設定にあたっては、対象域内で作業用通路および排土用ベルトコンベアの設置場所を確保することを前提とした。また、南北両側に隣接する水田からの漏水のおそれを考慮し、南北の幅は追加確認調査区までとした。その結果、設定された本調査区は東西約160m、南北約55m、面積約8,800m²であり、調査対象域に対する調査面積の割合は約79％である。

調査区は作業を進める関係上、便宜的に西端から約100mを境に大きく2分し、東側を1区、西側を2区と呼称した。さらに、調査区中央に東西方向で作業用通路を兼ねた約5m幅の土層観察用ベルトを設定し、その北側をA区、南側をB区とした。したがって調査区の北東域が「1A区」、南東域が「1B区」、北西域が「2A区」、南西域が「2B

区」となり（第12図）、作業はそれぞれの区ごとに進めることとした。




第12図　調査区設定図

## 2．調査経過

### 平成３年度

平成３年７月15日、追加確認調査と併行して本調査区の表土除去を開始した。2B 区から開始し、その後2A 区の除去を行った。表土除去には重機を使用し、２区全体の除去作業は８月５日に終了した。

平成３年度の調査の結果、水路を伴う３時期の近世の水田跡と、中世の水田跡１時期が確認された。いずれの時期の水田跡においても耕作が連続して行われたため畦畔上部の大半は失われていたが、下部を含む基底部によって水田区画を確認することは可能であった。水田跡に伴う水路跡からは漆器椀や下駄などの木製品のほか、陶器、磁器、金属製品などが出土している。

平成３年度は、2B 区西半では近世の最も古い時期の水田跡まで、東半では中世の水田跡までの調査を行った。2A 区は近世の最も新しい時期の水田跡までの調査であった。また、平成２年度の宮城県文化財保護課による範囲確認調査トレンチ内で弥生時代中期の遺物が露出状態にあり、劣化・紛失のおそれが考えられたことから、出土状況の実測・写真撮影の後、遺物の取り上げを行った。

平成３年12月17日、宮城県文化財保護課と仙台市文化財課の調査区を分ける現市道の西側において、事前連絡な

く水路掘削工事が開始されたため、宮城県道路公社と協議を行い緊急に対応することとした。遺構確認作業の結果、自然流路跡が確認されたことから直ちに流路跡の調査へ移行した。自然流路跡の位置が水路予定部分の南端で、2B区の西側に位置していたため調査区名を3B区とした。調査の結果、流路跡の堆積土最下層から弥生時代中期の遺物が多量に出土し、年内に終了させることは困難と判断された。しかし、工事工程上の理由による調査継続の強い要請があったことから翌平成4年1月まで調査を続行し、1月20日に水路予定部分の調査を終了させた。

しかし、この緊急対応調査中に水路掘削工事がさらに南へ延長されることが明らかになり、協議を経て平成3年度内に追加調査を実施することとなった。

平成4年3月16日、2区の本調査再開に併せて3B区の追加調査を開始した。追加調査が終了したのは年度末の3月31日である。

### 平成4年度

平成4年度の調査は4月13日から開始した。3年度に引き続き2区の調査を行い、7月上旬に中世の遺構面の調査を終了した。中世の遺構面は2時期あり、そのうちの新しい時期の遺構は、前年度確認された水田跡である。水田跡の下面からは、掘立柱建物跡や道路の側溝と考えられる平行する溝跡などが確認され、本遺跡の北東に位置する今泉遺跡との関連が注目された。

7月13日、調査は弥生時代中期の遺物包含層の調査と自然流路跡の掘り込み作業へ移行した。遺物包含層の調査を終えた後、その下面で遺構検出作業を行い、検出した遺構の掘り込み作業を開始した。遺構のほとんどは弥生時代中期の時期であったが、8月29日から掘り込みを開始した竪穴状の遺構は、調査の結果、石囲炉を伴う縄文時代後期中葉の竪穴住居跡であることが明らかになった。同時期の竪穴住居跡は宮城県内では他に1例確認されているだけであり、平野部の海岸寄りでは初めての検出例であった。

自然流路跡は調査区の南側を蛇行する流路跡に、北東方向から規模の小さい流路跡が流れ込んでおり、2条の流路跡が合流する調査区中央南側で最も深くなることが確認された。現地表面から最深部までの深さは約4mであり、標高は－1mに達する。自然流路跡は合流点より東では南東方向へやや直線的に延びており、西では流路跡の本流は大きく蛇行し、大部分が調査区外となっている。

追加確認調査では、自然流路跡の堆積土上部で平安時代の水田土壌と考えられる層が確認されていたが、畦畔状の盛り上がりが一部で認められたのみで、水田跡と断定するまでには至らなかった。

自然流路跡の堆積土最下層に弥生時代中期の遺物を多量に含んでいること、その上層に古墳時代前期、中期、後期の遺物をそれぞれ含んでいる層が存在することが確認された。古墳時代の遺物は、弥生時代の層と比べ、いずれの時期においても少量であった。

11月24日、2A区の調査を終了させ、同時に1A区の重機による表土除去作業を開始した。表土除去は11月27日に終了した。表土下面の精査を行った時点で1A区の作業を中断し、2B区の調査に集中した。

平成4年度の調査では、自然流路跡を除く2区の調査をすべて完了させた。自然流路跡においては、合流点部分の古墳時代前期の堆積層までを終了させた。したがって、2区において平成5年度に残された調査は、自然流路跡合流点部分の堆積土最下層の弥生時代中期の遺物を含む層である。

調査と並行して遺物包含層の土壌を1mグリッド毎に、また自然流路跡の弥生時代の堆積土は10mグリッドで採取し、調査中に水洗選別を行い微細遺物の検出につとめた。

なお、調査終了部分に関しては翌年度の調査に影響を及ぼさない範囲で先行引渡しを行った。

### 平成５年度

平成５年度の調査開始にあたり宮城県道路公社と調査終了時期に関わる協議を行い、10月15日までに現地での調査を終了させることで合意した。

４月２日から排土用ベルトコンベアの再設置や排水作業などの調査準備を行い、４月７日に1B区の重機による表土除去を開始した。表土除去作業は４月13日に終了した。

４月12日、１区の調査と、前年度の調査で残された2B区の自然流路跡堆積土最下層の調査を開始した。2B区の調査は東壁断面図作成を含め５月31日に終了した。その後１区の調査に集中したが、天候不順に悩まされ、作業の進捗に大きな影響を受けた。

７月31日、平成３年度からの調査成果を広く一般に公表するため現地説明会を実施した。地域住民、研究者等約300名の見学者があった。

８月９日から１区の弥生時代中期の遺物包含層の調査を開始し、自然流路跡の掘り込み作業には９月16日に着手した。調査期限までの時間が残り少なくなったことから、調査方法の再検討を行うため自然流路跡を横断する観察用トレンチを設定し、底面までの深さと遺物の包含状況を確認した。その結果、底面が合流点より東では最深部より1.5mほど浅くなり現地表面より約2.5m程度の深さであること、自然流路跡が南東方向へ向かうため流路跡の中心は1B区内では30m程で、その先は調査区外となることが確認された。また２区の調査結果と同様に、古墳時代の遺物を含む層に達するまではほとんど遺物が出土しないことも明らかとなった。この観察用トレンチの調査結果をもとに、自然流路跡堆積土のうち古墳時代の遺物を含む層の上層までを重機によって除去し、その後、手掘りによる掘り込みを行うこととした。また調査日数をより多く確保するため、９月から土曜日も全日稼働を行った。

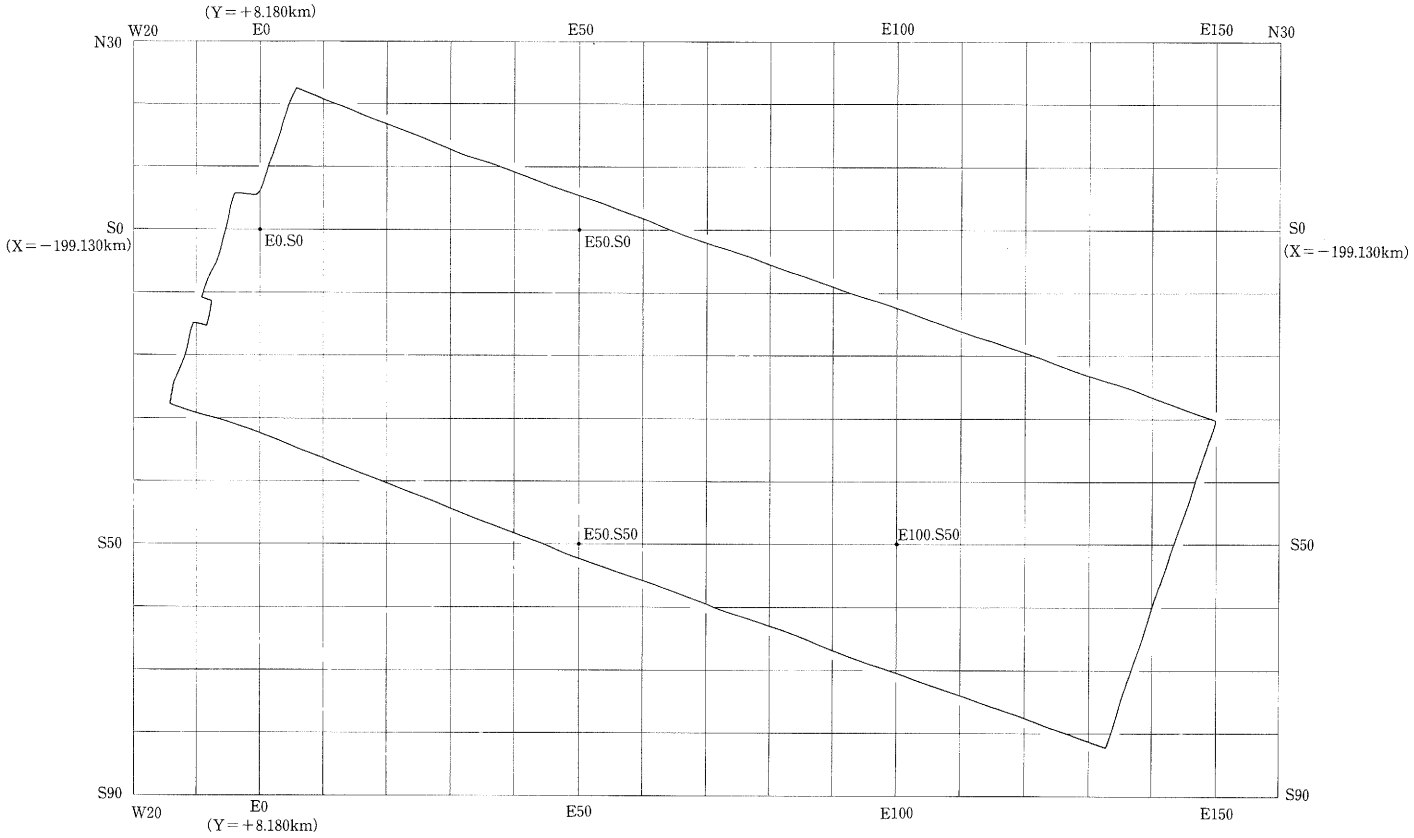
調査期限の10月15日、現地での発掘調査に関わるすべての作業を終了し、10月18日に現地事務所からの器材撤収を行った。

## ３．測量の基準

測量は「平面直角座標系第Ｘ系」を基準として行った。

調査区内の北西部に位置するＸ＝－199.130km、Ｙ＝＋8.180kmの地点に測量原点（E0S0）を設定し、東および南方向へ進むにしたがって数値が増加するようにし、Ｅ、Ｓと表示した。測量原点から西および北方向へ進む場合も同様に数値が増加するようにし、Ｗ、Ｎと表示した。測量の基準杭は原点E0S0を基準に10mごとに設定した（第13図）。

現地での実測は、平面図は1/40を原則とし、断面図は1/20で作成した。遺物包含層の遺物出土状況は1/10もしくは1/20で実測し、遺物包含層下の遺構や中世の掘立柱建物跡などの平面図は1/20で作成した。また、自然流路跡は1/100で平板測量を行った。自然流路跡および溝跡から出土した遺物については、測量基準杭との高低差によって図化作業に多くの時間を要する可能性が考えられたため、遺物に近接して設定した任意の２点を結んだ仮基準により1/10で出土状況を実測した。この２点の仮基準を1/40で平板測量し、後に全体図へ合成した。




第13図　グリッド設定図

## 4．遺物の取り上げ・写真記録

遺物の取り上げにあたっては、弥生時代中期の遺物包含層では平成３年度は遺物１点ごとに出土状況とレベルを記録して取り上げたが、４年度と５年度は一括土器や特徴的な遺物についてのみ出土位置とレベルを記録し、出土状況の写真撮影の後、取り上げを行った。それ以外の遺物包含層から出土した遺物については、１ｍグリッド単位で取り上げた。

中世、近世の水田土壌から出土した遺物に関しては、耕作による下層からの巻き上げや移動が想定されたことから原位置を失っているものが多いと判断し、原則として10ｍグリッド単位で層位ごとに取り上げた。特に必要と認められた遺物の場合は、出土状況とレベルの記録を行った。

遺物取り上げの際のグリッド名の呼称には測量基準杭を利用した。北方向へ向いた時の北西に位置する基準杭をグリッド名として呼称した。(例；E10S30 グリッド)

遺構内から出土した遺物は、必要と判断されたものについてのみ出土状況の図化とレベル記入、写真撮影を行って取り上げ、それ以外は遺構ごとの取り上げとした。

写真撮影は、35ミリ判モノクロ写真とカラーリバーサルを基本とし、必要に応じ６×７判を併用した。また、遺跡全景と中世の遺構の撮影については平成４年と５年に各１回、ラジコンヘリによる空中撮影を業者に委託して実施した。

# 第４章　基本層序

今回の調査において確認された基本的な層位は、第Ⅰ層から第Ⅵ層までの大別６層、細別11層である。以下、各層の土色、土性、層厚、分布、検出遺構と出土遺物などの概要を述べる。

第Ⅰ層　表土(旧耕作土)。2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土。最近まで耕作されていた水田の土壌であり、層厚は15～20cmである。層中に縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器、石器・石製品類、金属製品などを含んでおり、耕作により下層から巻き上げられたものと考えられる。

第Ⅱａ層　10YR5/1褐灰色シルト質粘土。調査区の西端を除き、層厚６cm前後で調査区内のほぼ全域に分布する。近世の水田土壌であり、畦畔によって区画された水田跡とそれに伴う水路跡（溝跡）が検出されている。検出した水田区画は、部分的なものを含め28区画である。畦畔および田面の上部は後世の耕作によって削平されている。また、本層が調査区西端に分布しない理由も後世の耕作によるものと考えられる。層中より縄文土器、弥生土器、陶器、磁器、石器・石製品類が出土している。

第Ⅱｂ層　2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土。層厚４cm前後で、おもに調査区中央部に部分的に分布する。ほかの大部分は第Ⅱａ層水田跡に伴う耕作によって失われている。近世の水田土壌であり、調査区中央部で水田区画が３区画検出されている。畦畔は、第Ⅱａ層水田跡の畦畔下に残された畦畔痕跡の一部として、わずかに残存している。調査区中央部でのみ区画が検出されたのは、この付近が弥生時代の自然流路跡が合流する箇所であり、最も深くなっていたことから、その影響により自然流路跡の堆積土とそれを覆う基本層位の各層が厚く残存していたためと考えられる。層中より縄文土器、弥生土器、陶器、磁器、土師質土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

第Ⅱｃ層　10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土。層厚５cm前後で、調査区の西端を除き、ほぼ全域に分布する。近世の水田土壌であり、畦畔によって区画された水田跡が検出されている。検出した水田区画は部分的なものを含め30区画である。畦畔および田面の上部は第Ⅱａ層・第Ⅱｂ層水田跡に伴う耕作によって失われている。畦畔は第Ⅱａ層・第Ⅱｂ層水田跡の畦畔下に残された畦畔痕跡の一部としてわずかに残存する。層中より縄文土器、弥生土器、陶器、磁器、石器・石製品類、金属製品が出土している。

第Ⅲ層　10YR7/6明黄褐色シルト。自然堆積層である。第Ⅱｃ層水田跡に伴う耕作によってほとんど失われており、分布は部分的である。わずかに第Ⅱｃ層水田跡下面の一部と、第Ⅳａ層水田跡の畦畔肩部に貼り付くような状態で所々で確認されるのみである。第Ⅳａ層水田跡の畦畔肩部に伴う部分的な残存は、第Ⅱｃ層水田跡畦畔の直下に位置していたことにより、その耕作の影響を免れたためである。層中より弥生土器、石器・石製品類がわずかに出土している。

第Ⅳａ層　10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土。層厚10cm前後で、調査区の西端を除き、ほぼ全域に分布する。中世の水田土壌であり、大畦畔と小畦畔によって区画された水田跡とそれに伴う水路跡（溝跡）が検出されている。検出した水田区画は部分的なものを含め38区画である。畦畔および田面の上部は第Ⅱａ層～第Ⅱｃ層の近世の水田跡に伴う耕作によって失われている。層中より縄文土器、弥生土器、陶器、磁器、土製品、石器・石製品類、金属製

品が出土している。

第Ⅳｂ層　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。層厚 6 cm 前後で、第Ⅳａ層とほぼ同様に分布するが、西半では層厚が薄くなる傾向がある。土色、土性とも直上の第Ⅳａ層と類似していることから、第Ⅳａ層水田跡に伴う耕作によって水田土壌化した部分が第Ⅳａ層であり、その影響を受けなかった部分、いわゆる「母材層」が本層であると考えられる。層の上面で掘立柱建物跡、土坑、溝跡、ピット等が検出されているが、直上層の第Ⅳａ層水田跡に伴う耕作によって本来の掘り込み面は失われているものと考えられる。溝跡には位置関係や形状などから道路や塚の存在を想定できるものもある。層中より弥生土器、陶器、磁器、石器・石製品類が出土している。

基本層位の第Ⅳ層は、調査の進行に伴って上下 2 層に細分されることが確認された層である。細分以前の出土遺物については第Ⅳ層として一括して取り上げているため、第Ⅳａ層と第Ⅳｂ層の両者から出土した遺物が含まれている可能性が考えられる。本報告では、上層である第Ⅳａ層出土遺物に併せて事実記載を行っている。

第Ⅴａ層　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土。弥生時代中期中葉桝形式期の遺物包含層である。層厚は約 5 cm であり、調査区の西端にのみ分布している。層中より縄文土器、弥生土器、石器類が出土している。

第Ⅴｂ層　10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂。自然堆積層である。層厚 6 cm 前後で、調査区西端にのみ分布する。桝形式期の遺物を含んでいる。層中より縄文土器、弥生土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

今回の調査区内では確認されなかったが、西側に隣接して実施された宮城県文化財保護課による調査では、本層下面で弥生時代中期中葉桝形式期の水田跡が検出されている(高橋ほか　1994)。水田跡は大畦畔と小畦畔によって区画され、水路を伴っている。検出された水田区画は部分的なものを含め54区画であり、東西に長い方形を基調とする。面積は最小9.3m²、最大49.5m²であるが15～25m²のものが最も多く、平均22.3m²である。

第Ⅴｃ層　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土。弥生時代中期中葉桝形式期の遺物包含層である。大きく分けて調査区の東半中央部と西端の 2 箇所にみられ、層厚は東側が約 8 cm、西側が約10cm である。層中より縄文土器、弥生土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

第Ⅵ層　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質粘土。自然堆積層であり、最終的な遺構確認面である。検出された各遺構の精査終了後、より古い時期の生活痕跡の有無を確認するため、深掘トレンチを 6 区設定し、それぞれ約1～1.5 m の深さまで掘り下げを行った。しかし、より古い生活痕跡は検出されず、層相が漸移的に変化し、砂質化することが確認されたのみである。層の上面で弥生時代中期中葉桝形式期の土坑、性格不明遺構、ピット、自然流路跡、縄文時代後期中葉宝ヶ峯式期の竪穴住居跡などが検出されている。また、県文化財保護課の調査区では弥生時代中期中葉桝形式期の建物跡、土器埋設遺構、土坑などが確認されている。

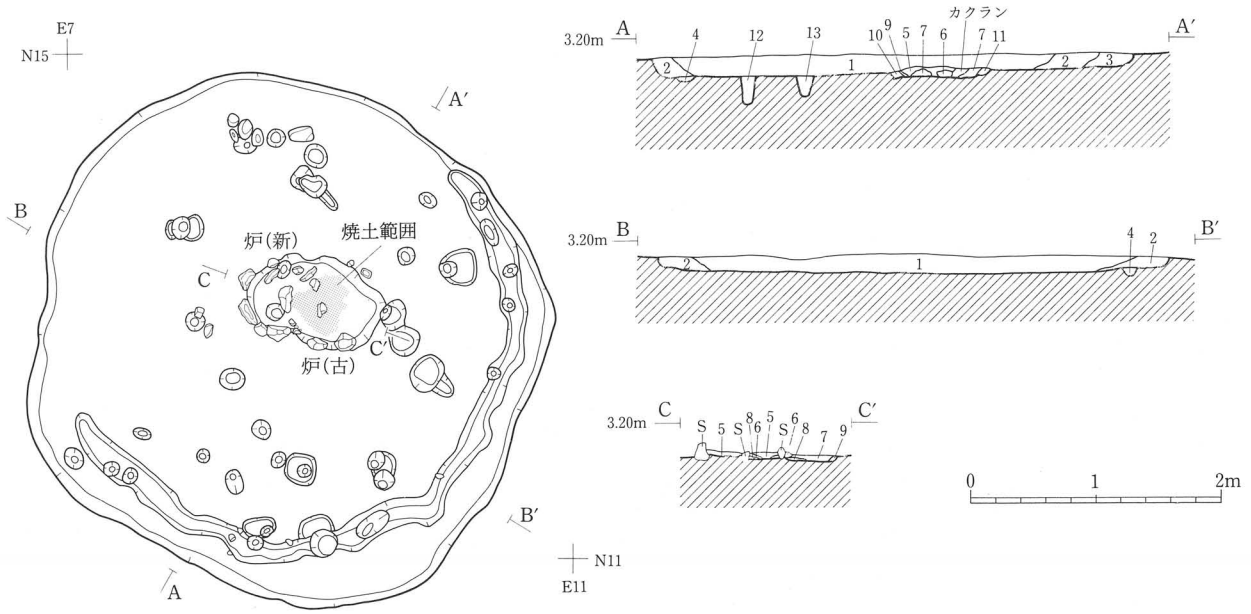
# 第５章　検出遺構と出土遺物

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、第Ⅵ層上面で竪穴住居跡が１軒検出されている。

SI１竪穴住居跡　調査区西部Ｅ７～11N11～15区で検出された竪穴住居跡である（第14図）。長軸4m32cm、短軸3m93cmの不整円形で、深さは6.5～16cmである。壁は床面から緩やかな角度で立ち上がり、床面はほぼ平坦である。ピットは25個検出できたが、柱穴として認定できるものはない。石囲炉は住居跡中央部より若干北寄りに検出された。作り直されており、古い炉の位置から西に少しずらして新しい炉を構築している。新しい炉の規模は径70cm程の円形である。川原石を用いて構築し、炉内は深さ6cmのくぼみで、多量の焼土が堆積していた。古い炉の川原石はほとんど抜き取られているが、同様の規模・形態であたと推定される。周溝は南東半部のみで西北半部では検出されなかった。幅12～24cm、深さ３～13.5cm、断面形はＵ字形を呈する。なお、周溝は南東部では壁直下から検出されたが、その他の箇所では壁から少し離れた位置にあり、この住居跡は改築が行われた可能性がある。堆積土は竪穴部が３層、石囲炉が４層、周溝が１層に分けられた（自然堆積）。竪穴部の上・中層は褐灰色シルト、下層はにぶい黄褐色シルトで、各層でマンガン斑と酸化鉄を、上層で褐灰色シルトを小ブロック状に混入している。竪穴部の堆積状況は厚く上層が堆積し、壁際に中層が、下層は北側の壁際だけに堆積している。

床面と堆積土中より縄文土器、石器類が出土している。




第14図　SI1 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。10YR5/1 褐灰色シルトを小ブロック状に含む。 |
| 2 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 3 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 4 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。周溝堆積土。 |
| 5 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 黒褐色に近い色調。マンガン斑、炭化物を少量含む。 |
| 6 | 2.5YR3/3 暗赤褐色 | シルト | 焼土。炉堆積土。 |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、焼土粒を含む。炉堆積土。 |
| 8 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | 焼土粒を含む。炉堆積土。 |
| 9 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 灰黄褐色に近い色調。マンガン斑、焼土粒を含む。炉堆積土。 |
| 10 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | マンガン斑を含む。炉石抜取。 |
| 11 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑を含む。炉石抜取。 |

第14図　土層註記

［縄文土器］

縄文土器は７点を図示した（第３分冊第１図１～７）。１（床面出土）は深鉢で口縁は大きく波状を呈する。口縁下に５本の平行沈線がめぐり、縦方向の蛇行沈線を配している。蛇行沈線は３本確認できた。２・３（層中出土）は平縁で外面に横方向のミガキ調整が施されている。４（層中出土）は深鉢で口縁部は無文で胴部に櫛歯状条線が斜め方向に施文されている。５（層中出土）は外へ弱く傾きながら立ち上がり、口縁部上端は外へ傾く。４本の並行沈線、その下部に縄文を施文している。口縁部内面、口唇部にも沈線がめぐる。６（層中出土）は深鉢の胴部で縄文が施文されている。７（層中出土）は深鉢で胴下部に２本の沈線がめぐり、その上部に細い沈線を格子目状に配している。

［石器類］

石器類は、掻器、削器、石匙、剥片、礫石器、礫片である。第４分冊第207図および第208図に主な石器を図示した。

**第207図**１は堆積土層中から出土した横型の石匙であり、つまみ部は器体中央部に位置している。素材は表面の一部に自然面を残す、剥離面打面の珪質頁岩製の剥片である。素材剥片の打点はｂ面のつまみ部左側の肩部に残されている。器体の整形は、つまみ部を除き裏面から表面への細部調整によって行われている。刃部はつまみ部のある辺と相対する辺に作出されており、刃角は55～65度である。つまみ部はａ面の左側では表面側の後、裏面側へ施された加工によって得られた抉り部で形成され、右側では逆に裏面側の後、表面側の順の加工で形成されている。

第207図２と３は床面直上で出土した剥片石器である。

第207図２は末端がヒンジフラクチャーとなった剥片を素材とした削器である。両側縁のほかに打面側にも細部調整が施されており、それによって素材剥片の打面は失われている。細部調整によって形成された角度は、ａ面右側縁では50～65度、左側縁は70～85度、打面側では60～85度といずれもそれほど鋭角ではない。石材は珪化凝灰岩である。

第207図３は節理面と剥離面によって形成された稜上を加撃して得られた剥片を素材とした掻器である。素材は末端がヒンジフラクチャーとなった珪質頁岩製の剥片である。刃部は、素材剥片の表面である図のａ面側からｃ面側に向かって施された急角度の細部調整によって形成されており、刃角は75～80度である。ｂ面とｃ面には黒褐色の付着物が認められる。

第207図４～６および第208図１～３に示した礫石器もSI １竪穴住居跡の床面直上で出土している。

第207図４には表裏両面のほぼ中央にやや深い凹痕が認められ、ａ面の左側は火熱による黒変が観察される。石材は安山岩である。

第207図５は軟質の凝灰岩が用いられており、表裏両面に複数の深い凹痕がのこされており、ａ面で９ヶ所、ｂ面で５ヶ所確認されるが、ｂ面には大きな欠損部があることから、より多くの凹痕が存在したものと考えられる。

第207図６は頁岩の不整形な礫を素材としており、やや平坦な部分の中央部に敲打によるものと考えられる浅い凹痕が１ヶ所認められる。ａ面の右側面には火熱による大きなハジケがある。

**第208図**１は砂質凝灰岩が素材として用いられている。表面の風化が著しく、長軸の一端を欠損する。素材礫の形状はやや扁平でｂ面側がより平坦である。ａ面に11ヶ所、ｂ面に９ヶ所の凹痕が認められるが、その形状は大きく異なっており、ａ面側のほとんどが円形で深い凹痕であるのに対して、ｂ面側では深さの浅い、石器の長軸に対して右下がりの細長い凹痕となっている。

第208図２、３はデイサイトの礫を素材としており、ともに欠損部がある。一部焼けて、わずかに黒変しだ部位がある点も共通している。両者とも片面に磨痕が観察されるが、２の磨痕は片面のほぼ全面に及ぶのに対して、３では部分的である。

## 第２節　弥生時代の遺構と遺物

### １．第Ⅵ層上面検出遺構と出土遺物

第Ⅵ層上面から溝跡３条、土坑48基、性格不明遺構40基、ピット多数、自然流路跡２条、畦畔状遺構を検出した(第15図)。遺構は調査区全体から見つかっている。調査区中央部ではSR １自然流路跡とSR ２自然流路跡とSD19溝跡とが合流し、調査区の西部と東部とに遺構集中域が確認された(西部遺構群・東部遺構群)。

#### (1)　溝跡

SD19 溝跡　調査区西～中央部で検出された溝跡で、少し蛇行する(第15図)。規模は上端幅1m80cm～6m8cm、下端幅36cm～2m68cm、深さ26～78cm である。底面は少し凸凹があり、北西から南東に向かって低下している。Ｓ４付近より北で底面が二叉に分かれている。２本の溝の合流点か、溝の一部が瘤状に張り出したものかのどちらかであろうと考えられる。方向はＳ４付近より南ではＮ－11°－Ｗ、西では一方がＮ－53°－Ｗ、もう一方がＮ－７°－Ｗである。検出長は39m であるが、さらに調査区外の北西へ続くものと考えられる。断面形は皿形を呈しており、底面からの立ち上がりは緩やかな傾斜になっている(第30図)。堆積土は５層に分けられ、１層目は褐灰色のシルト質粘土、２層目は褐灰色の細砂、３層目は黒褐色の粘土、４層目は灰褐色の細砂、５層目は褐灰色の粘土である。3a 層目には細砂を、４層目には褐灰色の粘土をブロック状に、５層目には第Ⅵ層土をブロック状にそれぞれ混入している。

南東端でSR １・２自然流路跡に合流している。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、石器・石製品類が出土している。

**[縄文土器]**

縄文土器は11点を図示した(第３分冊第１図12～22)。12～20は深鉢あるいは鉢、21は壺、22は注口土器である(推定されるものも含む)。

12・16・17は口縁部に並行直線文を施し、沈線間にキザミ（12・17）や刺突（16）を連続施文したものである。胴部に縄文を施文している。12の口縁部は内傾する。口唇部にキザミを連続施文し、そのキザミ目から沈線が弧状に施される。並行沈線は３本である。補修孔がある。16の口縁部形態は小波状となる。並行沈線は４本で文様は浮彫風である。17の口縁部は内傾する。口唇部にキザミを連続施文し、そのキザミ目から沈線が弧状に施される。並行沈線は４本である。

14・22は沈線や刺突で羊歯状文を浮彫風に描いている。

13の文様は入組三叉文と思われ、浮彫風に仕上げてある。口唇部から口縁部上端にかけてキザミを間隔を置いて連続施文し、そのキザミ目から沈線が弧状に施される。

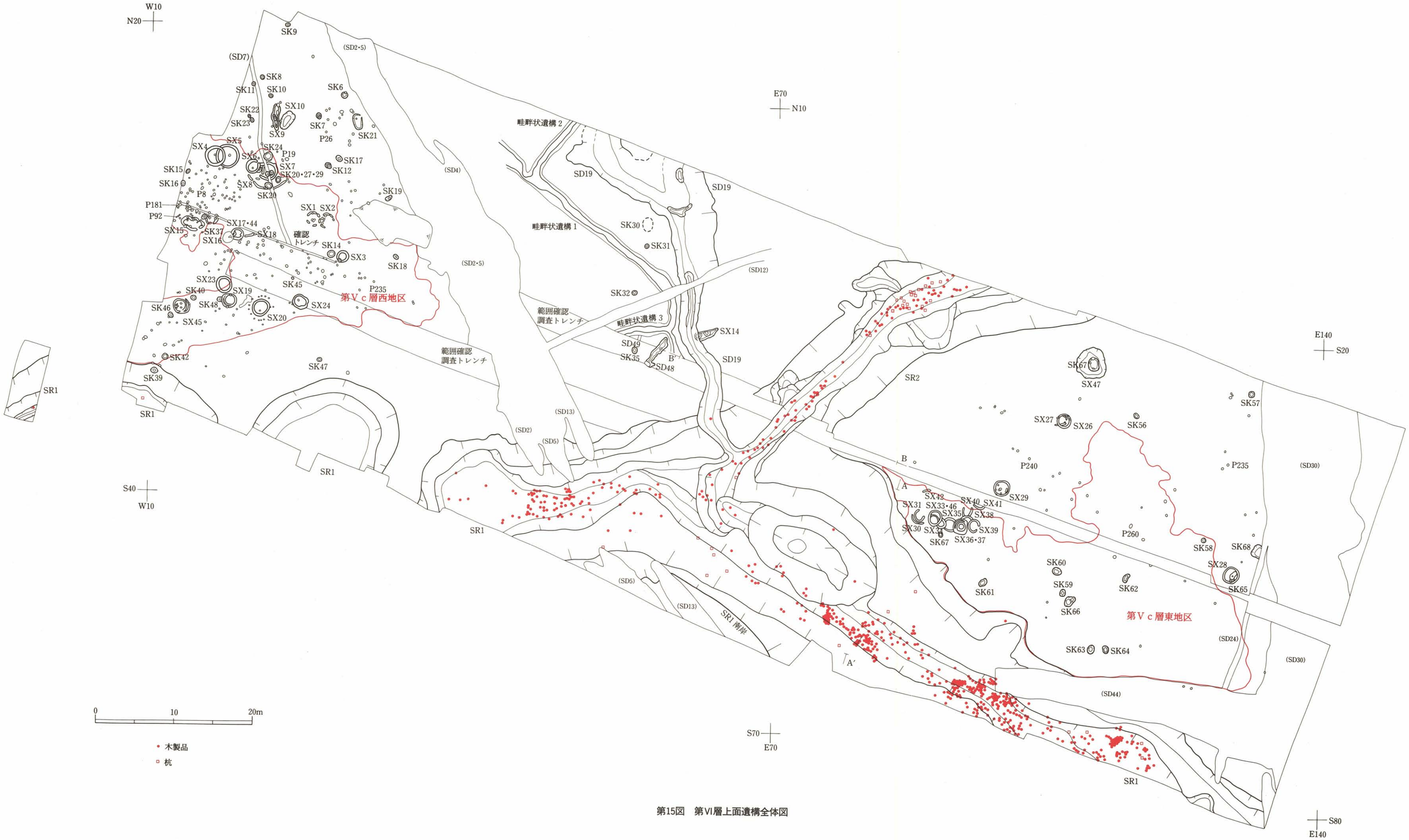
15は胴部上端に２本の太い並行沈線がめぐり、その下部に縄文を施文している。口縁部形態は小波状で、口縁部内面に段がある。

21の頸部は強く内傾し、口縁部は開く。頸部下端に削り出しと沈線により隆線文を作出している。胴部に縄文を施文している。

18～20は胴部上端でくびれ、口縁部は外反する。口縁部に横方向のミガキ調整が施され、胴部に縄文を施文している。18は胴部上端に段を持ち、口唇部にキザミを連続施文している。

**[弥生土器]**

弥生土器は２点を図示した（第３分冊第138図２・６）。２は甕で胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、




第15図　第Ⅵ層上面遺構全体図

口縁部は外反する。調整は口縁部にヨコナデ、内面は横方向のミガキ調整が施されている。口唇部と胴部に縄文を施文し、胴部上端に列点刺突文を施している。6は蓋で天井部は平坦で、木葉痕がついている。体部中央で強く屈曲する。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部と体部中央に並行沈線文を施し、体上部に縄文を施文している。口縁部内面に直線文を施している。

**[石器・石製品類]**

石器・石製品類は、石錐、石匙、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石斧、礫石器、砥石、礫片などである。第4分冊第218図の4から7に主な石器を図示した。

**第218図** 4は刃部を欠損し、基部が残存するいわゆる定角式の石斧であり、最大幅は刃部にあったものと考えられる。両主面は中央で膨らみをもっているが、側面はわずかに膨らむもののほぼ平坦である。研磨面下に敲打痕が観察される。刃部欠損後、転用されており、主面および側面に剥離痕が認められる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第218図5と6は石鏃である。

第218図5は細部調整が粗く尖端部の作出も行われていない。また、最大厚の位置が中央部から尖端寄りにあることから器体の厚みを減ずることに失敗した未成品と考えられる。

第218図6は成品の有茎石鏃である。用いられている石材は5が玉髄であり、6は珪化凝灰岩である。

第218図7は横型の石匙であり、つまみ部は器体中央部に位置している。素材は珪質頁岩製の剥片であり、素材の打点の位置はつまみ部付近と考えられるが、細部調整によって失われている。器体の整形はつまみ部を除き裏面から表面への細部調整によって行われている。刃角は40～50度である。つまみ部は両側とも裏面側の後、表面側に施された加工によって形成されている。

SD48 溝跡（調査時 SX13）　調査区中央部 E53～56S19～23 区で検出された直線状の溝跡である（第16図）。規模は上端幅33～102cm、下端幅16～62cm、深さ11～23cm である。底面はほぼ平坦である。方向は N－35°－E である。検出長は4m50cm であるが、さらに南西へ続くものと考えられる。断面形は逆台形を呈しており、底面から直線的に立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、上層は灰黄褐色の粘土質シルト、下層は暗灰黄色の粘土であり、上層には多量の焼土粒を混入している。

撹乱に切られている。

遺物は剥片が出土している。

SD49 溝跡（調査時 SK34）　調査区中央部 E52S18～20 区で検出された直線状の溝跡である（第16図）。規模は上端幅28～40cm、下端幅20～27cm、深さ2～7cm である。底面はほぼ平坦である。方向は N－16°－E である。検出長は1 m36cm であるが、さらに南へ続くものと考えられる。断面形は皿形を呈する。堆積土は暗灰黄色の粘土質シルトである。

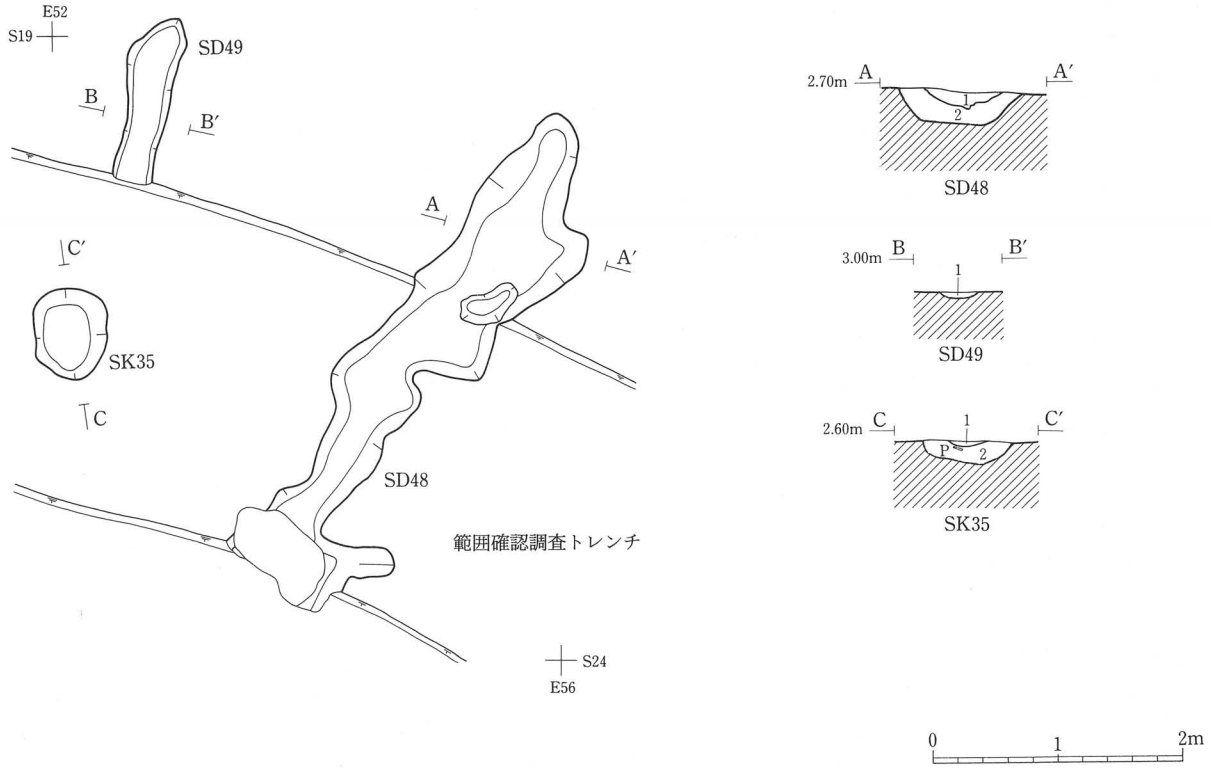
遺物は出土していない。

## (2) 土坑

SK 6 土坑　調査区西部 E14N12～13 区で検出された土坑である（第17図）。長径92cm、短径70cm の不整円形で、深さは6cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。

ピットに切られている。

堆積土中より弥生土器、剥片が出土している。




第16図　SD48・49 溝跡、SK35 土坑

SD48 溝跡

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物少量、焼土粒多量、酸化鉄少量、土器を含む。 |
| 2 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粘　土 | 炭化物、酸化鉄少量、土器を含む。 |

SD49 溝跡

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | 粘土質シルト | 酸化鉄多量、上部に焼土、炭化物少量含む。土器を含む。 |

SK35 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/6 褐色 | シ　ル　ト | 焼土、炭化物が多量、酸化鉄少量。 |
| 2 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粘　土 | 酸化鉄少量、土器含む。 |

第16図　土層註記

SK 7 土坑　調査区西部 E10～11N8～9 区で検出された土坑である（第17図）。長径72cm、短径59cm の不整円形である。南辺にピット状の落ち込みがあり、北側底面の深さは16cm で、落ち込みの深さは33cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられ、上層は黒褐色のシルト、下層は灰黄褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SK 8 土坑　調査区西部 E3～4N12～13 区で検出された土坑である（第17図）。長径56cm、短径49cm の不整円形で、深さは40cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色の粘土質シルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK 9 土坑　調査区西部 E6～7N20 区で検出された土坑である（第17図）。長径53cm、短径42cm の不整円形で、深さは55cm である。断面形は逆台形を呈し、底面は少し凹凸がある。堆積土は 3 層に分けられ、上層は灰黄褐色のシルト、中層はにぶい黄褐色のシルト質粘土、下層は灰黄褐色の粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK10 土坑　調査区西部 E4～5N11 区で検出された土坑である（第17図）。長径55cm、短径46cm の不整円形で、深さ

は48cmである。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK11土坑　調査区西部E2～3N12～13区で検出された土坑である(第17図)。長径43cm、短径40cmの不整円形で、深さは34cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられ、上層は黒褐色のシルト、中層は灰黄褐色のシルト、下層はにぶい黄褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK12土坑　調査区西部E12N2区で検出された土坑である(第17図)。長径74cm、短径60cmの不整円形で、深さは23cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。東半部の壁面は急激に立ち上がるのに対し、西半部は中位から緩やかになる。堆積土は3層に分けられ、いずれも灰黄褐色のシルトであるが、下層にいくにしたがって明度が高くなる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK13土坑　調査区西部E13～14S10区で検出された土坑である(第20図)。長径47cm、短径41cmの不整円形で、深さは24cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられ、上層はにぶい黄色のシルト、中層はにぶい黄褐色のシルト、下層は灰黄色のシルト質粘土であり、上層には黒褐色シルトをブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK14土坑　調査区西部E12～13S9区で検出された土坑である(第20図)。長軸84cm、短軸80cmの隅丸方形で、深さは22cmである。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器、大型板状石器片が出土している。

SK15土坑　調査区西部W6N1区で検出された土坑である(第17図)。長径59cm、短径44cmの不整楕円形で、深さは50cmである。断面形は歪んだ逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。北東半部の壁面は急激に立ち上がる(1箇所オーバーハング状になる)のに対し、南西半部は緩やかである。堆積土は2層に分けられ、上層は褐灰色のシルト、下層はにぶい黄橙色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK16土坑　調査区西部W6～7S0～1区で検出された土坑である(第17図)。長径63cm、短径51cmの不整楕円形で、深さは48cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられ、上層は灰黄褐色のシルト、中・下層は褐灰色のシルトである。上・中層は堆積状況から人為的堆積と思われる。下層には灰黄色のシルトを混入している。

堆積土中より弥生土器、石器類が出土している。

**[石器類]**

石器類は、細部調整剥片、剥片、礫片である。細部調整剥片を第4分冊**第209図**2に図示した。b面を打面としてa面およびc面に平坦な細部調整が施されている。また、c面の長軸の一端からも同様な剥離が認められる。石材はチャートである。

SK17 土坑　調査区西部 E13～14N3 区で検出された土坑である（第17図）。長径80cm、短径55cm の不整楕円形で、深さは28cm である。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。東半部の壁面は急激に立ち上がるのに対し、西半部は緩やかである。堆積土は 3 層に分けられ、いずれも灰黄褐色のシルトであるが、中層は上層より少し明度が高い。上層に炭化物が混入している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK18 土坑　調査区西部 E21S9～10 区で検出された土坑である（第17図）。長径67cm、短径40cm の不整楕円形で、深さは26cm である。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に分けられ、上層は黒褐色のシルト、中・下層はにぶい黄褐色のシルトで、下層は中層より明度が少し高い。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK19 土坑　調査区西部 E19～20S1 区で検出された土坑である（第18図）。長径86cm、短径46cm の楕円形で、深さは24cm である。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。北東半部の壁面は急激に立ち上がるのに対し、南西半部は緩やかである。堆積土は 3 層に分けられ、いずれも灰黄褐色のシルトであるが、中・下層は上層より明度が少し高い。

［縄文土器］

堆積土中より縄文土器が 1 点出土し、図示した（第 3 分冊第 2 図 1）。弧状連結文や並行直線文を描き、瘤状小突起で充塡している。

SK20 土坑　調査区西部 E4～5S0～1 区で検出された土坑である（第21図）。長径98cm 以上、短径89cm 以上の不整円形で、深さは49cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 6 層に分けられ、1 層目は黒褐色のシルト、2・3 層目は灰黄褐色のシルト、4 層目は暗褐色のシルト、5 層目は灰黄褐色の粘土質シルト、6 層目は褐灰色の粘土質シルトである。2～6 層には第Ⅵ層土を斑状またはブロック状に混入している。

SX 8 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、石器が出土している。

［石器］

石器は、ピエス・エスキーエ、大型板状石器、剝片である。第 4 分冊第209図の 3 と11に主な石器を図示した。

**第209図** 3 は珪化凝灰岩の剝片を素材としており、長軸と短軸の両端にツブレ状の剝離が認められるピエス・エスキーエである。a 面の左側縁の一部に、長軸方向の擦痕をわずかに伴う研磨痕が確認される。研磨痕は剝離面よりも新しく、転用されたものと考えられる。

第209図11は板状節理を有する安山岩を石材とする大型板状石器である。刃部の表裏両面には肉眼でも明瞭な光沢が観察される。光沢は刃縁にみられる剝離面の大部分を覆っていることから、使用によって刃こぼれが生じても、さらに使い続けられたものと考えられる。

SK21 土坑　調査区西部 E15～16N7～9 区で検出された土坑である（第17図）。長軸195cm、短軸114cm の隅丸長方形で、深さは6cm である。北東角の壁面は削平により確認できなかった。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられ、上層はにぶい黄褐色のシルト、下層は黄褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SK22 土坑　調査区西部Ｅ２ N8～9 区で検出された土坑である（第17図）。長径45cm、短径35cm の楕円形で、深さは71cm である。断面形はＵ字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に分けられ、１・２層は黒褐色のシルト、３層は灰黄褐色の粘土、４層は灰黄褐色のシルト、５層は灰黄色の粘土質シルトである。下層にいくにしたがって粘性は強くなる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK23 土坑　調査区西部 E2N8 区で検出された土坑である（第17図）。長軸52cm、短軸45cm の隅丸長方形で、深さは47cm である。断面形は逆台形を呈し、底面は少し凹凸がある。堆積土は３層に分けられ、上層は黒褐色のシルト、中層は灰黄褐色のシルト、下層は灰黄褐色の粘土質シルトである。下層にいくにしたがって粘性は強くなる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK24 土坑　調査区西部 E4～5N3～4 区で検出された土坑である（第21図）。長軸119cm 以上、短軸105cm の不整形で、深さは50cm である。断面形は開いたＵ字形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西から東へ向かって低下している。

SD ７溝跡に切られている。

遺物は出土していない。

SK26 土坑　調査区西部 E5～6S0～N1 区で検出された土坑である（第21図）。長径75cm、短径67cm の不整円形で、深さは15cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK27 土坑　調査区西部 E4N1 区で検出された土坑である（第21図）。長軸55cm 以上、短軸52cm 以上の不整形で、深さは65cm である。断面形はＵ字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分けられ、どれも褐灰色で、上・下層はシルト、中層は粘土質シルトである。上・下層にはにぶい黄褐色シルトを混入している。

SD ７溝跡に切られ、SK27 土坑を切っている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK29 土坑　調査区西部 E5N1 区で検出された土坑である（第21図）。長軸51cm 以上、短軸56cm の不整形で、深さは15cm である。断面形は逆台形を呈すると思われ、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

SD ７溝跡・SK27 土坑に切られている。

遺物は出土していない。

SK30 土坑　調査区中央部 E53S5 区で検出された土坑で（第18図）、深掘りトレンチによる調査で見つかったため東半は掘り下げていない。長径164cm、短径推定135cm の楕円形と思われ、深さは47cm である。断面形は歪んだ逆台形を呈し、底面は少し凸凹がある。堆積土は２層に分けられ、いずれも黄灰色の粘土である。上層は土器片が多く混入している。

堆積土中より弥生土器、礫片が出土している。

SK31 土坑　調査区中央部 E53S7～8 区で検出された土坑である（第18図）。直径45cm のほぼ円形で、深さは37cm で

ある。断面形はU字形を呈し、底面は少し凹凸がある。堆積土は褐灰色の粘土である。堆積土下部には炭化物を多く混入している。

遺物は出土していない。

SK32 土坑　調査区中央部 E51～52S13～14 区で検出された土坑である（第18図）。長軸67cm、短軸50cm の不整形で、深さは8cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰黄色の粘土である。

堆積土中より礫石器、礫片が出土している。

［石器］

礫石器を第 4 分冊第209図10に図示した。礫の片面にのみ磨痕が認められるが、磨痕は全体には広がらず長軸方向の片側に限られている。全体の 4 分の 1 ほどを欠損する。使用されている石材はデイサイトである。

SK35 土坑　調査区中央部 E51～52S21 区で検出された土坑である（第16図）。長径74cm、短径58cm の楕円形で、深さは16cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられ、上層は褐色のシルトで多量の焼土・炭化物を含み、下層は暗灰黄色の粘土である。

遺物は出土していない。

SK37 土坑　調査区西部 W4S4～5 区で検出された土坑である（第20図）。長軸72cm、短軸63cm の不整形で、深さは46cm である。断面形はW字形を呈し、底面に 2 個のピット状落ち込みがある。堆積土は黒褐色のシルトである。

SX16 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、剝片が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は 1 点を図示した（第 3 分冊第 2 図 2）。 2 本からなる並行沈線文を施し、瘤状小突起で充塡している。

SK39 土坑　調査区西部 W10S24～25 区、SR 1 自然流路跡の北河岸斜面で検出された土坑である（第18図）。長軸75cm、短軸70cm の隅丸方形で、深さは9cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色の粘土質シルトである。堆積土下部には炭化物を混入している。

SR 1 自然流路跡に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK40 土坑　調査区西部 W5S15 区で検出された土坑である（第23図）。径70cm の不整円形で、深さは 8 cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面に 1 個のピットがある。堆積土は黒褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK42 土坑　調査区西部 W8～9S22～23 区で検出された土坑である（第18図）。直径70cm の不整円形で、深さは17cm である。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。にぶい黄橙色粘土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。剝片は石庖丁に用いられる結晶片岩を石材としている。

SK45 土坑　調査区西部 E7～8S12 区で検出された土坑である（第18図）。長軸35cm、短軸31cm の隅丸方形で、深さ

は6 cmである。断面形は皿形を呈し、底面に浅いくぼみがある。堆積土は灰白色の粘土で、粘土溜めの可能性がある。

遺物は出土していない。

SK46土坑　調査区西部W8S17区で検出された土坑である(第23図)。長径66cm、短径51cmの不整円形で、深さは14cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

1個のピットを切っている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK47土坑　調査区西部E11S23区で検出された土坑である(第18図)。長軸53cm、短軸48cmの隅丸方形で、深さは20cmである。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK48土坑　調査区西部W1～2S15区で検出された土坑である(第22図)。長径65cm以上、短径56cmの不整楕円形を呈すると思われ、深さは20cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰黄褐色の粘土である。

SX19性格不明遺構に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK56土坑　調査区東部E115～116S28～29区で検出された土坑である(第18図)。長径70cm、短径53cmの不整楕円形で、深さは7cmである。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層で、上層は黒褐色のシルト質粘土であり、下層は褐灰色のシルトである。

遺物は出土していない。

SK57土坑　調査区東部E130～131S25区で検出された土坑である(第18図)。直径73cmの不整円形で、深さは7cmである。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK58土坑　調査区東部E124～125S44区で検出された土坑である(第18図)。長軸64cm、短軸55cmの隅丸方形で、深さは10cmである。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK59土坑　調査区東部E106～107S51区で検出された土坑である(第19図)。長軸80cm、短軸61cmの不整方形で、深さは10cmである。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK60土坑　調査区東部E105～106S48～49区で検出された土坑である(第19図)。長径115cm、短径94cmの不整円形で、深さは6cmである。断面形は皿形を呈し、底面は少し凹凸がある。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK61 土坑　調査区東部 E96～97S49～50 区で検出された土坑である（第19図）。長軸104cm、短軸80cm の不整形で、深さは9cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒色の粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK62 土坑　調査区東部 E114～115S49 区で検出された土坑である（第18図）。長軸110cm、短軸52cm の不整形で、深さは10cm である。断面形は皿形を呈し、底面は凹凸がある。堆積土はにぶい黄褐色のシルトである。

堆積土中より細部調整剥片が出土している。

［石器］

細部調整剥片を第 4 分冊**第209図** 6 に図示した。素材は流紋岩製の剥片であるが、a 面の右側縁から打面にかけて折りとられている。末端に裏面から表面側への剥離が施されており、その角度は70～75度である。

SK63 土坑　調査区東部 E110～111S58～59 区で検出された土坑である（第19図）。長径107cm、短径90cm の不整円形で、深さは12cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。北半部の壁面は急激に立ち上がるのに対し、南半部は緩やかである。堆積土は灰黄褐色のシルトである。灰白色シルトを斑状に混入している。

堆積土中より弥生土器、石器が出土している。

［石器］

石器は、石斧、剥片、敲打具である。第 4 分冊第209図の 4 と 9 に主な石器を図示した。

**第209図** 4 は一部に自然面が残されている細部調整剥片である。a 面の左側縁の末端寄りにツブレ状の剥離が認められ、中央部には裏面側への細部調整が、打面寄りには表面側への細部調整が施されている。打面は剥離面打面である。また、a 面右側縁の末端寄りにも剥離が確認される。石材は流紋岩である。

第209図 9 は剥片を素材とする敲打具である。a 面右側縁から長端縁の一方にかけて顕著な敲打痕が認められる。敲打痕は b 面側にもおよんでいるが、a 面ほど顕著ではない。しかし、敲打による損傷と考えられる剥離痕が多く観察される。石材はデイサイトである。

SK64 土坑　調査区東部 E112～113S58～59 区で検出された土坑である（第19図）。長軸96cm、短軸80cm の不整形で、深さは22cm である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に分けられ、上・中層は黒褐色の粘土、下層は褐灰色の粘土である。中層には灰白色シルトをブロック状に、下層には灰白色シルトを斑状に混入している。

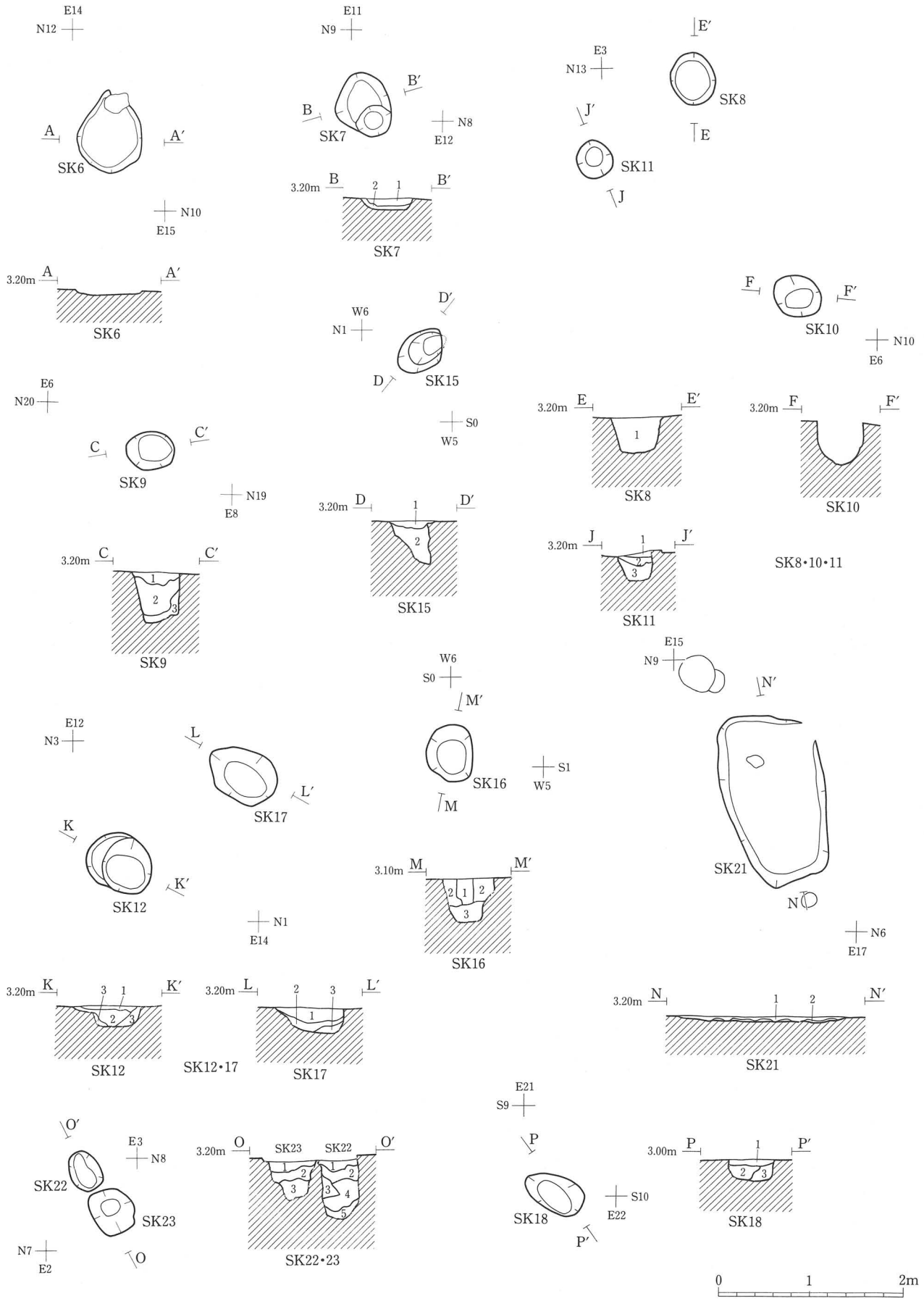
堆積土中より弥生土器が出土している。

SK65 土坑　調査区東部 E128S49 区で検出された土坑である（第19図）。長軸77cm 以上、短軸45cm 以上の不整形で、深さは17cm 以上である。断面形は逆台形を呈すると思われ、底面は少し凹凸がある。南壁に段がある。堆積土は灰黄褐色のシルトである。

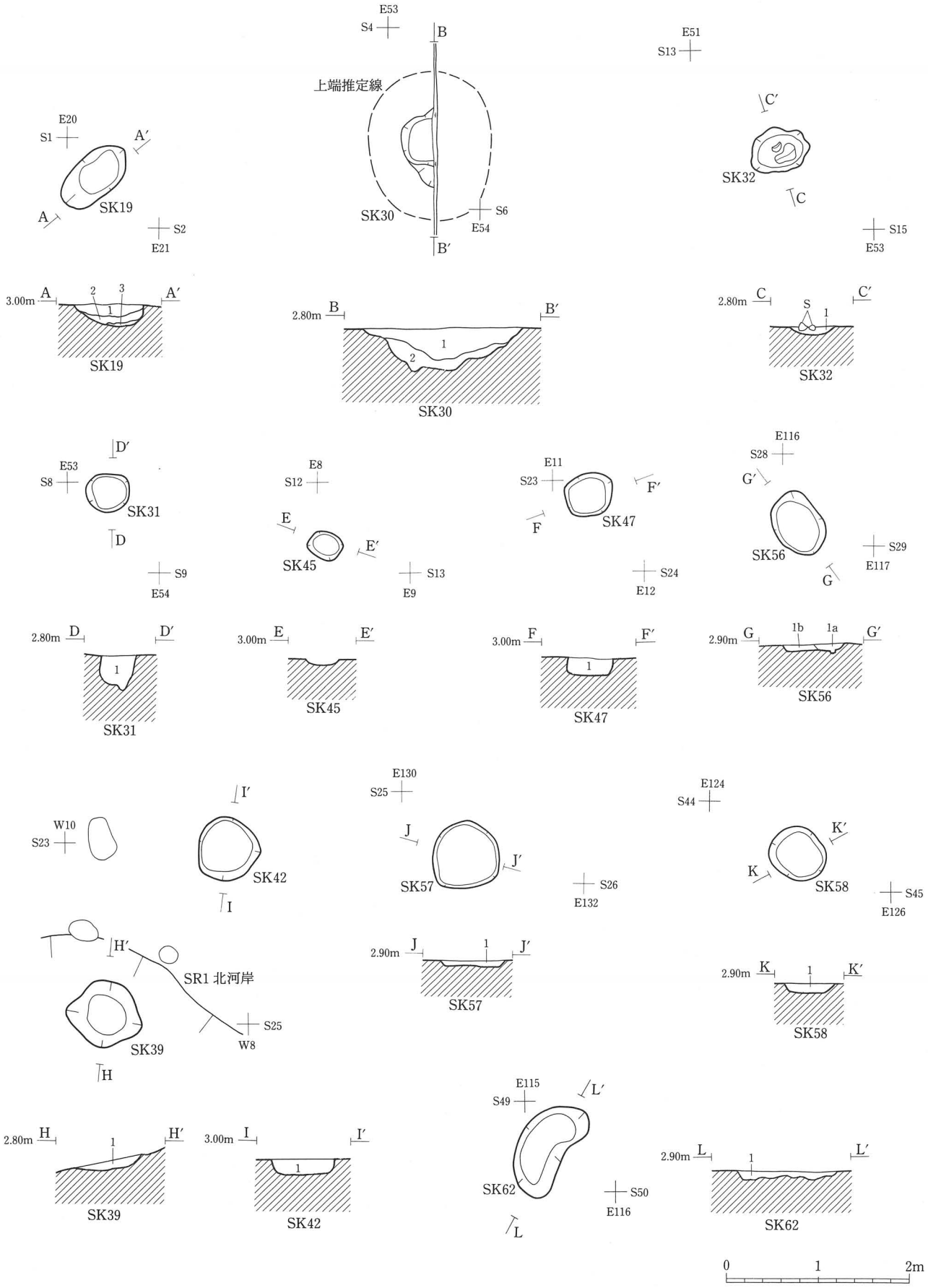
SX28 性格不明遺構に切られている。

遺物は出土していない。

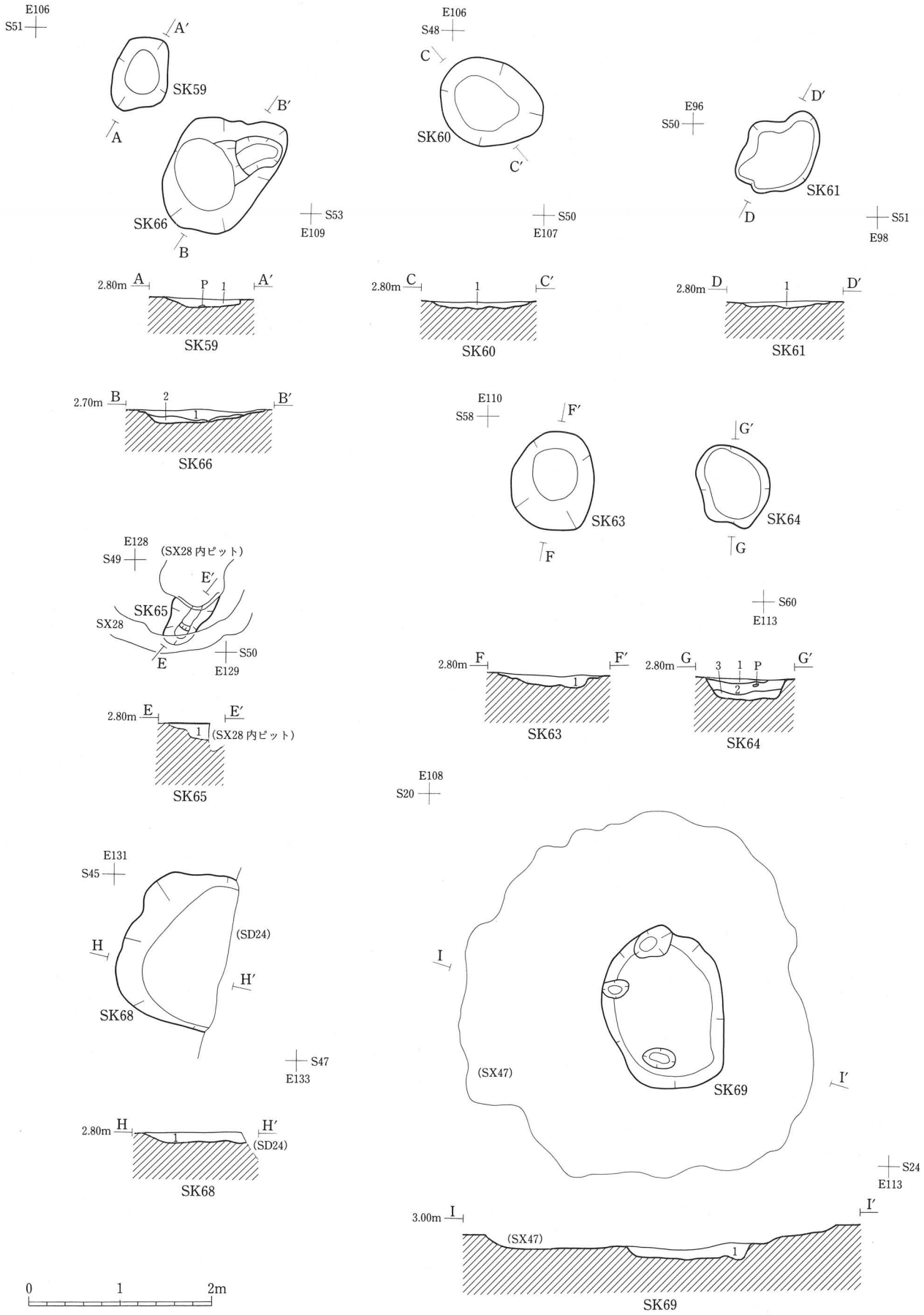
SK66 土坑　調査区東部 E107～108S52～53 区で検出された土坑である（第19図）。長軸151cm、短軸107cm の不整形で、深さは15cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。北東壁に段がある。堆積土は 2 層に分けられ、上層は褐灰色の粘土質シルト、下層は褐灰色の粘土である。下層には灰白色粘土をブロック状に混入している。




第17図　SK6～12・15～18・21～23 土坑




第18図　SK19・30～32・39・42・45・47・56～58・62 土坑




第19図　SK59～61・63～66・68・69 土坑

SK7 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | 炭化物少量、マンガン粒を多く含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物、マンガン粒を含むが第1層より少ない。 |

SK8 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 酸化鉄粒、マンガン粒を含む。 |

SK9 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物、マンガン粒を含む。第VI層を斑状に含む。 |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化物、マンガン粒を含む。第VI層の大きなブロックを上部に含む。 |
| 3 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土 | マンガン粒をごく少量含む。 |

SK11 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | 炭化物、マンガンを含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物を含む。1層より灰色がつよい。 |
| 3 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 | シルト | 2層、黒色土をブロックに含む。炭化物、マンガン粒を含む。 |

SK12 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑を含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑を含む。1層に比べ明るい。褐灰色に近い色調。 |
| 3 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑を含む。1層に比べ明るい。 |

SK15 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。 |
| 2 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。炭化物少量含む。褐灰色シルトを含む。 |

SK16 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR6/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物少量、黄褐色粒子、マンガン斑を含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 炭化物、マンガン斑を含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 灰黄色シルトを小ブロック状に含む。 |

SK17 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物を含む。 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 酸化鉄斑を含む。 |

SK18 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | マンガン斑を少量含む。 |
| 2 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | シルト | マンガン粒を含む。 |
| 3 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 | シルト | 2層土がブロック状に含む。 |

SK19 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 3 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を少量含む。 |

SK21 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト | マンガン粒を多量に含む。 |
| 2 | 10YR5/6 黄褐色 | シルト | 酸化鉄斑を多量に含む。 |

SK22 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン、炭化物を含む。 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | マンガン、炭化物を含む。第VI層の大きなブロックを含む。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | マンガン、炭化物を含む。第VI層の小ブロックを含む。 |
| 4 | 10YR6/2 灰黄褐色 | シルト | 酸化鉄を含む。第VI層の大きなブロックを含む。 |
| 5 | 2.5Y6/2 灰黄色 | 粘土質シルト | 酸化鉄を含む。 |

SK23 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン、炭化物を含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン、炭化物を含む。第VI層のブロックを多く含む。 |
| 3 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | マンガン、炭化物を含む。第VI層のブロックを斑状に含む。 |

SK30 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y5/1 黄灰色 | 粘土 | 酸化鉄多量、マンガン粒少量、土器片比較的多い、炭化物微量を含む。 |
| 2 | 2.5Y5/1 黄灰色 | 粘土 | 酸化鉄少量、炭化物微量を含む。 |

SK31 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 酸化鉄、マンガン粒を多量含む(炭化物下部に多い)。 |

SK32 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y6/2 灰黄色 | 粘土 | 酸化鉄多量、炭化物少量を含む。大型の礫を含む。 |

SK39 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄を含む。下層に炭化物を含む。 |

SK42 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。酸化鉄を含む。 |

SK47 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | マンガン、酸化鉄を含む。 |

SK56 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | マンガン斑を含む。 |
| 1b | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。黒褐色シルトのブロックを含む。 |

SK57 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | マンガンを含む。 |

SK58 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | マンガン斑を含む。 |

SK59 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | マンガン、土器片を含む。 |

SK60 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | マンガン、炭化物を含む。 |

SK61 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 灰白色粘土をブロック状に含む。炭化物を少量含む。 |

SK62 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト | マンガンを含む。炭化物を少量含む。 |

SK63 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガンを含む。灰白色シルトが斑状に含む。 |

SK64 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土 | マンガンを含む。 |
| 2 | 7.5YR3/2 黒褐色 | 粘土 | マンガン、炭化物、灰白色シルトをブロック状に含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | マンガンを含む。灰白色シルトを斑状に含む。 |

SK65 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR6/2 灰黄褐色 | シルト | マンガンを含む。 |

SK66 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | マンガン、酸化鉄を含む。 |
| 2 | 10YR6/1 褐灰色 | 粘土 | マンガン、酸化鉄、灰白色粘土ブロックを含む。 |

SK68 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。下層は少量の砂を含む。 |

SK69 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 酸化鉄、炭化物を多量、小礫を含む。SX47の5層土をブロック状に含む。 |

第17～19図　土層註記

堆積土中より弥生土器、石器が出土している。

**[石器]**

石器は、石鏃、剥片である。石鏃を第4分冊**第209図**1に図示した。剥離がまだ粗く、厚みもあり、側縁や茎部の形態も整えられていないことから未成品と考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

SK67 土坑　調査区東部 E91S43～44 区で検出された土坑である(第24図)。1辺57cm の隅丸正方形、深さは30cm である。断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分けられ、上層は黒褐色の粘土質シルト、下層は黄灰色の粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SK68 土坑　調査区東部 E131～132S45～46 区で検出された土坑である（第19図）。長軸170cm 以上、短軸118cm 以上の方形を呈すると思われ、深さは12cm 以上である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。堆積土下部で少量の砂を混入している。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SK69 土坑　調査区東部 E109～111S21～23 区、SX47 性格不明遺構の 4 層除去後に検出された土坑である（第19図）。長径178cm、短径132m の楕円形で、深さは14cm である。断面形は逆台形を呈する。底面に凹凸はなく、3 個のピットが検出された。堆積土は黒褐色の粘土である。堆積土中に酸化鉄・炭化物を多量に、また、SX47 の 5 層土をブロック状に混入している。

SX47 性格不明遺構の 5 層を切っている。

遺物は出土していない。

### (3)　性格不明遺構

SX 1 性格不明遺構　調査区西部 E9～11S4～5 区で検出された性格不明遺構である（第20図）。径176cm の円形で、上端幅13～25cm、下端幅 7 ～16cm、深さ 2 ～5cm の溝が途切れながらめぐる。溝の断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

ピットに切られている。SX 2 性格不明遺構と接しているが、新旧関係は不明である。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX 2 性格不明遺構　調査区西部 E11～13S4～6 区で検出された性格不明遺構である（第20図）。径190cm の円形で、上端幅16～21cm、下端幅 8 ～12cm、深さ 3 ～6cm の溝が途切れながらめぐる。溝は南東部で大きく途切れる。溝の断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

SX 1 性格不明遺構と接しているが、新旧関係は不明である。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、剝片が出土している。

**［縄文土器］**

縄文土器は 2 点を図示した（第 3 分冊第 2 図 3・4）。3 は壺と思われる。横方向の並行沈線文を施し、瘤状小突起を貼付している。4 は深鉢で胴上部から口唇部へ向かって徐々に肥厚していく。外面は横方向のナデ調整が施されている。

SX 3 性格不明遺構　調査区西部 E13～15S9～10 区で検出された性格不明遺構である（第20図）。長径154cm、短径146cm の不整円形で、上端幅15～23cm、下端幅 4 ～9cm、深さ16～25cm の溝がめぐる。溝の断面形はU字形を呈する。底面は少し凹凸があり、北から南に向かって少し低下している。堆積土は灰黄褐色のシルトである。

SK13 土坑に切られている。

堆積土中より弥生土器、剝片、礫片が出土している。

SX 4 性格不明遺構　調査区西部 W1～4N2～4 区で検出された性格不明遺構である（第21図）。径265cm の円形で、上端幅18～38cm、下端幅 5 ～17cm、深さ16～24cm の溝がめぐる。溝の断面形はU字形を呈し、底面は凸凹がある。堆積土は褐灰色のシルトである。

SX 5 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、土製品、剝片、礫片が出土している。剝片の石材は石庖丁によく用いられる粘板岩であり、石庖丁製作時のものと考えられる。

SX 5 性格不明遺構　調査区西部 E1～W2N2～5 区で検出された性格不明遺構である(第21図)。径290cm の円形で、上端幅16～28cm、下端幅 7 ～13cm、深さ 8 ～22cm の溝がめぐる。溝の断面形はU字形を呈し、底面は凹凸がある。堆積土は褐灰色のシルトである。

SX 4 性格不明遺構に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX 6 性格不明遺構　調査区西部 E2～3N1～3 区で検出された性格不明遺構である（第21図)。径175cm の円形で、上端幅17～35cm、下端幅 6 ～15cm、深さ10～19cm の溝がめぐる。溝は北東部で途切れる。溝の断面形はU字形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北東～南西に向かってわずかに低下する。堆積土は褐灰色のシルトである。

SX 7 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、礫石器が出土している。

SX 7 性格不明遺構　調査区西部 E3～5S0～N3 区で検出された性格不明遺構である(第21図)。長軸271cm、短軸230 cm のC字形で、上端幅17～36cm、下端幅 6 ～20cm、深さ 6 ～14cm の溝がめぐる。溝は西部で大きく途切れる。溝の断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

SD 7 溝跡、SX 6 性格不明遺構に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX 8 性格不明遺構　調査区西部 E2～7S1～N1 区で検出された性格不明遺構である(第21図)。上端幅15～26cm、下端幅 8 ～15cm、深さ 4 ～12cm の溝が弧状に検出された。弦の長さは480cm である。溝は西部で途切れる。溝の断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

SD 7 溝跡、SK20 土坑、 1 個のピットに切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX 9 性格不明遺構　調査区西部 E5～6N7～10 区で検出された性格不明遺構である(第20図)。長軸340cm、短軸102 cm の不整形で、深さは17cm である。断面形は逆台形を呈し、底面には凹凸があり、 3 個のピットが検出された。堆積土は褐灰色のシルトである。

4 個のピットに切られている。

堆積土中より弥生土器、石庖丁が出土している。

［石器］

石庖丁を第 4 分冊**第210図** 1 に図示した。成品の一端が残された破損品である。研磨面下に器体調整時の敲打痕が観察される。紐孔は、 b 面側では敲打による窪み部形成を伴わない直接の回転穿孔のように観察されるが、 a 面では紐孔の周囲に凹凸が認められ敲打によって窪み部が形成された可能性も考えられ、残存部分がわずかであるためそのいずれとも判断できない。光沢は表裏両面に観察され、 b 面側で顕著である。折れ面と背部を分ける角に敲打痕が認められ、敲打具へ転用されたものと考えられる。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

SX10 性格不明遺構　調査区西部 E6～8N7～9 区で検出された性格不明遺構である（第20図)。長径242cm、短径145

cmの不整楕円形で、深さは40cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分けられ、1層目はにぶい黄橙色のシルト、2層目は灰黄褐色のシルト、3層目は灰白色のシルト、4層目は褐灰色のシルトである。

2個のピットに切られている。

堆積土中より弥生土器、剥片、礫片が出土している。

SX14 性格不明遺構　調査区中央部E59～62S18～19区で検出された性格不明遺構である（第21図）。長軸313cm以上、短軸104cm以上の不整形で、深さは30cm以上である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、2箇所に土坑状の落ち込みがある。堆積土は2層に分けられ、上層はにぶい黄橙色の粘土、下層は灰黄色の粘土である。

SD19溝跡に切られている。

遺物は出土していない。

SX15 性格不明遺構　調査区西部W4～7S5～6区で検出された性格不明遺構である（第20図）。長径298cm、短径169cmの不整楕円形で、上端幅15～31cm、下端幅9～26cm、深さ3～7cmの溝が途切れながらめぐる。溝の断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。堆積土中に褐灰色の粘土をブロック状に混入している。

1個のピットに切られ、8個のピットを切っている。

堆積土中より弥生土器、剥片が出土している。

SX16 性格不明遺構　調査区西部W2～4S4～5区で検出された性格不明遺構である（第20図）。長径193cm、短径110cm以上の円形状になると思われ、上端幅16～44cm、下端幅7～23cm、深さ4～9cmの溝が途切れながらめぐる。溝の断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。

SK37土坑、1個のピットに切られ、1個のピットを切っている。

堆積土中より弥生土器、礫片が出土している。

SX17 性格不明遺構　調査区西部E0～1S6～7区で検出された性格不明遺構である（第22図）。長径163cm、短径151cmの不整円形で、上端幅19～40cm、下端幅11～30cm、深さ5～10cmの溝がめぐる。溝は東部内側で瘤状に張り出す。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中に灰黄褐色の粘土をブロック状に混入している。

1個のピット、1個の撹乱に切られ、SX44性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、石錐尖端部？、剥片が出土している。

SX18 性格不明遺構　調査区西部E1～3S7区で検出された性格不明遺構である（第22図）。上端幅15～25cm、下端幅10～19cm、深さ3～5cmの溝が弧状に検出された。弦の長さは1m45cmである。溝は北東へ続くと考えられる。溝の断面形は開いたU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中ににぶい黄橙色のシルトを混入している。

1個のピットに切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX19 性格不明遺構　調査区西部 E0～W1S14～16 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。径188cm の円形で、上端幅15～25cm、下端幅 6 ～17cm、深さ 9 ～14cm の溝がめぐる。溝は南西半部で 2 条になる。断面形はU字形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中に灰黄褐色の粘土をブロック状に混入している。

3 個のピットに切られ、SK48 土坑を切っている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX20 性格不明遺構　調査区西部 E3～5S15～17 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。長径223cm、短径203cm の不整円形で、上端幅16～25cm、下端幅 9 ～14cm、深さ 7 ～10cm の溝がめぐる。断面形はU字形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中に灰黄褐色の粘土を混入している。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX23 性格不明遺構　調査区西部 E0～W2S12～14 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。長径212cm、短径186cm の不整円形で、深さは4cm である。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面に上端幅17～24cm、下端幅10～17cm、深さ 4 ～9cm の溝がめぐる。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中ににぶい黄褐色の粘土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器、石器が出土している。

［石器］

石器は、細部調整剝片、剝片である。細部調整剝片のうちの 1 点を第 4 分冊**第225図** 7 に図示した。a 面の末端に自然面がわずかに残る黒色頁岩製の剝片を素材としている。打面側にツブレ状の剝離が認められ、裏面側にはやや深く入った剝離面がある。両側縁と末端には微細剝離痕が観察される。

SX24 性格不明遺構　調査区西部 E8～9S14～16 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。長径203cm、短径185cm の不整円形で、上端幅17～25cm、下端幅 8 ～16cm、深さ 8 ～16cm の溝がめぐる。溝は南部で瘤状に張り出した箇所がある。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。堆積土中に黒褐色の粘土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX26 性格不明遺構　調査区東部 E106～107S28～30 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。径185cm の不整円形で、上端幅13～26cm、下端幅 5 ～11cm、深さ 5 ～11cm の溝がめぐる。断面形はU字形を呈し、底面には凹凸がある。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

2 個のピットに切られている。SX27 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX27 性格不明遺構　調査区東部 E105～107S28～30 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。上端幅10～17cm、下端幅 5 ～9cm、深さ 3 ～5cm の溝がハ字形に検出された。南辺の長さは1m45cm である。溝の断面形は皿形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

SX26 性格不明遺構に切られている。

遺物は出土していない。

SX28 性格不明遺構　調査区東部 E127～129S47～49 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。長径217cm、短径203cm の不整円形で、上端幅10～25cm、下端幅 4 ～12cm、深さ 3 ～8cm の溝がめぐる。溝の断面形は開いたU字形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は黒褐色のシルトである。堆積土中に暗灰黄色の粘土をブロック状に混入している。なお、遺構内のやや東よりに柱穴を検出した。柱穴の掘り方は長軸116cm、短軸168cm の不整隅丸長方形で、柱痕跡は径17cm、深さは38cm である。掘り方の堆積土は褐灰色のシルトで、黄褐色の粘土をブロック状に混入している。柱痕跡は黒褐色のシルトである。

堆積土中より弥生土器、剥片が出土している。

SX29 性格不明遺構　調査区東部 E98～100S37～38 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。長径202cm、短径182cm の不整円形で、深さは8cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、4 個のピットと 2 個の落ち込みがある。堆積土は 2 層に分けられ、上層は黒褐色のシルト質粘土、下層は灰黄褐色のシルト質粘土である。下層には黒褐色の粘土をブロック状に混入している。南西寄りの落ち込みには多量の炭化物を混入している。

1 個のピットに切られている。

堆積土中より弥生土器、細部調整剥片、剥片、礫石器が出土している。

SX30 性格不明遺構　調査区東部 E87～89S41～42 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。上端幅14～20cm、下端幅 6 ～11cm、深さ 3 ～5cm の溝が弧状に検出された。弦の長さは180cm である。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黄灰色のシルト質粘土である。堆積土中には第VI層土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX31 性格不明遺構　調査区東部 E88～89S41～42 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長軸162cm、短軸135cm の C 字形で、上端幅12～20cm、下端幅 6 ～12cm、深さ 2 ～5cm の溝がめぐる。溝は北東部で大きく途切れる。溝の断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黄灰色のシルト質粘土である。堆積土中には第VI層土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX32 性格不明遺構　調査区東部 E92～93S39～41 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長径141cm、短径110cm の不整円形で、上端幅15～22cm、下端幅 6 ～11cm、深さ 2 ～5cm の溝がめぐる。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。堆積土中には黄灰色の粘土をブロック状に混入している。

堆積土中より弥生土器、剥片が出土している。

SX33 性格不明遺構　調査区東部 E89～91S41～43 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長径210cm、短径172cm の楕円形で、上端幅15～22cm、下端幅 6 ～11cm、深さ 7 ～14cm の溝がめぐる。断面形はU字形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

SX34・46 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、細部調整剥片が出土している。

SX34 性格不明遺構　調査区東部 E90～92S42～43 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長径142cm、短径110cm 以上の不整円形を呈すると思われ、上端幅13～25cm、下端幅 5 ～10cm、深さ 5 ～12cm の溝がめぐる。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

SX33 性格不明遺構に切られ、SX35 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX35 性格不明遺構　調査区東部，E91～93S42～43 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長径178cm、短径132cm 以上の不整円形を呈すると思われ、上端幅16～25cm、下端幅 6 ～12cm、深さ 7 ～13cm の溝がめぐる。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。堆積土中にはにぶい黄橙色の粘土をブロック状に混入している。

SX34・37 性格不明遺構に切られている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX36 性格不明遺構　調査区東部 E93～94S42～43 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。径125cm の円形で、上端幅18～33cm、下端幅 7 ～16cm、深さ 5 ～6cm の溝がめぐる。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。堆積土中にはにぶい黄橙色の粘土をブロック状に、層下部には砂を混入している。

SX37 性格不明遺構に切られている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX37 性格不明遺構　調査区東部 E93～94S42～44 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長径210cm、短径181cm の不整円形で、深さは 2 ～7cm である。断面形は皿形を呈し、底面には凹凸がある。底面の北西部に上端幅15～23cm、下端幅 5 ～10cm、深さ 4 ～14cm の溝がめぐる。溝の断面形はU字形を呈し、底面には凹凸がある。堆積土は 3 層に分けられ、上層は黒褐色のシルト質粘土、中・下層は褐灰色のシルト質粘土である。中層にはにぶい黄橙色の粘土をブロック状に混入している。下層にはにぶい黄橙色の粘土をブロック状に、層下部には砂を混入している。

SX35・36・38 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX38 性格不明遺構　調査区東部 E94～95S41～42 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。上端幅17～24cm、下端幅 6 ～14cm、深さ 2 ～7cm の溝が弧状に検出された。弦の長さは150cm である。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。堆積土中には黄灰色の粘土をブロック状に混入している。

SX37・39 性格不明遺構、 1 個のピットに切られ、SX40 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、礫片が出土している。

SX39 性格不明遺構　調査区東部 E95～96S42～43 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。長軸168cm、短軸140cm のC字形で、上端幅14～24cm、下端幅 5 ～16cm、深さ 2 ～5cm の溝がめぐる。溝は東部で途切れる。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

SX38 性格不明遺構、 1 個のピットを切っている。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SX40 性格不明遺構　調査区東部 E94～95S41～42 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。上端幅13～26cm、下端幅 5 ～8cm、深さ 3 ～5cm の溝がハ字形に検出された。西辺の長さは118cm、東辺の長さは121cm である。溝の断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

SX38 性格不明遺構に切られている。

遺物は出土していない。

SX41 性格不明遺構　調査区東部 E95～96S40 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。上端幅15～19cm、下端幅 6 ～13cm、深さ 5 ～10cm の溝が弧状に検出された。弦の長さは127cm である。溝は北東へ続くと考えられる。溝の断面形はU字形を呈し、底面には少し凹凸がある。堆積土は褐灰色のシルトである。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX42 性格不明遺構　調査区東部 E89～90S38 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。上端幅13～22cm、下端幅 6 ～11cm、深さ3cm の溝が弧状に検出された。弦の長さは120cm である。溝の断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SX44 性格不明遺構　調査区西部 E0S6～7 区で検出された性格不明遺構である（第22図）。上端幅20～25cm、下端幅 7 ～12cm、深さ 4 ～6cm の溝が L 字形に検出された。東辺の長さは70cm 以上、南辺の長さは85cm 以上である。溝の断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルトである。

SX17 性格不明遺構、 1 個の撹乱に切られている。

遺物は出土していない。

SX45 性格不明遺構　調査区西部 W5～7S15～17 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。長径210cm、短径192 cm の不整円形で、深さは5cm である。底面に上端幅12～26cm、下端幅 5 ～16cm、深さ 3 ～5cm の溝がめぐる。溝は東半部で 2 条になる。断面形は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐灰色のシルトである。堆積土中に灰黄褐色の粘土をブロック状に混入している。

1 個のピットに切られ、20個あまりのピットを切っている。

遺物は剝片が出土している。

SX46 性格不明遺構　調査区東部 E90～91S41～42 区で検出された性格不明遺構である（第24図）。径130cm の円形を呈すると思われ、上端幅13～28cm、下端幅 4 ～10cm、深さ11～15cm の溝がめぐる。断面形はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は暗灰黄色のシルト質粘土である。堆積土中には褐灰色の粘土をブロック状に混入している。

SX33 性格不明遺構に切られている。

遺物は出土していない。

SX47 性格不明遺構（調査時 SI 2）　調査区東部 E108～112S20～24 区で検出された性格不明遺構である（第23図）。径410cm の不整形で、深さは32cm である。断面形は皿形を呈し、底面には凹凸がある。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は 5 層に分けられ、1・2 層目は黒褐色の砂質シルト、3 層目は黒褐色の粘土質シルト、4 層目は淡黄色の粘土質シルト、5 層目は灰白色の粘土質シルトである。2 層目には細砂を多量に、3 層目には小礫と多量の炭化物、4 層目には暗褐色の粘土をブロック状に、5 層目には褐色のシルトをそれぞれ混入している。

4 層まで堆積した時点で SK69 土坑が掘り込まれている。

堆積土中より弥生土器、石器が出土している。

［弥生土器］

弥生土器は 1 点を図示した（第 3 分冊第138図 1）。2 層から出土した壺で、胴部の最大径は上部にある。頸部は直立し、屈曲して口縁部は外傾する。調整は口縁部にヨコナデ調整、頸部から胴上部は横方向のミガキ調整で、胴部下端に横方向のミガキ調整が施されている。内面は横方向のミガキ調整が施されている。底部に木葉痕がつき、ナデ調整を加えている。胴部に植物茎回転文が施文されている。

［石器］

石器は、石鏃、尖頭器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、剥片、石核、礫石器である。第 4 分冊第208図に主な石器を図示した。

第208図 4 から 7 は石鏃である。4 は形態が整えられておらず失敗品と考えられる。石材はデイサイト質凝灰岩である。5 は形態的には特に a 面左側で成品に近づいているものの、器体の中軸線に対して左右対称ではなく a 面右側の逆刺が小さい。また、尖端部も充分に作出されておらず、ほかの石鏃よりも厚みがあることから器体を薄く整形する作業に失敗した石鏃と考えられる。石材は黒曜岩である。6 は珪質頁岩製の石鏃であり、身部の側縁形態は両側縁とも直線的である。7 も珪質頁岩製の石鏃である。身部の側縁形態は 6 と同様に両側縁とも直線的であるが、茎は身部の中軸線上にはなく、a 面でわずかに右側に位置している。

第208図 8 は珪化凝灰岩製の尖頭器である。表裏両面の両側縁に細部調整を施し、素材剥片の末端に尖頭部を作出している。しかし、両側縁の形状も整えられておらず、尖端部付近がもっとも厚くなっていることから失敗品と考えられる。

第208図の 9 と10はピエス・エスキーエである。9 は打面側から表裏両面に細部調整が施されており、末端部にも主に表面側に細部調整が認められる。打面側からの細部調整はツブレ状を呈し、末端部の細部調整と相対する位置にあることから使用のあまり進行していないピエス・エスキーエと考えられる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第208図10は 2 ヶ一対のツブレ状の刃部を有し、表裏両面とも両極剥離によって形成された剥離面である。また縦断面形は凸レンズ状を呈しており、以上のようなピエス・エスキーエの特徴をもっともよく現している資料である。石材は流紋岩である。

第208図11は表面の右側縁から右側面に自然面を残す細部調整剥片である。a 面の左側縁に、表裏両面からの細部調整が施されており、調整部位の角度は70～85度である。石材は流紋岩である。

第208図12は流紋岩製の石核である。作業面は 3 面であり、b 面を最終的な作業面としている。残された剥離面から頻繁に打面転移が行われていたことが確認できる。

第208図13は扁平に割れた礫の、やや鋭角な端縁にのみ磨痕が確認される礫石器である。石材は珪質頁岩である。

第208図14は磨痕と敲打痕が確認される礫石器である。磨痕は a 面の中央部やや右側に偏って認められ、c 面の左側にも観察される。c 面の磨痕は帯状で長軸方向に延びている。b 面には明瞭な敲打痕が認められる。敲打によって平坦面が形成され、a 面側にはそれに伴う損傷の剥離面がみられる。さらに長軸の一端とそれに近い a 面左側面にも敲打痕があり、長軸の端部から c 面側にも敲打に伴う損傷の剥離面が確認される。石材はデイサイトである。

### (4) ピット

ピットは総計276確認され、主に西部遺構群域と東部遺構群域とから検出されている(第15図)。平面形は円形を基調とするが、歪んだものが多い。規模は径15～30cm、深さ10～20cm程度である。柱と思われる痕跡のあるものはわずかにあるが、掘立柱建物跡として組み合うようなものはない。ピットの堆積土は褐灰色の粘土質シルトや砂質シルト、黒褐色の粘土質シルト、黒色のシルトなどである。弥生土器は276のうち150のピットから出土している。

［石器］

第4分冊第210図の2～9にはピットから出土した主な石器を図示した。

**第210図**2はピット260の堆積土層中より出土した細部調整剥片である。素材剥片の打面側に細部調整を施しており、末端側は折れ面である。細部調整によって形成された角度は55～65度である。石材は黒曜岩である。

第210図3はピット240の堆積土層中より出土した石錐である。表裏両面への細部調整によって整形されており、素材剥片の剥離面はb面中央にわずかに残されているのみである。尖端を欠損しているが、基部と尖端部の境は明瞭ではない。基部の厚幅比は0.7であり、幅と厚さの差は少ない。石材は珪質頁岩が用いられている。

第210図4はピット26の堆積土層中より出土した石錐である。素材剥片の剥離面を基部の表裏両面に部分的に残している。基部と尖端部との境は不明瞭であるが、区別は可能である。尖端部は厚さに比べ幅の値が大きく、断面形は扁平な菱形を呈している。基部から尖端へ向かって徐々に細く作り出されており、尖端部のa面左側縁はa面ののちb面側に剥離を施し、右側縁はb面ののちa面側への剥離によって整形されている。石材はチャートである。

第210図5はピット181の堆積土層中より出土した石錐である。自然面打面の剥片を素材としており、a面の左側縁と尖端部にも部分的に自然面が残されている。尖端部と基部との境は明瞭であり、尖端部の断面形は、表裏両面の中央部に素材剥片の剥離面が残されていることから扁平な六角形を呈している。尖端部作出は、a面左側縁はa面ののちb面側へ、右側縁はb面ののちa面側へ細部調整を施して行われている。石材は珪質頁岩である。

6はピット8の堆積土層中より出土した石核である。b面とc面に自然面を残しているが、ほぼ全周で剥片剥離作業が行われている。用いられている石材は珪質頁岩である。

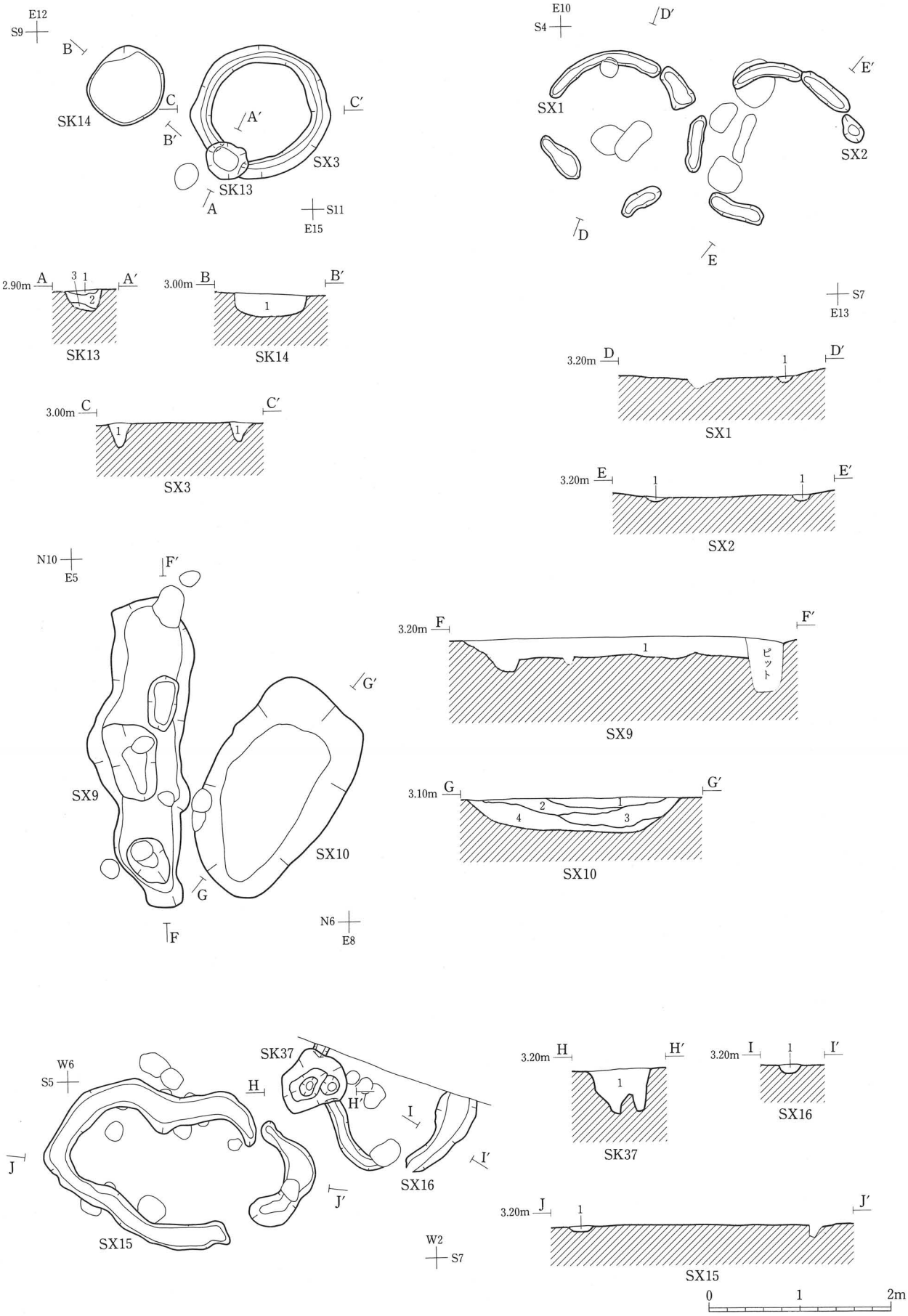
7はピット92の堆積土層中より出土した石核である。剥離面を打面としてa面とb面で剥片剥離作業を行っている。a面が最終的な作業面であり、ウットラ・パセの事故によって石核の底部が失われ、剥片剥離作業は終了している。石材はチャートである。

8はピット19の堆積土層中より出土した礫石器である。一端を欠損している。素材礫は四半球の形状を呈しており、外弯するa面左側と平坦に近いb面およびa面右側面に使用による凹痕が残されている。a面に確認される11ヶ所の凹痕はいずれも深いものであるが、それに比べて右側面の2ヶ所の凹痕は浅い凹みである。b面は短軸方向に緩く内弯しているが、ほぼ平坦である。凹痕は8ヶ所確認され、中央の4ヶ所は短軸方向に連続している。石材は軟質の凝灰岩が用いられている。

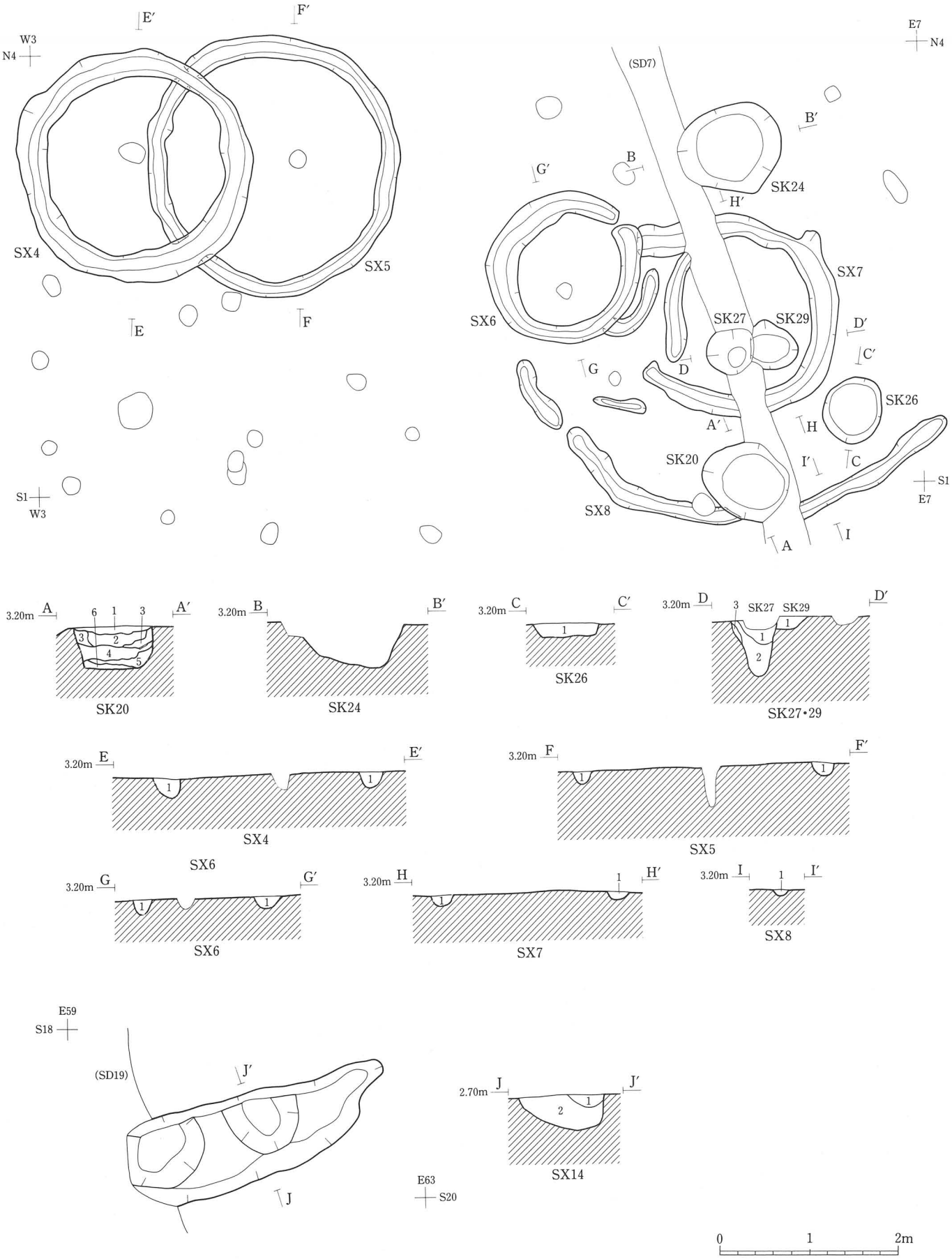
9はピット235の堆積土層中より出土した礫石器である。平面形が三角形を呈する厚みのある礫を素材とし、3ヶ所の角に敲打痕が残されている。a面とb面左側の敲打痕は著しく、損傷の剥離面を伴っている。石材は珪質頁岩である。

### (5) 自然流路跡

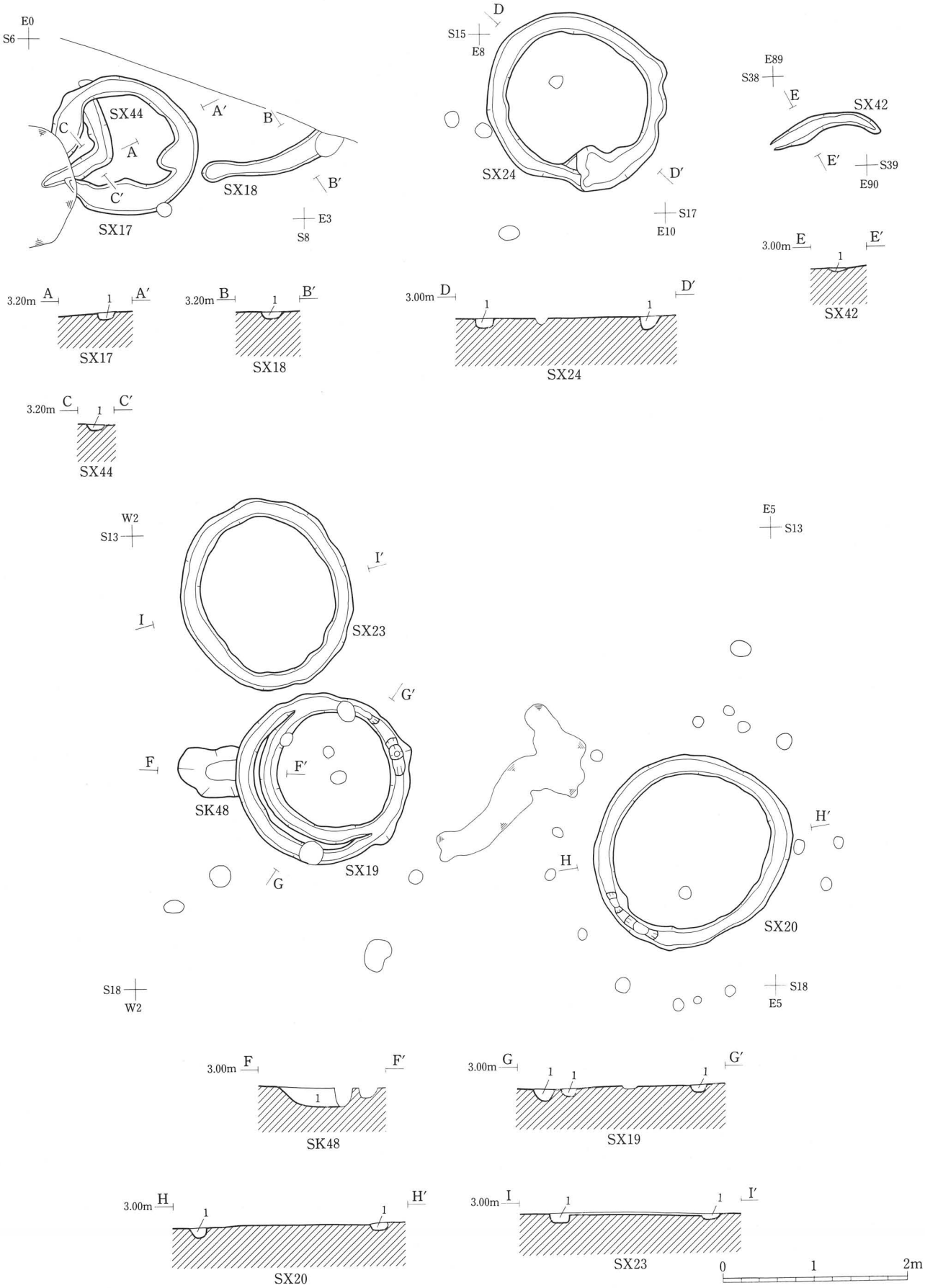
SR 1 自然流路跡(13層)　調査区西端から東端にかけて検出された自然流路跡である(第15図)。底面は西から東へ向かって低下している。流路跡は調査区の西部で大きく蛇行している。中央部に至ると蛇行は弱まり、SR 2 自然流路跡・SD19 溝跡と合流し、さらに最深部が形成されている。最深部は周辺の底面と比較すると約2 mほど深くなる。また、規模から本流路跡が本流で、SR 2 自然流路跡が支流という関係が推定される。検出長は170mであるが、さ



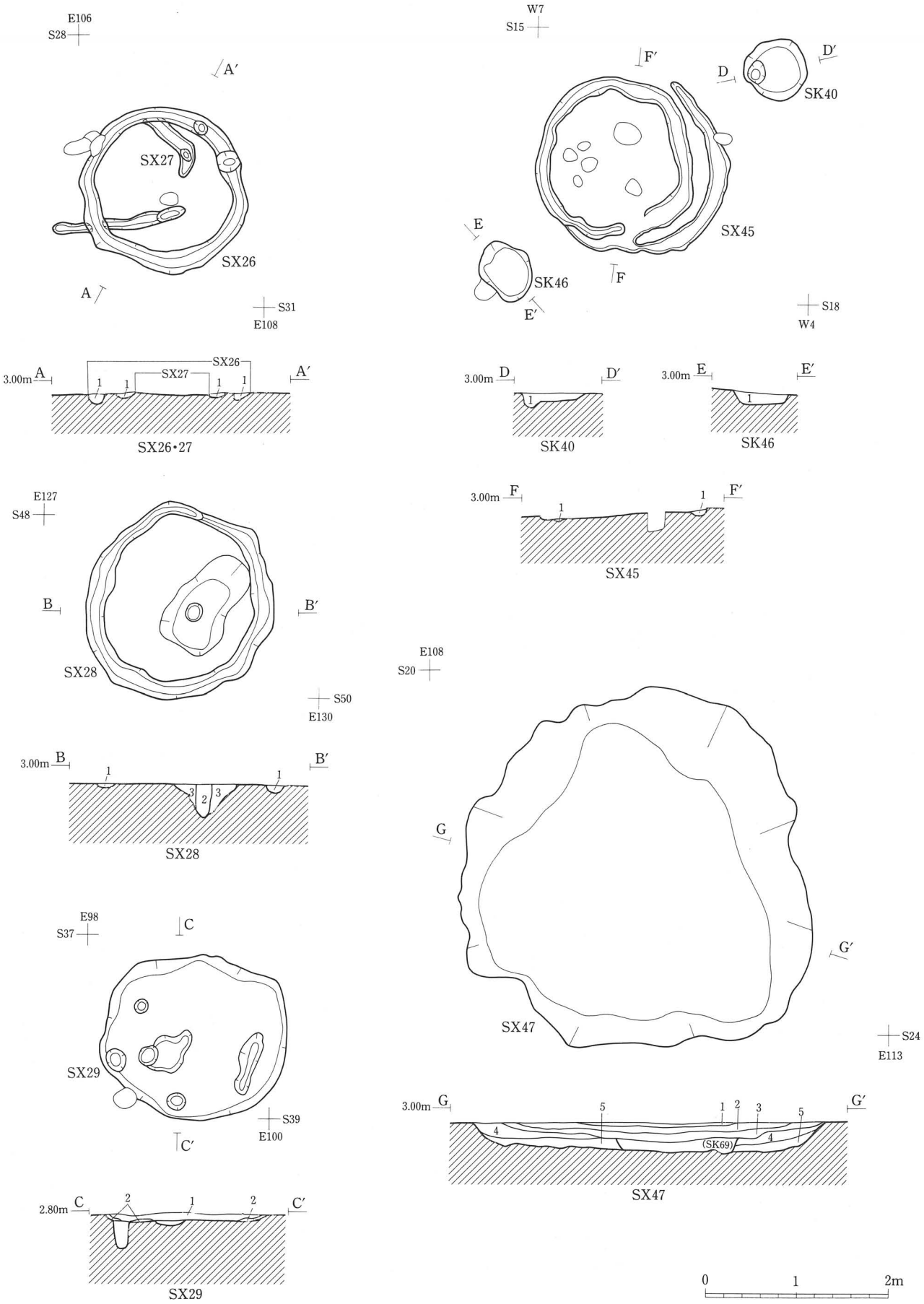

第20図　SK13・14・37 土坑、SX1～3・9・10・15・16 性格不明遺構



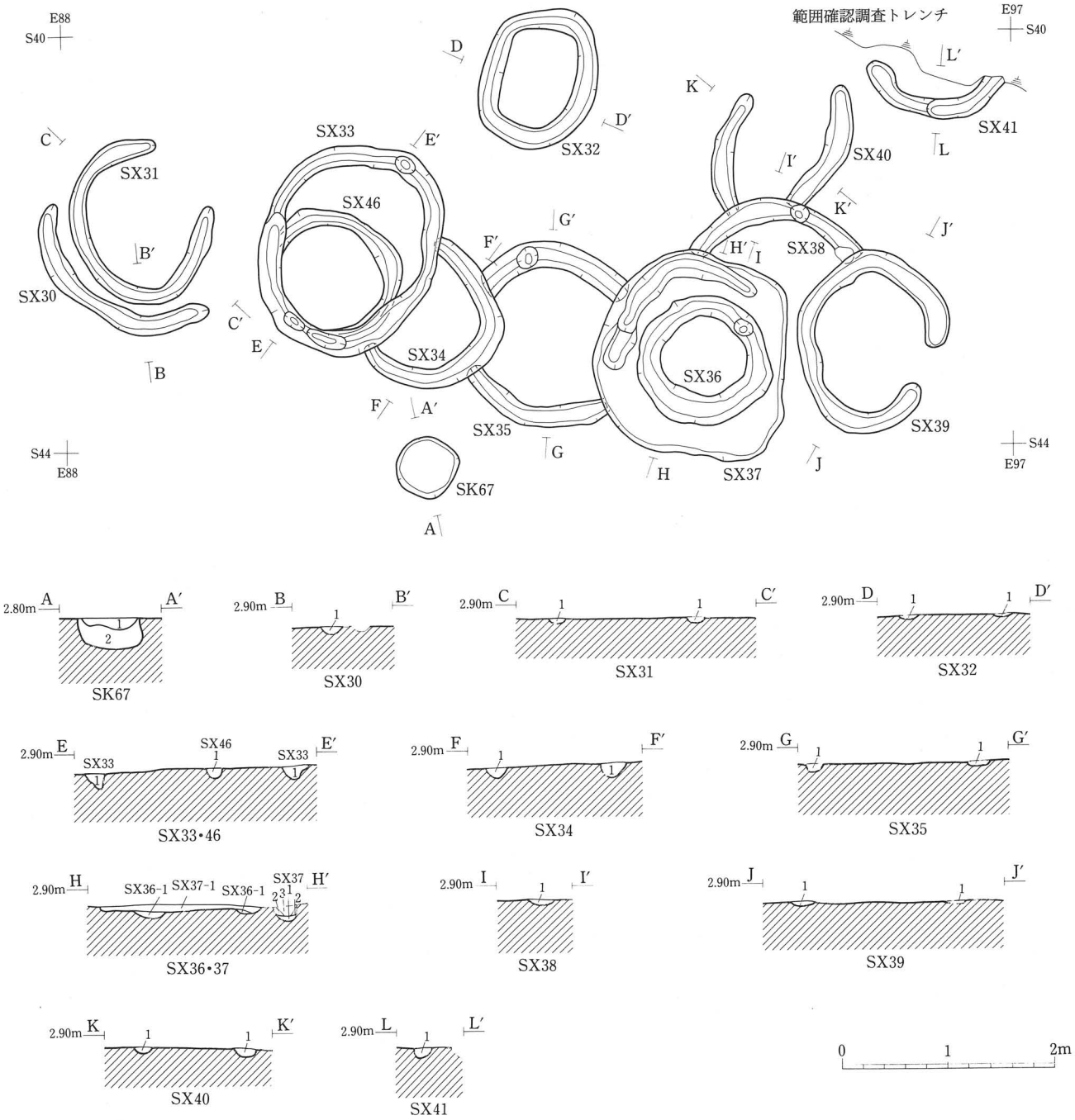

第21図　SK20・24・26・27・29 土坑、SX4～8・14 性格不明遺構




第22図　SK48 土坑、SX17～20・23・24・42・44 性格不明遺構




第23図　SK40・46 土坑、SX26～29・45・47 性格不明遺構




第24図　SK67 土坑、SX30～41・46 性格不明遺構

SK13 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y6/3 にぶい黄色 | シルト | 黒褐色シルトのブロックを含む。炭化物、マンガンを含む。 |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト | 炭化物、マンガン斑を含む。 |
| 3 | 2.5Y6/2 灰黄色 | シルト質粘土 | 酸化鉄、マンガン斑を含む。 |

SK14 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | 炭化物、マンガン粒を多量に含む。第VI層を斑状に含む。 |

SK20 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 炭化物、マンガン粒を含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物、マンガン粒、酸化鉄を含む。一部第VI層のブロックを含む。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン、酸化鉄を含む。第VI層のブロックを多量に含む。 |
| 4 | 10YR3/3 暗褐色 | シルト | 炭化物を少量、酸化鉄、マンガンを含む。第VI層を斑状に含む。 |
| 5 | 10YR6/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 炭化物を少量、酸化鉄、マンガンを含む。第VI層を大きなブロックで含む。 |
| 6 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 炭化物を少量、酸化鉄、マンガンを含む。第VI層を小さなブロックで含む。 |

SK26 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |

SK27 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄斑を含む。にぶい黄橙色シルトを含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | マンガン斑、炭化物を少量含む。 |
| 3 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 砂、にぶい黄橙色シルトを含む。 |

SK29 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、マンガン斑を含む。 |

SK37 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑を含む。下層部に粘性あり。にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。 |

SK40 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄斑を含む。 |

SK46 土坑

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、炭化物粒を少量含む。 |

第20～24図　土層註記 (1)

SK48 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土 | マンガンを含む。 |

SK67 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 炭化物、マンガン、酸化鉄を含む。 |
| 2 | 2.5Y6/1 黄灰色 | 粘土 | 炭化物、マンガンを含む。 |

SX1 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 炭化物粒、マンガン斑を含む。 |

SX2 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄粒を含む。 |

SX3 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト | 炭化物、酸化鉄、マンガンを含む。 |

SX4 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、マンガン斑を含む。 |

SX5 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄斑、マンガン斑を含む。 |

SX6 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、マンガン斑を含む。 |

SX7 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | にぶい黄橙色シルト、酸化鉄、マンガン斑少量を含む。 |

SX8 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄斑、浅黄橙色土を含む。 |

SX9 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄少量を含む。 |

SX10 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR7/4 にぶい黄橙色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 2 | 10YR6/2 灰黄褐色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 3 | 2.5Y7/1 灰白色 | シルト | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |
| 4 | 10YR6/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、炭化物少量を含む。 |

SX14 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR6/3 にぶい黄橙色 | 粘土 | 酸化鉄多量、マンガン粒少量、炭化物微量を含む。 |
| 2 | 2.5Y6/2 灰黄色 | 粘土 | 酸化鉄多量、マンガン粒、炭化物少量を含む。 |

SX15 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。褐灰色粘土をブロック状に含む。にぶい黄橙色シルトを少量含む。 |

SX16 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン斑を含む。 |

SX17 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑を含む。灰黄褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX18 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑を含む。にぶい黄橙色シルトを含む。 |

SX19 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | 炭化物少量、マンガン、酸化鉄を含む。灰黄褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX20 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑、炭化物少量を含む。下層部に灰黄褐色土を含む。 |

SX23 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | 炭化物粒少量、酸化鉄を含む。にぶい黄褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX24 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 炭化物粒を含む。黒褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX26 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | マンガン斑、酸化鉄を含む。 |

SX27 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | マンガン、酸化鉄を含む。 |

SX28 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | 暗灰黄色粘土をブロック状に含む。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガン斑を含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 黄褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX29 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | 炭化物粒を含む。 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 黒褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX30 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | マンガン、酸化鉄を含む。第Ⅵ層土をブロック状に含む。 |

SX31 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | マンガン、酸化鉄を含む。第Ⅵ層土をブロック状に含む。 |

SX32 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 黄灰色粘土をブロック状に含む。 |

SX33 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | マンガン、酸化鉄斑を含む。 |

SX34 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | マンガン、酸化鉄斑を含む。 |

SX35 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | 下層部ににぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。 |

SX36 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。層下部は砂を含む。 |

SX37 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。層下部は砂を含む。 |

SX38 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を含む。黄灰色粘土をブロック状に含む。 |

SX39 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |

SX40 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | マンガン斑を含む。 |

SX41 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | 酸化鉄、マンガン斑を含む。 |

SX42 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | マンガン斑を含む。 |

SX44 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト | マンガンを含む。 |

SX45 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト | マンガン、酸化鉄斑を含む。灰黄褐色粘土をブロック状に含む。 |

SX46 性格不明遺構

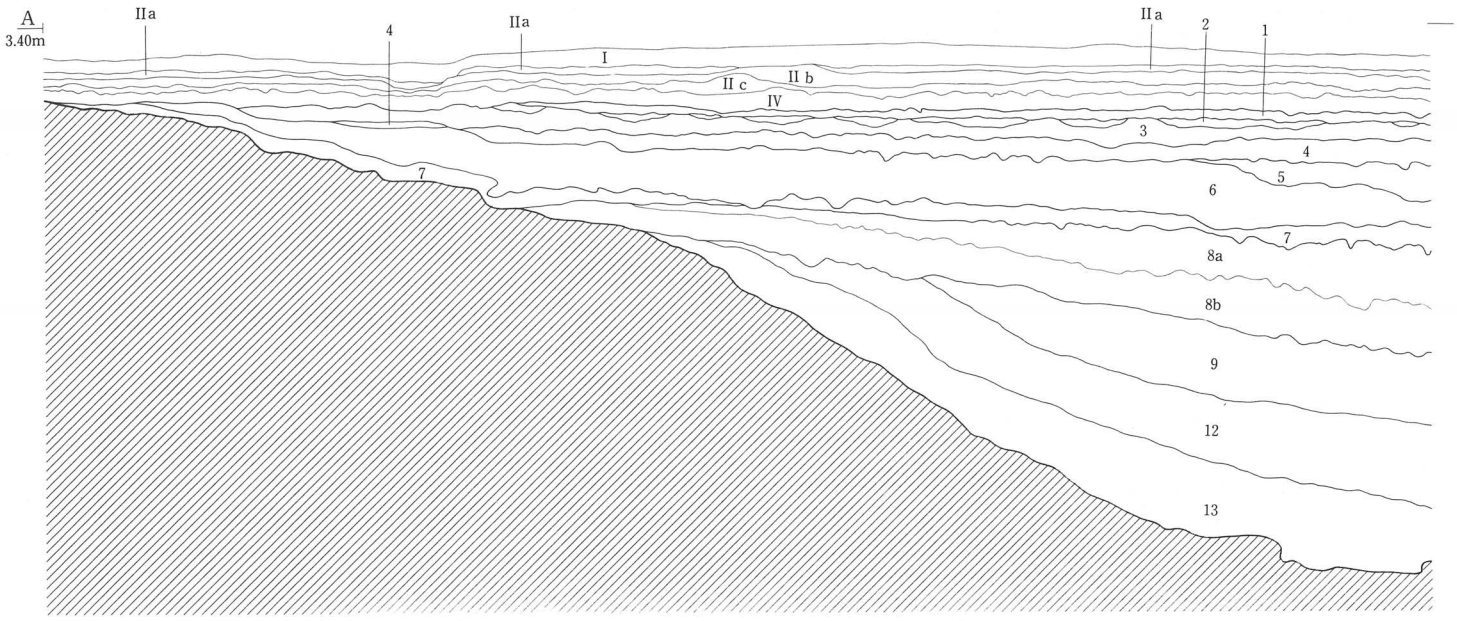
| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 褐灰色粘土をブロック状に含む。 |

SX47 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5YR2/1 黒褐色 | 砂質シルト | 酸化鉄を多量に含む。 |
| 2 | 7.5YR3/2 黒褐色 | 砂質シルト | 酸化鉄、細砂を多量に含む。 |
| 3 | 7.5YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、炭化物を多量に含む。小礫を含む。 |
| 4 | 2.5Y8/4 淡黄色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガンを含む。暗褐色粘土をブロック状に含む。 |
| 5 | 5Y7/1 灰白色 | 粘土質シルト | 酸化鉄、マンガンを含む。褐色シルトを含む。 |

第20～24図土層註記 (2)

らに南西方向や東方向へ続くものと考えられる。流路跡の上端幅は、合流地点から最深部にかけての間でかろうじて計測することができた。規模は上端幅19m～26m50cm、下端幅80cm～10m である。深さは最深部で401cm、その他は101～280cm である。方向は SD19 溝跡・SR 2 自然流路跡との合流地点より西では N－85°－W、東では N－58°－W である。断面形は皿形を呈する。底面からの立ち上がりは概ね緩やかであるが、2 箇所程度で段（屈曲部）




を形成し傾斜角度が変わる(第25図)。最下層の13層が弥生時代に属する。オリーブ黒色の粘土を主体とし、灰色粘土や砂が層状に混入する。

遺物は全域から出土するものの、場所により量が異なる。弥生土器が大量に出土した地点は最深部周辺と、最深部から20m下流の底面から南岸にかけてである。特に顕著なのは最深部の南岸斜面で、斜面に張りつくように大量の遺物が出土した。この他に、3B区は調査面積のわりに出土量が多く、しかも、土器の接合や復元は比較的容易であった。これに対し、1・2区では、出土量が多かったにも関わらず接合は芳しくなかった。中には約100m程離れて接合した遺物もある。

木製品類の出土状況については第15・26～29図に示した。E30近辺より東から出土し、それより西ではほとんど出土していない。E40～50、E75～85、E95～105、E110～120各近辺の合計4箇所に集中域があり、成品と未成品が混在している。大部分の遺物は底面周辺から出土し、河岸付近や河岸斜面になると非常に少なくなる。また、遺物の長辺方向は流路方向と一致するものが多い。木製品類とともに自然木や植物遺存体も大量に出土している。なお、E110～120付近で長めの材がまとまって出土する地点と、未成品がまとまって出土する地点とがあり、施設あるいは人為的な集積を思わせる出土状況である。

13層で検出した杭は13本である（第15図)。この中で、S50E60付近で検出された杭は最深部の南西斜面に4本並び、列から外れて1本が近接して検出された。E80～90付近では3本の杭は間隔は広いが本流路跡の水流方向と直交するように並ぶ。E110～120付近では近接した2本の杭が2組検出した。

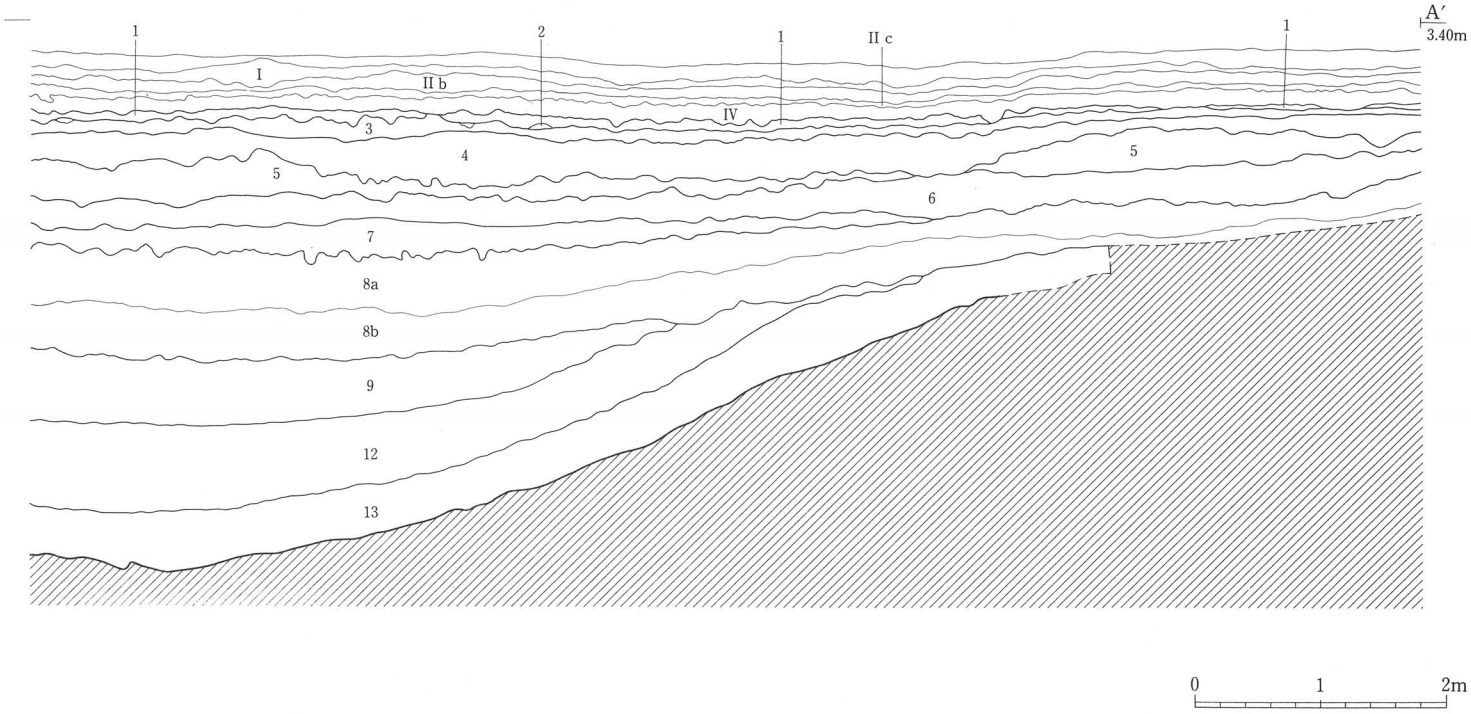
遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、木製品類、石器・石製品類が出土している。この他、骨等の動物遺存体や植物遺存体も出土しているが、動物遺存体の残存状況は極めて悪かった。

**[縄文土器]**

縄文土器は76点を図示した（第3分冊第2図5～12、第3図～第5図、第6図1～3)。第2図5～12、第3・4図、第5図1～7・9は深鉢あるいは鉢、第5図10・11は台付鉢、第5図8・12～14は皿、第5図15～20は壺、第6図1～3は注口土器である（推定されるものも含む)。

第2図11は並行沈線文を施し（3本確認)、その上に蛇行沈線を配している。文様内に縄文を施文している。

第3図3・4・5、第5図11・15は瘤状小突起を貼付している土器である。第3図4・5、第5図11・15は文様




第25図　SR1 自然流路跡断面図

SR1 自然流路跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/1 黒色 | 粘　　土 | |
| 2 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 火　山　灰 | 灰白色火山灰。 |
| 3 | 10YR2/3 黒褐色 | 粘　　土 | 酸化鉄を管状に含む。マンガン粒を含む。 |
| 4 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘　　土 | 酸化鉄を管状、斑状に含む。マンガン粒、白色粒を含む。細砂をブロック状に含む。 |
| 5 | 10YR4/4 褐色 | 砂質シルト | 管状の酸化鉄、炭化物、マンガン粒を含む。層の中程にレンズ状に細砂が堆積する。層下部は粘土(10YR 黒褐色)の薄層と互層になる。 |
| 6 | 10YR2/1 黒色 | 粘　　土 | 層上部に管状の酸化鉄を含む。マンガン粒を含み、特に層上部に多い。下層へ向かって色調は暗くなり、粘性も強くなる。層下部に灰白色シルトをブロック状に含む。 |
| 7 | 2.5Y2/1 黒色 | 粘土(泥炭質) | 未分解の植物遺体を含む。灰白色シルトをブロック状に含む。 |
| 8a | 5Y2/1 黒色 | 粘　　土 | 層上部に未分解の植物遺体を含む。酸化鉄を管状に含む。層の中程に灰白色シルトをブロック状に含む。 |
| 8b | 2.5Y2/1 黒色 | 粘　　土 | 酸化鉄を管状に含む。北側で、黒色シルト質粘土、砂の薄層と互層になる。 |
| 9 | 5Y2/1 黒色 | 粘　　土 | 少し明るい黒色粘土と互層になる。 |
| 10 | 5Y5/3 灰オリーブ色 | 粘土(泥炭質) | 灰白色粘土、暗褐色粘土と互層になる。未分解の植物遺体を含む。 |
| 11 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | 粘土(泥炭質) | 未分解の植物遺体を含む。 |
| 12 | 7.5Y2/1 黒色 | 粘　　土 | 南側の層上部に黒色シルト質粘土が堆積する。植物遺体を帯状に含む。両端で砂質分が多くなる。南側で13層土をブロック状に含む。 |
| 13 | 7.5Y3/1 オリーブ黒色 | 粘　　土 | 砂層と互層になる。南側の層下部に黒褐色砂質シルトが堆積する。大量の遺物を含む。 |

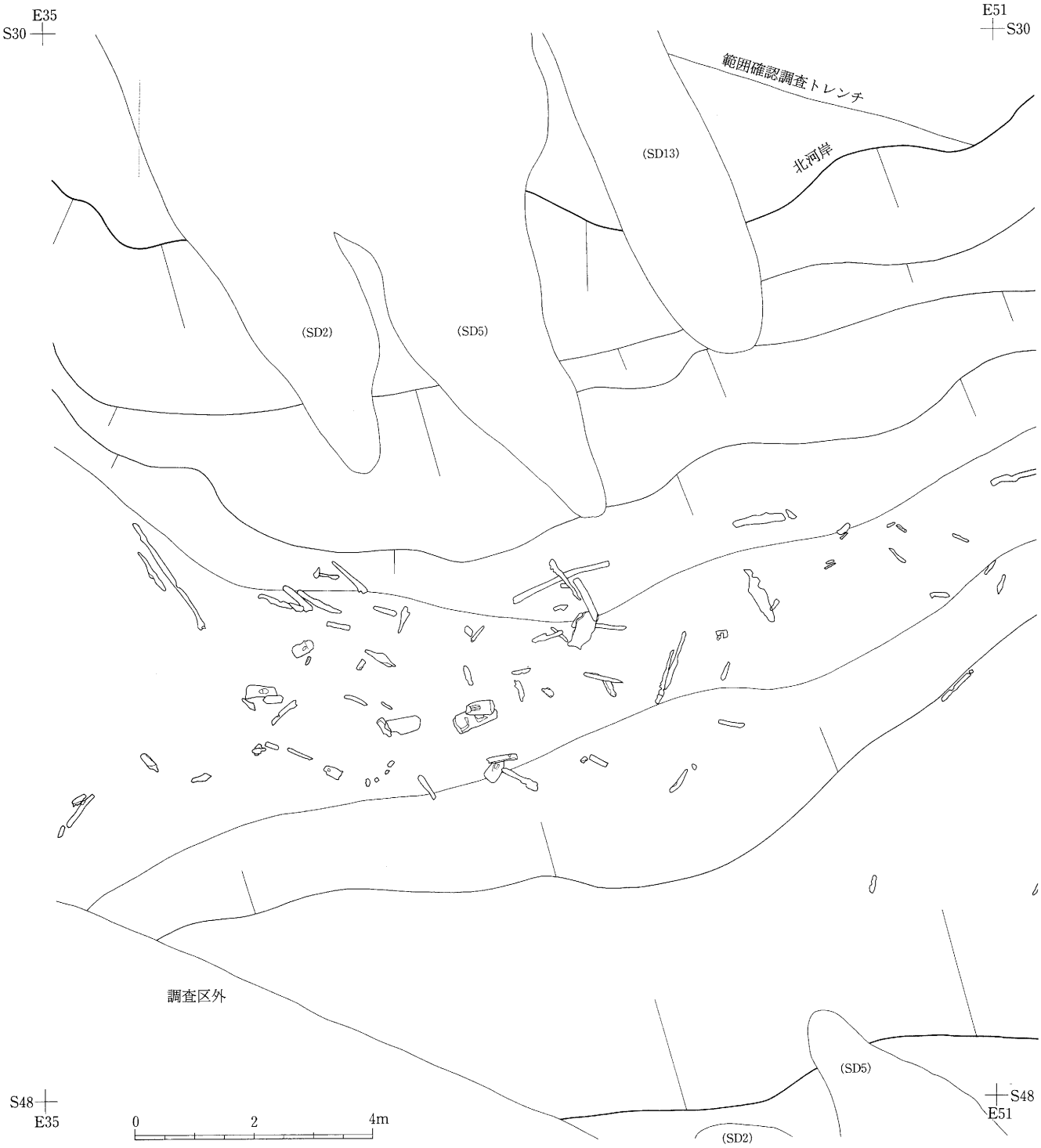
第25図　土層註記

内に縄文を施文している。3は並行沈線文とこれに沿うような弧状の沈線文を連続して配置している。4の口縁部は少し肥厚している。文様内に瘤状小突起を充塡している。5は口縁部上端に頂部を二分する瘤状突起を貼付している。並行沈線と斜めにのびる沈線が施されている。文様内に瘤状小突起を充塡している。補修孔がある。15は弧状連結文と並行直線文を描き、瘤状小突起を充塡している。

第2図5、第3図8・9は三叉文が描かれている。文様内に縄文を施文している。第2図5は二又の低い突起による波状口縁（7単位）を呈する。波状口縁の突起を結ぶように弧状の沈線が連続して描かれる。弧状沈線による区画内には縄文を施文し三叉文2個とその間に円形刺突が配される。弧状沈線と弧状沈線の間（突起の下部）にも三叉文が配され、その下部に2本の並行沈線がめぐり、沈線間に縄文を施文している。第3図8は5と類似するが、弧状沈線区画内の三叉文と円形刺突文が欠落している。第3図9は三叉文に対応する口縁部突起がなく、口唇部には弧状沈線の端部脇に抉りが施されている。

第3図7は胴部で微隆起線状の隆線文が斜め方向に配され、隆線文の交点に瘤状突起が貼付されている。突起には貫通孔のあるものと貫通までには至らない刺突を施したものとがある。

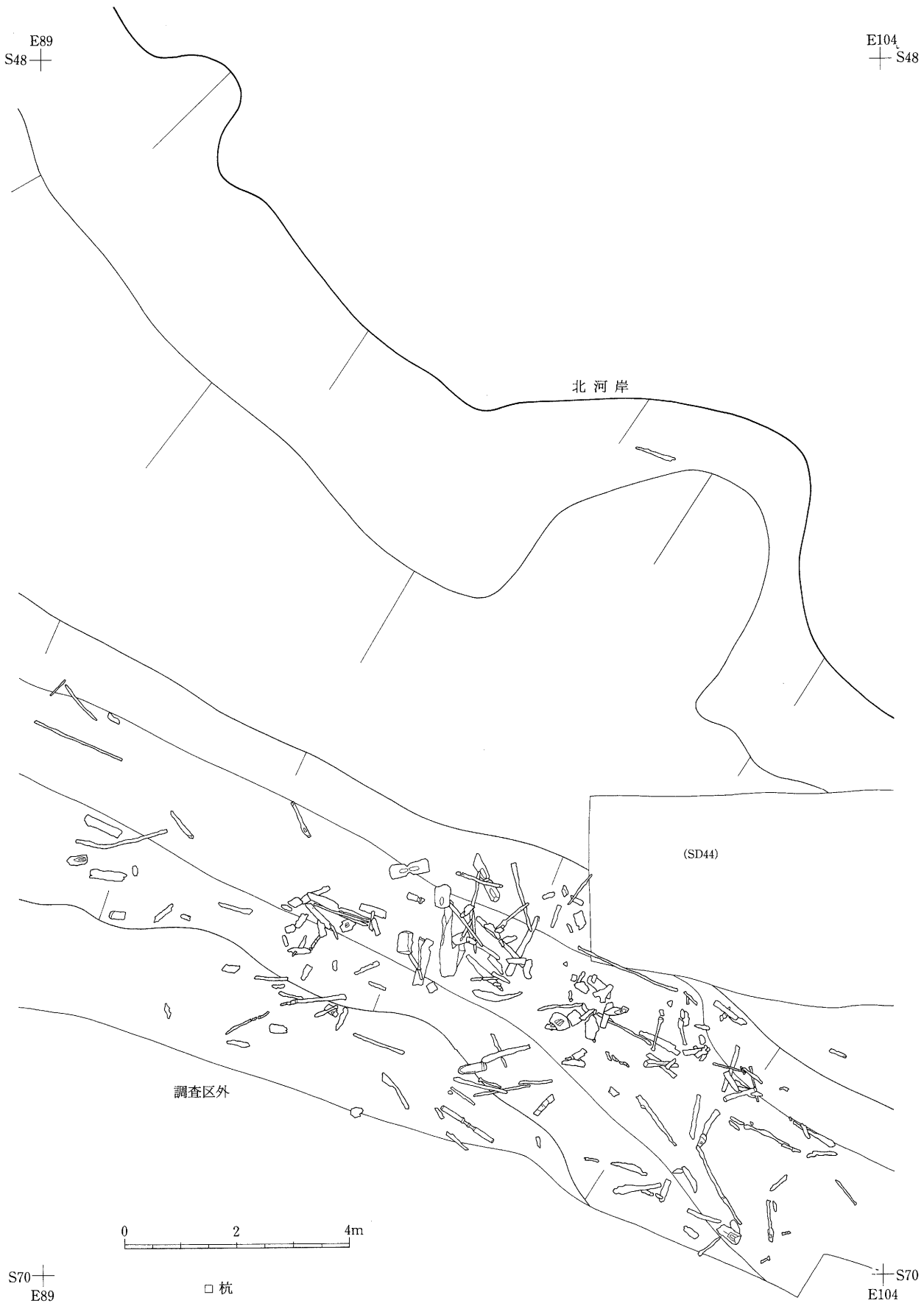
第2図12、第3図1・2・10～14・16、第5図17は胴上部から口縁部に並行直線文を描き、刺突またはキザミを連続施文しているものである。第2図12、第3図1・10～12・14・16は外面に縄文を施文している。第2図12の胴



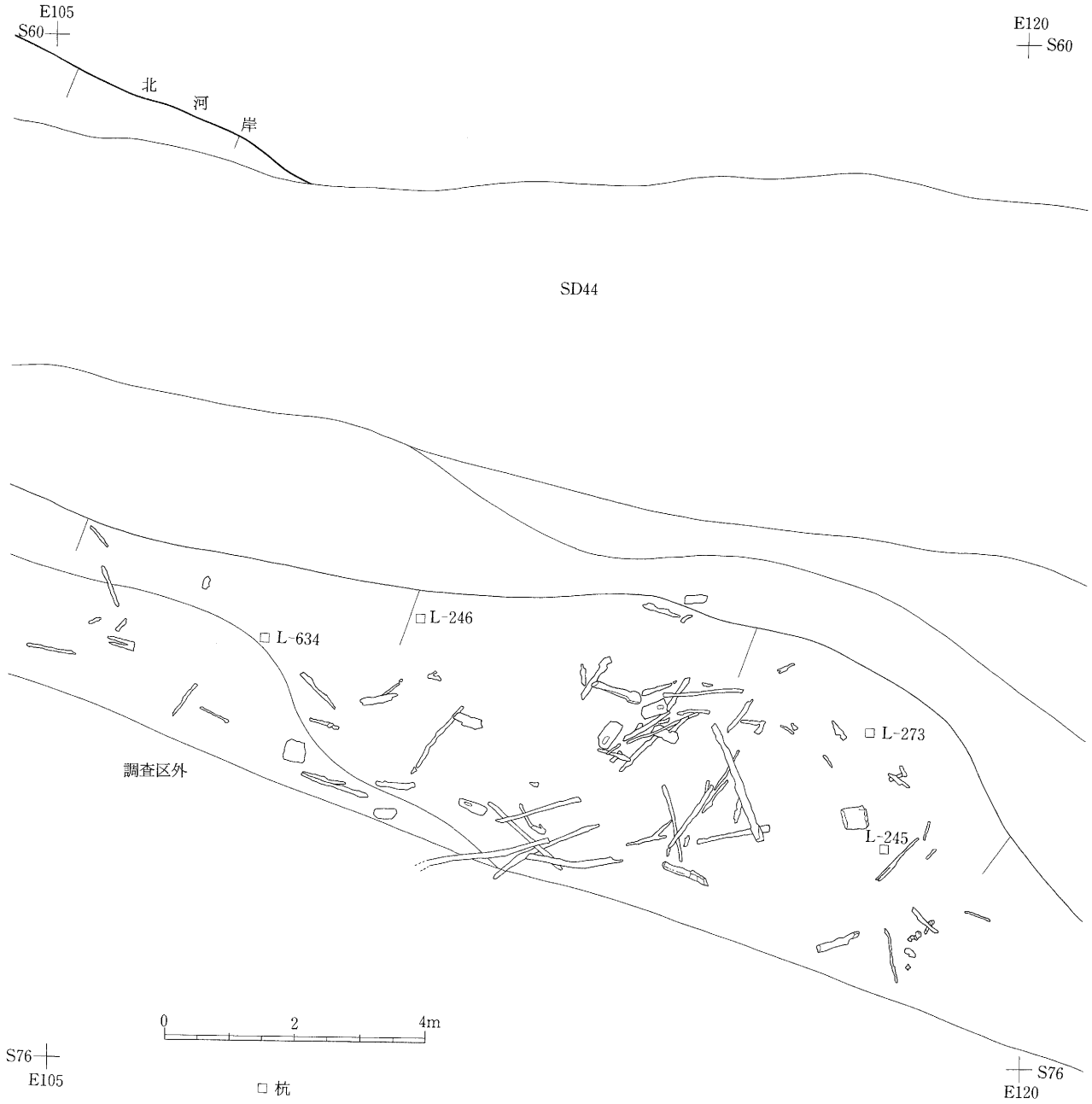

第26図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況 (1)

部上端に並行直線文（３本）をめぐらし、沈線間に刺突を連続施文している。口縁部と文様の下部に縄文を施文している。第３図２は胴部破剝片でキザミが深く施文されている。内面上端が外方に少し傾いていることから、破片上端付近から外へ傾く形状が推定される。第３図10・12は口縁部上端が外へ傾き、口唇部にキザミが連続施文されている。第３図14の口縁部形態は小波状を呈する。口縁部上端に弧状の沈線を連続して配し、口縁部から胴上部に並行直線文（５本）をめぐらせ、沈線間に刺突を連続施文している。胴部に縄文 RL と縄文 LR を施文し羽状に仕上げている。胎土中に金雲母が含まれている。

第27図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況 (2)




第28図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況 (3)




第29図　SR1 自然流路跡13層木製品出土状況 (4)

第３図17、第５図12～14は雲形文が施されているものである。文様内に縄文を施文している。12の口縁部形態部は平縁で、沈線文が施される。内面の口縁部上端と胴下部に段を作出している。第５図13も内面の胴下部に段を作出している。第５図14は皿で、平縁になり、口唇部に沈線が施される。文様は大腿骨文が描かれている。内面の口縁部上端に段を作出している。

第５図６・10は浮線楕円文が施されているものである。10の側面は内弯し、口縁は２個一単位の山形突起が付される。口唇部は外傾気味でキザミを連続施文している箇所と沈線をめぐらせている箇所とがある。胴部の浮線楕円文は楕円文結合部に刺突を加えている。文様下部に3本の並行沈線がめぐる。口縁部内面に沈線がめぐる。

第２図７、第３図19・20・23、第４図１は並行沈線をめぐらせ、彫去等を施して工字文や $\pi$ 字状文様を描いているものである。第２図７、第３図19、第４図１は外面に縄文を施文している。第２図７の胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、長めの口縁部は外傾する。くびれ部に段が作出されている。６単位の波状口縁を呈し、口唇部

に沈線が施される。口縁部は横方向のミガキ調整、胴上部に5本の並行沈線をめぐらせ、彫去を加えπ字状文様と工字文を施している。口縁部内面に太い沈線がめぐる。第3図19の胴上部は直立し、口縁部は外傾する。口唇部に山形突起が付され、沈線が施される。胴上部に4本の並行沈線がめぐり、山形突起に対応する位置にπ字状文様が配される。口縁部内面に沈線がめぐり、突起部分はレンズ状にくぼませている。第3図20はπ字状文様とその下部に工字文、第3図23は工字文を施し、その両端を盛り上げている。第4図1は工字文を施し、その両端に粘土粒を貼付している。

第2図6、第3図18は台形や三角形に彫去を施しているものである。第2図6の胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ口縁部は弱く外傾する。口唇部は2個一単位の突起が付され、その間は波状を呈し、沈線が施される。口縁部外面に削り出しによる隆線文とその下端に沈線文を配する。胴上部文様帯は2本の並行沈線を上下にめぐらせ、沈線と彫去により三角形の文様を施す。この文様間には2本の並行沈線が斜めに充塡され、上下の区画する並行沈線にはπ字状の加工が入る。並行沈線の反転部とπ字状文様は少しだけ盛り上げている。最上段の沈線の上端は削り出しによって隆線のように仕上げている。文様帯の下部に縄文を施文している。第3図18は浅鉢で胴上部は内に軽く傾き、口縁部は外傾する。口縁部形態は山形突起により波状となり、沈線が施される。胴上部（山形突起の下部）に台形状の彫去が施され、その両側に深い沈線で変形工字文が展開するものと思われる。口縁部内面に沈線がめぐる。

第5図7・9は変形工字文が描かれているものである。外面に地文はない。第5図7の口縁部形態は波状を呈し、変形工字文の交点に対応する位置に突起が付されていたと考えられる。また、沈線が施される。変形工字文の交点は彫去を加え粘土粒を貼付している。文様は丁寧に仕上げられている。口縁部内面に沈線がめぐる。第5図9は変形工字文の交点は少しだけ彫去を加え粘土粒を貼付している。交点と交点を結ぶ斜行沈線は曲線的である。文様は丁寧に仕上げられている。内面の口縁部上端に沈線がめぐる。

第3図15は口唇部に小突起が付される。突起の右端から弧状の沈線が描かれ、隣の突起までのびて隣の突起の左端から発した短沈線と接続する。その下部に横方向の沈線とキザミが施され文様を構成している。

第3図21・22、第5図20は並行沈線に粘土粒を貼付しているものである。第3図22、第5図20は外面に縄文を施文している。第3図21は地文はない。

第5図8は皿の口縁部破片で、外傾する口唇部に浮彫風に文様を施している。器面に黒色の漆が塗布されている。

第6図3は注口土器の胴部破片で、張出部の上部に2本の並行沈線、下部に沈線と縄文を施文している。張出部にはキザミを連続施文している。

第5図16は流水文風の工字文が描かれているものである。工字文の上部には並行沈線がめぐり、π字状文様が加えられている。文様内とその下部に縄文を施文している。

第2図8は口唇部に玉状の突起が2個一単位で付されている（単位不明）。口縁部は横方向のケズリ調整とヘラナデ調整で粗く仕上げている。くびれ部には横方向に不規則に並ぶ沈線を施し、その上に間隔を置いて刺突を加えている。胴部に縄文を施文している。内面は口縁部外面と同様の調整が施されている。

**［弥生土器］**

出土土器の大部分は弥生土器である。そのうち1,010点を図示した（第3分冊第58図～第131図25）。土器の遺存状況はきわめて良好で、煮炊きに使用された土器には外面にスス、内面にコゲがしっかりと付着していることが多い。器面に赤色顔料を塗布した土器も少なくない。小型の壺・高坏・鉢などには器面が暗褐色から黒色を呈するものが多い。器種は壺・高坏・鉢・深鉢・筒形土器・甕・蓋・ミニチュア土器等がある。

**（壺）** 第58図～第78図は壺である（壺と推定されるものも含む）。口頸部の形態は口頸部が外反するもの（第58図～第61図15・18）、頸部は不明瞭で、口縁部が外傾するもの（第61図16・17）、口頸部が直立するもの（第62図1～7・

9～11・15)、頸部は直立し、口縁部は内傾あるいは内弯しながら立ち上がるもの（第62図13・16・17)、頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外傾、外反あるいは内弯しながら外へ開くもの（第63図～第65図、第66図１～４・６～９、第67・68図)、頸部は直立し、屈曲して口縁部は外傾、外反あるいは内弯しながら外へ開くもの（第66図５、第69図１～第71図７)、頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外反あるいは外傾するもの(第62図12・14、第71図８～第72図７)、口頸部は外反しながら内方に傾くもの（第72図８)、突出した口頸部を持たないもの（第72図９・10)、複合口縁のもの（第62図８、第72図11）がある。口縁部形態は平縁がほとんどで、波状を呈するもの（第65図５、第66図４、第69図４)、突起を付したもの（第67図１）もある。胴部は、細めのもの（第58図４、第63図３）と太めのもの（第58図１～３、第62図１・２・13、第66図９、第68図１、第69図１・４・５、第71図８・９）などがあり、胴部最大径は胴上部にある。

調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面ではハケメ調整・ナデ調整、内面ではオサエ目・ケズリ調整・ナデ調整を確認できる土器もある。

底部は木葉痕がほとんどで、網代痕、織布痕、編布痕の他、ナデ調整やミガキ調整を施したものもある。

文様の種類は、並行直線文、層波文（第58図６、第61図15、第67図１、第73図９)、変形工字文（第58図５・７、第61図18、第71図８、第72図９・18～第73図５・７？)、波状文（第76図８)、連弧文（第71図６？、第76図15)、重山形文（第76図１・２)、重三角文（第73図８、第75図７・８)、四角文（第62図２、第71図13、第75図５、第76図７)、重菱形文（第75図９・10)、工字文（第69図５、第70図18、第73図６)、方形渦文（第64図７、第74図７～９、第75図４？)、渦文（第66図５？・９、第73図20～第74図６)、円文（第62図１)、同心円文（第73図17～19)、Ｘ字連結文（第61図11、第62図13、第74図10～第75図２)、錨形文（第73図10～16)、並行直線文＋垂線（第61図９・14)、並行直線文＋列点刺突文（第76図６)、直線文＋列点刺突文（第75図20)、列点刺突文（第65図９、第75図21)、綾絡文（第64図２、第72図14)、隆線文（第61図12、第62図３・７・９・14・15、第66図５・６、第67図４・11、第68図１、第69図８～10、第70図16・17、第71図１～４、第72図５・６・12・13・15～17、第76図４）などがある。

隆線文は粘土貼り付けによるが、第72図16については削り出し等により作出している思われる。第61図９は胴上部に５本の並行沈線をめぐらせ、垂線を施してその両端を盛り上げている(単位不明)。垂線は並行沈線よりも深く彫り込んでいる。第61図14は胴部にやや太い沈線で変形工字文と思われる文様を描き、横方向にのびる沈線に深い彫り込みの垂線が施されている。第61図15は変形工字文が描かれ、交点にある垂線は幅広で深い。第61図18は胴部上端にやや太い沈線で楕円状文様が結合している。結合部両端は盛り上げている。その下部は変形工字文が展開するものと思われる。第61図16は18の類似土器で、沈線は横方向にのび、そのうちの一本が終止し、上下にある沈線は収斂するように曲がる。終止した沈線の先で器面が少し盛り上がる。第62図12の頸部は若干膨らみ、そこに縄文を施文している。第62図14の隆線文頂部に縄文を施文し、さらにオサエを間隔を置いて施文している。胴部上端にも隆線文を付している。第66図５は細長い口頸部を持つものである。胴部は撫で肩気味で、頸部は直立し口縁部は外へ傾く。頸部外面は縦方向のケズリ調整が施され、ミガキ調整等による仕上げは認められない。胴部上端に隆線がめぐり、その上に２個一単位のオサエを加える(４単位)。胴部には幅広の帯状に削る手法を用いて、渦文と思われる文様を描いている。文様の凹部は粘土を削り取ったままの粗い器面である。凸部はミガキ調整が施されている。内面は口縁部が横方向のナデ調整と思われ、頸部は横方向のケズリ調整である。胴部は上端で輪積み痕、オサエ目がしっかり残されており、それより下部に横方向のヘラナデ調整が施されている。外面全体と内面の口頸部の器面は黒色を呈する。また外面の口頸部、隆線上のオサエ目、文様の凹部、さらに内面の口頸部に赤漆が塗布されている。なお、帯状の凹部による文様描画手法を施す土器は他に例はない。第67図12は口縁部と胴部上端に３本の並行沈線をめぐらせ、幅広で深い垂線を加えて工字文風に仕上げている。垂線の左右端に盛り上げが認められるところもある。69図10は隆線頂部に刺突を連続施文している。70図16は破片右端で隆線の高まりが失われている。このこ

とから、隆線にオサエ目状の加工を加えているものと思われる。第70図18は口縁部に4本の並行沈線をめぐらせ、幅広で深い垂線を加え工字文風に仕上げている。第72図5の隆線は幅のある台形状を呈し、頂部に縄文を施文している。72図6は隆線の頂部に縄文を施文し、オサエを加えている。第72図9はすぼまった胴部の先に、上を向いたごく短い口縁部がとり付くと思われる。胴上部にやや太い沈線で変形工字文が描かれ、交点は彫去が施され、その両端を盛り上げている。第75図6は方形状の文様のほか、上部と下部に曲線による文様も展開すると思われる。区画内に縄文を充塡し、さらにキザミを連続施文している。第75図7は横方向のナデ調整の後、重三角文が描かれている。部分的に文様に沿った方向の粗いミガキ調整が施される。地文は入らない。第76図4は口頸部と思われ、隆線の頂部に刺突を連続施文している。第76図6は胴上半部と思われ、横方向のナデ調整の後、2本のやや太い並行沈線をめぐらせている。沈線間に刺突を連続施文している。部分的に横方向のミガキ調整を施している。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第61図8・11・17、第62図7・10・12・15・16、第67図1・11、第70図12・15・17、第71図3・4・6、第72図5・6・12～14・16～19、第73図3・7～9・11～21、第74図1～6・8～10、第75図1～6・8・10～13・15～21、第76図1～5・7、第77図6・9～13、第78図7・9～13は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第61図12～16・18、第62図6・8・9・11・17、第67図2～10、第70図13・14・16・18、第71図1・2・5・7、第72図7～9・15・20・21、第73図2・4～6、第75図7・9・14、第76図6・8・12・13・16は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文や並行沈線文を施したものがある。口縁部に穿孔を持つものがある（第58図1・3・5・6・9、第61図11・15、第62図1・2・17、第63図1・10、第67図6、第69図1・2・7、第71図8、）。黒色を呈する土器が小型を中心に認められる。第76図14・18～20は器面に漆が付着している。第76図14・18・20は外面に赤漆を塗布している。第76図19は内面に暗褐色の漆が付着している。漆面が粗いため、漆溜め容器と考えられる。二次加熱によるススやコゲが付着している土器は多い。

**（高坏）** 第79図～第84図は高坏である（高坏と推定されるものも含む）。第79図～82図14は坏部で、逆台形状のものと屈曲部を持つものとがある。逆台形状のものには外傾するもの（第79図～第80図20）と内弯するもの（第80図21～第81図21）とがある。屈曲部を持つものには胴部最大径は上部にあり、胴部上端で強くくびれ、口縁部は外傾あるいは外反するもの（第81図22・23）、胴上部で屈曲し、口縁部が外反するもの（第82図1～5・7～12）、屈曲して口縁部が直立するもの（第82図6・13）、屈曲して口縁部が内傾するもの（第82図14）がある。口縁部形態は平縁、波状、山形突起や台形状突起を付したものがある。第80図11～13は口唇部に大振りの台形状突起を付し、突起は先端近くに沈線をめぐらせ、外に傾いている。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整やナデ調整を施した土器もある。

文様帯幅は坏部の2分の1から3分の2を占め、文様の下部は無文となるものが多い。文様は並行直線文、層波文（第79図1～3・5・6・8・12、第80図14・22・25、第81図9・18・23、第82図1・3・4・7・9～12）、変形工字文（第79図10？・13、第80図1？・2・4・9・11・13？・16・17・19・20・24、第81図2・4・6・7・10・11？・12～17・21、第82図6・8・13？・14）、波状文（第79図4、第80図15）、連弧文（第80図21・23）、山形文（第80図8）、三角文（第80図18）、四角文（第79図7？・14、第81図1・22）、方形渦文（第82図2）、錨形文（第81図20）などがある。第79図12は層波文を描き、交点に幅広で深い垂線を施している。垂線施文の際に加えられた力によって、垂線の左右端は少し盛り上がっている。第80図10は口縁に山形突起が付され、その頂部が深く刻まれている。突起は外へ傾いている。外面に3本のやや太い並行沈線がめぐり、垂線を加えて工字文に仕上げている。垂線は幅広で深く彫られ、その左右端を盛り上げている。並行沈線の下部は変形工字文が展開すると思われる。第80図11は外面にやや太い沈線で変形工字文と思われる文様が描かれ、交点に幅広で深い垂線を施し、その左右端を

盛り上げている。第80図12はやや太い沈線で横方向にのびる沈線と深く彫られた垂線が施されている。第80図16は変形工字文が描かれ、反転部に幅広で深い垂線が施されている。第80図19も交点に幅広で深い垂線が施され、その左右端を盛り上げている。第80図24の坏部は浅く、皿状を呈する。やや太い沈線で変形工字文を描き、坏下部に縄文を施文している。脚部は坏部の割りに径が大きく、あまり開かない形状となる。脚部上端に2本の並行沈線がめぐり、その上部に細い沈線が半周して途切れる。第81図6・14は外面に3本のやや太い並行沈線をめぐらせ、垂線を加えて工字文に仕上げている。垂線の左右端を盛り上げている。その下部に変形工字文が展開すると思われる。第81図10・15・21は変形工字文が描かれており、その反転部や交点に垂線を施し、その左右端を盛り上げている。第81図20は破片右側に錨形文を思わせる文様が描かれている。区画内に植物茎回転文を充填している。左側には沈線で区画し、細かい刺突を充填している。文様から丸底鉢の可能性がある。第81図22は本層出土高坏の中で、唯一完形となる。波状口縁を呈する(8単位)。胴部上端にやや太い沈線をめぐらせ、その下部にπ字状文様を施した四角文を配している(5単位)。胴最大径部に2本の並行沈線がめぐり、その下部に縄文を施文している。坏部と脚部の境に2本の並行沈線がめぐる。脚部は外へ弱く傾き、下端で角度を変え傾きは少し強くなる。脚部下端に2本の並行沈線がめぐりその上部に縄文を施文している。坏部の口縁部内面に沈線がめぐり、内面全体を横方向のミガキ調整が施されている。脚部内面は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整が施されている。沈線と地文部分に赤色顔料を塗布している。第82図14は太い沈線で変形工字文が描かれ、反転部と反転部の中点に彫去を施し、その両端を盛り上げている。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充填手法により施文される。拓影のうち第79図8・11・13・14、第80図2・3・5～7・14・18、第81図1・9・18～20、第82図4・7・9・10は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第79図9・10・12、第80図1・4・8～13・15～17・19・20、第81図2～8・10～17・21、第82図5・6・8・11～14は地文はない。

内面は口縁部に直線文ないし並行沈線文が描かれている。波状口縁の頂部や突起部分に垂線を施したものもある。

第82図15～第84図は脚部で、およそ台形状を呈し側面は下端に向かって直線的に開く。調整は外面の文様内と無文部分はミガキ調整が施されている。この他、ハケメ調整を施した土器もある。内面はケズリ調整・ナデ調整・ミガキ調整などが施されている。

文様は脚部下半に施されるものと脚部全体に施されるものとがある。並行直線文、層波文(第82図16・17・19～22、第83図1～3・5・8・10、第84図2・3・12)、工字文(第83図6)、変形工字文(第83図9・11・18、第84図17・23?)、波状文(第83図12・15、第84図18・22?・24・26)、山形文(第82図18、第83図7、第84図9・13・19～21・27?)、四角文(第83図13、第84図25)、方形渦文(第84図14)などがある。

第83図6は底径と脚径の差が大きく、脚部下端が弱く内弯する。上端に並行沈線がめぐり(3本確認)、下部に4本の並行沈線をめぐらせ、彫去を加えその両端を盛り上げて工字文に仕上げている。第83図12の文様帯は脚部全体におよぶものと思われる。上・下部にやや太い沈線で波状文が描かれ、下部はさらに波状文に沿わせるように弧状沈線が充填されている。第83図17は下端に4本からなる並行直線文が描かれ、その上部は無文にならずに縄文を施文している。下端に2個の穿孔がある。第84図21は脚部に透かしを持つ。3本の並行沈線による山形文によってうまれた三角形の無文部に横に細長い透かしを作出している。透かしの数は多い。文様は細沈線で描かれ、丁寧に仕上げている。第84図27は下端に2本の並行沈線を横方向へ引き、その上部に山形文と思われる文様を描いている。そして、無文部に横に細長い透かしを作出している。

第82図22、第83図1・2・4・6、第84図9～11は坏部との接合部が良好に観察することができる。坏部の底部内面が薄く剝がれ平滑な面があらわれ、その面を観察すると木葉痕やオサエ目が残されている。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充填手法により施文されるが、第83図13については文様から離れた箇所か

らも縄文が確認できるため、磨消手法によると思われる。拓影のうち第83図13・17、第84図23・25は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第83図16・18、第84図18～22・24・26・27は地文はない。

器面が黒色を呈する土器は他器種に比べ、比率が高い。

**(鉢)** 第85図、第86図１～３・５～19、第87図～第95図、第96図２は鉢である（鉢と推定されるものも含む)。逆台形状のもの、くびれ部を持つもの、俯瞰形が楕円形を呈しているもの（第94図５～７)、丸底のもの（第95図、第96図２）がある。逆台形状のものには内弯するもの（第85図、第86図１～３・５～７）と外傾するもの（第86図８～第92図17）と外反するもの（第92図18～20）とがある。くびれ部を持つものには胴部上端にくびれがあるもの（第93図～第94図１・４）と胴中央部にくびれがあるもの（第94図２・３）とがある。口縁部形態は平縁が主体で、波状や突起を付したものもある。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、口縁部にヨコナデ調整、外面にケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整・ヘラナデ調整、内面にケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整を施した土器もある。

底部は木葉痕がついたものがほとんどで、織布痕・網代痕がついたものやケズリ調整・ナデ調整・ミガキ調整が施されたものもある。

文様は胴部上半に施されるが、胴部の３分の２に及ぶものもある。くびれのある土器は胴上部と口縁部に文様がある。丸底のものはくびれ部分を無文にして、口縁部と胴部から底部にかけて文様が施される。文様の種類は、直線文、並行直線文、層波文（第85図４・８・10・11、第87図18・19、第88図１～９・11～14、第89図６、第90図９・11・16、第91図１・６・16・20、第93図８・13)、工字文（第92図13)、変形工字文（第85図13、第86図２・７、第88図10、第89図１・２、第90図10・12～14、第91図４・７～13・18・21？、第92図６・８～12・16？、第93図10・15)、波状文（第86図３、第91図３、第92図１、第92図14)、連弧文（第90図８・15、第92図３？・18・19、第93図３)、山形文（第87図20、第91図４・14・15？)、三角文（第85図１・12、第91図２・19)、三角文系（第85図７)、重三角文（第89図５)、四角文（第85図６、第86図１、第89図３・７、第91図５、第92図５)、方形渦文（第92図17、第93図14、第96図２)、同心円文（第95図３・４・６・７・９・10・13)、渦文（第95図15)、轡形文（第95図２)、錨形文（第95図２～４・６・11・12)、列点刺突文（第93図５）などがある。また、無文の土器も少なくない。

第90図14はやや太い沈線で王字文風の変形工字文を描いている。反転部に幅広で深い垂線を施している。第90図16は３本の並行沈線による層波文で、交点と中点に幅広で深い垂線を施している。第91図４は上半に変形工字文が描かれている。交点と中点には上下から刺突が加えられ、その加圧により刺突と刺突の間が盛り上がっている。下半に縄文を施文し、山形文と思われる文様を施している。第92図６は口縁部に３本からなるやや太い並行直線文を施し、深く彫った垂線を加えて工字文に仕上げている。垂線の左右端は盛り上げている。工字文の下部は流水文風の変形工字文と思われる。第92図７は並行直線文に深く彫った垂線を加えている。その下部に頂部が平坦になる山形文風の文様が描かれている。第92図８・９・11～13は変形工字文が描かれ、交点や反転部に幅広で深い垂線を加えている。第93図６は低平な形状である。胴部に４分割するように垂線を４本施文し、10本からなる並行直線文を施している。ところどころに、仕上げ段階で消そうとした垂線が消し方が不十分で見えている。並行直線文の間は一つおきにミガキ調整を施しているため、施文前に施したナデ調整とミガキ調整が交互にあらわれる仕上がりとなる。そして、沈線とナデ調整部分に赤色顔料を塗布している。第93図15は胴上部にやや太い沈線で変形工字文と思われる文様を描いている。交点は彫り込み等は認められないが、その左右端を盛り上げている。第94図１は胴部上端にやや太い並行沈線をめぐらせ、そこへ彫去を加え左右端を盛り上げている（６単位)。第94図４は大型のものである。胴部上端に４本の太い並行沈線をめぐらせ、彫去を加えπ字状に仕上げ、その左右端を盛り上げている。彫去によって遮られた沈線は反転して隣の沈線と結合する。第94図５は口縁部と胴部下端に沈線をめぐらせ、胴部いっぱいに斜め方向を基調に沈線が施され、縄文を充塡している。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されるが、第89図６、第91図３については磨消手法によると思われる。拓影のうち第86図５・６、第88図４・５、第91図３・６～８・10・13・15・18～21、第92図１～４・７・13・14・16・17・20、第93図12～15、第94図８～12、第95図５・７～15、第96図２は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第86図３・７、第90図８、第91図９・11・12・14・16・17、第92図５・６・８～12・15、第93図９・10・16、第94図７は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文や並行沈線文を施したものがある。波状口縁の頂部や突起部分に垂線を施したものもある。口縁部に穿孔を持つものが多い。穿孔の数は１個または２個を１単位として、片面のみのものと相対する面にも施しているものとがある。黒色を呈する土器の比率が高い。

**（深鉢）** 第86図４、第96図１・３～10は深鉢である（深鉢と推定されるものも含む）。胴部下端から上部は外傾し、胴上部から口縁部にかけて内弯する。調整は外面の文様内や内面はミガキ調整が施されている。第96図１は口縁部にヨコナデ調整が施されている。底部は木葉痕がついている。文様は並行直線文、変形工字文（第96図４？）、連弧文（第96図７）、三角文（第86図４、第96図８・９）などがある。文様内の縄文はおよそ充塡手法により施文されている。拓影のうち第96図３～５・７～10は外面に縄文を施文している。第96図６は地文はない。第96図10に補修孔がある。

**（筒形土器）** 第96図11～18は筒形土器である。胴部は直立し、胴部上端で膨らみを持つもの（11・12・14～18）、外傾するもの（13）がある。文様は胴部上端から口縁部にかけて太めの沈線で工字文を描いている。幅広で深い垂線を加え左右端を盛り上げているもの（11・15）、幅広で深い垂線だけで左右端の盛り上げはないもの（12・13）がある。この他、山形文を描いたもの（16）がある。

**（甕）** 第97図～第122図は甕である。

胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、口縁部が外反するもの（第97図～第115図）が甕の大部分を占める。口縁部形態は平縁であるが、第115図20だけは波状を呈する。外面調整はハケメ調整・ヨコナデ調整を多用している。ハケメ調整は口縁部から胴上部にかけて斜めや縦方向に、胴部は縦方向に施すことが多い。ヨコナデ調整を観察すると微細な条痕が紆曲せず直線的に走る。さらに、途中で止めながら調整を施すという動きではなく、口縁部の周囲を一息に仕上げたと思われるような調整痕である。なお、ヨコナデ調整のこのような特徴は、甕に限定されるものではなく、他器種にも当てはまる。第104図７、第106図４・６、第108図７、第109図６、第110図１、第114図４・５・９、第115図１・11・17・20は口縁部や胴部上端に横方向のミガキ調整が施されている。ミガキ調整は粗いものが多いが、第108図７、第115図11などは丁寧に施されている。胴部下端に横方向のケズリ調整やミガキ調整などを施すことがある（第97図１・３・４・６、第98図１～４、第99図１・３、第100図５～７、第101図１・２、第102図２、第104図８、第115図21、第116図１～５・７、第117図２～７）。内面調整はミガキ調整を施している。この他、ケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整を施した土器もある。文様は胴部上端に列点刺突文、破線文（第114図６～９、第115図３）、直線文、並行沈線文、綾絡文（第109図４、第110図１、第114図１、第115図19）が施され、無文の場合もある。第104図５、第115図１～７は２列の列点刺突文が施されている。第115図14は直線文とそれをはさむ２列の列点刺突文が施されている。第115図８・９・11・13・15・16は直線文と列点刺突文が施されている。直線文の上部に列点刺突文を施すが、15は直線文の下部に列点刺突文がある。第115図10・12は並行直線文と列点刺突文が施されている。10は２本からなる並行直線文の間に刺突文を充塡し、12は３本あるいはそれ以上からなる並行直線文の間に刺突文を充塡している。第108図４、第109図７、第114図11・12は刺突文の凹みに木目状の筋目がある。口唇部と胴部に縄文、植物茎回転文を施文している。第103図１、第106図８の胴部に地文は施文されておらず、ハケメ調整が器面を覆っている。第114図６～９、第115図３の胴部上端の文様（破線文）は、ヘラ状の工具で短い沈線をひくような動作により施文され、列点刺突文とは若干異なる仕上がりとなる。底部は木葉痕がついたものがほとんど

で、織布痕がついたものやミガキ調整が施されたものもある。多くの土器にススやコゲが付着し、胴部下半に赤変が認められる。

口縁部は長めで内弯しながら立ち上がるもの（第117図８～11、第118図）の口縁部形態は平縁の他、波状のものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面にヨコナデ調整、ハケメ調整、ナデ調整が施されているものもある。底部は木葉痕がついている。文様は胴上部と口縁部に施され、種類は並行直線文、並行直線文＋垂線（第118図７）、層波文（第117図11、第118図５）、工字文（第118図１・９・13）、四角文（第117図８、第118図２・11・12）、列点刺突文（第117図10）がある。第117図10は残存径から大型に属すると思われる。胴部上端と口縁部に列点刺突文を２列施している。第118図13は、口縁部と胴上部に工字文が描かれ、垂線はやや深く彫り込まれている。第118図15は胴部上端のくびれや口縁部の弯曲が強い。口縁部に３本からなる並行直線文が施され、口縁部上端に縄文を施文し、垂線を加えている。文様内の縄文はおよそ充填手法により施文されている。拓影のうち第117図10・11、第118図６・７は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第117図８・９は地文はない。多くの土器にススやコゲが付着し、胴部下半に赤変が認められる。

口縁部は長めで外傾するもの（第115図17、第119図１・２、４～８）の口縁部形態は平縁の他、波状、突起を付したものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整を施した土器もある。底部に木葉痕がついている。文様は胴上部と口縁部に施され、種類は並行直線文、層波文（第119図１・５・７）、方形渦文（第119図８）が描かれている。第115図17は口縁部に３本の並行沈線がめぐり、胴部に縄文を施文している。胴上部に沈線等による文様は施されない。第119図６はススやコゲが厚く付着し器面観察が容易でないが、外面は縄文の施文だけで沈線等による文様は施されない。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充填手法により施文されている。多くの土器にススやコゲが付着し、胴部下半に赤変が認められる。

第119図９は胴部上端で強くくびれて肩が張り、口縁部が外傾するものである。口唇部に山形突起を付し（８単位）、突起と突起の間に沈線を施している。調整は外面の口縁部に横方向のミガキ調整、内面は横方向のケズリ調整と、その後に横方向のミガキ調整が施されている。文様は口縁部上端に太い沈線をめぐらせ、胴上部は変形工字文風の文様を描いている（８単位）。文様内に縄文を充填しているが、３分の１程の面は施文されていない。文様の下部に刺突を連続施文している。胴部に縄文を施文している。

口縁部は長めで弱く外反するもの（第120図１～４）の口縁部形態は平縁、波状がある。調整は外面の無文部は横方向のミガキ調整、内面はケズリ調整とその後にミガキ調整を施している。沈線等による文様はなく、胴部に縄文を施文している。１は波状口縁を呈し（９単位）、突起の頂部にキザミを加えている。３は口唇部にオサエを加えている（７単位？）。１・２の縄文は斜め方向から施文されており、条が水平方向に並ぶ。

第120図５は胴部上端で弱くくびれ、口縁部が弱く外反するものである。口唇部形態は平縁である。調整は外面の口縁部にヨコナデ調整、文様部分にミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整が施されている。文様は６本からなる並行直線文を施し、垂線を加えている。胴部に縄文を施文している。

第120図６・９は口縁部は短めで外傾するものである。口唇部形態は平縁である。６は口径と比べて器高は低めで、底径は大きめとなる。調整は外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部に縦方向のハケメ調整、無文部にミガキ調整、内面はミガキ調整が施されている。文様は胴部上半に５本からなる太い並行直線文を施し、縄文を充填している。胴部下半に縄文を施文している。沈線と縄文部分に赤色顔料が塗布されており、その残存は良好である。９の調整は外面の文様内と無文部分や内面にミガキ調整が施されている。文様は口縁部に２本からなる並行直線文、胴部に層波文を施し、植物茎回転文を充填している。

第120図７・８・10～第122図は口縁部が立ち上がるものとしたが、バリエーションに富んでいる。すべて大型に属する。口唇部形態は平縁と突起を付したものとがある。調整は口縁部にヨコナデ調整、外面の文様内と無文部分

や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面にハケメ調整、内面にケズリ調整を施したものもある。文様は並行直線文、四角文（第122図１・４）が描かれている。第120図８は沈線等による文様はない。第122図４は口縁部にやや太い沈線で四角文を描いている（８単位）。四角文は長方形の中に１本の沈線を加えた形であるが、図示されていない箇所に長方形のみのものもある。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されている。拓影のうち第120図７・８・10、第122図１・２は外面に縄文を施文している。

**（蓋）** 第123図～第130図は蓋である（蓋と推定されるものも含む）。伏鉢形のもの（第123図、第124図１～９・12～20、第125図～第130図）と半球形のもの（第124図10）と伏皿形のもの（第124図11）とがある。伏鉢形の天井部形態はつまみ部を持つもの（第123図１～４、第124図12～第125図27、第126図４）と持たないものとがある。つまみ部は逆台形状のものが一般的で、細身で高さのあるものもある。つまみ部を持たないものには天井部天端が盛り上がるもの（第123図５・６、第125図28～31、第126図１～３・５～９）と天井部側縁が張り出すもの（第123図７～第124図３、第126図10～第127図11）と天井部が平坦なもの（第124図４～９、第127図12～第130図４）とがある。つまみ部を持つものの蓋部は側面が外傾するものと外反するものとがある。天井部天端が盛り上がるものの蓋部は側面が外傾するもの、外反するもの、蓋部上端が屈曲するものなどがある。天井部側縁が張り出すものの蓋部は側面が外反するもの、上端あるいは中央部周辺で屈曲するものなどがある。天井部が平坦なものの蓋部は側面が上端あるいは中央部周辺で屈曲する。口縁部形態は平縁である。

外面調整はヨコナデ調整やハケメ調整を施し、文様内と無文部分はミガキ調整、無文部分についてはナデ調整も少なくない。内面にミガキ調整を施すが、この他、ケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整を施した土器もある。つまみの内面はナデ調整が多く、ミガキ調整やヨコナデ調整・ハケメ調整などもある。天井部はつまみ部のあるものではナデ調整の他、ナデツケ調整やミガキ調整が施される。つまみ部のないもののうち天井部天端が盛り上がるものはナデ調整やナデツケ調整が多く、天井部側縁が張り出すものや平坦なものは木葉痕が多い。文様は小型と中型の土器に施され、大型土器は地文だけか無文である。文様位置は体部下半で、つまみ部を持つものはつまみの上部に施されることがある。半球形のもの、伏鉢形のものは外面全体に文様が施される。

文様の種類は直線文、並行直線文、並行直線文＋垂線（第123図７、第124図４）、層波文（第123図１、第124図１・５・６・13・14、第130図８～10・16）、工字文（第124図８）、変形工字文（第123図９、第124図７、第129図11、第130図15・21）、三角文（第124図２・９、第126図４）、三角文系（第130図６）、四角文（第130図17・18？・19）、同心円文（第126図20、第128図12）、轡形文（第124図10、第128図11）などがある。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第130図14～17・19・20・22・23は外面に縄文を施文している。第130図13・18・21は地文はない。第124図３、第125図15、第129図13の体部に地文やミガキ調整はなく、ハケメ調整が器面を覆っている。

内面は口縁部に直線文あるいは並行直線文が施されるものもある。口縁部に穿孔を持つものがある（第124図４・11）。中型や大型土器の多くにスス・コゲが付着している。

**（その他の土器）** 第131図１～11はその他の土器である。

１～３は尖底の底部破片で、製塩土器と推定される。１の外面は縦方向のケズリ調整が施され、ススの付着はないが煤けた色を呈し、赤変し剝落している。内面は縦方向の粗いケズリ調整の後縦方向のミガキ調整が施されている。２は１に比べて低部に丸みを持つ。外面は縦方向のケズリ調整の後縦方向の粗いミガキ調整が施され、ススの付着はないが煤けた色を呈し、赤変し剝落している。内面は横方向のミガキ調整が施されている。３は底部の先端が突出している。外面は縦方向のナデ調整の後縦方向の粗いミガキ調整が施され、若干摩滅している。内面は縦方向のナデ調整の後縦方向の粗いミガキ調整が施されている。ス・コゲの付着や赤変もない。

５は脚部と思われる破片である。破片下部は肥厚し、端部は平坦である。肥厚したところに４本の並行沈線を施

文し、穿孔が付されている。穿孔は孔周辺に微細な剝落等もないことから、焼成前に穿ったものと考えられる。破片上部には方形状と思われる透かしが配されている。

11は把手付土器と思われる。底部から把手の取り付け部にかけて残存している。底部は不整円形状で、把手は底部に接するように取り付けられている。外面はミガキ調整、内面はナデツケ調整で一部分にミガキ調整が施されている。また、全面に赤彩が施されている。

**（ミニチュア土器）** 第131図12～25はミニチュア土器である。鉢形が多く、底部は平底の他、尖底や丸底などがある。12は双口形のもので、22は俯瞰形が楕円形を呈するものである。

**［土製品］**

土製品は19点を図示した（第３分冊第153図１～３・６・９～13・17・18・21・24・43・47・49～51・54）。

１～３はスプーン形土製品である。１・３は掬い部の一部分が残存し、舟形を呈する。２は掬い部の一部分と柄部の端部が欠損している。柄部は端部へ向かって徐々に細身になっていく。

９～13は土玉で、球形を呈し小孔をもつ。小型のもの（９・10）と大型のもの（11～13）とがある。

17・18・51は土錘である。17・18は円筒形を呈し、長軸の向きに孔が穿たれている。小型のもの（17）と大型のもの（18）とがある。51は土器の破片を加工して作られたもので、楕円形を呈し抉りを加えている。

21・24・43・47・49～50は土器片製円盤で、土器の破片を素材としている。円みを持ったもの（21）や角張ったもの（24・43・47・49・50）がある。円盤の中央に孔が穿たれているものと孔がないもの（49～50）がある。

54は円筒形を呈し、上・下部に欠損箇所がある。器面には四角文と思われる文様が描かれている。

**［木製品類］**

SR １自然流路跡堆積土13層およびSR ２自然流路跡堆積土７層・８層から出土した弥生時代中期の木製品類には、斧膝柄、斧直柄、直柄平鍬、直柄叉鍬、鍬直柄、組合せ平鋤、泥除、掘り棒、掘り棒状木製品、棒状木製品、竪杵、横槌、臼、容器、木錘、弓、建築部材、杭、その他不明木製品、板材、分割材、樹皮などがある。また、形態や作りから叉鋤、織機緯打具、織機腰当て、儀杖などの可能性が考えられる木製品も出土している。第４分冊第１図から第82図に器種ごとに図示した。

**斧膝柄**は成品１点（第１図１）と未成品６点（第１図２～５、第２図１・２）の計７点出土している。すべて斧台と握りが同一の材から成る一木式のものであり、用いられている樹種もすべてクヌギ節である。第１図５を除き部分的に欠損している。未成品の製作作業の進行段階は異なっているが、いずれの資料にも斧台の装着溝もしくは装着面は作り出されていない。

**第１図**１は成品であり、握りの大半を欠損し、斧台にも部分的な欠損がみられる。斧台後面は中央がわずかに高く作られ、稜を形成している。斧台前面の装着溝に対応する位置には、紐かけのために一段彫りくぼめられた長さ2cm弱の緊縛部が作られている。斧台長は14.1cm、石斧の装着溝は長さ5.2cm・幅1.4cm・深さ0.7cmであり、小型の石斧が装着されたものと考えられる。斧台右側面のｃ面には先端から斧台中央までのびる断面Ｖ字形の溝が作られており、石斧を装着して紐で緊縛したのち、この溝に楔を挿入し、緊縛をより強固にするための工夫と考えられる。２と４は握りが部分的に残されている未成品である。斧台の基部と先端に加工痕が認められるものの、斧台後面が割り裂き面であるほかはすべて自然面であり、４には樹皮も残されている。３は握りと斧台の一部を欠損する未成品である。斧台の基部と先端に加工痕が残され、斧台後面と側面は割り裂き面である。５は完形の未成品である。斧台の基部と先端および左側面に加工痕が残され、握りの斧台基部近くにもわずかな加工痕が観察される。握りはゆるくＳ字状に弯曲している。

**第２図**１は握りと斧台の１側面を欠損しているが、他の未成品に比べ製作作業が進行しており、斧台側の端部には１段の段差が作り出されている。また、斧台右側面から握りにかけて加工痕が明瞭に残されている。２は握りと

斧台の一部を欠損する未成品である。

未成品の斧台後面のほとんどは割り裂き面であるが、平坦なもの（第１図３・４、第２図１）と中央を高く作り稜を形成するもの（第１図２・５、第２図２）とが認められる。

**斧直柄**は小破片も含めると、成品と未成品を合わせて39点出土している。内訳は成品26点、未成品13点であり、すべて分割材を素材としている。用いられている樹種はクヌギ節もしくはコナラ節であり、クヌギ節が多く、26点と全体の３分の２を占めている。成品を第２図３～第９図３に図示し、未成品を第９図４～第14図３に図示した。

成品の斧直柄には全体の形状を把握できる資料が５点認められる。全長は67.9cm～76.2cm であるが、ばらつきは少なく、第３図１を除く４点は70cm を超えている。未成品では全長の判明する資料は９点確認され、最も短い第10図２は69.7cm、最も長い第12図２は81.5cm である。最大12cm 近くの開きがあるが、75cm 前後の資料が多く（第10図１、第11図１・２、第12図１）、それほどのばらつきは認められない。

頭部と握り部の境に段を作り出し、両者が明瞭に区別されるもの（**第２図**４、**第３図**１、**第４図**１）と、段はなく境が不明瞭なもの（第２図３、第３図２）とがある。破損資料を含めると、頭部と握り部の境に段の有無を確認できる資料は成品では21点認められ、成品に近い段階まで製作作業の進行した未成品２点を加えると計23点である。そのうち、境に段を作り出したものは20点認められる（87％）のに対して、境が不明瞭なものは前述したほぼ完形の資料２点と**第７図**１の計３点のみ（13％）である。頭部と握り部の境に段を作り出した資料が大部分を占めている。

握り部の断面形は円形を呈し、基部の末端にはすべてグリップ・エンドが作り出されているが、第２図３は握り部とグリップ・エンドの境が不明瞭であり、末端で肥大するように作られている。同様な例は**第６図**３などにもみられるが多くはない。

石斧装着孔には縦長の楕円形を呈するもの（第２図４、第３図１、第４図１）と隅丸方形を呈するもの（第２図３、第３図２、**第５図**２）とがある。装着孔の頭部先端側は柄の長軸に対してほぼ直交に近い方向で作られているのに対して、握り側は頭部上面側（石斧が装着された場合の基部側の面）では頭部の中央付近に位置するが、頭部下面側（石斧の刃部側の面）では握り寄りに作られている。そのため、上面側の段に比べ、下面側の段の位置が握り寄りになるものが多い。

装着孔の握り寄りに認められる段は突出の度合いの違いはあるものの、ほとんどの資料に作り出されている。例外的に、第５図２のように頭部下面側の段が形成されていないものも認められる。段から頭部先端にかけてはわずかに広くなるものの、ほぼ平行するものが大部分である。先端側の断面形は隅丸方形を呈するものが多く、第３図の１と２のように頭部先端が広がり、断面形が隅丸長方形を呈する例は稀である。

第５図６の装着孔から握りに至る下面には刻みが３ヶ所入れられている。

第６図１の握りは焼けて欠損しており、残存する一部も炭化している。

**第８図**５・６と**第９図**１～３は頭部の破片資料である。頭部先端と装着孔の一部が残されていることから斧直柄の成品と判断したが、加工痕の粗く残されている資料もみられることから、成品に近い段階まで製作作業の進行した未成品が含まれている可能性も考えられる。

第９図の４と５は石斧装着孔から頭部先端にかけてを欠損している。装着孔が穿たれているが、加工痕を握りおよび握りと装着孔の間に明瞭に残していることから未成品と判断した。

**第10図**１は石斧装着孔が穿たれていない未成品であるが、握りを含む全体の形状がほぼ整えられた段階の未成品である。

第10図２と**第11図**１は削りと割り裂きによって頭部の形態を整え、頭部中央に段を作り出した段階の未成品である。段の位置が左右で異なっていることから、すでにこの段階で上面側、下面側は決定されていた可能性が高い。

段から頭部先端にかけての上下両面はほぼ平行しており、頭部先端での広がりはごくわずかである。第10図２のｃ面の頭部には短軸方向の刻みが２ヶ所確認され、装着孔を穿つための目安と考えられる。

第11図２はｄ面に石斧装着孔の位置を刻み込んだ未成品である。握り部と頭部の幅はそれほどの違いがなく、装着孔の下端の段も作り出されていない。また、握り基部には段が認められ基端側で細くなっている。このような形状の未成品は、製作作業の進行したものにもそれほど進行していないものにも認められないことから、石斧の柄に転用されたものである可能性が高い。断面形が円形に近いことと握り基部に段が認められることから、竪杵の握り部から一方の搗き部を転用したものと考えられる（飯塚武司氏のご教示による）。

**第12図**と第13図および第14図１は、頭部と握り部の境に削りと割り裂きによって段を作り出した段階の未成品であり、頭部中央の段は明瞭には作られていない。

第12図の１と２は上面、下面と両側面が割り裂きによって明瞭に区別されており、頭部の断面形は長方形状を呈している。第12図１の頭部中央にはｂ面とｃ面にはわずかな削り込みが認められ、段を作り出すための目安と考えられる。

**第13図**１のａ面は自然面であり、他の面は頭部と握り部を分ける加工痕と両端の加工痕を除き、割り裂き面である。ｂ面およびその裏面には頭部と握り部を分ける加工痕が認められ、握り部側はそこから割り取られて頭部と区別されている。ｂ面の頭部中央には削り込みによる段が作られている。

第13図２はｃ面を除く各面に頭部と握り部を分ける加工痕が認められ、握り部は割り取られて断面形は不整な方形を呈している。頭部の断面形は扇形を呈しており、素材は直径22cm 程の丸太材の四分割材である。頭部には樹皮が残存している。

**第14図**１のａ面には自然面が残されており、ｂ面とその裏面に施された加工によって頭部と握り部が分けられている。ｂ面側とその裏面側の頭部は割り裂きによって素材の稜線が除去され、平坦面となっている。握り基部を欠損する。

第14図２はａ面を除く各面に頭部と握り部を分けるわずかな加工痕が認められることから、斧直柄の未成品と判断した。握り基部は焼けて欠損している。

第14図３は頭部と握り部を分けるためのものと考えられる加工痕が部分的に残されていることから、斧直柄の製作作業のあまり進行していない、製作工程初期段階の未成品と考えられる。

**直柄平鍬**を第15図から第36図に図示した。小破片を含む合計点数は73点であり、内訳は成品32点、未成品41点である。成品の中には柄を部分的に残存している資料が６点確認される。成品の後面（鍬表）にはすべて両端の尖る舟形の着柄隆起が作り出されており、その中央に穿たれる着柄孔は隅丸方形を呈する。鍬身に用いられている樹種はケンポナシ属（第23図２）とコナラ節（第33図２）の資料が１点ずつ含まれるが、ほかの71点はすべてクヌギ節である。鍬柄の樹種は６点中、ミズキが４点であり、ほかはクリとエノキ属が１点ずつである。したがって一般的には、鍬身にはクヌギ節、鍬柄にはミズキが用いられていたものと考えられる。鍬身はすべて柾目材を縦方向にして用いており、鍬柄は分割材が使用されている。

**第15図**１は柄の基部を欠損する直柄平鍬である。柄の残存長は92.0cm であり、欠損部はわずかなものと考えられる。鍬身を上端面から見た場合（ｄ面）、柄は身に対して直交せず、使用者から見てわずかに基部側が左に振れている。短軸着柄角度は88度である。鍬身の平面形は楕円形を呈しており、前面（使用者側の面、鍬裏、図のａ面）の着柄孔の直上には泥除装着のための約2cm 幅の突帯が横方向に作り出され、左端は側縁よりわずかに突出している。着柄隆起は幅が狭く、両側面および上端側に加工痕を残している。柄の先端側は着柄孔に合わせて断面隅丸方形に仕上げられているのに対して、基部側では縦長の楕円形を呈している。

**第16図**１～３は頭部が三角形に作り出されており、着柄孔に接する位置もしくはその直上に泥除装着装置として

の段が設けられている。段の端部は側縁よりわずかに突出する。2の着柄隆起は、長軸が鍬身の長軸方向に対して平行ではなく、刃部側の先端が若干右に振れている。1の頭部前面には泥除装着装置の段のほかに、先端側に横方向の段がもう1段作られ、さらに中央には鍬身の長軸方向の稜が形成されている。長軸方向の稜は後面の中央にも認められる。2と3の着柄孔には柄が残存している。

**第17図**に図示した直柄平鍬の中で頭部形態が明らかな資料は2・3・5であり、2は上端がわずかに外弯する台形状を呈し、3の上端は弧状を呈している。5の頭部は大半を欠損するが、隅丸三角形と推定される。前面の着柄孔の上部に泥除装着のための段もしくは突帯が設けられており、端部は側縁よりわずかに突出する。泥除装着装置の段や突帯は一般的には、着柄孔に接する位置か、もしくはその直上に作られるが、4の着柄孔と突帯の間は約2cmほど離れている。2～4の後面中央には鍬身の長軸方向に稜が形成されており、2にはさらに着柄隆起中央から側縁の突起に延びる稜線が認められ、前面の頭部中央にも長軸方向の高まりがわずかに残されている。4のc面右上半は炭化しており、その欠損は焼失によるものである。4と5には柄が残存している。

**第18図**の1～4は成品の破損品であり、5は未成品と考えられる。1は刃部の刃縁側を欠損し、4は頭部側を欠損するが、着柄孔の周辺は残存しており、前面に段や突帯などの泥除装着装置が設けられていないことが確認される。2の前面も平坦であり泥除装着装置は認められない。

第18図1の頭部両側縁には着柄孔の位置から上端縁にかけて3段の段が作り出され、上端縁はほぼ平坦である。長軸着柄角度は71度、短軸着柄角度は79度である。後面側には加工痕が残されている。また、それほど明瞭ではないが、着柄隆起中央から側縁の段に延びる稜線が観察される。前面の刃部左側縁は外弯するのに対して、右側縁は直線的であり、刃部から頭部にかけて側縁から1cmほど離れた位置に稜線が認められ、断面図にみられるように面取りされた状態に近い。また、頭部の段も左側にくらべ丸みを帯びていることから、鍬をねかせ、側縁を刃部として使用する、たとえば田面を平坦にするような作業にも用いられた可能性が考えられる。

第18図2は3分の2程を欠損するが、着柄孔の一部と前面左側の上端面から刃部にかけての部分を残しており、全体の形状を推定することは可能である。平面形は長方形を呈していたものと考えられ、着柄隆起は剝落痕から舟形を呈し、着柄孔は隅丸方形と推定される。頭部の側縁には4段の段が作り出され、着柄隆起中央から刃部寄りの段へ延びる稜線が認められる。刃部は焼けて炭化している。

第18図3は着柄隆起を中心として鍬身を部分的に残存しており、両端の尖る舟形の着柄隆起と隅丸方形の着柄孔、そして泥除装着装置の段がわずかに確認される。着柄孔には柄の一部が残されている。

第18図4は刃幅の広い直柄平鍬である。着柄隆起に加工痕が観察される。

第18図5は着柄隆起を作り出し着柄孔も穿たれているが、全体の形状は整えられておらず、刃部の厚さも成品にくらべて厚いことから成品に近い段階まで製作作業が進行した未成品と判断される。前面には着柄孔の直上に泥除装着のための段が作られており、頭部上端側が薄くなっていることから突帯を作り出す予定であったものと考えられる。

**第19図**と**第20図**には着柄隆起や着柄孔、泥除装着装置の突帯などが残存していることから直柄平鍬と判断した破片資料を図示した。

第19図1・3・6は幅の広い直柄平鍬であり、泥除装着装置は突帯によるものである。刃部側に比べて頭部の幅は狭く、ほかの直柄平鍬と比べ、泥除装着のための突帯から上端までの長さは短い。また、刃部は1cm前後と非常に薄く作られている。以上のように、幅の狭い直柄平鍬とは異なる特徴が確認される。

第19図4・5および第20図1・2は欠損部の多い破片資料であるが、幅の広い部類に属するものと考えられる。

第20図6～12は成品の着柄隆起部分のみが残存する資料であり、両端の尖る舟形を呈し着柄孔は隅丸方形である。

第20図7・8・11には前面側に泥除装着装置の突帯がわずかに残存している。

第21図から第36図には、直柄平鍬の未成品を製作作業の進行したものから初期段階までを、製作段階を遡る順で図示した。

**第21図**と**第22図**１・２は着柄隆起が作り出され、着柄孔が穿孔された段階の未成品である。第21図１を除き、前面側には泥除装着のための段が形成されており、この段は着柄孔穿孔前の段階である第22図３にも設けられていることから、第21図１は泥除装着装置の作られないタイプの未成品と考えられる。第21図１・２および第22図２の着柄隆起両端の尖る舟形に整形されているが、第21図３と第22図１では両端の尖端部はまだ形成されていない。

第22図３には舟形に整形された着柄隆起の中央に縦3.6cm、横2.9cm、深さ1.5cm の方形の彫り込みが認められ、着柄孔穿孔作業が完了していない段階の未成品である。

第23図から第28図は着柄孔はまだ穿たれていないが、着柄隆起が舟形に近い形状まで仕上げられた段階の未成品である。この段階では、泥除装着装置の段もしくは突帯は作り出されていない。

**第23図**１は成品、未成品をあわせた中で最も小型の資料である。着柄隆起部はほとんどを欠損しており、基底部がわずかに残存するのみである。

第23図２は出土直柄平鍬73点の中で唯一のケンポナシ属を用いた資料である。着柄隆起の側面と上面を分ける稜線は鋭く、上面の中央には長軸方向の稜線が形成され、尖端部も鋭く作り出されている。

第23図３と**第24図**の１と２は幅の広い未成品であり、頭部上端縁は弧状に整形されている。

第24図３の刃縁と上端縁は残されているが、両側縁はすべて欠損している。

**第25図**２の破損は焼失によるものであり、後面には炭化した面が広範囲に認められる。

**第26図**１は刃部が薄く仕上げられ、側縁と刃縁も整えられている。２は頭部の整形が不充分で、着柄隆起の形状も不整形である。着柄隆起下端は明瞭ではなく、身から徐々に厚みを増すように作り出されている。

**第27図**２は上端縁が残されているが、両側縁と刃縁を欠損しており、後面の遺存状態も良好ではない。

第27図３と**第28図**１は幅の広い未成品であり、頭部上端縁は直線的で、全体の形状は長方形を呈している。

**第29図**１～３の着柄隆起は身部と明瞭に分かれて作り出されているが、着柄隆起の形態は舟形を呈しておらず、長方形もしくは方形である。

第23図～第29図の未成品の観察からは、着柄孔を穿孔する前に着柄隆起を舟形に整形するものと理解される。しかし、第21図３と第22図１は着柄孔が穿たれているものの、着柄隆起両端の尖端部はまだ形成されていない。したがって着柄隆起の整形後に着柄孔を穿孔することを原則とするが、必ずしも厳密な先後関係はないものと考えられる。

**第30図**と**第31図**１・２は頭部と刃部が作り分けられ、側面が形成された段階の未成品である。刃部よりも頭部側がわずかに長く作られている。頭部中央には着柄隆起の位置を意識した平坦面が設けられており、頭部の横断面形は、下底の両端を切り落とした扁平な台形状を呈する。頭部と刃部の境が明瞭なものが一般的であるが、第30図３の境は不明瞭で、刃部から頭部中央に向けて徐々に厚みを増している。

第31図３と**第32図**はミカン割り材を素材として、頭部と刃部を作り分けた段階の未成品である。側面はまだ形成されていない。頭部と刃部を分ける加工以外の、前面と後面への加工は少なく、ミカン割りによって製材された際の割り裂き面が大きく残されている。第31図３と第32図１の側縁の一方は樹皮を除去した自然面を残している。

**第33図**１はミカン割り材の表裏両面の中央付近に、短軸方向に浅い加工が連続して施されている。直柄平鍬の頭部と刃部を分ける目安と理解し、製作工程初期段階の未成品と判断した。ｂ面は樹皮を除去した自然面である。

第33図２は着柄隆起を形成する部分を粗く作り出した未成品と考えられる。しかし、直柄平鍬に用いられている樹種のほとんどはクヌギ節である（73点中、71点）のに対してコナラ節が用いられていること、ほかの直柄平鍬とは異なり隆起部から上端縁までには約18cm の距離があることなどから、異なる器種の未成品である可能性も考え

られる。

**第34図**１は頭部と刃部の片面の大半を欠損する未成品である。

第34図２と**第35図**は２連の未成品であり、ａ面の右側面は樹皮を除去した自然面である。着柄隆起はともに舟形に整形されている。第34図２は平鍬の上端面と上端面が接するように、中央部に着柄隆起を直列に並べて作り出しているのに対して、第35図は同一方向に刃部を向けて２個体を連ねた状態である。第34図２の直列する２つの着柄隆起は、幅が等しく、後面からの高さも同一であることから一体のものとして整形された後、分離された可能性が高い。第35図の平鍬Ｂの刃縁は樹皮側から樹芯に向かう斜めの切断面によって形成されており、原木を伐採した時点か、もしくは切断した際の面を残しているものと考えられる。

**第36図**は同一方向に刃部を向けた２連の未成品である。ミカン割り材を素材とし、ｂ面に着柄隆起を形成する部分を２ヶ所粗く作り出した段階であり、ｂ面とｃ面には素材の割り裂き面を大きく残している。ａ面は樹皮を除去した自然面である。刃部側には、樹皮側であるａ面から樹芯に向けて伐採あるいは切断時の面が残されている。上端は切り込みを入れた後、最終的には折り取られている。

**第37図**１は**直柄叉鍬**の破損品である。頭部から着柄隆起にかけてと２本の歯が残存しており、両側縁を欠損する。残存する歯の一方が着柄隆起の延長上に位置することから奇数の歯が作られていたものと考えられ、側縁の残存状況により５本歯の直柄叉鍬と推定される。直柄平鍬と同様に、着柄隆起は両端の尖る舟形を呈し、着柄隆起の中央に穿たれた着柄孔は隅丸方形である。頭部上端の形状は山形と推定される。頭部側縁には１段の段が形成され、Ｗ字状を呈していたものと考えられる。歯の長さは着柄隆起の延長上が17.3cm であり、残る一方は17.8cm である。歯の断面は直径2.3cm の円形を呈し、中央から先端に向かって徐々に細くなる。頭部下半には、推定される側縁と着柄隆起との中間に直径７～８㎜の用途不明の孔が２孔穿たれている。前面の着柄孔の直上には泥除装着装置状の突帯が形成されており、突帯から刃部寄りまで１段下がった状態で、刃部との境でまた突帯状に１段高く作られている。用いられている樹種は、直柄平鍬の大半を占めるクヌギ節である。

第37図２～５および第38図は**鍬直柄**と考えられる棒状の木製品である。いずれも欠損している。

第37図２～５は、分割材を素材とすること、断面形が楕円形もしくは円形に近い楕円形に整形されていること、樹種は２・４・５がミズキ、３がクリであり、鍬身の着柄孔に残存する直柄の樹種と同様であることなどから鍬の直柄の可能性が高いと判断した。

また**第38図**は分割材を断面不整長方形に整形しており、特に３と４の一端が第15図の直柄平鍬に残されている柄の先端と同様な形状であることから、鍬直柄の未成品と判断した。第15図に残されている直柄の断面形は、先端側が着柄孔に合わせた隅丸方形であり、基部側は縦長の楕円形を呈している。それに対して第38図の資料は楕円形に整えられた部位が認められず、成品への仕上げまでには至っていないものと考えられる。

**第39図**１は大きく欠損しており、柄から身にかけた部分を残すのみである。残存する柄のｂ面側が平坦であることにより膝柄鍬の可能性も考えられるが、破損が大きく、残存部では軸頭部は確認されないことから、柄の部分をを膝柄鍬の着柄軸と断定することは不可能であるため、掘り棒状木製品として報告する。身部の推定幅は約8cm であり、表裏両面に加工を施し刃部を形成している。刃縁は残存していない。

第39図２は身の３分の１ほどを欠損する**組合せ平鋤**である。両肩は失われているが、着柄軸から左右に肩が水平に延びる角肩と考えられる。3.5cm 幅で作り出された着柄軸には欠損部があり、厳密な長さは不明であるものの、出土状態から復原し、約9cm の長さと推定される。着柄軸の頭部のｂ面側に1.2cm 前後のそれほど高さのない突帯が作られている。身の両側縁は平行し、刃縁の大半は欠損しているが、弧状を呈するものと推定される。身は短軸方向にわずかに弯曲しており、着柄軸の延長上には断面三角形の突帯が身の中央近くまで作り出されている。身の中央部のやや刃部寄りにみられる孔は破損によるものであり、当時の穿孔ではない。

第39図３は長さ30cmを超える扁平な歯を２本もしくはそれ以上作り出した**叉鋤**と考えられる木製品である。上端は水平に整えられ、直角に折れて側縁となっているが、上端の残存する範囲内では上部へ延びる部分は確認されない。最大厚の位置は上端周辺に位置し、厚さは2.4cmである。歯の幅はｂ面左側が7.3cm、右側は5.1cm以上であり、歯の厚さは1.6～1.7cmである。

**泥除**を第40図から第45図に図示した。小破片を含む合計点数は20点であり、その内訳は成品８点、未成品12点である。樹種同定を行わなかった１点を除き、すべてクリの板目材が用いられており、木目方向を横にして使用されている。成品には完形のものはなく、すべて破片資料である。身が非常に薄く作られている（0.8～1.4cm）ため破損しやすく、完形品のみられない原因と考えられる。また、半数を超える５点の資料（第40図１、第41図１～４）に補修孔が認められることから、破損は使用中にも頻繁に起きていたものと考えられる。平面形は頭部が狭く末端の広い台形状を呈している。使用者側の面（前面）は着柄孔周辺が最も高く作られた緩やかな曲面をなし、それに対応して後面側は内弯する。短軸方向にくらべ長軸方向の弯曲の度合いが強い。後面の着柄孔の周囲には縦に半割した逆円錐形を呈する着柄隆起が作り出されており、着柄孔はその上面から使用者側に向かう方向に穿たれている。着柄孔は隅丸方形を呈する。着柄孔の角度を求められる資料は未成品を含め３点認められるだけであるが、身に対する柄の基部側への方向は34～48度と鋭角で、泥除は柄に平行気味に装着されたものと考えられる。

**第40図**１の上端には着柄孔の直上に小さな孔が穿たれており、両端を欠損するので詳細は不明であるが、いくつかの孔があけられ、鍬への装着にかかわるものと推定される。また、下端の残る**第41図**３・４にも補修孔以外に端部寄りの中央に小孔が１孔穿たれており、同様の性格のものと考えられる。

**第42図**１・２は着柄孔が穿たれた段階の未成品であり、ともに着柄隆起を欠損している。厚さの違いから１の方がより製作作業の進行した未成品と考えられる。２の前面には加工痕が明瞭に観察される。３は着柄隆起から１側縁にかけた部分のみが残存する破片資料である。着柄隆起を逆台形状に整形した段階であり、着柄孔は穿孔されていない。

**第43図**は全体の形状を整え、逆台形状の着柄隆起を作り出した段階の未成品である。１の前面中央には加工痕が明瞭に確認されるが、上下両端寄りは素材の割り裂き面である。長さより幅がわずかに広く、全体の形状を確認できる成品が残されていないため断定はできないが、横長もしくは縦と横の差があまりない成品に仕上げられた可能性が考えられる。２は１に比べ縦長で、側面の弯曲度合いは弱い。３は下半を欠損している。着柄隆起は低く、上端まで延びており、前面右側縁の欠損部寄りに2cm弱の突出部が残されるなど１・２と異なる点が認められるが、上端から側縁にいたる形態と側面観、クリの板目材を横に用いていることなどから泥除の未成品と判断した。

**第44図**１は後面の大部分が剝落しており、着柄隆起も確認されないが、クリの板目材を木目方向を横にして長方形に整形していることから泥除の未成品と考えられる。前面左側縁の下端に幅2cm、長さ5cmほどの用途不明の突起が作り出されている。２は着柄隆起部のみ残存する資料であり、３と４は泥除の未成品の下端に類似した板目材であり、４の樹種がクリであることから泥除未成品の破片と理解した。

**第45図**１・２は全体の形状を長方形に整形し、着柄隆起部分をわずかに逆台形に作り出した段階の未成品である。前面の上下両端寄りには素材の割り裂き面が残されている。

**第46図**から第52図は中在家南遺跡および押口遺跡の調査報告書において「打棒」として報告された木製品である（工藤ほか　1996）。本報告では指摘される類似性に検討の余地があると考えられることから「打棒」の名称は用いず、幅の狭い身が作り出された形状により、仮に「**掘り棒状木製品**」として報告する。

第46図と第47図は成品の破損品と身部のみが残存する破片資料である。用いられている樹種はクヌギ節もしくはコナラ節であり、半割材もしくは分割材を素材としている。

成品の握りは長さ67.3～80.9cm程度で、断面形は直径2.5～3.0cmの円形に仕上げられ、握り基部の末端が残さ

れた資料にはすべてグリップ・エンドが作り出されている。身部の片面の中央には鎬状の稜線が形成され、先端で肥厚する。側縁は薄く仕上げられており、断面形は、底辺がわずかに外弯する扁平な三角形状を呈する。その裏側の面にはほとんど稜は形成されず、ほぼ平坦で、先端が肥厚する側に向かう緩やかな曲面に仕上げられている。

**第47図**１は握りの基部側を欠損しており、身にも部分的な欠損がみられる。身の両側縁には摩耗が観察され、中央部は摩り減って内弯している。使用状況を示す良好な資料であり、薄く仕上げられた両側縁を刃部として身の短軸方向への動きを伴う作業に用いられた結果によるものと考えられる。

第47図２には鎬状の稜線が認められず、断面形も扁平な楕円形状を呈しており、他の資料とは異なった形状である。

**第48図**１および第49図～第52図は未成品であり、製作作業の進行したものから初期段階までを、製作段階を遡る順に図示した。

第48図１の未成品は成品に近い状態まで製作作業が進行している。全体の形状はほぼ整えられているが、加工痕が表裏両面に明瞭に残されていることから未成品と判断される。身と握りの接する部位に半球状の作り出しが形成されており、他の資料にはみられない特徴的な形態である。

第48図２・３は成品と考えられるが、他の成品に比べ残存する身の厚さが厚く、未成品の可能性もある。

**第49図**１と**第50図**１・２は身の表裏両面が平坦に整形された段階の未成品である。第49図１と第50図１は半割材を素材としているが、第50図２は分割による柾目材である。

第49図２と**第51図**１・２、**第52図**１は身と握りを区別する部分に加工を施し、その部位からの割り裂きによって握りを粗く作り出した段階の未成品である。第49図２と第51図１・２は半割材を素材とし、第52図１は分割材が用いられ、身と握りを区別する部位の加工痕と割り裂きによる握りの粗い作り出しはｃ面にのみ認められる。

第52図２は身と握りを区別する部分に加工が施されていることから掘り棒状木製品の未成品と判断した。握り部は割り裂きによって身部よりも細く作られ、ａ面にはわずかな加工痕が確認される。

**第53図**は**掘り棒**の成品と未成品である。掘り棒状木製品とは異なり、身の先端に肥厚部は形成されていない。

第53図１は握りの大部分を欠損しており、身部の先端には焼けて炭化した部分が認められる。身と握りの境には両側縁からの抉りが認められる。ヤマグワの板目材を使用している。

第53図２・４は握り基部の末端にわずかな欠損がみられるが、ともに尖端部を形成していたものと考えられる。２の身には肩がわずかに作り出されており、身と握りは明瞭に区別される。身の平面形は隅丸長方形を呈しており、先端と一方の側縁が薄く削り出されているため、断面の形状は扁平な三角形を横にした状態である。身の法量は、長さ10.2cm、幅4.6cm、厚さ1.25cm である。握りの長さは45cm ほどと推定される。クヌギ節の柾目材が用いられている。４は割り材を素材とし、身をヘラ先状に整形している。身と握りの幅は約3.6cm であり、ほとんど変わらず、その境は認められない。握りの断面形は円形に近い不正な楕円形を呈し、身は扁平な楕円形状である。握り基部の末端と身の先端を欠損しているが、欠損部分はわずかで、全長84cm ほどと推定される。

第53図３は分割材を素材とし、身と握りを区別する段階まで製作作業が進行した未成品である。身の一方の側縁は握りから連続しており、２のように１側縁のみを薄く削り出す掘り棒の未成品と考えられる。

**第54図**には握り基部の末端にグリップ･エンドを作り出した破片資料を図示した。１～４と６は握りとグリップ･エンドとの境が明瞭であるが、５と７では握りから連続し、わずかに膨らむ程度で、その境は不明瞭である。基部末端のグリップ・エンドは掘り棒状木製品のほかに斧直柄にも作り出されることから、両者が含まれているものと考えられる。使用されている樹種から見て、クヌギ節もしくはコナラ節の資料はそのいずれかと考えてほぼ間違いないであろうが、２はミズキが用いられ、握りの断面形も扁平な楕円形を呈していることから、ほかの資料とは異なる成品の基部である可能性が高い。また、４は他の資料に比べ小さく、細く作られており、種類の異なる成品で

ある可能性も考えられる。

**第55図**には**棒状木製品**を図示した。いずれも破損品であり、部分的な破片も含まれることから、たとえば鍬の直柄などの一部分が残された資料である可能性も考えられる。

第55図１はイヌガヤの心持ち材を用いており、枝を払い落とした加工痕と欠損部寄りに全体を一周する細かな加工が認められる。加工痕は欠損のみられない一端にも観察され、その先端は摩滅している。２～８にはすべて分割材が使用されている。

**第56図**と第57図１～３は**竪杵**の成品と未成品である。成品６点、未成品１点の計７点出土しており、成品にはすべて斧の柄や鍬に多用されるクヌギ節もしくはコナラ節の分割材が用いられているのに対して、未成品だけはトネリコ属の心持ち材が使用されている。成品はすべて破損しているが、第56図１のように搗き部の先端近くまで残存する資料も認められることから、全体の形状を確認することは可能である。握り部の中央には推定直径4.3～5.7cmほどの節帯が１ヶ所作り出され、搗き部の握り部寄りには隆帯が作り出されている。

第56図１は全長122cmほどと推定され、先端まで残存する搗き部の長さは45.5cmであり、先端が丸くなっているのに対して、欠損している搗き部は先端が尖り気味であったものと推定される。搗き部の握り部寄りはやや細く削られており、握り部との境の隆帯は幅5cm弱で作り出されている。握り部の長さは27.3cmである。

第56図２は一方の搗き部から握り部中央付近まで残されている資料である。搗き部の長さは44.6cmであり、握り部の推定長は27.7cmである。搗き部の握り寄りはわずかに削りこまれ、握り部との境には幅5cm弱の隆帯が作り出されている。先端は丸くなっていたものと推定される。

第56図３は一方の搗き部の破片資料である。先端は尖り気味であり、握り寄りは焼けて炭化している。

第56図４は搗き部の一方と握りをわずかに残しており、搗き部の長さは64.1cmである。握り寄りには３条の隆帯が作り出されており、幅は２～2.3cmである。搗き部の先端には平坦な面がわずかに残されている。

**第57図**１は搗き部の一方の破片資料である。先端は丸くなっている。

第57図２は一方の搗き部から握り部中央付近まで残されている資料である。搗き部の長さは67.9cmであり、握り部の推定長は38.0cmである。搗き部の握り寄りには隆帯が作り出されことが一般的であるが、表面の欠損によってその有無は不明である。搗き部の先端には平坦な面が残されており、中央から先端にかけて炭化した部分が広く認められる。

第57図３は出土した竪杵の中で唯一の未成品である。全長168.2cmと長大で、直径約10cmのトネリコ属の丸太材を素材としており、樹種も木取りも他の竪杵と異なっている。握り部の長さは34.7cmであり、中央には作り出しかけた１ヶ所の節帯が認められる。節帯の両側の握り部には加工状況の違いが認められ、一方が明瞭に一段下がった状態まで削り込まれているのに対して、残る一方はわずかに削られた程度であり、節帯との区別も不明瞭である。搗き部の長さは66.6cmと66.9cmであり、一端には原木を伐採した時点か、あるいは切断した際の面が残されている。

第57図４は握り部の大部分をを欠損する**横槌**と考えられる。ニレ属の心持ち材を素材とし、握り部を削り出している。身部（敲打部）の長さは17.5cmであり、断面形は5.1～5.4cmのわずかに歪んだ円形を呈している。

第57図５はｃ面に使用によるツブレが観察されることから**臼**の破片と考えられる。トチノキの心持ち材を縦木取りして作られている。

**第58図**と**第59図**には**容器**とその未成品を図示した。

第58図１は脚をもたない、底部の平坦な盤である。素材はクリの半割材と考えられ、木表側を刳り込んで内面としている。法量は長さ56.8cm、推定最大幅22cm、最大高5.9cmである。短辺の一方は直線的に仕上げられているが、明瞭な加工痕を残している。長辺に比べ器壁は厚く、最も高く作られている。それに対して残る一方は、中央の突

出した、やや開いたU字状の平面形を呈しており、中央部の高さは長辺よりも低く、器壁は長辺と同様に薄く作られている。

第58図2も底部の平坦な盤である。板目材を素材とし、木裏側を刳り込んで内面としている。内面にも加工痕が明瞭に観察されることから未成品の可能性がある。短辺の大部分と長辺の一方を部分的に残し、全体では約3分の1程度を残存する程度であるが、平面形は三角形状を呈していた可能性が考えられる。

第58図3は四脚の盤もしくは槽の底部である。長軸約14cm、短軸6cm前後の脚が2つ残されており、高さ3～3.5cmで短辺側が高く作られている。a面には焼けて炭化した部分が認められる。

第59図1は長辺に平行した一対の台脚が作り出されていたと考えられる盤もしくは槽である。木表側を刳り込んで内面としている。内面から台脚の側面にかけて広く焼けて炭化しており、欠損は焼失によるものである。

第59図2は小型の椀である。横木取りで作られており、木裏側を刳り込んで内面としている。口縁をわずかに欠損するが、長軸約17cm、短軸約12cmの楕円形を呈し、高さ8.5cm、内面の深さは3.5cm程度である。器壁が全体的に厚く、外面には加工痕が明瞭に残されていることから未成品の可能性が考えられる。

第59図3は方形を呈すると推定される薄い板材であり、a面左側縁を欠損している。縁辺には直径5㎜以下の小さな孔が連続して穿孔されている。スギの板目材が用いられており、宮城県内では弥生時代のスギ材の出土は非常に少なく、搬入の可能性も考えられる。a面下端縁には小孔は9孔認められ、小孔の列に平行して1条の細い線が刻まれている。右側縁は孔の位置で破損しているが、下端寄りに6孔、中央に8孔、上端寄りに6孔確認される。上端縁の孔は1孔確認されるのみであるが、表裏両面に焼けて炭化した部分が認められ、上端縁のほとんどは焼失により欠損している。連続する小孔に紐を通し、他の部材と組み合せた、紐綴じの容器と考えられる。

第59図4は長さ31.6cm、幅10cm弱、厚さ2cmの板材の両端に2～2.5cm程度の立ち上がりを持つ木製品である。長辺を当時の面が残されているものとして図化したが、表面の遺存状況は良好ではなく、欠損面であることも考えられることから、長辺の立ち上がりを欠損した容器の可能性が指摘できる。

**第60図**1・2は、1の樹種がクリ材であり、2も同様に観察されることから、当初、泥除未成品の剝落した着柄隆起部と推定した。しかし、1・2の突出する面は木表側であり、泥除の着柄隆起は例外なく木裏側に作り出されているため、異なる木製品と考えられ、容器などの未成品の可能性がある。1のb面には焼けて炭化した面が広がっている。

第60図3はミズキの柾目材を素材とし、1側縁の両端を削り、細く作り出した木製品である。削られた側縁の中央が薄く加工されているため、断面形は細い三角形状を呈する。全長約79cm、幅8.8cm、最大厚2.5cmであり、1側縁の薄く加工された中央の範囲は約36cmである。やや大型ではあるが、断面形態を含む全体の形状から、織機の構成部材のひとつである**緯打具**（よこうちぐ）と考えられる（山田昌久氏、石田浩司氏のご教示による）。緯打具は、張りつめられた経糸群を2層に分離した隙間に交互に通した緯糸を手前に寄せる道具である。

第60図4はトチノキの板目材を素材とし、平面形が菱形に整形された木製品である。長軸の一端と短軸をわずかに欠損しているが、長軸約38cm、短軸約13cmと推定され、厚さは2.4cmである。d面側が長軸方向に緩やかに窪んでいるため側面観はわずかな弯曲が認められる。長軸の両端には突起が作り出されているが、一方は若干破損している。突起の幅は異なっており、幅の広い上端は約6cmであり、下端は約3.5cm幅と推定される。やや厚みがあるが、長軸の両端に突起を作り出し、長軸方向に緩く弯曲していることから織機の**腰当て**の可能性が考えられる。

第60図5は**木錘**である。両端を切り落とした分割材を素材とし、平面形が不整な楕円形を呈する表裏両面の中央に切込みが入れられている。

**第61図**1は赤漆の塗られた木製品であり、頭部と握りが作り出され、斧の直柄のような形状を呈している。素材はミズキの分割材である。頭部と握りとの境には2～3㎜の段が作られており、両者は明瞭に区別される。残存長

は45.1cm、握りの長さは41.3cmである。頭部は握り寄りの部分が残存しているのみで全体の形状は不明であるが、先端に向かって広がるものと推定される。残存する頭部は長さ3.8cm、幅7.4cm、厚さ3.4cmである。

握りには漆が帯状に剝落した部分が5ヶ所認められ、その幅は頭部寄りから2.5cm、2.8cm、2.6cm、0.8cm、0.8cmである。糸を巻き付けた痕跡が観察され、その後に漆が塗られていることから、糸と糸の間に線状に残された漆を確認することによって巻かれた回数を数えることが可能である。頭部寄りから30回、33回、32回と数えられ、次の幅の狭い部分では、漆の残存状況が良好ではないため正確さには欠けるが、10回巻き付けられていたものと観察される。最も基端寄りの部分には漆がほとんど残されておらず、糸が巻かれていたことがわずかに確認されるだけで、その回数は不明であるが、隣の剝落部分と幅が等しいことから10回程度と推定される。漆が帯状に剝落した部分の幅を巻かれた回数で割ることによって糸の太さを求めると、0.8㎜程度のやや太い糸であったものと考えられる。

握りのb面側の中央には漆の塗布以前に幅4㎜、深さ1㎜強の棒樋が切られており、握り基部側を欠損するが、長さは35.5cmである。基部の末端にはグリップ・エンドが作り出されている。3分の1程を欠損しているが直径約5cmの円形を呈していたものと推定され、基端面には幅3㎜の太い線刻を十字に刻み込んだ後、45度ずらして幅1㎜以下の細い線刻が十字に刻まれている。線刻は漆が塗られる前に施されている。

棒樋が切られていること、握り基端面に線刻を施していること、糸を5ヶ所に巻き付けていること、全体に赤漆が塗られていることなどから日常的な道具とは考えにくく、たとえば**儀杖**などのような特別な用途をもったものと考えられる。

同様な形状の木製品は中在家南遺跡の弥生時代中期中葉の資料にも1点確認され、全長は本遺跡例よりもわずかに長い。棒樋が切られており、帯状に塗膜の剝がれた位置も類似しているが、中在家南遺跡例では握り基部寄りに1ヶ所多く、計6ヶ所確認される。また、糸ではなく樹皮が巻き付けられていたものと考えられる。基部末端にはグリップ・エンドが作り出されているが、小さく、形状も異なっている。樹種は本遺跡例がミズキであるのに対して、中在家南遺跡例はイヌガヤが用いられている。

第61図2はヒノキとスギの板目材を樹皮紐で綴じ合わせた用途不明の木製品である。a面左側がスギの板材であり、右側縁に直径5㎜以下の孔が6孔穿たれており、その内の5ヶ所に樹皮紐が残存している。左側面は欠損面であるが、上端寄りに孔が1孔穿たれていたことが確認される。a面右側はヒノキの板材であり、左側縁にはスギの板材の孔にほぼ対応する位置に穿孔が施されているが、上端はb面側からの孔が貫通しておらず、5孔確認されるのみである。右側面は破損面であり、スギ材と同様に上端寄りに穿たれた孔を確認することができる。右側の中央に盲孔状の窪みが残されている。ヒノキは宮城県付近には天然分布はなかったものと考えられており、また、県内では弥生時代のスギ材の出土が非常に少ないことから、搬入品の可能性が考えられる。

第61図3・4は部分的に樹皮紐を巻き付け、漆が塗られた、いわゆる**飾り弓**の破片資料である。ともにニシキギ属の分割材を素材としている。3は長さ15.1cmほどが残存しており、断面形は楕円形を呈し、a面の漆の下には幅5㎜前後の棒樋が切られている。残存部の中央には細い樹皮紐が幾重にも巻かれ、幅1.5cm程度である。下地に黒漆を塗り、その上に赤漆を塗っているが、部分的に塗り残すことによって赤と黒の装飾的効果を高めている。4は長さ4cmほどしか残されておらず弓と断定はできないが、樹種が3と同じニシキギ属であり、細い樹皮紐が巻かれ、漆が塗られていることから可能性が高いと判断した。漆は黒漆である。

第61図5～7は**樹皮**である。5は約1.5cm幅の帯状に加工した樹皮を幾重かの輪を作り、その一端を3回巻き付けてまとめたものである。末端は巻き付けた内側に通し、ほどけないように処理している。6と7は何らかの成品に巻き付けられていた樹皮が外れたものと推定される。

**第62図**と第63図1はイヌガヤの心持ち材を素材とした、弓もしくは何らかの柄の可能性が考えられる**不明木製品**

である。

第62図１は一端を欠損しており、中央部には枝を払った加工痕が観察される。残されている一端には平坦な面を１面形成し、その逆側の面（ａ面）から両側面にかけて段を２段削り出している。段が形成された部分から先端に向けて徐々に細く加工されており、２段目から先端にかけても同様である。さらに先端には突起が作り出され、平坦面が形成された部位から先端にかけては、段の作られた側に弯曲している。

第62図２は両端まで完全に残されており、全長は185.4cm である。中央から下端にかけて枝払いの加工痕が残されている。末端は切断された状態である。上端寄りには平坦な面が１面形成され、その裏側から側面にかけて段が１段削り出されている。段から先端に向けて徐々に細く加工され、先端に半球状の突起が作られている。

第62図３は先端を焼失しているが、炭化部分付近に平坦面を作り出していることから１と同様の形状であったものと推定される。

**第63図**１は先端側を細く加工し、ａ面側に長さ約12.5cm の平坦面を削り出すことによって先端に3cm ほどの突起を作り出しており、加工された先端側の形態は第62図の木製品とは異なっている。弓の破損品の可能性が高い。

第63図２は両端を欠損しており、上端の欠損部寄りに加工が施され、断面形は１辺に自然面を弧状に残す方形を呈している。樹種同定は行われていないが肉眼観察ではイヌガヤと判断され、第62図１の先端付近の断面形状に類似していることから同様の形状であったものと推定される。

第63図３はクヌギ節の半割材を素材とし、やや丸みを帯びた直方体に加工した用途不明の木製品である。加工痕が粗く、未成品の可能性も考えられる。

第63図４は身と柄を掘り棒状に作り出した木製品である。柄の断面形は円形に仕上げられ、身は長方形状を呈する。クヌギ節の分割材を素材としている。身の先端と柄の末端を欠損しており、ａ面から両側面にかけて炭化面が残されていることから、身の欠損は焼失によるものである。身は左右対称ではなく、側縁の一方が柄から緩やかに広がるのに対して、残る一方は柄から直線的につながっていることから、掘り棒もしくは掘り棒状木製品の部類に含めることをためらわれたため、不明木製品として報告する。加工痕が粗く残されていることから未成品の可能性がある。

**第64図**から第69図は破損が著しく全体の形状が不明なものや、未成品と考えられるが成品を想定しにくいか根拠の希薄なもの、用途の見当がつかないものなどの不明木製品を一括して図示した。

第64図１は分割材を素材としており、断面形は不整円形に仕上げられているが、下端側はわずかに幅を増し、隅丸方形状を呈している。上下両端を欠損しており、下端の破損部にａ面からの加工が観察される。

第64図２は残存状況が良好ではないが、断面形が平行四辺形を呈するクマノミズキ類の分割材である。未成品の可能性も考えられる。

第64図３は端部寄りの両側縁に２ヶ所の抉りを施した柾目材である。ａ面の端部寄りにわずかな加工が認められる。竪杵の搗き部の一方を縦方向に割り裂いた可能性も考えられるが、断定できない。

第64図４はクヌギ節の心持ち材であるが、幹から枝分かれした部分であり、頭部を欠損した斧膝柄の未成品の可能性が考えられる。

第64図５と６は分割材を素材とし、端面と側面に加工痕を残す破片である。

第64図７はイヌガヤの心持ち材を削り、尖端部を作り出している。断面形は多角形状で、部位によって異なっている。

第64図８はクヌギ節の分割材の一端に尖端部を作り出した木製品である。

**第65図**１は中心の抜けた材を素材とし、縦杓子状の柄を作り出している。身にあたる部分は加工か施され整形されている。ｃ面の一部に焼けて炭化した部分が確認される。

第65図２はクリの板目材を素材とし表裏両面と両側縁に加工を施している。側面の一方を３分の２程度欠損している。平面形は、下半がＵ字状に整形され、上半は両側縁がわずかに内弯して上端縁に至る。上端はｄ面からの加工によって断ち切られた状態である。厚さは横断面の中央でわずかに厚くなるものの、ほぼ一定であるが、下端寄りはｄ面からの加工によって下端縁側が薄く仕上げられている。

第65図３は平面形が長方形状を呈するクリの板目材である。部分的な欠損がみられるが、長辺の一方から中央まで入る幅5cm 前後のＵ字状の抉りが確認される。

第65図４は斧の膝柄状に握りと頭部を作り出した木製品である。頭部の先端と握りの頭部寄りを欠損する。全体の加工が粗く、素材の自然面や割り裂き面を大きく残していることから未成品と考えられる。ａ面にみられるように頭部と握りの延びる方向が異なっており、約27度の角度をもっている。ｃ面は割り裂き面であるが、頭部はｂ面と上端面に施された加工によって扁平に作り出されている。上端面の基部寄りにわずかな段差が確認され、突起上の作り出しを予定していた可能性が考えられる。握りの基部側には粗い加工が施され、断面形は多角形の状態である。

**第66図**１はクヌギ節の分割材を素材としている。樹芯側の側縁の中央に加工を施して、身と柄を区別した未成品と考えられるが、どのような成品であるか想定できない。

第66図２は半割材を素材とし、斧の直柄状に頭部と握りを作り出した未成品である。斧直柄とするには小型であり、握りに対する頭部の比が斧直柄よりも大きく、樹種もクヌギ節やコナラ節ではなくミズキであることから、異なる木製品の未成品と考えられる。可能性としては、同一の樹種を用いた、第61図１の赤漆塗りの儀杖などのような特別な用途を想定した木製品が考えられる。そのような目で見た場合、握り基部側が頭部と同じ幅で残されていることは大きめのグリップ・エンドを作り出そうとしたものと想定され好都合であるが、製作工程の初期段階と考えられるため牽強的であろう。可能性の指摘にとどめておきたい。

第66図３は直径4cm 前後のイヌガヤの材を20cm ほどに切断したものである。下端側に加工を施し、わずかに尖らせている。

第66図４は心持ち削り出しの材であり、断面形状は円形に仕上げられていたものと推定されることから、柄もしくは握りの破片と考えられる。

第66図５はミカリ割りの分割材の一端に加工がわずかに施されており、未成品と考えられる。目的とした成品は不明である。

**第67図**１は柾目の板材であり、長辺の一方を直線的に作り、残る一方を外弯させた平面形に整形されている。全長96.5cm という長さに対して厚さ１～1.5cm と非常に薄く仕上げられている。何らかの部材と考えられるが、用途は不明である。

第67図２は１と類似した平面形を呈するものの、板目材であり、4.3cm と厚みもあることから、同じ種類の木製品か判断できない。また、平面形と用材からは、織機の構成部材である緯打具の可能性を指摘した第60図３との共通性もみられるが、第60図３は柾目材で、側縁の一方が非常に薄く作られている点で異なっている。ａ面は樹皮の剝がれた自然面であり、ｃ面は両端の加工面と２面の割り裂き面によって構成されていることから、中央の断面形は扁平な扇形を呈している。加工は両側面とａ面の両端にも施されているが、上端から下端までの厚さはほぼ一定である。

第67図３と４の表裏両面と両側面は割り裂きによって形成された面であり、長軸の両端に加工痕が残されている用途不明の木製品である。断面形は不整な長方形を呈している。

第67図５は両端を欠損し、全体の形状は不明である。柾目材を短軸方向に弯曲するように加工しており、両側縁がやや厚く作られているが、中央部は５㎜程度の薄さに仕上げられている。

第67図６は柄もしくは握りの破片と考えられ、第48図１に図示した掘り棒状木製品の未成品の近くから出土していることから、その一部の可能性がある。分割材であり、加工痕が明瞭に観察される。

**第68図**１は一端がやや広く、残る一端の狭い、クヌギ節の分割材である。両端以外に加工痕は観察されないが、ｃ面の中央に長軸方向に延びる稜線の上端側３分の２以上を除去した割り裂き面が残されている。製作工程初期段階の掘り棒状木製品の未成品の可能性が考えられる。

第68図２はクリの分割材を用いており、断面形は不整な隅丸方形を呈している。先端を欠損しているが、下端はおもにａ面右側面へ加工を施して尖らせていたものと推定される。上端には側面から見てＶ字状の抉りが作られている。ａ面中央には短軸方向の長さの一定しない線状のキズが10条確認される。

第68図３はクリの板目材であり、断面形は楕円形を呈する。残存する一端には加工が施され、丸みを帯びている。

第68図４は、おもに割り裂きによって断面不整方形に整えられた分割材である。表裏両面および両側面へ加工を施し、杭の先端状に一端を尖らせているが、逆側の一端は加工と折りとりによって平坦に近い面が形成されている。用途は不明である。

**第69図**１はクリの板目材を素材とし、両側面からの加工によって抉りとられ、中央部に幅5.5cmほどのくびれを作り出している。くびれ部より下半の両側縁は平行し、末端の両側面に施された加工によって尖端部が形成されている。末端のａ面には焼けて炭化した面が残されている。くびれ部の上半は一方の側縁を欠損しているが、両側面とも先端に向かって徐々に細くなるように加工されていたものと推定される。用途不明である。

第69図２は片面に樹皮の剝がれた自然面を残す板目材である。図示したａ面は割り裂き面である。一方の側縁の両端に割り裂きを伴う加工を施している。下端側は外弯する弧を描き、上端側は抉りとられ、先端近くは反対側の側縁と平行している。加工が粗く、割り裂きを伴っていることから未成品と考えられる。

**第70図**から第73図は**建築部材**と考えられる。

第70図１は分割材を素材とし、全体を角材状に整形している。残存する端縁寄りのａ面側に長さ約8cm、深さ2cmほどの抉り部を形成し、その反対面のｃ面側にも端縁から約28cm離れた位置を中心に長さ約9cm、深さ2cmほどの抉り部が作られている。

第70図２は樹皮の残る心持ち材の一端に側面観がＬ字状を呈する抉り部が作られている。抉り部の長さは約7.5cm、深さは3cmである。

**第71図**１は分割材を割り裂きと加工によって角材状に整形している。

第71図２は分割材を素材とし、おもに割り裂きによって上端を細く、下端を太く整形している。下端縁寄りの側面に長さ約11cm、深さ2.5cmほどの抉り部が１箇所作られている。下端面にも加工痕が観察され、丸く仕上げられている。部分的に加工痕が観察される。

**第72図**１は心持ち材を素材とし、その一端に大別３面の加工によって尖端部を作り出している。尖端部が作り出された端部側から約43cmの範囲の側面には加工が施されており、断面形は多角形状を呈している。

第72図２は残存する一端に加工痕が残される心持ち材である。中央から上半は焼けて炭化している。

第72図３は両端に加工痕が認められる心持ち材である。下端寄りの側面に部分的な加工痕が確認される。

**第73図**１は断面三角形の割り材であり、一端に加工を施して尖端部を形成している。残る一端には加工による、わずかな抉りが確認される。

第73図２は分割材を割り裂きによって角材状に整え、太い側の一端に加工を施して尖端部を形成している。逆側の端部にはｂ面側からの加工による段差が作り出されている。

**第74図**と**第75図**は**板材**である。何らかの成品の未成品が含まれている可能性も考えられる。第74図１・２・４および第75図４はスギの板材である。第74図１の片面は焼けて炭化しており、２と第75図４の片面には加工痕が観察

される。２の左側縁寄りにいくつかの孔が認められるが、すべて植物の根などによるものであり、人為的なものではない。第74図３は中央でやや厚みが増しており、側面であるｂ面には加工痕が確認される。成品の想定はできないが、未成品の可能性がある。第74図６と第75図の片面には段が残されている。第75図１は片面に樹皮の剝がれた自然面を残しており、残る片面は割り裂き面である。上端面に加工痕が残されている。第75図２には表裏両面の相対する位置に段が作られており、さらに上下両端縁は薄く加工されている。ａ面右側縁から下端縁にかけて焼けて炭化した部分が認められる。

**第76図**から第80図１には分割材や半割材、心持ち材で、両端もしくは一部に切断痕もしくは加工痕を残すものを一括して図示した。その形態から何らかの成品の一部や未成品、原材と考えられるものなども含まれている。なお、第76図４は残存する一端に加工が施された、樹皮を残す半割材であり、打ち込み杭である。

第76図２には下端側に割り裂きによって稜線の一部を除去した部分が認められ、未成品の可能性が考えられる。

第76図３は中央から上端にかけて割り裂きによって断面長方形を呈しているのに対して、下端縁に近付くにしたがって徐々に幅が狭くなり、厚みも増している。上端寄りの一方の側面には加工が施され、上端縁で線端部を形成していたものと推定される。

**第77図**１～３・５・６は何らかの成品の原材と考えられる分割材であり、両端には切断痕あるいは加工痕が残されている。

第77図４は一端を残存しており、端部には表裏両面および両側縁からの加工痕が残されている。断面形は長方形に整形され、未成品の可能性がある。

**第78図**１は一端を欠損しているが、残された端部の形状から鍬の直柄の可能性が高い。分割材の割り裂き面と割り裂き面を分ける稜線を端縁から残存する中央部まで加工と割り裂きによって除去している。

**第79図**の１と２は建築部材の可能性が考えられる。

第79図１は尖端部を形成する加工痕の認められる端部付近まで割り裂き面が広く認められ、断面形は半円形を呈している。

第79図２は心持ち材を素材としており、中央から上端縁にかけて外側が大きく失われ、その部位の断面形は半円形から浅いＵ字形を呈している。ａ面右側縁の上端寄りに長さ約7cm、深さ5㎜ほどの抉りが作られている。

第79図３は両端に切断痕が認められる心持ち材である。

第79図４は両端に加工を施し、わずかに尖らせた心持ち材である。突出したフシの除去は行われていない。

第79図５は上端を断ち切り、下端をａ面側から抉りこみ、ｃ面側からの加工によって断ち切った心持ち材である。建築部材にみられる抉り部と類似しており、その一部を断ち切った可能性も考えられる。

**第80図**１は一端を欠損する分割材である。図示した面は樹皮を除去した自然面であるが、おもに長軸方向に対して直交して当てられた刃物の痕跡が多数残されており、樹皮を除去した際の痕跡と考えられる。

第80図２から**第82図**は**打ち込み杭**である。建築部材の転用と考えられるもの（第80図２・３）、分割材の先端に粗く加工を施し尖端部を形成したもの（第80図４、**第81図**４）、心持ち材の先端に施した大別２～３面の加工によって尖端部を形成したもの（第81図６・７、第82図４）、心持ち材の先端に丁寧に加工が施され尖端部が多面体を呈するもの（第81図５）、伐採痕もしくは切断痕の残る一端をそのまま先端として使用したもの（第81図１～３、第82図１・３）、分割材の一端に丁寧に加工を施し尖端部を形成したもの（第80図５、第82図２）などがある。伐採痕もしくは切断痕をそのまま先端とした杭が５点みられるが、それ以外は点数に極端な違いはない。しかし、用いられた樹種をみるとクリが16点中８点と半数を占めており、コナラ節が３点確認される。残る５点はそれぞれ異なる樹種が使用されている。なお、第80図５と第82図２は尖端部の加工方法が類似しており、樹種も同じクリであることから、同一の材から同時に作られた可能性が高い。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、尖頭器、ピエス・エスキーエ、削器、ノッチ、鋸歯縁石器、石核、細部調整剥片、剥片、敲打具、大型板状石器、勾玉、管玉、小玉、石皿、砥石、石製品、球状敲石、礫石器などである。第４分冊第234図から第288図に主な石器・石製品を図示した。

**第234図**から第239図は石庖丁である。

第234図１の器体の研磨面下には剝離痕が部分的に残されている。研磨痕は全体的に粗く、条線状を呈する箇所もある。紐孔の穿孔は、ｂ面では敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われているのに対して、ａ面では敲打を伴わずに直接、回転による穿孔が行われている。背部には器体に直交する方向で条線を伴う粗い研磨痕が観察される。背部とｂ面左側紐孔の斜め下から刃部にかけては使用によるものと考えられる光沢が肉眼でも確認できる。石材は結晶片岩である。

第234図２は黒色頁岩を石材とする直線刃半月形の石庖丁である。器体の研磨面下に部分的に剝離痕が残されている。紐孔の穿孔は、敲打による窪み部形成を伴わず、表裏両面からの回転によって行われている。ｂ面左側の紐孔に接して回転による小さな盲孔が２つ認められ、ともに紐孔に切られていることから紐孔穿孔予定位置を何度か変更していることが読み取れる。また、ａ・ｂ両面に敲打によって窪み部が形成されており、新たな穿孔を試みようとしたものと考えられる。紐孔の位置が大きく片側に寄っているためか、あるいは剝片側の紐孔を含む破損によって新たな紐孔穿孔が必要とされたためのいずれかによるものであろう。

第234図３は直線距離で約100m離れた位置で出土したものが接合した資料である。器体の研磨面にはやや粗い擦痕が伴い、研磨面下には部分的に剝離痕が残されている。紐孔穿孔は表裏両面からの回転によってのみ行われている。光沢は表裏両面の下半（刃部側）および背部に肉眼でも観察されるが、ｂ面でより顕著である。しかし研ぎ直しによる刃部再生が行われているため、刃部の光沢は両面ともそれほどではない。石材は頁岩である。

第234図４の器体の研磨面下には剝離痕と敲打痕がともに確認されるが、敲打痕はａ面でのみ観察される。研磨痕は全体的に粗く、条線状を呈する擦痕を伴っている。紐孔の周縁に敲打痕が認められ、それを回転の痕跡が切っていることから、穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われたものと考えられる。光沢は表裏両面に観察される。ともに弱いもののａ面の方でより明瞭である。石材は粘板岩である。

第234図５は片側の紐孔から先を欠損する石庖丁である。器体の研磨面下には多くの敲打痕が観察される。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われている。光沢はｂ面左側で観察されるが、それほど明瞭ではない。残存する刃部の中央部では刃縁に研磨による平坦面が形成されており、刃部再生の準備と考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

第234図６も片側の紐孔から先を欠損している。結晶片岩を石材としており、器体の研磨面下には敲打痕が認められる。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われているが、敲打の痕跡は紐孔の周囲にわずかに残存する程度である。光沢は表裏両面で観察され、特に刃部で明瞭である。器体中央のやや刃部寄りに長軸方向の浅い溝状の凹みが表裏両面に認められる。また、背部にはａ面左側の紐孔の上部にあたる位置にわずかな抉りが作り出されており、その位置関係から紐孔と何らかの関わりがあるものと考えられる。

**第235図**１は紐孔から背部にかけての大半を欠損する、珪化凝灰岩製の石庖丁である。器体の研磨面下に敲打痕が観察されるが、全体の遺存状態はあまり良好ではない。紐孔は３孔認められる。いずれも敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されており、新旧関係では、敲打面の切り合いの観察から中央よりａ面右側の紐孔が新しいことが確認できるが、３孔が同時に存在したのか再穿孔かは不明である。光沢はｂ面の器体中央から刃部にかけて観察される。

第235図２は片側の紐孔から先を欠損している。器体の研磨面下に剝離痕と敲打痕を残しており、紐孔の穿孔は敲

打による窪み部形成の後、回転によって行われている。表裏両面全体に光沢が認められ、特にｂ面で顕著である。石材は結晶片岩である。

第235図３は全体の約３分の１程度が残存する資料である。表裏両面の研磨面下には剝離痕のみが観察され、敲打痕は認められない。ｂ面は大きな剝離面を研磨しているが研磨の度合いは弱い。紐孔は回転によってのみ穿孔されており、敲打による窪み部形成は行われていない。光沢はｂ面に観察されるが、それほど明瞭ではない。表裏両面に温度差による破損面が認められる。石材は結晶片岩である。

第235図４は片側の紐孔から先とそれに対するもう一方の端部を欠損している結晶片岩製の石庖丁である。器体の研磨面下に剝離痕と敲打痕が残されており、紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われている。ｂ面左側の紐孔に接して、紐孔穿孔以前に形成された敲打による窪み部が認められ、表裏で紐孔の位置がずれたためｂ面で修正したものと考えられる。光沢は表裏両面で観察されるが、いずれも明瞭ではない。

第235図５はｂ面の大半と片側の紐孔から先、およびそれに対するもう一方の端部を欠損している。器体の研磨面下に剝離痕が残され、紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。ａ面左側の紐孔には紐擦れ痕が観察される。石材は頁岩である。刃縁は磨滅し、鈍化している。

第235図６は片側の紐孔から先が残存している石庖丁である。石材は珪化凝灰岩である。器体の研磨面下に剝離痕および敲打痕が認められるが、背部・側縁部はともに研磨によって丁寧に仕上げられており、剝離痕はほとんど残されていない。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。ｂ面の刃部側に明瞭な光沢が観察される。

**第236図**に図示した石庖丁はいずれも剝片側の紐孔から先が残存している資料である。器体の研磨面下には基本的に整形時の剝離痕と研磨痕が残されているが、８では敲打痕は確認されない。また、５は表面の遺存状況が良好ではなく、敲打痕の有無については観察不可能である。紐孔の穿孔はすべて、敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われている。

第236図１のｂ面の刃部寄りには刃部と平行した浅い溝状の凹みがあり、凹み部分とその周辺が磨滅している。光沢はｂ面と刃縁に弱く認められ、刃縁にみられる剝離面にも観察されることから剝離面は大きな刃こぼれと考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

第236図２の石材は緑泥石片岩であり、ａ面の刃部寄りに光沢が観察される。

第236図３のａ面の器体中央部には刃部と平行するわずかな凹みが認められる。ｂ面には整形時の大きな剝離痕が残されている。光沢は表裏両面全体に明瞭であり、特にｂ面で顕著である。石材は黒色頁岩である。

第236図４は熱を受けており、ａ面のこわれは主に焼けハジケによるものである。また、ａ面の研磨面には条線状の擦痕を伴っている。光沢は弱く、ｂ面の刃縁にわずかに認められる程度である。石材は珪質頁岩である。

第236図５は珪化凝灰岩を石材としており、表裏両面に光沢が観察される。光沢はｂ面で顕著である。

第236図６は全面が酸化鉄に覆われており、光沢の有無の観察は不可能である。石材は頁岩である。

第236図７のｂ面は焼けて黒変しており、一部に焼けハジケが確認される。表裏両面の全体に光沢が観察される。石材は結晶片岩である。

第236図８は大部分が焼けハジケによって失われているが、残存する部分からほかの石庖丁と比べると厚みの少ない資料である。表裏両面の研磨面には条線状の擦痕を伴っている。光沢はｂ面の残存部分に顕著に認められる。石材は珪化凝灰岩である。

**第237図**は石庖丁の一部が残る資料である。器体の研磨面下には１と６に敲打痕が、２と４、５、７、８には剝離痕が、３、９、10には剝離痕と敲打痕が残されている。紐孔の一部が残存する１から４のうち、１、２、３は敲打による窪み部形成の後、回転によって紐孔の穿孔が行われているのに対して、４は敲打を伴わない回転による直接

穿孔である。また、9・10は紐孔穿孔の際に破損したものと考えられるが、未成品ではなく再穿孔中の破損であろう。

第237図1の表裏両面に光沢が認められ、特にb面と背部に明瞭である。石材は珪化凝灰岩である。

第237図2には頁岩が用いられている。肉眼では明瞭な光沢は観察されない。

第237図3では表裏両面のほかに背部にも光沢が観察される。刃縁は鈍化しており、凹凸が著しい。石材は珪化凝灰岩である。

第237図4の研磨面にはやや粗い擦痕が伴い、刃縁には光沢が認められる。黒色頁岩を石材としている。

第237図5の表裏両面に光沢が観察されるが、明瞭ではない。a面の刃部の研磨は粗く、擦痕を伴っている。石材は珪質頁岩である。

第237図6は刃部と背部がごくわずかに残る資料である。光沢は残存部に認められ、b面側に明瞭である。珪化凝灰岩が用いられている。

第237図7の石材は粘板岩であり、a面の残存部に光沢が観察される。

第237図8の研磨面には粗い擦痕が伴っている。左右の両端に剝離が施され、a面の右側縁とb面の右下端縁に研磨面が認められることから、破損した石庖丁を転用しようとした可能性が考えられる。石材は玢岩である。

第237図9の紐孔予定箇所には敲打による窪み部が形成されているが、回転の作業には移行していない。窪み部形成の段階で破損している。しかし、この石庖丁には表裏両面に研磨が施されており、背部および刃部もすでに仕上げられていることから成品である。したがって成品への再穿孔作業中に窪み部形成のための敲打の段階で事故が起き、折損に至ったものと考えられる。石材は頁岩である。

第237図10は敲打による窪み部形成を経て、回転によって紐孔を穿孔する作業中に破損した石庖丁である。表裏両面とも研磨され、背部および刃部もすでに仕上げられている点は9と同様であり、石庖丁の成品に何らかの理由で再穿孔を試みたが、その作業中に折損したものと考えられる。9の石庖丁は窪み部形成段階での破損であるが、10は次の工程である回転による紐孔穿孔段階での事故である。石材は珪化凝灰岩である。

**第238図**および第239図には石庖丁の未成品を図示した。

第238図1は剝離による整形、敲打による器体の調整、紐孔部の敲打による窪み部形成を経て回転によって紐孔を穿孔する段階まで作業が進行している。器体の調整のための敲打範囲はa面ではほぼ全面に及んでいるのに対して、b面ではごく部分的である。紐孔は断面図を作成した側は貫通しているが、もう一方は回転段階まで進行しているものの穿孔には至っていない。この段階で事故が起き、折損したものと考えられる。石材は結晶片岩である。

第238図2も結晶片岩が用いられた、製作途中に折損した資料である。器体の調整のための敲打痕は認められず、剝離による整形から紐孔穿孔作業へと移行している。1と同様に断面図を作成した側の紐孔穿孔には成功しているが、残る一方は回転穿孔段階で折損の事故が起きている。b面には紐孔穿孔箇所に接して、それに切られている敲打による窪み部があり、当初の穿孔予定位置と考えられる。a面側の穿孔位置とのズレによって位置の修正が行われたことを示している。

第238図3と4も回転による紐孔穿孔段階で折損している資料である。両者とも石材は粘板岩であり、3では表裏両面に器体の調整のための敲打痕がわずかに確認され、4のa面にも敲打痕が認められる。4のb面側は焼けハジケによって失われている。

第238図5は器体の研磨段階まで進行した資料である。器体に調整のための敲打痕は認められず剝離による整形から研磨へと移行している。出土資料のなかには研磨後に紐孔穿孔を行っているものは確認されないので、研磨の前段階として紐孔穿孔作業が行われ、欠損部分に紐孔が穿たれていたものと考えられる。石材は絹雲母片岩である。

第238図6は剝離による整形を経て、器体を敲打によって調整する段階まで進み、次の段階である紐孔穿孔のため

の窪み部形成作業中に折損の事故が起きた資料である。a面の2ヶ所の窪み部形成終了後、作業をb面に移して敲打によって片側の窪み部を形成している最中の事故と考えられる。石材はデイサイト質安山岩である。a面右側は中世のSD44溝跡から出土しており、表面の風化が著しく、一部、破損している。

**第239図**1は敲打によって器体の調整を行っている段階か、もしくは紐孔穿孔のための敲打による窪み部形成作業中に折損した資料である。b面にはほぼ全面に敲打痕が認められるのに対して、a面では部分的であり、素材の剝離面を大きく残している。石材はデイサイト質安山岩である。

第239図2は全体の遺存状況が良好ではなく、加工痕などの観察はむずかしいが、紐孔穿孔のための敲打による窪み部形成の段階まで作業が進行した資料である。器体調整に関わる敲打は部分的であり、a面の一部でわずかに確認される程度である。結晶片岩を石材としている。

第239図3は剝離による整形から器体を敲打によって調整する段階まで進行した資料であるが、敲打痕は部分的でありb面の器体中央から刃部側にかけてのみ認められる。その後の作業が中断されている理由は不明である。石材は珪化凝灰岩を用いている。

第239図4は原材に近い段階の資料であるが、背部、刃部およびb面左側縁には整形のための剝離が施されている。a面の左側に敲打痕が認められ、長軸方向の稜線から刃部側にかけて条線状の擦痕を伴う磨面が確認される。表裏両面の長軸方向の稜線はともに磨滅している。石材は粘板岩である。

第239図5は石庖丁としてはやや厚みが足りないが、a面とb面の一部が研磨されており、背部と側縁部にも研磨痕が認められ、粘板岩を石材としていることから石庖丁の一部と考えられる。

第239図6は石材が粘板岩であることから石庖丁の素材段階もしくは製作の際に生じた剝片であろう。

**第240図**から第249図は石斧である。

第240図1は太型蛤刃石斧である。基部の刃部寄りで破損したものが接合した資料である。最大幅の位置は基部中央の刃部寄りにある。断面は円形に近い楕円形を呈しており、明瞭な側面は形成されていない。刃部は弧状を呈している。刃面の表裏両面には横方向の擦痕が観察され、また、基部寄りの中央部には縦方向の擦痕が認められる。基部には右下がりの擦痕を伴う研磨が施されているが、研磨は基端に近付くにしたがって徐々に認められなくなり、基端では整形時の剝離痕と敲打痕が観察されるのみである。石材は輝緑岩が用いられている。

第240図2は基部の大半を欠損する太型蛤刃石斧である。断面は楕円形を呈しており、側面は形成されていない。刃部は弧状を呈している。使用による磨滅が認められ、わずかに線状痕も観察される。また、刃縁の表裏両面には刃こぼれがみられる。基部の研磨面には長軸方向に近い右下がりの細かな擦痕が伴っている。研磨はていねいに施されており、整形時の剝離痕と敲打痕は研磨面下にわずかに観察される程度である。石材は閃緑岩である。

第240図3は基部を欠損する刃部のみの石斧である。両側面の研磨面下には整形時の敲打痕が観察され、a面には剝離痕と敲打痕が認められる。刃部は弧状を呈している。研磨面の刃縁近くには横方向の擦痕が確認され、擦痕は刃縁から離れるにしたがって右下がりへ変化している。破損後に転用されており、破損面打面とした表裏両面への剝離面と、破損面のa面右端に敲打痕が観察される。石材は輝緑岩である。

**第241図**1は基部の大半を欠損する太型蛤刃石斧である。側面が形成されているため、断面形状は長軸方向の両端が平坦な楕円形を呈している。刃部は弧状を呈し、刃縁には使用によると考えられる刃こぼれが認められる。基部の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕がみられ、研磨面下に敲打痕が観察される。輝緑岩が用いられている。

第241図2は基部の基端寄りを欠損する太型蛤刃石斧である。最大幅は基部の中央に位置し、断面は楕円形を呈している。刃部は弧状で、使用による刃こぼれと考えられる剝離面がa面側にのみ認められる。仕上げの研磨は刃部とその付近にていねいに施されているが、基部側に近づくにしたがって徐々に施されなくなる。c面には刃部の研磨面と状態が異なる平坦な研磨面が認められ、破損後の転用によるものと考えられる。石材は安山岩である。

第241図３は基部の中央から基端を欠損する太型蛤刃石斧である。最大幅は基部中央に位置し、断面の形状は楕円形である。側面はａ面左側に明瞭ではないが、わずかに形成されている。刃部は弧状を呈し、表裏両面の刃面は磨滅が著しく光沢も認められる。また、使用による線状痕も明瞭であり、刃縁の中央部には刃こぼれがみられる。基部の研磨は刃部から離れるにしたがって弱くなり、整形時の敲打痕が明瞭に観察されるようになる。ｃ面では折れ面からの剝離痕が認められる。石材は閃緑岩である。

**第242図**１は基部の中央から基端を欠損する石斧である。最大幅は刃部から剝離れた基部にあるものと考えられる。側面が形成されており、断面の形状は側面のある凸レンズ形である。刃部は弧状を呈し、刃面には横方向の擦痕がみられ、また、表裏両面には使用による刃こぼれが認められる。残存する基部および両側面の研磨面には明瞭な右下がりの擦痕が伴っており、研磨面下には敲打痕が観察される。基部側の破損後、敲打具に転用されており、ａ面とｃ面には敲打に伴う剝離面が、折れ面とａ面の左側縁には敲打痕が認められる。石材は輝緑岩である。

第242図２～５および第243図１は石斧の基部が残存する資料である。第242図２・４・５は斑糲岩、第242図３および第243図１は輝緑岩である。

第242図２の表裏両面には部分的に長軸方向に近い右下がりの擦痕を伴う研磨面が認められるが、研磨が全体に施されていないため整形時の敲打痕が明瞭に観察される。側面は形成されておらず、断面の形状は不整な楕円形を呈している。ｃ面には節理面が残されている。

第242図３には側面が明瞭に形成されている。表裏両面の研磨面下に整形時の剝離面と敲打痕が観察され、研磨面には左下がりの擦痕が認められる。ただし、ａ面左半には長軸方向に近い右下がりの擦痕がみられる。また、基端面も研磨によって仕上げられており、基端面の長軸方向の擦痕を伴っている。

第242図４には側面が形成されておらず、断面の形状は長楕円形を呈している。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。研磨面下には整形時の剝離痕および敲打痕が残されており、特に基端付近で明瞭に認められる。また、基端面も研磨によって仕上げられており、基端面の長軸方向の擦痕を伴っている。

第242図５はａ面左側に側面が形成されているが明瞭ではなく、断面の形状は楕円形を呈している。研磨面にはわずかに右下がりの擦痕が認められ、刃部寄りでは長軸方向の擦痕となっている。研磨痕下には敲打痕が観察される。敲打痕は、基端付近には研磨がほとんど施されていないため、整形時の剝離痕とともに明瞭である。柄に装着された状態で火を受けており、柄と接していた部分以外は黒変し、さらに一部には煤が付着している。着柄状況のわかる良好な資料である。

**第243図**１は６点の破片が接合している。火を受け黒変しており、受熱による割れ面での接合である。断面の形状は円形に近い楕円形である。側面は形成されていない。研磨は刃部寄りはていねいであるが、基端に近付くにしたがってそれほど施されなくなり、敲打痕が明瞭に残されている。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。基端寄りでは部分的に整形時の剝離痕が観察され、基端面は弱く研磨されて仕上げられている。基端面の研磨面下にも敲打痕および剝離痕が認められる。

第243図２は刃部と基部および主面の剝片側を大きく欠損する太型蛤刃石斧である。依存状況は良好ではなく表面が剝落している部分もある。側面は形成されておらず、断面の形状は推定復元で楕円形を呈していたものと考えられる。研磨面には長軸方向に近い擦痕が観察される。石材は斑糲岩である。

第243図３から８は石斧の破剝片資料である。それぞれに用いられている石材は、３、４、５は輝緑岩、６はデイサイト質凝灰岩、７、８は斑糲岩である。

第243図３と５は、太型蛤刃石斧の刃部に近い主面剝片側の一部である。破損は刃部側からの力によるものであり、使用による破損と考えられる。３の研磨面には右下がりの擦痕が観察され、５ではそれに加えて横方向の擦痕が伴っている。両者とも研磨面下には敲打痕が認められる。３は転用されており、ｂ面右側縁の一部にはツブレ状の剝

離がみられる。

第243図４は太型蛤刃石斧の主面剝片側の一部である。破損は刃部側から加えられた力によって起きており、使用による破損と考えられる。刃部寄りには研磨がわずかに施されているが、研磨面下に明瞭な敲打痕を残しており、それ以外は研磨が施されていないため敲打痕に覆われている。

第243図６、７、８は刃部の一部である。６と７の研磨面には右下がりの擦痕が観察され、研磨面下には敲打痕が認められる。７の刃縁には使用による刃こぼれとそれに伴う線状痕が確認される。８の刃面には刃縁と平行する擦痕がみられ、ほかの研磨面には長軸方向の擦痕が観察される。研磨面下には敲打痕が認められる。ａ面の刃縁には使用による刃こぼれがある。

**第244図**１から３は太型蛤刃石斧が敲打具に転用されたものである。

第244図１は刃部を欠損し、欠損部には著しい敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面がみられる。断面の形状は円形に近い楕円形を呈しており、側面は形成されていない。研磨面下の敲打痕は、基部中央では研磨がていねいに施されていることからわずかに観察される程度であるが、基端寄りに近付くにしたがって明瞭となる。基端付近には研磨がほとんど施されず、敲打痕のほかに整形時の剝離痕も残されている。石材は安山岩である。

第244図２は基部の基端寄りの部分である。側面が形成されており、断面形は胴膨らみの隅丸方形を呈している。研磨面には左下がりの擦痕が伴っており、わずかに長軸方向の擦痕も観察される。破損後の転用によって基端に敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面がみられ、また、破損面からａ面側への剝離面が認められる。石材は斑糲岩である。

第244図３も１と同様に刃部を欠損している。敲打具への転用によって破損面と主面を分ける稜線状に敲打痕が明瞭に認められ、破損面にも敲打痕が観察される。仕上げの研磨があまり施されていないため、基部全面に整形時の敲打痕が明瞭であり、ｃ面には剝離痕も確認される。側面は形成されず、断面の形状は楕円形を呈している。石材は輝緑岩を使用している。

**第245図**は太型蛤刃石斧の未成品である。ａ面およびｃ面の一部には自然面が残されている。製作作業は剝離による整形の工程を経て、部分的に敲打を開始した段階まで進行している。ａ面の刃部からｂ面およびｃ面にかけて火によって黒変した部分が認められることから、ある程度整形した段階で熱を受けたものと考えられる。敲打痕は黒変部分を切っており、敲打作業は熱を受けた後に行われている。折れ面がもっとも新しく、各面に黒変部分を切る破損面が部分的に認められる。石材は輝緑岩である。

**第246図**１と２は石斧の製作作業中に折損したことによって、敲打具へ転用されたものである。１は刃部付近が残存しており、製作作業は敲打による調整の工程まで進行している。転用による敲打痕が破損面と刃縁に明瞭に認められ、ａ面では敲打に伴う損傷の剝離が著しい。ａ面中央はわずかに磨滅している。２も敲打による調整の工程まで進行した資料であるが、基部の中程まで残存している。ｂ面の敲打が施されていない部分には自然面が残されている。敲打具に転用された後の敲打痕が刃縁に著しく、敲打に伴う損傷の剝離も認められる。折損面とｂ面を分ける稜線状にも敲打痕が残されており、刃縁とともに非加工物に敲打を加えた部位である。石材は１がデイサイト質凝灰岩、２が輝緑岩である。

第246図３は抉入柱状片刃石斧の抉り部付近が残存した資料である。抉り部の研磨面にはわずかに右下がりの擦痕が認められ、ほかの研磨面には長軸方向に近い擦痕が観察される。断面の形状は抉り部を有する面がわずかに広い、胴膨らみの方形を呈している。火を受けて黒変した部分が確認され、破損は火ハネによるものである。石材は珪化凝灰岩を用いている。

第246図４は基部中央から基端部にかけてを欠損している扁平片刃石斧である。欠損は節理面での折れによって生じている。断面の形状は扁平なカマボコ形を呈している。側面は形成されているが、平坦ではなく膨らみをもっている。前主面（ａ面）の風化は著しく、表面の大部分が剝落し、研磨面は刃部の一部分に残されている程度である。

後主面（b面）は前主面に比べて遺存状況が良好であり、研磨面の中央に横方向の擦痕が明瞭に観察される。擦痕は両側面近くで右下がりとなる。両側面の研磨面にも擦痕が確認され、a面の右側面が長軸方向に近い右下がりであるのに対して、左側面では短軸方向に近い擦痕になっている。石材は黒色頁岩である。

**第247図**の1から4は扁平片刃石斧の破片資料である。

第247図1は刃部の左側のみが残存している。側面は形成されているが、平坦ではなく膨らみをもち、研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。刃面および後主面の研磨面には右下がりの擦痕が認められるが、刃面では長軸方向に近く、後主面では短軸方向に近い擦痕である。石材は珪化凝灰岩である。

第247図2は基端部分が残存している。表裏両面の研磨面には短軸方向に近い擦痕が確認され、両側面には長軸方向の擦痕が認められる。基端面は、長軸方向の擦痕が確認される3面の研磨面によって構成されている。研磨面下には整形時の剝離痕が残されており、一部で敲打痕が観察される。石材は黒色頁岩である。

第247図3は基部が残存する資料である。断面の形状は扁平なカマボコ形を呈している。側面は形成されているが、平坦ではなく膨らみをもち、研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が両側面で観察される。表裏両面の研磨面には短軸方向に近い擦痕が認められ、基端面と図示した面の基端近くには横方向の擦痕が確認される。研磨面下には剝離痕が残されており、剝離による整形作業の後、研磨が施されている。石材は珪化凝灰岩である。

第247図4は火を受けて破損しており、刃部の右側から右側面にかけてのみ残存している。側面は形成されているが、平坦ではなく膨らみをもっている。研磨面には右下がりの擦痕が観察されるものの、刃面では短軸方向に近いのに対して、ほかの部位では長軸方向に近い右下がりとなっている。研磨面下には整形時の剝離痕が確認されるほか、b面とc面を分ける稜線状には敲打痕も認められる。火を受けており、着柄の痕跡が観察される。c面には細い帯状の痕跡が黒く残されており、紐状のものを使用して石斧を柄に緊縛していたことを示す緊縛痕と考えられる。石材は輝緑岩である。

第247図5は刃縁と基部の中央から基端にかけて欠損する石斧である。a面の右側にのみ側面が形成されているが、平坦ではなく膨らみをもっており、断面の形状は楕円形を呈している。研磨は全体的にそれ程ていねいではなく、整形時の剝離痕や器体調整の敲打痕が明瞭である。研磨面には長軸方向の擦痕が観察されるが、b面の刃面には短軸方向の擦痕が認められる。表裏両面に光沢が観察される。石材は斑糲岩である。

第247図の6から10はノミ形石斧である。6は完形品であるが7から10はいずれも基部から基端にかけてを欠損している。

第247図6の最大幅は基部中央よりやや基端に寄った位置にあり、側面が形成されていないため断面の形状は円形に近い楕円形を呈している。刃縁は若干磨滅し、中央から左端にかけてわずかな刃こぼれが認められ、使用によるものと考えられる。刃縁の平面形はわずかに外弯している。仕上げの研磨面には右下がりの擦痕がほぼ全面で確認される。研磨面下には剝離痕と敲打痕が観察され、剝離による整形の後、敲打による調整を経て研磨が施されるという工程を確認することができる。石材は安山岩である。

第247図7はSR 1自然流路跡の13層から出土した刃部と8層から出土した基部が接合した資料である。側面が形成されており、断面の形状は隅丸方形を呈している。刃部のb面右側を欠損しているが、刃縁の平面形はわずかに外弯していたものと考えられ、刃縁には著しい磨滅が認められる。研磨面には右下がりの擦痕が確認され、研磨面下には製作時の剝離痕と敲打痕がわずかに観察される。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第247図8の断面形状は、残存する部位では円形に近い楕円形を呈している。刃部寄りでは側面が形成され、側面と主面を分ける稜線が明瞭に認められる。刃縁の平面形はわずかに外弯している。研ぎ直しによる刃部再生が行われており、以前の刃面と研ぎ直された面を分ける稜線が明瞭である。刃部の後主面は磨滅が著しく、長軸方向の線状痕を伴っている。仕上げの研磨面には右下がりの擦痕が観察される。石材は輝緑岩である。

第247図９の残存部位での断面形状はほぼ円形を呈している。研磨面には右下がりの擦痕が観察され、研磨面下にわずかに敲打痕が認められる。刃縁はつぶれて磨滅しており、刃面の表裏両面にみられる刃こぼれの剝離面も磨滅していることから刃こぼれの後も使用されたものと考えられる。磨滅は著しく、長軸方向の線状痕を伴っている。石材は泥質頁岩である。

第247図10の残存部位での断面形状は円形に近く、側面は形成されていない。刃縁の平面形はわずかに外弯している。研ぎ直しによる刃部再生が行われており、以前の刃面と研ぎ直された面を分ける稜線が図示した面で特に明瞭である。裏面にも研ぎ直しが施されており、使用によるものと考えられる光沢を切っている。刃部の側縁には、基部側縁にみられる研磨面と面を異にした研磨面が確認される。刃部幅を調整したものと考えられる。主面の研磨面には右下がりの擦痕が認められるのに対して、両側縁には左下がりの擦痕が観察される。研磨面と研磨面を分ける稜線が明瞭に確認される。研磨面下には製作時の剝離痕と敲打痕がわずかに残されている。石材は斑糲岩である。

**第248図**の１、３、４はノミ形石斧の未成品である。

第248図１は基部から基端にかけてを欠損する。折れは両極剝離によるものである。剝離による整形作業の後、敲打による調整を経て研磨段階へと作業が進行している。基部の研磨面には右下がりの擦痕が認められるが、刃部の研磨面は表裏両面とも左下がりの擦痕である。刃部には刃縁作出のための平坦面が研磨によって形成されており、平坦面の研磨面には長軸方向の擦痕が確認される。石材は珪化凝灰岩である。

第248図２は刃部側を欠損したノミ形石斧の成品である。基部に研磨が施されていない部分もあり未成品の可能性も考えられるが、基端面も研磨によってていねいに仕上げられていることから成品と判断した。断面の形状は円形に近い楕円形を呈している。研磨面には右下がりの擦痕が観察され、研磨面と研磨面を分ける稜線が明瞭である。折れ面は平坦ではなく凹凸が認められる。その突出した部分と周縁には磨滅痕が確認され、さらに主面側に損傷と考えられる折れ面からの微細な剝離も認められることから、破損後、折れ面を利用した何らかの作業に転用されたものと考えられる。石材は輝緑岩である。

第248図３は剝離による整形作業の後、敲打が部分的に施され、研磨の工程まで製作作業が進行している。研磨面には長軸方向もしくは右下がりの擦痕が観察される。断面の形状は円形に近い不整な楕円形である。石材は結晶片岩が用いられている。

第248図４は剝離による整形の後、ほぼ全面に敲打が施されており、整形時の剝離痕は刃部付近にのみ認められる。ａ面とｂ面にはごく弱い研磨面が部分的に確認される。最大幅は中央部にあり、断面の形状は円形に近い楕円形を呈している。石材は輝緑岩である。

第248図５は基端を欠損する、いわゆる定角式の石斧である。側面が形成されており、断面の形状は両主面側が膨らんだ胴膨らみの隅丸長方形を呈している。最大幅は刃部にある。刃面には刃こぼれの剝離面がみられ、剝離面を含む全体が磨滅し、光沢も観察される。また、使用に伴う線状痕も認められる。石材は安山岩である。

**第249図**１から４は基端の尖る石斧である。

第249図１は最大幅が刃部にある両刃の石斧である。側面が形成されており、両側面は基端に向かって収斂している。断面の形状は両主面側が膨らんだ胴膨らみの隅丸長方形を呈している。全体的に研磨は弱く、研磨面下に敲打痕が明瞭に観察される。刃面には刃こぼれの剝離面がみられ、剝離面を含む刃面全体が磨滅している。また、ａ面の刃部左側には使用に伴う線状痕もわずかに認められる。石材は輝緑岩である。

第249図の２と３は刃部とそれに連なる基部が欠損し、基部の基端寄りが残る資料である。ともに側面が形成されており、両側面は基端に向かって収斂する。断面の形状は隅丸長方形を呈し、２よりも３の方が方形に近い。２の両側面の研磨面には長軸方向の擦痕が観察され、研磨面下には敲打痕が認められる。基端は敲打によって両主面および両側面が調整されており、四角錐状を呈している。ａ面の中央付近と両側面には部分的に研磨面より新しい敲

打痕が認められ、折れ面全体はわずかに磨滅しており、折れ面の周縁にはツブレが確認される。さらに折れ面から両主面および両側面に損傷の剝離が認められることから、破損後、敲打具へ転用されたものと考えられる。3の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。研磨面下には敲打痕が認められ、特に側面の基端付近で顕著である。基端には損傷の剝離面を伴うツブレがみられ、それに対応して折れ面からa面側への剝離面が認められる。a面側の剝離面の右端にはツブレが観察され、クサビ状に使用された可能性が考えられる。2の石材は安山岩、3は輝緑岩である。

第249図4は刃部を欠損しているが、最大幅は刃部にあったものと考えられる。平坦な側面が形成されており、両側面は基端に向かって収斂する。断面の形状は両主面側が膨らんだ胴膨らみの隅丸長方形を呈している。研磨面には全体的に長軸方向もしくは右下がりの擦痕があり、一部、a面の右側の刃部寄りに左下がりの擦痕もみられる。研磨面下にはわずかに敲打痕が観察される。刃部破損後、敲打具に転用されており、敲打によるツブレとそれに伴う損傷と考えられる大きな剝離面が両主面にみられる。またa面およびb面の基端寄りに敲打痕が認められる。石材は珪質頁岩である。

第249図の5から10は石鏃である。いずれも有茎式の石鏃で、側縁はわずかに外弯するが、ほぼ直線的である。5は調整が粗く尖端部作出も不充分で、器厚も厚いことから未成品と考えられる。a面中央の高まりを除去し厚みを減ずる作業に失敗したものであろう。6と9は茎部が鏃身の中軸線上にのらず、わずかに片寄っている。7は茎部の末端を欠損する。側縁は調整によって鋸歯縁状を呈しており、逆刺から茎部にいたる縁辺が弯曲する形態で、ほかの石鏃とは若干異なっている。10は長さが42㎜あり、出土した石鏃の中でも大型の部類に入る。石材は5が珪質凝灰岩、6が玉髄、7、8、10が珪質頁岩、9が珪化凝灰岩である。

**第250図**1は石錐である。両側縁に裏面から表面側へ80～85度の急角度の細部調整が施されており、裏面の尖端部にもわずかに細部調整が施されている。石材は珪質頁岩である。

第250図2から5は石匙であり、2、3、5は縦型、4は横型である。

第250図2は表面に自然面を残す、自然面打面の剝片を素材としている。素材剝片の打点はつまみ部にある。つまみ部と肩部は細部調整によって作出されているが、刃部は調整によるものではなく、素材剝片の表面と裏面を分ける縁辺をそのまま利用している。刃角はa面右側が約40度、左側が約60度である。つまみ部は器体の長軸端部のほぼ中央に位置し、a面左側がa面の後、b面側への剝離によって形成され、右側はa面からb面への剝離によって形作られている。石材は流紋岩である。

第250図3は横長の剝片を素材としており、素材剝片の表面には節理面が部分的に残されている。素材剝片の打点の位置は器体のほぼ中央であるが、細部調整によって失われている。つまみ部は、素材剝片の末端に偶然残された厚みを利用して作出されており、a面からb面へのわずかな細部調整による抉りによって形成されている。つまみ部は器体の長軸端部に片寄って位置している。つまみ部以外は表裏両面からの細部調整によって整形されているが、いずれも器幅の3分の1を超えない程度の浅い剝離である。刃角は55～60度である。石材は流紋岩を用いている。

第250図4は剝離面打面の剝片を素材としており、その両側縁に細部調整を施して横型の石匙が作製されている。細部調整は全周に及んではおらず、素材剝片の打面と末端の一部が残されている。つまみ部は器体の中央からわずかにずれた位置にあり、a面側の後、b面側に剝離を施して作られた抉りによって形成されている。刃部は表裏両面に細部調整を施して作出され、刃角は刃部中央では65度前後であるが両端は35～40度と薄い。石材はチャートである。

第250図5の縦型石匙は表面に自然面を大きく残す縦長剝片を素材とし、両側縁と打面側に細部調整を施して作製されている。素材剝片の末端には調整は施されていない。つまみ部は器体の長軸端部の片寄った位置にあり、b面側の後、a面側への剝離によって形成されているが、つまみ部先端は張り出すように作られてはいない。a面左側

縁は裏面から表面側への剝離によって急角度に整形されているのに対して、右側縁の細部調整はまばらで、角度は浅い。石材は珪質頁岩である。

第250図６、７は尖頭削器である。

第250図６は横長の薄い剝片を素材としているものと考えられ、表裏両面に細部調整を加えて整形されている。折れ面はｂ面側からの力によって形成されており、折れ面の両端にはｂ面からの小さな剝離が認められる。石材は黒色頁岩である。

第250図７のａ面右側縁の表裏両面には細部調整が施され、素材剝片の打面とバルブの除去が行われている。それに対して左側縁には細部調整がほとんどみられず、おもにｂ面側の細部調整によって整形されている。ａ面のごく一部に自然面が残されている。石材は珪質頁岩である。

第250図８から14は削器である。

第250図８と９は表裏両面の左側縁に錯向剝離状に細部調整が施されており、さらに８には右側縁に単発的な剝離がみられ、９には打面側にも細部調整が施されている。８の打面側は折り取られている。石材はともに珪質頁岩である。

第250図10は剝離面打面の剝片を素材とし、その末端に表裏両面から細部調整が施されている。細部調整によって形成された角度は60～75度である。

第250図11は両側縁に表裏両面からの細部調整が施されており、その角度は両側縁が70度前後で、両側縁が収斂する箇所では80～95度である。素材剝片の打面は細部調整によって失われている。

第250図12は素材剝片の剝離面をｂ面の一部に残しており、ａ面右側縁の表裏両面に連続した細部調整が施されている。細部調整によって形成された角度は70～75度である。

第250図13と14はともに剝離面打面の剝片を素材としており、13ではおもに表面側から、14では裏面側から細部調整が施されている。細部調整によって形成された角度は13のａ面右側縁が80～85度、末端側が50～60度であり、14はａ面右側縁が65度前後、左側縁が80度前後で、両側縁が収斂する末端でもっとも急角度になっている。10の石材はチャート、11はデイサイト、12はメノウ、13と14は流紋岩である。

**第251図**には削器を図示した。

第251図１は剝離面打面の剝片を素材としており、表面の一部に自然面を残している。おもにａ面の左側縁に表裏両面から細部調整が施されている。刃部の形状は直線的で、刃角は80～85度である。石材は良質な珪質頁岩が用いられている。

第251図２はａ面左側縁の中央部と、右側縁およびそれに連なる素材剝片の打面側に表裏両面から細部調整が施されている。刃部の形状はａ面左側が凸形で、右側および素材剝片の打面側は直線的である。刃角は右側が65～70度であるのに対して、左側は65～90度とややひらきがあり、素材剝片の打面側に近付くにしたがって急角度になる。打面側では90～95度である。石材は珪化凝灰岩である。

第251図３と４はａ面の左側縁に表裏両面から細部調整が施されており、刃部の形状は凸形である。また、３の右側縁には微細剝離痕も観察される。刃角は３が75～80度で、４が70～85度である。３は剝離面打面の表皮に近い部分の剝片を素材としており、デイサイト質凝灰岩が用いられている。４は自然面打面のチャート製の剝片を素材としている。

第251図５から８は打面以外の一部に連続した細部調整を施した削器である。いずれも剝離面打面の剝片を素材とし、石材は５、７、８が流紋岩、６がデイサイトである。

第251図５は片側の側縁と末端の表裏両面に浅い細部調整が施されており、刃部の形状はわずかに内弯する凹形である。刃角は側縁が60～65度、末端が80～85度である。

第251図 6 は表面の末端に自然面を一部残す剝片を素材としている。素材剝片の末端の形態は蝶番状である。両側縁に浅い細部調整が施されており、刃部の形状はａ面左側縁が凸形、右側縁が直線的である。刃角は両側縁ともに45～50度である。

第251図 7 はおもにａ面の末端左側に細部調整が連続して施されている。刃部形状は肩形で、刃角は65～70度とやや急角度である。また、ａ面の右側縁には微細な剝離痕が表裏両面に観察される。

第251図 8 はａ面の左側縁の表裏両面から細部調整が施され、凸形の刃部が形成されている。刃角は65～75度である。

第251図 9 は自然面打面で、末端形態が蝶番状の流紋岩製の剝片を素材とした削器である。ａ面の末端にわずかに自然面を残している。細部調整はａ面の右側縁におもに裏面側から施され、刃部形状は凸形を呈している。刃角は50～55度である。

**第252図**も削器である。

第252図 1 は表面に自然面を残す剝離面打面の剝片を素材としている。両側縁に細部調整が施されており、刃部の形状はａ面左側は直線的で、右側は外弯度の小さい凸形を呈している。ａ面左側縁の細部調整はおもに裏面側から施されているのに対して、右側縁では表裏両面からの浅い細部調整となっている。刃角はａ面左側が60度前後、右側が65～80度である。石材は珪質頁岩を用いている。

第252図 2 は表面に自然面を大きく残す剝片を素材とし、ａ面の左側縁に80～85度の急角度な細部調整を裏面側から施して刃部を作出している。刃部の形状は直線的である。石材はデイサイトである。 3 と 4 は接合する資料で、石材はやや粗粒な珪化凝灰岩が用いられている。

第252図 3 は表面が自然面の剝片を素材としており、両側縁に表裏両面からの細部調整が施されている。ａ面の左側縁に施された細部調整は器体厚を減ずるための調整である。右側縁の細部調整は 4 の素材剝片が剝離された後に施されたものであり、凹形の刃部が形成されている。刃角は70～85度である。

第252図 4 の素材剝片は、 3 の表面を打面として剝離されたもので、自然面打面の剝片である。ａ面の右側縁に表裏両面からの細部調整によって直線的な形状の刃部が形成されている。刃角は60～80度である。

**第253図**も削器である。

第253図 1 は扁平な礫を素材とし、全周に細部調整が加えられ整形されているが、表裏両面に自然面を大きく残している。表裏両面からの細部調整によって直線的な形状の刃部が作出されている。刃角は65～80度である。表裏両面の自然面には磨り面が広く認められ、ｂ面側では浅い溝状の凹みとなり光沢も観察される。また、ａ面左側の剝離面にもわずかな磨滅が観察される。ａ面の中央と刃部の表裏両面には黒褐色の付着物が認められる。石材は輝緑岩である。

第253図 2 は剝離面打面の表面に自然面を大きく残す剝片を素材としている。打面付近を除いて細部調整が施され、縁辺はツブレ状を呈している。石材は珪化凝灰岩である。

**第254図** 1 は剝片の打面側と末端に細部調整を施した削器である。刃部の形状は凸形であり、打面側の刃角は60～65度、末端側は75度である。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第254図 2 は珪化凝灰岩製の横長剝片を素材とした削器である。打面は表面側からの細部調整によってほとんど除去されている。末端に表裏両面から細部調整を施し凸形の刃部を形成している。刃角は70～80度である。

第254図 3 は自然面打面の剝片を素材とした横型削器である。末端にやや粗い細部調整を施し直線的な刃部を形成している。刃角は75～80度である。打面側にも細部調整が施されており、さらに敲打痕も観察されることから敲打具としても使用されたものと考えられる。石材はデイサイトである。全体的に稜線がシャープさを失っており、ローリングを受けた可能性がある。

第254図４は表面が自然面の横長剥片を素材とした横型削器である。素材剥片は自然面打面であり、その末端に表裏両面から細部調整を施して直線的な刃部を形成している。刃角は70～80度である。石材は珪質頁岩である。

第254図５には粗い細部調整が表裏両面に施されている。細部調整は部分的で、ｂ面には素材剥片の主要剥離面が残され、ａ面には自然面と素材剥片剥離以前の大きな剥離面が残されている。細部調整は粗く、さらに折れ面が細部調整による剥離面を切っていることから何らかの石器の製作途上で破損したものと考えられ、残された形状から石斧未成品の可能性がある。石材は珪質頁岩である。

第254図６はノッチである。両極剥離によって折り断られた流紋岩の剥片を素材としている。ａ面左側縁にｂ面側からの細部調整によるノッチ状の凹みが作られている。細部調整によって形成された角度は80度である。

第254図７はデイサイト質凝灰岩製の点状打面の剥片を素材としている。素材剥片の末端に表裏両面から細部調整が施された横型削器であり、さらにａ面右側縁にはノッチが作られている。末端の刃角は85度前後であり、ノッチ状に凹んだ部位では80度前後である。

第254図８はノッチである。ａ面左側縁と末端が両極剥離によって折り断られた剥離面打面の剥片を素材としている。ａ面の右側縁にａ面側からの細部調整によってノッチ状の凹みが作られており、刃角は60度である。石材は珪質頁岩が用いられている。

第254図９は表面に自然面を残す剥片を素材としたノッチである。ａ面の左側縁ではａ面からｂ面側へ、右側縁ではｂ面からａ面側へと、いわゆる錯向剥離状に細部調整を施してノッチ状の凹みが作られている。左側の刃角は80度、右側は75～80度である。石材は珪質頁岩である。

**第255図**１は剥離面打面の剥片を素材とした細部調整剥片である。細部調整は末端と打面近くに認められる。末端の細部調整はおもに裏面から表面側へ施されており、60～70度の角度を形成している。打面近くの細部調整はａ面左側縁の打面側にみられ、表面から裏面に向けて施されている。角度は50～55度である。石材は珪質頁岩が用いられている。

第255図２も細部調整剥片である。流紋岩を石材とする剥片のごく一部に細部調整が施されている。表面に火ハネ部分が観察される。

第255図３は細部調整によるノッチ状の凹みが鋸歯状に連続する鋸歯縁石器である。自然面打面のバルブがよく達した剥片を素材としており、ａ面の右側縁から末端にかけて施された細部調整によって75～80度の角度を形成している。石材はチャートである。

第255図４は表面の末端側に自然面を残す剥離面打面の横長剥片を素材とした細部調整剥片である。ａ面右側縁と末端に裏面から表面側へまばらな細部調整が施され、60～65度の角度を形成している。石材はチャートである。

第255図５は尖頭削器である。剥離面打面の剥片を素材とし、打面のａ面左側と末端に表裏両面から細部調整が連続して施されている。刃角は左側縁が75～85度であり、末端は70～80度である。石材は流紋岩である。

第255図６は横長の剥片を素材とし、素材剥片の末端に細部調整が施された横型削器である。ａ面末端の左側には裏面から表面側へ細部調整が施され、60～75度の刃部が形成されている。また、末端の中央から右側には裏面側への細部調整によりノッチ状の凹みも作られている。打面部分は剥離によって除去されている。石材は珪化凝灰岩である。

第255図７は扁平な礫の両端を剥離し、その剥離面を打面として、一端からはａｂｃの各面に平坦な剥離が施され、残る一端からはｃ面にのみ剥離が施されている。何らかの石器を作ろうとした未成品と考えられる。石材は珪質頁岩である。

第255図８は表裏両面にわずかな細部調整が施された細部調整剥片である。黒褐色の付着物がａ面の長軸の一端の両側縁に特に明瞭に観察されるほか、ａ面の器体中央部とｂ面全体に部分的に認められる。石材はチャートである。

第255図９は縁辺の一部を残し、それ以外の縁辺が整形された背つき石器である。整形は表裏両面からの細部調整によって行われ、楕円形に近い形状に整えられている。石材は大型板状石器に多用される板状節理を有する安山岩である。

第255図10は両側縁に細部調整を施して整形した両端切りとり石器である。自然面打面の剥片を素材としており、ａ面およびａ面の左側縁に自然面が部分的に残されている。ａ面の基部には長軸方向の擦痕を伴う研磨が施されている。刃部は主要剥離面と先行剥離面によって形成されており、細部調整によって作出されたものではない。刃角は40度前後で、刃縁には微細な剥離痕が観察される。石材はデイサイト質凝灰岩である。

**第256図**１は末端が肥厚する剥片を素材とした鋸歯縁石器である。細部調整は粗く、両側縁の表裏両面に鋸歯状に連続的に施されている。石材は流紋岩である。

第256図２は敲打具と考えられ、剥離面を打面とする厚手剥片が用いられている。周縁に敲打痕とそれに伴う剥離面が認められる。特に長辺の敲打痕は著しく、ツブレ状を呈している。石材は流紋岩である。

第256図３も敲打具と考えられる。安山岩を石材とする剥片が用いられており、ａ面の一部に自然面が残されている。両側縁は細部調整によって整形され、わずかに内弯している。ａ面の右側縁の一端と一方の長辺の中央に敲打痕が観察される。

第256図４から12は、１対あるいはそれ以上の相対する端縁に、角度の非常に浅い細部調整が認められるピエス・エスキーエである。

第256図４は長軸の両端にツブレ状の剥離が認められ、それぞれ主にａ面とｂ面側への剥離となっている。今回確認されたピエス・エスキーエの中で最小のものである。石材は珪質頁岩である。

第256図５はａ面の一部に自然面を残しており、ｂ面の上下両端に細部調整が認められる。石材は珪質頁岩である。

第256図６は両極剥離による剥片であり、両打点側に細部調整が観察される。また、ａ面左側縁には微細剥離痕が認められる。流紋岩を石材としている。

第256図７は薄手の剥片の打点側と末端に細部調整が観察される。打点側では表裏両面に剥離面が認められ、末端ではｂ面にのみ観察される。石材は流紋岩である。

第256図８のａ面中央には末端から上端まで延びる剥離面が認められるが、剥片剥離後のものであり細部調整の剥離面である。また、打点側からｂ面への剥離面は中央部まで延びている。石材はデイサイトである。

第256図９は自然面打面で、末端の形状がステップ・フラクチャーの剥片に２対の細部調整が認められる。細部調整部位は打面側とａ面の末端、およびａ面左側縁のａ面側と右側縁の表裏両面の２対である。ａ面の一部に自然面が残されている。石材はチャートである。

第256図10は剥離面打面の剥片であり、打面側の表裏両面とａ面の末端が対となる細部調整が観察される。石材は珪質頁岩である。

第256図11も剥離面打面の剥片であり、打面からわずかにずれた位置と末端に細部調整が認められる。ａ面では右側縁の剥離面を除き、両極からの細部調整と考えられる。石材は流紋岩である。

第256図12は末端に自然面を残す剥片であり、２対の細部調整が認められる。細部調整の部位はａ面の末端左側とそれに対応する素材剥片の打点側、および左右両側縁の２対である。細部調整はａ面末端左側ではおもにｂ面側に認められ、素材剥片打点側では表裏両面に、両側縁ではおもにａ面側に観察される。石材はデイサイトである。

**第257図**１はピエス・エスキーエである。剥離面打面で表面の右側に自然面を残す剥片であり、表面と打面を分ける稜上と末端の表裏両面に対をなす細部調整が認められる。石材は珪質頁岩である。

第257図２は剥離面打面の剥片を素材とした削器である。ａ面右側縁に連続した細部調整がおもにａ面側に施されており、刃角は60～70度である。ａ面左側は面を形成しており、側面の中央に表裏両面へのツブレ状の剥離を伴う

細部調整が認められる。石材は流紋岩である。

第257図３は石核である。表面に自然面を大きく残す剝片を素材としている。その自然面を打面として、主要剝離面であるａ面側を作業面に剝片を剝離している。剝離面の新旧関係から剝片剝離作業は時計まわりに行われたことが観察される。石材は流紋岩である。

第257図４は礫の一端に剝離面がわずかに認められるのみで、ほかには敲打痕も磨面も観察されないことから石核と考えられる。剝離面は小さいが、ｂ面の左側面からｂ面側へ剝離を行い、その剝離面を打面としてａ面側に剝片剝離作業を行っている。石材は流紋岩である。

第257図５から16は大型板状石器に多用される安山岩やデイサイトおよびデイサイト質凝灰岩などの石材を用いた石器であり、大型板状石器の破片を転用したと考えられるものも認められる。

第257図５はａ面とｂ面によって形成される、光沢の著しい縁辺を刃部としている。ａ面左側面および刃部と相対する端部は折り取られており、左側面からａ面に向けて厚みを減ずるためと考えられる大きな剝離が１面認められる。刃部には刃こぼれと考えられる微細な剝離痕がわずかに観察され、光沢に覆われる剝離面も認められる。光沢は表裏両面に広がっており、肉眼でも明瞭に観察できる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第257図６はａ面にのみ光沢が認められることから、大型板状石器の刃部に近い一部分が剝落したものと考えられる。光沢をもつ縁辺の両端にはツブレ状の微細な剝離痕が観察され、その縁辺以外は折り取りによる整形が認められることから転用されたものと考えられる。石材は珪質凝灰岩である。

第257図７は剝片の縁辺の一部に磨滅痕が認められる石器である。磨滅痕はａ面の下端縁と上端縁に観察され、下端縁では面を形成している。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第257図８も剝片の一部に磨滅痕が観察される石器である。ａ、ｂ、ｃ各面に著しい磨滅痕が認められ、特にｂ面とｃ面の一部では素材面を残さないほど顕著である。石材は安山岩である。

第257図９は剝片の４辺を折りとって整形されており、図の下端に磨滅痕が観察される。磨滅はａ面よりｂ面側が顕著である。ｂ面にはさらに中央近くまで右下がりの擦痕を伴う磨面が認められ、先端では長軸方向の擦痕が観察される。石材は安山岩である。

第257図10は折りとりによって四辺形に整形された剝片を素材として、わずかな細部調整が施されている。ａ面下端縁の両端は磨滅しており、特に右側で著しくｂ面側にまで磨滅が及んでいる。ａ面と下端面を分ける稜線上には敲打による損傷が確認され、ｂ面と左側面を分ける稜線上も同様である。また、ａ面の左側面と上端面を分ける角にも損傷がわずかに観察される。ｂ面の上端面近くと下端縁の右端には右下がりの擦痕を伴う磨面が認められる。石材は安山岩である。

第257図11はａ面の左側面が自然面で、ほかの３辺は折りとられた細部調整剝片である。敲打によって上端面は平坦になっており、表裏両面と上端面を分ける稜線もつぶれている。また、ａ、ｂ両面には敲打に伴う損傷の剝離が観察される。敲打痕ａ面右側縁にも認められ、さらにａ面の下端中央部でも確認される。ａ面右端の突出部には長軸方向の擦痕を伴う磨滅痕がみられ、突出部はｂ面側でも磨滅している。ｂ面と下端面を分ける稜線は著しく磨滅しており、右下がりの擦痕が明瞭に観察される。石材はデイサイトである。

第257図12は左右両側面と上端面を折りとり、残る１辺を細部調整によって整形した細部調整剝片である。細部調整が施された１辺とａ面左側縁が交わる角には、表裏両面に長軸方向の擦痕を伴う磨滅痕が観察される。ａ面下端縁の中央は磨滅し、若干光沢を帯びている。下端縁の右端には敲打によるツブレが認められる。石材はデイサイトである。

第257図13は12と同様に左右両側面と上端面を折りとりによって整形し、残る１辺に細部調整を施した細部調整剝片である。左右両側面と上端面を分ける稜線には磨滅痕が観察され、さらにａ面左側縁の上端面付近には敲打痕も

認められる。また細部調整の施された下端縁とａ面左側縁によって形成される尖端部にも磨滅痕が観察される。この磨滅痕は回転によるものと考えられ、穿孔に用いられた可能性がある。石材は安山岩である。

第257図14はａ面の一部に自然面を残す剝片を素材とした細部調整剝片である。ａ面右側縁と下端は折りとられ、残る１辺には細部調整が表裏両面に施されている。ａ面下端縁の中央から左端にかけて、下端縁に直交する擦痕を伴う磨面が観察され、左端は著しく磨滅している。それに対応するｂ面下端縁の右端にも磨面が認められ下端縁に対して直交方向に近い右上がりの擦痕を伴っている。石材は安山岩である。

第257図15は安山岩を石材とする細部調整剝片である。ａ面左側面の上端寄りに敲打痕が観察され、それに伴う損傷の剝離面が表裏両面に認められる。ａ面右側面も敲打によってツブレ状を呈している。下端縁は敲打痕が著しく、もっとも頻繁に使用された部位と考えられ、おもにａ面に敲打に伴う損傷の剝離面が観察される。以上のように主として敲打具として使用されたものと考えられる。

第257図16は細部調整剝片である。大型板状石器に多用される石材が用いられており、表裏両面に明瞭な光沢が認められることから大型板状石器の破片を転用したものと考えられる。左右両側縁に細部調整が施され、下端縁は敲打によってツブレ状を呈し、それに伴う損傷の剝離面が表裏両面に認められる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

**第258図**は大型板状石器に多用される安山岩やデイサイトおよびデイサイト質凝灰岩などの石材を用いた石器である。

第258図１は上端と両側面を折りとり、上端面から表裏両面にわずかに細部調整を加えた細部調整剝片である。両側面には折りとりの際の打撃痕が明瞭に観察され、ａ面右側面はａ面を、左側面はｂ面を打面として打撃が加えられている。両側面によって形成される尖端部には敲打による著しい損傷が確認されることから敲打具として使用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第258図２は４辺を折りとって整形した細部調整剝片である。両側面の折りとりは両極剝離によるものである。表裏両面と右側面および下端面によって形成される鋭角な部位に著しい敲打痕が観察され、上端面と左側面を分ける稜線上、および表裏両面とａ面左側面を分ける２つの稜線上にも敲打痕が認められる。したがって両極剝離などの方法による折りとりで素材を整形し、それによって得られた稜線や角を利用して対象物に敲打を加える敲打具として使用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第258図３は折りとりによって整形された細部調整剝片である。剝片面は自然面である。上端の２つの折りとり面を分ける稜線上には敲打痕が明瞭であり、表裏両面の下端縁にも敲打による損傷と考えられる小さな剝離面が認められる。ａ面で見て下端縁の左側は面を形成しており、その面と表裏両面を分ける稜線部分はともに磨られて磨滅している。石材は安山岩である。

第258図４は４辺を折りとられた剝片である。ａ面左側面は両極剝離による折りとりである。ａ面とその左側面および下端面によって形成される角から稜線にかけて敲打痕が認められることから敲打具として使用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第258図５は縁辺の一部に磨滅痕が観察される細部調整剝片である。磨滅痕はａ面下端縁の左側に認められ、下端縁に平行する方向に擦痕がわずかに確認される。石材はデイサイトである。

第258図６はａ面右側面と上端面が折りとられた細部調整剝片である。ａ面の左側面は自然面であり、左側面からａ面側に連続した細部調整が加えられている。下端面は敲打による損傷が著しくほぼ平坦となっており、さらに敲打に伴う損傷の小剝離面が表裏両面に観察される。またｂ面とその左側面および上端面によって形成される角にも敲打による損傷が明瞭に認められることから、複数の部位を使用した敲打具と考えられる。石材は安山岩である。

第258図７は礫の破損面と自然面によって形成される縁辺に破損面側から剝離を施して刃部を作り出した掻器である。刃角は70～90度である。用いられている石材は安山岩である。

第258図８はａ面に自然面を大きく残す細部調整剥片である。上下両端に表裏両面に向けての細部調整が施されている。ｂ面と折れ面である右側面を分ける稜線上に短軸方向の擦痕を伴う磨面が認められる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第258図９は両側面と上端面を折りとり、表裏両面へのまばらな細部調整によって整形が行われた削器である。刃部は表裏両面への剥離によって形成されている。ａ面中央とｂ面右側縁の中央部には敲打痕が観察される。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第258図10はａ面下端縁の左側に表裏両面への剥離によってノッチ状の凹みが作られた石器である。下端中央の突出部には敲打によるツブレが観察される。ａ面右側縁とｂ面右側縁には部分的に側面からの剥離面が認められる。石材は安山岩である。

第258図11は部分的な細部調整と折りとりによって整形された細部調整剥片である。ａ面左側面は両極剥離による折りとり面である。両側面を分ける稜線上には明瞭な敲打痕が観察される。また、表裏両面には敲打による損傷の小剥離面が認められることから、敲打具として使用されたものと考えられる。石材はデイサイトである。

第258図12は敲打具として使用されたと考えられる細部調整剥片である。折りとりによって形成されたａ面左側面からａ面側へ剥離が施されており、さらにａ面の一部に著しい光沢が認められることから、大型板状石器を転用したものと考えられる。他の側面も折りとりによって形成され、特に上端面は両極剥離による折りとり面である。下端縁には敲打痕が著しく、表裏両面に見られる剥離面は敲打に伴う損傷と考えられる。ａ面左側面からａ面へ施されたわずかな剥離は、稜線の高まりの除去を目的としたものであろう。用いられている石材は安山岩である。

第258図13はおもに折りとりによって整形された細部調整剥片である。左側面と右側面を分ける稜線の下端側には敲打痕が観察され、ｂ面には敲打に伴う損傷の小剥離面が認められることから、敲打具として使用されたものと考えられる。ａ面左側面には火を受けて黒変した部分が確認される。石材は安山岩である。

第258図14は４側面が折りとりによって形成され、細部調整がわずかに施された細部調整剥片である。ａ面左側面と下端面によって形成される角を除いて、残る３つの角には敲打痕が確認され、さらに表裏両面には敲打による損傷の剥離面が認められることから、敲打具として使用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第258図15は下端縁にまばらな細部調整を施した細部調整剥片である。ａ面の一部と上端面は自然面である。上端面のａ面左側には敲打によって著しく凹んだ箇所があり、表裏両面にはそれに伴う剥離面も観察される。石材は安山岩である。

**第259図**１はａ面左側と上下両端を折りとられた剥片であり、敲打具として使用されている。ａ面下端面の両端と左側面の両端に敲打痕が観察され、特にａ面左側面と下端面によって形成される角に著しく、敲打による損傷の剥離が認められる。また、ｂ面と上端面を分ける稜線上の中央から右端にかけて敲打痕が確認される。石材は珪質凝灰岩である。

第259図２は３辺を折りとり、ａ面右側縁にわずかに細部調整を加えて平面三角形に整形した細部調整剥片であり、敲打具として使用されている。ａ面左側面と上端面の折りとりは両極剥離によるものである。ａ面右側面と上端面を分ける稜線は磨滅しており、さらにｂ面に近い側には敲打痕が認められる。ａ面左側面と上端面を分ける稜線の両端には敲打痕が観察される。下端の尖端部は敲打によってつぶれており、表裏両面には敲打による損傷の剥離が著しい。石材は安山岩が用いられている。

第259図３は表裏両面に自然面を残した細部調整剥片であり、敲打具として使用されている。おもに折りとりによって平面四角形に整形されている。ａ面右側面と下端面によって形成される角を除く３つの角に敲打痕が認められ、特に下端面左端の角に顕著で、表裏両面に敲打による損傷の剥離を伴っている。他の２つの角の敲打痕はごくわずかである。石材は安山岩である。

第259図４は敲打具として用いられた石片である。接合資料であるが、最終的には左右別々に使用されたものと考えられる。ａ面右側は中世の溝跡であるSD44溝跡から出土しており、SD44溝跡はSR １自然流路跡を切っている。右側縁の中央には表裏両面とも剝離が施されており、もっとも厚い部位であることから器厚を減じるための調整と考えられる。ａ面左側の上端縁全体と下端縁左側には敲打痕と敲打による損傷の剝離面が認められ、下端縁右側にはそれに加えて磨滅痕も観察される。ａ面右側では下端縁と上端縁両端角に敲打痕と損傷の剝離面が確認される。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第259図５はａ面左側縁の中央部に細部調整を施し、それ以外の周縁はおもに折りとりによって整形した細部調整剝片である。ａ面左側面の下端寄り半分には自然面が残されている。ａ面全体に長軸方向の擦痕を伴う磨り面が広く認められるが、磨り面には凸凹があり平坦ではない。石材はデイサイトが用いられている。

**第260図**１から４はすべて安山岩を石材として用いた大型板状石器である。

第260図１は左右両側縁を折りとり、両側面の接する頂部から表裏両面に剝離を施して整形している。表裏両面に施された剝離は、折りとり面と表裏両面を分ける稜をつぶすためのものと考えられる。全面が酸化鉄に覆われており、光沢などの詳細な観察は不可能である。

第260図２のａ面左側面は両極剝離による折りとり面である。他の２辺は細部調整が施されており、折りとりと細部調整によって平面形が三角形を呈するように整形されている。ａ面の中央を左上がりに延びる稜線と左側縁が交わる部分には敲打痕が認められる。この敲打痕は鋭角に突出した頂部をつぶすための調整と考えられる。同様にａ面左側面の両端には敲打によるツブレが観察され、この敲打も鋭利な部分をつぶすための調整と考えられる。光沢は表裏両面の下端縁とｂ面の左側縁の一部に肉眼で観察され、ｂ面の左側縁がより顕著である。ａ面中央のやや刃部寄りには刃縁に直交する方向で擦痕が認められる。周縁に施された剝離面には光沢に覆われるものと光沢面を切るものがあり、器体調整のための剝離面以外に、使用による刃こぼれが含まれる可能性が考えられる。

第260図３は刃部を除く３辺がすべて折りとられて整形されている。上端面は両極剝離による折りとりである。表裏両面と上端面を分ける稜線をつぶすように、小さい細部調整が上端面から連続して施されており、特にａ面側とｂ面の右半、折りとり面と折りとり面の接する頂部に認められる。刃部は表裏両面に細部調整が施されて形成されており、鋸歯状を呈している。

第260図４の左側面は自然面であるが、右側面は折りとり面であり、この折りとりによって平面形が三角形を呈するように整形されている。両側面の接する頂部から表裏両面に向けて施された剝離面は、鋭角に突出した部分を落とすための調整と考えられる。ａ面の刃部左端は剝離によって鋭利な部分がつぶされている。刃部にはおもにａ面側に剝離面が連続しているが、剝離面には光沢に覆われるものと光沢面を切るものがあり、刃部を直線的に整えるための細部調整と使用による刃こぼれの両者が含まれているものと考えられる。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察されるが、ａ面では表面が部分的に剝落している。

**第261図**から第269図はすべて大型板状石器である。

第261図１はａ面に自然面を残す素材剝片の表裏両面に細部調整を施し、平面三角形に整形している。ａ面右側縁およびｂ面左側縁の細部調整は折りとり面から施されており、折りとり面はａ面からｂ面への剝離によって形成されている。刃部には小さな剝離が施され、わずかに内弯気味であるが、ほぼ直線状に仕上げられている。刃部の光沢は表裏両面ともに顕著であり、特にｂ面では器体中央部まで確認できる。石材は安山岩が用いられている。

第261図２は素材剝片を主に折りとりによって整形し、一部に細部調整を施して仕上げられている。ａ面の右側面の上端側は自然面であるが、刃部側および左側面は折りとり面である。左側面の上端側の折りとりは両極剝離によるものである。上端にはａ面側ののちｂ面側へ剝離を施し、自然面と折りとり面によって形成されていた鋭角に近い頂部を除去している。刃部の光沢は明瞭ではないが、ｂ面の一部にわずかに観察される。石材は安山岩である。

第261図３は上下両端縁に光沢が観察され、ともに刃部として使用されたものと考えられる。下端縁の刃部には表裏両面に光沢が認められ、ｂ面の器体中央寄りに刃部に平行する擦痕を伴う磨り面が観察される。上端縁の刃部の光沢はｂ面側で明瞭に観察されるがａ面側では不明瞭である。石材は安山岩が用いられている。

第261図４は上端面に自然面を残し、左右両側面は折りとりによって形成されている。石材は安山岩である。

第261図５はａ面が自然面の石片を素材としている。ａ面左側縁から上端縁にかけては表裏両面への大きな剝離によって整形されているが、上端縁の右側に折りとり面が残されていることから、整形には剝離と折りとりの両者が用いられたものと考えられる。ａ面右側縁には細部調整が施され、外弯した刃部が形成されている。刃部の光沢はあまり明瞭ではない。ｂ面の下端縁右端には磨滅痕が確認され、上端寄りには敲打痕が部分的に認められる。石材は安山岩が用いられている。

第261図６はｂ面の一部に自然面を残す石片を素材としており、火を受けてａ面の下端寄りの右側からｂ面の下端寄りの左半部にかけて黒変し、両面に火ハネの痕跡が認められる。ａ面左側面は両極剝離による折りとり面である。ｂ面の左側面も折りとり面であり、折りとり面から剝離が施され稜が落とされている。刃部の表裏両面に光沢が明瞭に観察される。また、光沢を切る右上がりの擦痕を伴う磨り面が、石器表面の凸部に、ａ面の刃部から器体中央にかけて点々と認められる。石材は安山岩である。

**第262図**の１から７に用いられている石材はすべて安山岩である。

第262図１のａ面上端面および右側面は自然面であり、左側を欠損している。ａ面右側縁の刃部寄りにはわずかに細部調整が施されている。刃部の表裏両面に明瞭な光沢が観察され、刃縁は光沢を帯びて磨滅している。

第262図２は焼けて一部わずかに黒変している。ａ面右側面と上端面は折りとり面である。刃部の表裏両面に光沢が観察されるが、ｂ面の光沢が顕著であるのに対してａ面ではあまり明瞭ではない。

第262図３は刃部を大きく欠損しており、３分の１程度残存しているのみである。上端部のａ面右側には自然面が残され、左側は３～４回の折りとりによって形成されている。自然面には部分的に敲打とａ面からの剝離が施されている。自然面寄りの折りとり面からは表裏両面に剝離が施され、上端面と表裏両面を分ける稜が落とされている。残された刃部には表裏両面ともに光沢が認められる。

第262図４はａ面が自然面であり、刃部を除く３辺は折りとりによって整形されている。ａ面左側面と上端面を分ける稜線には敲打が施され、鋭角に突出した頂部がつぶされており、敲打はａ面の左側縁の一部にも連続している。また、ａ面の右側縁と上端縁の接する角には剝離が加えられ鋭利な部分が落とされている。刃部ではｂ面右端が敲打によってつぶされ、連続する右側縁の鋭利な部分も落とされている。以上のようにそれほど明瞭な細部調整ではないが、鋭角な突出部や鋭利な稜線などには入念に手が加えられている。刃部の表裏両面に光沢が観察され、特にｂ面側で顕著である。

第262図５はａ面の左側を欠損している。上端面は折りとり面であり、ｂ面上端縁の中央部には折りとり面からの剝離が加えられ、鋭利な角が落とされている。ａ面右側縁から刃部にかけて表裏両面への細部調整が施され整形されている。刃部のａ面側に光沢が観察される。ｂ面の上端縁右側には磨滅痕が認められる。

第262図６はａ面と上端面が自然面であり、左右両側辺を折りとって四辺形に整形している。両側面および上端面から表裏両面に細部調整を施し、稜が落とされている。刃部の表裏両面に光沢が観察されるが、それほど顕著ではない。

第262図７はａ面の一部に火ハネがあり、表裏両面ともに焼けて黒変した素材を使用している。ａ面の右端を欠損する。下端中央部と上端の表裏両面に細部調整を加えて整形が行われており、上端面の中央には敲打によるツブレが著しい。下端中央部には表裏両面への細部調整によって抉り部が形成されているが、抉り部のａ面左側は火ハネによる平坦な面となっているため右側の部分のみが刃部である。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。

**第263図**の１から５に用いられている石材はすべて安山岩である。

第263図１は左右両側縁を折りとり、わずかな細部調整を加えて整形している。下端縁のａ面右側にはａ面からｂ面側への剝離によって抉り部が形成されており、左側が刃部である。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察される。ａ面の刃部付近を除く全体が火を受けて変色しており、ａ面の右側とそれに対応するｂ面の一部は黒変している。

第263図２はａ面の右側縁を一部欠損する。ａ面左側面と上端面は折りとり面であり、上端面から表裏両面に細部調整を施して整形されている。下端縁ではおもにｂ面側に部分的に剝離が施されている。ｂ面の一部に光沢が観察され、ａ面中央の広い範囲に弱い磨滅痕が認められる。

第263図３は刃部以外の部分にわずかな細部調整を施して整形されている。ａ面右側縁は折りとられており、左側縁の刃部寄りは欠損している。刃部の表裏両面には光沢が顕著に認められ、刃縁の一部は磨耗して丸みを帯びている。ａ面右側には細部調整の際に剝離された剝片の一部が接合している。

第263図４は刃部以外の周縁のほとんどが折りとりによって整形され、ａ面右側面の刃部側にのみ自然面が残されている。ａ面上端縁の右側には折りとり面とａ面を分ける稜に小さな剝離が認められ、角を落とすための面取りが行われたものと考えられる。刃部にはわずかな細部調整が施されており、表裏両面には光沢が明瞭に観察される。

第263図５は刃部を除く周縁はすべて折りとり面であり、部分的に折りとり面から表裏両面へ剝離が施されている。また、上端左側の折りとり面にも表裏両面から剝離が加えられており鋭角な角を落とすための整形と考えられる。光沢は刃部のａ面側の一部とｂ面側で観察されるが、それほど明瞭ではない。ａ面の器体中央部に黒褐色の付着物が認められる。

**第264図**の１から３に用いられている石材はすべて安山岩である。

第264図１はａ面の一部に自然面を残し、左右両側面と上端面は折りとりによって形成されている。刃縁は欠損しているが、刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察される。

第264図２はａ面の右側に弱い光沢が観察され、上端の折れ面が光沢を切っていることから折損したものと考えられる。折損の後、折れ面を除く縁辺の表裏両面に細部調整を施して整形を行っている。折れ面の両端とａ面左側縁の下端寄りに敲打痕が認められ、敲打具としても使用されている。

第264図３は出土資料中、最大の大型板状石器である。刃部以外の周縁を折りとり、折りとり面から部分的に表裏両面へ細部調整を施して整形している。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に認められ、ａ面右側とそれに対応するｂ面左側で特に著しく、刃縁の一部は磨耗して丸みを帯びている。

**第265図**１は礫から剝離された片面が自然面の剝片を素材とし、上端面とａ面左側面を折りとって部分的に細部調整を施して整形している。ａ面左側面の折りとりは両極剝離によるものである。細部調整はｂ面上端縁と左側縁の上端縁付近、ａ面右側縁に施されており、ｂ面上端縁と右側縁が接する角の剝離は、鋭角な部分をつぶすための調整と考えられる。刃部の光沢は表裏両面で観察され、ｂ面側でより明瞭である。全面が酸化鉄で覆われているため断定できないが、用いられている石材は安山岩と考えられる。

第265図２は上端と右側を欠損しているが、残る縁辺は刃部として使用されている。光沢はａ面では下端縁にのみ認められるが、ｂ面では下端縁から右側縁にかけて連続して観察される。石材は安山岩である。

第265図３は礫から剝離された片面が自然面の剝片を素材としている。おもにｂ面の左側縁に細部調整を施し、素材の表裏両面を分ける鋭角な稜が落とされている。刃縁の大部分を欠損しているが、ａ面の一部で弱い光沢が観察される。用いられている石材は大型板状石器に多用される板状節理を有する安山岩ではなく、礫石器に一般的なデサイトである。

第265図４は全面が酸化鉄に厚く覆われており、観察は容易ではない。ｂ面右側縁の中央部に光沢が確認される。ｂ面の器体中央部の、光沢が認められる縁辺寄りには、擦痕を伴う磨り面が認められる。擦痕の方向は縁辺と平行

に近いが、わずかにずれている。上端縁とａ面右端に敲打痕や磨滅痕が観察されることから転用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第265図５はａ面の一部に自然面を残す石片を素材としている。左右両側面を折りとって、更に上端の表裏両面に細部調整を施して平面三角形に近い形態に整形されている。刃部にも小剝離が施されて整えられている。刃部の表裏両面には顕著な光沢が観察される。折れ面での接合資料であるが、２つに分かれた後、別々に使用されている。上半部は左側縁に更に細部調整が加えられ、また、折れ面からは表裏両面にわずかに剝離が施されている。上端縁の表裏両面には磨り面が認められるが、２つに分かれてからのものかは不明である。下半部はａ面の中央部に弱い磨滅痕が観察され、磨滅痕は上半部に広がらないことから、別々になった後の使用によるものと考えられる。用いられている石材は安山岩である。

**第266図**の１から５に用いられている石材はすべて安山岩である。

第266図１は両側縁を鋭角に接するように折りとった後、両側縁によって形成された鋭角な部位の表裏両面に、刃縁と平行するように細部調整を加えて整形を行っている。刃部の表裏両面には顕著な光沢が観察される。ａ面の中央部やや刃部寄りの右半に、刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面が認められる。また、ａ面の左半に２ヶ所、ｂ面では中央部に黒色の付着物が確認される。

第266図２はａ面の右側を大きく欠損しており刃部左端も失われているが、上端は折りとられた面である。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。表裏両面の中央部刃縁寄りに磨り面が認められ、特にａ面で著しい。ａ面の磨り面は擦痕を伴っており、擦痕の方向は刃縁とは平行せず磨り面の広がりと同一方向である。ｂ面の磨り面にも擦痕が伴っているが、その方向は刃縁にほぼ平行している。

第266図３は折りとりと細部調整によって四辺形に整形されている。ａ面右側面は折りとり面であり、右側面から表裏両面に散発的な剝離が施されている。左側面からはｂ面側に粗い剝離が加えられている。上端縁はｂ面からａ面側への連続した細部調整によってわずかに外弯するように整形され、さらに細部調整によって鋭角になった端縁を擦り落としている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、ａ面の刃部には刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が部分的に認められる。

第266図４はａ面右側の上端側を欠損している。刃部の表裏両面の光沢はわずかであるが、縁辺の折れと磨り面によって失われたものと考えられる。磨り面はａ面の中央から刃部寄りにかけて顕著であり、本来の面のやや凹んだ部分が残される程度である。磨り面にはやや右上がりの横方向の擦痕を伴っている。ｂ面にも磨り面が観察されるが、本来の面の高い部分が点々と磨られた状態である。

第266図５は折りとりと細部調整によって整形されている。ａ面の左側面と上端面は折りとられ、上端面からａ面側への細部調整が施されている。ａ面右側縁はｂ面側への細部調整によって形成されている。刃部の光沢はｂ面側で顕著であるが、ａ面側ではそれほど明瞭ではない。ｂ面の刃部光沢に接して、刃縁と平行方向に磨り面が広がっており、わずかに横方向の擦痕を伴っている。

**第267図**の１から６に用いられている石材はすべて安山岩である。

第267図１はおもに折りとりによって整形されているが、上端には折りとり面と折りとり面によって形成された角を落とすために表裏両面に細部調整を加え、さらに敲打によって鋭利な端縁をつぶした部分がある。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。ａ面中央の刃縁寄りには横方向の擦痕を伴う磨り面が認められ、本来の面の高い部分が点々と磨られている。

第267図２はａ面左側面のみが自然面で、上端縁および右側縁は折りとりと細部調整によって整形され、平面形は台形状である。折りとり面およびａ面左側面から表裏両面に細部調整がわずかに施されている。刃部の光沢は表裏両面で明瞭であり、ｂ面の刃縁付近には磨り面が部分的に観察され、刃縁に平行する擦痕を伴っている。ａ面の器

体中央に刃縁と平行して走る稜線にまたがって磨り面が広がっており、刃部側がより顕著である。磨り面には擦痕を伴っている。擦痕は基本的には刃縁と平行する方向であるが、稜線付近では右下がりとなる部分がある。a面の右側縁寄りに刃縁と直交する方向で7条の条線が認められ、左下がりの条線も3条確認される。

第267図3は刃部を除く縁辺はすべて折りとりによって形成されており、a面左側面は両極剥離による折りとり面である。a面左側面から表裏両面にわずかに剥離が施され、稜の鋭い部分が落とされている。上端面からはほぼ中央部で対をなすように表裏両面への剥離が施されている。a面ではその剥離の左側が敲打によってつぶされており、左端には鋭角に突出した部分を落とすための剥離がみられる。a面右側面からはa面側にのみ剥離が施されている。a面中央のやや上端寄りとb面の刃部寄りには、刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面が認められ、b面側がより明瞭で、部分的に光沢も観察される。

第267図4は両側面が折りとられ、上端面の一部には自然面が残されている。a面の左側面と上端面によって形成された角には左側面とa面側に剥離が施され鋭角な部分が落とされている。b面には上端面からの剥離面が1面認められ、b面と上端面を分ける稜の鋭利な部分を剥離によって調整したものと考えられる。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、b面には光沢を切る磨り面が認められる。磨り面は横方向の擦痕をわずかに伴っている。

第267図5はa面左側を欠損している。右側面は折りとり面であり、折りとった後、上端縁から表裏両面に細部調整を施している。b面右半の刃部寄りに刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面が石器本来の面の高い部分に点々と確認される。刃部の光沢は表裏両面に明瞭に観察され、b面の磨り面上にも認められる。b面左端は焼けて黒変しており、黒変はa面側にもわずかに広がっている。

第267図6はa面左端を欠損しているが、縁辺はすべて折りとりによって形成されている。上端の中央頂部は擦り落とされ、面取りが施されている。上端面の右側の面からは表裏両面に剥離が施され、厚みを減ずるための調整と考えられる。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、a面中央の刃部寄りに磨り面が部分的に認められる。磨り面は、若干右上がりであるが、ほぼ刃縁に平行する擦痕を伴っている。

**第268図**の1から5に用いられている石材はすべて安山岩である。

第268図1は刃部の1端を欠損する。a面右側面は自然面であり、右側面からa面側へ剥離が施され、b面側にも一撃加えられている。厚みを減ずるための調整と考えられる。刃部寄りの剥離は、側面から剥離を施すことによって刃角を調整している。上端面は折りとりによって形成されており、a面右側面と上端面を分ける稜線にはおもに右側面からb面側への剥離が施され、角が落とされている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、a面では器体中央から刃部にかけて広がる磨り面と重複している。光沢は磨り面上にも認められるが、磨り面の観察されない石器本来の面のやや低い部分の方でより明瞭に観察される。光沢と磨り面の前後関係は、使用によって光沢が生じ、その後磨り面が形成され、さらに光沢が磨り面上を覆ったものと考えられる。磨り面には刃縁とほぼ平行する擦痕が伴っている。

第268図2の上端面とa面上半は自然面である。上端面中央には表裏両面へ剥離が施され、角が落とされている。刃縁を欠損するが、刃部の表裏両面には光沢が観察される。b面中央のやや刃部寄りには右下がりの擦痕を伴う磨り面が認められる。

第268図3は折りとりとわずかな細部調整によって整形されている。a面の左右両側面は折りとり面であり、左側面から表裏両面へ剥離が施されている。上端面は2面の折りとり面によって構成されており、両折りとり面を分ける稜線に剥離が施され、角が落とされている。刃部の表裏両面に光沢が明瞭に観察される。a面の刃縁近くには刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が部分的に認められる。

第268図4は折りとりと連続する細部調整によって整形されている。a面左側縁はおもにa面からb面側への細部調整によって形成されており、右側面と上端面は折りとり面である。刃部には剥離は施されておらず、素材の表裏

両面によって形成される鋭利で直線的な縁辺をそのまま刃部としている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、b面中央の刃縁近くには刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が認められる。

第268図5はおもに折りとりによって整形されている。a面中央から刃部にかけて自然面が残されており、左側面および上端面右側も自然面である。a面右側面および上端面左側は折りとり面である。細部調整は部分的で、鋭利な稜線や角を落とすためのものと考えられ、a面左側面と上端面を分ける稜線と上端面中央の稜線は擦り落とされている。刃部の表裏両面には光沢が観察され、a面の刃部寄りには横方向の擦痕を伴う磨り面が認められる。

**第269図**の1から5に用いられている石材はすべて安山岩であり、いずれも部分的な磨り面が器体の中央や刃部寄りに認められる。

第269図1は折りとりと細部調整によって整形されている。細部調整はa面の上端縁左側と右側縁の表裏両面に施されており、折りとり面であるa面左側面にはb面側からの剝離が認められる。刃部の表裏両面には光沢が顕著に観察され、刃縁の微細な剝離痕には光沢に覆われているものも多く認められることから使用による刃こぼれの剝離痕と考えられる。a面中央のやや刃部寄りには、刃縁と平行する明瞭な擦痕を伴う磨り面が認められる。

第269図2はa面左側縁を折りとり、それ以外の刃部を除く縁辺にb面側から細部調整を施して整形が行われている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。磨り面はa面の器体中央部に認められ、刃縁にほぼ平行する、若干右下がりの擦痕を伴っている。

第269図3は表裏両面とも焼けて黒変しており、b面の一部には火を受けて剝落した部分が認められる。左側面は火ハネによって形成された面である。上端面は折りとり面であり、中央の最も厚い部位から表裏両面に若干の剝離が施されている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に認められる。表裏両面に磨り面が観察されるが、b面中央の磨り面が顕著な擦痕を伴っているのに対して、光沢に隣接して広がるa面側ではあまり明瞭ではない。b面の磨り面にみられる擦痕は1方向ではなく、右下がりのものと左下がりのものが確認される。刃縁を欠損している。

第269図4は上端面が自然面であり、右側を欠損している。光沢は表裏両面に顕著であるが、a面では磨り面によって切られている。磨り面にはU字状に凹む浅い溝が4条確認され、溝が延びる方向に擦痕を伴っていることから砥石へ転用されたものと考えられる。

第269図5の上端面右側は自然面であるが、刃部を除くそれ以外の縁辺は折りとりによって整形されている。上端面の自然面と折りとり面によって構成される角には微細な剝離が観察され、角を擦り落としているものと考えられる。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察されるが、b面側には光沢を切る磨り面が認められる。磨り面は擦痕を伴っており、幅5～8㎜の浅くU字状に凹む溝が2条確認される。砥石へ転用されたものと考えられる。

**第270図**には管玉類の成品および未成品を図示した。1から11までが成品であり、12から16は未成品である。成品には石材として碧玉が多く用いられており、1および4から9は碧玉、3は碧玉質材、2は珪質頁岩、10・11は珪化凝灰岩である。それに対して未成品には珪化凝灰岩もしくは珪質頁岩が用いられており、碧玉はまったく認められない。管玉の穿孔はすべて上下両端面から行われており、穿孔具は先端でわずかに細くなっているものであることが断面形状から確認される。

第270図1の上端面の孔は楕円形で、長軸方向に紐擦れ痕と考えられる磨り減りが観察される。下端面近くの側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕がわずかに認められる。

第270図2の上端面と下端面は平坦ではなく磨耗して凹んでおり、連ねられた玉と擦れ合った結果を示すものと考えられる。したがって隣接する玉の紐孔のある面は平坦ではなく外弯した曲面であったと推定され、管玉ではない可能性が高い。側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕が認められるが、部分的にやや右下がりの短軸方向の擦痕も観察される。

第270図3の図示した面の裏側には幅約1.5㎜で長さが6㎜程度の破損孔があり、上下両端からの穿孔が大きくず

れていることが確認できる。破損孔は下端面からの穿孔がずれたため、仕上げの研磨を施した際、壁が薄くなりすぎた結果によって生じたものと考えられる。側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕が認められる。穿孔は上下両端面から行われているが、上端面の穿孔は2度に分けて行われている。

第270図4の側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕が認められるが、右下がりおよび左下がりの擦痕も観察される。両端面と側面を分ける稜線には面取りが施されており、他の管玉には見られない特徴である。

第270図5は製作時の剝離痕が研磨面下に観察され、側面に仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕がわずかに認められる。形状は円柱形ではなく、多角柱状を呈している。

第270図6は側面の両端近くに製作時の剝離痕を研磨面下に残しており、側面の研磨面には長軸方向の擦痕が伴っている。

第270図7では両端面と側面を分ける稜線付近の研磨面下に製作時の剝離痕が観察され、側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕が認められる。上端面からの穿孔は2度に分けて行われており、やや太い穿孔具で途中まで穿孔し、その後、細いもので仕上げられている。

第270図8は上下両端面の磨滅が著しく、側面の一部と両端面の研磨面下に製作時の剝離痕が観察される。仕上げの研磨方向は長軸方向であり、側面には研磨に伴う擦痕が部分的に確認される。

第270図9は出土資料中、最大の管玉である。上下両端面の研磨面下には製作時の剝離痕が凹み状に残されている。上端面の周縁の一部に隣接する玉との接触によって磨り減ったと考えられる部分が認められる。側面は長軸方向の研磨によって仕上げられている。

第270図10は上端面、下端面とも平坦に仕上げられ、側面の研磨痕には穿孔方向と同一の擦痕が観察される。

第270図11の孔の周辺は平坦であり、穿孔は両端面から行われている。ほぼ中央部に穿孔のズレの結果生じた段差が認められる。

第270図12は剝離による整形の後、研磨によって調整が施され、さらに両端面からの穿孔が開始された段階の未成品である。側面は長軸方向の擦痕を伴った多くの研磨面によって構成されている。研磨面下には剝離痕がわずかに確認される。擦痕の方向は長軸方向が主体であるが、右下がりの擦痕を残す面も認められる。下端面が平坦に仕上げられているのに対して上端面は多面体を呈している。石材は珪化凝灰岩である。

第270図13は剝離による整形の後、研磨によって調整が施された段階の未成品である。a面のd面側には自然面が残されている。側面は長軸方向の擦痕を伴う研磨面によって構成され、研磨面下には整形時の剝離痕が観察される。研磨の方向は長軸方向が基本であるが、a面に残る自然面の周辺には右下がりもしくは短軸方向に研磨が施されている。e面には穿孔予定箇所を示すものと考えられる回転痕跡が2ヶ所確認される。右側の回転痕跡が中央に位置し研磨面を切っているのに対して左側は研磨によって切られていることから、最終的な穿孔予定箇所は右側であり、当初の予定位置だった左側が研磨作業によって中心から外れてしまったため、穿孔位置が変更されたものと考えられる。石材は珪質頁岩が用いられている。

第270図14はc面に回転穿孔の痕跡が認められることから回転穿孔中に破損した玉の未成品と考えられるが、研磨の痕跡は確認されず、剝離による整形の後、穿孔作業へと移行している。したがって12や13とは製作工程が異なるものか、あるいは別の種類の石器である可能性も考えられる。石材は珪質頁岩である。

第270図15と16は剝離によって整形された段階のものであるが、15のa面の稜線と16のa面のe面寄りには長軸方向の研磨がわずかに施されている。15、16ともに自然面が部分的に残されている。15のe面のほぼ中央には回転痕跡が1ヶ所確認される。14のように研磨の工程を経ずに穿孔作業へ移行することを示すものか、あるいは研磨作業を行う上での中心位置の目印のいずれかと考えられるが、13の資料に見られる2ヶ所の回転痕跡と研磨面との新旧関係から後者の可能性が高い。16の大きい剝離面は若干磨滅しており、他の面とは状態が異なっている。15、16に

用いられている石材は珪化凝灰岩である。

**第271図**の１と２は勾玉とその未成品である。石材としてともに珪質頁岩が用いられている。

第271図１はほとんど研磨面に覆われているが、表裏両面には研磨面下に整形時の剝離痕がわずかに残されている。研磨面には基本的に右下がりの擦痕が伴っている。部分的に長軸方向の擦痕も観察される。ｂ面の擦痕は長軸方向が大部分で右下がりの擦痕もわずかに認められる。ａ面の左側面には右下がりの擦痕が観察されるが、中央部では短軸方向に近いやや粗い擦痕となっている。穿孔は表裏両面から行われており、孔の周辺は両面とも平坦で別の玉との接触による磨り減りによるものと考えられる。ｃ面の孔の右斜め上には回転痕跡が認められる。

第271図２の研磨面には表裏両面とも長軸方向に近い擦痕が伴っており、ｂ面の擦痕は長軸方向、ａ面左側面の擦痕は短軸方向と勾玉の成品である１とほとんど共通している。研磨面下には整形時の剝離痕が部分的に観察される。穿孔は途中まで行われており、ａ面側から厚みのほぼ中間まで、ｂ面側からはごくわずかである。

第271図３は軟質の石材を用いた不明石製品であるが、剝離による整形が行われ、穿孔が試みられていることからここでは玉類のひとつとして記述する。おもに主要剝離面であるａ面からｂ面側に剝離を施して整形されており、ｃ面の一部には自然面が残されている。表裏両面から穿孔が行われているが貫通はしていない。回転による凹みはａ面側が深く、ｃ面側はわずかである。石材は凝灰岩である。

第271図４は表裏両面に自然面を残しており、長軸の両端と１側縁に表裏両面から細部調整を施して整形されている。ａ面中央の自然面の一部に長軸方向の擦痕を伴う研磨面と右上がりの擦痕を伴う研磨面が隣接して認められ、ｃ面の左側縁中央部にも長軸方向の擦痕を伴う研磨面が観察される。石材は管玉の未成品と同様に珪化凝灰岩が用いられており、石材と形態から勾玉の未成品である可能性が考えられる。

第271図５は一周する凹みとその両側に隆帯が作り出されていることから独鈷石の未成品と考えられ、中央付近から一端を大きく欠損している。剝離による整形の後、敲打による調整の段階で破損したものである。しかし破損面からｃ面側へ剝離が施されており、部分的に研磨痕も認められることから、破損部分を刃部とした石器に転用されたものと考えられる。石材は黒色頁岩である。

第271図６は軟質の凝灰岩を石材と用いた石製品である。図の下端側を欠損しているが、ｃ面は両極剝離による剝離面であり、さらにａ面およびｂ面から剝離が加えられていることから意図的なたたき折りと考えられる。ａ面の上端には剝離がわずかに施され、さらに長軸方向の弱い擦痕も観察される。ｂ面には左側縁からの大きな剝離面があり、折り面近くに短軸方向の線刻が認められる。線刻は右側縁まで続き、ａ面に延びたところで折り面に重なっていることからａ面側にも線刻が施されていた可能性が考えられる。

第271図７から９はいずれも欠損しているが、著しい磨痕が面的に観察されることから砥石の一部と考えられる。７では２面の磨り面が認められ、８では３面観察される。特に８のｂ面は磨痕が著しく、光沢が観察されるほどである。９は剝離によって整形されており、縁辺近くの磨り面下に剝離痕が観察される。図の下端側の破損面近くに断面形がＵ字状を呈する溝が確認される。破損以前に火を受けて一部黒変している。用いられている石材は７が安山岩、８は玢岩、９は砂質凝灰岩である。

**第272図**の１から４は砥石である。用いられている石材は１が砂岩、２は珪質凝灰岩、３は砂質凝灰岩、４は安山岩である。

第272図１は図の下端側を欠損しているが、３面に明瞭な磨痕が観察され、特にｂ面とｃ面では光沢が観察される。ｂ面の中央部には長軸方向の浅い溝状の凹みが認められる。残存する端部は焼けて黒変している。

第272図２の表裏両面には擦痕を伴う平坦な磨り面が認められ、部分的に光沢も観察される。ｃ面は折れ面であり、短軸方向に延びる断面Ｕ字形の磨痕が部分的なものを含めると７条確認される。

第272図３は剝離によって粗く整形されており、ｂ面の一部に平坦な磨痕が認められる。磨痕には部分的に浅い溝

状の凹みが確認される。また、ａ面およびｃ面には素材の凸凹に応じた磨り面がみられ、ｂ面とは使われ方が異なっていたものと考えられる。

第272図４は平坦な磨痕のある面が１面残されているのみで、他の面はいずれも破損面である。磨り面には擦痕が観察され、光沢も認められる。

**第273図**１は分割された礫を素材とし、剝離によって整形が行われた石皿である。ａ面とｂ面に磨り面が認められるが平坦ではなく、磨り面下に素材の面を残している。ｃ面に溝状の浅い凹みが認められる。ａ面の左側縁とｃ面の左右両端には敲打痕が観察される。石材としてデイサイト質凝灰岩が用いられている。

第273図２は大型の剝片を素材とし、一部に剝離による整形を施した石皿である。磨り面は平坦ではなく緩やかな凸凹があり、磨り面下に素材の剝離面がわずかに認められる。石材は凝灰岩である。

第273図３は30cmを超える大型の礫の平坦な面に擦痕を伴う磨痕が観察される砥石である。磨痕はａ、ｂ両面に認められるがｂ面では部分的である。用いられている石材はデイサイトである。

**第274図**の１から３は石皿である。１と２は大きく欠損しており一部が残存するのみであるが、３には図示した面の裏側に焼けハジケの面がわずかに認められるものの、ほぼ完形の石皿である。

第274図１の片面には顕著な磨り面が認められ、裏面は凸面状に整形されている。用いられている石材は安山岩である。

第274図２は扁平な礫を素材としており、剝離によって部分的な整形が行われている。剝片面にのみ磨り面が観察される。石材はデイサイトである。

第274図３は表裏両面ともほぼ平坦な礫を素材としているが片面は傾斜しており、この傾斜した側に磨り面が広く観察される。磨り面の中央には凹んだ部分がみられ、素材の長軸方向に長い、短軸8.5cm、長軸16cmほどの楕円形の範囲で確認される。用いられている石材は凝灰岩である。

**第275図**から第288図は礫に磨痕や敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が単独あるいは複合して残されている礫石器である。あわせて、石核などから敲打具に転用されたものも含め、ほぼ全面に敲打痕が観察される球状敲石も第276図と第277図に図示した。

磨痕のみが残存する礫石器には表裏両面に磨痕の残されているもの（第275図１、**第276図**３）と片面にのみ認められるもの（第275図２・３、第276図１）、片面と１側縁に残されるもの（第275図４）がある。用いられている石材は安山岩が多く、ほかにデイサイトと凝灰岩が１点ずつ使われている。

第275図３はａ面全体が磨り面であり、ｂ面の一部まで広がっている。

第275図４と第276図１の磨り面には擦痕が認められる。擦痕の方向は第275図４では右下がり、第276図１では素材礫の長軸方向である。また、第276図１の磨り面には溝状にわずかに凹んだ部分が擦痕と同一方向で２条認められる。

第276図３は焼けており、表裏両面に黒変した部分が帯状に観察される。

第276図２は礫の長軸の両端に顕著な磨り面が残されており、ａ面には敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が観察される。ｃ面の磨り面は方向の異なる右下がりの擦痕を伴っている。石材はデイサイトである。

第276図４～９と**第277図**１～４は敲打具として使用されたことによって球状もしくはそれに近い形状となったものであり、石核から敲打具に転用されたものを含んでいる。用いられている石材は流紋岩、デイサイト、珪質頁岩である。

石核から転用されたと考えられる敲打具は第276図の４、５と第277図の１～３である。

第276図４はａ面の一部と周縁に敲打痕が観察される。

第276図５は稜線や角張った部分に敲打痕が認められるほか、ａ面左側縁の上端寄りに平坦で擦痕が観察される部

分があり、擦る作業も行われたものと考えられる。

第277図１はほぼ全周に敲打痕が残されており、部分的に敲打による損傷の剝離面が認められる。

第277図２の全周にも敲打痕が観察され、特にａ面左側縁から下端縁にかけて顕著である。

第277図３のａ面右側縁には剝離の施されない自然面が残されているが、敲打痕は自然面の一部にも観察され、さらに稜線上にも連続して認められる。

第276図の６～９と第277図４は、部分的に自然面が残されているものの、大部分が敲打痕と敲打に伴う剝離面に覆われている。

第277図の５～９と**第278図**から第282図に図示した礫石器は使用による痕跡としておもに敲打痕が残されているものである。

第277図５、７、９は礫の長軸の一端に敲打痕が残存するものであり、５の敲打痕は２ヶ所確認され、７と９には敲打による損傷の剝離面を伴っている。６は敲打による損傷の剝離面が一端に確認される。８には長軸の一端と１側縁に敲打痕が認められ、それに伴う損傷の剝離面が明瞭である。ｃ面の大きな剝離面は敲打による損傷の割れと考えられる。石材は５、８、９がデイサイトであり、６は玢岩、７は珪質凝灰岩である。

第278図から第282図は礫の長軸の両端や側面などに複数箇所の敲打痕が残されている礫石器である。

第278図１は礫の側面であるｃ面の両端に敲打痕が観察される。

第278図２も両端に敲打痕が残されているが、一方は側面に位置している。

第278図３は平面隅丸三角形の礫の最も尖った一端とやや尖り気味の角に敲打痕が認められる。

第278図４は側面の両端に敲打痕が残されており、下端側で著しい。

第278図５の敲打痕は５ヶ所確認され、敲打の程度はａ面下端寄りの２ヶ所が最も顕著である。ｃ面の敲打痕は面的で中央部はやや平坦である。下端とａ面上端寄りの敲打痕は弱い。

第278図６は平面隅丸三角形の礫の３ヶ所の角に敲打痕が残されているが、その内の１ヶ所は側面に位置している。

第278図７の敲打痕は３ヶ所に確認され、礫の１側面の両端に認められる。

第278図８は断面形が隅丸三角形を呈する礫を素材とし、稜を持つ側の側縁の両端と中央部に敲打痕が確認される。

第278図９と10の敲打痕は礫の長軸の両端に確認されるが、10の敲打範囲は広く残されているのに対して、９の敲打の程度は弱く範囲も狭い。石材は１と３～５、７、９が珪質凝灰岩であり、２、６、８は安山岩、10はデイサイトである。

**第279図**と第280図には複数箇所に著しい敲打痕が残されている礫石器を図示した。敲打痕に損傷の剝離面を伴っているものが多い。用いられている石材は、第279図１、５、８、10と第280図３、４、９がデイサイトであり、第279図４、６、７、第280図１、２は安山岩、第279図２、９および第280図６、７は珪質凝灰岩、第279図３は凝灰岩、第280図５は玢岩である。

第279図１は割れた礫の一端を素材としており、表裏両面に損傷の剝離面を伴っている敲打痕がａ面下端縁から右側縁にかけて残されている。また、敲打痕はｂ面右側縁にも観察される。

第279図２、４、６は平面形が楕円形に近い礫を素材としている。長軸の両端に著しい敲打痕が残されており、２の下端には損傷の大きな剝離面が認められ、４の下端の敲打痕は素材礫の形状を確認できないほど著しく、側面にまでおよぶ広い面を形成している。６の上端縁の敲打痕は３ヶ所に分かれ、下端の側面側に位置する敲打痕が著しく、平坦な面を形成するほどである。

第279図３は素材礫の角張った部分に損傷の剝離面を伴う敲打痕が残されており、ｃ面下端では左右両端とも敲打

に使用されている。b面左側縁の上端寄りにもわずかな敲打痕が観察される。

第279図5はやや角張った礫を素材としており、a面中央と上端縁に広く敲打痕が残されている。敲打痕の認められない自然面にはにぶい光沢が観察され、手擦れなどの使用に関わる痕跡の可能性が考えられる。

第279図7は一端の割れた平面形が円形に近い礫を用いており、割れ面を除く周縁のほとんどに敲打痕が認められる。表裏両面に損傷の大きな剝離面を伴っている。

第279図8は扁平で細長い礫を素材としており、長軸の一端と側縁の角張った部分に損傷の剝離面が残されている。

第279図9の敲打痕は長軸の一端にb面からc面に及ぶ広い範囲で観察され、割れ面と自然面を分ける稜線上にも認められる。

第279図10は長軸の一端に側面まで連続する敲打痕が認められる礫石器であり、残る一端は欠損している。焼けて黒変しており、黒変は割れ面にもおよんでいることから欠損後に火を受けたものである。

**第280図**1は折りとられた礫を素材としており、一部に剝離による整形が行われている。折りとり面と自然面によって形成された尖端部に著しい敲打痕が認められ、c面の剝離面と自然面を分ける稜線上にも部分的に敲打痕が観察される。a、b両面の尖端部寄りにみられる剝離面は敲打に伴う損傷である。

第280図2は焼けて一部黒変した礫の両端を折りとって細長い形に整形した礫片を素材としており、その中央部から広い方の一端にかけて敲打痕が残されている。敲打痕はa面の下端寄りの右側面と左側縁および下端縁に認められ、右側面でもっとも著しい。右側面では素材の折りとり面を敲打痕が覆い、表裏両面には損傷の剝離面が認められる。

第280図3と5は敲打に使用された礫の一端が破損したものであり、破損面にも敲打痕が認められることから、破損後も敲打に使用されたものと考えられる。3の敲打痕はa面の中央と右側縁に認められ、5ではa面の中央と上端縁に残されているが中央の敲打痕は著しく、素材礫の形状を大きく改変している。

第280図4は側面であるc面の中央部を除き、ほぼ全面に敲打痕が残されており、c面の上下両端がもっとも著しく、平坦になった部分も認められる。

第280図6と7は接合する資料であり、8がその接合図である。接合面は敲打痕が集中する8のa面からの力によって形成されていることから、別個体となる以前の敲打による割れと考えられる。6と7の接合面には縁辺からの敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が認められ、ともに別個体になってからも敲打の作業に使用されている。

第280図9は折れ面であるc面の左右両端と、b面とc面を分ける稜線上に敲打痕が残されており、c面左端で著しくb面およびd面に損傷の剝離面が認められる。素材礫の角張った部分のa面側にも敲打痕が残されている。

**第281図**と第282図には複数箇所に敲打痕が残されている礫石器で、礫の中央部にも敲打痕が観察されるものを中心に図示した。用いられている石材は第281図1、2と第282図1、7が凝灰岩、第281図3～8および第282図6が安山岩である。第282図2、8は珪質凝灰岩、3、5はデイサイト、4は珪質頁岩である。

第281図1は礫の周縁とb面の中央寄りに敲打痕が残されている。敲打痕は特に長軸の両端で著しく、上下両端から側面であるc面に連続して認められる。

第281図2は軟質の石材が用いられており、表裏両面の中央と長軸の両端および側面の片側に敲打痕が残されている。

第281図3も表裏両面の中央付近と側縁に敲打痕が認められる。側縁の敲打痕はわずかに角張った部位の4箇所に認められ、敲打痕のもっとも著しいa面左側縁は平坦になっている。

第281図4と6～8は剝片面の中央付近に敲打痕が残されているもので、4は長軸の一端とそれに近い側面の一部に、6、8では長軸の一端にのみ敲打痕が認められ、7は長軸の両端で観察される。8の端部の敲打痕にはa面に

損傷の剝離が伴っている。

第281図５の敲打痕は剝片面の中央寄りに１ヶ所、側面に２ヶ所残されており、長軸の一端にも認められる。いずれも弱い敲打痕である。敲打の確認されない端部には焼けハジケの部分がみられる。

**第282図**の１は軟質の石材が用いられており、長軸の一端を欠損している。残存する一端に顕著な敲打痕が認められ、先端部は敲打により平坦になっている。ａ面右側とｂ面左側および中央付近には擦痕を伴う溝状の傷が確認される。

第282図２は平面形が卵形を呈する礫を素材としており、尖った側の先端に敲打痕が残されている。敲打痕は両側縁の中央まで連続し、さらにｂ面の左側縁にも認められる。敲打痕の周辺には素材礫の長軸方向や右上がりの無数の擦痕が確認され、石器製作に伴う摩擦行為の結果によるものと考えられる。

第282図３と４は片面と１側縁にわずかな敲打痕が認められる。片面の敲打痕は３では点的であり、４は礫の短軸方向に連なっている。

第282図５は長軸の一端を欠損しているが残存する一端に敲打痕が観察され、近接した位置のａ面側にも残されている。また、敲打痕はｂ面の中央にも認められる。

第282図６は素材礫の表裏両面の中央に弱い敲打痕が認められ、平坦なｂ面の長軸両端に明瞭な敲打痕が残されている。ｂ面の一端と中央の弱い敲打痕との間に短軸方向の擦痕が観察され、石器製作に伴う摩擦行為の結果によるものと考えられる。

第282図７は両側縁のもっとも突出した箇所に敲打痕が残されており、平坦なｂ面の中央にはわずかな敲打痕と礫の長軸方向に延びる条線状の傷が確認される。

第282図８は細長い礫を素材とし、幅の狭い側の一端と連続する１側縁に敲打痕が残されている。ａ面中央付近にも弱い敲打痕が認められ、ｃ面側の相対する位置には短軸方向に近い擦痕を伴う磨り面が観察される。

**第283図**１は一部に自然面を残す分割された礫を素材とし、剝離によって部分的に整形されている。分割によって得られた割り面にあまり損傷を受けていない弱い敲打痕が広く認められる。ｂ面には火を受けて大きくハジケた面がみられる。石材は安山岩である。

第283図２～７と**第284図**１、２は平面円形もしくは楕円形の礫の、剝片面あるいは両面に敲打による浅い凹みが認められる礫石器である。第284図２には部分的に火を受けてハジケた面が認められる。用いられている石材は第283図２がデイサイトであり、第283図３、４、６と第284図１は安山岩、第283図５はデイサイト質凝灰岩、第283図７と第284図２は珪質凝灰岩である。

第284図３～６は凹痕が残存する礫石器であり、３と６は剝片面に凹痕が残され、４は表裏両面と１側縁、５は５面に認められる。

第284図３は軟質で多孔性の軽石の礫が用いられており、礫の形状は長楕円形を呈している。凹痕は礫の片面中央に長軸方向で連続して認められる。深さは断面図作製位置がもっとも深く、他の凹痕は浅い。

第284図４は一端が肥大する細長い礫を素材とし、やや軟質の珪質凝灰岩が用いられている。凹痕は肥大した側の表裏両面の中央に長軸方向に連なってａ面では３ヶ所、ｂ面は４ヶ所の深い凹痕が認められる。さらにａ面右側縁に浅い凹痕と中央に敲打痕が確認され、ｂ面の細い部位の中央には２ヶ所の凹痕が残されている。

第284図５は表裏両面と両側面のほかに割れ面である上端面を含め計５面に凹痕が認められる。凹痕はａ面で４ヶ所、ｂ面で７ヶ所、ｃ面で１ヶ所、ｄ面で１ヶ所残されており、いずれも大きくて深い凹痕であるが、ａ・ｂ・ｄ面の凹痕は上端面の割れ面に切られている。割れ面の凹痕は１ヶ所である。用いられている石材はデイサイトである。

第284図６は礫の片面にのみ凹痕が２ヶ所残されており、中央側が深く、もう一方は浅い。石材は？岩である。

**第285図**から第288図には磨痕、敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が複合して残されている礫石器を図示した。

第285図は磨痕と敲打痕が複合して確認される礫石器であり、1～3と6では表裏両面に磨痕が残されているのに対して4と5は片面にのみ認められる。

第285図1は平面楕円形を呈し、長軸の一端の広い礫が用いられている。狭端部の表裏両面には敲打痕が残されており、b面側により広い範囲で広がっている。広端部ではb面側に敲打痕が認められるのに対して、a面側では磨痕が観察される。またa面の右側縁には敲打痕、それに対応するb面の左側縁には磨痕が観察される。石材はデイサイトである。

第285図2は細長い礫を素材としており、表裏両面の磨痕のほかに、長軸の一端とa面およびb面の先端寄りに敲打痕が残されている。もう一方の端部は欠損している。石材は安山岩である。

第285図3は平面形が円形に近い楕円形で、厚みのある礫を素材としている。表裏両面に磨痕が残されているが、c面の磨痕は弱い。a面のやや突出した部分と側面の一端に敲打痕が認められる。火を受けており、c面の一部には火ハネによる欠損がみられる。石材はデイサイトである。

第285図4は扁平で平面楕円形の礫を素材としており、剝片面にのみ磨り面が認められる。磨り面には長軸方向を主体とする擦痕が伴っている。a面の長軸の一端とb面およびc面の一部に弱い敲打痕が残されている。石材は珪質凝灰岩である。

第285図5は片面が大きく剝落した直方体に近い礫を素材としており、a面中央には大きく分けて4ヶ所の浅い敲打痕が認められる。中央の敲打痕は短軸方向に連らなり、下端の敲打痕には下端面側に損傷の剝離面を伴っている。また、c面の剝落した面の周縁には敲打による剝離面が残されている。側面のb面には長軸方向の擦痕を伴う磨痕が認められ、下端の角には敲打痕が観察される。石材は珪質凝灰岩である。

第285図6は厚みのある平面円形の礫の表裏両面に磨痕が残され、側縁には敲打痕が2ヶ所認められる。石材は安山岩である。

**第286図**1は横断面形が縦長のカマボコ形を呈する礫を素材としている。長軸の一端に平坦な磨痕が認められる。磨痕に擦痕を伴っており、磨痕下には剝離痕が部分的に観察される。a面とb面およびc面を分ける稜線上には敲打痕が残されている。石材はデイサイトである。

第286図2は表裏両面に磨痕が認められ、特にd面側で著しい。磨り面下には両面とも敲打痕が残されている。また、b面の左側縁上端寄りと右側縁下端寄りにも敲打痕が観察される。ほぼ全面にベンガラが付着しており、ベンガラの磨りつぶしに使用されたものと考えられる。石材は安山岩である。

第286図3は球状に近い卵形の礫を素材としており、側面の相対する面であるa面とc面が敲打と磨りによって平坦となった礫石器である。b面とd面には弱い敲打がみられ、d面は平坦気味である。用いられている石材はデイサイトである。

第286図4は表裏両面の中央に凹痕が認められ、側縁には明瞭な敲打痕が残されている。素材礫の3分の1程度が失われている。割れ面は凹痕を切っているが、敲打痕は割れ面にも確認される。石材は安山岩である。

第286図5と6は平面形が円形に近い礫の表裏両面の中央に弱い敲打が残されている。5では長軸の両端に敲打痕が認められ、6は側面に1ヶ所確認される。5、6ともに用いられている石材は安山岩である。

**第287図**1は平面形が卵形を呈する礫を素材としており、片面に磨痕が認められ、表裏両面の中央には2ヶ所ずつの凹痕が隣接して観察される。もっとも深い凹痕は断面図作製位置のa面の凹痕である。石材は安山岩である。

第287図2は円形に近い珪質凝灰岩の礫を素材としており、表裏両面に磨痕と敲打痕が残されている。a面の磨痕には礫の短軸方向の擦痕が認められ、b面では中央に右上がりの擦痕が伴い、右側縁と中央下端寄りには礫の長軸方向の擦痕が確認される。

第287図３は平面形が楕円形を呈する安山岩の礫を素材としている。表裏両面に礫の長軸方向に並ぶ凹痕が残されており、ａ面よりもｂ面側の凹痕が全体的に深くなっている。また、表裏両面には磨痕が認められるが、ｂ面側では礫の中央全体に広く認められるのに対して、ａ面は凹痕の右側にのみ確認される。

第287図４は不整な楕円形の礫を素材としており、表裏両面の中央に浅い敲打痕が認められ、ａ面の右側面には磨痕が観察される。用いられている石材はデイサイトである。

第287図５は扁平でやや凹凸のある礫を素材とし、片面にのみ使用による痕跡が残されている。中央に弱い敲打痕が残され、敲打痕の周囲には磨滅が広い範囲で確認されるが、素材礫の凹凸を失わせるほどの磨痕ではない。石材はデイサイトである。

**第288図**１は円形に近い楕円形の安山岩の礫を素材とし、表裏両面と１側縁に敲打痕が残されている。ｃ面には敲打痕よりも新しい磨痕が認められる。上端側は焼けて黒変している。

第288図２は円形に近い楕円形の礫が用いられており、表裏両面に磨痕が認められる。磨痕下にはａ面では２ヶ所の浅い凹痕が確認され、ｂ面では中央に敲打痕が残されている。側縁には敲打痕が部分的に観察される。石材はデイサイトである。

第288図３は平面形が卵形を呈する安山岩の礫を素材とし、横断面形は隅丸三角形である。表裏両面に敲打痕が残されており、ａ面では２ヶ所に分かれている。また、礫の長軸の両端にも敲打痕が観察される。平坦なｂ面には敲打痕より新しい磨痕が広く認められ、敲打痕はわずかに残存する程度である。

第288図４も３と同様な形状の礫を素材としており、平面形は卵形、横断面形は隅丸三角形を呈している。表裏の広い平坦な面に磨痕が残されており、磨痕下には敲打痕が表裏両面ともに観察される。磨痕下の敲打痕は広端縁寄りの礫中央部に位置し、ａ面の狭端縁にも敲打痕が認められる。石材はデイサイトである。５と６は平面形が長楕円形を呈する安山岩の礫を素材とし、平坦な１面に磨痕が残されている。

第288図５の長軸の一端には敲打痕が認められ、磨痕のある面の中央やや下端寄りに凹痕が確認される。

第288図６は長軸の両端で敲打痕が観察され、凹痕は磨痕のあるａ面とその裏側のｂ面に残されている。ａ面の凹痕は浅く、礫の長軸方向に連続している。ｂ面の凹痕は非常に浅く、長軸方向に延びている。

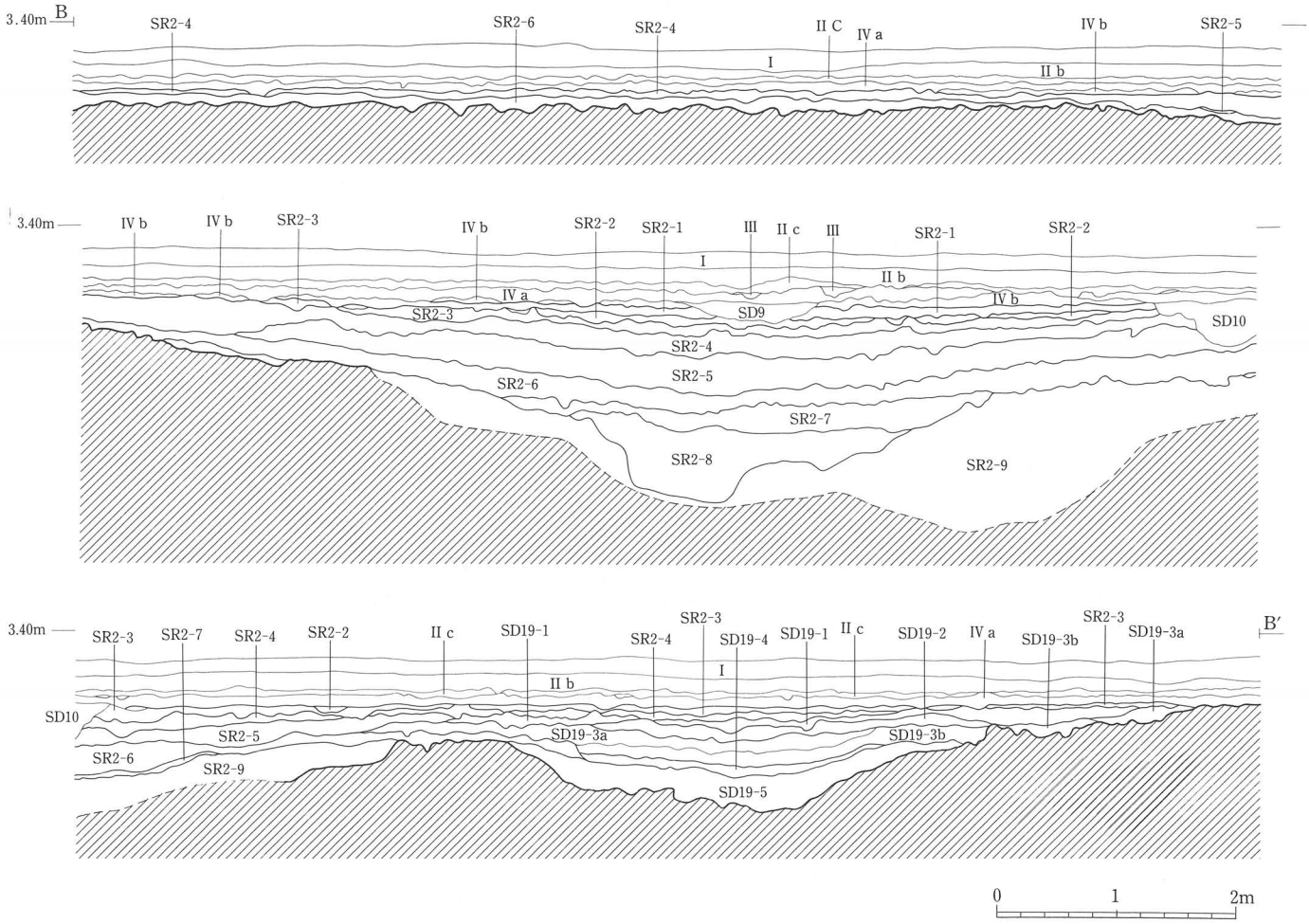
SR ２自然流路跡（９・８・７層）　調査区中央部で検出された自然流路跡である（第15図）。時間的制約から遺物を比較的多く含む８層で掘り下げは中断し、最下層と思われる９層はS30付近で若干掘り下げるに止めた。したがって、SR ２自然流路跡に関する図や数値は８層除去後のもので、平面図に記した下端等のラインも流路跡の本来の底面を表していない。検出部分が少ないため実態は不明であるが、東方向からのびてきたSR ２はE90付近で南西方向に進路を変え、SR １に合流する。９層上面は北東から南西へ向かって緩やかに低下していることから、本流路跡の水流は、SR １自然流路跡に注ぐような方向であったと推定される。検出長は40mであるが、さらに東へ続くものと考えられる。上端幅9m50cm～13m30cm、下端幅は９層上面で60cm～2m20cmである。深さは９層上面で135～146cmである。方向はE90より東でＮ－81°－Ｅ、南西でＮ－49°－Ｅである。断面形は９層上面で皿形を呈する。壁面の立ち上がりは概ね緩やかであるが、中間付近で段（屈曲部）を形成し傾斜角度が変わる（第30図）。また、E90近辺の両河岸とSR １自然流路跡との合流地点西河岸はやや複雑な斜面となる。堆積土は９・８・７層が弥生時代に属する。９層は緑灰色のシルト質粘土、８層は灰褐色の粘土、７層は黒褐色の砂である。９層には植物遺体集積層が層状に認められる。８層は木本性の泥炭質堆積物であり、植物遺体を多量に含んでいる。７層は黒色粘土や褐灰色粘土を小ブロック状に混入している。

木製品類の出土状況については第15・31・32図に示した。S14E90近辺とSR １自然流路跡合流点近辺とに集中域があり、成品と未成品が混在している。大部分の遺物は流路跡中央部周辺から出土し、河岸付近や河岸斜面からは

ほとんど出土しない。また、遺物の長軸方向は流路方向と一致するものが大半を占める。なお、木製品類とともに自然木や植物遺存体を大量に出土している。

8層で検出した杭は19点、7層は2点で、そのほとんどがS14E90近辺に集中している（第15図）。杭の位置に関連性は認められなかった。なお、この集中地点の両河岸は複雑な傾斜を呈しており、杭との有為性が推定される。

各層の出土遺物は次の通りである。




第30図　SD19溝跡、SR2自然流路跡断面図

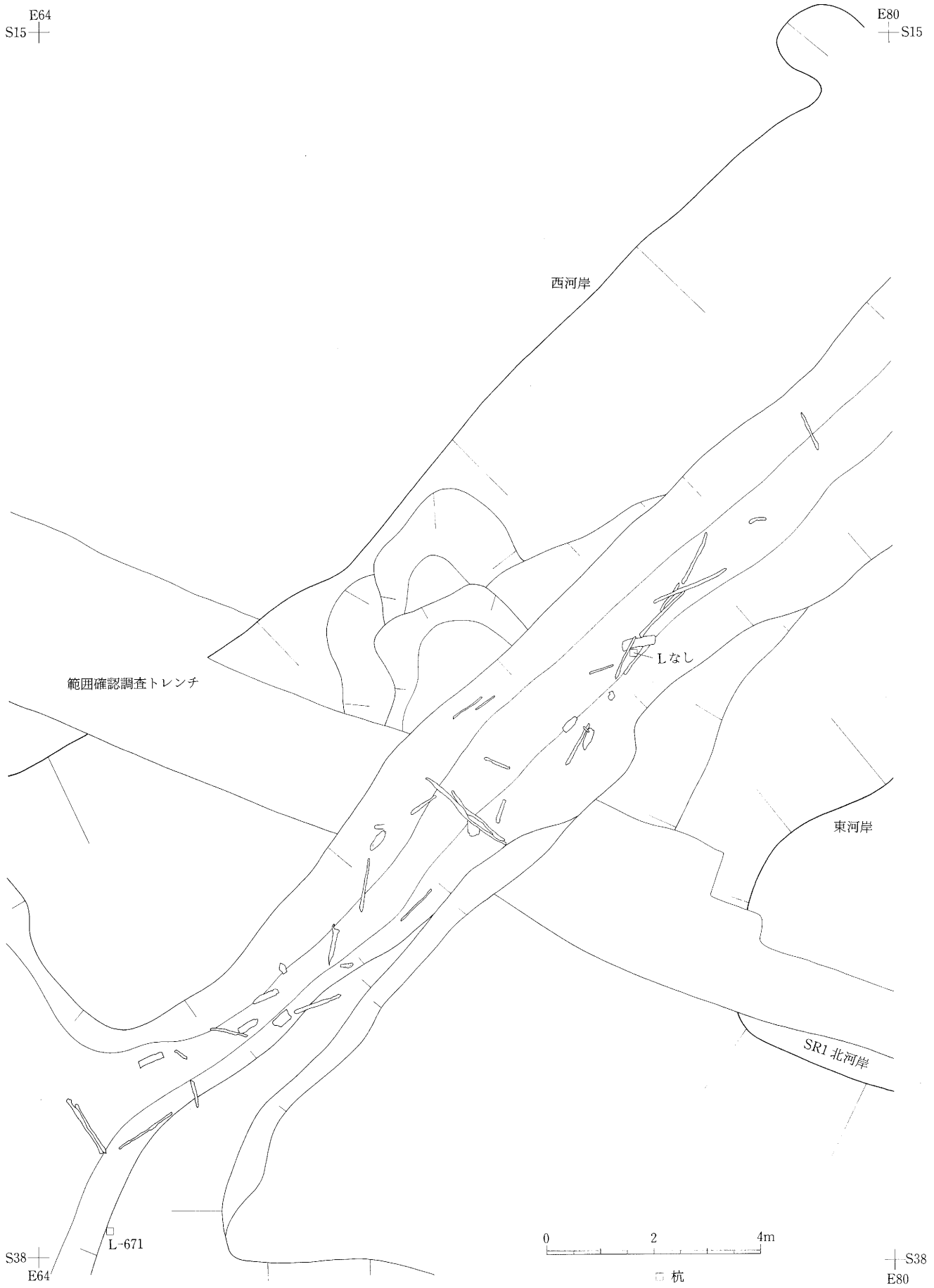
SR2自然流路跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/1 黒色 | シルト質粘土 | 上部が下部よりも色が明るい。 |
| 2 | 7.5YR2/3 極暗褐色 | シルト質粘土 | 灰白色火山灰をブロック状に含む。 |
| 3 | 5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 下面が乱れており、水田土壌の可能性あり。 |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘　土 | 下面が乱れており、水田土壌の可能性あり。酸化鉄斑、マンガン斑を含む。 |
| 5 | 5YR2/1 黒褐色 | 粘　土 | 西半部の層下部で粗砂を層状に含む。 |
| 6 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘　土 | 未分解の植物遺体を河川跡中央部に多く含む。 |
| 7 | 10YR2/2 黒褐色 | 砂 | 部分的に黒色粘土、褐灰色粘土を小ブロック状に含む。 |
| 8 | 7.5YR4/2 灰褐色 | 粘　土 | 木本性の泥炭質堆積物。植物遺体を多量に含む。 |
| 9 | 10GY6/1 緑灰色 | シルト質粘土 | 植物遺体集積層を層状に含む。河川跡の最下層の堆積土。 |

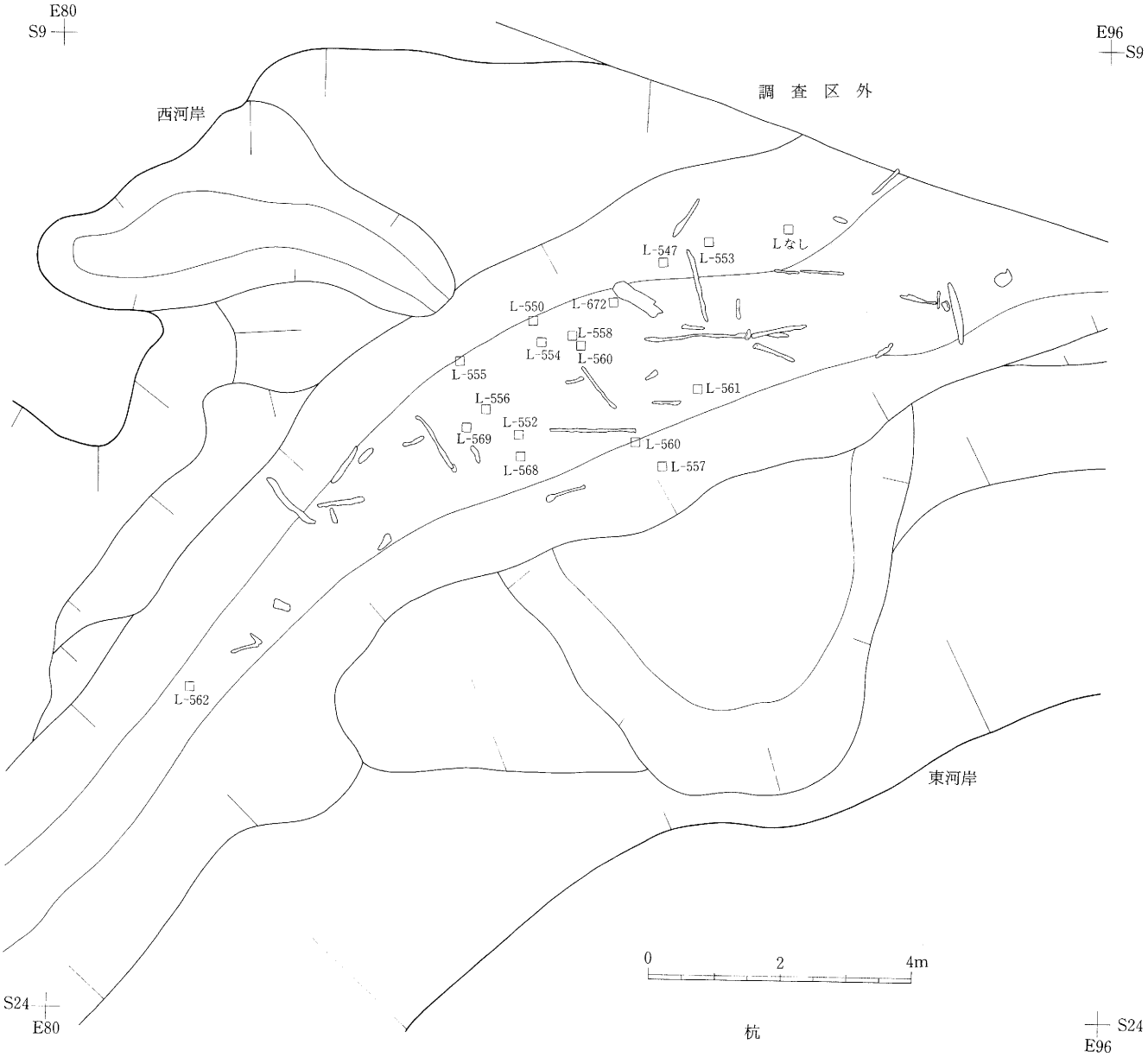
SD19溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR5/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 細　砂 | |
| 3a | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘　土 | 細砂を含む。 |
| 3b | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘　土 | |
| 4 | 7.5YR4/2 灰褐色 | 細　砂 | 褐灰色粘土を少ブロック状に部分的に含む。 |
| 5 | 10YR6/1 褐灰色 | 粘　土 | 炭化物片を全体的に含み、層の下部に第VI層土の小ブロックを含む。 |

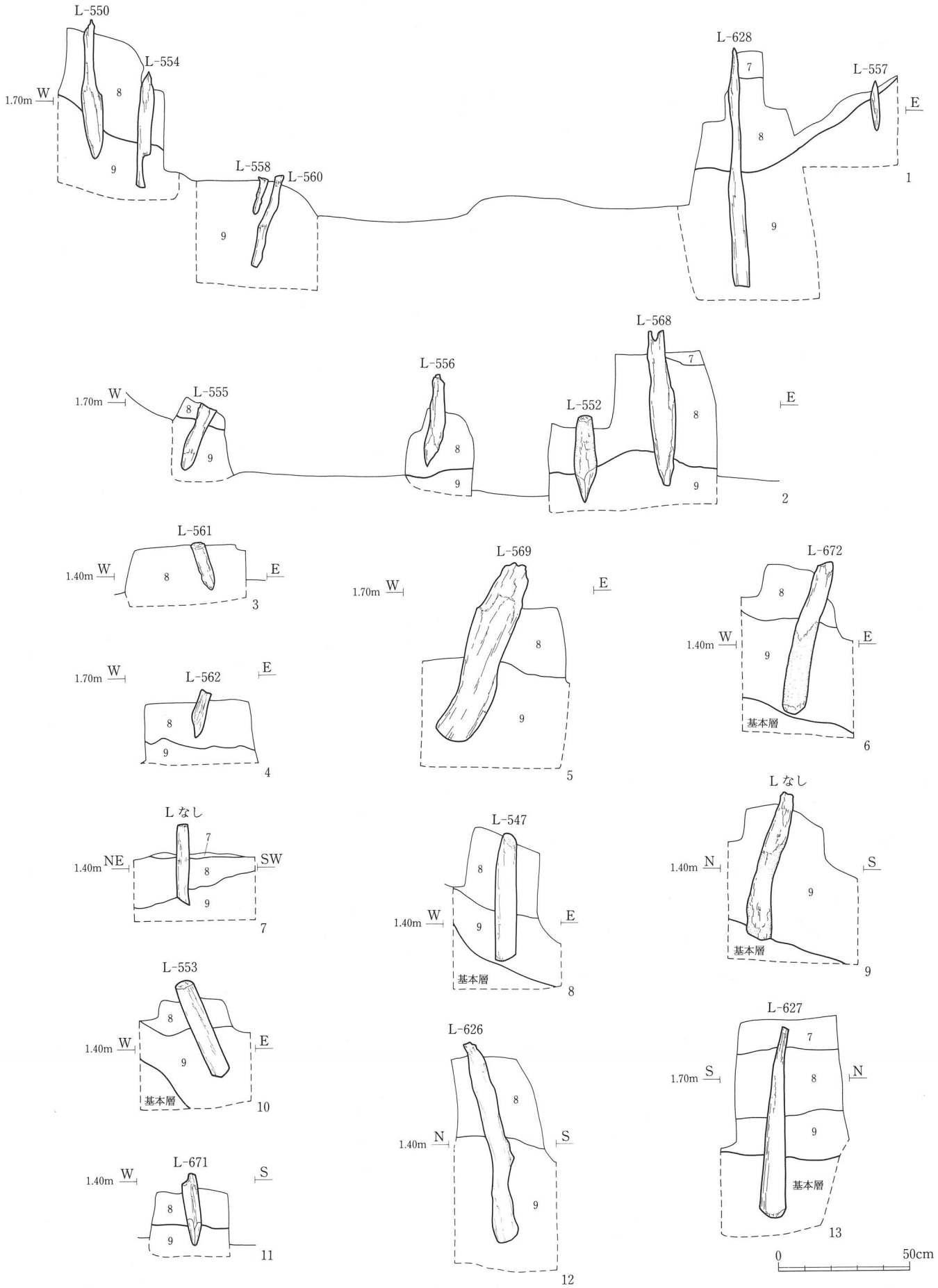
第30図　土層註記




第31図　SR2 自然流路跡 8 層木製品出土状況 (1)




第32図　SR2 自然流路跡 8 層木製品出土状況 (2)




第33図　SR2 自然流路跡検出杭断面図

9層より僅少の縄文土器、弥生土器が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は2点図示した（第3分冊第6図9・10）。深鉢で、胴部は弯曲し胴部上端で弱くくびれる。口縁部は外反し、波状を呈する。胴部外面に縄文を施文し、口縁部は9が横方向のミガキ調整、10がヨコナデ調整を施している。口縁部内面に太い沈線がめぐる。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した（第3分冊第133図6）。甕で、胴部は弯曲し胴部上端で弱くくびれる。調整は外面の文様内にミガキ調整、内面は横方向のケズリ調整とその後に横方向のミガキ調整を施している。胴上部に太い沈線で変形工字文が描かれ、反転部に三角形の彫去を加えている。文様下部に縄文を施文している。

8層より縄文土器、弥生土器、木製品類（SR 1自然流路跡13層の項目参照）、石器類が出土している。E90周辺と合流点周辺とで多く出土した。

［縄文土器］

縄文土器は1点図示した（第3分冊第7図2）。鉢と思われ、変形した三叉文を浮彫風に描いている。文様下部に縄文を施文している。

［弥生土器］

弥生土器は8点図示した（第3分冊第132図2～4・8、第133図1・3・5・9）。

第132図2～4は壺である。口頸部の形態は外反するもの（2）、頸部は不明瞭で、口縁部は外傾するもの（3）、頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外傾するもの（4）がある。口縁部形態は平縁で、胴部最大径は胴上部にある。調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の無文部分や内面はミガキ調整が施されている。底部は木葉痕がついている。文様は4の胴部上端に1本の沈線がめぐり、おそらく、2本ほどの並行直線文になると思われる。他の土器は無文である。

第132図8は高坏である。坏部は外傾し、口唇部に突起を持つ。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整、脚部内面はナデ調整が施されている。三角文系の文様が施され、縄文を充塡している。

第133図3は鉢である。俯瞰形が楕円形を呈する。内外面ともミガキ調整が施されている。

第133図1は甕である。胴部上端でくびれ、口縁部は外反する。外面調整はハケメ調整・ヨコナデ調整、内面は横方向のミガキ調整を施している。文様は胴部上端に列点刺突文、胴部に縄文を施文している。

第133図9は蓋である。天井部側縁が張り出している。蓋部は外反している。調整は内外面とも横方向のミガキ調整である。

第133図5はミニチュア土器である。尖底のもので、内外面ともナデツケ調整である。

［石器類］

石器類は、石庖丁、石鏃、削器、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、礫石器、礫片である。第4分冊第293図に主な石器を図示した。

第293図1～3は石庖丁であり、1は成品の破損品、2、3は未成品である。

第293図1は2分の1程を欠損しているが、直線刃半月形の石庖丁である。研磨面下に整形時の剥離痕を残しており、研磨面にはやや粗い擦痕を伴っている。紐孔は敲打による窪み部形成を行わず、直接、回転によって穿孔されている。光沢はa面のほぼ全面で観察される。用いられている石材は粘板岩である。

第293図2と3は剥離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行している。ともに結晶片岩が石材として用いられている。2のa面のほとんどは敲打面によって覆われているが、b面の敲打痕はわずかで、

整形時の剝離痕が広く残されている。背部も敲打によって調整されている。３のａ面には自然面が部分的に残されており、ａ面左側面はｂ面の敲打に切られていることから折りとり面と考えられる。ｂ面はほとんど敲打面によって覆われており、それに対してａ面では中央部付近に敲打痕が確認される程度で、整形時の剝離面と自然面が残されている。背部は大きな１面の剝離面である。

第293図４は図示した面の中央に短軸方向の擦痕を伴う研磨面があり、右側面の研磨面にも明瞭な擦痕が観察される石製品である。研磨面下には剝離痕が残されている。下端の両面に短軸方向の擦痕を伴う研磨面があり、刃部状の形態が作り出されていることから石斧の未成品の可能性も考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

第293図５は末端がヒンジフラクチャーとなっている剝片を素材とした削器である。表裏両面とも火を受けており、素材剝片の打面部分と側縁および主要剝離面の一部は火ハネによって失われている。左右両側縁の表裏両面に連続した細部調整が施されて整形されており、左側縁の刃角は55～65度、右側縁は65～75度である。石材は瑪瑙である。

第293図６はａ面の左側面と上端面を折りとり、部分的な剝離によって整形された大型板状石器である。刃部の表裏両面に顕著な光沢が観察される。今回出土した大型板状石器の中で、この石器のように長軸の末端が使用されている例は稀である。用いられている石材は安山岩である。

第293図７は磨痕と敲打痕が複合して残されている礫石器である。平面形が楕円形を呈する礫を素材としており、長軸の一端と１側縁の両端に明瞭な敲打痕が残されており、長軸の残る一端には右上がりの擦痕を伴う磨痕が認められる。ａ面の磨痕近くにわずかな敲打痕が観察される。石材は珪質凝灰岩である。

第293図８は平面形が長楕円形で断面形が隅丸三角形を呈する、やや軟質の凝灰岩の礫を素材としている。側面の３面それぞれに２～３ヶ所の凹痕があり、接合箇所の凹痕がもっとも深い。長軸の一端にはわずかな敲打痕が観察される。

７層より縄文土器、弥生土器、土製品、木製品類（SR １自然流路跡13層の項目参照）、石器・石製品類が出土している。E90 周辺で多く出土した。

**［縄文土器］**

縄文土器は１点図示した（第３分冊第６図８）。深鉢で内弯している。胴部に縄文を施文し、口縁部は横方向のミガキ調整が施されている。

**［弥生土器］**

弥生土器は10点図示した（第３分冊第132図１・５・７・９・10、第133図２・４・７・８・10）。

第132図１・５・７は壺である。口頸部の形態は頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外傾あるいは外反するもの（１・５）、頸部は直立し、屈曲して口縁部は外反するもの（７）がある。口縁部形態は平縁で、胴部最大径は胴上部にある。調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面にハケメ調整、内面にケズリ調整・ヘラナデ調整を施した土器もある。底部は木葉痕がついている。文様は並行直線文（５）、錨形文（１）がある。１は文様内に植物茎回転文を充塡している。

第132図９・10、第133図４は鉢である。口縁部形態は波状を呈し、側面は外傾する（第132図９・10）。第133図４の底部は丸みがある。調整は外面の文様内や内面はミガキ調整が施されている。第133図４の外面は縦方向のナデ調整である。底部は木葉痕がついている。文様は方形渦文（第132図10）、層波文（第132図９）があり、文様内に植物茎回転文を充塡している。

第133図２・７・８は甕である。２の口縁部は長めで内弯しながら立ち上がり、口縁部形態は平縁である。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。底部に木葉痕がついている。文様は層波文で、縄文

を充塡している。7・8は口縁部が立ち上がるもので、大型に属する。7の口縁部形態は波状である。調整は口唇部にヨコナデ調整、内面はケズリ調整とその後にミガキが施されている。口縁部上端に2本からなる並行直線文、外面全体に縄文を施文し肩部と口縁部上端に綾絡文が施されている。8の胴上部は一度くびれた後弱く膨らみ再度くびれる。口唇部に突起を付している。調整は口縁部にヨコナデ調整、外面の文様内や無文部と内面はミガキ調整が施されている。文様は四角文で、外面全体に縄文を施文している。口縁部内面に直線文と縄文を施文している。

第133図10は蓋で、天井部天端を盛上げている。蓋部は外反している。調整は内面にミガキ調整が施されている。外面に植物茎回転文を施文している。

［土製品］

土製品は1点図示した（第3分冊第153図14）。大型の土玉で、穿孔を持つ。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、石皿、礫石器、礫片である。第4分冊第290図から第292図に主な石器・石製品を図示した。

**第290図**1～3は石庖丁であり、1と2は成品の破損品、3は未成品である。

第290図1の研磨面には粗い擦痕を伴っており、研磨面下に整形時の剝離痕と敲打痕が観察される。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。表裏両面に光沢が認められるが、ともに弱い。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第290図2は研磨面下に整形時の剝離痕と敲打痕が観察され、敲打痕は器体中央部に広く面的に残されている。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。光沢はa面で明瞭に観察され、刃部側で顕著である。b面でも認められるが、それほど明瞭ではない、弱い光沢である。

第290図3は剝離による整形を経て敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行している。破損面はa面からの打撃によるものであり、打点も確認できることから、製作途中の敲打段階での事故による折損と考えられる。2と3に用いられている石材は結晶片岩である。

第290図4は2片が接合しており、1片はSR 2自然流路跡の堆積土7層から出土している。太型蛤刃石斧の基部の一部分が残存しているものであり、研磨面には長軸方向の擦痕がわずかに観察される。用いられている石材は斑糲岩である。

第290図5～7は有茎の石鏃であり、石材は5が瑪瑙、6と7は珪化凝灰岩である。

第290図5のb面中央に節理面がみられ、その影響により身部左側縁は節理の部分でわずかに凹んでいるが、右側縁はやや外弯している。

第290図6は素材剝片の剝離面をb面にわずかに残しており、身部の側縁形態は直線的である。剝離面の切り合い関係の観察により茎部作出の後、身部の整形という加工順序がとらえられる。

第290図7は素材剝片の剝離面をb面に大きく残している。身部の側縁は左右ともに外弯しているが左右対称ではなく、a面左側縁が茎部の一部を含め再加工された可能性が考えられる。

第290図8はb面中央に素材剝片の剝離面を残し、表裏両面に細部調整が施されている。a面右側縁の下端寄りにノッチ状の凹みがあり、石鏃の茎部を作出するためのものと考えられ石鏃未成品の可能性がある。石材は瑪瑙である。

第290図9は石庖丁にも使用されている珪化凝灰岩が用いられており、b面は節理面である。周縁は剝離によって整形され、a面中央と刃部には部分的な研磨痕が観察される。形態的には石庖丁に類似するが、刃部などの光沢は認められない。

**第291図**1は石錐である。b面右側縁に裏面からの急角度な細部調整が施され、左側縁からa面およびb面にも細

部調整が施されている。これらの細部調整によって断面三角形に近い尖端部が作出されていたものと考えられるが、尖端部を欠損している。

第291図2は剝離面打面の剝片を素材とした細部調整剝片である。b面左側縁の打面寄りと右側縁にa面側からの細部調整が施されている。細部調整のみられる部位の角度は左側縁側が85～90度と急角度であり、右側縁は65～70度である。1と2に用いられている石材はデイサイトである。

第291図3～5はピエス・エスキーエであり、石材は3が珪質頁岩、4は流紋岩、5はデイサイトである。

第291図3は剝片の長軸の両端にツブレ状の剝離が観察され、b面右側の剝離面は両極剝離によるものと考えられる。

第291図4のa面下端の剝離面とc面中央の大きな剝離面は両極剝離によるものである。上端縁と両極剝離によって得られたa面下端剝離面の端縁3ヶ所にツブレ状の剝離が観察され、上端縁と下端面の端縁3ヶ所が対をなしている。c面の一部に自然面が残されている。

第291図5は右側面と上端面を折りとった剝片を素材としている。表裏両面の上端縁と下端にツブレ状の剝離が認められ、下端と上端面のa面側、下端と上端面のc面側が対になるものと考えられる。a面の両側縁にもツブレ状の剝離が残されており、対をなしている。

第291図6は大型板状石器である。a面右側面の一部に自然面が残されているが、刃部を除く3辺は折りとりによって整形されている。光沢はa面の刃部に著しい。刃部は剝離によって直線的に整えられているが、剝離面には光沢に覆われるものと光沢を切るものがあり、刃こぼれによる剝離面も残されているものと考えられる。また、a面の刃部中央に隣接して刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面が観察される。磨り面は光沢に覆われていることから刃部の片面が部分的に研磨された可能性が考えられる。b面中央の上端寄りには刃縁にほぼ平行する擦痕を伴う磨り面が認められる。石材は安山岩である。

第291図7は大型板状石器に多用されるデイサイトを石材としており、b面に部分的に光沢が観察されることから、大型板状石器の一部を転用したものと考えられる。折りとりと剝離によって整形されている。下端面とb面の左側縁および右側縁の一部に敲打痕が認められ、敲打具として使用されている。

第291図8は扁平で平面形が不整円形を呈する礫を素材とし、片面の中央に平坦な磨痕が残されている石皿である。石材は多孔質の安山岩であるため、素材礫の高い部分のみが磨られている状態である。

**第292図**1は平面形が円形を呈し、やや厚みのある礫の1側縁に磨痕を残している礫石器である。磨痕はa面側とその裏面および側面の3面に分かれて観察される。石材はデイサイトである。

第292図2は礫のほぼ全周の角張った部分に著しい敲打痕が残されている礫石器である。a、b両面の剝離面は敲打に伴う損傷によるものと考えられる。石材は珪質頁岩である。

第292図3は軟質の凝灰岩の礫を素材としており、長軸の一端が割り取られている。残された一端のa面側に敲打痕が観察され、表裏両面の中央には凹痕が残されている。凹痕はa面側で2ヶ所、b面側で1ヶ所確認される。

第292図4は平面形が楕円形を呈する珪質凝灰岩の礫を素材としている。長軸の両端に敲打痕が残されており、b面の大きな剝離面は敲打による破損面である。破損面にも敲打による損傷の剝離面が認められることから、破損後も敲打作業に使用されている。b面に磨痕が確認され、a、b両面の下端寄りには敲打痕が観察される。磨痕は敲打による破損面と敲打痕に切られている。

第292図5は厚みのある不整な礫を素材としており、片面に浅い凹痕が残されている。周縁には大きく4ヶ所に分けられる、著しい敲打痕が観察される。石材はデイサイトが用いられている。

### (6) 畦畔状遺構

調査区西～中央部で畦畔状遺構を3条検出した（第15図）。

これらの畦畔状遺構は、畦畔状の高まりとして検出されたもので、水田跡に伴う畦畔痕跡（擬似畦畔B）と考えられる。水田面は削平等により失われ確認できなかった。この水田跡の時期は、中世以降の水田跡とは畦畔の位置がずれていることから、弥生時代から平安時代の頃と思われるが、第VI層上面検出のSD19溝跡と有為的な位置関係が看取されることから、弥生時代の遺構の可能性が高いと考えられる。したがって、畦畔状遺構をこの節で扱うこととした。

畦畔状遺構1は北西から南東へ向かって直進した後、2度折れ曲がる。上端幅43～155cm、下端幅128～228cm、高さ4～10cmで、方向は西からN－54°－W、N－1°－W、N－19°－Wとなり、それぞれ検出長が29m、4m60cm、4m40cmである。さらに南東方向へ続くものと考えられるが、北西方向への続きは確認できなかった。畦畔は東隣のSD19溝跡に沿うような位置関係にあり、特に畦畔状遺構3との交点周辺はSD19溝跡に接近し並走する。

畦畔状遺構2は上端幅44～76cm、下端幅103～143cm、高さ5cmで、方向はN－39°－Eである。検出長は6m44cmであるが、さらに調査区外の北東方向へ続くものと考えられる。

畦畔状遺構3は上端幅54～88cm、下端幅128～188cm、高さ6～8cmで、方向はN－81°－Eである。検出長は6m32cmであるが、さらに南西方向へ続くものと考えられる。

畦畔状遺構周辺の標高は南西から北東へ向かって緩く低下している。区画の平面形は方形を基調としていたと思われるが、その規模は不明である。

## 2．第VI層出土遺物

遺物は縄文土器、弥生土器、石器類が出土している。

**［縄文土器］**

縄文土器は21点を図示した（第3分冊第7図5～15、第8図1～9・13）。第7図5～15、第8図1～7は深鉢あるいは鉢、第8図8は台付鉢、第8図9は注口土器、第8図13は巻貝形土器である（推定されるものも含む）。

第7図7は並行沈線に反転沈線を加えた文様が施されている。文様内に縄文を施文している。第7図5も類似した文様が施されると思われる。

第8図1は条線で弧状の文様を縦に連続施文している。地文はない。

第7図6・8～11・13～15、第8図13は瘤状小突起を貼付している土器である。沈線により並行直線文、入組文（9）、弧文（10・11）などを描き、瘤状小突起を充塡している。地文はない。6の口唇部に外面に飛び出すような大きめの突起と小突起を付している。大きめの突起の頂部はキザミが加えられている。口縁部に瘤状小突起を間隔を置きながら配置し、その間に2本の沈線を施している。施文順位は瘤状小突起が先になる。8の口唇部に外面に飛び出すような突起を付し、その頂部はキザミが加えられている。9の口縁部に弧状の粘土を貼付している。10の口縁部に中央部が凹んだボタン状貼付文を貼付している。11の口唇部は大波状を呈する。14の瘤状小突起は頂部にキザミが加えてある。第8図13は特異な形態の土器である。欠損部分が多く、全体形は不明であるが、長軸側の一端は注口状に細くなっている。短軸側の口縁は一部残存しており、胴部中央付近から内側へ強く曲げている。底部は円形である。外面に沈線と瘤状小突起で文様が施されている。

第7図12は口縁部に縦長に粘土を貼付し、その下部に沈線による直線文を施している。地文はない。

第8図2～4は三叉文が描かれている。外面に縄文を施文している。2の口唇部は波状を呈し、その頂部にキザミを加えている。3の口唇部に突起を付し、キザミを加えている。

第８図５・９は浮彫風の仕上りで、羊歯状文と思われる。

第８図８は並行沈線をめぐらせ、彫去等を施して π 字状文様を描いている。口唇部は２個の山形突起が６単位配され、突起と突起の間に沈線が施されている。内面の口縁部に直線文がある。

第８図６・７は外面に縄文を施文している。７の口唇部はオサエ目により小波状となり、外面の縄文は方形状に施文されている。

［弥生土器］

弥生土器は１点を図示した（第３分冊第138図10）。壺の胴上部破片と思われる。外面調整はナデ調整とその後にミガキ調整、内面はミガキ調整を施している。文様は並行直線文（２本確認）とその上部に列点刺突文が施されている。

［石器類］

石器類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、削器、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、礫石器、礫片などである。第４分冊第205図と第206図および第225図８に主な石器を図示した。

**第205図**１は２片が接合しており、基部が残存する太型蛤刃石斧の破損品である。基端と刃部および主面の多くを欠損している。側面は形成されておらず、断面形は楕円形を呈するものと考えられる。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。焼けた部分が残されており、破損は火ハネによるものである。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第205図２は珪化凝灰岩を石材とする石錐である。尖端部は基部から連続して作出されており、尖端部と基部との境は認められない。尖端部の作出は、ａ面左側はａ面の後ｂ面側へ、右側はｂ面の後ａ面側へ施した細部調整によって行われており、尖端部の断面形は三角形を呈する。

第205図３は尖端部と基部との境が明瞭な石錐である。尖端部の位置は基部の中軸線とは一致せず、一方に偏っている。尖端部は、ａ面左側はｂ面の後ａ面側へ、右側はａ面の後ｂ面側へ施した細部調整によって形成されており、断面形は不整な菱形を呈している。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第205図４は珪化凝灰岩を用いた横型の石匙である。素材剥片の打点位置はａ面の刃部右端であるが、打面は刃部作出のための細部調整によって失われている。刃部はｂ面からａ面側への細部調整によって直線的に作り出されており、刃角は60～70度である。素材剥片の末端側に施された細部調整によって側縁の整形が行われている。つまみ部の抉り部分の色調は他の部分よりも暗く、付着物がわずかに確認される。

第205図５は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。ａ面右側面は自然面であり、刃部側の一端を欠損している。ａ面左側縁の上端寄りは折りとり面であり、刃部寄りは表裏両面への細部調整によって直線的に整形されている。また、折りとり面を打面としてｂ面側に剥離が施されている。両側縁の交わる部分は表裏両面への剥離によって整形されている。刃部は細部調整によって直線的に作り出されており、弱い磨滅が部分的に観察される。ｂ面中央に黒褐色の付着物が確認される。

**第206図**１は長楕円形を呈する自然礫の一端に、線刻状の溝が認められる石製品である。溝はａ面では短軸方向に連続しているが、ｂ面側では中央部で途切れ、一周はしていない。さらにｂ面には側縁に近い部分に短い溝状の刻みが確認される。石材は砂質凝灰岩である。

第206図２～８は磨痕、敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が残された礫石器である。用いられている石材は２～６がデイサイトであり、７は安山岩、８は凝灰岩である。

第206図２は長楕円形の礫に敲打痕が残されている。敲打痕は長軸の両端と側面に１ヶ所認められ、１端の敲打痕は著しく、つぶれた状態である。

第206図３は敲打痕が残された礫石器であり、ｂ面には敲打による大きな破損面がみられる。ｂ面の長軸の一端に

広く認められる敲打痕は破損面に切られており、礫の破損以前のものである。a面の敲打痕のある端部の左側には敲打による損傷の剝離面が観察される。右側に認められるいくつかの剝離面も、それぞれの打点付近に敲打によるツブレが観察されることから敲打に伴う損傷の剝離面と考えられ、中にはb面の破損面よりも新しいものも確認される。したがってこの礫石器は敲打作業によって大きく破損した後も、さらに使われ続けていたものである。

第206図4と5は礫の片面中央部に敲打痕が残されている礫石器であり、その面には磨痕も観察される。素材の形状は異なるが、素材礫の面のなかで、より平坦な面が選択され、使用されている。

第206図6は磨痕と敲打痕および凹痕が複合して残されている礫石器である。平面形が楕円形を呈する扁平な礫を素材としている。磨痕は表裏両面に観察され、b面では両側縁近くまで広がっている。敲打痕は両側縁と両端面に認められる。凹痕は表裏両面の中央に礫の長軸方向に連続して残されているが、いずれの凹痕もあまり深くないものである。

第206図7は楕円形を呈する厚みのある礫を素材とし、表裏両面に磨痕と敲打痕が残されている。敲打痕は両面とも中央部に認められるが、周縁はその後の磨痕に覆われている。a面の磨痕は中央と両側縁側とで面が異なっており、3面の平坦な磨痕が隣接した状態である。b面では中央に平坦な磨痕が1面観察される。

第206図8は楕円形を呈する礫の表裏両面および両側面の計4面に凹痕が残されており、凹痕の深さは同程度であるが、c面の凹痕がわずかに浅い。a面の凹痕は5ヶ所確認され、中央部がもっとも深く、端部に近付くにしたがって浅くなっている。

第225図8は削器である。表面が自然面の剝片を素材とし、素材剝片の末端に刃部が作り出されている。刃部作出はa面からb面側への細部調整によって行われており、85～95度と急角度である。石材はデイサイトが用いられている。

## 3．第Ⅴc層出土遺物

第Ⅴc層は調査区西部と東部に分布し、大量の遺物が出土した遺物包含層である(第15図)。西部を第Ⅴc層西地区、東部を第Ⅴc層東地区と呼称した。

第Ⅴc層西地区はSR 1自然流路跡の北方、SR 2自然流路跡の西方にあり、第Ⅵ層上面検出の西部遺構群をおよそ覆うように分布している。調査区西端～E26、N13～S26の範囲で確認でき、さらに調査区外の西方向へ続くものと考えられる。層厚は5～15cmで、平均10cm程度である。遺物は西地区全域から出土するものの、地点により量の差があり、比較的多量に出土するのはW10～E 8、S13～N22の範囲とE 8～E23、S 9～S15の範囲の2域がある。また、S 8近辺より北は全般に量が少ない。弥生土器は完形に近い残存で、しかも破片が飛び散らずに押し潰されたような状態で出土するものが少なくない。大きな破片も目につく。したがって、遺物は原位置をほぼ保っていると考えられる。

第Ⅴc層東地区はSR 1自然流路跡の北方、SR 2自然流路跡の東方にあり、第Ⅵ層上面検出の東部遺構群をおよそ覆うように分布している。E85～E132、S29～S64の範囲で確認できたが、東西にはしる範囲確認調査トレンチを境に北と南で分布のラインが整合しない。これは北側が削平を受けたためで、本来は今の分布域よりも北西へ広がっていたものと考えられる。層厚は5～15cmで、平均8cm程度である。比較的多量に出土するのはE 1～E117の範囲とE118～E125、S44～S52の範囲の2域がある。遺物の出土状況は西地区と同じで、東地区でも遺物は原位置をほぼ保っていると考えられる。

遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、石器・石製品類が出土している。なお、縄文土器、弥生土器、土製品に関しては西地区と東地区とに分けて図示し、記述した。

［西地区出土縄文土器］

縄文土器は31点を図示した（第３分冊第８図10～12・14～23、第９図１～20・22）。第８図10～12・14～23、第９図１～19は深鉢あるいは鉢、第９図22は台付鉢、第９図20は壺である（推定されるものも含む）。

第８図10・12は並行沈線に反転沈線を加えた文様が施されている。文様内に縄文を施文している。

第８図11・14～第９図９・22は瘤状小突起を貼付しているものである。沈線で文様を描いた後、瘤状小突起で充塡している。外面に地文はない。第８図19は大波状口縁となる。第８図16は文様内にキザミ、第９図６・７は櫛歯状条線を施している。第９図22は台付鉢の底部と思われる。浅い沈線がめぐり、瘤状小突起で充塡している。

第９図13・14は２本ないし３本同時描きにより文様の施されているものである。外面に地文はない。13（第10図15と同一個体）は２本同時描きで胴部に格子目の文様を描いている。14は２本あるいは３本の同時描きにより木葉形の文様を描いている。

第９図16は並行沈線と入組文と思われる文様が描かれている。文様内に刺突文や縄文を施している。

第９図17は深鉢で胴部上端でくびれ、口縁部は直立し口縁部形態は波状を呈する。胴部に縄文が斜め方向から施文されており、条が水平方向に並ぶ。

［東地区出土縄文土器］

縄文土器は僅少で、１点を図示した（第３分冊第９図21）。深鉢で胴部上端に段があり口縁部は外傾する。口唇部に低い突起が付されている。横方向に太い沈線を施文し（３本確認）、その上に π 字状文様を施している。外面に地文はない。口縁部は横方向のミガキ調整が施されている。

［西地区出土弥生土器］

出土土器の大部分は弥生土器である。そのうち257点を図示した（第３分冊第11～37図）。SR １自然流路跡13層出土の土器と異なり、遺存状況は不良である。ほとんどの土器は摩滅・剝落のため、器面観察が困難であった。器種は壺・高坏・鉢・深鉢・甕・蓋・ミニチュア土器等がある。

**（壺）** 第11図～第16図は壺である。口頸部の形態は外反するもの（第11図～第12図３）、頸部は不明瞭で、口縁部は外傾するもの（第12図４・５）、頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外反するもの（第12図６～９）、口頸部が直立するもの（第12図10～第13図３）、頸部は直立し、屈曲して口縁部は外反するもの（第13図４～８）、頸部は直立し、口縁部は内傾するもの（第14図１・２）、頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外傾、外反あるいは内弯しながら外へ開くもの（第14図３～第15図）がある。口縁部形態は平縁である。胴部は、細めのもの（第11図２、第12図５）と太めのもの（第11図１、第14図５）などがあり、胴部最大径は胴上部にある。

調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面ではハケメ調整、内面ではオサエ目・ケズリ調整・ナデ調整を確認できる土器もある。底部は木葉痕がついている。

文様の種類は、並行直線文、層波文（第13図１、第16図２）、変形工字文（第12図３・４・６）、王字文（第16図１）、重三角文（第16図７）、四角文（第16図12）、三角渦文（第16図６）、方形渦文（第16図13）、渦文（第16図９～11）、同心円文（第16図８）、Ｘ字連結文（第12図10・11、第14図５、第15図９）、錨形文（第16図14）、並行直線文＋列点刺突文（第16図15）、綾絡文（第16図４）、隆線文（第13図８、第14図15、第15図５・８）などがある。第15図５の隆線は粘土貼り付けか削り出しによるものかは特定できなかった。第15図８の隆線は削り出し等により作出している。第16図１・２の文様は胴部下端付近まで描かれ、１の王字文は沈線が鋭角に反転する。第16図15は大型で、胴部の最大径は上部にあり、最大径部の上方に２本のやや太い並行沈線をめぐらせ、沈線間を刺突文で充塡している。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。実測図のうち第12図11は摩滅のため地文があったかは不明である。拓影のうち第15図５・７・９、第16図２～５・７～13は、外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第12図11、第14図５、第15図４・６・８、第16図６は摩滅のため地文があったかは不明である。第12図

3、第14図2、第16図1は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文や並行沈線文を施したものがある。口縁部に穿孔を持つものがある（第12図3・11、第13図1・2、第14図1・6、第15図4）。

**（高坏）** 第17図は高坏である。1～7は坏部で、逆台形状のものと屈曲部を持つものとがある。逆台形状のものには外傾するもの（1・2）と内弯するもの（3～5）とがある。屈曲部を持つものは胴上部で屈曲し口縁部は外反するもの（6・7）である。2は口唇部に突起を持つ。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様帯幅は坏部の1/2から2/3を占め、文様の下部は無文となる。

文様の種類は層波文（1～4・6・7）、変形工字文（5）がある。文様内の縄文（3・4）や植物茎回転文（6・7）はおよそ充塡手法により施文される。内面は口縁部に直線文ないし並行沈線文が描かれている。

8～12は脚部で、台形状を呈し側面は直線的に開く。調整は外面が横方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整(12)、横方向のハケメ調整（8）、横方向のナデ調整(10)がある。文様は脚部下半に施されるもの（9～11）と脚部全体に施されるもの（8・12）とがある。文様の種類は層波文(10・11)、三角文系（9）、波状文（8・12)がある。2は脚部上端に2本の並行沈線が施されている。12は波状文と区画沈線の間に弧状の沈線を加えている。

**（鉢）** 第18図～第20図は鉢である。逆台形状のものとくびれ部を持つものと丸底のもの（第20図17～21）とがある。逆台形状のものには内弯するもの（第18図1～11）と外傾するもの（第18図12～第20図9）とがある。くびれ部を持つものには胴部上端にくびれがあるもの（第20図10～12）と胴中央部にくびれがあるもの（第20図13・14）とがある。口縁部形態は平縁である。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整やナデ調整を施した土器もある。底部は木葉痕がついたものがほとんどで、ミガキ調整やナデ調整が施されたものもある。文様は胴部上半に施されるが、胴部の3分の2に及ぶものもある。くびれのある土器は胴上部と口縁部に文様がある。丸底のもの（第20図17～21）は口縁部を無文にして、胴部から底部にかけて文様が施される。器面全体に文様が施される。

文様の種類は並行直線文、層波文（第18図1・5・8・10・18・19、第19図4・9・10・14、第20図4・5・9）、変形工字文（第18図11・17、第19図15、第20図2・3・11）、三角文（第19図11）、三角文系（第20図8・12）、重三角文（第18図16）、四角文（第19図8、第20図10）、連弧文（第20図15）、錨形文（第20図17・18）などがある。また、無文の土器も少なくない。丸底鉢の胴部文様は錨形文を用い、底部文様は同心円文（第20図17・21）、E字形に類似した文様を3単位配したもの（第20図20）、円中にV字形に類似した文様を2単位配したもの（第20図19）がある。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第18図11、第19図15、第20図4・6～9・16・18・19は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第20図12、第20図20は摩滅のため地文があったかは不明である。第18図1・7、第20図2・3・5は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文や並行沈線文を施したものがある。口縁部に穿孔を持つものが多い。1個または2個を1単位として、片面のみのものと相対する面にも施しているものとがある。

**（深鉢）** 第21図1～5は深鉢である。胴部下端から上部は外傾し、胴上部から口縁部にかけて内弯する。5については口縁部の内弯の度合いは非常に弱い。口縁部形態は平縁である。調整は外面の文様内や内面はミガキ調整が施されている。5の外面は斜め方向のケズリ調整の後ミガキ調整を行っている。2は外面胴部下端に横方向のミガキ調整を施すことがある。底部は木葉痕がついている。文様は胴部上半に施され、並行直線文（2）、変形工字文（4）、四角文（1・3）がある。文様内の縄文は充塡手法により施文されている。3は摩滅のため地文があったかは不明である。4は地文はない。

**（甕）** 第21図６～第34図は甕である。

胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、口縁部が外反するもの（第21図６～第33図９）が甕の大部分を占める。口縁部形態は平縁である。外面調整はハケメ調整・ヨコナデ調整を多用している。ハケメ調整は口縁部から胴上部にかけて斜めや縦方向に、胴部は縦方向に施すことが多い。ヨコナデ調整は微細な条痕が紆曲せず直線的に走る。第33図７は口縁部にミガキ調整が施されている。胴部下端に横方向のミガキ調整やヘラナデ調整を施すことがある（第21図６・７、第22図３・４、第23図３・４、第24図２、第25図２、第26図１）。内面調整はミガキ調整を施している。文様は胴部上端に列点刺突文、並行沈線文、綾絡文（第33図９）が施され、無文の場合もある。第33図８は２列の列点刺突文が施されている。第28図１・４は刺突文の凹みに木目状の筋目がある。胴部に縄文、植物茎回転文を施文している。底部は木葉痕がついたものがほとんどで、織布痕がついたものもある。

口縁部は長めで凸形に弯曲しながら立ち上がるもの（第34図１～５）の口縁部形態は平縁である。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様は胴上部と口縁部に施され、種類は工字文（１・２）、四角文（３・４）、方形渦文（５）がある。４は摩滅のため文様内に地文があったかは不明であり、その他は文様内に地文はない。胴部に縄文、植物茎回転文を施文している。内面文様は口縁部に直線文を施したものがある。底部は木葉痕がついたものとミガキ調整が施されたものがある。

口縁部は長めで外に傾くもの（第34図６・７）の口縁部形態は平縁である。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。６は口縁部にヨコナデ調整を確認できた。文様は胴上部と口縁部に施され、並行直線文が描かれている。

口縁部が立ち上がるもの（第34図8～13）は大型に属する土器で占めるが、８・９に関しては大きさを特定することができなかった。口縁部形態は平縁で、10は口唇部に小突起が付されている。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整を確認できる土器もある。文様は胴部上端と口縁部に施され、並行直線文などが描かれている。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されている。拓測図のうち10は文様内に縄文を施文している。８・９・11は地文はない。

**（蓋）** 第35図～第37図10は蓋である。伏鉢形のものと半球形のもの（第37図10）とがある。伏鉢形の天井部形態はつまみ部を持つもの（第35図１～12）と持たないものとがある。つまみ部を持たないものに天井部側縁が張り出すもの（第35図13・14、第36図4）と天井部が平坦なもの（第36図１～３・５～９）とがある。つまみ部を持つものの蓋部は側面が外傾するものと外反するものとがある。天井部側縁が張り出すものの蓋部は側面が外反する。天井部が平坦なものの蓋部は側面が上端あるいは中央部周辺で屈曲するもの、強く外反するものがある。口縁部形態は平縁である。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整・ナデ調整を確認できる土器もある。第35図14の外面は縦方向のケズリ調整である。つまみの内面はミガキ調整やナデ調整である。天井部はつまみ部のあるものではミガキ調整やナデ調整が施される。つまみ部のないものでは木葉痕がついている。

文様は体部下半に施され、つまみ部を持つものはつまみの上部に施されることがある。半球形のもの（第37図10）は外面全体に文様が施される。文様の種類は並行直線文、層波文（第35図１・13、第37図３・５・７・10）、三角文（第35図４、第37図４・６）、三角文系（第36図４、第37図９）、山形文（第36図１）、波状文（第36図11）、工字文（第37図８）がある。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第37図３～７は文様内に縄文や植物茎回転文を施文している。第35図15、第36図11は摩滅のため地文があったかは不明である。第35図１、第37図８は地文はない。大型の土器は地文のみか無文となる。内面は口縁部に直線文あるいは並行直線文が施されるものも

ある。

**（その他の土器）** 第37図11は器種不明の土器で、外面の文様内と内面はミガキ調整が施されている。胴部に王字文風の変形工字文が描かれ、文様内に地文はない。

**（ミニチュア土器）** 第37図12～14はミニチュア土器である。12は尖底で、13・14は蓋形である。

**［東地区出土弥生土器］**

出土土器の大部分は弥生土器である。そのうち253点を図示した（第３分冊第38～57図）。土器の遺存状況は西地区と同様に不良である。器種は壺・高坏・鉢・深鉢・甕・蓋・ミニチュア土器がある。

**（壺）** 第38図～第42図６は壺である。口頸部の形態は外反するもの（第38図１～６）、頸部は不明瞭で、口縁部が外傾するもの（第38図７・８）、頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの（第38図９）、口頸部が直立するもの（第38図10・11）、頸部は直立し、屈曲して口縁部は外傾、外反あるいは内弯しながら外へ開くもの（第38図12・13、第39図１～４・６～11・13～15、第40図１・５）、頸部は直立し、口縁部は内弯しながら立ち上がるもの（第40図２）、頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外傾、外反あるいは内弯しながら外へ開くもの（第39図５・12、第40図３・４・６～第41図６）がある。口縁部形態は平縁が多く、波状を呈するもの（第38図７、第40図９）、小突起を持つもの（第40図７）もある。胴部は、細めのもの（第39図５）と太めのもの（第38図２）などがあり、胴部最大径は胴上部にある。

調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。内面にケズリ調整・ナデ調整を確認できる土器もある。底部は木葉痕がついているもの、ミガキ調整が施されているものがある。

文様の種類は、並行直線文、層波文（第38図７・８、第41図14・15？）、変形工字文（第41図７・８・10？）、王字文（第41図６）、四角文（第41図16？～第42図１）、方形渦文（第41図２・９）、渦文（第40図９、第41図11）、X字連結文（第42図２～４）、錨形文（第41図12・13）、列点刺突文（第38図５）、隆線文（第38図10・11、第39図７、第40図１、第41図４、第42図５）などがある。第38図５は竹管状工具により列点刺突文を施している。第41図７の変形工字文は、変転部に少し深く彫られた垂線が付されている。第41図14の層波文は１単位が長く、うねりは小さい。また、頂部と谷部に付された垂線は少し深く彫られている。第41図19の四角文は、文様内に２本の沈線が充塡されている。第42図５の隆線は粘土の貼り付けではなく削り出し等によるものである。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第38図８、第41図９～13・17～19、第42図１・３・４は文様内に縄文や植物茎回転文を施文している。第41図15・16、第42図２は摩滅のため地文があったかは不明である。第41図７・８・14は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文あるいは並行沈線が施されるものがあるが、数は少ない。第42図６は外面に漆が付着している。色は黒色で、塗布したものと思われる。

**（高坏）** 第42図７～第43図12は高坏である。第42図７～17は坏部で、逆台形状のものと屈曲部を持つものとがある。逆台形状のものには外傾するもの（７～11・14）と内弯するもの（12・13・15）とがある。屈曲部を持つものは胴上部で屈曲し口縁部は外反するもの（16・17）である。口縁部形態は平縁、波状、山形突起を付したものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。

文様帯幅は坏部の２分の１から３分の２を占め、文様の下部は無文となる。文様は層波文が描かれる。13・14は変形工字文が描かれ、13の沈線の反転部に幅広で少し深い垂線が施されている。文様内の縄文や植物茎回転文は充塡手法により施文される。15・17は文様内の縄文は充塡手法により施文される。10・16は摩滅のため地文があったかは不明である。13・14は地文はない。内面は口縁部に直線文ないし並行沈線文が描かれている。

第43図１～12は脚部で、台形状を呈し側面は下端に向かって直線的に開く。12については全体が筒形で、下端が開く形態である。調整は外面が横方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整（７～８）、横方向のケズリ調整（２・

10)、ケズリ調整の後ミガキ調整(1)やナデ調整(5)などがある。文様は脚部下半に施されるものと脚部全体に施されるもの(10)とがある。

文様の種類は並行直線文、層波文(1～3・5～7)、変形工字文(11)、波状文(9)、山形文?(8)、方形渦文(4)がある。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。7は文様内に縄文や植物茎回転文を施文している。4・6は摩滅のため地文があったかは不明である。8・9・11は地文はない。

**(鉢)** 第43図13～24、第44図1～15・17・18・20、第45図1～13は鉢である。逆台形状のものとくびれ部を持つものと丸底のもの(第45図10～12)とがある。逆台形状のものには内弯するもの(第43図13・14)と外傾するもの(第43図15～第44図15・17・18)と外反するもの(第44図20)とがある。くびれ部を持つものは胴部上端にくびれがあるもの(第45図1～9)である。口縁部形態は平縁、波状、突起を付したものがある。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。この他、外面にナデ調整、内面にケズリ調整やナデ調整を施した土器もある。底部は木葉痕がついたものがほとんどで、織布痕がついたもの、ミガキ調整が施されたものもある。

文様は胴部上半に施されるが、胴部の3分の2に及ぶものもある。くびれのある土器は胴上部と口縁部に文様があり、胴部全体に文様が施されるものがある。丸底のものはくびれ部分を無文にして、口縁部と胴部から底部にかけて文様が施される。文様の種類は並行直線文、層波文(第43図13・15・22・24、第44図1～3・5～9・13・14・20、第45図1・4～7・9～11・13)、変形工字文(第44図11・18)、重三角文(第45図8)、波状文(第43図14)、連弧文(第43図21・23)、山形文(第44図10・12)などがある。また、無文の土器も少なくない。第44図15は上下に沈線をめぐらせ、その間を小刺突の連続施文により、重四角文と思われる文様を施している。丸底鉢の底部文様は轡形文(第45図10)、同心円文(第45図11)、錨形文(第45図12)がある。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第44図17・20、第45図9・13は文様内に縄文や植物茎回転文を施文している。第43図22・23は摩滅しているが文様内に植物茎回転文を少しだけ確認できた。第45図4・12は摩滅のため地文があったかは不明である。第45図7は文様下部に縄文を施文しているが、文様内に地文があったかは不明である。第43図13・14、第44図6・10～15・18は地文はない。

内面文様は口縁部に直線文や並行沈線文を施したものがある。口縁部に穿孔を持つものが多い。1個または2個を1単位として、片面のみのものと相対する面にも施しているものとがある。

**(深鉢)** 第45図14は深鉢で大型になると思われる。胴部下端から上部は外傾し、胴上部から口縁部にかけて内弯するような形態であろう。口縁部形態は平縁である。調整は外面は摩滅のため不明、内面は横方向のミガキ調整が施されている。摩滅のため地文があったかは不明である。

**(甕)** 第45図15～第55図12は甕である。

胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、口縁部は外反するもの(第45図15～第53図14)が甕の大部分を占める。口縁部形態は平縁である。外面調整はハケメ調整・ヨコナデ調整を多用している。ハケメ調整は口縁部から胴上部にかけて斜めや縦方向に、胴部は縦方向に施すことが多い。ヨコナデ調整は微細な条痕が紆曲せず直線的に走る。第53図6は口縁部にミガキ調整が施されている。胴部下端に横方向のミガキ調整やヘラナデ調整を施すことがある(第46図1・4、第47図1・3)。内面調整はミガキ調整を施し、ケズリ調整を施した土器もある。文様は胴部上端に列点刺突文、並行沈線文、綾絡文(第51図2、第53図9～12)が施され、無文の場合もある。第51図4、第53図7は2列の列点刺突文が施されている。第53図5は刺突文の凹みに木目状の筋目がある。胴部に縄文、植物茎回転文を施文している。底部は木葉痕がついたものがほとんどで、網代痕のついたものもある。

口縁部は長めで内弯しながら立ち上がるもの(第53図15・17・18、第54図3・4)の口縁部形態は平縁のもの、突起を付したものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様は胴上部と口

縁部に施され、種類は並行直線文、四角文（第53図17)、列点刺突文（第54図３・４）がある。第53図18の胴部文様は３本の並行直線の下部に斜めにのびる沈線が確認できるものの、摩滅のため文様の種類は特定できなかった。第54図３はくびれ部分をはずして植物茎回転文を施文している。第53図18の文様内は縄文が充塡されている。第54図４は摩滅のため文様内に地文があったかは不明である。胴部に縄文、植物茎回転文を施文している。内面文様は口縁部に並行直線文を施したものがある。

口縁部は長めで外傾するもの（第53図16、第54図１・２・５～第55図４）の口縁部形態は平縁で、第54図11については突起を持つ。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整を施した土器もある。胴部下端に横方向のミガキ調整やヘラナデ調整を施すことがある（第54図７)。文様は胴上部と口縁部に施され、種類は直線文、並行直線文、層波文（第53図16、第54図１・６～８、第55図２)、四角文（第54図10）が描かれている。第54図７・11は口縁部に文様が施されていない。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されている。底部は木葉痕がついたものがほとんどで、ミガキ調整が施されたものもある。

口縁部が立ち上がるもの(第55図６～11)は大型に属すると思われる。口縁部形態は平縁と突起を付したもの(８・11）とがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整、内面にケズリ調整を確認できる土器もある。文様は胴部上端と口縁部に施され、並行直線文、山形文(７)、四角文(10)などが描かれている。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されている。７・８は文様内に縄文を施文している。６・10・11は摩滅のため地文があったかは不明である。９は地文はない。

胴上部は膨らみ、口縁部が外反するもの（第55図12）は平縁で、口縁部にヨコナデ調整、胴上部に８本の並行直線文が描かれ、その下部に縄文を施文している。内面はミガキ調整が施している。

第44図16・19、第55図５は甕または深鉢と思われる胴部破片である。調整は外面の文様内と内面はミガキ調整が施されている。文様は層波文（第55図５)、三角文（第44図16)、重三角文（第44図19）である。文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文されている。

**（蓋）** 第56図～第57図は蓋である。伏鉢形のものと半球形のもの（第57図23・24）と異形のもの（第57図25）とがある。伏鉢形の天井部形態はつまみ部を持つもの（第56図１～10）と持たないものとがある。つまみ部を持たないものに天井部天端が盛り上がるもの（第56図11～第57図３）と天井部側縁が張り出すもの（第57図５～７・11）と天井部が平坦なもの（第57図４・８～10）とがある。つまみ部を持つものの蓋部は側面が外傾するものと外反するものとがある。天井部天端が盛り上がるものの蓋部は側面が外反している。天井部側縁が張り出すものと天井部が平坦なものの蓋部は、上端あるいは中央部周辺で屈曲している。口縁部形態は平縁である。

調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。口縁部にヨコナデ調整、外面にハケメ調整、内面にケズリ調整を施している土器もある。つまみの内面はミガキ調整やナデ調整である。天井部はつまみ部のあるものではミガキ調整やナデ調整が施されるが、第56図３は木葉痕がついている。つまみ部のないものでは木葉痕がついていたり、ミガキ調整やナデ調整などが施されている。

文様は体部下半に施され、つまみ部を持つものはつまみの上部に施されることがある。文様の種類は並行直線文、層波文（第56図１・２・４・12、第57図12・13・18～20・22)、変形工字文（第57図14・15・21)、重三角文（第57図16・17？)、轡形文（第57図25）がある。第57図19の文様内の垂線は深い。第57図22の文様内の垂線は幅広で深い。

文様内の縄文や植物茎回転文はおよそ充塡手法により施文される。拓影のうち第57図16・17・18は外面に縄文や植物茎回転文を施文している。第56図８、第57図７・14・19・20・24は摩滅のため地文があったかは不明である。第57図15・21・22は地文はない。大型の土器は地文のみか無文となる。

内面は口縁部に直線文あるいは並行直線文が施されるものもある。

第57図25はスタンプ形をしたもので、半分程度欠損している。平坦な面に轡形の文様が描かれ、斜め方向に穿たれた孔を持ち、おそらく対称の位置にも穿孔があったものと思われる。

**（ミニチュア土器）** 第55図13・14はミニチュア土器で、鉢形を呈する。

**［西地区出土土製品］**

土製品は20点を図示した（第３分冊第153図７・８・20・22・23・25・28～31・33～37・40～42・48・52）。

７・８は小型の土玉で、球形を呈し７は小孔をもつ。８は凹みがあり、貫通していない。

20・22・23・25・28～31・33～37・40～42・48は土器片製円盤である。土器の破片を素材とし、円みのあるもの（22・23・28～30・48）や角張ったもの（20・25・31・33～37・40～42）がある。円盤の中央に孔が穿たれているものと凹みはあるが貫通していないもの（48）とがある。

**［東地区出土土製品］**

土製品は２点を図示した（第３分冊第153図26・38）。土器片製円盤で、土器の破片を素材とし円みをもつ。円盤の中央に孔が穿たれている

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、尖頭器、掻器、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、石鍬、大型板状石器、剥片、石核、管玉、小玉、石皿、砥石、石製品、球状敲石、礫石器、礫片などである。第４分冊第172図から第204図に主な石器・石製品を図示した。

**第172図**は石庖丁の成品である。用いられている石材は１と２が緑泥石片岩であり、３と５は結晶剥片岩、４と６は珪化凝灰岩、７は粘板岩である。

第172図１と２は敲打によって形成された側縁をもつ外弯刃半月形の石庖丁であり、完形の成品である。器体の研磨面下に整形時の剥離面と調整時の敲打痕が表裏両面に観察されることから、敲打による調整は器体全体にはおよばず、部分的に整形時の剥離面が残された状態で紐孔穿孔に関わる作業に移行している。紐孔穿孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われている。

第172図１の紐孔の位置は器体中央ではなく、平坦なｂ面から見て右寄りに位置している。光沢はｂ面側で明瞭であり、刃部から器体の左側にかけて顕著に観察される。

第172図２の側縁は直線的に整形されており、ごく一部を欠損する。背部はほぼ直線的であるが、中央付近でわずかに内弯しており、ａ面に見られる整形時の剥離が内側に入りすぎたためと考えられる。光沢は表裏両面で観察され、ａ面の刃部から右半にかけてとｂ面の刃部から左半にかけて明瞭である。刃部の磨滅は著しい。

第172図３は３片が接合した資料であり、その内の１点は基本層の第Ⅳ層から出土している。器体の３分の１と刃部の３分の２ほどを欠損しているが、側縁の作られた外弯刃半月形の石庖丁である。研磨面下に調整時の敲打痕が観察され、ａ面には背部からの整形時の剥離面がわずかに残されている。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によるものである。光沢はｂ面の刃部と体部を分ける稜線上に認められる。表裏両面の紐孔の両側に断面Ｕ字形の溝が作られており、玉などの砥石として転用されたものと考えられる。

第172図４は２片が接合した外弯刃半月形の石庖丁であり、器体の２分の１ほどを残存している。研磨面下に整形時の剥離面と調整時の敲打痕が残されている。紐孔穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によるものである。表裏両面に光沢が観察されるが、ｂ面側でより顕著である。

第172図５は側縁をもつ外弯刃半月形の石庖丁であり、器体の２分の１ほどを欠損している。研磨面下に整形時の剥離面と調整時の敲打痕が観察される。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によるものであり、回転痕の範囲が狭いことから穿孔具はやや長めの尖端部をもつものと考えられる。光沢は表裏両面に確認され、特にｂ面の刃部側で顕著である。ａ面の紐孔付近に断面Ｖ字形の溝状の凹みが長軸方向に認められ、刃部寄りには刃縁に直

交する方向に数条の条線が観察される。

第172図６は背部が側縁近くで弯曲する杏仁形の石庖丁であり、器体の２分の１ほどを欠損する。研磨面下に調整時の敲打痕が観察され、整形時の剝離面もわずかに残されている。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によるものである。光沢は表裏両面に観察される。他の石庖丁と比べ紐孔間の距離が短く、３孔もしくはそれ以上の紐孔を穿孔していた可能性が考えられる。

第172図７は器体の中央部のみが残存した石庖丁で、２つの紐孔が部分的に残されており、外弯刃半月形の形態と考えられる。研磨面下に整形時の剝離面と調整時の敲打痕が観察される。ｂ面の紐孔から刃部までの体部は１面の剝離面であり、敲打痕は認められない。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によるものと考えられるが、敲打痕はａ面の左側の孔で確認されるのみである。紐孔穿孔のための回転痕が表裏両面ともに浅く広いことから、尖端の短い穿孔具であったため、敲打痕はほとんど残らなかったものと考えられる。光沢は表裏両面の紐孔から刃部にかけて明瞭に観察される。

**第173図**は石庖丁の破損品であり、１～８は成品、９～13は未成品である。用いられている石材は１・２・６が緑泥石片岩であり、３・８・10・13は結晶片岩、４・５・９・12は珪化凝灰岩、７は粘板岩、11はデイサイト質凝灰岩である。

第173図１は器体の３分の１ほどが残存する外弯刃半月形の石庖丁であり、側縁を有している。研磨面下には整形時の剝離面が残されているが敲打痕は観察されないことから、敲打による器体調整の工程を経ずに紐孔穿孔に関わる作業に移行したものと考えられる。紐孔穿孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われており、回転痕が表裏両面ともに浅く広いことから、穿孔具の尖端はそれほど長くないものである。光沢は表裏両面の全体で観察され、特にｂ面の刃部側と背部側に明瞭で、刃部の大きな刃こぼれにも認められる。

第173図２～８は石庖丁のごく一部分の破片である。

第173図３～５には背部と紐孔が部分的に残されている。

第173図９は成品に比べ整形時の剝離面や調整時の敲打痕をｂ面に明瞭に残しており、刃部も充分に研ぎ出されていないことから外弯刃半月形の石庖丁の未成品と考えられる。紐孔は残存していないが、研磨の段階まで製作作業が進行していることからすでに穿孔されているものと考えられる。ａ面の研磨面下には剝離面と敲打痕が観察される。

第173図10は側縁の一端のみが残存している。製作作業は剝離による整形、敲打による調整を経て、研磨の段階まで進行しているが、研磨は粗く、背部と側縁も明瞭に作り出されていないことから未成品と考えられる。紐孔は残存していないが、すでに穿孔されているものと考えられる。

第173図11は２片が接合した資料であり、１片は近世の溝跡の堆積土中から出土している。剝離による整形、敲打による器体の調整段階を経て、敲打による紐孔部の窪み部形成の後、回転穿孔まで製作作業が進行した外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。ａ面左側の孔は貫通しているが、右側の孔については残存部分が少なく貫通しているか不明である。しかし、器体の製作作業が研磨の段階まで移行していないことから、右側の孔の穿孔段階で事故が起き、破損した可能性が考えられる。

第173図12は一方の紐孔から側縁までが残存する外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。製作作業は剝離による整形段階を経て、敲打による窪み部の形成の後、回転によって紐孔を穿孔した段階まで進行している。敲打による器体調整の段階は認められない。器体に研磨痕が観察されないことから紐孔の調整段階か、あるいは残存していないもう一方の紐孔の穿孔作業中に破損した可能性が考えられる。

第173図13も一方の紐孔から側縁までが残存する外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。製作作業は剝離による整形、敲打による器体の調整を経て、敲打による紐孔部の窪み部形成の後、回転によって穿孔する段階まで進行して

いる。回転穿孔作業中に破損したものと考えられる。

**第174図**は石庖丁の未成品である。用いられている石材は１と２が結晶片岩、３は珪化凝灰岩、４は粘板岩、５は緑泥片岩、６はデイサイト質凝灰岩である。

第174図１は外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。製作作業は剝離による整形、敲打による器体の調整段階を経て、敲打による紐孔部の窪み部形成の後、回転によって穿孔する段階まで進行しているが紐孔は貫通していない。回転穿孔作業はａ面の左側の孔が右側よりも進行しており、この作業中に破損したものと考えられる。器体調整のための敲打痕がａ面の右半とｂ面の左端に認められないことから、器体調整の敲打作業は絶対的に必要なものではなく、剝離による整形段階で予定の厚さを得られた場合、省略されることもあることを示している。紐孔穿孔予定位置は器体の中央ではなく、一方に片寄っており、製作段階で意図的に中央からずらしたものと考えられる。ｂ面の刃縁には部分的な研磨痕が観察され、剝離による整形作業の後さらに形態を整えている。ａ面中央の刃部寄りに断面Ｕ字形の浅い溝状の磨り面が認められ、破損以前に何らかの研磨に使用されている。

第174図２も外弯刃半月形の石庖丁の未成品であるが、剝離による整形の後、敲打による調整段階を経ずに直接的に紐孔部の窪み部形成のための敲打作業に取りかかっていることから、剝離による整形段階で予定の厚さが求められたことを示している。この窪み部形成の段階で事故が起き、破損したものと考えられる。破損後、ａ面の左側を再加工しており、接合面の一端が剝離と敲打によって弧状に整形されている。

第174図３は器体中央部が部分的に残された石庖丁の未成品である。剝離による整形の後、敲打による調整段階を経ずに紐孔部の窪み部形成のための敲打作業に移行しており、その段階で破損したものと考えられる。

第174図４は２・３と同様に敲打による器体の調整段階を省略し、紐孔穿孔に関わる作業に移行した未成品である。敲打による窪み部形成の後、回転穿孔を開始した段階で破損している。ａ面の背部から整形のために加えられた、折れ面に切られている剝離面は、パンチの存在を想定させる打点をもつ特徴的な剝離面である。

第174図５は外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。剝離による整形の後、敲打によって器体を調整している段階で事故が起き破損したものと考えられる。

第174図６は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行した、外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。ａ面右側縁に表裏両面への細部調整が認められ、形態を大きく変更している。細部調整の剝離面は器体調整のための敲打痕を切っていることから、たとえば破損などの何らかの理由で石庖丁の製作作業が中断されたことを示している。また、細部調整によって形成された縁辺と石庖丁として整形された刃縁からなる先端部には磨滅痕が観察され、転用されたものと考えられる。

**第175図**１～３は石庖丁の未成品の破損資料である。石材は１が粘板岩であり、２と３は結晶片岩である。

第175図１と２は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階へと移行しており、その作業中に破損したものと考えられる。

第175図１は素材剝片の段階で一定の厚みになっており、敲打が集中する箇所が表裏両面で対応することから紐孔の位置がすでに決定されていた可能性が高い。

第175図２の背部は直線的に整形されており、外弯刃半月形の石庖丁の製作を予定していたものと考えられる。

第175図３には敲打痕は観察されず、剝離による整形段階で破損したものと考えられる。

第175図の４と５は基部の大半を欠損する石斧である。

第175図４は太型蛤刃石斧の破損品である。両側面が形成されており、特にａ面右側面は平坦面となっていることから、断面形状は長軸の端部が平坦に近い楕円形を呈している。刃部はていねいに研磨されているが、残された基部には研磨面下に敲打痕が明瞭に観察される。刃縁は弧状を呈しており、使用によるわずかなつぶれと著しい刃こぼれがみられる。刃面の表裏両面には使用に伴う線条痕が認められる。ａ面に破損面からの剝離面と敲打痕がみら

れ、破損面にも剝離面と敲打痕が観察されることから転用されたものと考えられる。石材はデイサイトである。

第175図５は基部中央から基端を欠損しており、最大幅の位置は刃部にある。側面が明瞭に形成されているため断面形状は側面をもつ凸レンズ形を呈している。研磨面下に器体調整時の敲打痕が観察され、基部でより明瞭である。破損後、敲打具へ転用されており、破損面と刃縁には損傷の剝離面を伴った敲打痕が認められる。また、ａ面左側面とｃ面の中央部にも敲打痕が残されている。

**第176図**には扁平片刃石斧とノミ形石斧の成品および未成品を図示した。扁平片刃石斧に用いられている石材は珪化凝灰岩（１・２・４・５）とデイサイト質凝灰岩（３・６・７・10）であり、ノミ形石斧では斑糲岩（８・13）、緑泥片岩（９）、珪化凝灰岩（11・12）が用いられている。

第176図１と２は扁平片刃石斧の完形品であり、平面形は台形状を呈している。側縁形態は、１が直線的であるのに対して２ではわずかに弯曲している。

第176図１は扁平片刃石斧の完形品である。平面形は台形状を呈し、側縁形態は直線的である。断面形状は長楕円形を呈しており、側面は形成されているものの、膨らみをもち平坦ではない。刃縁は緩やかに外弯する。側刃角はａ面右側が130度、左側が115度であり、右側がより後退している。基部の表裏両面の研磨面には長軸方向に近い擦痕を伴っており、研磨面下には整形時の剝離痕が明瞭に残されている。それに対して刃面の擦痕は短軸方向である。ｂ面の刃縁には使用に伴う線条痕とにぶい光沢が観察される。また、ａ面の中央部には磨滅した部分が認められ、着柄にかかわる痕跡と考えられる。

第176図２も扁平片刃石斧の完形品である。平面形は台形状を呈するが、ａ面左側縁はわずかに外弯し、右側縁には整形時のわずかな凹みが残されている。断面の形状は長楕円形を呈しており、側面はａ面左側の刃部寄りにわずかに作られているが、他の部位では形成されていない。刃縁は外弯している。基部の表裏両面の研磨面にはおもに長軸方向に近い擦痕を伴っているが、ａ面の中央部と表裏両面の刃部には短軸方向の擦痕が観察される。研磨面下には整形時の剝離痕が認められ、特に側縁から基端にかけて明瞭に残されている。ａ面左側縁の基端寄りには研磨は施されておらず、剝離面によって形成されている。刃縁には光沢が観察され、ｂ面側で明瞭である。

第176図３～５は扁平片刃石斧の基端のみが残存する資料である。３と４は剝離による整形の後、研磨が施されて仕上げられており、研磨面には右下がりの擦痕が観察される。折れ面には部分的に研磨が施されており、さらに３には折れ面からの剝離面が認められることから、ともに転用がはかられた可能性がある。５には折れ面以外の面に自然面が多く残されており、素材の礫の形状を利用して一部に加工を施すことによって整形したものと考えられる。

第176図６は扁平片刃石斧の刃部の一部であり、使用に伴う刃こぼれによって生じた剝片である。末端の形状はヒンジ・フラクチャーである。

第176図７は剝離によって整形した後、敲打による器体の調整を行い、表裏両面に部分的な研磨が施されていることと、現段階での全体の形状から石斧の未成品と判断される。扁平片刃石斧の製作工程には敲打による器体の調整はそれほど認められない点で異なっているが、法量から扁平片刃石斧の未成品と考えられる。

第176図８はノミ形石斧の完形品である。最大幅の位置は基部中央にあり、側面は形成されているが、断面形はそれぞれの辺の中央が膨らむ隅丸長方形を呈している。側面と両主面を分ける稜線は刃部寄りで明瞭に形成されているのに対して基部ではやや不明瞭である。刃縁はわずかに弧を描いているものの、ほぼ直線的である。側刃角はａ面右側が120度、左側が130度であり、左側がわずかに後退している。基部の研磨面には長軸方向に近い擦痕が部分的に観察され、研磨面下には器体調整時の敲打痕が残されている。刃面には刃縁に平行する擦痕が認められる。

第176図９もノミ形石斧の完形品である。最大幅の位置は基部中央やや基端寄りにあり、断面形はそれぞれの辺の中央がやや膨らむ点では８と同様であるが、８よりも方形に近い。刃縁はわずかに外弯するものの、ほぼ直線的である。基部の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察され、研磨面下には整形時の剝離痕と器体調整時の

敲打痕が残されている。刃面には刃縁に平行する擦痕が認められる。両側面およびｂ面の中央から基端にかけてと基端面に磨滅の著しい部分が認められ、着柄にかかわる痕跡と考えられる。

第176図10は剥離によって整形され、左側面の一部に研磨痕が観察されることから、基端部のみが残存した扁平片刃石斧の未成品と考えられる。

第176図11は刃部と基端側を欠損するノミ形石斧である。断面形は不整楕円形を呈している。研磨面には長軸方向の擦痕がわずかに観察され、研磨面下には整形時の剥離痕が残されている。図示した裏面の基端寄りにはにぶい光沢を伴う磨滅痕が観察され、着柄にかかわる痕跡と考えられる。

第176図12はノミ形石斧の未成品である。剥離による整形の後、敲打によって器体を調整しており、ａ面ではさらに粗い研磨が施されている。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が顕著である。折れ面には部分的な磨滅と敲打痕が認められ、敲打に伴う損傷の剥離面がａ面に残されていることから、折れ面を利用した敲打を伴う何らかの作業に転用されたものと考えられる。

第176図13は２片が接合した資料であり、刃部側を欠損するノミ形石斧である。最大幅の位置は基部の基端寄りにあり、断面形はそれぞれの辺の中央がやや膨らむ隅丸長方形を呈している。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察され、研磨面下には整形時の剥離痕と器体調整時の敲打痕が認められる。図示した裏面は節理面が利用されており、研磨を施して平坦面を形成している。

**第177図**から第181図の１～４には89点の石鏃を図示した。第181図２・３のアメリカ式石鏃を除き、すべて有茎の石鏃である。第181図４は茎部を欠損しているものと考えられ、明瞭な基端は作出されていない。石鏃は１点を除き、すべて打製の石鏃である。**第178図**６は身部の側縁に研磨が施された部分磨製の石鏃であるが、研磨によって側縁に面が形成され、尖端部も厚みをもっていることから、矢柄に装着されて矢としての機能を果たしたものか疑問である。

有茎の石鏃には細身のもの（第177図）と幅の広いもの（**第180図**１～18）があるが、その中間的なものも多く（第178･179図）、それぞれに小型から大型のものがあり、長幅比および法量の変化は連続的である。身部の側縁形態は直線的なものとわずかに外弯するものが多数を占め、明らかに外弯した側縁をもつもの（第177図６･14･24、**第179図**２・３・15、第180図６）はそれほど多くはない。第177図15のように内弯気味の側縁形態の石鏃もみられるが、きわめて稀な例である。また、数は少ないが、尖端部寄りの側縁に屈曲点をもつもの（第180図20・21・22）や、明瞭な屈曲点をもたず弧を描いてやや鈍角な尖端部が作り出されたもの（第180図12）もみられる。基端は角張って作り出されることが一般的であり、第180図18にみられるように弧状に作出される例は少ない。器体は細部調整による剥離面に覆われ、素材剥片の形状を大きく変更しているが、素材剥片の剥離面を中央に残す石鏃も多く、素材として薄手の剥片が選択されていたものと考えられる。

第180図11は表裏両面に素材剥片の剥離面を大きく残しており、素材剥片の形状を利用して、わずかな細部調整によって製作された数少ない例である。

第180図４・７・８は尖端部に磨滅やツブレが観察され、矢柄に装着される本来の石鏃の機能とは異なる使われ方が行われたものと考えられる。

第178図15と第180図19は茎部が作り出されているものの、側縁は整えられておらず、尖端部の作出も行われていないことから未成品と考えられる。

第179図15は二重パティナが観察される石鏃であり、古い剥離面をａ面とｄ面に白抜きにして図示した。

**第181図**１は長さが5cmを超えるものであり、今回の調査によって出土した中で最大の石鏃である。

第181図２と３は平基の石鏃の基端寄りの位置に、深い抉りが両側縁に作られたアメリカ式石鏃である。ともに基部の一方を欠損しており、３は尖端部も失っている。石材は珪化凝灰岩が用いられている。側縁は外弯し、尖端部

の残存する２では突出した尖端部が作り出されている。今回の調査では破損した尖端部や基部の一部を加えると1,132点の石鏃が出土しているが、そのほとんどが有茎の石鏃であり、アメリカ式石鏃はこの２点のみである。

図示した89点の石鏃に用いられている石材は、珪化凝灰岩が最も多く全体の60％を占め、ついで珪質頁岩が17％、玉髄７％、瑪瑙６％、流紋岩３％、デイサイト３％、珪質凝灰岩２％の順である。ほかにはデイサイト質凝灰岩、凝灰岩質頁岩が１点ずつ用いられている。

第181図の５から第183図の11には42点の石錐を図示した。石錐はすべて打製石錐であり、尖端部の断面形は菱形を呈するものが多い。

石錐は全体の形状、基部と尖端部との関係、尖端部の長さなどから、基部と尖端部の境がなく棒状を呈するもの（第181図５～８）と、不明瞭ではあるが境の認められる棒状のもの（第181図９～20）、基部の側縁調整と連続して尖端部が作り出されたもの（**第182図**１～８）、基部と尖端部の境が明瞭で尖端部の短いもの（第182図９～15）、境が明瞭で尖端部の長いもの（**第183図**１～11）に分けられる。

第181図９～14は尖端部の両側縁が部分的に平行していることから基部と尖端部の区別が可能であり、第181図15～20は１側縁で基部と尖端部の境が明瞭で、基部と尖端部の中心線がずれることから区別可能である。

第182図３は自然面打面の剥片を素材とし、おもに素材剥片の主要剥離面から剥離を施して尖端部を作出している。

第182図４と８は素材剥片を折りとり、縁辺と折りとり面によって形成される鋭角な部位に細部調整を施して尖端部を作り出しており、８の尖端部には磨滅痕が観察される。

第182図11は素材剥片の両側縁を折りとり、折りとり面と折りとり面によって形成される鋭角な部位にわずかな細部調整を施し尖端部を作出している。尖端部には磨滅痕が観察され、断面形は三角形を呈している。

第182図13は石鏃の尖頭部に細部調整を施して尖端部を作出した、石鏃の転用品である。

第183図１～４と６は基部が横長の石錐であり、基部の幅の狭いもの（１・２）と広いもの（３・４・６）がある。基部の幅が狭い１と２の基端は細部調整によって整形され、打面を含む素材剥片の面をほとんど残していない。

第183図５は尖端部を３ヶ所作り出した石錐であり、ａ面左側と上端の尖端部は欠損している。

第183図７と８は基部が縦長の石錐である。ともに表裏両面に素材剥片の剥離面および自然面を残している。８は尖端部の大部分を欠損しており、基端にはノッチ状の凹みが作られている。

第183図９～11は基部に有茎の石鏃のように茎部を作り出した石錐であり、９の尖端部はわずかに弯曲しており、11は尖端部を欠損する。９と10は石鏃からの転用の可能性が考えられるが、石鏃と比較すると幅に対する厚さが厚い。９と10の表裏両面は、ほぼ全面が細部調整の剥離面によって覆われているのに対して、11は素材剥片の剥離面を残している。

図示した42点の石錐に用いられている石材は、珪化凝灰岩が最も多く全体の43％を占め、ついで珪質頁岩が24％、チャート14％、流紋岩７％、デイサイト５％の順である。ほかには瑪瑙、黒曜岩、珪質凝灰岩が１点ずつ用いられている。

第183図12と13は石匙である。

第183図12は縦型石匙であり、細部調整の剥離面によってほぼ全面が覆われていることから素材形状は不明であるが、つまみ部の端面は自然面である。表裏両面ともていねいな細部調整によって整形され、約45度の角度をもつ尖端部が形成されている。つまみ部は両側ともｂ面の後、ａ面側に剥離を施して作り出されている。石材は珪化凝灰岩である。

第183図13は横型石匙である。表裏両面の素材の剥離面と細部調整の剥離面との風化が異なる、いわゆる「二重パティナ」が観察される。つまみ部は素材剥片の打点側に作り出されており、その細部調整によって打面は失われてい

る。つまみ部以外は素材剝片の裏面から表面側への細部調整によって整形されており、刃角は40～50度である。つまみ部は両側ともａ面の後、ｂ面側に剝離を施して作り出されている。石材は珪質凝灰岩が用いられている。

**第184図**１～３は珪質頁岩を石材とした横型石匙である。

第184図１は自然面打面の剝片を素材とし、つまみ部は素材剝片の打点を中心に作り出されている。つまみ部は、ａ面の右側はｂ面ののちａ面側に、左側はａ面ののちｂ面側に細部調整を施して作り出されている。つまみ部作出以外の細部調整は浅く、つまみ部に隣接する両肩とつまみ部に相対する縁辺にわずかに施される程度である。

第184図２は自然面打面の剝片を素材とし、つまみ部は素材剝片の打点を中心に作り出されている。ａ面右側を欠損する。つまみ部以外は表裏両面からの連続する浅い細部調整によって直線的に整形されており、ａ面左側縁は55～60度、つまみ部と相対する縁辺は50～60度である。左側縁とつまみ部に相対する縁辺によって角度約75度の尖端部が形成されている。つまみ部は、ａ面の右側はａ面ののちｂ面側に、左側はｂ面ののちａ面側に細部調整を施して作出されている。

第184図３は自然面打面と考えられる剝片を素材とし、表面に自然面を部分的に残している。素材剝片の打点はａ面のつまみ部右側に位置していたと考えられるが、つまみ部作出のための細部調整によって失われている。つまみ部はａ面ののちｂ面側に細部調整を施して作り出されている。つまみ部周辺以外には剝離はほとんど施されず、つまみ部に相対する縁辺にわずかに認められるのみである。

第184図４は表裏両面にていねいな細部調整を施した尖頭器である。尖端部をわずかに欠損している。基部の両側縁に抉りを入れ、つまみ部が作り出されている。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第184図５は両端に尖端部が形成されているが、製作作業が中断された石鏃と考えられる。ａ面左側が薄く、最大厚の位置が両端の尖端部を結ぶ中軸線上から外れていることが中断の原因となったものと考えられる。石材は流紋岩である。

第184図６と７は、表裏両面に素材剝片の剝離面を残す尖頭器である。６は粗い細部調整によって整形されており、基部のｂ面側はａ面からの大きめの剝離によって失われている。石材として珪化凝灰岩を用いている。７の基部整形は充分ではなく、尖端部を欠損することから、製作作業中に破損したものと考えられる。表裏両面の中央に残された素材剝片の剝離面は細部調整による剝離面と比較してツヤがなく、加熱処理を受けた可能性が考えられる。石材はチャートである。

第184図８は両端に尖端部が形成されており、その形状と法量から石鏃の未成品と判断される。ａ面中央に残る高まりの除去を果たせず、製作作業が中断されたものと考えられる。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第184図９はａ面左側縁に基端が作出されていることから石鏃の未成品の可能性が高い。右側の基端形成の失敗による製作作業の中断と考えられる。石材はチャートである。

第184図10は節理面打面の薄手の剝片を素材とし、両側縁に細部調整を施して尖端部が形成されている。ａ面の右側縁には素材剝片の面が残されている。石鏃の未成品と考えられ、側面観が弯曲していることと成品に仕上げるためには幅が不充分であったことが作業中断の理由と考えられる。石材は流紋岩である。

第184図11は左右両側縁に細部調整が施され、表裏両面の中央部には素材剝片の剝離面が残されている。全体の形状から石鏃の未成品と判断される。ａ面左側縁の基端寄りに残された側面の除去が困難であったため製作作業が中断されたものと考えられる。石材は珪化凝灰岩である。

第184図12はほぼ全面に細部調整が施されているが、全体の形状から石鏃の未成品と判断される。ａ面中央とｂ面下端寄りに高まりがあり、幅に対して厚みがあることから製作作業が中断されたものと考えられる。石材は珪質頁岩が用いられている。

第184図13は細部調整によって弧状の刃部が作り出された掻器である。表裏両面に素材剝片の剝離面が残されてい

るが、打面は細部調整によって失われている。刃角は65～80度であり、用いられている石材はデイサイトである。

**第185図**には削器を図示した。用いられている石材は１・３～５・７・10が珪化凝灰岩であり、２は黒曜岩、６・９・11・12は流紋岩、８はチャート、13・14は珪質頁岩である。

第185図１は剥片の縁辺に70～90度の急角度の細部調整を施した削器である。

第185図２は横長の剥片を素材とした削器である。素材剥片の末端に表面から裏面側へ細部調整が施されており、打面側のａ面左側には裏面から表面側への細部調整が認められる。末端の角度は65～70度である。

第185図３は自然面打面の剥片を素材とし、両側縁に細部調整を施した削器である。ａ面右側縁にはｂ面側からの剥離が認められ、左側縁の打面側にはｂ面から、末端側にはａ面からの細部調整が施されている。細部調整によって形成された角度は、ａ面右側縁が65～75度であり、左側縁は70～75度である。

第185図４は表面に自然面を残す剥片を素材とし、おもに打面側に表裏両面から細部調整を施した削器であり、その角度は70～80度である。

第185図５は剥離面打面の剥片を素材とした削器である。ａ面右側縁に素材剥片を剥離した際に同時割れを起こした面が認められる。両側縁に錯向剥離状の細部調整がわずかに施されている。

第185図６は剥離面打面で、表面に自然面を部分的に残す縦長の剥片を素材とした削器である。両側縁に細部調整が施され、ａ面右側縁では65～75度、左側縁では65～80度の角度が形成されている。末端はｂ面側からの力によって折れた面である。

第185図７は表面の末端に自然面を残す剥片を素材としており、打面側は節理面によって折れている。細部調整はａ面左側縁から末端にかけて施され、ａ面からｂ面側への剥離によるものである。細部調整によって形成された角度は80～85度である。

第185図８は横長の剥片を素材としたものと考えられる削器である。素材剥片のおもに打面側と末端に細部調整が施されている。

第185図９は表面に自然面を部分的に残す縦長の剥片を素材とした削器である。末端を欠損している。ａ面右側縁には表裏両面に細部調整が施されており、左側縁では打面側にｂ面への剥離、中央にａ面側への剥離が施されている。細部調整によって形成された角度はａ面左側縁が60～85度であるのに対して、右側縁は85～90度と急角度である。

第185図10は縦長の剥片を素材とし、その１側縁に細部調整を施して刃部を作り出した削器である。素材剥片にはわずかに自然面が残されている。刃部は表裏両面への剥離によって作り出されており、刃角は55～65度である。また、ｂ面側には素材剥片の打面を除去するための剥離が施されている。

第185図11と12は細部調整によって作られた70～85度の刃部が先端を作って交わる尖頭削器である。11はおもにｂ面側への細部調整によって刃部が作り出されているのに対して、12は表裏両面への細部調整による刃部作出である。

第185図13は自然面打面の縦長の剥片を素材とし、左右両側縁に細部調整を施した削器である。刃角は50～60度である。

第185図14は表面が自然面に覆われる剥離面打面の剥片を素材とし、左右両側縁に細部調整を施して刃部を作り出した削器である。ａ面右側縁には表裏両面に細部調整が施され、左側縁ではａ面側にのみ剥離が施されている。刃角はａ面右側縁が60～70度、左側縁は80～85度である。

**第186図**に図示した石器は削器である。用いられている石材は１がチャートであり、２と９はデイサイト、３・４・８・10は珪化凝灰岩、５は珪質頁岩、６・７・11は流紋岩である。

第186図１は末端がヒンジフラクチャーの剥片を素材とし、両側縁に細部調整を施した削器である。細部調整はａ面左側縁では表裏両面に認められるのに対して、右側縁はａ面にのみ施されている。刃角はａ面右側縁が60～70度

であり、左側縁は60〜65度である。

第186図 2 は表面が自然面の剝片を素材とし、両側縁に裏面から表面側に細部調整を施した削器である。素材剝片の打面部分ではさらに表面から裏面への剝離が施されている。刃角は60〜65度である。

第186図 3 の削器は剝離面打面の縦長の剝片を素材としているが、素材の剝片は同時割れを起こしており、b 面左側面は素材剝片剝離時に主要剝離面とともに形成された面である。末端の状態はステップフラクチャーである。細部調整は b 面右側縁に a 面側から行われており、55〜65度の角度を形成している。

第186図 4 は表面に自然面を大きく残す剝片を素材とした削器である。素材剝片の打面は細部調整によって失われているが、自然面打面であったものと考えられる。a 面左側縁に表裏両面からの剝離によって刃部を形成している。刃角は65〜80度である。

第186図 5 は剝離面打面の横長の剝片を素材としており、素材剝片の末端と a 面左側縁に細部調整を施した削器である。刃角は75〜80度である。末端の中央部には微細剝離痕が観察され、 b 面のバルブには火ハネが認められる。

第186図 6 は右側面に自然面が残された剝片を素材とした削器である。打面は点状打面である。b 面右側縁の中央部に a 面側からの細部調整によって刃部が作り出されており、刃角は70〜80度である。

第186図 7 は表面に自然面を残す剝離面打面の剝片を素材とした削器である。b 面左側縁におもに a 面側からの細部調整によって刃部を作り出している。刃角は70〜80度である。

第186図 8 は稜上に打撃を加えて得られた剝片を素材とした削器である。a 面右側縁のほぼ全体と左側縁の打面寄りに細部調整が施されている。刃角は a 面右側縁は50〜85度であり、打面側で急角度となる。左側縁は75〜80度で、一部にツブレが認められる。

第186図 9 は剝離面打面で表面の一部に自然面を残す剝片を素材とし、両側縁に細部調整を施した削器である。細部調整は b 面から a 面側に施されており、 a 面右側縁の打面寄りでは鋸歯状を呈している。刃角は a 面右側縁が50〜55度であり、左側縁は60度前後である。

第186図10は自然面打面の剝片を素材とした削器である。素材剝片の末端に表裏両面から細部調整を施し、刃部を作出している。刃角は40〜50度である。

第186図11は自然面打面の剝片を素材とし、a 面左側縁から素材剝片の末端にかけて細部調整を施して刃部を作出した削器である。左側縁の細部調整は表裏両面に施されており、刃角は55〜65度である。

**第187図** 1 は石庖丁に多用される珪化凝灰岩を石材とした細部調整剝片である。a 面中央に節理面を残し、周縁に粗い細部調整が施されている。

第187図 2 はやや厚手の横長の剝片を素材とした削器である。素材剝片のバルブは粗い剝離によって除去されている。細部調整は a 面下端縁右側と上端縁左側に b 面から a 面側へ施されており、下端縁側が80度前後、上端縁側が65〜85度の角度を形成している。石材はチャートである。

第187図 3 は表面に自然面を部分的に残す横長の剝片を素材とした尖頭削器である。細部調整を a 面左側と素材剝片の末端に施しており、 a 面左側に施された刃部が尖端を作って交わっている。尖端部には磨滅痕がわずかに観察される。用いられている石材はデイサイト質凝灰岩である。

第187図 4 は表面に自然面を部分的に残す剝片を素材とし、両側縁に急角度の剝離を施した細部調整剝片である。両側縁とも80〜90度の角度を形成している。石材は凝灰質頁岩である。

第187図 5 は剝離面打面の剝片を素材とした細部調整剝片である。末端には表裏両面に損傷の剝離面を伴うツブレ状の敲打痕が観察され、敲打具として使用されたものと考えられる。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第187図 6 は表面の右側縁に自然面を残す剝離面打面の剝片を素材とし、a 面左側縁に細部調整が施された鋸歯縁石器である。細部調整部位の角度は75度前後である。石材として珪質頁岩が用いられている。

第187図７も鋸歯縁石器であり、表面の一部に節理面を残す剝離面打面の剝片を素材としている。ａ面右側縁にａ面からｂ面側へ細部調整を施し、70度前後の角度を形成している。石材は珪質凝灰岩である。

第187図８は剝片の１側縁に表裏両面からの不規則な剝離を施した削器である。ａ面左側縁に細部調整が施され、右側縁はｂ面側に剝離を施した後のａ面側への大きな剝離面が１面認められる。右側面と左側縁によって形成される尖端部にわずかな磨滅痕が観察される。流紋岩を石材としている。

第187図９は自然面打面の縦長の剝片を素材とした細部調整剝片である。素材の剝片は同時割れを起こしており、ｂ面左側面は素材剝片剝離時に主要剝離面とともに形成された面である。細部調整はｂ面の打面近くとその対辺に施されており、角度は60～75度である。末端の一部には微細剝離痕が観察される。石材は珪化凝灰岩である。

**第188図**には細部調整剝片と背つき石器を図示した。用いられている石材は１・２・５が流紋岩であり、３・６・７・９は珪化凝灰岩、４と８は珪質頁岩である。

第188図１は剝片の周囲の３分の２ほどに細部調整が施されており、ｂ面から表裏両面に施された剝離は厚みを減ずるためのものと考えられる。

第188図２は剝片の末端とｂ面右側縁にわずかな細部調整が施されている。

第188図３は表面に自然面を残す剝片を素材としており、ａ面の左側面は折りとり面である。細部調整は折りとり面からａ面側に認められ、さらに打面部分を除去するように表裏両面に施されている。ａ面右側縁の末端寄りには微細剝離痕が観察される。

第188図４は剝離面打面の剝片を素材とし、表裏両面の右側縁に錯向剝離状に粗い剝離が施されている。

第188図５は表面に自然面を大きく残す横長の剝片を素材としている。打面側の表裏両面に細部調整が施し、末端を折りとって上端と下端が平行する形態に整形されている。折りとり面からｂ面側にまばらな剝離が施されている。

第188図６は表面が自然面の剝片を素材としており、打面側は素材剝片剝離時の同時割れによって失われている。細部調整はａ面の上端縁から下端縁左側にかけて施されており、ともにｂ面からａ面側への剝離によるものである。

第188図７は剝片の１縁辺に表裏両面への細部調整を施して整形した背つき石器である。ａ面の上端縁が細部調整の施された部位であり、表裏両面の大きな剝離面によって形成される下端縁が刃部と考えられる。刃角は約40度であり、刃縁には微細剝離痕が残され、光沢がわずかに観察される。

第188図８は節理面を打面とし、ａ面の右側縁に自然面をわずかに残す剝片を素材としている。素材剝片にはａ面の打面左側から左側縁、そして裏面へとつながる潜在割れがあり、剝片剝離時に潜在割れの面も同時に形成されている。ａ面左側縁の末端側に不規則な剝離が施されており、50～60度の角度の縁辺が形成されている。細部調整の施された縁辺には使用によるものと考えられる磨滅痕が観察される。

第188図９は表面が自然面の剝片を素材としており、打面側とａ面左側縁は折りとられ、右側縁には粗い剝離が施されている。末端にはｂ面側から不規則な剝離が施されている。末端のｂ面側は磨滅し、にぶい光沢が観察される。

**第189図**１はａ面の上端縁とｂ面の右側縁に剝離を施した細部調整剝片である。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第189図２はチャート製の剝片の一部に裏面から表面側に剝離を施した細部調整剝片である。70度前後の角度が形成されている。

第189図３は剝片の表面の剝離面と剝離面を分ける稜上に打撃を加え、それによって得られた剝片に剝離を施した細部調整剝片である。ａ面の左右両側縁にわずかな細部調整が施され、55～65度の角度の縁辺が形成されている。石材は流紋岩である。

第189図４は剝離面打面の剝片の両側縁と末端に剝離を施した細部調整剝片である。剝離が粗く、ａ面中央の打面寄りに高まりを残していることから製作途中の失敗品と考えられる。流紋岩を石材としている。

第189図５は剥片の１側縁から末端にかけてまばらな剥離を施した細部調整剥片である。素材の剥片は剥片剥離時の同時割れによって打面側が失われている。細部調整の施された部位の角度は70～80度である。石材は流紋岩である。

第189図６～16は相対する縁辺に細部調整が認められるピエス・エスキーエである。用いられている石材は６と12～14が珪質頁岩であり、７は瑪瑙、８と９は流紋岩、10は珪質凝灰岩、11と16は珪化凝灰岩、15はデイサイトである。

ピエス・エスキーエには、上端縁と下端縁が対になり１対の細部調整が確認されるもの（６・７・10～13・15)、上端縁と下端縁、左右両側縁が対になり、２対の細部調整が認められるもの（８・９・16)、および14のように３対の細部調整が確認されるものがみられる。13は縦断面形が四辺形を呈しており、その対角線上すなわちｂ面上端縁に細部調整がみられ、その対縁のａ面下端縁に低い打撃角の剥離面が１面認められることからピエス・エスキーエの中に含めたものである。素材剥片の打面部は失われているものがほとんどであるが、６・９・12は剥離面打面の剥片を素材としており、14は自然面打面の剥片である。

**第190図**１は表面に自然面を残す流紋岩製の剥片を素材としたピエス・エスキーエである。上端縁と下端縁が対になり１対の細部調整が認められ、上端縁は両面細部調整である。

第190図２～９および第191図、第192図には石核を図示した。

第190図に図示した石核に用いられている石材は、２と５がチャートであり、３・７・８は流紋岩、４は安山岩、６は黒曜岩、９は珪質頁岩である。

第190図２はｂ面の上端側と左半および右半、さらにａ面を加え計４面の作業面をもつ石核である。ａ面が最も新しい作業面である。

第190図３は平坦な剥離面を打面として全周で剥片剥離作業を行っており、その結果、円錐形を呈している。

第190図４はａ面の右側面に残る自然面を除き、ほぼ全面を作業面としている。

第190図５はａ・ｂ・ｃの３面を剥片剥離の作業面とした石核である。他の面は自然面であり、原石はそれほど大きなものではない。また節理面も認められることから、大きな剥片を得ることはできなかったものと考えられる。

第190図６はａ面側で先行して剥片剥離作業を行い、それを打面にｂ面側への剥片剥離が行われている。ｃ面のほとんどは自然面であり原石はそれほど大きなものではないことから、大きな剥片は得られなかったものと考えられる。

第190図７は部分的に自然面を残す厚手の剥片を素材とした石核である。素材剥片の主要剥離面を打面にし、ａ面とその裏側の面を作業面として剥片剥離作業を行っている。その後、側面からｂ面を作業面とした剥片剥離作業が行われ、素材剥片の主要剥離面はわずかに残されるのみである。

第190図８はｂ面の一部に自然面が残されているが、ａ、ｂ両面とも、ほぼ全周からの剥片剥離作業が行われている。

第190図９にはａ面の左側面に自然面が部分的に残されている。剥片剥離作業が頻繁に行われ、ほぼ残核の状態である。最終的な作業面はａ面であるが、残された剥離面の観察から小型の剥片しか剥離されない状態であったものと考えられる。

**第191図**の石核に用いられている石材は、１・３・５が流紋岩であり、２はチャート、４は珪質凝灰岩である。

第191図１はａ面とｂ面が作業面である。ａ面では先行剥離面である上端面と下端縁および右側縁から剥片剥離作業が行われている。ｂ面ではａ面の剥離面を打面として、おもに左側縁と下端縁から剥片が剥離されている。最終的な剥離面はｂ面左側縁からの剥離によるものである。ｂ面の一部に自然面が残されている。

第191図２は平坦な剥離面を打面としてほぼ全周にわたって剥片剥離作業が行われているが、作業面は大きく３面

に分けられる。全体の形状は不整な円錐形を呈している。

第191図3は表面に自然面を大きく残す厚手の剥片を素材とし、素材剥片の主要剥離面を作業面としている。剥片剥離作業はa面の上端縁から行われ、その後、右側縁から剥片を剥離している。

第191図4はa、b両面に自然面が残されており、やや小さめの原石が用いられている。最も古い剥離面はa面の右側面である。その剥離面を打面として上端面と下端面の剥離を行い、さらに上下両端面を打面とした剥離作業がa面側に行われている。最終的な剥離面はb面右端の剥離面であり、a面の剥離面を打面としている。

第191図5はa、b両面に自然面を残しているから、分割礫を素材とする石核である。a面の分割面を打面としてb面側で剥片剥離作業を行い、その作業面を打面としてa面側で剥片を剥離している。

**第192図**1は片面に自然面を残す、大型で厚手の剥片を素材とした石核である。a、b両面が作業面であり、b面のほぼ全周から剥片剥離作業を行った後、b面を打面としてa面側の上端縁から右側縁にかけて剥片を剥離している。石材はデイサイトである。

第192図2は扁平な亜角礫を素材とした石核である。縁辺のやや角張った部分に打撃を加えb面側で剥片を剥離し、それによって得られた剥離面を打面としてa面側で剥片剥離作業を行っている。またa面右側縁の下端に1撃を加え、表裏両面に広がる剥離面が形成されている。この剥離面はa面を作業面とした剥離面に切られているが、b面の剥片剥離作業との新旧関係は不明である。石材には流紋岩が用いられている。

第192図3は表裏両面に自然面を大きく残す石核である。断面形が不整な隅丸三角形を呈する珪質凝灰岩の礫を素材としている。礫の長軸方向からの打撃によってa面側で縦長の剥片を剥離した後、その作業面を打面として礫を横に断ち切るような剥片剥離作業が行われ、横長の剥片を剥離している。

**第193図**には敲打痕や磨痕が観察される剥片と細部調整剥片を図示した。おもに敲打具として使用されたと考えられる石器である。用いられてる石材は1・4・12が珪質凝灰岩であり、2・3・5・6・8～11・14・16はデイサイト質凝灰岩、7・13・15はデイサイトである。大型板状石器に多用される石材であり、大型板状石器の破片の転用と考えられるものも認められる。

第193図1は末端に敲打痕が観察される剥片である。

第193図2は表裏両面への細部調整と折りとりによって整形された細部調整剥片である。a面右側面の折りとり面と左側縁によって形成される尖端部に敲打痕が認められる。

第193図3は折りとりとわずかな細部調整によって整形されており、上下両端の尖端部とa面右側縁に損傷の剥離面を伴う敲打痕が観察される。

第193図4は表裏両面の下端縁に敲打痕が認められ、b面の敲打痕は平坦な面を形成している。

第193図5の上端面とa面右側面は1回の加撃によって同時に折りとられた面である。a面下端縁には磨痕が認められ、b面側には敲打痕が観察される。

第193図6は折りとりによって平面三角形に整形された剥片であり、頂点の1ヶ所に敲打痕とそれに伴う損傷の剥離面が残されている。

第193図7は表面に自然面を部分的に残す剥片を素材とし、まばらな剥離が施された細部調整剥片である。素材剥片の末端と打面側に敲打痕が認められ、左右両端の尖端部には磨痕が観察される。

第193図8は折りとりによって四辺形に整形された剥片である。ほぼ全周に敲打痕が認められ、a面の右側縁の上端寄りと左側縁、および表裏両面の上端縁に著しい。また、両面に擦痕を伴う磨り面が観察され、b面右側縁と下端縁を分ける角とその対角線に位置する角に顕著である。

第193図9の表裏両面にあまり明瞭ではないが光沢が観察され、b面に右上がりの擦痕を伴う磨り面が認められることから大型板状石器の破片を転用したものと考えられる。a面には自然面が残されている。上端面と両側面を主

に折りとりによって整形し、ａ面の左側縁下端寄りと上端縁右側に敲打痕が残されている。

第193図10は折りとりによって四辺形に整形された剝片であり、３ヶ所の角に敲打痕が認められる。

第193図11は折りとりによって整形され、折り面と折り面によって形成される尖端部に敲打痕が認められる。また、ａ面左側面とａ面を分ける稜線上およびｂ面左側面とｂ面を分ける稜線上にも敲打痕が残されている。ａ面左側縁とｂ面左側縁には敲打に伴う損傷の剝離面が観察される。

第193図12は剝離面打面のわずかに細部調整を施した剝片の末端に著しい敲打痕が残され、敲打痕はｂ面の打面の両端にも観察される。

第193図13は表面に自然面を部分的に残す剝片を素材とし、主要剝離面の打面側に粗い剝離が施された細部調整剝片である。末端の両端に明瞭な敲打痕が認められる。

第193図14は厚手の薄片を素材とし、折りとりによって平面三角形に整形されている。敲打痕は両側面とａ面によって形成される鋭角な頂点に明瞭に認められ、その周囲には敲打に伴う損傷の剝離面が残されている。敲打痕はａ面の左側縁にもおよんでいる。ｂ面の両側縁が収斂する部位には右上がりの擦痕を伴う磨滅痕が観察される。ｂ面右側縁のまばらな剝離面は敲打による損傷と考えられる。

第193図15はａ面の上端縁と左側縁から下端縁にかけて著しい敲打痕が認められ、損傷の剝離面を伴っている。

第193図16は平面三角形に整形されており、その１ヶ所の角に表裏両面におよぶ顕著な敲打痕が残されている。敲打痕はｂ面右側縁と上端面の中央にも観察される。さらに上端面と表裏両面を分ける稜線上にも損傷の剝離面を伴う敲打痕が認められる。

**第194図**１は石鏃である。表面に自然面を部分的に残す剝片を素材とし、左右両側縁と基部を折りとりと細部調整によって平面四辺形に整形されている。刃部は素材剝片の主要剝離面と表面の剝離面によって形成される縁辺に、表裏両面への浅い細部調整を施して作り出されている。刃角は60～70度である。基部の両端と刃部の一端に磨滅痕が観察される。石材はデイサイトが用いられている。

第194図２はａ面右側の部分を欠損した後、折れ面から表裏両面にわずかな剝離が施された細部調整剝片である。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第194図３はａ面左側を欠損しているが、表裏両面に細部調整を施して平面三角形に整形された削器である。ａ面の下半には磨滅痕が観察される。用いられている石材は大型板状石器に多用されるデイサイト質凝灰岩である。

第194図４は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。両側面と上端面を折りとり、ａ面右側縁に表裏両面への細部調整を施して整形を行っている。刃部には刃こぼれと考えられる剝離面が残されており、刃縁近くに刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が部分的に観察される。

**第195図**と第196図および第197図１には板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器を図示した。

第195図１は左右両側縁を折りとり、さらに細部調整を施して平面三角形に整形されている。表裏両面の刃部には光沢が観察され、器体の中央寄りまで広がっている。ａ面の上端寄りと右側縁の一部および刃部左端には敲打痕が認められ、敲打具としても使用されている。

第195図２のａ面左側面は自然面であり、上端は細部調整によって弧状に整形されている。刃部は主としてａ面側に細部調整を施し、外弯する形態に整えられている。刃部の一端と１側縁を欠損する。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察され、細部調整の剝離面をも覆っている。

第195図３は表裏両面に自然面を残す平面三角形の素材の２辺に細部調整を施し、整形されている。細部調整は、ａ面右側縁にはｂ面側から施され、左側縁はｂ面側に施している。上端縁は表裏両面の細部調整である。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察され、刃縁の離面の大部分は光沢を切っている。ほかの大型板状石器に比べ厚手である。

第195図４のａ面左側面は両極剝離によって折りとられた面である。浅い細部調整によって周縁の整形が行われているが、上端面は自然面である。光沢は明瞭ではない。

第195図５は左右両側縁と刃部を欠損しているが、残存する刃部に光沢が観察されることから大型板状石器と判断した。上端縁は表裏両面への細部調整によって整形されている。

**第196図**１は鋭い１縁辺を残し、他の３辺を折りとって四辺形に整形している。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察される。

第196図２は自然面打面で表面も自然面の剝片を素材としている。ａ面右側面と上端面は折りとり面であり、わずかに細部調整によって整形されている。刃部の表裏両面には光沢が観察され、ｂ面の光沢は明瞭である。

第196図３は３片が接合した資料であるが、刃部を部分的に欠損している。折りとりとａ面左側縁からの細部調整によって整形されており、刃部の表裏両面に顕著な光沢が観察される。

第196図４はａ面の刃部側に自然面を残し、左側面と上端面を折りとりと細部調整によって整形している。ａ面右側を欠損する。ａ面の刃部には刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面があり、部分磨製の大型板状石器である。ｂ面の刃部には磨滅痕が観察され、刃部の表裏両面には光沢が認められる。ｂ面の上端縁寄りには右上がりの擦痕を伴う磨り面が残されている。

第196図５はａ面左側縁に自然面を残しており、刃部にまばらな剝離が施されている。光沢は明瞭ではない。

**第197図**１は表裏両面に部分的に自然面を残しており、折りとりと細部調整によって整形されている。細部調整は刃部と１側縁に施され、他の縁辺は折りとりによって形成された面である。ａ面の刃部寄りに右下がりの擦痕を伴う磨り面が部分的に観察される。ａ面上半右側とそれに対応するｂ面側は焼けて黒変しており、火ハネの面も表裏両面に認められる。

第197図２～８は玉類とその未成品である。

第197図２～４は碧玉を石材とする管玉であり、穿孔はいずれも両端から行われている。２は今回の調査によって出土した管玉の中で最も細く小さなものである。３と４の側面の研磨痕下には整形時の剝離面が部分的に残されている。

第197図５はチャートを石材とした管玉であり、穿孔は両端から行われている。側面の研磨痕下には整形時の剝離面が部分的に残されている。孔の内側には紐ズレの痕跡が観察される。

第197図６は珪化凝灰岩を石材とした小玉である。全体的に風化しており、整形の痕跡などの詳細な観察は困難である。厚みは均等ではなく、ａ面側が膨らんでいる。

第197図７は碧玉質材を石材とした小玉である。端面は一方が平坦であるのに対して、もう一端は中央の孔付近が最も高く作られている。

第197図８は管玉の未成品である。珪化凝灰岩を石材としている。側面の研磨による擦痕はほぼ長軸方向であるが、やや右下がりのものが多く、両端に近い部位では整形時の剝離痕や短軸方向に近い右下がりの擦痕が部分的に観察される。両端面にも研磨に伴う擦痕が認められる。両端から行われている穿孔は貫通しておらず、７～８㎜程度の深さである。

第197図９は軟質の凝灰岩を石材とした楕円形の石製品であり、短軸の１端を欠損している。長軸中央に断面形がＶ字状を呈する溝状の彫り込みが残され、一周している。溝状の彫り込みに隣接して平行する線刻が認められ、何度か切り込みを入れて断面Ｖ字形の溝に仕上げたものである。

第197図10～12は岩を石材とした砥石である。いずれも風化による表面の剝落が著しい。10の磨痕には顕著な部分と程度の弱い部分が観察される。11は２面の中央に磨痕が残されている。12は表裏両面および両側面、上下両端面の各面に磨痕が部分的に残されており、ａ面では弯曲した面を形成している。

第197図13は不整楕円形の礫を素材とした石皿であり、1側縁を割り取って整形が行われている。1面の中央に弱い磨痕が観察される。石材はデイサイト質凝灰岩である。

**第198図**1は表裏全面が整形された石皿である。長軸の短い円形に近い楕円形を呈している。中央が凹められ周囲に縁が作り出されているが、長軸の1端には縁は作られていない。用いられている石材は安山岩である。

第198図2と3は礫の表裏両面に磨痕が残された礫石器である。

第198図2のb面中央には磨痕が残されているが、磨痕は凹んだ自然面には観察されず、その範囲は不整形である。a面の磨痕は礫の平坦な部位に部分的に残されている。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第198図3は不整円形を呈する扁平な安山岩の礫を素材としている。表裏両面の磨痕はいくつかの面を形成しており、面と面の境は明瞭であり、稜が確認される。表裏両面ともに焼けてわずかに黒変している。

**第199図**の1と2は礫の両面に磨痕が残されており、3～5は礫の1面にのみ磨痕が残された礫石器である。用いられている石材は1と5が安山岩であり、2と4はデイサイト、3は玢岩である。

第199図1は楕円形を呈する扁平な礫を素材としている。表裏両面に自然面の凹んだ部分があり、それを除いて広く、顕著な磨痕が残されている。

第199図2は長楕円形を呈する断面隅丸三角形の礫を素材とし、平坦なb面とa面右側の面に弱い磨痕が観察される。

第199図3に残されている磨痕は弱いものであるが、右側に光沢が観察される部分があり、光沢には短軸方向の擦痕を伴っている。

第199図4は礫の片面に磨痕が部分的に残されており、その範囲の長軸方向に擦痕が明瞭に観察される。また、磨痕の観察される中央部にはわずかに溝状に凹んだ部分が認められる。

第199図5は多孔質の礫を素材としており、その剝片面に礫の長軸方向に近い擦痕がわずかに観察される磨痕が残されている。

第199図6～10および**第200図**1～6には球状敲石もしくはそれに類似する敲打痕の残された石器を図示した。石材は第199図6・7・10および第200図3が流紋岩であり、第199図8と第200図1・2・4・6は珪質凝灰岩、第199図9と第200図5はデイサイトである。

第199図6は自然面を大きく残すa面の左側縁と下端縁に敲打痕が観察され、敲打痕の周囲には損傷の剝離面が認められる。

第199図7は剝離面を部分的に残していることから石核からの転用の可能性が考えられる。敲打痕が広く観察され、とくにb面は大部分が敲打痕に覆われている。

第199図8は平面三角形のやや厚い剝片を用いたものと考えられ、3箇所の頂部に損傷の剝離面を伴う著しい敲打痕が認められる。a面の下端縁には敲打痕が連続して観察される。

第199図9は球状敲石が頻繁な敲打によって破損し、上端面とb面が形成されたものと考えられる。a面全体に敲打痕が広がっており、敲打痕はb面の周縁にも観察されることから、破損後も敲打作業に使用されていることがわかる。

第199図10はa・b両面の平坦部分と上下両端の平坦面を残し、ほぼ全周に著しい敲打痕が認められ、a面左側縁とb面右側縁の敲打痕には損傷の剝離面を伴っている。

第200図1は礫を素材として敲打作業を行い、頻繁な敲打によって破損したものと考えられる。破損後もさらに敲打作業に用いられており、b面には敲打に伴う損傷の剝離面が観察される。

第200図2は礫の端部を素材とし、a面には自然面が残されている。b面では端縁のほぼ全周に敲打痕が認められ、敲打に伴う損傷の剝離面が観察される。a面では敲打によって自然面の稜線上に顕著なツブレが観察される。

第200図３はやや角張った礫を素材として敲打作業に使用されており、角張った部分全体に敲打痕が観察される。剝離面は敲打に伴う損傷によるものと考えられる。

第200図４は礫の周縁に著しい敲打痕が観察され、表裏両面に敲打に伴う剝離面が残されている。ａ面の長軸の一端には敲打痕を覆う磨痕が観察され、長軸方向の擦痕を伴っている。

第200図５は礫の周縁のほぼ全周に敲打痕が残されており、敲打に伴う損傷の剝離面も認められる。

第200図６は礫の長軸の両端と短軸の一端に明瞭な敲打痕が観察される。敲打による損傷の剝離面を伴っている。

第200図７～12は敲打痕が残された礫石器である。用いられている石材は７が珪質凝灰岩であり、８と11は凝灰岩、９と12はデイサイト、10は安山岩である。

第200図７は細長い礫を素材とし、長軸の一端に敲打痕が残されている。もう一端を欠損する。

第200図８は礫の先端と１側縁および折れ面の３ヶ所に敲打痕が残されており、折れ面の敲打痕は側縁と折れ面によって形成される角を利用した敲打作業によるものである。折れ面にみられる敲打痕はもっとも著しく、損傷の剝離面を伴っている。

第200図９は卵形の礫を素材としている。長軸の両端が敲打作業に使用されており、表裏両面と両側縁に敲打痕が残されている。敲打によって破損が生じても更に敲打作業が続けられており、使用の頻度は非常に高い。ａ面の両端とｃ面の一端の敲打痕には磨滅痕と条線状の擦痕が観察されることから、石器製作時に使用され、擦り落としの作業も行われたものと考えられる。

第200図10は礫の長軸の両端に敲打痕が残されており、敲打痕はやや角張った側縁の稜線上に集中している。

第200図11は断面隅丸三角形の不整楕円形を呈する礫を素材としており、長軸の両端に敲打痕が残されている。一方は表裏両面と１側縁に敲打痕が観察され、残る一方では１側縁にのみ、わずかに残されている。

第200図12は礫のやや角張った縁辺の３ヶ所に敲打痕が残されている。

**第201図**には敲打痕と敲打による破損の剝離面をもつ礫石器を図示した。用いられている石材は１が珪質頁岩であり、２と７は珪質凝灰岩、３は凝灰岩、４はデイサイト、５は珪化凝灰岩、６は瑪瑙、８と９は玢岩である。

第201図１は扁平な礫の長軸の一端に敲打痕が観察され、残る一端には敲打による損傷と考えられる剝離面が認められる。ａ面中央には弱い敲打痕が残されている。ｃ面は大きな剝離面が形成されるほど使用されており、ｄ面にも使用による損傷の剝離面が認められる。

第201図２は礫の１側縁の一端に敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が残されている。逆側の端部は破損しており、敲打による破損の可能性が考えられる。

第201図３は長軸の両端に敲打作業による破損面が認められ、ａ面とｃ面を分ける稜線上には敲打痕が観察される。ａ面とｃ面には敲打に伴う損傷の剝離面が残されている。ｂ面の上端にも敲打痕がわずかに観察される。

第201図４は割れた礫片を素材とし、自然面であるａ面と割れ面を分ける稜線上に敲打痕が残されている。敲打痕はａ面の右側縁から上端縁にかけてとｃ面の上端に認められ、ａ面の敲打痕は損傷の剝離面を伴っている。

第201図５は扁平な礫を素材とし、側縁の２ヶ所に敲打痕と敲打に伴う損傷の剝離面が残されている。

第201図６はａ面の左側面の一部を除いたほぼ全面に爪形の潜在割れが認められ、全体が敲打作業に使用されたものと考えられる。

第201図７は割れた礫片を素材とし、両側縁と上下両端に敲打痕が残されている。ａ面の上端の尖端部と下端縁に顕著な敲打痕が観察され、損傷の剝離面を伴っている。ａ面左側縁には敲打に伴う損傷の剝離面が認められ、右側縁中央の上端寄りにもわずかな敲打痕が残されている。

第201図８は平面隅丸三角形を呈する礫を素材としており、図示した面の上端にわずかな敲打痕が観察される。剝離面は敲打による損傷と考えられる。一端にみられる剝離面も敲打による損傷であり、剝離面の縁辺に敲打痕がわ

ずかに残されている。

第201図９は割れた礫剝片を素材とし、その縁辺に敲打痕が観察される。敲打痕はａ面右側縁と下端縁、および右側縁と割れ面によって形成される尖端部に残されている。

**第202図**には敲打痕が残された礫石器を図示した。敲打痕に磨痕が複合して観察されるものもみられる。用いられている石材は１・２・５・８・９がデイサイトであり、３は安山岩、４と６は玢岩、７は珪質凝灰岩である。

第202図１は片面と１側縁に敲打痕が部分的に残されている。一端を欠損する。

第202図２は断面が方形を呈する細長い礫を素材とし、長軸の両端に敲打痕が残されている。敲打痕はいくつかの面に分けられ、それぞれが平坦面を形成している。

第202図３は礫の長軸の両端に大きな剝離面があり、ｃ面上端右側の面は敲打による破損面と考えられる。上下両端に敲打痕が残されており、ｂ面右側縁にも敲打痕が認められる。ｂ面の左側縁の剝離面は敲打による損傷と考えられる。

第202図４は長軸の両端に敲打痕と敲打による破損の剝離面が残されている。特に上端の敲打痕は著しく、ツブレ状を呈しており、各面に損傷の剝離面が認められる。ｃ面の中央にもまばらな敲打痕が観察される。

第202図５は長軸の一端と両側縁の一端が敲打作業に使用されている。ａ面の両側縁の一端には著しい敲打痕が残されており、損傷の剝離面を伴っている。ｃ面の上端には敲打による破損の剝離面が認められる。ｃ面の下端寄りの中央に敲打痕が認められ、短軸方向の線状の凹みが数条観察される。この線状の凹みは、石器製作の際に石核の縁辺を擦り落とした時に生じる痕跡に類似している。

第202図６は両側面の両端とａ面の一端に敲打痕が残されている。ｃ面の剝離面の端部付近とａ面の敲打痕には礫の長軸方向に近い擦痕を伴う磨り面が認められる。

第202図７は断面隅丸三角形の、一端がわずかに広い長楕円形を呈する礫を素材としている。長軸の両端とａ・ｂ・ｃ各面の中央部に敲打痕が残されている。一端には敲打によって破損した剝離面が認められ、その剝離面にも敲打痕が観察されることから、破損した後も敲打作業に使われている。ｂ面にみられる剝離面も敲打による損傷と考えられる。

第202図８はやや幅のある礫を素材としており、敲打痕と磨痕が複合して残されている。敲打痕は長軸の一端とａ面中央の端部寄りに認められ、磨痕は表裏両面に観察される。

第202図９は楕円形の礫を素材とし、ａ面中央と側縁の対角線上の４ヶ所に敲打痕が残されている。表裏両面には敲打による損傷の剝離面が認められる。

**第203図**は磨痕、敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が複合して残された礫石器である。用いられている石材は３が安山岩であり、他の礫石器はすべてデイサイトである。

第203図１は楕円形の礫に磨痕と敲打痕が複合して残された礫石器である。磨痕は表裏両面に認められ、ａ面には礫の長軸方向の擦痕を伴っている。敲打痕は両側縁とｂ面中央に観察され、側縁の敲打痕は面を形成しているが、損傷の剝離面は伴っておらず、対象物を弱く敲いたものと考えられる。

第203図２は表裏両面の中央に敲打痕が残され、ａ面に広い磨痕が観察される。ａ面の上端の約３分の１程に焼けて変色した部分が認められる。

第203図３は磨痕と敲打痕と凹痕が複合して残されている礫石器である。磨痕は両側縁とｃ面に観察され、敲打痕は素材礫の長軸の一端に認められる。凹痕はａ面の中央に残されており、礫表面の剝落によって一部欠損している。

第203図４は磨痕と敲打痕が複合して残されている礫石器である。敲打痕は素材礫の長軸の一端と表裏両面の中央付近、両側縁に認められる。側縁の敲打痕はａ面では突出した部分とその下端寄りに残され、ｃ面では中央部を除く両端に観察される。磨痕はｄ面の左半にのみ残されている。ｂ面中央は焼けて黒変している。

第203図５は表裏両面に敲打痕が残され、より弯曲度の強い突出した片面に広い磨痕が観察される。

第203図６は楕円形の礫を素材とし、表裏両面に磨痕が観察され、１側縁に敲打痕が残されている。ａ面の上端寄りに平坦な面を形成する磨痕があり、中央部の磨痕との間に緩やかな稜が認められる。敲打痕はａ面の右側縁に残されている。平坦な面を形成し、ａ面の平坦な磨痕寄りに広がっている。表裏両面の磨痕下に敲打痕が観察されるが、位置は表裏両面で対応していないが、長軸の端部からの距離はほぼ一致している。ａ面の下端からｂ面の下半にかけて焼け面が認められる。

第203図７はａ面の中央に凹痕が認められ、ｂ面中央には敲打痕が残されている。ａ面の凹痕の周囲には磨痕が観察されるが、素材礫の表面の風化が著しく、もっと広範囲に広がっていた磨痕の残存した部分と考えられる。

**第204図**は磨痕、敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が残された礫石器である。用いられている石材は１が玢岩であり、２～６はデイサイト、７と９は流紋岩、８は珪質凝灰岩である。

第204図１は上下両端を剝離によって整形し、剝片面の中央に凹痕が残されている。凹痕の周囲には長軸方向の擦痕を伴う磨痕が認められる面があり、その面の横断面は大きく開いたＵ字形を呈している。ｂ面にも磨痕が観察されるが、磨痕の程度は弱い。

第204図２は表裏両面と両側面の計４面に凹痕が残された軟質の石材を用いた礫石器である。ａ面と両側面の凹痕の間と、ｂ面とｃ面の凹痕の間にもわずかな凹みが認められる。また、素材礫の長軸の一端には敲打痕が残されており、ａ面には敲打に伴う損傷の剝離面が観察される。

第204図３はａ面に凹痕、ｂ面に敲打痕が残されている。

第204図４は一端が広がる楕円形の礫を素材とし、若干、広い端部に寄った位置の表裏両面中央部と側縁に敲打痕が残されている。

第204図５と６は素材礫の形態は異なるが、平坦な１面の中央に敲打痕が残されている。６の一端は焼けて破損している。

第204図７は扁平な礫を素材とし、表裏両面の中央と一端の両側縁に敲打痕が残されている。ｃ面の敲打範囲内には、素材礫の短軸方向に連なって敲打痕が集中する部分があり、７ヶ所確認される。

第204図８は円形に近い楕円形の礫を素材とし、表裏両面と両側縁に凹痕が残されている。表裏両面とａ面右側縁の凹痕は深く明瞭であるが、左側面では緩やかに凹み、それほどの深さはない。石材は軟質で風化が著しく、マンガンが多く付着しているため詳細な観察は困難である。

第204図９は表裏両面のほぼ中央部に凹痕が残されている。ａ面の凹痕は中央部がもっとも深く、その右斜め上にも深い部分か認められる。ｂ面の凹痕はａ面ほど深くはないが、もっとも深い部分は素材礫の長軸方向に長く、２ヶ所観察される。

## ４．第Ｖｂ層出土遺物

遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

**［縄文土器］**

縄文土器は４点を図示した（第３分冊第10図１～４）。２は鉢で沈線や刺突で羊歯状文を浮彫風に描いている。３は深鉢で３本からなる弧状沈線文を連続して描いている。４は壺で幅広で深い並行沈線に粘土粒を張り付けて沈線を途切らせており、工字文になると思われる。胴部に縄文を施文している。

**［弥生土器］**

弥生土器は33点を図示した（第３分冊第134図～第137図）。土器の遺存状況は不良である。ほとんどの土器は摩滅・

剝落のため、器面観察が困難であった。器種は壺・高坏・鉢・甕・蓋・ミニチュア土器がある。

第134図は壺である。口頸部の形態は外反するもの(1)、頸部は直立し、屈曲して口縁部は外傾あるいは外反するもの(4・8)、頸部は内傾し、屈曲して口縁部は外反するもの(2・3・5～7)がある。口縁部形態は平縁である。調整は口縁部がヨコナデ調整、外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様は並行直線文が施されているものがある。4は口縁部に穿孔がある。

第137図1～4は高坏である。1・2は坏部で外傾するもの(1)と内弯するもの(2)とがある。口縁部形態は小波状、山形突起を付しているものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様は変形工字文(2)、連弧文(1)が描かれる。1は縄文が施文されているが、手法については特定できなかった。内面は口縁部に直線文が描かれている。3・4は脚部である。3は下半が弱く弯曲しながら開いている。4は歪みが目立つ。調整は外面の文様内はミガキ調整が施されている。内面は3がナデ調整、4は摩滅のため不明である。文様は層波文(4)、連弧文(3)がある。3の文様内の縄文は充塡手法により施文される。4も縄文が施文されているが、手法については特定できなかった。

第137図5～9は鉢である。逆台形状のものと俯瞰形が楕円形のもの(9)とがある。逆台形状のものには内弯するもの(6・8)と外傾するもの(5・7)とがある。口縁部形態は平縁、突起を付したものがある。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。5は口縁部にヨコナデ調整、5と9の内面はナデ調整が施されている。底部は木葉痕がついている。文様は層波文(8)、変形工字文(6・7)がある。8は縄文が施文されているが、手法については特定できなかった。内面文様は口縁部に直線文を施したものがある。6・9は口縁部に穿孔を持つ。5は斜めに強く開くことから蓋の可能性がある。

第135図～第136図は甕である。胴部最大径は上部にあり、胴部上端でくびれ、口縁部は外反する。口縁部形態は平縁である。外面調整はハケメ調整・ヨコナデ調整を多用している。ハケメ調整は口縁部から胴上部にかけて斜めや横方向に、胴部は縦方向に施すことが多い。ヨコナデ調整は微細な条痕が紆曲せず直線的に走る。内面調整はミガキ調整を施している。文様は胴部上端に列点刺突文が施され、無文のものもある。胴部に縄文を施文している。

第137図10・11は蓋である。伏鉢形でつまみ部を持たず、天井部が平坦なものである。10の側面は外反している。11は上部がくびれたようなになり、第124図1、第127図17、第130図2などの蓋に類似すると推定した。調整は10は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。11は外面は摩滅のため不明、内面はナデ調整である。天井部はは木葉痕がついている。11の文様は体部上端に2本からなる並行直線文、下半は層波文と思われる。

第137図12はミニチュア土器である。尖底のもので、内外面ともナデツケ調整である。

**[土製品]**

土製品は4点を図示した(第3分冊第153図4・44・46・53)。4はスプーン形土製品で、掬い部の一部分と柄部の端部が欠損している。44・46は土器片製円盤で、土器の破片を素材としている。円みのある形状で、円盤の中央に孔が穿たれている。53は円筒形を呈し、上・下部に欠損箇所がある。器面には長軸方向に沈線が施されている。

**[石器・石製品類]**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、掻器、削器、ノッチ、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、小玉、砥石、球状敲石、礫石器、礫片などである。第4分冊第162図から第171図に主な石器・石製品を図示した。

**第162図**1～3は石庖丁の破損品であり、1は成品、2、3は未成品である。

第162図1は器体中央の背部側が残存しており、2つの紐孔も部分的に確認される。研磨は弱く、整形時の剝離痕が明瞭に残されている。紐孔は回転によって穿孔されており、穿孔前の敲打による窪み部形成は行われていない。a面左側の紐孔には著しい磨滅が認められる。

第162図２は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整の段階まで製作作業が進行した未成品である。敲打痕は、ａ面のほぼ全面に認められるが、ｂ面では一部分にわずかに確認されるのみである。

第162図３は剝離による整形、敲打による器体の調整、さらに敲打による窪み部形成の段階を経て、紐孔の回転穿孔まで製作作業が進行している。器体に施された敲打は部分的で、ｂ面ではまばらに観察される程度である。仕上げの研磨は施されておらず、刃部も研ぎ出されていないことから、未成品と考えられる。

用いられている石材は１と２が粘板岩、３は結晶片岩である。

第162図４は輝緑岩を石材とした太型蛤刃石斧である。全体的に表面の風化が著しく、詳細な観察は困難である。最大幅は基部中央の刃部寄りに位置する。断面の形状は楕円形を呈し、明瞭な側面は作られていない。基端幅は最大幅の約３分の１程度であり、基部には製作時の剝離痕が残されている。刃部は弧状を呈している。

第162図５と６は扁平片刃石斧である。平面形は側縁がわずかに外弯する台形状を呈しているが、５のａ面左側縁は直線的である。ともに側面が形成されているものの、平坦ではなく、膨らみをもった側面である。

第162図５のａ面の研磨面下には整形時の剝離痕が明瞭に残されており、研磨痕には長軸方向に近い右下がりの擦痕を伴っている。ｂ面の基端寄りにも剝離面を切る研磨痕が観察されるが、それに対して刃部の剝離面は研磨面を切っており、刃部再生のための調整の剝離と考えられる。また、両側面の中央部やや基端寄りとａ面中央に、にぶい光沢が観察される。着柄にかかわる痕跡と考えられる。

第162図６の両主面の研磨面下には側縁寄りに剝離痕が認められ、研磨痕には擦痕を伴っている。擦痕はａ面では長軸方向に近い右下がりであるのに対して、ｂ面では短軸方向に近い右下がりとなっている。また、ａ面に作られた刃面には長軸方向の擦痕が観察される。刃部は弧状を呈し、ｂ面側にも刃面が作られていることから両刃に近い形態になっている。ａ面中央には着柄にかかわるものと考えられる、にぶい光沢がわずかに観察される。

用いられている石材は５がデイサイト質凝灰岩であり、６は珪化凝灰岩である。

**第163図**は石斧の破損品と未成品である。

第163図１は刃部を欠損する、いわゆる定角式石斧であり、基端面を作り出していない尖基の石斧である。最大幅は刃部にあったものと考えられ、基部の断面形状は平坦な側面をもつ凸レンズ形を呈している。研磨面下には敲打痕が認められ、研磨面には長軸方向もしくは右下がりの擦痕が部分的に観察される。石材はデイサイト質安山岩が用いられている。

第163図２は基端および刃縁を欠損する両刃の石斧である。全体的に風化が著しく詳細な観察は困難である。節理面による割れ面で接合している。最大幅は基部の刃部寄りにあり、断面の形状は側面をもつ凸レンズ形を呈する。刃縁の欠損も著しいが、弧状を呈していたものと考えられる。石材は斑糲岩である。

第163図３は太型蛤刃石斧の主面片側の破片である。刃部側からの力によって破損しており、使用による破損と考えられる。研磨面下に敲打痕が観察される。石材はデイサイト質安山岩が用いられている。

第163図４は基部の基端側が残存する石斧である。扁平片刃石斧と考えられる。剝離による整形の後、研磨が施されている。両側面および基端面の研磨はていねいであるが、両主面には高い部分にわずかに施される程度である。ａ面左側に自然面が残されており、自然面と剝離面を分ける稜線上の基端寄りに研磨痕が認められる。ｂ面には素材剝片の剝離面が大きく残されており、周縁にのみ研磨が施されている。両主面および両側面の研磨面には右下がりの擦痕が観察される。側面は平坦ではなく膨らみをもち、ａ面右側面は長軸方向の２面で形成されている。２面の研磨面にみられる擦痕の方向はともに右下がりであるが、角度の異なった擦痕である。石材は黒色頁岩である。

第163図５は石斧の未成品の接合資料である。破損面での接合であり、剝離による整形の後、敲打が施された段階で破損したものと考えられる。破損ののち大きく残存した側の破損面には剝離がわずかに施されており、製作作業を継続しようとした可能性が考えられる。用いられている石材は黒色頁岩である。

第163図６は斑糲岩を石材としたノミ形石斧の未成品である。剝離による整形の後、敲打による調整を経て、部分的に研磨が施されている。

**第164図**には石鏃と石錐を図示した。

第164図１～12は石鏃である。すべて有茎の石鏃であり、器体のほとんどは細部調整による剝離面に覆われている。素材剝片の剝離面は、確認できるものでも片面の中央にわずかに残存するのみであるが、12では表裏両面の中央に認められ、５の表裏両面には大きく残されている。５の細部調整は茎部の作出を除き、素材の形状をそれほど大きく改変するものではない。５以外の石鏃は茎部を作り出した後、身部の整形を行っている。身部の側縁形態は、わずかに外弯するものも認められるが、ほとんどが直線的な形態である。石材は６および10～12が珪化凝灰岩であり、１と８は瑪瑙、２と７はデイサイト質凝灰岩、３と５は珪質頁岩、４と９は流紋岩が用いられている。

第164図13～17は石錐である。用いられている石材は13～16が珪化凝灰岩であり、17は流紋岩である。

第164図13の基部は粗い細部調整によって整形されており、基部と尖端部の境は明瞭である。尖端部は両側縁ともａ面の後、ｂ面側への細部調整によって作り出されており、断面形は菱形を呈する。

第164図14は表面の一部に自然面を残す剝片を素材とし、素材剝片の打面側に尖端部を作り出している。尖端部と基部との境はなく、尖端部は基部と連続する細部調整によって作出されている。尖端部の断面形は扁平で不整な六角形を呈している。基部と尖端部の細部調整は両側縁ともｂ面の後、ａ面側に施されている。

第164図15と16は尖端部と基部との境のない棒状を呈している。15の基端面は側縁の細部調整によって切られており、欠損面ではない。断面形は菱形を呈するが、ａ面中央に明瞭な稜線が認められるのに対して、ｂ面の中央部は緩やかに外弯している。尖端部には使用による磨滅痕が観察される。16はａ面の基端にわずかに自然面が残されており、表裏両面の中央には素材剝片の剝離面が認められる。側面観は尖端部側が弯曲している。尖端部の断面形は扁平な菱形を呈している。ａ面左側縁にはａ面の後、ｂ面側に細部調整が施されており、右側縁はｂ面の後、ａ面側への細部調整によって整形されている。

第164図17は表面の一部に自然面を残す剝片を素材としている。素材剝片の打面側と右側を表面から折りとって、打面側の折りとり面と素材の末端によって形成される鋭角な部位に細部調整を施して尖端部を作出している。尖端部と基部の境は明瞭ではない。細部調整はａ面右側縁では折りとり面からａ面側に施され、左側縁ではａ面の後、ｂ面側に施されている。また、右側面の尖端部にはａ面からの剝離が１面確認される。

**第165図**１は表面の一部に自然面を残す剝離面打面の剝片を素材とした縦型石匙である。素材剝片の打点を中心につまみ部が作り出されている。つまみ部は、ａ面左側はａ面ののちｂ面側に、右側はｂ面ののちａ面側に剝離を施して作出している。つまみ部以外の調整は末端の折れ面にａ面からｂ面側に急角度の剝離が加えられているのみであり、両側縁への調整はみられない。石材は珪質頁岩が用いられている。

第165図２は瑪瑙を石材とした削器である。横長の剝片を素材としているものと考えられる。ほぼ全周に細部調整がみられるが、ａ面右側面には素材の平坦な面が残されている。細部調整によって形成された左側縁の角度は80～85度であり、上下両端は95度前後である。

第165図３は剝片の末端に弧状の刃部を作り出した掻器である。刃部は表裏両面からの剝離によって作出されており、刃角は60～65度である。石材はデイサイトである。

第165図４はａ面のごく一部に自然面が残されており、横長で剝離面打面の剝片を素材としている。打面から表裏両面に厚みを減じるためと考えられる剝離が施され、バルブは除去されている。素材剝片の末端と左右両側縁に施された細部調整によって形成された角度は、末端が80～85度であり、両側縁は60～65度である。石材は瑪瑙が用いられている。

第165図５は横長の剝片を素材とした削器である。素材剝片の打面は細部調整によって失われており、末端はａ面

中央から右側にかけてヒンジフラクチャーとなっている。細部調整は上端縁と下端縁のａ面右側に施されており、その角度は65～75度である。また、ａ面下端縁左側には微細剥離痕が観察される。石材は流紋岩である。

第165図６は表面に自然面を残す剥離面打面の横型剥片を素材とした細部調整剥片である。素材剥片の末端はヒンジフラクチャーとなっている。細部調整によって形成された角度は80～95度である。石材として珪質頁岩が用いられている。

第165図７は流紋岩を石材とする剥離面打面の剥片を素材とした細部調整剥片である。ａ面の右側面は自然面であり、ａ面上端とｂ面末端の左側に部分的な細部調整が施されている。また、ａ面の左側縁と末端の左側には微細剥離痕が観察される。

第165図８と９は横長の剥片を素材とした削器である。上下両端に細部調整が施されている。刃角は８の上端が80～85度、下端が80～90度であり、９は上端が85～95度で、下端は80～85度である。石材は８が珪化凝灰岩であり、９はチャートが用いられている。

第165図10は薄手の横型剥片を素材とした削器である。素材剥片は自然面打面であり、末端の形状はヒンジフラクチャーである。ｂ面の右側縁におもにａ面側からの細部調整によって刃部が作り出されており、刃角は40～55度である。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第165図11は表面に自然面を部分的に残す剥片を素材とした削器である。主要剥離面側からの剥離によって急角度な刃部が作り出されており、刃角は75～85度である。刃部中央部はツブレ状を呈している。石材は黒曜岩である。

第165図12は表面に自然面を残す剥離面打面の剥片を素材とした削器である。ａ面右側縁におもにｂ面側からの連続した剥離によって刃部が作出されており、左側縁にもまばらな剥離が施されている。刃角は45～75度であり、刃部中央部でより急角度となる。石材はチャートが用いられている。

第165図13は剥離面打面の剥片を素材とした細部調整剥片である。両側縁とａ面下端縁に部分的でまばらな剥離が施されている。石材はデイサイトである。

第165図14は表面の一部分に自然面を残す、剥離面打面の縦長の剥片を素材とした削器である。ａ面左側縁にｂ面側からの剥離によって刃部が作り出されている。刃角は75度前後である。流紋岩を石材として用いている。

第165図15はやや縦長の剥離面打面の剥片を素材とし、１側縁に刃部を作出した削器である。刃部は表裏両面からの細部調整によって作出されており、刃角は65～85度である。石材は流紋岩である。

第165図16は表面が節理面で裏面にも部分的に節理面を残す剥片を素材とし、両側縁に剥離を施した細部調整剥片である。石材は瑪瑙が用いられている。

**第166図**１は表面に自然面を大きく残す、剥離面打面の剥片を素材とした細部調整剥片である。素材剥片の末端に裏面から表面側への剥離がわずかに施されている。ａ面左側縁に微細剥離痕が観察される。石材は流紋岩である。

第166図２は流紋岩を石材とした細部調整剥片である。打面側は折りとられており、折れ面からａ面側へ剥離が施されている。ａ面右側縁ではｂ面からａ面側へ、左側縁ではおもにａ面からｂ面側への細部調整がわずかに施されている。

第166図３は剥片の一部にノッチ状の凹みが作り出されたノッチである。素材剥片の末端側に裏面から表面側への剥離によって３ヶ所作られており、打面側にも表面から裏面側への剥離によって１ヶ所作り出されている。石材はデイサイトが用いられている。

第166図４は表面の一部に自然面を残す剥片を素材とした削器である。ａ面左側縁に表裏両面からの細部調整を施し、刃角60～80度の刃部を形成している。ａ面右側縁には微細剥離痕が観察される。石材は珪化凝灰岩である。

第166図５は自然面打面の剥片を素材とした細部調整剥片である。素材剥片の末端に部分的な剥離が施されている。石材は流紋岩が用いられている。

第166図６は相対する縁辺に細部調整が認められるピエス・エスキーエである。上端縁と下端縁、左右両側縁が対になり、２対の細部調整が確認される。石材はチャートである。

第166図７は石核であり、ａ・ｂ・ｃのいずれの面にも自然面が残されていることから、原石はあまり大きいものではない。敲打具に転用されており、ｃ面の中央に敲打痕が認められる。石材はデイサイトである。

第166図８も石核であり、３面の作業面が確認される。主要な作業面であるｂ面とｃ面は全周を回るように打点を移動させながら剥片剥離作業を行っている。石材は流紋岩が用いられている。

**第167図**の１～３は石核である。石材は１と２がデイサイトであり、３は流紋岩が用いられている。

第167図１はａ面が節理面でｃ面は自然面であることから、節理面で分割された石剥片が素材として用いられている。ａ面側が最終的な作業面であり、求心的な剥片剥離作業が行われている。残された剥離面はそれほど大きくはなく、小型の剥片が剥離されたものと考えられる。

第167図２はａ面を除くすべての面に自然面が残された石核であり、原石はそれほどの大きさはなかったものと考えられる。作業面はａ面とｂ面およびａ面右側面の３面であるが、ａ面右側面が先行する作業面である。また、ｂ面はａ面に先行する作業面であり、ｂ面から剥離された剥片には表面に自然面が残されていたものと考えられる。ａ面では自然面を打面とした剥片剥離作業と、打面を180度転移しｂ面を打面とした剥離作業が行われている。

第167図３はａ・ｂ・ｃの３面を作業面とした石核である。ａ面が最も古い作業面であり、最終的な作業面はｂ面である。ａ面の反対側の面は自然面である。

第167図４から10はおもに敲打具として使用されたと考えられる細部調整剥片である。石材は４と７が珪質凝灰岩であり、５は流紋岩、６と８はデイサイト、９と10はデイサイト質凝灰岩が用いられている。

第167図４のａ面には敲打痕が広く認められるが、凹凸が少なく、擦るような方法で敲打が行われたものと考えられる。ｂ面下端縁にも敲打痕が観察され、下端面のごく一部には磨滅痕が認められる。

第167図５はａ面右側面と下端面に敲打痕が認められ、下端面の敲打痕が著しい。

第167図６は損傷の剥離面を伴う明瞭な敲打痕が長軸の両端に観察される。ａ面右側面に自然面が残されている。

第167図７のａ面左側面は両極剥離による折りとり面であり、敲打以前の折りとりである。損傷の剥離面を伴う顕著な敲打痕が長軸の両端に認められる。

第167図８はやや厚手の剥片を素材とし、両側縁に細部調整を施して整形している。長軸の両端面とａ面の右側面中央部に明瞭な敲打痕が確認され、敲打痕には損傷の剥離面を伴っている。

第167図９と10は接合資料であり、両極剥離によって分割されたものである。分割以前に敲打具として使用されており、長軸の１端に著しい敲打痕が認められる。

第167図９は分割面に損傷の剥離面が観察されることから、分割後も敲打に使用されている。

第167図10は裏面に擦痕を伴う弱い磨滅痕が認められ、下端の尖端部にも磨滅痕が観察される。

**第168図**１～３は敲打具として使用された細部調整剥片である。石材は１と３がデイサイト質凝灰岩であり、２はデイサイトである。

第168図１の両側面と下端面を分ける稜線上には明瞭な敲打痕が観察され、ａ面の上端縁左側にも損傷の剥離を伴う敲打痕が認められる。

第168図２はａ面下端の尖端部に敲打痕が認められ、表裏両面に敲打による損傷の剥離面が観察される。ｂ面の左側縁と上端縁および左側面と上端面を分ける稜線には磨滅痕が確認される。また、ｂ面の右側縁と上端縁によって形成される尖端部にも敲打痕が認められる。

第168図３は周縁をすべて折りとって整形し、上端の表裏両面に細部調整をわずかに施している。下端面と両側面を分ける稜線上と、ａ面左側面と上端面を分ける稜線上に敲打痕が観察され、敲打痕の周囲には敲打に伴う損傷の

剝離面が認められる。

第168図４と５は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。

第168図４の上端縁には細部調整が施され、表裏両面によって形成される鋭利な端縁の調整が行われている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。また、刃縁と平行する方向の擦痕を伴う磨り面が部分的に認められ、光沢は磨り面をも覆っている。刃縁の剝離面は光沢を切っており、転用もしくは刃こぼれの可能性が考えられる。

第168図５はａ面およびａ面の左側面が自然面の剝片をほぼそのまま素材としており、ａ面の右側縁にわずかに細部調整が施されているのみである。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察される。ａ面の刃部中央には刃縁と平行する擦痕を伴う磨り面が認められ、磨り面は光沢によって部分的に覆われている。

第168図６は珪化凝灰岩を石材として用いた小玉である。全体的に風化しており、整形の痕跡などの詳細な観察は困難である。厚みは均等ではなく、孔と周縁との距離の短い部位で薄くなっている。連ねられていた隣接する玉との接触による擦り減りと考えられる。

第168図７は復元推定直径9cm程の石製品であり、その４分の１程度が残存している。ａ面の中央に断面形がＶ字状を呈する溝状の彫りこみが認められ、側面からｂ面側へと続いている。破損は同様な彫りこみの部分で起きている。ａ面にのみ彫りこみと彫りこみの間にやや浅い断面Ｖ字形の線刻がみられる。中央部には貫通孔が表裏両面から穿たれており、石製の紡錘車と考えられる。石材は軟質の凝灰岩が用いられている。

第168図８～10は礫の１面にのみ磨痕が残された礫石器である。いずれも磨痕はそれほど明瞭ではない。石材は８がデイサイト、９と10は玢岩である。

**第169図**１～３はデイサイトを石材とする礫石器である。

第169図１は礫の１面に弱い磨痕が観察される。

第169図２はａ面に長軸方向に対して右上がりの擦痕を伴う磨痕が残されており、右側面には敲打痕が認められる。また、表裏両面への剝離面もみられ、敲打に伴う損傷の剝離面の可能性が考えられる。

第169図３は礫の１面に弱い磨痕が残され、長軸の１端とｂ面の両端に敲打痕が観察される。

第169図４～９は球状敲石および石核転用の可能性の考えられる敲打痕の残された石器である。

第169図４は石核を転用したものと考えられ、左右両側縁に敲打痕が認められる。石材はデイサイトである。

第169図５はａ面の上半に明瞭な敲打痕が残されているが、敲打痕はｂ面の剝離面に一部切られており、さらにそれよりも新しいｂ面の敲打痕とは異なる段階のものである。球状敲石が破損した後も敲打の作業に用いられたものと考えられる。石材は珪質凝灰岩である。

第169図６は石核から転用されたと考えられる球状敲石である。ｂ面のほぼ全面とａ面の周縁に顕著な敲打痕が残されている。ａ面の裏面は自然面である。石材はデイサイトが用いられている。

第169図７も石核から転用されたと考えられる球状敲石であり、部分的に剝片が剝離された面をわずかに残しているが、稜線のほとんどは敲打によってつぶれている。石材は安山岩である。

第169図８にはａ面の上半から右側面にかけて顕著な敲打痕が残されている。ａ面の裏面は破損によるものと考えられ、破損後も敲打の作業に用いられている。石材は珪質凝灰岩である。

第169図９は石器の表面全体に顕著な敲打痕が残されている流紋岩を用いた敲石である。石核転用の可能性が考えられる。

第169図10はやや扁平で一端の幅が広い礫を素材とした礫石器である。側縁の稜線の一端に凸凹の著しい明瞭な敲打痕が残されており、敲打に伴う損傷の剝離面も観察される。玢岩が石材として用いられている。

第169図11は大きく欠損しているが、細長い礫の先端に敲打痕が残されており、欠損は敲打による破損の可能性が考えられる。敲打痕は著しく面を形成するほどであり、表裏両面と左右両面側および先端の５面に分けられる。石

材は安山岩である。

第169図12は細長い礫を素材とし、敲打痕と磨痕が複合して残されている礫石器である。長軸の両端に顕著な敲打痕が認められ、a面の一端には部分的に敲打痕とともに磨痕も観察される。磨痕は長軸方向および短軸方向の擦痕をわずかに伴っている。b面中央には長軸方向に近い擦痕を伴う明瞭な磨痕が残されている。a面の一端に残された磨痕と比べ、より平滑である。石材は安山岩が用いられている。

**第170図**および第171図は磨痕、敲打痕、凹痕などの使用による痕跡が残存する礫石器である。

第170図1は断面円形の細長い礫を素材としており、磨痕と敲打痕が複合して残されている。磨痕はa面中央部のほぼ全面とc面の長軸の一端に部分的に認められ、a面の磨痕には長軸方向の擦痕が伴い、c面では短軸方向の擦痕が観察される。長軸の一端（d面）には明瞭な敲打痕が残されており、敲打の損傷によって平坦になっている。また、両端付近の側面には弱い部分的な敲打痕が数ヶ所確認される。石材はデイサイトである。

第170図2は平面形が不整な隅丸三角形を呈する厚みのある礫を素材としており、一端に著しい敲打痕が残されている。a面には敲打に伴う損傷の剝離面が認められる。用いられている石材は流紋岩である。

第170図3は両端が破損した礫であるが、a面の一端からb面にかけて敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が残されていることから、両端の破損は敲打による曲げ破壊と考えられる。石材は玢岩である。

第170図4は断面隅丸三角形のやや扁平な礫を素材としており、磨痕と敲打痕が複合して残されている。磨痕は表裏両面と側面の3面に認められ、特にb面で著しく長軸方向の擦痕も観察される。敲打痕は長軸の一端と隣接する側縁に部分的に認められる。石材はデイサイトが用いられている。

第170図5は細長い不整な礫の一端にのみ敲打痕が残されており、敲打部分は、敲打の損傷によって平坦になっている。石材は凝灰岩である。

第170図6は不整な楕円形の礫を素材としており、磨痕と敲打痕が複合して残されている。敲打痕は長軸の両端と1側面に認められ、b面とd面の敲打痕にはそれに伴う損傷の剝離面が観察される。また、表裏両面の中央部には敲打痕と磨痕が残されており、磨痕が敲打痕よりも新しい。石材は玢岩である。

第170図7は楕円形の礫を素材とし、磨痕と敲打痕が複合して残されている。磨痕はa面にのみ観察されるが、敲打痕は表裏両面の中央に浅く残されている。石材はデイサイトである。

**第171図**にはおもに礫の中央部に凹痕もしくは敲打痕が残されている礫石器を図示した。用いられている石材は1～4と6がデイサイトであり、5は砂質凝灰岩、7は軽石、8は凝灰岩である。

第171図1は不整円形の礫を素材とし、表裏両面の中央部に浅い凹痕が残されている。

第171図2は不整楕円形の礫を素材としており、表裏両面の中央部に敲打痕が観察される。

第171図3は一端の広い不整楕円形の礫を素材とし、片面にのみ2ヶ所の敲打痕が残されている。

第171図4は不整円形の礫を素材としており、敲打痕と磨痕、凹痕が複合して残されている。a面中央には2ヶ所の凹痕が残されており、一方の凹痕の周囲に敲打痕が観察される。b面にも敲打痕と凹痕が隣接して認められ、さらに磨痕も観察される。磨り面は中央でわずかに窪んでいる。

第171図5はやや細長い礫を素材とし、表裏両面と両側面の中央に深い凹痕が1ヶ所ずつ残されている。凹痕と凹痕の間もわずかに凹んでおり、c面の凹痕は全体が浅く凹んだ中央に深い凹痕が認められる。長軸の一端には敲打痕が観察され、敲打の損傷によって平坦になっている。

第171図6は不整円形の礫を素材としており、片面の中央に凹痕が残されている。凹部はやや滑らかで、回転による可能性が考えられる。火を受けており、亀裂がみられ、図示した面の裏面には変色部分が観察される。

第171図7は不整楕円形の礫を素材としていたものと考えられるが、一端を欠損している。表裏両面の中央部に長軸方向に連続した複数の凹痕が残されている。

第171図８は長軸の一端が尖った不整楕円形の礫を素材としており、表裏両面と両側面に複数の凹痕が残されている。凹痕は表裏両面で２ヶ所、ａ面の左側面で３ヶ所、右側面では４ヶ所確認される。ｃ面の上半には温度差によるものと考えられる剝落部分が認められる。

## ５．第Ｖａ層出土遺物

［縄文土器］

遺物は縄文土器、弥生土器、石器類が出土している。

縄文土器は１点を図示した（第３分冊第10図５）。壺の胴上部破剝片で、太い並行直線文（４本確認）とその下部に縄文を施文している。

［弥生土器］

弥生土器は１点図示した（第３分冊第138図７）。鉢で丸底のものである。調整は外面の文様内と無文部分や内面はミガキ調整が施されている。文様は口縁部に並行直線文、胴部から底部にかけては方形渦文に類似したものが描かれている。文様内の縄文は充塡手法により施文される。口縁部内面に直線文が施されている。

［石器類］

石器類は、石鏃、削器、大型板状石器、剝片、礫石器、礫片である。第４分冊第161図の８と９、11に主な石器を図示した。

第161図８は表面の一部に自然面を残した剝片を素材とした削器である。ほぼ全周の細部調整によって四辺形に整形されているが、ｂ面中央に素材剝片の主要剝離面を大きく残している。ａ面の左側縁と下端縁中央に敲打によるツブレが観察される。用いられている石材は流紋岩である。

第161図９は有茎の石鏃である。茎部の作出の後、身部の整形を行っている。両側縁はほぼ直線的であり、先端、基端とも鋭く作り出されている。石材は珪化凝灰岩である。

第161図11は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。左右両側縁は折りとりによって形成されており、上端面は自然面である。側面および上端面から表裏両面に細部調整が施されている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察され、刃部に施された剝離は光沢を切っている。

## ６．第Ｖ層出土遺物

基本層位の第Ｖ層は調査の進行に伴ってＶａ層、Ｖｂ層、Ｖｃ層の３層に細分されているが、第４分冊第161図７と10は細分以前に第Ｖ層出土遺物として取り上げた石器であり、Ｖａ層～Ｖｃ層のいずれかに帰属するものである。石庖丁、石鏃、大型板状石器片、礫石器、礫片などが出土している。

第161図７は石庖丁であり、表裏両面の研磨面下に整形時の剝離痕と調整時の敲打痕が観察される。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されており、紐孔の背部側に磨滅部が観察され、紐擦れ痕と考えられる。光沢は表裏両面のほぼ全面で観察されるが、ｂ面は研ぎ直しによる刃部再生が行われているため、刃面ではそれほど明瞭ではない。結晶片岩を石材としている。

第161図10は有茎の石鏃である。素材剝片の剝離面をｂ面中央に残しており、ａ面左側縁は直線的であるが、右側縁はわずかに外弯する。茎部を作り出した後、身部の整形を行っている。石材は珪化凝灰岩である。

# 第３節　古墳時代の層の遺物

## １．SR1 自然流路跡出土遺物

### (1)　12層出土遺物

12層中より縄文土器、弥生土器、土師器、木製品類、石器・石製品類が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は１点図示した(第３分冊第６図７)。小型の壺で、底部が欠損している。胴部は丸みがあり、胴上部に３本からなる並行直線文、口縁部内面に直線文が施されている。

［弥生土器］

弥生土器は２点図示した（第３分冊第131図26・27)。26は壺で、胴部最大径は中央部にある。外面調整はミガキ調整、内面はナデ調整である。胴部上端に沈線文がある。27は鉢と思われる。調整は外面の文様内にミガキ調整、内面はケズリ調整とその後にミガキ調整を施している。文様は菱形を基調にした図柄が描かれている。文様内の縄文は充塡手法により施文される。

［土師器］

土師器は29点図示した（第３分冊第139図～第142図)。

第139図１～５は鉢である。胴部上端にくびれがあるもの(１～３)と内弯するもの(４・５)とがある。底部は３以外は平底であるが、４は丸底に近く底部の範囲が明瞭でない。３の底部に擦痕が観察された。図化した以外にも細く浅い擦痕が認められる。なお、外面にススが付着しているが、スス付着後に擦痕が加えられている。

第139図６～９は高坏である。坏部は底部と胴部の境に稜を持つ。脚部は外反するもの(７・８)、柱状をなし、折れ曲がって裾部は大きく開くもの(6？・９)がある。

第139図10･11は器台である。欠損により全体形はわからない。10は受部の底部中央に貫通孔がある。11は穴があるものの貫通していない。脚部は八の字状に開く。

第139図12～第140図５は甕である。口縁部は屈曲して外反する。第139図12の胴部は丸みをもち、底部は平底で小さい。第140図１の胴部は丸みをもつ長胴になると思われる。底部は平底である。第140図４は口唇部にヘラ状工具を連続して押しつけている。圧痕内には木目状の筋が観察できる。

第140図６・７は台付甕である。６は屈曲して口縁部が外傾する。胴部は倒卵形を呈し、台部は直線的に開く台形状である。７の台部は弱く内弯しながら開く。

第141・142図は壺である。口縁部は複合口縁のもの（第141図１、第142図３)、外傾するもの（第142図１・２）がある。胴部は丸みをもつ長胴のもの（第141図１)、球形のもの（第142図１・４・６・７)、算盤玉形のもの（第142図５）がある。

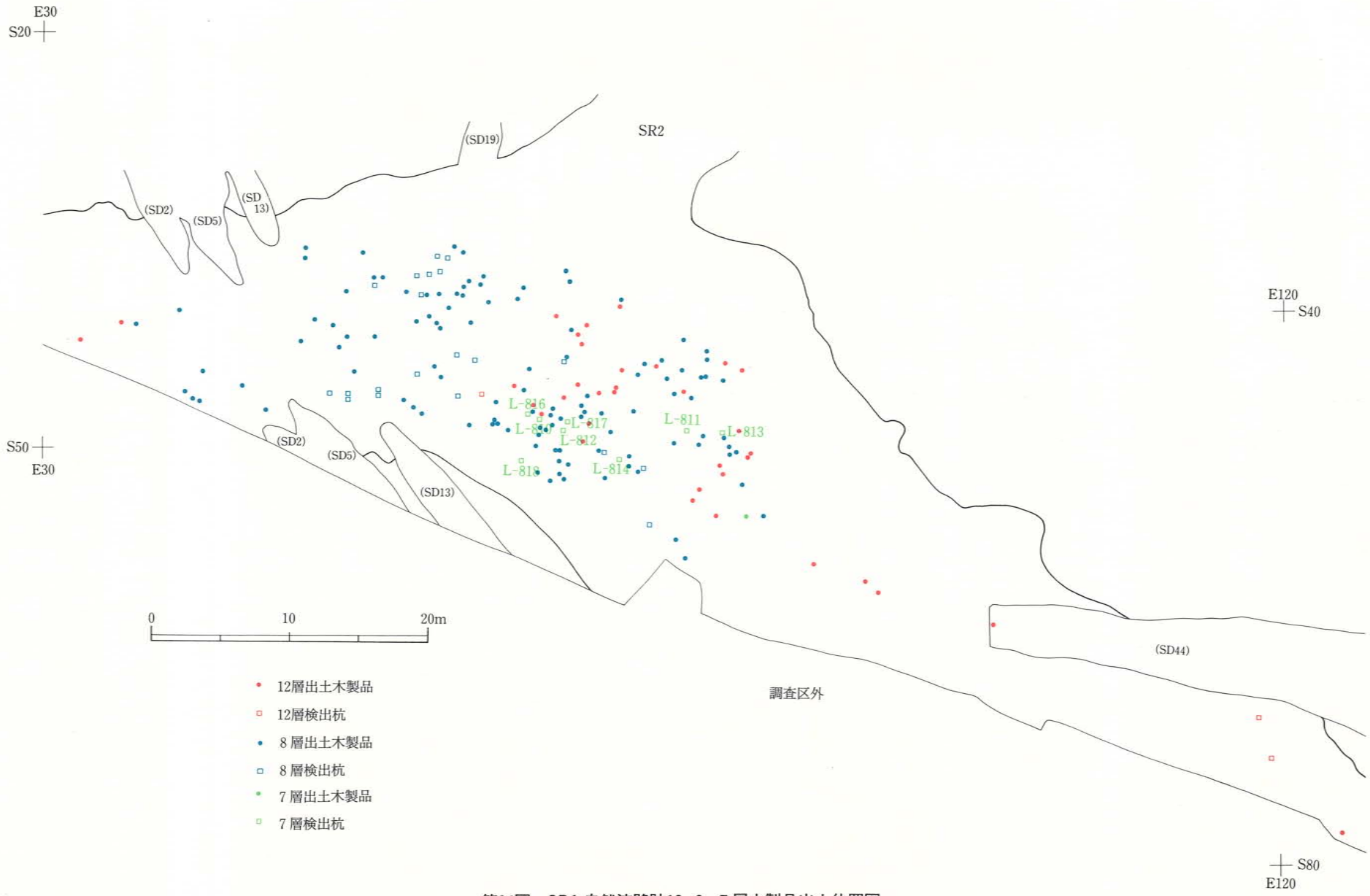
［木製品類］

木製品類の出土状況については第34・35図に示した。E30 近辺より東から出土し、それより西では出土していない。E60～E80 近辺に集中域があり、遺物は主に流路跡中央部周辺から出土し、河岸付近や河岸斜面からは出土していない。また、遺物の長軸方向は流路方向と一致するものが多い。なお、木製品類とともに自然木や植物遺存体も大量に出土している。

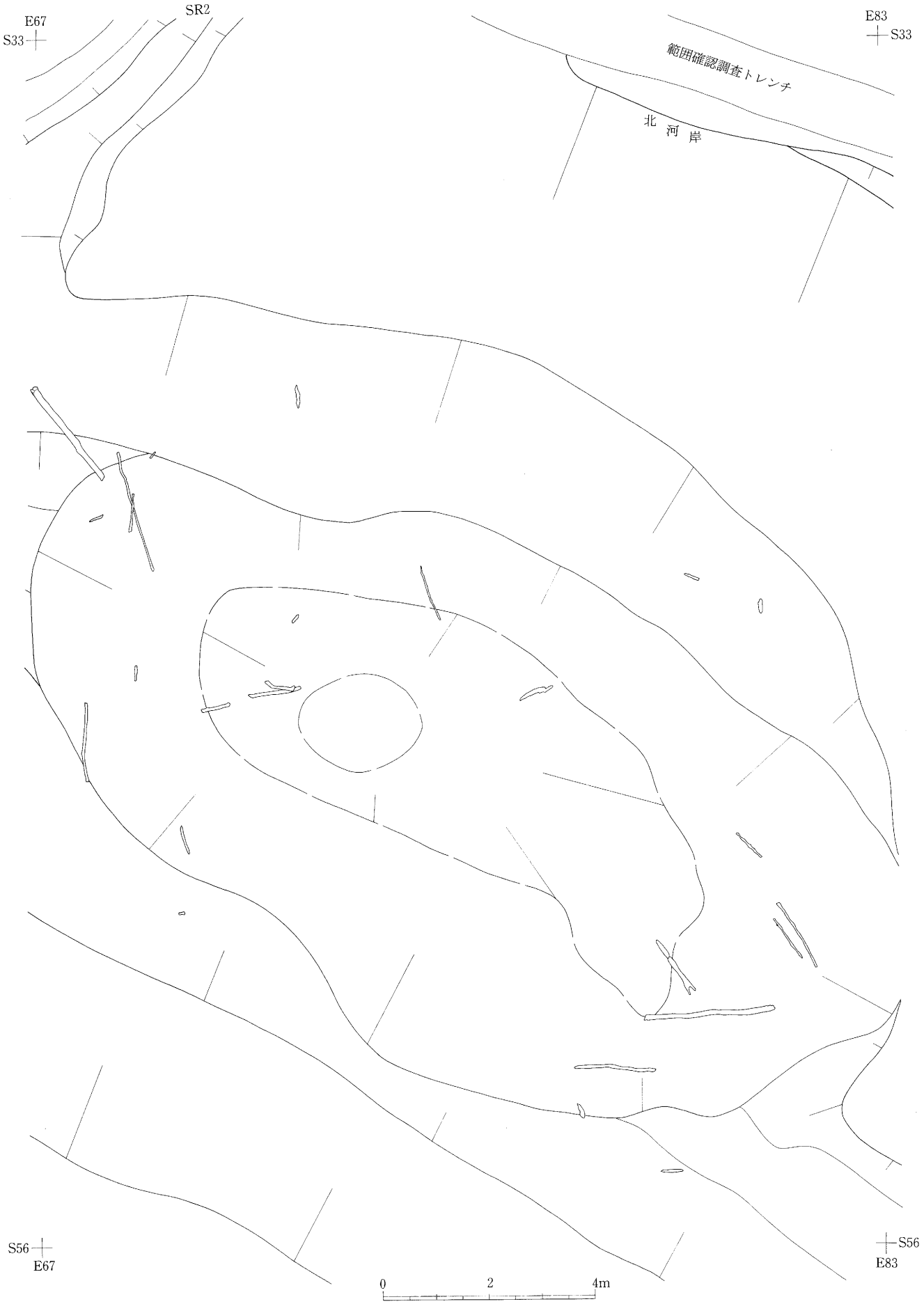
12層で検出した杭は３本である。杭の位置に関連性は認められなかった。

木製品類には直柄平鍬、曲柄叉鍬、一木鋤、鎌柄、建築部材、杭、その他不明木製品などがある。古墳時代前期の木製品である。第４分冊第83図から第92図１～３に器種ごとに図示した。

**第83図**１・２は**曲柄叉鍬**である。いずれも鍬身の破片資料であり、クヌギ節の柾目材を素材としている。




第34図　SR1 自然流路跡12・8・7層木製品出土位置図




第35図　SR1 自然流路跡12層木製品出土状況

第83図１は刃部の一方と着柄軸をわずかに欠損している。着柄軸の両側縁は平行しており、断面形は柄を装着する面が平坦に作られた蒲鉾形を呈する。軸頭には短軸方向に紐掛け用のＶ字状の溝が切られている。溝は幅約1.5cmと推定され、深さは8mm程度である。軸部と刃部の境は明瞭であり、約1.5cm幅の肩が作られ、直角に折れて刃部側縁となる。刃部側縁は肩から直線的に9cmほどの長さで開いた後、屈曲して開きが小さくなり、先端に至る。刃部の使用者側の面には、軸部と刃部の境から約6cmのところから刃先へかけての削り込みが施され、歯は薄く仕上げられている。

第83図２は歯の片側と着柄軸のほとんどを欠損しているが、着柄軸の下端がわずかに残されており、約1.5cm幅の肩を確認することができる。刃部側縁には１のような屈曲部は認められず、肩から緩やかに外弯して先端に至る。刃部の最大幅の位置は中央部下端寄りと推定される。刃部の使用者側の面には１と同様な削り込みが施されており、歯は薄く仕上げられている。

**第84図**は**一木鋤**である。焼失などにより柄の把手と身をわずかに欠損しているが、ほぼ完形で、全長112.3cm、身の長さ30.4cm、幅17.1cmである。把手の長さは14.1cmで、上端を閉じたＵ字形に作り出されている。上端の横木は太く作られ、左右に突出しているが、焼失によって一端をわずかに欠損する。横木は残存長12.7cm（推定長13.2cm）であり、断面形は直径約3cmの円形を呈しているが、突出部は隅丸方形である。把手の中央には１辺7.5〜7.8cmの逆三角形の孔かあけられている。柄の断面形は隅丸方形を呈し、把手側が細く作られ、身に寄った部分で厚みを増している。身は柄から左右に肩が水平にのび、直角に近い角度で屈曲して刃縁に至る。肩の高さは左右で異なっており、ａ面の右側が左側よりも高く作られている。身の平面形は縦に長い逆台形状を呈し、ａ面右側縁の刃縁側を欠損する。ａ面側の遺存状態は良好ではないが、柄の延長上に断面半円形の突帯が中央部まで作り出されている。刃縁は表裏両面からの加工によって削り出されている。ｃ面の身の左側３分の１ほどが焼けて炭化している。炭化面は身のａ面側にも部分的に認められ、柄のｂ面中央と把手のａ面右側にも観察される。クヌギ節の柾目材を素材としている。

**第85図**１は**鎌柄**である。頭部の先端には、装着される身の刃先側に張り出した、長さ6.5cm、幅3.5cmのＤ字状の突起が作り出されており、突起の直下に装着孔が穿たれている。装着孔は長さ4.1cm、幅0.5cmであり、身を固定するためと考えられる、約５㎜幅の植物質の扁平な紐状のものが装着孔に通して巻き付けられている。装着される身の基端側の面には装着孔の直下に長さ約1cm、深さ0.5cmの抉りが認められ、身の固定にかかわるものと考えられる。柄の断面形は円形を呈しているが、頭部寄りは身の基端側の面が平坦に削られている。柄の基部は装着される身の刃先側に向かって屈曲しており、握り部が作られている。握りの末端には明瞭なグリップ・エンドは認められないが、握り中央よりもわずかに太く、グリップ・エンドと同様に滑り止めの工夫と考えられる。コナラ節の柾目材を素材としている。

第85図２は**直柄平鍬**である。着柄隆起と一方の側縁を部分的に欠損している。頭部の上端幅よりも刃部幅が広く、最大幅の位置は刃縁寄りにある。側縁は上端から身の３分の１近くまで、ほぼ平行し、緩やかに開いた後、屈曲して刃縁に至る。着柄隆起は剝落して失われているが、その痕跡から上端側が丸く、刃部側の先端が尖る舟形を呈していたことが確認される。着柄隆起の下端に接して、断面形が扁平な三角形を呈する、高さ約５㎜の隆帯が身の短軸方向に作り出されている。着柄孔は円形である。着柄孔と上端縁の中間の位置に、着柄隆起に接して長さ約1.5cm、幅1.0cmほどの方形を呈する左右一対の小孔が穿たれており、泥除を装着するための装置と考えられる。

第85図３は長方形に整形されたカツラの板目材である。表裏両面および両側面に加工痕が観察される。上端縁は中央部に当時の面をわずかに残しているが、下端側は焼けて欠損している。**建築部材**と考えられ、板壁の可能性がある。

**第86図**から第91図１には建築部材とその可能性の高いもの、および**不明木製品**を図示した。

第86図１・２は建築部材である。

第86図１は樹皮を残した心持ち材であり、両端には切断痕が残されている。下端より30cmほどの位置を中心に、15cm以上の長さで削りとられた加工痕が５面確認される。

第86図２は下端を欠損するが、上端には中央に約6cmの平坦面を作り、両側を13.5cmほど突出させたＹ字状に整形している。側面には中央から下端にかけて表面を削り取った加工痕が確認されるが、上端寄りには焼けて炭化した面と欠損部があり、加工痕の観察は難しい。

**第87図**１は両端を欠損する心持ち材であるが、表面に加工痕が明瞭に残され、上下両端寄りを扁平に整形した建築部材である。

第87図２は一端を欠損する分割材である。残存する一端の２面に加工痕が確認される。建築部材の可能性がある。

第87図３は両端に切断痕の残された心持ち材であり、下端から３分の１ほどの箇所に加工によって抉られた部分がｂ面とｄ面に認められ、その間のｃ面には上端近くまで削り取られた加工面が観察される。

**第88図**１は柾目の板材の破片である。表裏両面は割り裂き面であり、一端と側縁の一方を部分的に残している。わずかに残る端縁には加工痕が認められる。

第88図２・３・５・６は一端もしくは両端を欠損する建築部材と考えられる。２は心持ち材であるが、加工によって２分の１から３分の１ほどが削り取られ、断面形は半円形に近い形状を呈している。３・５・６は分割材であり、残存する一端に加工痕が残されている。６の中央部のやや下端寄りには枝を落とした際のものと推定される加工痕が認められる。

第88図４は分割材を素材とし、断面形を隅丸方形から蒲鉾形に近い形に整形した棒状のものであり、欠損する端部のｂ面側に抉りが入れられている。断面の形状から鍬の直柄の可能性も考えられるが、その場合、側面に作られた抉りについての説明は難しい。不明木製品である。

**第89図**１は枝を落とした加工痕の認められる心持ち材である。

第89図２は加工と割り裂きによって断面形が三角形に近い形状となった材である。

第89図３は分割材に加工を施した建築部材である。一端と側縁の一部を欠損する。上端縁には突起が作り出されている。

**第90図**１は両端を欠損しているが、一端には加工痕が残されており、杭の先端状に尖らせていたものと推定される。

第90図２は分割材が用いられた残存長20cm弱の破片資料である。先端に加工痕が観察される。残存部分が少ないことから、用途については不明である。

第90図３と４は一端に加工痕が認められる心持ち材である。もう一方の端部を欠損している。３の加工痕は両面からのものである。４は先端以外の他の部位には加工痕が観察されないことから、払い落とされた枝である可能性が高い。

第90図５は心持ち材であるが、長さ171.8cm、幅8.4cm、厚さ5.8cmの真直ぐな丸材であり、建築部材の可能性が高い。枝を払い落とした加工痕が部分的に観察される。

**第91図**１は一端に払い落とされた枝のような加工痕が残されている。それに近い側面にも加工が施されており、表面を薄く削り取っている。先端を欠損しているが、二つに分かれているものと推定される。

第91図２と第92図１～３は打ち込み杭である。

第91図２と第92図３は、心持ち材の一端に大別４面の加工によって尖端部を作り出している。

**第92図**１は分割材を素材とし、断面円形に削り出されていることから、柄を転用した可能性が高い。Ａ面の下端寄りと上下両端に明瞭な加工痕が残されている。

2は断面形が不整な台形を呈する分割材を使用しており、建築部材の転用と考えられる。一端と側面に加工痕が観察される。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、掻器、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、石皿、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊第231図～第233図に主な石器、石製品を図示した。

**第231図**の1と2は石庖丁であり、1は成品の破損品、2は未成品である。

第231図1は中央部の一部が残存しており、背部と刃部および紐孔の一方が部分的に残されている。研磨面下にa面で剥離痕が観察され、b面には敲打痕が認められる。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。b面のほぼ全面とa面の刃縁に光沢が認められる。a面は火を受けて黒変しており、焼けハジケの面がみられる。

第231図2は剥離による整形を経て敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行した未成品である。左右両端を欠損している。b面の刃部予定部位の左端と背部予定部位の右端には敲打がそれほど施されず、整形の剥離面を残す部分が確認されるが、すでに石庖丁の成品の一般的な厚みよりも薄くなっている。この部分を除去して仕上げた場合、石庖丁としては小さくなりすぎるため作業が中断されたものと考えられる。用いられている石材は1が粘板岩であり、2はデイサイト質凝灰岩である。

第231図3は剥離による整形、敲打による調整の段階を経て、部分的に研磨が施された太型蛤刃石斧の未成品である。a面の中央部に粗い研磨痕が認められるのに対して、c面では敲打作業が部分的に行われた段階であり整形の剥離面広く残されている。a面の基端寄りに右上がりの条線状の傷が多数確認されるが、弥生時代当時のものか不明である。石材は輝緑岩が用いられている。

**第232図**の1と2は扁平片刃石斧の未成品である。1、2ともに剥離による整形、敲打による調整を経て、研磨段階まで製作作業が進行している。

第232図1は剥片を素材とし、基端面とa面の一部にわずかな研磨が施されている。刃部予定部分の大半を欠損する。

第232図2は研磨によって両側面および基端面が形成されており、表裏両面にも研磨が部分的に施されている。研磨面には短軸方向および右下がりの擦痕が観察される。刃部側を欠損している。1の石材は安山岩であり、2はデイサイト質凝灰岩である。

第232図3は有茎の石鏃である。基端の形状が左右で異なっており、a面右側は明瞭に作り出されているが、左側はa面からb面への剥離によって角を落とした状態である。側辺の中央にわずかなくびれが認められ、身部を整形した後に茎部が作り出されている。石材は珪質頁岩である。

第232図4は横長の剥片を素材とした縦型の石匙である。おもに素材剥片の表面の打面側と裏面末端に細部調整が施されている。つまみ部は裏面から表面側への浅い抉りによって作り出されている。a面左側縁の刃角は70～90度である。石材はチャートである。

第232図5は自然面を打面とした剥片を素材とした細部調整剥片である。表面にも自然面が大きく残されていることから、扁平な原石から剥離されたものと考えられる。わずかにa面の末端と右側縁に細部調整が施されている。石材は珪化凝灰岩である。

第232図6と7は上下両端にツブレ状の剥離が認められるピエス・エスキーエである。6のb面には自然面がわずかに残されている。c面は両極剥離による剥離面である。7には上下両端のほかに、a面およびb面の左側縁の中央部にも相対するツブレ状の剥離が観察される。b面中央の広い剥離面は両極剥離によるものである。用いられて

いる石材は6が珪化凝灰岩であり、7はデイサイトである。

第232図8は横長の剝片を素材としたと考えられる削器である。a面は細部調整による剝離面にほぼ全面が覆われているが、b面では中央に素材剝片の主要剝離面を広く残されている。細部調整によって形成された角度は50〜75度であり、下端側に近付くにしたがって徐々に角度が高くなっている。石材は珪質頁岩である。

第232図9は大型板状石器に多用される板状節理を有する安山岩の剝片を素材とした削器である。a面に部分的に自然面が残されている。剝片の周縁に表裏両面への粗い剝離を施して整形し、その一端にb面側からa面側への剝離によって弧状の刃部を作出している。刃角は50度前後である。

第232図10は表面に自然面を大きく残す剝片を素材とした掻器である。打面は剝離面打面であり、おもに末端の表裏両面に剝離を施して刃部を作り出している。刃角は60〜70度である。石材は凝灰岩が用いられており、表面の風化が著しい。

第233図の1〜3は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。

第233図1のa面およびa面左側面には部分的に自然面が残されている。上端面とa面右側面は折りとりによって形成された面であり、右側面には節理による段差が認められる。刃部およびa面左側縁は剝離によって整形され、左側縁には肩部が作り出されている。刃部の表裏両面に光沢が観察されるが、それほど明瞭ではない。

第233図2は刃部の片面を研磨によって作り出した部分磨製の大型板状石器である。左側縁を欠損している。b面側の刃部に研磨が施され、刃縁と平行方向に近い右下がりの擦痕を伴っている。刃部のa面側と上端面は自然面である。刃部にはわずかな剝離が施され、折りとり面であるa面右側面から表裏両面に細かな細部調整が認められる。刃部のb面側に顕著な光沢が観察される。

第233図3はa面に大きく自然面を残しており、刃部のa面左側を欠損する。a面の左側面と上端面は折りとり面であり、表裏両面にまばらな剝離が施されている。b面の刃部は研磨によって作られており、刃縁に平行する方向の擦痕がわずかに観察される。a面側の刃部右側の稜線は擦り落とされ、右下がりの擦痕を伴っている。刃部には明瞭な光沢が認められる。

第233図4は粗目の砂質凝灰岩を用いた砥石であり、四辺形の扁平な形状を呈している。研磨面はわずかに短軸方向に弯曲しているが、ほぼ平坦である。研磨痕は著しく光沢が観察されるほどである。

第233図5は扁平な礫を素材とした石皿であり、その片面に平坦な磨痕が観察される。石材は安山岩である。

### (2) 11層出土遺物

11層中より弥生土器が出土している。

### (3) 10層出土遺物

10層中より弥生土器、石錐、剝片が出土している。

### (4) 9層出土遺物

9層中より弥生土器、土師器、木製品類、石器類が出土している。

土師器は小片のため図示できなかった。

**[木製品類]**

第4分冊第92図4にSR1自然流路跡の堆積土9層から出土した建築部材を図示した。断面不整方形の分割材を素材としており、両端を欠損する。9層出土遺物には時期を決定できる資料がなく、上下の堆積土の時期から古墳時代前期から中期の木製品と考えられる。

［石器類］

石器類は、石錐、大型板状石器片、剝片、礫石器、礫片である。

第４分冊第230図７は9b 層から出土した礫石器であり、使用による敲打痕が残されている。平面隅丸三角形の扁平な礫を素材としており、ａ面左側縁に敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が認められる。右側縁とｂ面の下端縁にもわずかな敲打痕が観察される。用いられている石材は珪質凝灰岩である。

## (5)　８層出土遺物

８層中より縄文土器、弥生土器、土師器、土製品、木製品類、石器・石製品類が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は３点図示した（第３分冊第６図４～６）。４は外面に並行直線文（４本確認）、内面に直線文、口唇部にも沈線が施されている。５は薄手の作りで、口唇部はキザミが施されている。文様は沈線と刺突により描かれ、羊歯状文の可能性がある。６は鉢で、文様のある部分は肥厚する。外面に浮線楕円文を施し、内面には直線文がある。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した（第３分冊第131図28）。鉢で、外面に並行直線文（10本確認）が施されている。内面はミガキ調整である。

［土師器］

土師器は17点図示した（第３分冊第143図）。

１～５は坏である。１の胴部は強く内弯し胴部上端でくびれ、折れ曲がって口縁部は外傾する。２の胴部は強く内弯し、くびれた後斜めに開き、折れ曲がって口縁部は直立する。３の胴部は外傾し、屈曲して口縁部は直立する。４の側面は外傾する。５の胴部は斜めに開き、折れ曲がって口縁部は直立する。口縁部上端が弱く外反している。これらの底部は平底であるが、１・２は上げ底風に仕上げてある。

６～12は高坏である。坏部は底部と胴部の境に稜（６～８）や段（12）を持つ。12は段の部分にヘラ状工具を用いてキザミ目を連続施文している。脚部は柱状をなし、屈曲して裾部は大きく開く。10は著しく裾部が大きく、裾部の中央に段を持つ。

13・14は甕で、屈曲して口縁部は外反する。13は丸みのある胴部である。14は長胴で胴部上端に最大径があり、口縁部下端に段を持つ。

15～17は壺である。口縁部は複合口縁のもの（15）と外傾するもの（16・17）とがある。16は小型のもので、胴部は算盤玉形である。17の胴部は扁球形で、底部は上げ底風に仕上げてある。

［土製品］

土製品は１点図示した（第３分冊第153図15）。なすび形で、穿孔を持つ。

この他に８～７層出土の土師器１点（第３分冊第145図６）と土製品１点（第３分冊第153図16）を図示した。土師器は鉢で、胴部は強く内弯し胴部上端でくびれ、屈曲して口縁部は外反する。土製品は管状の土錘で、両端が少し細くなる。長軸の向きに穿孔がある。

［木製品類］

木製品類の出土状況については第34･36～37図に示した。E40～E80 近辺の範囲で出土し、出土量の割には分布範囲が狭い特徴がある。成品と未成品が混在している。遺物は流路跡中央部周辺から出土し、河岸付近や河岸斜面上部からは出土していない。また、遺物の長辺方向は流路方向と一致するものが半数で残りはさまざまな方向を向いている。なお、木製品類とともに自然木や植物遺存体も大量に出土している。

８層で検出した杭は20本である。S38E58 近辺では７本の杭がまとまって検出された。そのうち３本は1m 間隔で

流路方向に並び、1m北側に2本が1m離れて流路方向に並んでいる。また、S46E53近辺では5本の杭がまとまって検出され、2本が流路と直交する方向に並び、もう2本も同様の並び方をし、1本－2本－2本が1～2m間隔で流路方向に並んでいる。

木製品類には、曲柄叉鍬、曲柄平鍬、泥除、鍬反柄、田下駄、鍬膝柄？、容器、梯子、建築部材、杭、その他不明木製品などがある。古墳時代中期の木製品である。第4分冊第93図から第115図1～3に器種ごとに図示した。

**第93図**1は**曲柄叉鍬**である。着柄軸の軸頭をわずかに欠損するものの、ほぼ完形の鍬身である。クヌギ節の柾目材を素材としている。着柄軸は刃部寄りが広がる笠形を呈し、断面形は側辺がわずかに外弯する台形状である。中央上半には身に対して約45度の角度で、長さ7.5cm、幅1.2cmの長方形の孔が穿たれている。着柄に関わる方孔と考えられ、装着面に突起部を作り出した反柄の存在が想定される。着柄軸の下のくびれ部にはa面から両側面にかけての緊縛痕が観察されることから、ホゾ結合によって柄を装着し、さらに身と柄を紐で緊縛して固定していたものと考えられる。着柄軸の使用者側の面（b面）は平坦であり、軸上端面は上端縁より約2cmの位置から145度の角度で削り落として作られている。刃部は着柄軸の下のくびれ部から緩やかに広がり、中央部で最大幅となって、外湾して先端に至る。a面左側の歯の左側縁は中央から先端にかけて直線的であり、使用による摩り減りと考えられる。b面のくびれ部の両側縁寄りにはわずかに削り取られた部分が観察される。

第93図2は**曲柄平鍬**の刃部である。アサダの柾目材を素材としている。着柄軸部と刃縁を欠損し、一方の側縁も部分的に失われている。a面の遺存状態は良好ではなく、中央部に点々とみられる孔は破損によるものである。a面の上端の両側縁に加工面がわずかに観察され、c面が平坦に作られていることから、c面側が使用者側の面と考えられる。

**第94図**1は**泥除**と考えられる木製品である。モミ属の追い柾目の板材を素材としている。幅7.2cm、深さ9.6cmの抉りが上端縁から器体中央近くまで入れられており、平面形は「凹」字状を呈する。最大厚1.5cmの薄手の木製品であり、中央部を厚く、周縁部を薄く作り出している。中央には左右一対の孔が抉り寄りに穿たれており、周縁には大きさがまちまちの孔が13孔穿たれている。a面右側の上半は一度破損しており、破損面の両側に孔を開け、樹皮で2ヶ所綴じ合わせて補修されている。

第94図2は両端を欠損し、炭化面も観察される棒状の木製品である。分割材を断面円形に削り出していることから何らかの柄の可能性が高い。

第94図3と4は鍬反柄であり、ともに鍬台側を欠損している。ニレ属の分割材を使用しており、握りの末端には、装着される鍬身の刃部側に曲がるグリップ・エンドが作り出されている。グリップ・エンドの端面は楕円形もしくは円形に近い楕円形を呈している。3の断面形はグリップ・エンド側が円形で、鍬台側は縦に長い楕円形である。装着面がわずかに残存しており、平坦面の末端を確認できる。4は遺存状況が良好ではなく、木取りとグリップ・エンド、先端側がわずかに反っていることが確認できるのみである。

**第95図**1は一木から足板と足枠を作り出した**田下駄**である。一方の側縁を欠損するが、全体の形状の推定は可能であり、平面形は縦に長い隅丸長方形を呈し、長さ30.1cm、推定幅23.5cmである。モクレン属の半割材を素材とし、木表側に細長い逆台形状の足枠を踵部を含めて作り出している。足枠は踵側が最も高く、また、厚みをもたせて作られており、高さ約6cm、厚さ約4cmである。足枠の側壁には踵側の端縁から約11.5cmの位置に一辺1cm前後と推定される左右一対の方形孔が穿たれており、その小孔に紐を通して足に緊縛したものと考えられる。足枠の高さは踵部から側壁の小孔付近までは、ほぼ同じ高さで、つま先側に向かって徐々に低くなる。側壁は厚さ1cm前後であり、右側のつま先側を欠損している。踵から両側の側壁に開く角度がわずかに異なっていることから、右足用と考えられる。足板の裏面はほぼ平坦であるが、踵側とつま先側にわずかに弯曲している。

第95図2と3は**容器**の破片である。2は鉢状の容器と考えられる。3は椀の底部のみが残存しており、直径5㎜

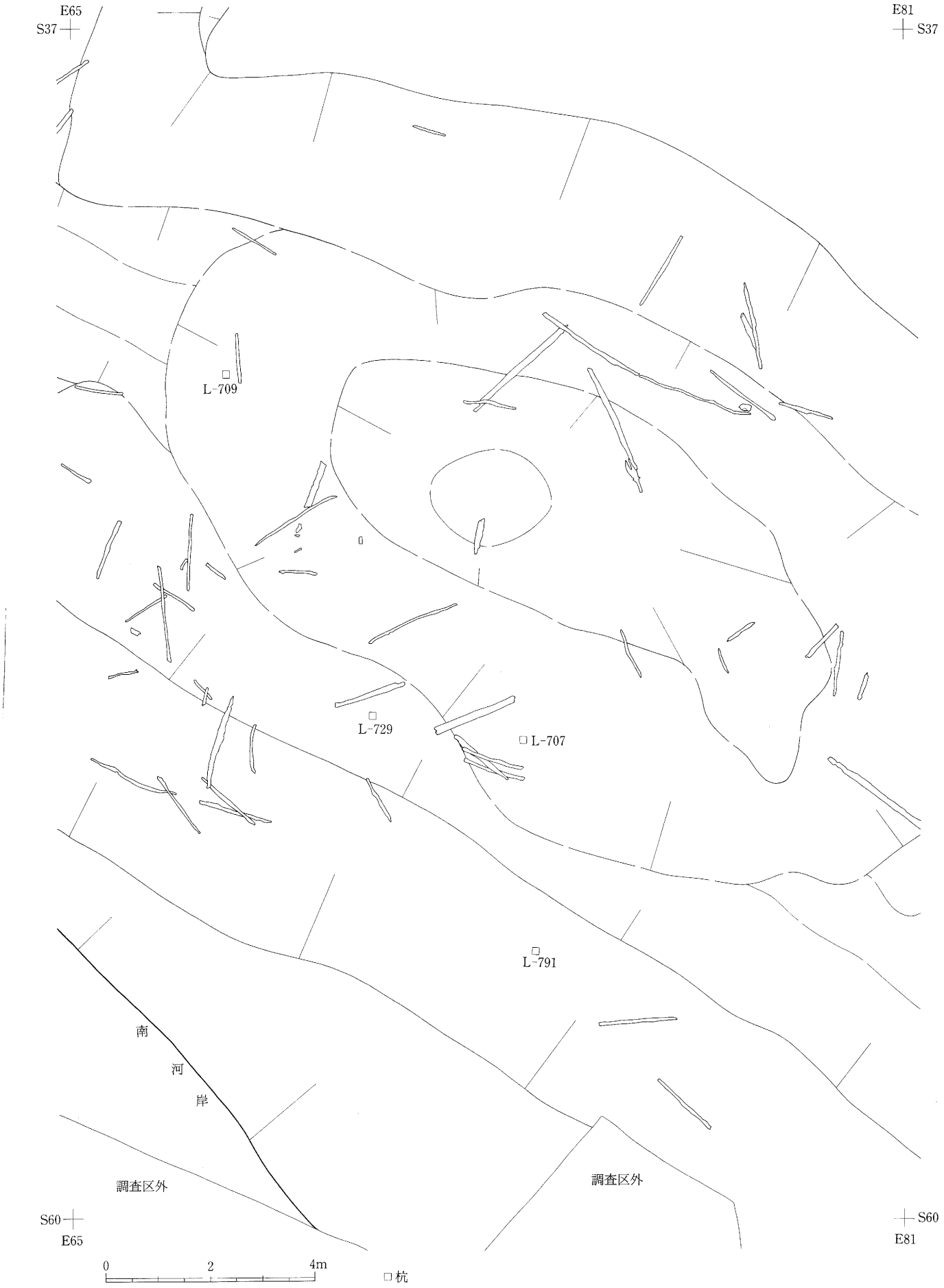
第36図　SR1 自然流路跡 8 層木製品出土状況（1）

ほどの穿孔が確認される。樹種はともにクリである。

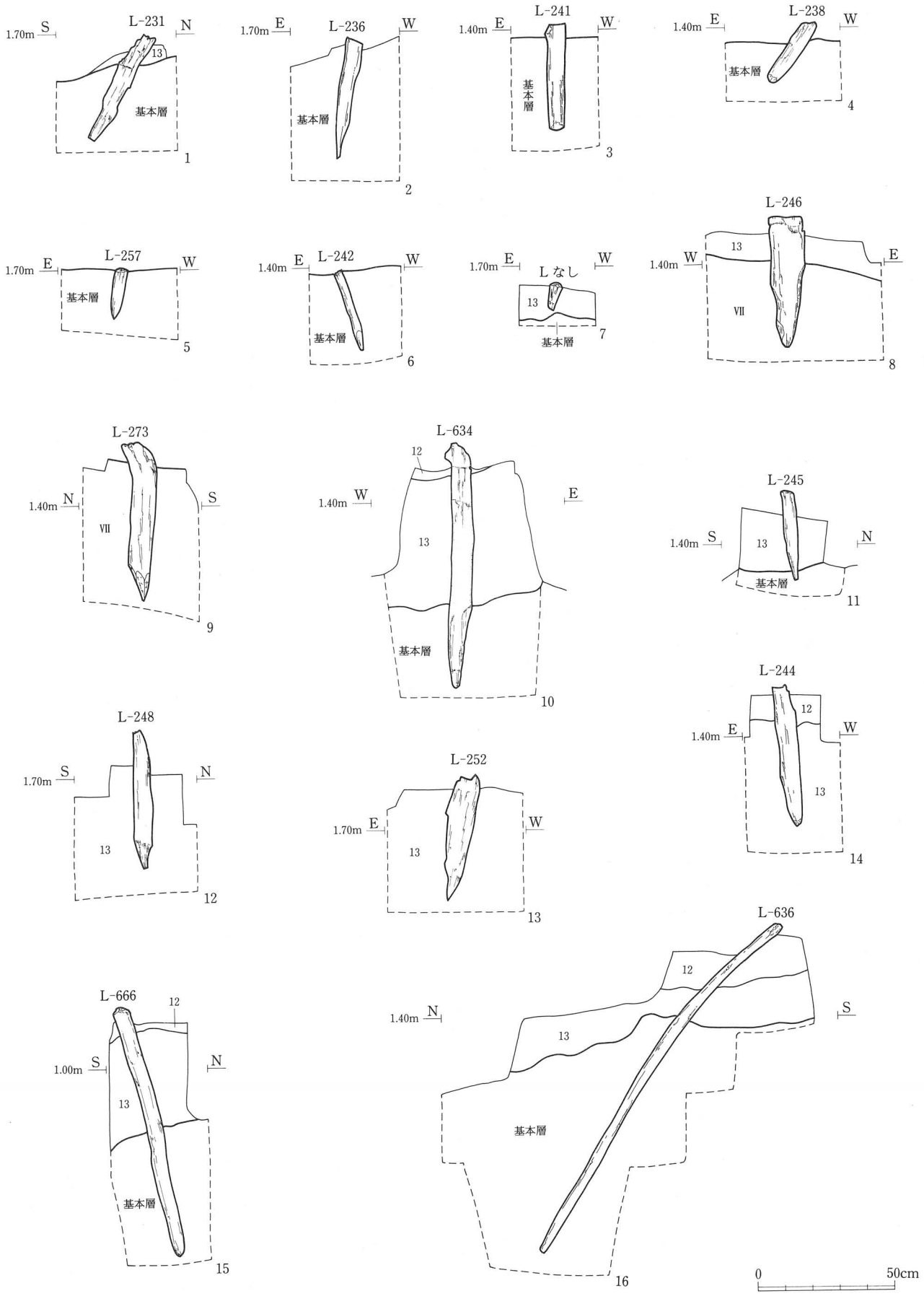
第95図 4 は幹から枝分かれした部分を利用して頭部と柄を作り出した鍬膝柄状の木製品である。頭部の加工は粗く、柄には樹皮が残されていることから未成品と考えられる。未成品とはいえ、頭部は幅10.2cm と、幅広に作られていることから、身と柄を一木から作り出した**木鍬**の可能性が考えられる。

**第96図** 1 は**梯子**である。クリの分割材を素材とし、表面に足掛けを作り出した、ほぼ完形の一木梯子である。全長170cm、幅15.3cm、最大厚9.5cm であり、上端側を薄く、下端側が厚く作られている。上端は最上段の足掛けか

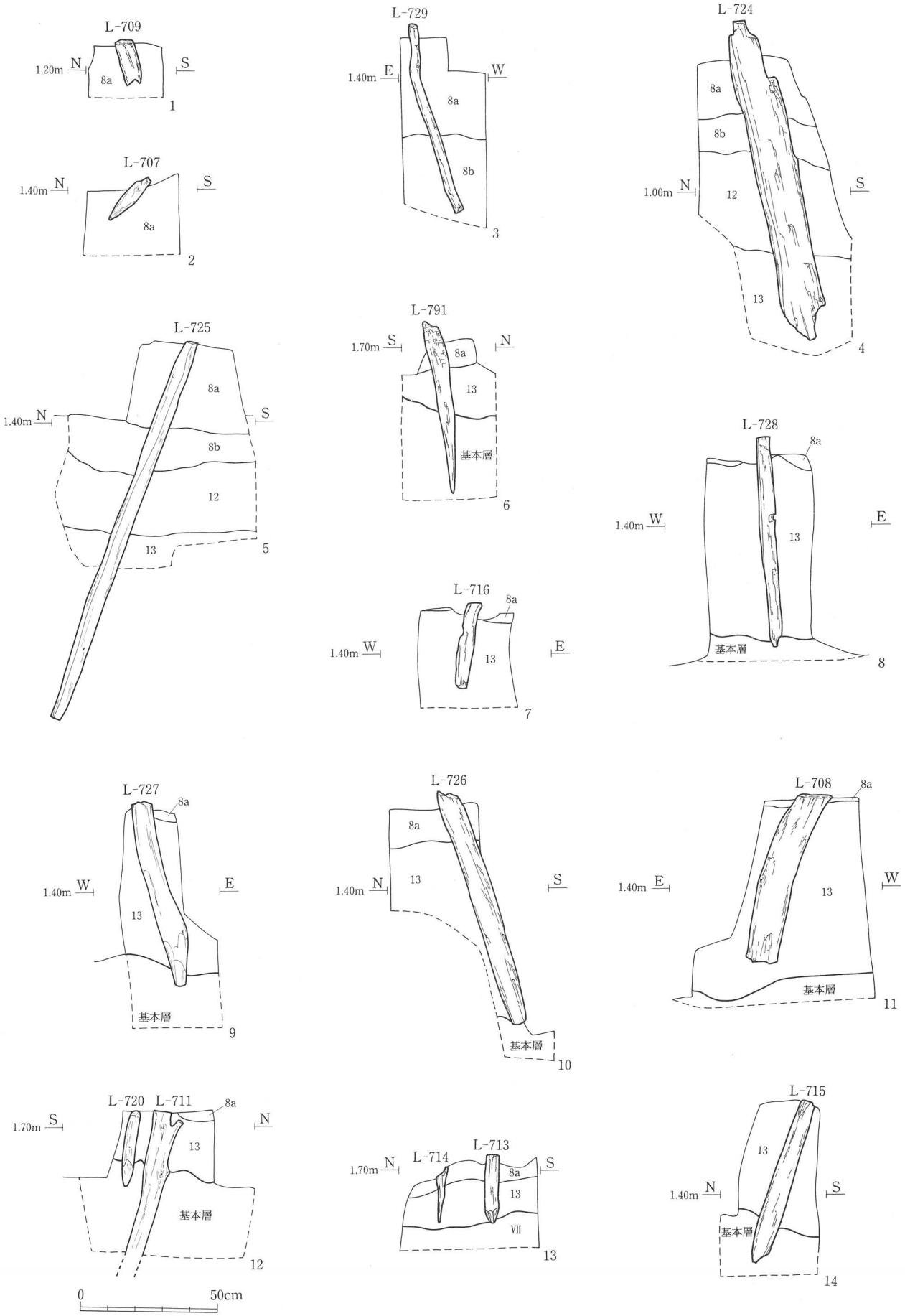
第37図　SR1 自然流路跡 8 層木製品出土状況 (2)



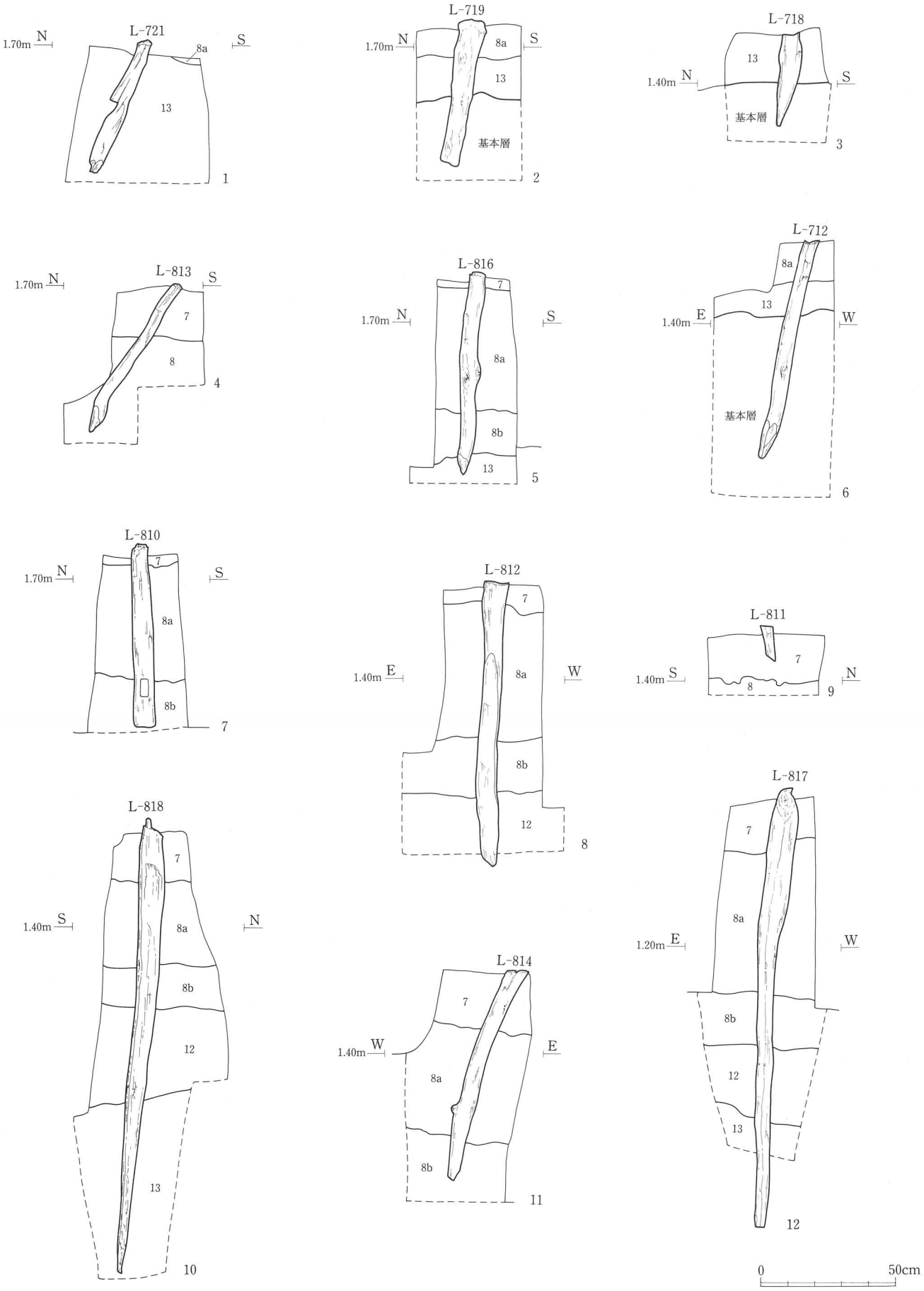

第38図　SR1 自然流路跡 8 層木製品出土状況 (3)




第39図　SR1 自然流路跡検出杭断面図 (1)




第40図　SR1 自然流路跡検出杭断面図 (2)




第41図　SR1 自然流路跡検出杭断面図 (3)

ら約17cm の長さで作り出され、上端縁を丸く整形している。下端側は裏面を削り込み、さらに端縁を刳込んで逆凹字形に仕上げられている。足掛けは側面から見て上部を直角に、下部を斜めに切り込んで5段作り出されている。段は最小27.6cm、最大33.4cm と30cm 前後の高さに作られ、足掛けの奥行は4.5〜5.3cm である。

第96図2は尖端部を一端に作り出した全長249.2cm の矢板状の板材である。尖端部は側面からの削り込みによって形成されている。尖端部と反対側の端縁は平坦に作られていたものと推定されるが、部分的な欠損がみられる。ハンノキ節の半割材を素材とし、表裏両面および両側面に施された加工によって、板状に整形されている。a面は木表側であり、両側縁寄りには所々に加工が施されているものの、樹皮の剝がれた自然面を大きく残している。a面の中央面には、全体の長さをほぼ均等に4分割する位置に作られた、深さ約1cm の抉りが3ヶ所認められる。建築部材と考えられる。

**第97図**から第110図には**建築部材**とその可能性の高いもの、および不明木製品を図示した。

第97図1は樹皮を残す心持ち材である。一端に加工痕が認められ、反対側は炭化面が確認されることから焼失による欠損である。建築部材と考えられる。

第97図2は分割材を素材とし、大別5面の加工によって一端を杭の先端状に尖らせた建築部材である。断面形は方形を呈しているが、尖端部側は不整円形に整形されている。

第97図3は分割材を素材とし、一端に突起部を作り出した建築部材である。側面には加工痕が観察され、断面形は多角形状である。突起部が確認される端部の逆側を欠損するが、徐々に細く細くなるものと推定される。

**第98図**1は樹皮を残す心持ち材を素材とし、一端に加工を施して突起部が作り出されている。その逆側の端部は欠損しているが、わずかに加工痕の一端が確認される。欠損部側には炭化面が残されている。建築部材と考えられる。

第98図2は分割材を素材とし、一端を側面から見て斜めに削り落とした建築部材である。その端縁から約45cm の位置に長さ10cm 弱、深さ約2.5cm の抉り部が形成されている。中央部には両端を除いて、焼けて炭化した面が大きく広がっている。

第98図3は分割材を素材とした建築部材である。一端を焼失により欠損する。側面のほとんどは割り裂き面であるが、部分的に加工痕が観察される。残存する一端には加工が施され、c面側から斜めに削り落とされている。

**第99図**1・2は分割材を素材とした建築部材である。一端を欠損する。割り裂きによって整形された角材であり、残存する一端に加工痕が認められる。2は遺存状態が良好ではないが、残存する端縁から約20cm の位置に浅い抉りが観察される。

第99図3は心持ち材の一端に抉り部を作り出した建築部材である。抉り部の作られた端部には加工が施され、尖端部を形成している。

第99図4は分割材を素材とした全長234.5cm の建築部材である。側面に明瞭な加工痕が残されており、断面の形状は多角形を呈している。一端に長さ9.5cm、深さ4.0cm の抉り部が作られている。

**第100図**1〜3は分割材を素材とした建築部材である。おもに割り裂きによって整形された角材であり、一端には尖端部を形成する加工が施されている。

第100図1の尖端部と逆側の端部には段が作り出され、先端の厚さは約2.5cm である。

第100図2の尖端部付近には焼けて炭化した面が部分的に観察される。尖端部の逆側を欠損している。

第100図3は尖端部側が薄く、逆側の端部に近付くにしたがって徐々に厚くなり、端部寄りに長さ約13.5cm、深さ1cm ほどの抉り部が形成されている。端部は約7cm の厚みをもっており、19cm ほどの長さで作り出されている。

**第101図**1は分割材を素材とした建築部材である。割り裂きによって整形された角材であり、一端には表裏両面および両側面に施した加工によって尖端部が形成されている。中央部と尖端部の逆側を欠損する。

第101図2は分割材を素材とした、やや扁平な角材状の建築部材である。一端に段が作り出されており、段から先の厚さは約1.5cmである。

第101図3は心持ち材の一端に約2.5cmの抉り部を作り出した建築部材である。抉り部の作られた端部先端をわずかに欠損しているが、加工によって尖端部が形成されていたものと考えられる。

第101図4は分割材を素材とした建築部材であり、加工によって一端に尖端部が形成されている。逆側の端部を欠損する。側面には明瞭な加工痕が観察され、断面形は多角形状を呈している。

**第102図**1は心持ち材を素材とし、側面の一部と一端に加工痕が残された建築部材である。一端を欠損する。端部に施された加工によって段が作られており、段から先の断面形は半円形を呈する。

第102図2は心持ち材を素材とし、側面に加工を施して一端に緩い弯曲部を作り出した建築部材である。弯曲部の先端は厚さの2分の1ほどを欠損するが、弯曲した側に加工が施され、尖端部を形成していたものと考えられる。逆側の端部には段が形成されており、その先を欠損している。

第102図3は心持ち材の側面に加工を施し、一端が徐々に細く作られている。その加工とは別に、側面の一部に加工痕が残されている。中央部に焼けて炭化した面が確認される。建築部材と考えられる。

**第103図**1は両端を欠損する建築部材である。分割材を素材とし、芯側が割り取られて台形状の断面形を呈している。両端はともに形成された段の部分からの欠損である。上端から約30cmの位置にも長さ約9cm、深さ3.5cmほどの段が認められ、側面から見て一方を直角に、残る一方を斜めに切り込んで作り出されている。

第103図2は長さ94.2cmの半割材である。両端を切断した直径15.5cmほどの丸太材を半割しており、一端から約26cmの位置に長さ4.2cm、幅5.5cm、深さ1.2cmの抉りが作られている。建築部材と考えられる。

**第104図**1は一端と側縁の一方を欠損する厚さ1.5cmの板材であり、側縁は緩く外弯している。残存する端部寄りに長軸3.5cm、短軸2.1cmの楕円形の孔が穿たれている。建築部材と考えられる。

第104図2は用途不明の板材である。オニグルミの板目材を用いている。

第104図3は樹皮を残す、長さ53.9cmの半割材である。両端の加工痕と枝打ち痕が確認される。用途は不明である。

第104図4は分割材を素材とする断面長方形の角材であり、一端を加工して杭の先端状に尖らせている。

第104図5は用途不明の分割材である。

第104図6は分割材の一端に加工を施し、尖端部を作り出している。逆側の端部には焼けて炭化した面が残されており、焼失による欠損である。

**第105図**1は割り裂きによって作られた角材である。先端寄りにわずかに幅が広くなる部分があり、先端は薄く、加工痕が残されている。一端を欠損する。建築部材と考えられる。

第105図2は樹皮の剝がれた自然面を残す分割材である。先端に表裏両面および両側面からの加工が施されている。建築部材と考えられる。一端を欠損する。

第105図3は割り裂きによって作られた、やや扁平な角材である。一端と側面の一部に焼けて炭化した面が観察される。

第105図4は樹皮の剝がれた自然面を残す分割材である。先端に加工痕が観察される。一端を欠損している。

**第106図**1は一端を欠損する、やや厚手の柾目の板材である。

第106図2は一端に加工痕が残された分割材である。中央からもう一方の端部にかけて焼けて炭化した面が広がっており、先端は焼失によって欠損している。建築部材と考えられる。

第106図3は一端に加工痕が残された分割材である。一端を欠損している。建築部材と考えられる。

第106図4は割り裂きによって作られた、やや扁平な角材であり、両端は折り取られている。建築部材と考えられ

る。

**第107図**1～4は建築部材と考えられる分割材である。おもに割り裂きによって整形されており、断面形は方形に近く、角材を意識したものと推定される。2と4には焼けて炭化した面が認められ、2の一端の欠損は焼失によるものである。

**第108図**1・2は先端に加工痕が残された分割材であり、建築部材と考えられる。一端を欠損している。1は角材に近く、2はやや扁平で、欠損する側に向かって幅が徐々に広くなっている。2には焼けて炭化した面が広く確認される。

第108図3は両端を欠損する、分割材を素材とした角材である。一端は焼失による欠損である。建築部材の可能性がある。

第108図4は両端と一方の側縁の大部分を欠損する柾目の板材である。建築部材の可能性が考えられる。

**第109図**1は根本側を斜めに切り落とされた心持ち材であり、枝打ち痕も観察される。先端を欠損している。用途は不明である。

第109図2は一端を杭の先端状に尖らせた心持ち材であり、5ヶ所の枝打ち痕が確認される。建築部材と考えられる。

第109図3と4は一端に尖端部を作り出した心持ち材である。ともに表面に樹皮を残している。用途は不明である。

**第110図**1は中央に枝打ち痕が確認される真直ぐな心持ち材である。一端を欠損している。用途は不明である。

第110図2は樹皮の残る心持ち材であり、両端に切断痕が残されている。

第110図3は両端に加工が施された、樹皮の残る心持ち材である。下端側は加工と割り裂きによって円を四分割した断面形状を呈している。上端側には両側面を削って作り出された凸字状の突起が認められる。建築部材の可能性がある。

**第111図**1・2は心持ち材の打ち込み杭である。ともに上端を欠損する。

第111図1の先端は平坦であり、加工痕が明瞭に観察される。

第111図2は加工を施して尖端部を作出している。加工は全周には及んでおらず、3分の1ほどは樹皮の剝がれた自然面を残している。

第111図3は一端に切断痕が残された心持ち材である。他に加工痕は観察されず、枝打ちによって落とされた枝の可能性がある。

第111図4は先端に加工痕が観察される心持ち材である。数ヶ所の枝打ち痕が確認される。

**第112図**から第115図は打ち込み杭である。建築部材の転用と考えられるもの（第112図1～3、**第113図**1・3・4）と、心持ち材の一端に尖端部を作り出したもの（第113図5・6、**第114図**1～5、**第115図**2）が多く、半割材を素材として尖端部を作り出したもの（第114図6、第115図3）もみられる。

第112図4と第115図1は分割材を素材とし、加工が施されて作られた尖端部付近のみが残存する杭である。

第113図2は分割材を割り裂きと加工によって整形した板材であり、側面から見て先端が薄く作られている。

第113図4は心持ち材を素材とし、突起を作り出した端部を下にして打ち込んでいる。長さ約8.5cm、深さ2.5cmほどの抉りが認められ、抉りは側面から見て一方を直角に、残る一方を斜めに切り込んで作り出されている。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石斧、石鏃、石錐、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、管玉、紡錘車、砥石、石製品、礫石器、礫片などである。第4分冊第229図と第230図の1～5に主な石器・石製品を図示した。

**第229図**1はa面の左側面に自然面を残す剝片を素材とした削器である。a面右側縁は表裏両面への細部調整によ

って直線的に整形され、左側縁の表裏両面と末端のｂ面側にも粗い調整が施されている。末端の表裏両面に明瞭な光沢が観察されるが、ｂ面に施された剝離面のほとんどに切られている。

第229図２は剝片の打面側と末端にツブレ状の剝離が認められるピエス・エスキーエである。ｂ面は両極剝離による剝離面である。１、２ともに用いられている石材は流紋岩である。

第229図３は剝片の表裏両面に粗い剝離を施した細部調整剝片である。ａ面の中央に節理面が残されており、右側面には部分的に自然面が残されている。石材はチャートである。

第229図４は今回の調査によって出土した中でもっとも小さい石斧である。最大幅は刃部にあり、断面形は側面をもつ凸レンズ形を呈している。側面は平坦ではなく、膨らみをもっている。刃部を除く器体の表面全体は長軸方向に近い擦痕を伴った研磨面に覆われているが、ｃ面の基端には研磨面下に剝離面が観察される。ａ面の刃部には短軸方向に近い擦痕を伴っている。研磨面と研磨面を分ける稜線は明瞭である。刃縁は磨滅しており、欠損している刃縁中央部を除き、にぶい光沢が観察される。また、ａ面右端の刃縁には使用によるものと考えられる長軸方向の線条痕が認められる。ｃ面の基端も磨滅しており、着柄にかかわるものと考えられる。石材は黒色頁岩である。

第229図５はｂ面に明瞭な光沢が認められ、ａ面の一部に長軸方向の擦痕を伴う磨り面が観察されることから大形板状石器を転用したものである。ａ面左端は磨滅しており、右側縁上端の角には敲打痕が認められる。敲打具として使用されたものと考えられる。石材は結晶片岩である。

第229図６は大型板状石器に多用されるデイサイト質凝灰岩を石材としており、表裏両面に調整が加えられている。上端面は両極剝離によって折りとられており、ａ面の左端で著しい磨滅が観察される。ａ面左側縁の丸みのある突出部と右側縁の上端寄りおよびｂ面の下端縁には、敲打による損傷と著しい磨滅痕が認められ、ａ面左側縁の磨滅が強い。また、表裏両面の中央部は全体的に弱く磨滅している。

第229図７と８は安山岩を用いた大型板状石器である。

第229図７は研磨によって刃部が作り出されており、研磨面には刃縁に平行する方向と右下がりの擦痕が観察され、表裏両面とも部分的に光沢に覆われている。刃部以外の縁辺は折りとられ、ところどころに敲打痕と剝離面が認められる。刃部破損後に転用されており、刃部を切る剝離面に敲打痕が観察される。刃部以外の縁辺にみられる敲打痕と剝離面も転用後の可能性があるが、折りとりに伴って施した調整とも考えられるので断定できない。ａ面の上半には弱い磨滅痕が面的に認められる。

第229図８は折りとり面である上端面からｂ面側へ連続した剝離が施されている。この調整によって鋭角な縁辺が落とされ、上端面の厚みが減じられている。ａ面右側面も折りとられ、左側縁はａ面からの剝離によって整形されている。刃部の表裏両面には光沢が顕著に認められる。

**第230図**１は珪質頁岩製の管玉である。上下両端面は平坦で、側面と両端面を分ける稜線は鋭く明瞭である。側面の研磨面には長軸方向の擦痕が伴っている。穿孔は両端面から行われており、孔は非常に小さい。

第230図２は自然礫を素材とした石製品である。剝離によって加工が加えられ、図示した面の中央に断面Ｕ字形の研磨痕が観察され、研磨痕は右側縁寄りで屈曲している。石材はやや軟質の珪質凝灰岩である。

第230図３はやや粗目の砂質凝灰岩の礫を素材とした砥石である。ａ面の中央に著しい磨痕が広く認められ、左側縁にも磨痕が部分的に観察される。上端縁には中央の磨痕から長軸方向に延びる細い溝状の磨痕がみられる。中央の広い磨痕は短軸方向に弯曲している。ｂ面の中央やや下端寄りには凹み部があり、遺存状況は良好ではないが磨痕が観察される。

第230図４は上半を欠損し、下端面の２分の１以上が剝落した紡錘車である。側面は工具によって削られて整形されており、明瞭な加工痕が認められる。下端面は研磨によって仕上げられ、研磨に伴う擦痕が観察される。中央の孔には穿孔方向の擦痕が認められる。用いられている石材はデイサイトである。

第230図５はやや粗目の砂質凝灰岩の礫を素材とした砥石である。表裏両面に磨痕が認められるが、ａ面側で著しい。ｂ面の磨痕は広く観察されるが、ａ面に比べそれほど平滑ではない。ａ面では中央から右側にかけて磨痕が認められ、右側の部分が平滑で光沢も観察される。中央部はゆるく凹み、敲打痕が認められる。ａ面下端も磨られて平坦な面を形成している。

第230図６はSR １自然流路跡の３層から８層のいずれかに帰属する大形板状石器である。表面が自然面の剝片を素材としており、剝離と折りとりによって整形されている。ａ面右側面は両極剝離による折りとり面であり、それを打面として表裏両面に細部調整が施され、上端部の整形が行われている。刃部の表裏両面にも細部調整が認められ、顕著な光沢が認められる。石材は安山岩である。

### (6)　７層出土遺物

７層中より弥生土器、土師器、須恵器、木製品類、石器・石製品類が出土している。

［土師器］

土師器は９点図示した（第３分冊第144図１～９）。

１～３・５・６は坏で、１以外は黒色処理されている。１は内弯し、底部は平底である。２は丸底で胴上部で屈曲する。胴部上端でくびれ、屈曲して口縁部は外反する。３の胴部は斜めに開き、屈曲して段が作出される。口縁部は外傾する。５・６は丸底のもので、５は段を持つ。丸底の底部にヘラ描きがある。

４は高坏で、坏部は底部と胴部の境に稜を持つ。

７・８は甕で、くびれた後口縁部は弱く外反する。８の胴部は長胴で、最大径は上部にある。

９は壺で、口頸部は外に大きく開く。胴部は球形で、最大径は中央部にある。

この他に７～３層出土の土師器坏を２点図示した（第145図７･11）。７は丸みの強い丸底で、中央部に段を持つ。黒色処理されている。11は丸底で下部に段を持ち、口縁部上端に沈線と思われる凹みがめぐる。摩滅が著しく、黒色処理されていたかは不明である。

［須恵器］

須恵器は１点図示した（第３分冊第144図10）。瓹で、口頸部を欠損している。胴部は扁球形を呈し、丸底になる。文様は細い隆線が２本めぐり、その間に波状文が施されている。

［木製品類］

７層で検出した杭は８本で、S50E65～80近辺で見つかっている。杭は近接しているものの、関連性は認められなかった。すべて打ち込み杭であり、古墳時代後期に属する。第４分冊第115図４から第117図２に図示した。

**第115図**４は心持ち材の一端に尖端部を作り出しており、ほぼ全周を削り出している。表面には樹皮が残されている。上端を欠損する。

第115図５は分割材を素材とした建築部材を転用したものであり、長さ6cm、幅約3.5cmの方形孔が穿たれている。尖端部は形成されておらず、そのまま打ち込まれている。上端を欠損する。

**第116図**１は割り裂きとわずかな加工によって尖端部を作り出した角材である。

第116図２は分割材を素材とした建築部材の転用と考えられ、加工と割り裂きによって一方を太く断面形が多角形状を呈するように整形し、残る一方は断面不整長方形に細く作られている。尖端部は形成されず、細い側を下にして打ち込まれている。側縁の一部を欠損する。

第116図３は心持ち材の一端に片面加工によって尖端部を作り出している。上端を欠損する。

**第117図**１は半割材の１側面の４分の３ほどに加工を施し、尖端部を作り出している。

第117図２は心持ち材の一端に大別４面による尖端部を作り出している。ａ面およびその裏側の加工痕は短い。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石斧片、石鏃、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、砥石、礫石器、礫片などである。第４分冊第228図の５～８に主な石器、石製品を図示した。

第228図５は大型板状石器に多用されるデイサイトを石材とした細部調整剝片である。ａ面下端縁の左側に連続的な剝離が施され、左端から３分の１程までの縁辺は敲打によってツブレ状を呈している。周縁にも疎らな剝離面が認められる。ｂ面は通常の剝離による剝離面ではなく節理等によって形成された面である。

第228図６と７は安山岩が用いられた大型板状石器である。

第228図６はおもにａ面上端縁に細部調整が施されて整形されている。光沢は明瞭ではない。

第228図７のａ面左側面は折りとり面であり、ａ面には部分的に自然面が残されている。上下両端には細部調整によって直線状の刃部が作られている。刃部の表裏両面には明瞭な光沢が観察され、刃部に施された剝離面を覆っている。

第228図８の砥石にはデイサイト質凝灰岩が用いられており、やや目の細い石材である。各面とも破損しており、ｂ面の裏面と下端面は欠損面である。それ以外の４面に著しい磨痕が認められ、ｂ面と上端面は幅が狭く、浅い擦痕を伴っている。ａ面右側縁の研磨面下にはｂ面から施された整形のための剝離痕と敲打痕が観察される。

第228図３は１層から７層のいずれかに帰属する両面調整石器である。１端を欠損している。表裏両面とも細部調整が施され、横断面形はレンズ状を呈する。石斧未成品の基部側の可能性がある。石材は珪化凝灰岩である。

第228図４は６層あるいは７層から出土した大型板状石器である。ａ面左側面は折りとり面であり、右側面は折りとりと剝離によって整形されている。上端面も折りとり面であるが、ａ面側に敲打痕を施し鋭角な縁辺をつぶしている。同様な敲打による縁辺の調整はａ面と左側面を分ける稜線の刃部側にも確認される。ｂ面右側縁の中央には剝離による縁辺の調整が観察される。刃部にはわずかな剝離を施しており、表裏両面には刃縁に平行する擦痕を伴った研磨面が認められる。この表裏両面の研磨面が明瞭な光沢に覆われていることから、研磨によって刃部を作り出したものと考えられる部分磨製の大型板状石器である。石材は安山岩が用いられている。

### (7)　６層出土遺物

６層中より弥生土器、土師器、石器類が出土している。

土師器は小片のため図示できなかった。ロクロは使用していない。

［石器類］

石器類は、石錐、削器、細部調整剝片、大型板状石器片、剝片、礫石器、礫片などである。第４分冊第228図の１と２に主な石器を図示した。

第228図１は横型剝片を素材とした細部調整剝片である。打面側と末端にツブレ状の細部調整がわずかに施されており、打面は細部調整によって失われている。石材は流紋岩である。

第228図２は黒曜岩を石材とする横型削器である。剝片の打面側と末端に細部調整がみられ、末端に刃部が形成されている。打面側はおもにａ面側への剝離であるが、末端では表裏両面に剝離が施されており、刃角は75～85度である。

## ２．SR2 自然流路跡出土遺物

### (1)　６層出土遺物

６層中より縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は2点図示した（第3分冊第7図1・3）。1は深鉢で、口縁部形態はオサエ目により小波状となる。胴部に縄文を施文している。3は鉢で、口縁部形態は波状を呈し、沈線が施されている。胴上部に4本からなる太い並行直線文、その下部に縄文を施文している。口縁部内面に段を作出している。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した（第3分冊第132図6）。壺で頸部は内傾し、屈曲して口縁部は内弯しながら外へ開くものである。口縁部形態は平縁である。調整は内外面ともミガキ調整が施されている。

土師器は小片のため図示できなかった。内黒の坏と思われる破片が出土している。

［石器］

石器は、石鏃、石錐、削器、細部調整剥片、大型板状石器片、剥片、石核、礫石器などである。第4分冊第289図5、6に削器を図示した。

第289図5は自然面打面で表面が自然面に覆われた剥片を素材とし、おもに表面側への細部調整を素材の末端に施して刃部を作出した横型削器である。細部調整はb面の刃部右半にもわずかに施されている。細部調整によって形成された刃角は65度前後である。

第289図6は表面に自然面を残す剥離面打面の剥片を素材とした削器である。左右両側縁におもに裏面から表面側への細部調整を施して刃部が作出されており、刃角はa面左側縁が55～65度、右側縁は65～75度である。5と6の石材はともに珪化凝灰岩である。

### (2) 5層出土遺物

5層中より弥生土器、土師器、大型板状石器片、剥片、石核、礫石器が出土している。

土師器は小片のため図示できなかった。ロクロ不使用の内黒坏が出土している。胴中央部に段を持ち、口縁部は外反する（第3分冊第145図7に類似）。

## 第4節　平安時代の遺構と遺物

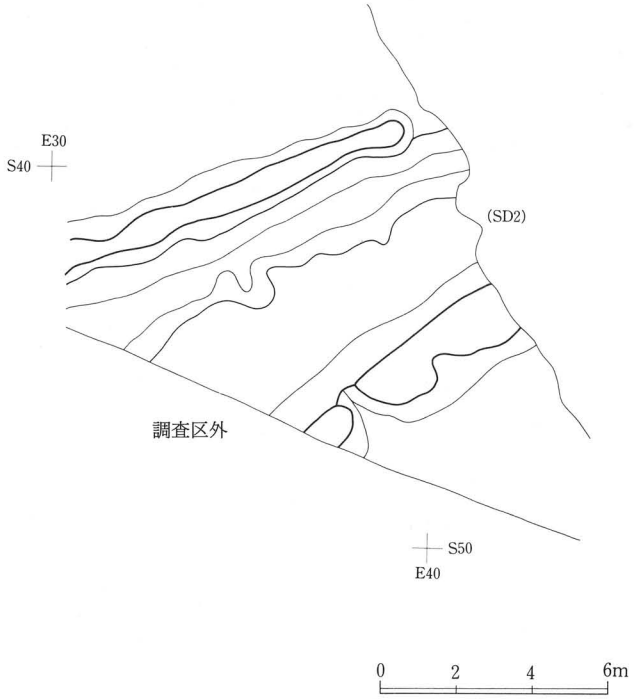
### 1．検出遺構

平安時代の遺構としては、調査区西側の南壁際で溝跡1条と畦畔状遺構を2条検出している。

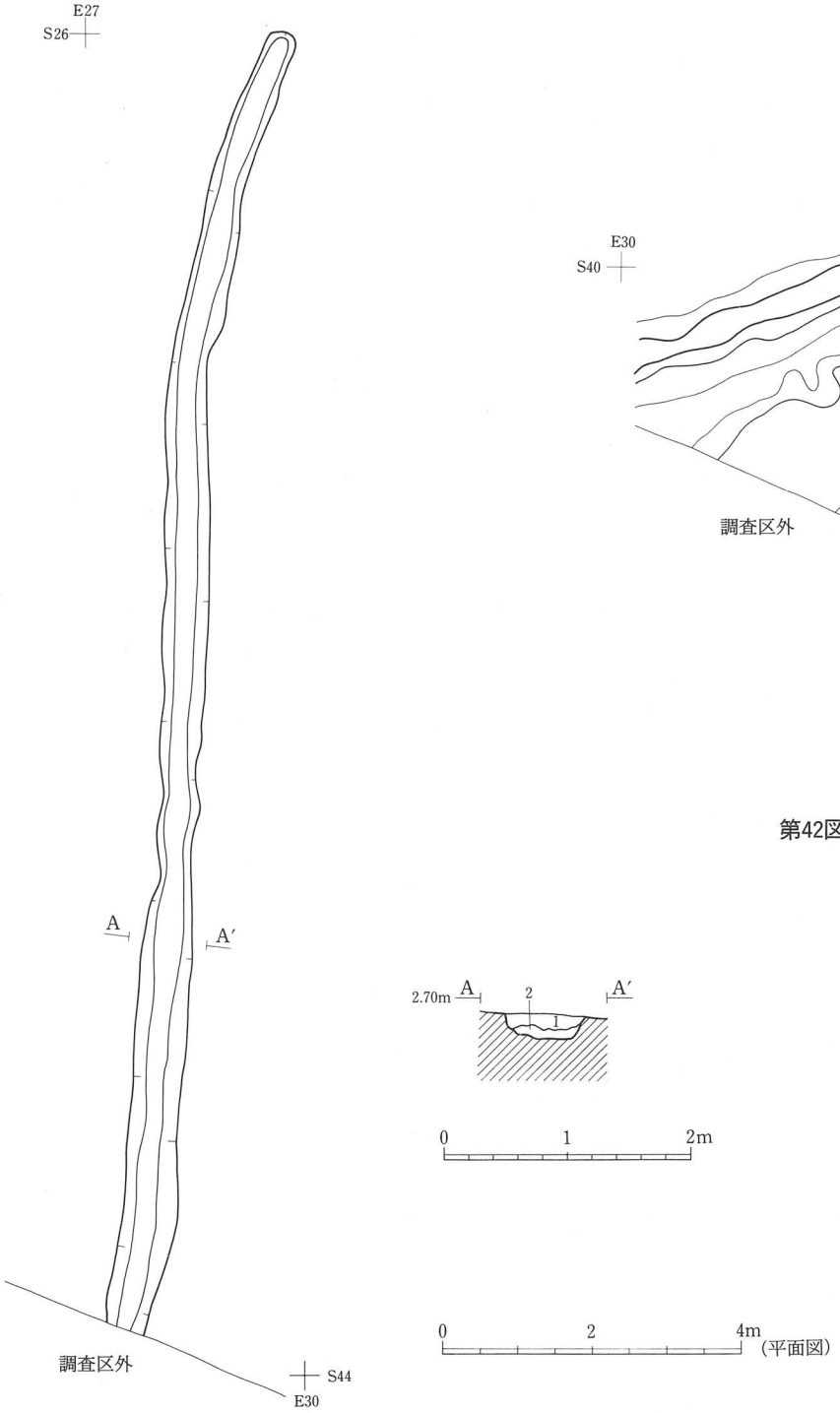
#### (1)溝跡

SD18溝跡　SR 1自然流路跡の堆積土の掘り込み作業中に確認された溝跡であり（第43図）、堆積土3層を除去した段階で検出されている。調査区南西部に位置し、南北方向に延びる溝跡で、上端幅40～72cm、下端幅20～38cm、深さ4～28cmである。底面はほぼ平坦であるが、北から南へ向かって徐々に低下している。S30付近に方向の換わる変換点があり、方向はS30付近より北ではN－15°－E、南ではN－3.5°－Eである。検出長は約17.6mであるが、さらに調査区外の南へ続くものと考えられる。断面形は逆台形を呈しており、壁面の立ち上がりは急激である。堆積土は黄灰色の粘土であり、SR 1自然流路跡の堆積土7層起源と考えられる、黒色ないしは黒褐色の粘土を小ブロック状に混入している。

堆積土中から時期を決定できる遺物は出土していないが、SR 1自然流路跡の堆積土2層が灰白色火山灰であり、堆積土3層や4層からロクロ使用の土師器が出土していることから、10世紀前半以前の平安時代と考えられる。




第42図　畦畔状遺構




第43図　SD18 溝跡

SD18 溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘　土 | 酸化鉄斑を含む。黒色粘土細ブロック(5mm 以下)、SR1-7 層土を少量含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘　土 | 黒褐色粘土ブロック(5cm 大)、黒色粘土細ブロック(5mm 以下)を多く含む。酸化鉄斑を含む。 |

第43図　土層註記

## (2)畦畔状遺構

調査区中央部西寄りの S40E30 区を中心として調査区南壁際で検出された 2 条の畦畔状の高まりである（第42図)。北東から南西に延びているが、北東側を近世の SD 2 溝跡に切られ、南西側は調査区南壁となるため部分的な検出にとどまっている。水田区画などを確認することができなかったため、「畦畔状遺構」として報告する。

北側の畦畔状遺構は幅82～173cm、高さ3.5～5cm で、方向は E－23°－N である。検出長は約9.8m であるが、さ

らに調査区外の西へ続くものと考えられる。南側の畦畔状遺構は幅248～285cm、高さ9.5～11cmで、方向はE－39°－Nであり、北側の方向とわずかに異なっている。検出長は約6.5mであるが、さらに東西へ続くものと考えられる。北側の畦畔状遺構の南に隣接して、幅180～300cmで、深さ5～13cmの溝状の落ち込みが認められる。

畦畔状遺構はSR 1自然流路跡の堆積土3層の高まりとして確認され、直上層の堆積土2層が灰白色火山灰であることから、10世紀前半頃の時期と考えられる。

## 2．SR1自然流路跡出土遺物

### (1) 5層出土遺物

5層中より弥生土器、土師器、木製品類、石器・石製品類が出土している。

［土師器］

土師器は1点図示した（第3分冊第145図5）。ロクロナデ使用の坏で、内面が黒色処理されている。

［木製品］

第4分冊第117図3には、打ち込み杭を図示した。層中より出土した土器から平安時代のものと考えられる。半割した材を素材とし、さらに割り裂きと加工によって整形している。大別4面の加工によって尖端部を形成する。上半を欠損している。

［石器・石製品］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧片、石鏃、石錐、掻器、削器、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、管玉、石皿、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊第227図に主な石器・石製品を図示した。

第227図1は石庖丁の未成品である。剥離による整形段階の資料であり、背部と側縁の一方の整形が行われている。粘板岩を石材としている。

第227図2は碧玉製の管玉である。下端面の孔の一部に紐擦れ痕が観察される。穿孔は上下両端面から行われており、中央よりやや上端寄りで接している。下端面からの穿孔は側壁に段差が認められることから1～2度の中断があったものと考えられる。上端には火ハネによって欠損している部分があり、その箇所から側面にかけて長軸方向に変色している。

第227図3は剥離面打面の剥片を素材とした削器である。素材剥片の表面は自然面であり、末端はヒンジフラクチャーである。両側縁におもにb面からa面側への細部調整が施されており、刃角は75～80度である。珪質頁岩を石材として用いている。

第227図4は表面に自然面を部分的に残す剥片を素材とし、裏面から表面側へ散発的な剥離が施された細部調整剥片である。a面の打面側に敲打によるツブレがみられることから、素材剥片は敲打に使用された石器の一部が剥がれたものである可能性が考えられる。石材は流紋岩である。

第227図5は剥片を素材とし裏面の打面付近と表面の一部にわずかに細部調整が施された細部調整剥片である。石材はデイサイト質凝灰岩が用いられている。

第227図6は剥離面打面の剥片を素材とした掻器である。表面には自然面が部分的に残されている。a面の右側縁と末端にb面側から大きな剥離が施され、その剥離面間にさらに加工が加えられている。刃角は65度前後である。裏面の打面付近は打面左側の大きな剥離によって薄く調整されている。石材はデイサイトである。

第227図7と8は安山岩を石材とする大型板状石器である。

第227図7のa面右側面は上端面からの打撃によって形成された剥離面であり、b面と上端面は自然面である。上端面と側面を打面としてb面側に剥離を加え、b面と上端面およびb面と側面からなる鋭角な縁辺が除去されている。刃部は直線的に整形され、a面と上端面および側面の交わる頂部は擦り落とされている。刃部の表裏両面に光

沢が観察され、特にａ面側で顕著である。ａ面中央には擦痕を伴う磨り面が認められるが平坦ではなく、磨り面の広がる方向に延びる浅い溝状を呈する部分がある。

第227図８のａ面左側面は３回の加撃によって切りとられており、上端は自然面である。刃部の表裏両面に明瞭な光沢が観察される。

第227図９と10は石皿の一部である。

第227図９は２分の１程を欠損する。扁平で円形を呈する礫を素材としたものと考えられ、片面に緩やかな凹みをもつ磨り面が広がっている。石材はデイサイトである。

第227図10は大半を欠損しているが、磨り面の磨痕が明瞭で、側面から裏面にかけて整形され曲面を呈していることから石皿と判断した。多孔質の安山岩を石材としているため磨痕は礫の表面の高い部分にのみ残されている。裏面から破損面にかけて焼けて黒変した部分が認められる。

### ⑵　４層出土遺物

４層中より弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、石器類が出土している。

**［土師器］**

土師器は１点図示した（第３分冊第145図２）。ロクロ不使用の坏で、内弯している。底部と胴部の境は不明瞭である。黒色処理されている。

**［赤焼土器］**

赤焼土器は１点図示した（第３分冊第145図１）。側面は外傾している。

**［石器類］**

石器類は、石斧片、石鏃、石錐、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、礫石器、礫片である。

第４分冊**第226図**７に大型板状石器を図示した。両側縁は折りとりと細部調整によって整形され、ａ面の下半と右側面には自然面が残されている。ａ面左側面が折りとり面であり、ｂ面左側縁には側面から連続した剥離が施されている。上下両端には光沢が観察されることから、ともに刃部として使用されている。ａ面の上端側の刃部には刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が認められ、光沢は表裏両面に明瞭に観察される。下端側の刃部にはｂ面側に顕著な光沢が認められる。用いられている石材は安山岩である。

### ⑶　３層出土遺物

３層中より弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、土製品、石器・石製品類が出土している。

**［土師器］**

土師器は１点図示した（第３分冊第145図８）。ロクロ使用の坏で、黒色処理されている。

**［赤焼土器］**

赤焼土器は２点図示した（第３分冊第145図３・４）。３は弱く弯曲し、４は外傾している。

**［土製品］**

土製品は１点図示した（第３分冊第153図45）。土器片製円盤で、土器の破片を素材としている。円盤の中央に孔が穿たれている。摩滅が著しく、欠損している。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石鏃、石錐、石匙、削器、ノッチ、細部調整剥片、大型板状石器片、剥片、石核、礫石器、砥石、礫片である。第４分冊**第226図**２～６に主な石器・石製品を図示した。

第226図２は縦型の石匙である。末端がわずかにヒンジフラクチャーとなっている剥片を素材としている。素材剥

片の打点の位置はつまみ部付近にあったものと推定されるが、つまみ部作出のための細部調整によって失われている。つまみ部は器体の長軸端部に作られており、a面左側はa面の後b面側への剝離を施し、右側はb面の後a面側への剝離によって形成されている。つまみ部以外の細部調整はa面右側縁にのみ施され、おもにb面からa面側への剝離である。刃角は40～50度である。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第226図3は剝片の両側縁にノッチ状の凹みが細部調整によって作り出されたノッチである。a面左側縁のノッチはa面からb面側への剝離によって作られ、右側縁はb面側への剝離を施した後、a面側への剝離によって作られている。石材はチャートである。

第226図4は剝片の両側縁に連続した細部調整を施し、素材剝片の打面部を除去した細部調整剝片である。形態から石鏃の失敗品である可能性が考えられる。石材は流紋岩である。

第226図5はb面の一部に自然面を残す剝片を素材とした削器である。a面に器体の上半部を大きく剝離した面があり、その左側縁に細部調整が施され刃部が作り出されている。刃角は80～85度である。用いられている石材は瑪瑙である。

第226図6はやや粗目の砂質凝灰岩を用いた砥石であり、a、b、cの各面に磨痕が認められる。a面の磨痕がもっとも顕著である。b面の中央には刃物を立てて研いだ条線状の痕跡が長軸方向に8条、短軸方向に1条確認される。

### (4) 2層出土遺物

2層中より弥生土器が出土している。

### (5) 1層出土遺物

1層中より弥生土器、土師器、須恵器、石器類が出土している。

**[石器類]**

石器類は、石庖丁、細部調整剝片、大型板状石器片、剝片、礫石器などである。

第4分冊第226図1に石庖丁の成品を図示した。2分の1程を欠損しているが、外弯刃半月形の石庖丁である。研磨面下に整形時の剝離痕と調整の敲打痕が観察される。整形時の剝離痕が表裏両面に大きく残されていることから、剝離作業のみで目的とする厚さまでほぼ仕上げられていたものと考えられる。紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。器体の表裏両面に光沢が認められ、特にb面の刃部付近で顕著である。用いられている石材は結晶片岩である。

## 3．SR2自然流路跡出土遺物

### (1) 4層出土遺物

4層中より縄文土器、土師器、赤焼土器、須恵器、石器類が出土している。

**[土師器]**

土師器は2点図示した（第3分冊第145図9・12）。ロクロ使用の坏で、内弯している。

**[赤焼土器]**

赤焼土器は2点図示した（第3分冊第145図10・13）。ロクロ使用の坏で、内弯している。13の外面に墨書があるが、判読できなかった。

**[石器]**

石器は、石斧、石鏃、石錐、削器、細部調整剝片、剝片、石核、礫石器である。

第4分冊第289図4に石斧を図示した。大半を欠損しており、基端部のみが残存している。表面の遺存状態は良好

ではなく製作に関わる痕跡の詳細な観察は困難であるが、研磨痕はほとんど確認されず、整形時の剝離痕と敲打痕が観察される程度である。断面の形状は楕円形で、側面は形成されていない。石材は花崗斑岩が用いられている。

### (2) 3層出土遺物

3層中より土師器、石器類が出土している。

[石器類]

石器類は、石斧、石庖丁、細部調整剝片、剝片、礫片などである。

第4分冊**第289図**2と3に主な石器を図示した。

第289図2は基端部の一部と刃部を欠損した石斧であり、敲打具に転用されている。欠損部には敲打痕とそれに伴う損傷の剝離面が認められる。断面の形状は楕円形で、側面は形成されていない。全体的に表面の遺存状態は良好ではなく製作痕跡の詳細な観察は困難であるが、研磨面下に敲打痕が確認される。石材は珪質凝灰岩が用いられている。

第289図3の石庖丁は未成品であり、剝離による整形、敲打による器体の調整、紐孔部の敲打による窪み部の形成を経て、回転によって紐孔を穿孔する段階まで作業が進行している。器体の調整のための敲打範囲はb面でほぼ全面に及んでいるのに対して、a面は部分的で中央に自然面を残している。紐孔穿孔の段階で折損の事故が起きており、b面にはもう一方の紐孔穿孔位置に敲打によって窪み部が形成されているが、対応するa面側には凹部は作られていない。背面には調整のための磨痕が部分的に残されている。石材はデイサイト質凝灰岩である。

### (3) 2層出土遺物

2層中より縄文土器、弥生土器、土師器、石器・石製品類が出土している。

[石器・石製品類]

石器・石製品類は石鏃、細部調整剝片、剝片、管玉などである。

第4分冊**第289図**1に管玉を図示した。上下両端面の孔の周囲は平坦ではなく磨耗してやや凹んでいることから、連ねられた隣接する玉と擦れ合ったものと考えられる。下端面と比べ上端面の凹みがより顕著である。穿孔は上下両端面から行われており、穿孔具の形状は先端でわずかに細くなるものである。石材は碧玉が用いられている。

### (4) 1層出土遺物

1層中より土師器、石鏃、石錐、細部調整剝片、剝片、石核、礫石器、礫片が出土している。

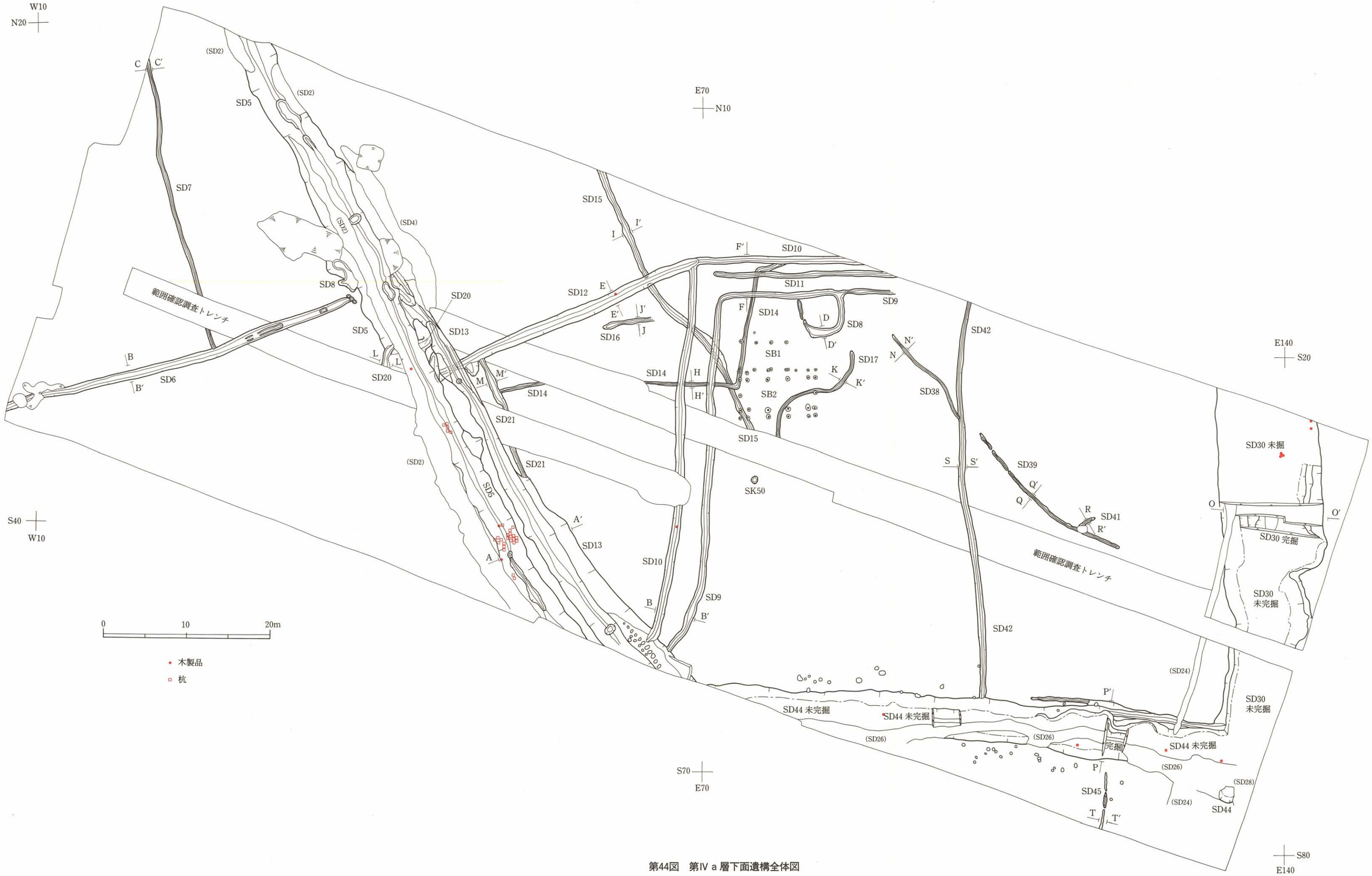
## 第5節　中世の遺構と遺物

### 1．第IVa層下面検出遺構と出土遺物

第IVa層下面で検出された遺構には、掘立柱建物跡2棟、溝跡22条、土坑1基があり、遺構は調査区全面に広がっている(第44図)。

### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区中央部の北側で、2棟隣接して検出されている。両建物跡の柱穴の切り合いはほとんどなく、柱穴がわずかに重複する部分が1ヶ所認められただけで、建物跡の新旧関係を確認するまでには至らなかった。




第44図　第Ⅳ a 層下面遺構全体図

SB 1 掘立柱建物跡　調査区中央部の北側、S10～20E70～80区にかけて検出された掘立柱建物跡である(第45図)。東西3間、北側列総長5.6m（柱間寸法185～190cm、平均187cm)、南側列総長5.54m（柱間寸法166～203cm、平均185cm)、南北1間（西列柱間寸法338cm、東列柱間寸法345cm）の東西棟建物跡で、東西柱列の方向はE－1°－Sである。

柱穴は直径約30cmの不整円形もしくは隅丸方形を呈し、検出面からの深さは58～72cmである。柱痕跡は円形で、直径10～18cmである。S2W2柱穴の北側約95cmの位置に、直径12cmの柱痕跡をもつ、直径約19cm、深さ40cmほどのピットが設けられている。

柱穴の堆積土中より弥生土器が出土している。

SB 2 掘立柱建物跡　調査区中央部の北側、S20E70～80区にかけて検出された掘立柱建物跡であり(第45図)、SB 1掘立柱建物跡の南に隣接する。南北両側に廂もしくは縁の付属する東西5間、総長9.26m(北側列柱間寸法：西より87cm・250cm・247cm・246cm・96cm、南側列柱間寸法：西より99cm・241cm・247cm・246cm・93cm)、南北4間、総長5.65m（西側列柱間寸法：南より93cm・186cm・187cm・99cm、東側列柱間寸法：南より97cm・186cm・183cm・99cm）の東西棟建物跡で、東西柱列の方向はE－2°－Sである。

柱穴は上端では19～88cmの不整形を呈しているが、上端の崩れ部分を除くと直径約30cmの不整円形もしくは隅丸方形のものが多く、長軸40～45cm・短軸30cm前後の楕円形を呈する柱穴も確認される。廂もしくは縁の柱穴は、身舎の柱穴に比べ、若干小さい傾向がある。検出面からの深さは46～86.5cmである。柱痕跡は円形で、直径12～17cmである。

廂もしくは縁の柱列のS5W4柱穴の東に118cm離れて長軸20cm・短軸19cmの柱穴が設けられている（S5W5柱穴)。S5W6柱穴・S5W7柱穴とともにSB 2掘立柱建物跡の中では小型の部類の柱穴であり、深さ24～34cmの隅丸方形を呈している。

柱穴の堆積土中より弥生土器、石鏃が出土している。

### (2) 溝跡

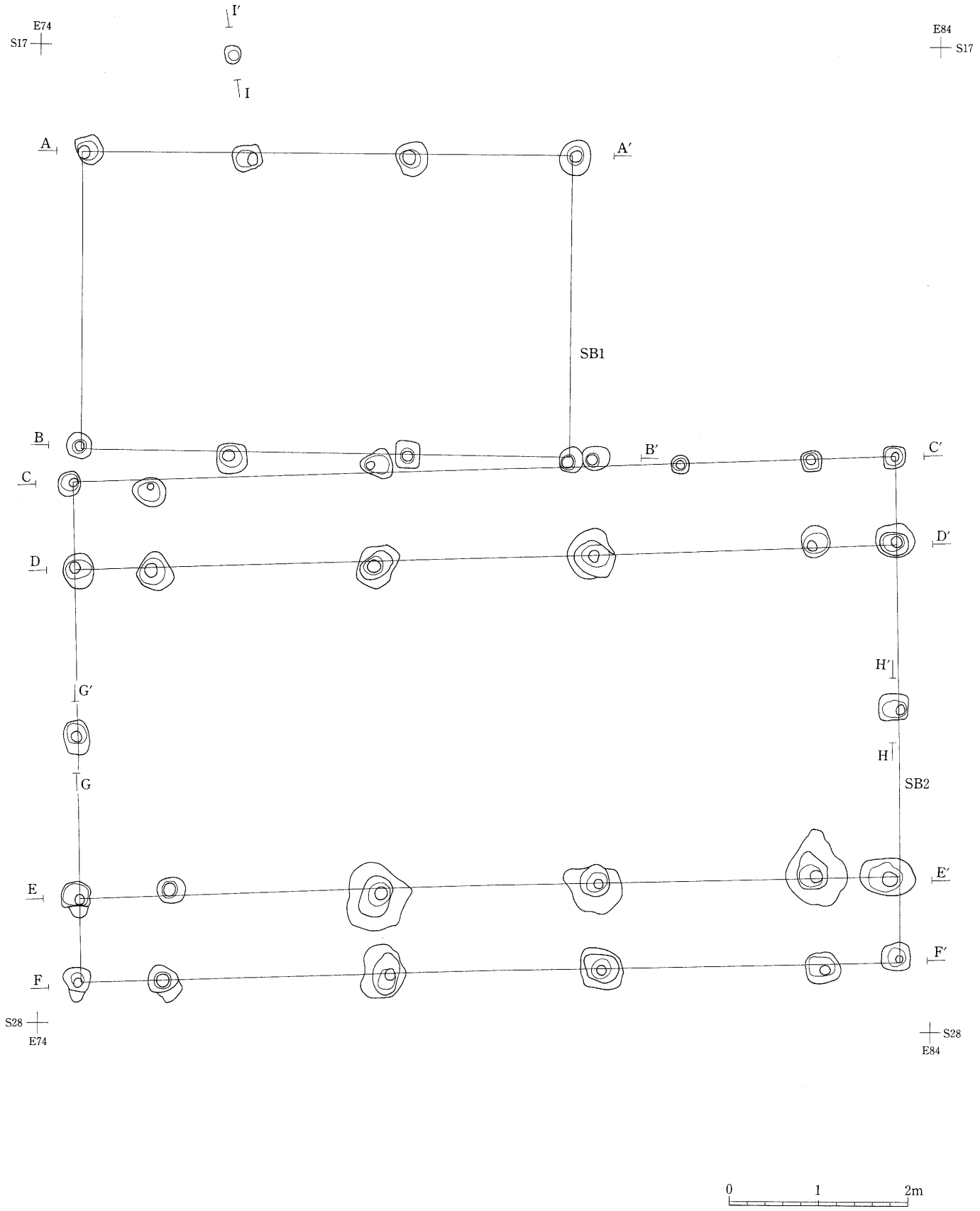
溝跡は22条検出されており、調査区中央を中心に、ほぼ全面に広がっている。

SD 5 溝跡　調査区西部から中央部にかけて検出された溝跡であり、わずかに弯曲しながら北西から南東へ延びている(第44図)。上端幅382～718cm、下端幅19～98cm、深さ102～157cmである。底面は北から南へ向かって徐々に低下しており、所々に楕円形や溝状の落ち込みが認められる。方向はN－28°－Wである。検出長は約79.2mであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと考えられる。断面形はU字形を呈し、上端近くで開きが大きくなる(第50図)。堆積土は粘土であり、8層に分層される。1～3層は灰色、4層はオリーブ黒色、5・6層は灰色、7層は明緑灰色、8層は暗緑灰色を呈する。1層には酸化鉄斑が観察され、2・3・5・7・8層には細砂を含んでいる。3層と5層には植物遺体がみられる。

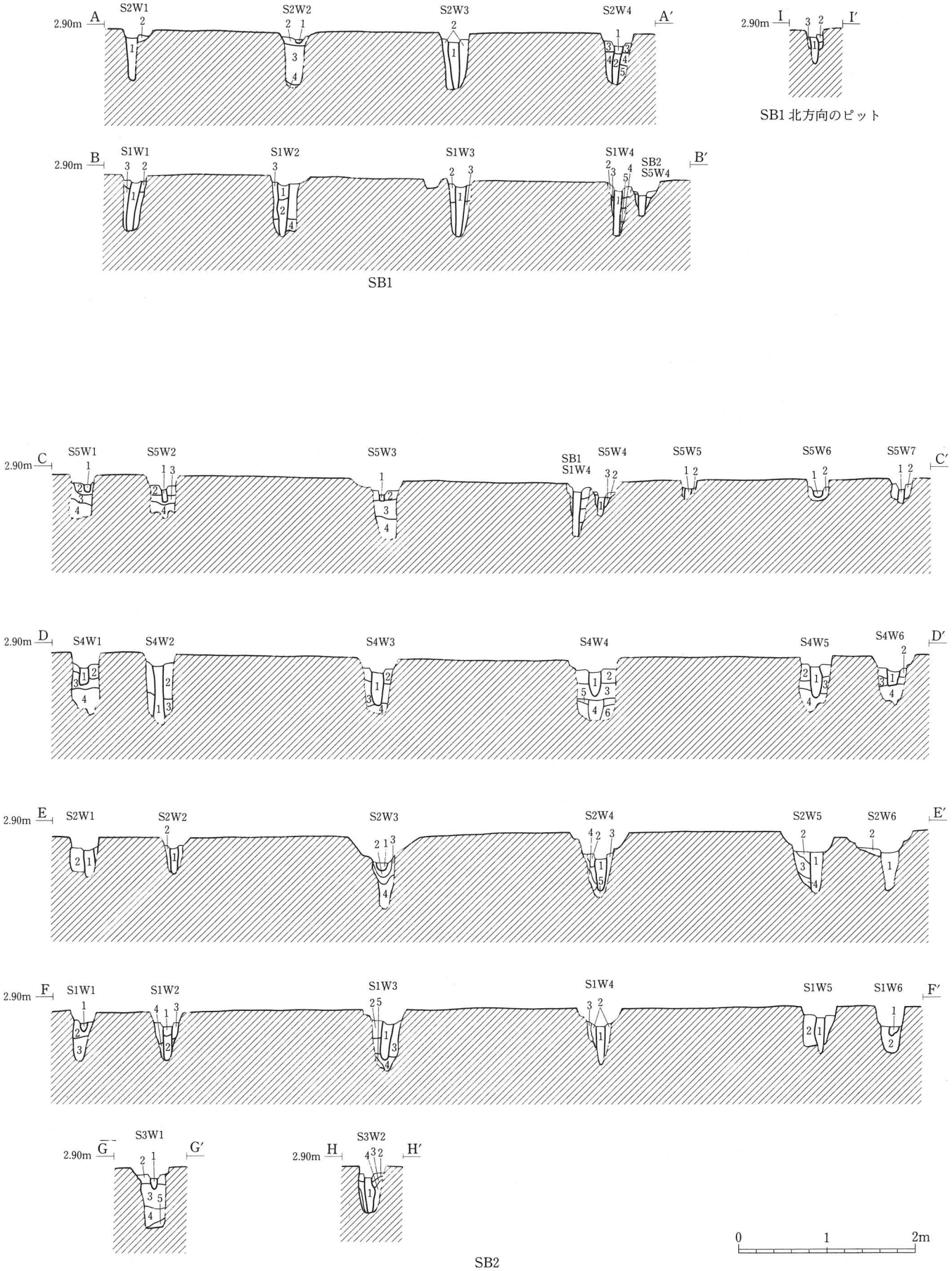
SD 2・4溝跡に切られ、SD12・13溝跡を切っている。SD12溝跡は本溝跡に切られて途切れており、何らかの関連を想定させるが、断面観察の結果によると新旧関係は確実であることから、本溝跡はそれ以前に存在した溝跡と同位置に再掘削された遺構の可能性が考えられる。

第47図に打ち込み杭の分布状況を図示した。E39S28区で5本、E45～47S40～44区で20本、E47S46区で2本確認されている。L－941の打ち込み杭の西から第4分冊第296図4に図示した小刀が出土している。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、木製品類、石器・石製品、金属製品が出土している。




第45図　SB1・2 掘立柱建物跡




第46図　SB1・2 掘立柱建物跡他断面図

SB1 掘立柱建物跡　S1W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5Y4/1 灰色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層、SR2－1層をブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |

SB1 掘立柱建物跡　S1W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状に含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | SR2－1～4層をブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 粘土 | SR2－3層を小ブロック状に含む。 |

SB1 掘立柱建物跡　S1W3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片を含む。 |
| 2 | 5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | |

SB1 掘立柱建物跡　S1W4

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | SR2－1層をブロック状に含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | SR2－3層をブロック状に含む。 |
| 4 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土 | SR2－3層をブロック状に含む。 |
| 5 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土 | |

SB1 掘立柱建物跡　S2W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状にわずかに含む。 |
| 2 | 10YR7/1 灰白色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |

SB1 掘立柱建物跡　S2W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | |

SB1 掘立柱建物跡　S2W3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状に含む。 |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB1 掘立柱建物跡　S2W4

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片を含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | |
| 3 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 第VI層を粒状に含む。 |
| 5 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S1W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S1W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 炭化物片を全体的に含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 10YR2/1黒色シルトを粒状にまばらに含む。 |
| 4 | 10YR2/3 黒褐色 | 粘土 | 10YR2/1黒色シルトを粒状にまばらに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S1W3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片、黒色粘土(粒状)をわずかに含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層SR1－1層をブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | |
| 5 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を多量に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S1W4

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5Y3/2 オリーブ黒色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状もしくは、ブロック状に多く含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状にわずかに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S1W5

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に多量に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S1W6

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に多量に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S2W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S2W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | SR2－1層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S2W3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | 第VI層SR2－1層を小ブロック状にまばらに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S2W4

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |
| 5 | 7.5YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S2W5

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状に含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状にまばらに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S2W6

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状に含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S3W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 炭化物片を含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 3 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | SR1－1層を粒状に含む。 |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 5 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S3W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片を多く含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に多量に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S4W1

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 第VI層、SR2－1層を小ブロック状に多く含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に多量に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S4W2

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片、第VI層(粒状)をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層、SR2－1層を小ブロック状に多量に含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層をブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S4W3

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状にまばらに含む。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状にまばらに含む。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | |
| 4 | 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 | シルト質粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S4W4

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状にまばらに含む。 |
| 3 | 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 4 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 5 | 7.5YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 6 | 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 砂を全体的に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S4W5

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状にまばらに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S4W6

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片をまばらに含む。 |
| 2 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | SR2－3・4層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | SR2－1層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |

第46図　土層註記 (1)

SB2 掘立柱建物跡　S5W1

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 第VI層を粒状にまばらに含む。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘　土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | SR2－1 層を小ブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 粘　土 | 3 層を小ブロック状にまばらに含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S5W2

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 第VI層、SR2－1 層を粒状に含む。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 3 | 10YR2/1 黒色 | 粘　土 | |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S5W3

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘　土 | |
| 4 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 粘　土 | SR2－3 層を小ブロック状に含む。 |

SB2 掘立柱建物跡　S5W4

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片、第VI層(粒状)を含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S5W5

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片を含む。 |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S5W6

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 炭化物片を多く含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | |

SB2 掘立柱建物跡　S5W7

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | |

SB1 掘立柱建物跡の北方向のピット

| 層 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 2.5Y6/3 にぶい黄色 | 粘土質シルト | 白色の微砂を含む。 |
| 3 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 第VI層を小ブロック状にまばらに含む。 |

第46図　土層註記 (2)

［磁器］

磁器は 1 点図示した(第 3 分冊第147図10)。中国青磁で龍泉窯系の皿または鉢と思われる。

［陶器］

陶器は 9 点図示した(第 3 分冊第147図11～第148図 7 )。在地産の甕(第147図11)・鉢(第148図 6 )・擂鉢(第148図 7 )、常滑の甕(第147図12、第148図 5 )・鉢(第148図 2 )、宮城県白石窯の壺(第148図 1 ・ 3 )・鉢(第148図4？)である。第148図4の外面にスス、内面にコゲが付着している。また、内面に剝落がある。第148図 7 の擂目は 5 条である。

［木製品類］

木製品類は板材と打ち込み杭である。第 4 分冊第127図から第129図に図示した。

**第127図** 1 ・ 2 は板目のクリの板材である。 1 は両端を欠損しており、両端には焼けて炭化した面が確認される。 2 は厚さ1.3cm の板材を長さ30cm 強の長さに切断しており、一端は斜めに断ち切られている。ともに用途は不明である。

第127図 3 から第129図は打ち込み杭である。すべて上端を欠損している。心持ち材を素材とし一端に尖端部を作り出したものが最も多く、25点中19点を数える。残る 6 点は半割材が 3 点（第128図 4・5 、第129図12)、分割材が 3 点（第127図 9 、第129図 2 ・10）である。尖端部を長く明瞭に作り出したものは少なく、切断痕状の短い尖端部を持つものが多い。

第127図 3 ～ 5 は心持ち材であるが、表面を薄くていねいに削り取った痕跡が確認され、表面に残る凹凸を調整し、先端側の断面形が円形を呈するように整形している。尖端部作出は加工と加工面から連続する割り裂きによって行われている。

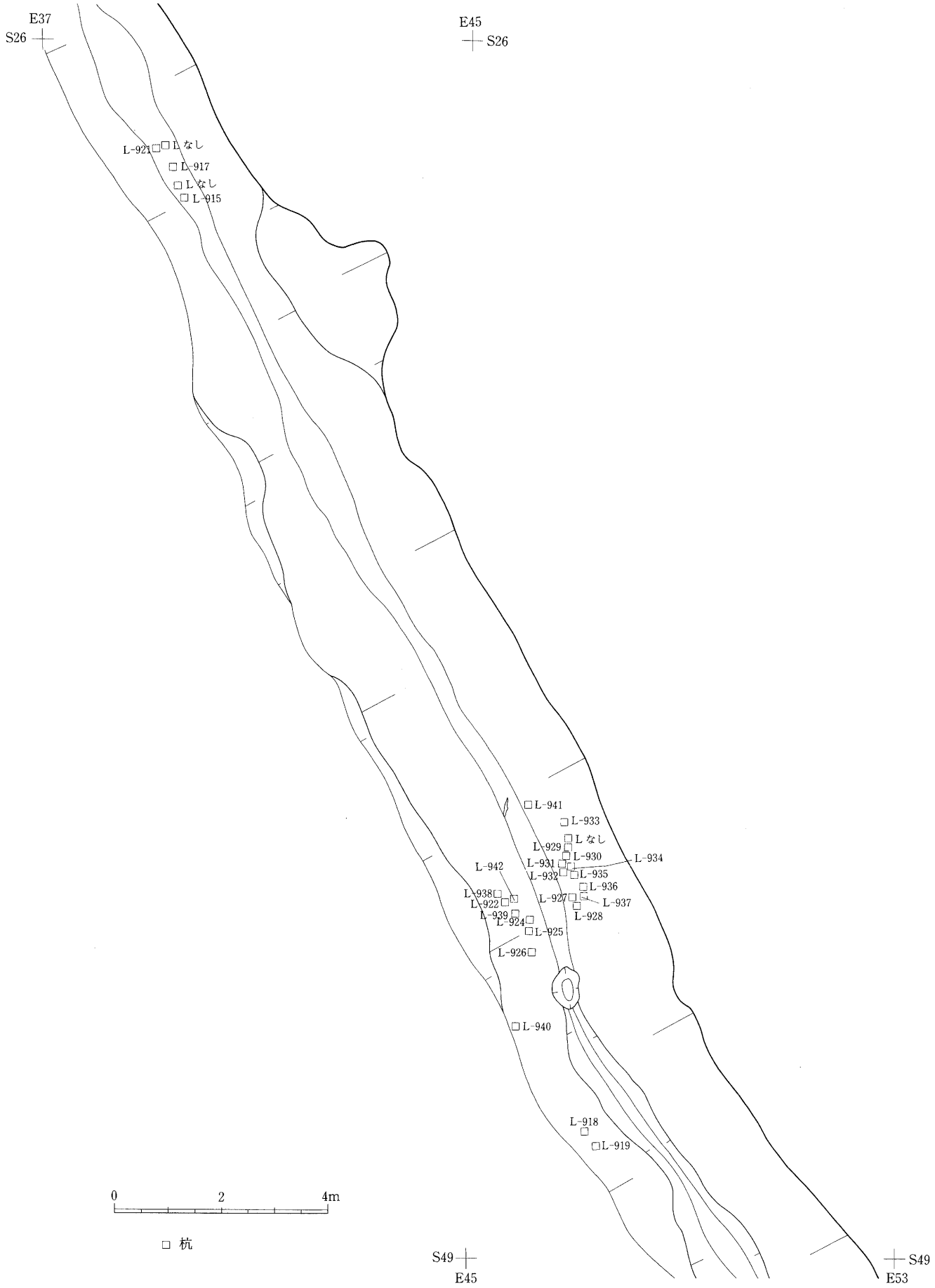
第127図 6 ・ 7 は心持ち材の先端に大別 2 面の加工によって尖端部を作り出している。

第127図 8 は残存部の中央やや上端寄りに加工痕が認められる。加工の施された部位から先端にかけて割り裂かれ、断面形は半割材のような半円形を呈している。先端は切断痕に近く、明瞭な尖端部は形成されない。

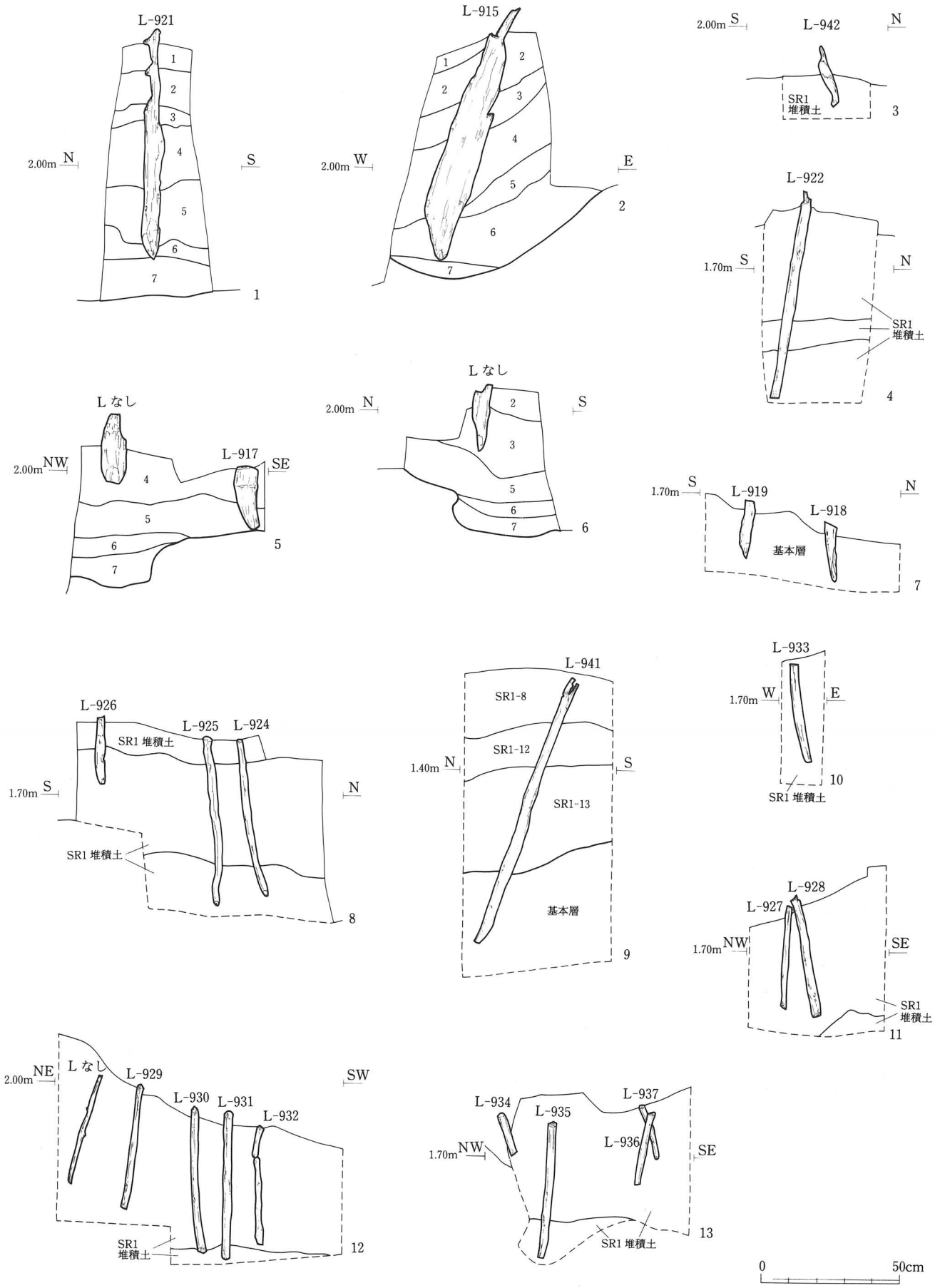
第127図 9 は分割材の細い側の一端に尖端部を作り出している。断面形は割り裂きと加工によって四辺形を呈しており、建築部材の転用の可能性が考えられる。

**第128図** 1 は心持ち材の先端に加工を施し、長い尖端部を作り出していたものと推定されるが、先端を欠損している。

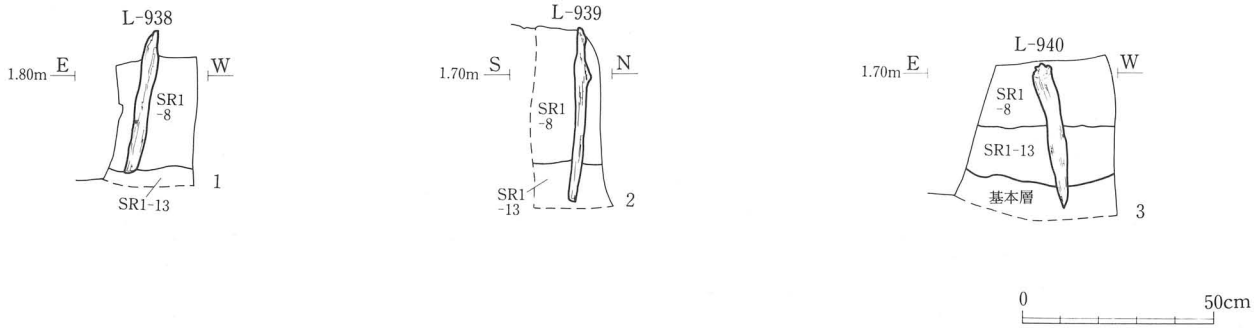
第128図 2 の先端には切断痕が認められ、大別 1 面の加工痕が観察される。




第47図　SD5 溝跡木製品出土状況




第48図　SD5 溝跡検出杭断面図 (1)




第49図　SD5 溝跡検出杭断面図 (2)

第128図 3 の先端には加工痕がわずかに観察されるが、焼けて炭化した面が広がっており、加工とともに焼け焦げによって尖端部が形成されている。

第128図 4 と 5 は半割材の一端の表裏両面と両側縁に加工を施し尖端部を作り出している。両側縁の加工痕は広い範囲で観察されるのに対し、樹皮の剝がれた自然面と割り裂き面の加工は先端寄りにのみ認められる。肉眼観察では 4 と 5 は同一の樹種と判断される。

**第129図** 1 ・ 2 は先端のみ残存している。 1 は心持ち材、 2 は分割材を素材とするが、加工方法は類似しており、尖端部は短く多面体状を呈している。

第129図 3 の尖端部を形成する加工は粗く、面ごとの加工痕の範囲は異なっている。尖端部寄りに枝を落とした加工痕が確認され、二叉の枝を素材として、細いほうの枝を落として太い側に尖端部を作り出している。

第129図 4 は側面から見て斜めに切り落とす大別 1 面の加工によって、尖端部を形成している。

第129図 5 ～ 9 は切断痕状の加工面によって、短い尖端部が形成されている。

第129図10は四分割材を素材とし樹皮の剝がれた自然面を残している。先端を欠損する。

第129図11の a 面には尖端部寄りに刃物の刃先が入った痕跡が 3 ヶ所確認され、いずれも尖端部からの切り込みである。加えて尖端部は短く、断ち切るような加工によって形成されていることから、切断痕を先端として使用したものと考えられる。

第129図12は半割材の端部に大別 3 面の加工によって短い尖端部を形成している。表面に樹皮を残す。

第129図13は 1 面に長い加工面が観察され、その周囲に短い加工を施して尖端部を形成している。先端をわずかに欠損する。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、砥石、硯、礫石器、礫片などである。第 4 分冊第213図 4 ～10と第214図に主な石器・石製品を図示した。

**第213図** 4 は石庖丁の未成品であり、剝離による器体の整形段階のものである。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第213図 5 ～ 7 は石斧である。用いられている石材は 5 が角閃岩であり、 6 と 7 はデイサイト質凝灰岩である。

第213図 5 は太型蛤刃石斧の基部である。研磨痕下に敲打痕が観察される。転用されており、b 面のほぼ全面と a 面の左側に部分的に磨痕が残されている。また刃部側にもほぼ平坦な磨痕が認められ、中央部でわずかに膨らんだ面となっている。SR 1 自然流路跡の堆積土13層中より出土した Kc-123 (第 4 分冊第286図 1 ) とともに、中部地方でベンガラを磨りつぶすために用いられる磨石に類似した形状を呈しているが、顔料の付着は確認されない。

第213図 6 は刃部側を欠損する石斧である。断面形は円形に近い楕円形を呈している。表面は全体的に風化してお

り、製作にかかわる痕跡などの詳細な観察は困難であるが、研磨面下に敲打痕が観察される。基部中央のｃ面側には火熱による火ハネ痕が残されており、さらに基端側は焼けて黒変している。

第213図７は扁平片刃石斧の刃部の一部分である。使用による刃こぼれによって生じた破片であり、末端はステップ・フラクチャーの状態である。刃面には右下がりの擦痕が観察される。

第213図８は有茎の石鏃である。表裏両面の中央に、細部調整の剝離面とはパティナの異なる、素材剝片の剝離面が残されている。石材は珪質頁岩である。

第213図９は自然面打面の剝片を素材とした削器である。素材剝片の末端はヒンジ・フラクチャーの状態であったものと考えられ、その形状を一部利用して、表面から裏面側へ細部調整を施し、刃部を形成している。刃角は65～80度である。側縁には表裏両面に細部調整が施されている。石材はチャートが用いられている。

第213図10は節理面打面の剝片を素材としたピエス・エスキーエである。ａ面の上端縁と下端縁、ｂ面の左右両側縁、ｂ面の左側縁の下端寄りと右側縁の上端寄りが対になる、３対の細部調整が認められる。用いられている石材は瑪瑙である。

**第214図**の１～３は板状節理を有する安山岩を石材とする大型板状石器である。

第214図１のａ面左側面は折りとり面であり、上端縁から右側縁にかけて細部調整が施され整形されている。特に上端縁の細部調整は入念で、わずかに磨滅している。刃部の表裏両面には光沢が観察されるが、剝離面に切られている。ｂ面の刃部右端にはわずかに右上がりの擦痕を伴う磨り面が認められ、光沢を切っている。

第214図２のａ面には部分的に自然面が残されており、上端とａ面左側縁は欠損している。ａ面右側縁は２度の折りとりによって整形されている。刃部の表裏両面に明瞭な光沢が観察される。

第214図３の両側面と上端面は折りとりによって形成されており、上端面から表裏両面に散発的な剝離が施されている。刃部の表裏両面には擦痕を伴う磨り面が認められ、ｂ面側に広く分布している。

第214図４・６・７は砥石である。用いられている石材はすべて砂質凝灰岩である。

第214図４は図示した裏面と上下両端を欠損し、残存する２面に磨痕が認められる砥石である。右側面の磨面には条線状の刃物痕が５条確認される。用いられている石材はやや粗目の石材である。

第214図６は礫を素材とした砥石であり、左右両側面は欠損面である。ａ面とｃ面の磨面はともに短軸方向に緩く内弯しており、ａ面側でより明瞭である。ｂ面の一端にも磨痕が観察され、短軸方向に緩く内弯している。各面の磨面には長軸方向の擦痕を伴っている。

第214図７は平面三角形を呈する厚めの礫を素材としている。ａ面の中央とｂ面に磨痕が残されており、ａ面では浅く凹んだ磨面となっている。ｂ面の磨痕は素材礫の長軸方向に溝状に認められ、その周囲にも弱く観察される。

第214図５は硯である。平面形は三角形を呈していたものと考えられ、その一端に作られたと推定される墨池から落潮部分と縁辺の一部を欠損している。縁には整形時のノミの加工痕が残されており、ノミ痕は残存している墨堂部分の研磨面下にも確認される。ａ面右側の縁近くとｂ面の大半に墨痕が明瞭に残されている。ｂ面にはノミの加工痕が顕著に認められるが、中央部に磨痕が観察される。磨りによって磨痕部分の墨が落ちていることから、転用の可能性が考えられる。石材は片麻岩が用いられている。

**［金属製品］**

金属製品には獣脚、鏡、小刀、古銭などがある。第４分冊**第296図**１～４に図示した。

第296図１は銅製の獣脚であり、刻みによって５本の指が表現された右足である。漆が付着しており、破損したものを修復した痕跡と考えられる。

第296図２は鏡の破片であり、紐を含む中央部が残されている。文様は葉が表現されているようにみられるが部分的な残存であり、詳細は不明である。

第296図３は外径2.5cm弱の北宋銭である。至和元寳であり、初鋳年は至和元年（1054年）である。

第296図４は小刀である。身幅2.5cmの直刀であり、区は両区である。刀身の長さは21.8cmであり、茎長は9.9cmである。茎には目釘孔が２孔作られている。

SD ６溝跡　調査区西部で検出された溝跡であり、南西から北東へほぼ直線的に延びている（第44図）。上端幅54～98cm、下端幅28～59cm、深さ５～25cmである。底面はほぼ平坦であるが、東端寄りに土坑状の落ち込みが認められる。方向はE－17.5°－Nである。検出長は約44.2mであるが、さらに調査区外の西へ続くものと考えられる。東端は３基のピット状の落ち込みのあるE28付近で途切れ、SD ５溝跡の東までは延びないことから、SD ５溝跡と何らかの関連があったものと推定される。断面形は扁平な逆台形を呈しており（第50図）、堆積土は２層に分けられる。上層は褐灰色の粘土質シルト、下層は灰黄褐色の粘土質シルトである。

SD ７溝跡が北西から接合している。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、土師器、石器類が出土している。

［縄文土器］

縄文土器は１点図示した（第３分冊第１図８）。口縁部形態は小波状を呈し、口縁部下端に段がある。胴部に縄文を施文している。口縁部内面に太い直線文を施している。

［石器類］

石器類は、石斧、石鏃、石錐、掻器、ピエス・エスキーエ、石鍬、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、礫石器、礫片などである。第４分冊第215図１～６に主な石器を図示した。

**第215図**１と２は石斧であり、石材はともに珪化凝灰岩が用いられている。

第215図１は太型蛤刃石斧の刃部のみが残存する資料であり、明瞭に側面が形成されている。研磨面下には敲打痕がわずかに観察され、ｂ面の研磨面は長軸方向の擦痕を伴っている。折れ面から表裏両面に剥離が施され、ａ面から折れ面への剥離面も認められる。また、刃縁は磨り減り、面を形成している。破損後に転用されたものと考えられる。

第215図２は基部中央から刃部にかけて残存する扁平片刃石斧である。側面は形成されているが、平坦ではなく膨らみをもっている。表面の風化が著しく詳細な観察は困難であるが、整形時の剥離痕が部分的に残されている。

第215図３は自然面打面の剥片を素材とした石錐である。素材剥片の末端に主要剥離面側からの細部調整によって尖端部を作り出している。側縁の細部調整はごくわずかである。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第215図４は表面の末端に自然面を残す剥片を素材とした掻器である。打面側を表面側から折りとり、左右両側縁に細部調整を施して刃部を形成している。ａ面左側の刃部はｂ面側からの剥離によって作出され、刃角は80～90度と急角度である。右側の刃部はａ面側からの細部調整によって形成されており、刃角は60～65度と左側の刃部より鋭角である。石材はデイサイトである。

第215図５はデイサイトを石材とした石鍬である。左側面は折りとり面であり、その他の縁辺は浅い細部調整によって整形されている。刃部は弧状を呈し、刃角は75～90度である。ｂ面側の刃部の右側には短軸方向に近い右下がりの擦痕を伴う磨り面がわずかに観察される。石材は大型板状石器に多用される石材である。

第215図６は大型板状石器に多用されるデイサイトを石材としており、周縁にはまばらに剥離が施されている。表裏両面の縁辺とａ面中央に擦痕を伴う磨り面が残されており、使用による痕跡と考えられる。

SD ７溝跡　調査区西端で検出された北から南へ延びる溝跡であり、北側３分の１ほどの箇所で屈曲している（第44図）。上端幅26～37cm、下端幅12～27cm、深さ12～15cmである。底面には凹凸はなく、北から南へ向かってわずか

に低下している。N 4付近で屈曲しており、方向はN 4付近より北ではN－6.5°－W、南ではN－17°－Wである。検出長は約35.3mであるが、さらに調査区外の北へ続くものと考えられる。断面形はU字形を呈しており、壁面の立ち上がりは急激である(第50図)。堆積土は2層に分けられ、ともに黄灰色のシルト質粘土であるが、下層は基本層位第VI層を細粒状に含んでいる。

南端でSD 6溝跡に接続している。

堆積土2層より弥生土器、1層より弥生土器、土師器、堆積土中より石器類が出土している。

**[石器類]**

石器類は、石斧、石錐、大型板状石器、剝片などである。第4分冊**第215図**の7に石斧を図示した。珪化凝灰岩を石材とした未成品であり、刃部側に予定されていたと考えられる一端を欠損している。製作作業は剝離による整形を経て、a面と両側縁に敲打を施して器体を調整する段階まで進行している。b面には敲打痕はほとんど確認されない。折れ面にも剝離面が認められることから、折れた後も当初の目的とは異なった石器製作のために、さらに作業を進めようとしたものと考えられる。

SD 8溝跡　調査区中央部北側で検出された溝跡であり(第44図)、SD 9溝跡に接続する。SD 9溝跡の一部分とともに、長軸461cm、短軸401cmの不整方形の空間を取り囲んでいる。上端幅12～136cm、下端幅5～71cm、深さ2～7.5cmである。底面にはわずかな凹凸がみられる。断面形は浅く開いたU字形を呈している(第50図)。堆積土は褐灰色の粘土である。

上層の第IVa層上面の水田跡では、SD 8溝跡に囲まれた位置に大畦畔に取りついた張り出しが認められることから、溝に囲まれた塚状の構築物があった可能性が考えられる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SD 9溝跡　調査区中央部で検出された溝跡であり、南北に延び、調査区北側でほぼ直角に東へと屈曲する(第44図)。上端幅23～100cm、下端幅11～67cm、深さ5～18cmである。底面にはわずかな凹凸がみられ、北から南へ低下している。調査区南側のS48付近でわずかに屈曲し、S12付近で直角に折れる。方向はS48付近より南ではN－26.5°－E、S12付近からS48付近まではN－4.5°－E、S12付近より東ではE－2.5°－Nである。検出長は64.6mであるが、さらに調査区外の東へ続くものと考えられる。断面形は浅く開いたU字形を呈している(第50図)。堆積土は一様ではなく、F－F′断面では2層に分けられ、上層は黄灰色の粘土質シルトであり、白色の微砂を含んでいる。下層は黄灰色のシルト質粘土で、基本層位の第VI層を小ブロック状に含む。G－G′断面では4層に分けられ、1層目は黄灰色の粘土質シルト、2層目は暗灰黄色の粘土質シルトである。3層目は浅黄色のシルト質粘土であり、黄灰色の粘土質シルトの小ブロックを含んでいる。4層目は暗灰黄色と黒褐色の粘土質シルトがブロック状に混在している。

SD13溝跡に切られ、SD14・15溝跡を切っている。接続するSD 8溝跡は同時存在の溝跡と考えられる。SD 9溝跡の西側にはSD10溝跡が平行しており、SD 9溝跡と同様に調査区北側でほぼ直角に屈曲し、東へと延びている。

堆積土中より弥生土器、土師器、陶器、剝片、敲打痕の残された礫石器・礫片が出土している。

**[陶器]**

陶器は1点図示した(第3分冊第148図8)。在地産甕で、胎土に白色針状物質を含んでいる。

SD10溝跡　調査区中央部で検出された溝跡であり、南北に延び、調査区北側でほぼ直角に東へと屈曲する(第44図)。上端幅64～102cm、下端幅28～40cm、深さ29～39cmである。底面はほぼ平坦であるが、北から南へ低下している。調査区北側のS 9付近で直角に東へ折れている。方向はS 9付近より南ではN－4°－E、S 9付近より東ではE－

2°－Nである。検出長は66.9mであるが、さらに調査区外の東へ続くものと考えられる。断面形は逆台形を呈している(第50図)。堆積土は一様ではなく、F－F′断面では大別2層に分けられる。上層は2層に細分され、黄灰色の粘土質シルトもしくはシルト質粘土である。下層も2層に細分され、黄灰色のシルト質粘土であり、基本層位の第VI層をブロック状に含んでいる。G－G′断面では3層に分けられ、上層と中層は黄灰色の粘土質シルトであり、上層の方がより明るい。下層は灰白色のシルト質粘土であり、黄灰色の粘土質シルトをブロック状に含んでいる。

SD13溝跡に切られ、SD14・15溝跡を切っている。また、S 9付近で東へ折れている角にはSD12溝跡が接続しており、同時存在の溝跡と考えられる。

SD10溝跡は、SD 9溝跡と平行しながら調査区北側でほぼ直角に屈曲し東へ延びており、SD 9溝跡と対をなすものと考えられる。また、上層の第IVa層上面の水田跡では、SD 9溝跡とSD10溝跡の位置に幅233～350cmの水田区画の基準となる農道状の大畦畔が造られていることから、SD 9・10溝跡は道路の側溝と考えられる。溝跡と溝跡との芯々距離は、調査区北側で東へ折れるまでの南北方向が3.4～3.5m(上端間距離2.5～2.6m)、東へ屈曲してからの東西方向は約4.2m(上端間距離約3.6m)である。

堆積土中より弥生土器、土師器、陶器、石鏃、剝片、磨痕の残された礫石器・礫片、金属製品などが出土している。

**[陶器]**

陶器は1点図示した(第3分冊第148図9)。常滑甕である。

**[金属製品]**

第4分冊**第296図**5に堆積土上部から出土した小刀を図示した。身幅3.6cmの平棟の直刀であり、区は両区である。刀身長は27.9cmであり、茎長は11.2cmである。区の付近の片面に漆が残された箇所があり、刀装具の一部を残存しているものと考えられる。茎には円形の目釘孔が2孔作られている。

**SD11溝跡**　調査区中央部北側で検出された直線的な溝跡で(第44図)、上端幅22～62cm、下端幅11～39cm、深さ1～8cmである。底面にはわずかな凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。方向は、東へ屈曲してからのSD 9・10溝跡の方向とほぼ同一方向であり、E－0.5°－Nである。検出長は21.7mであるが、さらに調査区外の東へ続くものと考えられる。断面形は浅く開いたU字形を呈している(第50図)。堆積土は暗灰黄色の粘土質シルトであり、基本層位の第VI層の小ブロックと白色の微砂を含んでいる。

SD14溝跡を切っている。上層の基本層位第IVa層で確認された水田跡では、本溝跡の南に隣接して畦畔が東西方向に延びていることから、畦畔を造った際の掘削痕跡である可能性が高い。

堆積土中より弥生土器、土師器が出土している。

**SD12溝跡**　調査区中央部北側で検出された直線的な溝跡であり(第44図)、西端のSD13溝跡付近で1.5mほどの南側への張り出しが認められる。上端幅112～174cm、下端幅31～68cm、深さ48～59cmである。底面にはわずかな凹凸がみられるが、東から西へ向かってわずかに低下している。方向はE－24.5°－Nであり、検出長は34.9mである。断面形は逆台形を呈している(第50図)。堆積土は大別7層に分層され、基本層位の第VI層を粒状もしくは小ブロック状に含み、人為的堆積と判断される。上部と下部は褐灰色あるいは黒褐色の粘土質シルトであり、中部は褐灰色の粘土とシルト質粘土の互層である。

SD 5・13溝跡に切られ、SD15溝跡を切っている。本溝跡がSD 5溝跡よりも西へは延びないことから同時存在の可能性を考えたが、SD 5溝跡は本溝跡よりも新しいSD13溝跡を切っており、断面観察でも明瞭な切り合い関係が確認されたことから新旧関係は確実である。しかし、本溝跡がSD 5溝跡で途切れていることは何らかの関連を想

定させ、たとえばSD 5溝跡がそれ以前に存在した溝跡と同位置に再掘削された溝である可能性も考えられる。

S 9付近で東へ折れるSD10溝跡の角に接続しており、断面観察の結果、新旧関係は認められなかったことから、SD21溝跡とあわせて同時存在の溝跡と考えられる。

堆積土中より弥生土器、土師器、陶器、石器類、金属製品が出土している。

［石器類］

石器類は、石庖丁、大型板状石器、剝片、礫石器、礫片である。第4分冊第215図1に石庖丁を図示した。紐孔の一方から側縁までが残されている破損品である。研磨面下には整形時の剝離面と器体調整時の敲打痕が観察される。紐孔の穿孔は敲打によって凹部を形成した後、回転によって行われている。表裏両面のほぼ全面に光沢が観察される。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

［金属製品］

第4分冊第296図6に楔状の鉄製品を図示した。上端がつぶれ、下端には刃部が作り出されている。

SD13溝跡　調査区西部から中央部にかけて検出された溝跡であり、わずかに弯曲しながら北西から南東へ延びている(第44図)。上端幅276～548cm、下端幅18～104cm、深さ53～82cmで、幅は南に向かうにしたがって徐々に広がっている。底面は北から南へ向かって徐々に低下しており、所々に楕円形の落ち込みが認められる。方向はN－30.5°－Wである。検出長は約60.9mであるが、さらに調査区外の南へ続くものと考えられる。断面形はU字形を呈しており、南半の東側の壁は一旦立ち上がった後、中位より上端にかけて緩やかな傾斜となっている(第50図)。堆積土は6層に分けられ、灰色もしくは黄灰色の粘土を主体としているが、2層目は暗灰黄色のシルト質粘土、5層目は淡黄色の細砂である。

SD 4・5溝跡に切られ、SD 9・10・12・21溝跡を切っている。

堆積土中より弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器・石製品類・金属製品が出土している。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した(第3分冊第138図4)。壺の頸部で、調整は内外面ともミガキ調整を施している。文様は上部に直線文、下部に並行直線文に垂線を加えている。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊の第216図2～7と第217図および第218図1・2に主な石器・石製品を図示した。

第216図2～4は石庖丁であり、2と3は成品の破損品、4は未成品の破損品である。用いられている石材は2が珪化凝灰岩であり、3と4は結晶片岩である。

第216図2は紐孔の一方から側縁までが残存する外弯刃半月形の石庖丁の破損品である。研磨面下に器体調整時の敲打痕が観察され、紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われている。表裏両面に光沢が観察され、b面側で顕著である。

第216図3は外弯刃半月形の石庖丁であり、紐孔の一方から側縁までを欠損している。研磨面下に整形時の剝離面と器体調整時の敲打痕が認められるが、表裏両面に剝離面を広く残していることから、器体調整のための敲打は部分的なものであり、剝離による整形によってほぼ目的の厚さが得られたものと考えられる。紐孔の穿孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われている。光沢は表裏両面に明瞭に観察され、b面側に著しい。

第216図4は剝離による整形、敲打による器体の調整を経て、紐孔部に敲打によって窪み部を形成した後、回転による穿孔作業まで製作作業が進行した未成品である。b面の器体調整のための敲打痕は刃部側に集中しており、中

央から背部にかけては部分的である。a面左側の紐孔は貫通しているが、右側は敲打による窪み部形成の段階で、対応するb面側には敲打痕も観察されないことから、a面右側の敲打による窪み部形成作業中に事故が起き、破損したものと考えられる。背部には研磨痕がわずかに認められる。

第216図5と6は石斧の破損品と未成品である。用いられている石材は5が閃緑岩であり、6は泥質頁岩である。

第216図5は基端部分のみを残存しており、基部から徐々に狭くなり幅の狭い基端となっている。明瞭に側面が形成され、断面形は側縁をもつ凸レンズ状を呈している。研磨面下に整形時の剥離面と器体調整時の敲打痕が観察される。

第216図6は扁平片刃石斧の未成品と考えられる。製作作業は剥離による整形の後、敲打によって器体の調整が行われ、研磨工程まで進行している。各面の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕を伴っており、a面中央とb面には短軸方向の擦痕も観察される。a面の下端面側に平坦な研磨面が認められ、研磨の施された下端面側に刃部を予定していたものと考えられる。

第216図7は横型石匙である。剥離面打面の横長剥片を素材としており、素材剥片の表面の一部と末端には節理面が残されている。素材剥片の打点とバルブは、つまみ部作出のために施された細部調整によって失われている。つまみ部は両側ともa面の後b面側に施した剥離によって形成されている。刃部はa面右側縁に主要剥離面側からの細部調整によってスクレイパー・エッジ状に作り出されており、刃角は55～60度である。刃縁に光沢が観察される。つまみ部の表裏両面にはアスファルト状の付着物が認められ、剥離面の稜線はわずかに磨滅し弱い光沢が観察される。石材は珪化凝灰岩である。

第217図1は自然面打面の剥片を素材とした横型石匙である。つまみ部は素材剥片の打点を中心に作り出されており、a面左側はb面ののちa面側に、右側はa面ののちb面側に剥離を施して形成されている。左右両側縁は浅く、まばらな細部調整によって整形されている。素材剥片の末端には表裏両面への細部調整が施されており、75～80度の刃角を形成している。直線的に整形されたa面右側縁の角度は60～70度である。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第217図2は剥離面打面の剥片を素材としており、周縁に散発的に剥離が施されている。素材剥片の末端のa面左側には縁辺にツブレが確認され、表裏両面に損傷の剥離面を伴っていることから敲打作業に使用されたものと考えられる。用いられている石材は黒色頁岩である。

第217図3は剥離面打面の剥片を素材としており、表面の右側縁と末端に自然面を残している。両側縁と打面側の表裏両面に施した細部調整によって整形され、平面長方形状を呈している。形状から扁平片刃石斧の未成品の可能性が考えられる。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第217図4は自然面打面の剥片を素材としたピエス・エスキーエである。上端縁とc面の下端縁が対になる、1対の細部調整が認められる。縦断面形は凸レンズ状を呈している。用いられている石材はチャートである。

第217図5と6は大型板状石器に多用されるデイサイト質凝灰岩を石材とする細部調整剥片であり、部分的に敲打痕や磨痕が残されている。

第217図5は3面を折りとって三角形状に整形され、部分的に小さな剥離が施されている。もっとも鋭い角に敲打痕が残されており、その周縁の表裏両面には敲打に伴う損傷の剥離面が観察される。

第217図6の表裏両面には部分的に光沢が観察され、光沢は折りとり面や剥離面によって切られていることから、大型板状石器の一部が転用されたものと考えられる。3辺を折りとり、残る1辺に細部調整を施して四辺形に整形されており、鋭角な1端に使用による磨滅痕が明瞭に残されている。また、a面左側の角には表裏両面に損傷の剥離面を伴う敲打痕が認められる。

第217図7は粗粒の凝灰岩を石材とした細部調整剥片であり、その1縁辺に磨滅痕が残されている。磨滅痕は平坦

な面を形成せず、緩やかな凹凸がみられる。

**第218図**1は表裏両面と上端面に部分的に自然面を残す大型板状石器である。左右両側面は折りとり面である。おもにb面側の刃部に細部調整を施し、直線的に整形されている。刃部のa面側には刃縁に平行する方向の擦痕を伴う磨り面が認められ、刃部に相対する上端の角張った部分には磨滅痕が観察される。板状節理を有する安山岩を石材としている。

第218図2は自然礫の表裏両面と1側面を使用した砥石である。側面の磨り面は平坦であるが、表裏両面では刃物によって削り取られたような状態の浅くて細い条痕を伴っている。a面には刃物の刃先を垂直に当てたものと考えられるキズが認められる。用いられている石材は珪質凝灰岩である。

**［金属製品］**

第4分冊**第296図**7に銅製品を図示した。具体的な用途は不明であるが飾り金具と考えられる。直径約4.5㎜の孔が穿たれている。

SD14溝跡　調査区中央部北側で検出された2箇所に屈曲部をもつ溝跡で(第44図)、上端幅15～51cm、下端幅5～23cm、深さ2～12cmである。底面はほぼ平坦である。E73付近より西側ではほぼ東西方向に延びているが、確認調査トレンチの東と西では方向がわずかに異なっており、西ではE－12.5°－N、東ではE－2.5°－Sである。S10からS24付近までの方向はN－10°－E、S10より北ではE－17.5°－Nである。検出長は約46.4mであるが、さらに東西へ続くものと考えられる。断面形は浅く開いたU字形を呈しており(第50図)、堆積土は褐灰色の粘土質シルトで、部分的にSR 2自然流路跡の堆積土をブロック状に含んでいる。

SB 1・2掘立柱建物跡の柱穴およびSD 9・10・11・21溝跡に切られ、SD15溝跡を切っている。SD21溝跡の西側では検出されなかったが、SD21溝跡の東では深さ約2cmと浅くなっており、SD21溝跡がSD12溝跡に接続することから、SD21溝跡に切られているものと判断した。

堆積土中より弥生土器、土師器、大型板状石器が出土している。

SD15溝跡　調査区中央部北側で検出された北西から南東へ延びる溝跡で(第44図)、上端幅45～128cm、下端幅13～38cm、深さ2～20cmである。2箇所でわずかに屈曲している。底面はほぼ平坦であり、北から南へ向かってわずかに低下している。S12付近とS19付近で屈曲しており、方向はS12付近より北ではN－23.5°－W、S12付近からS19付近はN－44°－W、S19付近より南はN－26°－Wである。検出長は約37.4mであるが、さらに調査区外の北へ続くものと考えられる。南端では確認面からの深さが2cmと非常に浅くなり、確認調査トレンチより南では確認することはできなかった。断面形は浅く開いたU字形を呈しているが、屈曲部であるS19付近の東側の壁は一旦立ち上がった後、約60cmほどの幅で平坦面がみられ、上端へと至る(第50図)。堆積土は大別2層に分けられ、上層は褐灰色のシルト質粘土、下層は褐灰色の粘土である。上層はさらに2層に細分され、下部は細砂をブロック状に含んでいる。下層には基本層位の第VI層が小ブロック状に認められる。

SB 2掘立柱建物跡の柱穴およびSD 9・10・12・14溝跡に切られている。

堆積土中より弥生土器、土師器、石器が出土している。

**［石器］**

石器は、石匙、礫石器である。第4分冊**第218図**3に石匙を図示した。剝離面打面の剝片を素材とした横型石匙である。つまみ部は素材剝片の打面側に作り出されており、a面左側はb面ののちa面側へ、右側はa面ののちb面側へ施された剝離によって形成されている。表裏両面とつまみ部の端部には素材剝片の剝離面が残されている。つまみ部側の縁辺はb面側ののちa面側に細部調整を施して整形され、刃部はおもにb面側への連続した剝離によっ

て形成されている。a面側では浅く、まばらな剝離である。刃角は60～75度である。石材は良質な珪質頁岩が用いられている。

SD16溝跡　調査区中央部北側で検出された東西へ延びる溝跡で(第44図)、上端幅28～74cm、下端幅8～41cm、深さ約5cmである。底面にはわずかな凹凸がみられ、方向はE－10°－N、検出長は約6.2mである。断面形は浅く開いたU字形を呈しており(第47図)、堆積土は褐灰色の粘土質シルトである。白色の微砂を含んでおり、基本層位の第VI層をブロック状に含んでいる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SD17溝跡　調査区中央部で検出された緩やかなS字状に弯曲する溝跡で(第44図)、上端幅18～40cm、下端幅9～16cm、深さ3～4cmである。検出された南北の両端を結んだ方向はE－42.5°－Nである。検出長は約13.6mで、さらに南へ続くものと考えられるが、深さ3～4cmと浅く、確認調査トレンチより南では確認することはできなかった。底面はほぼ平坦であり、断面形は浅く開いたU字形を呈している(第50図)。堆積土は黒褐色の粘土であり、SR 2自然流路跡の堆積土をブロック状に含んでいる。

SB 2掘立柱建物跡の柱穴に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SD20溝跡　調査区西部で部分的に検出された溝跡で(第44図)、上端幅61～128cm、下端幅22～65cm、深さ6～28cmである。底面は中央部がもっとも深く、東西両側で浅くなる。残存部分がわずかなため不確実であるが、S20付近で屈曲しており、方向はS20付近より南ではN－4°－E、S20付近より北ではE－4°－Nである。検出長は7.5mであるが南側の確認調査トレンチ内まで延びていたものと推定される。断面形は浅く開いたU字形を呈しており(第50図)、堆積土は灰黄褐色の砂質シルトである。

SD 5溝跡と切り合っており、堆積土が類似していたことから別遺構と認定できず、掘り込み作業をSD 5溝跡と同時に行っている。掘り込みの途中で検討を行った結果、SD 5溝跡よりも古い遺構と確認された。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SD21溝跡　調査区中央部で検出された南北に延びる溝跡で(第44図)、上端幅42～108cm、下端幅16～57cm、深さ3～17cmである。底面はほぼ平坦で、方向はN－20°－Wである。検出長は約15.2mであるが、SD13に切られていることからさらに南へと続いていたものと考えられる。断面形は浅く開いたU字形を呈しており(第50図)、堆積土は黒褐色の粘土質シルトである。基本層位の第VI層起源の小ブロックをまばらに含んでいる。

SD13溝跡に切られ、SD14溝跡を切っている。北端はSD12溝跡に接続しており、同時存在の遺構である。

堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SD30溝跡　調査区東端で検出された南北に延びる大規模な溝跡であり(第44図)、先行観察トレンチを底面まで掘り下げたところ、湧水が激しく、トレンチの壁も崩落し始めたことから、完掘作業を行うことは危険であると判断し、観察トレンチ内のみでの底面検出にとどめた。上端幅9m97cm～12m76cm、観察トレンチ内での下端幅1m～1m58cm、深さ2m11cmである。観察トレンチの南側のS44付近でわずかに屈曲しており、方向はS44付近より南ではN－5.5°－E、北ではN－2°－Eである。検出長は約56.5mであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと考えられる。断面形は大きく開いたU字形を呈している(第50図)。堆積土は大別17層に分層され、上部は灰黄褐色を

主体とする粘土であり、中部は黒色から黒褐色の粘土である。14層目の下部からグライ化が始まり、15層目の下部から最下層は砂層と粘土層の互層となっている。4層上面で畦畔と小溝状遺構群が確認され、基本層位の第IVa層上面水田跡と同時期と考えられることから、本溝跡は第IVa層上面で水田跡が造られる時期に至っても、まだ完全には埋没していなかったものと判断される。

SD28・29溝跡に切られている。SD44溝跡が接続しており、同時期の遺構と考えられる。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、木製品類、石器類、金属製品が出土している。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した(第3分冊第138図3)。壺で頸部は内傾し、屈曲して口縁部が外傾している。口縁部形態は波状を呈する。調整は口縁部にヨコナデ調整、内外面にミガキ調整が施されている。口縁部内面に直線文と垂線を施している。口縁部の内外面と口唇部に植物茎回転文を施文している。

［磁器］

磁器は1点図示した(第3分冊第151図2)。中国白磁碗である。外面に釉はかけていない。内面に圏線がある。

［陶器］

陶器は3点図示した(第3分冊第151図1・3・4)。宮城県白石窯の鉢(1)、東海産山茶碗窯系の山茶碗(3)、瀬戸と思われる瓶子の脚(4)がある。

［木製品類］

木製品類には、漆器皿、容器部材、打ち込み杭などがある。第4分冊第149図に図示した。

**第149図**1は漆器の破片資料であり、皿と考えられる。用いられている樹種はブナ属の一種である。内外面に漆が施されており、内面は赤、外面は黒である。

第149図2は下端をわずかに欠損する、容器の側板である。外面の下端寄りに黒い付着物が観察され、中央の上端寄りには直径約3cmの円孔が穿たれている。

第149図3と4は芯持ち材を素材とした打ち込み杭である。ともに上端を欠損している。3には尖端部が形成されず、切断痕を先端として打ち込まれている。4の尖端部を形成する加工面には、工具の刃こぼれによる条線状のキズが確認される。側面の遺存状態は良好ではない。

［石器類］

石器類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、削器、ノッチ、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、礫石器、礫片などである。第4分冊第221図と第222図におもな石器を図示した。

**第221図**1～5は石庖丁であり、1はほぼ完形の成品、2～5は未成品である。用いられている石材は1・2・5が結晶片岩であり、3は珪化凝灰岩、4は絹雲母片岩である。

第221図1はa面左側縁と刃部の一部を欠損しているが、ほぼ完形の外弯刃半月形の石庖丁である。研磨面下に器体調整時の敲打痕が残されており、表裏両面の背部寄りには背部からの整形時の剥離面が認められる。紐孔の穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われている。表裏両面に光沢が観察され、a面の右半部とb面の左半部で明瞭である。

第221図2は一方の紐孔から側縁を欠損する未成品である。製作作業は剥離による整形、敲打による器体の調整を経て、紐孔部に敲打によって窪み部を形成した後、回転による穿孔作業まで進行している。b面の刃部側には器体調整のための敲打痕はそれほど認められず、整形時の剥離面が大きく残されている。a面左側の紐孔は貫通しているが、右側は回転段階まで進行しているものの貫通しておらず、対応するb面側にも回転の痕跡が確認される。a面左側の紐孔が貫通した段階で作業が中断されていることから、紐孔の最終的な調整段階で事故が起き、破損した可能性が考えられる。a面の背部寄りとb面の器体上半は軽く研磨されている。

第221図３は一方の紐孔から側縁までを残す未成品である。製作作業は剝離による整形、敲打による器体の調整を経て、紐孔部に敲打によって窪み部を形成した後、回転による穿孔作業まで進行している。背部とｂ面の側縁寄りに整形時の剝離面を部分的に残している。紐孔は部分的に残存しており、貫通していたことが確認される。破損面は後世のものと考えられ、もう一方の紐孔部は完全に失われているため断定はできないが、残存する紐孔の最終調整時か、もしくは失われた紐孔穿孔時の事故によって製作作業が中断された可能性が考えられる。

第221図４は紐孔部から背部にかけての一部分を残す未成品である。製作作業は剝離による整形、敲打による器体の調整を経て、紐孔穿孔のための敲打による窪み部形成の段階まで進行している。紐孔部で欠損しているため確実ではないが、窪み部形成段階の事故によって破損した可能性がある。

第221図５の表裏両面には節理面が残されており、節理によって板状を呈する素材が用いられていたものと考えられる。剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで製作作業は進行しているが、敲打は部分的で、特にａ面側では整形時の剝離面と節理面が大きく残されている。作業の中断された理由は明確ではないが、ａ面右側の厚みがあまりなく、器体全体を均等な厚みに仕上げられなかったことが中断理由のひとつと考えられる。

第221図６～９は石斧であり、すべて完形の成品である。用いられている石材は６が緑泥片岩であり、７はデイサイト質凝灰岩、８は輝緑岩、９は斑糲岩である。

第221図６は平面形が台形を呈する扁平片刃石斧である。最大幅は刃部に位置している。形成されている側面は平坦ではなく、わずかに膨らみをもっている。刃部はわずかに外弯しているが、ほぼ直線的であり、刃縁には使用による光沢と線条痕が観察される。表裏両面に整形時の剝離面が残されており、特にａ面側では刃部と基端寄りを除いて中央部にも大きく剝離面が残されている。ａ面の研磨面には長軸方向の擦痕が認められ、刃面には部分的に短軸方向の擦痕も観察される。ｂ面の研磨面には短軸方向の擦痕が残されているが、刃部寄りで右下がりの擦痕となっている。ａ面中央には着柄の痕跡と考えられる磨滅痕が認められる。

第221図７は平面形が台形状を呈する外弯刃の扁平片刃石斧である。最大幅の位置は刃部にある。側縁はゆるく外弯しており、形成された側面は膨らみをもっている。表面の風化が著しく、詳細な観察は困難であるが、研磨面下に整形時の剝離面が認められる。本遺跡から出土した他の扁平片刃石斧と比較すると、幅は同様であるが長さが短く、研ぎ直しによる刃部再生が行われた結果によるものと考えられる。

第221図８は平面形が台形状を呈する外弯刃の扁平片刃石斧であり、最大幅の位置は刃部にある。側面は形成されているが、平坦ではなく、膨らみをもっている。表裏両面の研磨面下に整形時の剝離面が明瞭に残されており、研磨面には長軸方向もしくはそれに近い右下がりの擦痕が観察される。他の扁平片刃石斧に比べ長さが短く、研ぎ直しによる刃部再生が行われているものと考えられる。

第221図９はノミ形石斧であり、最大幅は基部中央に位置している。断面形は円形に近い楕円形を呈しているが、ａ面左側にはわずかに膨らみをもつ平坦面が形成されている。研磨面下に整形時の剝離面と器体調整時の敲打痕が観察され、研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が残されている。刃部はわずかに外弯する直線刃である。

**第222図**１は剝片の一部にノッチ状の凹みを２ヶ所作り出し、その間にスクレイパー・エッジが形成されている複合石器である。さらに他の部位にも連続した細部調整によって刃部が作り出されている。素材は自然面打面の剝片と考えられるが、打面はノッチを形成するａ面からの剝離によって失われている。ノッチは素材剝片の打面とｂ面左側縁に作られており、ａ面からの細部調整によって形成されている。打面側のノッチは急角度である。ノッチとノッチの間には、ａ面からの細部調整によって弧状に突出した刃部が作り出されており、刃角は85度前後である。ａ面右側縁にも剝離が施され、内弯する刃部が形成されている。用いられている石材は黒色頁岩である。

第222図２は表面に自然面を部分的に残す剝片を素材とした削器である。素材剝片の打面側にａ面からｂ面への細部調整によって刃角65～70度の刃部が形成されている。石材は珪質頁岩が用いられている。

第222図３は剝片の打面側と末端側に、素材剝片の表面から主要剝離面への細部調整を施した削器である。刃角は打面側が65～75度であり、末端側は65～80度である。石材はデイサイトが用いられている。

第222図４はａ面上端縁と下端縁、ｂ面右側縁の上端寄りと末端の左端が対になる、２対の細部調整が認められるピエス・エスキーエである。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第222図５は縁辺に敲打痕と磨痕が部分的に残されている細部調整剝片である。石材は大型板状石器に多用される凝灰岩であり、折りとり面と剝離面に切られる光沢が表裏両面に認められることから、大型板状石器を転用したものと考えられる。折りとり面である上端面とａ面右側縁の交わる角に磨痕が観察され、連続して敲打痕も認められる。下端中央のゆるく突出した部分には、ａ面側に磨痕が、ｂ面側には敲打痕が残されている。

第222図６～８は大型板状石器であり、用いられている石材は６と８が安山岩であり、７はデイサイトである。

第222図６は両側面が節理面の剝片を素材としている。素材の形状をそのまま利用しており、細部調整は表裏両面と側面を分ける稜線の角を落とすために側面から施されている。刃部は表裏両面に部分的な研磨を施して形成されており、明瞭な光沢に覆われている。ａ面の刃部に隣接した中央部には刃縁に平行する擦痕を伴う磨り面が認められる。刃縁と平行方向に広がり、断面形はわずかに凹んでおり、部分的に光沢に覆われている。さらにａ面中央には弱い磨滅痕が観察される。ｂ面は風化し、脆くなっている。

第222図７の石材は礫石器に一般的に用いられる石材であり、礫から剝離された表面が自然面の剝片を素材としている。素材剝片は隅丸三角形を呈し、左右両側縁に施された細部調整によって整形されている。素材剝片末端の両端にもわずかな細部調整が施されており、敲打によるツブレを伴っている。ｂ面中央の高い部分に部分的な磨り面が観察され、左端に光沢がわずかに認められる。

第222図８はａ面の刃部寄りと左側面に自然面を残す素材を折りとりによって整形した大型板状石器である。折りとり面と折りとり面によって形成された上端の鋭角な部分には敲打が施され角が落とされている。刃部の縁辺は大部分を欠損しているが、ｂ面には光沢が明瞭に観察される。

**［金属製品］**

第４分冊**第297図**21に堆積土中から出土した用途不明の金属製品を図示した。一端を欠損しており、残存する一端には尖端部が作り出されている。扁平で、尖端部よりも頭部側が細いことから釘ではなく、何らかの金具と考えられる。

**SD38 溝跡**　調査区中央部北側で検出された北西から南東へ延びる溝跡で（第44図）、上端幅10～34cm、下端幅５～13cm、深さ４～5cm である。S23 付近で屈曲しており、方向は S23 付近より北では N－45.5°－W、南では N－29°－W であり、検出長は約13.4m である。底面はほぼ平坦で、断面形は開いたＵ字形を呈している（第50図）。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

SD42 溝跡に切られている。約3m 離れて SD39 溝跡が南東方向に延びており、同一の溝跡である可能性が考えられたが、方向がわずかに異なっていることから別遺構として扱った。

堆積土中より石錐、剝片が出土している。

**SD39 溝跡**　調査区東部北側で検出された北西から南東へ延びる溝跡で（第44図）、上端幅12～46cm、下端幅８～33cm、深さ２～7cm である。S39 付近で屈曲しており、方向は S39 付近より北では N－41.5°－W、南では N－64°－W であり、検出長は約22.1m である。底面はほぼ平坦で、断面形は開いたＵ字形を呈している（第51図）。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。

SK51 土坑に切られている。約3m 離れて SD38 溝跡が北西方向に延びており、同一の溝跡である可能性が考えら

れたが、方向がわずかに異なっていることから別遺構として扱った。

堆積土中より弥生土器、石器類が出土している。

［石器類］

石器類は、石錐、ピエス・エスキーエ、剥片である。第４分冊**第223図**２にピエス・エスキーエを図示した。下端面に自然面を残しており、上端縁と下端縁が対になる細部調整が認められる。縦断面形は凸レンズ状を呈している。用いられている石材は珪質頁岩である。

SD41 溝跡　調査区東部で検出された北東から南西へ延びる溝跡で（第44図）、上端幅30～36cm、下端幅６～18cm、深さ５～7cm である。方向はＥ－31°－Ｎであり、検出長は約2.1m であるが、南西へわずかに続くものと考えられる。底面はほぼ平坦で、断面形は開いたＵ字形を呈している（第51図）。堆積土は黒褐色の粘土である。

SK51 土坑に切られている。上層の基本層位第Ⅳａ層の除去作業中に検出された溝跡であり、第Ⅳａ層水田跡では同位置に水口が確認されたことから、畦畔を切り、水口を造った際の掘削痕跡の可能性が高い。

堆積土中より弥生土器が出土している。

SD42 溝跡　調査区東部で検出された南北方向に延びる溝跡で（第44図）、上端幅28～79cm、下端幅９～36cm、深さ８～18cm である。底面はほぼ平坦であるが、北から南へ向かって低下している。S35 付近で屈曲しており、方向はS35 付近より北ではＮ－2.5°－Ｅ、南ではＮ－6.5°－Ｗである。検出長は48.2m であるが、さらに調査区外の北へ続くものと考えられる。断面形は浅く開いたＵ字形を呈している（第51図）。堆積土は２層に分けられ、上層は黒褐色の粘土であり、下層は暗褐色の粘土である。下層には基本層位の第Ⅵ層起源のブロックをまばらに含んでいる。

SD38 溝跡を切っている。SD44 溝跡に接続しており、同時存在の遺構である。

堆積土中より弥生土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

［土製品］

土製品は１点図示した（第３分冊第153図39）。土器片製円盤で土器の破片を素材としている。円みのあるもので、円盤の中央に孔が穿たれている。

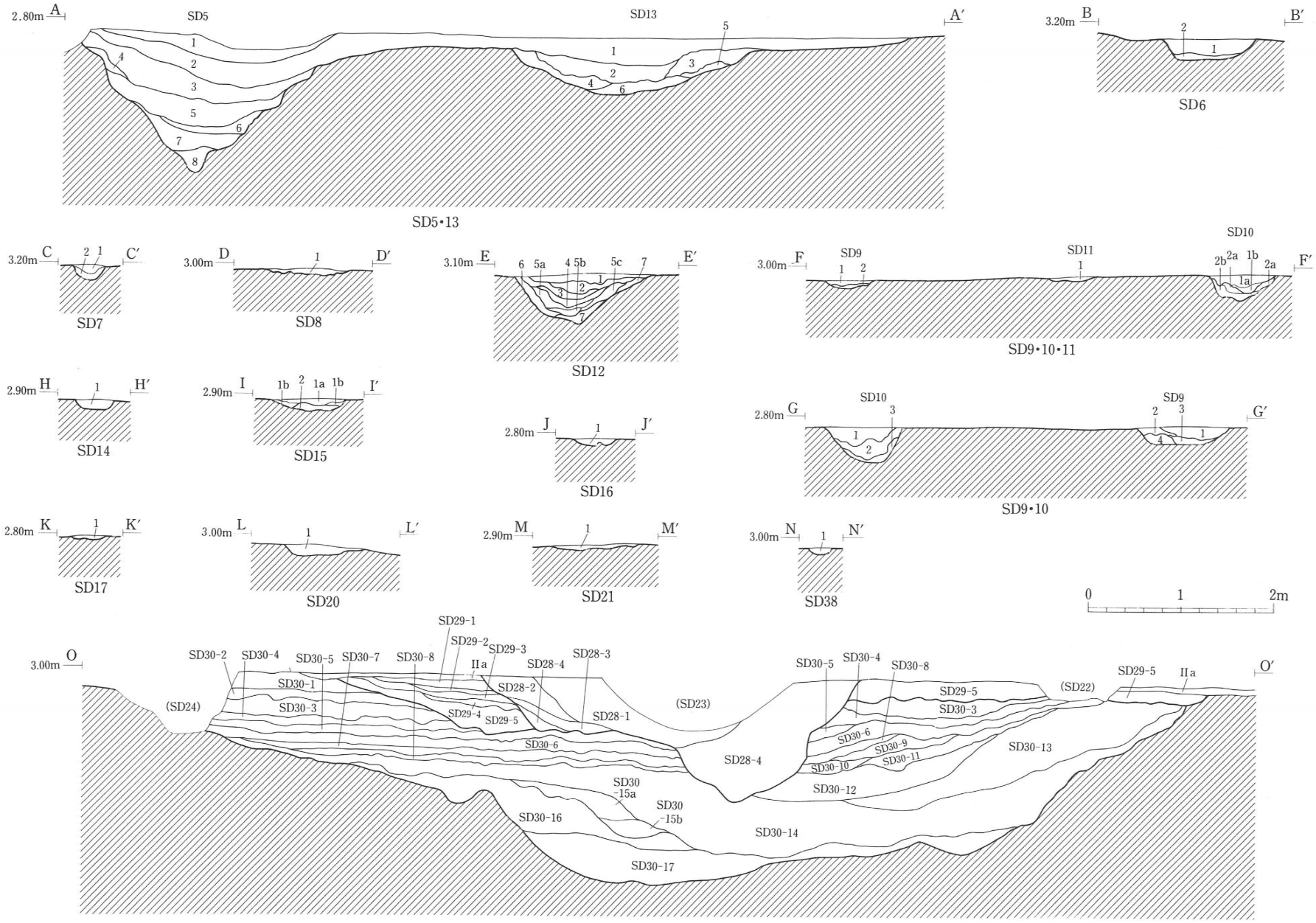
［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石鏃、石錐、削器、大型板状石器、剥片、石核、砥石、礫石器などである。第４分冊**第223図**３と４に削器と砥石を図示した。

第223図３は表面が自然面の剥片を素材としている。素材剥片の右半部を折りとり、主要剥離面から表面側に細部調整を施して刃部を形成している。刃角は85～90度である。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

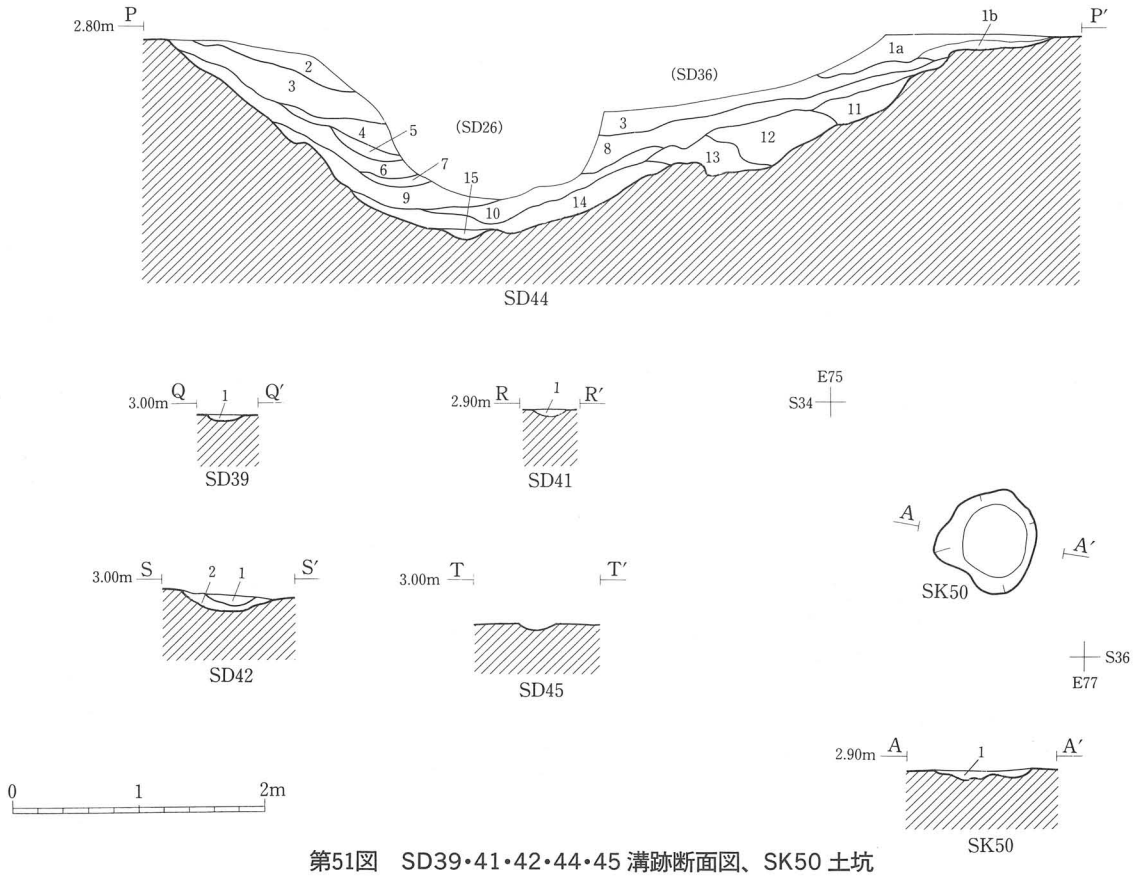
第223図４は一端を欠損する砥石である。側面の４面はすべて使用されており、ｃ面には破損面寄りに長軸方向の稜線が認められ、それを境として２面に分かれている。下端面には使用による磨痕は観察されず、製作当時の面が残されている。ｂ面の下端面寄りに条線状の傷が確認される。石材は珪質凝灰岩が用いられており、目の細い石材である。

SD44 溝跡　調査区南側の中央部から東部にかけて検出された東西方向に延びる溝跡である（第44図）。時間的制約から底面まで完掘することは困難であったため、全体の掘り下げは確認面から60～80cm で中断し、２箇所設定した観察トレンチ内のみでの底面検出にとどめた。上端幅4m56cm～9m51cm、観察トレンチ内での下端幅33～58cm、深さ142～177cm である。底面はほぼ平坦であるが、東側トレンチの底面がより低い。方向はＥ－３°－Ｓである。検出長は64.2m であるが、さらに調査区外の西へ続くものと考えられる。北側の上端に沿って、幅25～143cm の溝状の落




SD28（II a 層上面）・29（II a 層下面）・30

**第50図　SD5～15・17・20・21・28～30・38 溝跡断面図**




第51図　SD39・41・42・44・45 溝跡断面図、SK50 土坑

ち込みを東半部約23.6m の長さで伴っている。断面形は開いたU字形を呈しており、中位より上端までは緩やかに立ち上がっている(第51図)。堆積土は15層に大別され、上層は暗灰黄色もしくは灰黄褐色の粘土質シルトを主体とし、中層から下層にかけては主に灰色ないしは褐灰色を呈する粘土である。最下層は暗緑灰色の粗砂であり、混入した弥生時代の遺物を多く含んでいる。

SD26 溝跡に切られている。SD42 溝跡が接続しており、SD30 溝跡に接続する。SD30・42 溝跡と同時期の遺構と考えられる。

堆積土中より縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、木製品類、石器・石製品類が出土している。

**[縄文土器]**

縄文土器は 3 点図示した（第 3 分冊第 1 図 9 ～11)。 9 ・10は口唇部に付されていた突起と思われる。11は口唇部にキザミ目が加えられている。口縁部下端に横方向の沈線がある。内面に直線文が施されている。

**[磁器]**

磁器は 1 点図示した(第 3 分冊第151図 6 )。中国青磁で龍泉窯系の碗である。

**[陶器]**

陶器は 5 点図示した(第3分冊第151図 5 ・ 7 ～10)。在地産の甕( 5 ) と鉢 （ 9 )、常滑甕( 7 )、宮城県白石窯の片口鉢( 8 )、東海産山茶碗窯系の片口鉢(10)がある。 5 は胎土に白色針状物質を含んでいる。 9 ・10は内面が使用により磨耗している。

**[木製品類]**

木製品類には刀の柄、草履の芯、下駄の歯、杭状木製品などがみられる。第 4 分冊第150図に図示した。

**第150図** 1 は刀の柄である。装着口の一部を欠損しているが、ほぼ完形の資料であり、長さ23.4cm、幅4.0cm、厚さ2.1cm である。ヤナギ属の一種の心持ち材を素材としており、断面形は楕円形を呈する。茎を装着する穴は深さ

SD5 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 酸化鉄斑紋を含む。灰白色シルトブロックを一部含む。 |
| 2 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 1・2層間に灰白色、シルト質粘土のうすい層（1cm 程度）、中間に細砂を含む。 |
| 3 | 5Y5/1 灰色 | 粘土 | 細砂、極細砂粒、植物遺体を含む。灰白色シルト（1cm 程度）で層中に含む。 |
| 4 | 5Y3/1 オリーブ黒色 | 粘土 | 灰色粘土を含む。 |
| 5 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 細砂、極細砂粒、植物遺体を含む。オリーブ黒色、明緑灰色粘土粒の細砂含む。 |
| 6 | 5Y5/1 灰色 | 粘土 | |
| 7 | 7.5GY7/1 明緑灰色 | 粘土 | 暗緑灰色粘土を含む。明緑灰色粘土粒の極細砂、層状に含む。 |
| 8 | 7.5GY3/1 暗緑灰色 | 粘土 | 細砂を含む。 |

SD6 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | にぶい黄橙色シルトをブロック状に含む。全体に酸化鉄斑、遺物を含む。 |
| 2 | 10YR6/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 褐灰色粘土質シルトを含む。酸化鉄斑、遺物含む。 |

SD7 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | マンガン粒を少量含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 淡黄色粘土細粒を多く含む。 |

SD8 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑を全体に多くまばらに含む。 |

SD9 溝跡（F－F'）

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土質シルト | 白色微砂をまばらに含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 第VI層の小ブロックを多く含む。 |

SD9 溝跡（G－G'）

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y5/1 黄灰色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粘土質シルト | 黒褐色シルト質粘土ブロック少量、灰白色火山灰ブロックをわずかに含む。 |
| 3 | 2.5Y7/3 浅黄色 | シルト質粘土 | 黄灰色粘土質シルトを小ブロックを含む。 |
| 4 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粘土質シルト | 黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む。浅黄色シルト質粘土ブロックを少量含む。 |

SD10 溝跡（F－F'）

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土質シルト | 層上部に酸化鉄斑を多く含む。 |
| 1b | 5Y5/1 黄灰色 | シルト質粘土 | |
| 2a | 2.5Y5/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 層上部に1b 層を小ブロック状に含む。 |
| 2b | 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 層下部に第VI層のブロックを含む。 |

SD10 溝跡（G－G'）

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y5/1 黄灰色 | 粘土質シルト | 灰白色粘土質シルトブロック、酸化鉄斑をわずかに含む。 |
| 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土質シルト | 灰白色粘土質シルトブロック、炭化物をわずかに含む。酸化鉄斑を含む。 |
| 3 | 2.5Y8/2 灰白色 | シルト質粘土 | 黄灰色粘土質シルトブロックを含む。酸化鉄斑を多く含む。 |

SD11 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | 粘土質シルト | 第VI層の小ブロックと白色の微砂をまばらに含む。 |

SD12 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 層下部に黄褐色、黒色の粘土質シルトを粒状に多量に含む。 |
| 2 | 7.5YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 黄褐色、黒色の粘土質シルトを粒状もしくは、小ブロック状に多量に含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 層上部に黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 層中部から下部にかけて酸化鉄斑を多量に含む。 |
| 5a | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含む。 |
| 5b | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 層上部に酸化鉄斑をまばらに含む。 |
| 5c | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑を多量に含む。 |
| 6 | 7.5YR5/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 酸化鉄斑を多量に含む。 |
| 7 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 細砂を含み、わずかに第VI層を小ブロック状に含む。 |

SD13 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 酸化鉄をまばらに、マンガンを多量に含む。 |
| 2 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 酸化鉄をまばらに含む。 |
| 3 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 淡黄色の細砂、酸化鉄斑を含む。 |
| 4 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 黒褐色、暗灰黄色粘土のブロックを含む。酸化鉄斑を含む。 |
| 5 | 2.5Y8/3 淡黄色 | 細砂 | 暗灰黄色粘土を含む。酸化鉄斑を含む。 |
| 6 | 10Y4/1 灰色 | 粘土 | 酸化鉄斑を含む。底面に遺物を多量に含む。 |

SD14 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR6/1 褐灰色 | 粘土質シルト | SR2 堆積土をブロック状に含む。 |

SD15 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 細砂をまばらに含む。 |
| 1b | 7.5YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 細砂を小ブロック状に含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 第VI層を小ブロック状に含む。 |

SD16 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 白色の微砂を全体的に含み、第VI層をブロック状にまばらに含む。 |

SD17 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | SR2－5 層をブロック状に含む。 |

SD20 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 砂質シルト | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含む。 |

SD21 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 第VI層を小ブロック状にまばらに含む。 |

SD28 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | 酸化鉄を管状に含む。下層はシルト分が強くなる。 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 層全体に酸化鉄を斑状に含む。 |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 層全体に酸化鉄を斑状に含む。 |
| 4 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 層全体に酸化鉄を斑状に含む。 |

SD29 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 粘土 | 層全体にマンガン粒を含む。 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | マンガン粒を全体に含む。 |
| 3 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 粘土 | 層全体に酸化鉄、マンガン粒を含む。 |
| 4 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | マンガン粒少量、未分解の植物遺体若干含む。 |
| 5 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 層中に灰黄褐色粘土をブロック状に含む。（径5～10cm）。未分解の植物遺体を含む（根状）。 |

SD30 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土 | マンガン粒を大量に含む。 |
| 2 | 10YR6/3 にぶい黄橙色 | 粘土 | マンガン粒を含む。灰黄褐色粘土を含む。 |
| 3 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土 | 酸化鉄、マンガン粒を含む。黒褐色粘土を含む。 |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | マンガン粒多量、炭化物を少量含む。場所によって水田耕作、畠に利用されている。 |
| 5 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | マンガン粒を含む。 |
| 6 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | 酸化鉄、層全体にマンガン粒を含む。にぶい黄橙色シルト質粘土をブロック状に含む。 |
| 7 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | |
| 8 | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | SD28 より東では黒味が強くなる。 |
| 9 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土 | 酸化鉄、層全体にマンガン粒、炭化物片を含む。 |
| 10 | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 植物遺体、酸化鉄を含む。黒色泥炭質粘土を帯状に含む。 |
| 11 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 酸化鉄、炭化物を多く含む。 |
| 12 | 10YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 植物遺体、流木、細砂を含む。褐灰色粘土を帯状に含む。 |
| 13 | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 植物遺体、酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。 |
| 14 | 5GY2/1 オリーブ黒色 | 粘土 | 酸化鉄を含む。緑灰色粘土をブロック状に帯状に含む。 |
| 15a | 5Y3/1 オリーブ黒色 | シルト質粘土 | オリーブ黒色の細砂をブロック状に含む。 |
| 15b | 10GY4/1 暗緑灰色 | 微砂 | |
| 16 | 10GY3/1 暗緑灰色 | 粘土質微砂 | 植物遺体を含む。粘土をブロック状に含む。 |
| 17 | 5BG3/1 暗青灰色 | 細砂 | |

SD38 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄、マンガン粒を含む。 |

SD39 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄、マンガン粒を含む。 |

SD41 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 | マンガン粒を含む。 |

SD42 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土 | 層中にマンガン粒を含む。層下部ににぶい黄褐色粘土を帯状に含む。 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色 | 粘土 | 層中にマンガン粒を含む。第VI層をブロック状に含む。 |

SD44 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | 粘土質シルト | 灰白色のシルトを粒状にまばらに含む。層下部に酸化鉄を帯状に含む。 |
| 1b | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | マンガン斑をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 灰白色のシルトを粒状にまばらに含む。 |
| 3 | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 灰白色の粘土を粒状に層の上部にわずかに含む。 |
| 4 | 5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 炭化物をまばらに含む。 |
| 5 | 10Y3/2 オリーブ暗黒色 | 粘土 | 木本性の植物遺体を多量に含む。 |
| 6 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 植物遺体をまばらに含む。 |
| 7 | 7.5Y4/1 灰色 | 粘土 | 粗砂をラミナ状に含む。 |
| 8 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 灰白色の粘土を粒状に全体的に多く含む。 |
| 9 | 7.5Y3/1 オリーブ黒色 | 粘土 | 細砂をラミナ状に含む。 |
| 10 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 微砂を多く含む。 |
| 11 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 黒褐色粘土質シルトを小ブロック状にまばらに含む。灰白色粘土を粒状に層下に多く含む。 |
| 12 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 灰白色の粘土をブロック状に多く含む。 |
| 13 | 2.5Y3/1 黒褐色 | 粘土 | 灰白色の粘土を粒状にまばらに含む。 |
| 14 | 7.5Y4/1 灰色 | 粘土 | 粗砂を層の中部にラミナ状に含み、細砂を全体的に多く含む。 |
| 15 | 5G4/1 暗緑灰色 | 粗砂 | 弥生時代の遺物を多く含む。 |

SK50 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 第IVa層を多量に、第IVb層をブロック状にまばらに含む。 |

第50・51図　土層註記

約11cmで、茎尻側の狭い逆台形を呈する。a面左側が平坦な横断面形であることから、a面右側が刃先である。目釘孔は装着口から約5cmの位置に穿たれており、a面側の目釘孔に隣接して盲孔が3孔確認される。目釘孔と装着口の間と、柄の中央部には幅1.5cmほどで一段削り込まれた部分が短軸方向に一周しており、樹皮やその他の帯状のものが巻き付けられていたものと推定される。

第150図2は草履の芯の板材と考えられる。図示した右側と左側縁の一部を欠損している。樹種はネズコの柾目板が用いられている。

第150図3は下駄の歯の破片資料である。木取りの観察から連歯下駄の歯と考えられる。

第150図4はヒノキ科の薄い柾目の板材であり、小孔が1孔観察される。上端縁と左側縁の一部が残存しており、草履の芯の板材の可能性が考えられる。

第150図5～7は杭状に先端を尖らせた木製品である。5は分割材を素材とし、大別2面の加工によって作り出された尖端部付近のみを残存している。6は芯持ち材を素材とし、大別1面の加工によって尖端部を形成している。上端を欠損する。7は樹皮を残す芯持ち材を素材とし、一端に尖端部を形成し、反対側の一端には切断痕が残されている。a面の尖端部寄りに枝打ちの加工痕が残されている。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊の第223図5～12と第224図および第225図1～6に主なものを図示した。

**第223図**5～9は石庖丁である。用いられている石材は5が珪化凝灰岩であり、6は絹雲母片岩、7と8は粘板岩、9はデイサイト質凝灰岩である。

第223図5～8は石庖丁の成品の破片である。

第223図5には一方の紐孔が部分的に残されており、紐孔穿孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって行われている。研磨面下に器体調整時の敲打痕が観察される。背部および側縁は研磨による平坦面を形成している。

第223図6と7は側縁がわずかに残存している資料であり、7の研磨面下には器体調整時の敲打痕が残されている。

第223図8の研磨面下には整形時の剥離面と器体調整時の敲打痕が観察される。表裏両面を大きく破損しているが、刃部を一部残している。

第223図9は剥離による器体の整形を経て、紐孔部に敲打によって窪み部を形成する段階まで製作作業が進行した未成品である。紐孔部を除き表裏両面の器体に敲打痕が認められないことから、製作作業には敲打による器体の調整の工程を伴っていないことが確認される。2片の接合する資料であり、1片はSR 1自然流路跡の堆積土12層から出土している。表裏両面の接合線上には紐孔穿孔のために施された敲打痕が残されており、紐孔部の敲打による窪み部形成作業中に事故が起き、破損したものと考えられる。a面には自然面が大きく残されており、b面には節理面が観察される。

第223図10～12は石斧の破損品である。用いられている石材は10が黒色頁岩であり、11はデイサイト質凝灰岩、12は結晶片岩である。

第223図10は刃部を欠損する扁平片刃石斧である。表裏両面に自然面が残されていることから、扁平な礫を素材として部分的な剥離によって整形した後、研磨によって仕上げられている。側面は形成されているが平坦ではなく、膨らみをもっており、側面の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕を伴っている。表裏両面の研磨面には短軸方向もしくはそれに近い右下がりの擦痕が確認される。

第223図11は刃部の大半を欠損し、表裏両面に部分的な破損面のある扁平片刃石斧である。平面形は台形状であり、

断面形は楕円形状を呈する。側面は形成されているものの、平坦ではなく膨らみをもっている。表面の風化が著しいため詳細な観察は困難であるが、研磨面下に器体整形時の剝離面が残されている。

第223図12は太形蛤刃石斧の基端付近の破片である。基端面に研磨面が残されており、a面にも研磨痕が観察されることから成品の一部と考えられる。a面の研磨は弱く、器体調整時の敲打痕が明瞭に観察される。b面は基端面側からの力による剝離面である。

**第224図**1は縦型石匙である。表面に自然面を部分的に残す剝離面打面の剝片を素材としている。素材剝片の打面とバルブは除去されずに残されている。つまみ部は素材剝片の末端に作り出されており、a面左側はa面側ののちb面側へ、右側はb面側ののちa面側へ細部調整を施して形成されている。つまみ部作出以外の細部調整は両側縁に施されているが、深度の浅い剝離がほとんどで、素材剝片の縁辺の形状を大きく変更するものではない。細部調整が施されたa面左側縁の角度は40～45度である。用いられている石材は珪質頁岩である。

第224図2は珪化凝灰岩を石材とする剝片を素材とし、両側縁から打面にかけて細部調整を施した削器である。細部調整は表裏両面に施されており、a面右側縁の角度は80～90度である。

第224図3は剝片の打面側と末端に施された細部調整によって、三角形に整形されている。細部調整は表裏両面に施されているが、全体的に粗い剝離であり、深度も浅く、尖端部の作出も充分には行われていないため、石鏃の未成品と考えられる。石材は珪質頁岩である。

第224図4～8は削器である。用いられている石材は4が珪質頁岩であり、5～7は珪化凝灰岩、8はデイサイトである。

第224図4は剝片素材の石核から剝離された双面打面の剝片を素材とし、b面の右側縁にa面側からの細部調整を施して刃部を作出している。刃角は40～50度である。

第224図5は末端がヒンジ・フラクチャーの状態の横長剝片を素材とし、おもに素材剝片の打面側に細部調整を施している。打面側の細部調整は表裏両面に施されており、65～75度の刃角を形成している。素材剝片の末端にもわずかに剝離が施されている。

第224図6は双面打面の稜上加撃によって得られた剝片を素材とし、b面左側縁にa面側からの連続した剝離を施し、刃部を形成している。刃角は55～60度である。

第224図7は表面に自然面を残す剝片を素材としており、両側縁を折りとって細部調整を施している。a面左側面の折りとり面を打面とした細部調整が表裏両面に施され、素材剝片の末端へと連続している。a面左端の角度は70度前後である。

第224図8は剝離面打面の剝片を素材とし、素材剝片の両側縁におもに主要剝離面から表面側へ細部調整を施している。a面左側縁の細部調整は粗く、鋸歯縁状を呈している。

第224図9は剝離面打面のa面に自然面を大きく残す剝片を素材とした細部調整剝片である。素材剝片の末端とb面左側縁に細部調整がわずかに施されている。用いられている石材は流紋岩である。

第224図10は上端縁と下端縁が対になる、1対の細部調整が認められる。c面の大きな剝離面は両極剝離によるものである。縦断面形は凸レンズ状を呈している。用いられている石材は瑪瑙である。

**第225図**の1と2は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。

第225図1は上端面とa面左側面の上端寄りに自然面を残しており、その交わる角を落とすための2面の剝離面がb面側に確認される。刃部の表裏両面には光沢が観察される。

第225図2は折りとりと折りとり面からの表裏両面への細部調整によって台形状に整形されており、底辺部分を刃部としている。刃部は研磨を施して直線的に形成されており、本遺跡出土の大型板状石器のなかでもっとも明瞭な部分磨製の資料である。刃部の研磨はb面ではわずかであるが、a面では刃縁に素材の面を残さないほど入念に施

されている。研磨面には刃縁にほぼ平行する若干右下がりの擦痕を伴っている。光沢は表裏両面に認められ、研磨面を覆っている。

第225図3～5は砥石である。用いられている石材は3が玢岩であり、4と5はデイサイト質凝灰岩である。

第225図3は2片の接合する資料であり、1片はSD 5溝跡から出土している。自然礫を素材とした砥石であり、側面は部分的に残されているのみである。表裏両面とも平滑な磨面である。

第225図4は砥石の一部分が残存する資料である。a面の磨痕には右下がりの擦痕が観察され、b面には刃物を直角にあてた傷が残されている。

第225図5は破損面を除いた5面に磨痕が観察される資料であり、磨痕下に剝離面が認められることから剝離によって整形されたものと判断される。b面の両側面とc面は使用によってほぼ平坦になっており、a面では中央部に磨痕が顕著に残されている。b面の磨痕はもっとも弱く、突出した部分にのみ観察される程度であり、整形時の剝離面を明瞭に残している。b面からc面およびd面にかけて煤が付着しており、a面とa面の左側面には火熱による変色がみられる。

第225図6は尖端をわずかに欠損しているが、ほぼ完形の有茎の石鏃である。両側縁とも直線的な形態であるが、基端は弧状に整形されており、他の石鏃にはあまりみられない形状である。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

SD45溝跡　調査区東部の南側で検出された南北方向に延びる溝跡で(第44図)、上端幅10～34cm、下端幅4～13cm、深さ2～4cmである。底面はほぼ平坦であるが、北から南へ向かってわずかに低下している。方向はN－3.5°－Eである。2箇所で途切れているが、検出総長は6.9mであり、さらに調査区外の南へ続くものと考えられる。断面形は開いたU字形を呈している(第51図)。堆積土は基本層位の第IVa層であり、褐灰色のシルト質粘土である。

堆積土中より弥生土器、石鏃が出土している。

### (3) 土坑

土坑は調査区中央部で1基検出されている。

SK50土坑　調査区中央部E76S35区付近で検出された土坑である(第51図)。平面形は長径84cm、短径79cmの不整円形を呈し、深さは6cmである。断面形は皿形を呈し、底面には著しい凹凸が認められる。堆積土は黒褐色のシルト質粘土であり、基本層位の第IVa層を主体とし、第IVb層起源のブロックをまばらに含んでいる。

遺物は出土していない。

### (4) ピット

遺物は20基のピットから弥生土器が出土している。

## 2．第IVa層上面検出遺構と出土遺物

第IVa層上面で検出された遺構は、水路を伴う水田跡、土坑、性格不明遺構である。水田跡の区画の一部には畠として利用された区画も確認される(第52図)。

### (1) 水田跡

水田跡は調査区全域に広がっていたものと考えられるが、標高の高い調査区西部は後世の耕作によって上部を削

平されており、畦畔の部分的な確認にとどまっている(第52図)。畦畔は完全に削平されているものの、直線的に延びる段差によって畦畔の存在が推定される箇所もある。水路跡であるSD 4溝跡の東側で検出された水田区画は、部分的なものも含め、38区画である。

①畦畔

畦畔は水田土壌である第IVa層を盛り上げて造られており、規模の大きい畦畔（大畦畔）と、それに比べて規模の小さい畦畔（小畦畔）の2種類がみられる。畦畔内には、畦畔とほぼ同一方向に延びる幅の狭い高まりが部分的に検出されているが、上層の近世水田跡に伴う畦畔痕跡（注；畦畔直下に位置していたため耕作による削平を受けなかった下層部分。下層が自然堆積層の場合は擬似畦畔Bと呼ばれる。）である。畦畔の上部は上層水田跡の耕作によって削平されているため、水田面からの当時の高さは不明である。残存する高さは2～7cmで、上層の畦畔痕跡の部分では15cm程に達する箇所も認められる。

E70付近に位置している、南北方向に延びてS11付近で東へ屈曲する畦畔は、大畦畔の中でも規模が大きく、第IVa層下面では畦畔の両側の位置に道路の側溝と推定される溝跡（SD 9・10溝跡）が確認されたことから、水田区画の基本となる農道と考えられる。南北方向の幅は238～350cm、東西方向は209～248cmである。

大畦畔は、農道と考えられるE70付近の畦畔を除いて、調査区東部に造られており、幅は181～262cmである。

小畦畔の幅は69～136cmで、70～100cmの規模のものが多い。

区画15の北東角のE85S14付近には長軸約510cm、短軸約410cm、高さ10～15cmの不整形な島状の高まりが造られている。第IVa層下面では、この高まりを取り囲んで溝跡（SD 8溝跡）が確認されたことから、塚状の高まりがそのまま残されたものと推定される。

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 | 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 18.9m以上 | 8.4m以上 | 36.0m²以上 | 20 | 15.6m | 8.2m | 126.0m² |
| 2 | 19.0m | 14.8m | 232.8m²以上 | 21 | 17.4m | 11.9m | 195.3m² |
| 3 | 16.0m以上 | 14.3m | 166.0m²以上 | 22 | 12.6m以上 | 12.7m | 132.3m²以上 |
| 4 | 13.7m | 10.4m以上 | 96.8m²以上 | 23 | 14.3m | 8.6m以上 | 93.2m²以上 |
| 5 | 15.8m | 5.5m以上 | 38.2m²以上 | 24 | 14.7m | 12.9m | 181.3m² |
| 6 | 17.4m | 14.6m | 208.1m² | 25 | 14.1m | 9.4m | 125.8m² |
| 7 | 13.9m | 13.3m | 170.1m² | 26 | 18.5m | 13.4m | 233.2m² |
| 8 | 4.9m | 2.5m | 11.1m² | 27 | 20.8m | 11.7m | 233.9m² |
| 9 | 3.3m | 3.1m | 8.4m² | 28 | 6.8m以上 | 5.8m以上 | 32.5m²以上 |
| 10 | 23.6m | 5.0m | 103.0m² | 29 | 19.9m | 5.4m以上 | 74.0m²以上 |
| 11 | 20.1m | 14.0m | 258.1m² | 30 | 8.6m | 3.6m | 28.1m² |
| 12 | 13.9m | 13.0m | 128.5m² | 31 | 14.8m以上 | 4.6m以上 | 46.3m²以上 |
| 13 | 10.6m | 5.2m | 48.4m²以上 | 32 | 10.2m以上 | 2.1m以上 | 10.8m²以上 |
| 14 | 5.3m以上 | 2.9m以上 | 7.5m²以上 | 33 | 10.9m | 3.2m以上 | 31.5m²以上 |
| 15 | 17.6m | 16.2m | 241.6m² | 34 | 5.3m | 3.6m以上 | 16.5m²以上 |
| 16 | 14.1m | 11.5m | 144.0m²以上 | 35 | 6.7m以上 | 1.0m以上 | 6.0m²以上 |
| 17 | 17.7m | 13.9m | 229.4m² | 36 | 8.4m | 2.3m以上 | 3.1m²以上 |
| 18 | 19.8m | 9.4m | 189.3m² | 37 | 12.4m | 7.9m以上 | 45.3m²以上 |
| 19 | 14.9m | 12.6m | 152.6m² | 38 | 12.1m以上 | 8.2m以上 | 91.2m²以上 |

第2表　第IVa層上面水田跡　水田区画計測表

②畦畔の配列

N－8.5°－W～N－6.5°－E 方向の畦畔と、ほぼ直交する E－5°－S～E－7°－N 方向の畦畔によって構成されている。畦畔の交わり方は基本的に、南北もしくは東西に通る畦畔に対してT字形に接合されており、交差する場合でも十字形に直交はせず、区画17の南東角と区画18の北東角にみられるように、わずかにずれて取り付けられている。したがって水田跡の全体的な区画は碁盤目状の整然とした区画ではない。

SD 4溝跡よりも西側で部分的に確認された畦畔もしくは直線的な段差の方向には E－14～24°－N の東西方向のものと、N－15.5°－E の南北方向のものがあり、SD 4溝跡よりも東の畦畔とは若干方向が異なっている。

③水田区画の形状と規模

区画の形状は方形もしくは方形に近い長方形を基調とするが、長方形の場合は南北方向を長軸とする区画が多く、東西方向は少ない。SD 4溝跡に隣接する調査区中央部の区画8～10と13・14は、他の区画と比べて規模も形態も著しく異なっており、水田面の標高も低い。第IVa層下面ではこの位置で溝跡（SD13溝跡）が検出されており、その影響によって周辺よりも低くなっていたものと推定され、それに合わせた結果、特異な形状に造られたものと考えられる。調査区東端の区画28～31も同様であり、第IVa層下面の大規模な溝跡（SD30溝跡）内に位置しているため、楕円形に近い形状となっている。また、区画10・13と農道に挟まれた区画12は、特異な形状の区画と方形を基調とする全体の区画との調整のため、三角形に近い形状を呈している。

特異な形状の区画を除いた水田1区画の面積は125m²から250m²のものが多く、最大は区画11の258.1m²である。

下層の遺構検出のため第IVa層を掘り下げたところ、区画17の西半で第52図中に一点鎖線で示したプランが層の下部で確認されたことから、区画17では区画の造りかえが行われた可能性が考えられる。

④水田土壌

水田土壌は基本層位の第IVa層であり、褐灰色ないし灰黄褐色を呈する粘土であるが、調査区西部ではシルト質粘土となる。層下面に凹凸が認められることから層厚は一定せず、4～16cm である。酸化鉄の斑紋が確認され、マンガン粒を含んでいる。

⑤全体的な水田面の傾斜

水田面の標高は2.75～3.16m であり、SD 4溝跡以東の全体的な傾斜は、SD36溝跡よりも北側では北が高く南へ向かって低下する傾向があり、南側では南から北へ低下している。

調査区東端の区画30と31の2区画は標高2.37～2.63m であり、東から西へ向かって急激に低くなっている。ひとつの区画の中でも20cm 程の高低差があり、稲を栽培した区画とは考えにくく、区画内には東西方向の小溝状遺構群が認められることから畠として利用されたものと推定される。

⑥水口

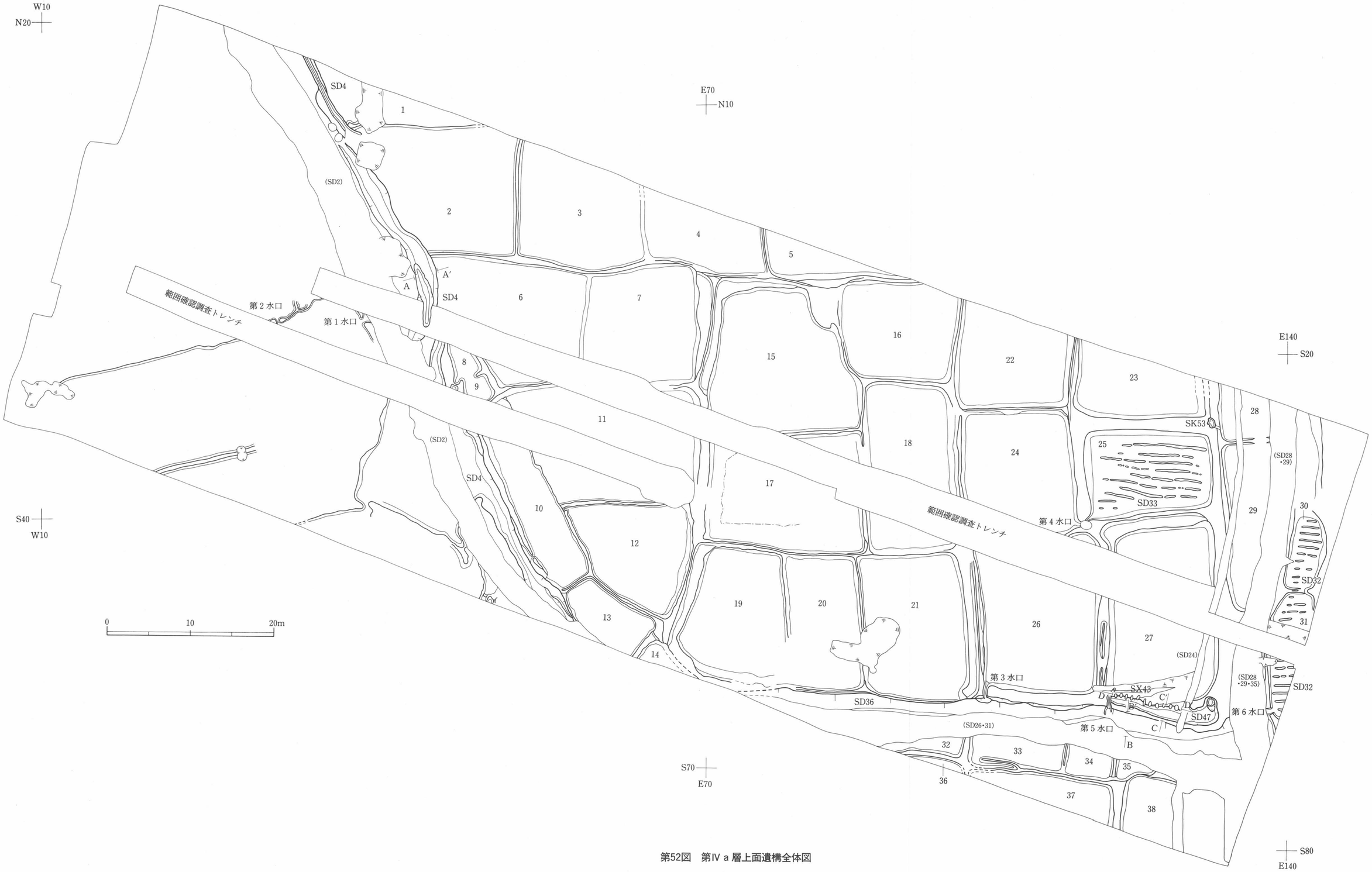
水口は6箇所で検出されている。

**第1水口**は E29S16 付近に設けられている（第53図）。西が高く東へ向かって低下している（上端幅60cm、下端幅32cm）。

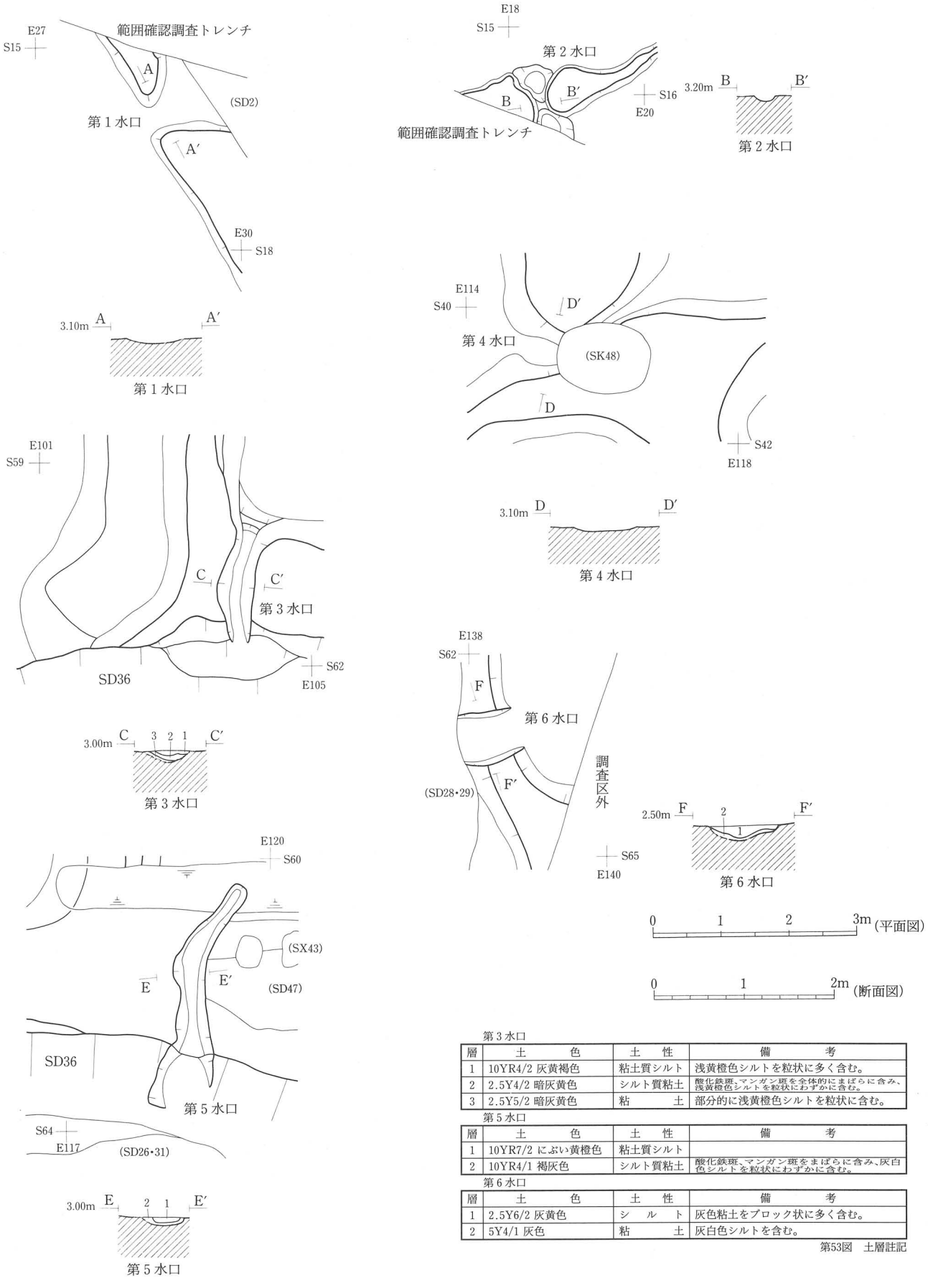
**第2水口**は東西に延びる畦畔の E18S16 付近に造られており（第53図）、ピット状の落ち込みを伴っている（上端幅22cm、下端幅12cm）。畦畔の北側が高く南側との高低差は約10cm である。

**第3水口**は区画26の南西角に設けられている（第53図）。南辺の畦畔を切り SD36溝跡へ接続している（上端幅36～55cm、下端幅16cm）。

**第4水口**は区画24と25を画する南北方向の畦畔の南端に造られている（上端幅33～76cm、下端幅9～40cm　第53図）。第4水口の両側の区画にはわずかな高低差があり、区画24が区画25よりも2～3cm 高い。上層のIIc層上面で検出された SK51 土坑に切られている。




第52図　第Ⅳ a 層上面遺構全体図




第3水口

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 浅黄橙色シルトを粒状に多く含む。 |
| 2 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑を全体的にまばらに含み、浅黄橙色シルトを粒状にわずかに含む。 |
| 3 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粘土 | 部分的に浅黄橙色シルトを粒状に含む。 |

第5水口

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含み、灰白色シルトを粒状にわずかに含む。 |

第6水口

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y6/2 灰黄色 | シルト | 灰色粘土をブロック状に多く含む。 |
| 2 | 5Y4/1 灰色 | 粘土 | 灰白色シルトを含む。 |

第53図　土層註記

第53図　水田跡水口

**第5水口**は区画27の南西角に設けられている(第53図)。南辺の畦畔を切りSD36溝跡へ接続している（上端幅25～48cm、下端幅12～38cm)。SD47溝跡を切っている。

**第6水口**は区画31の南西角に位置し、西辺の畦畔を切って造られている（上端幅77cm、下端幅60cm　第53図)。SD43溝跡に切られている。

⑦水路跡

水田跡に伴う水路として2条の溝跡が検出されている。北西から南東へ延びるSD 4溝跡と、東西方向のSD36溝跡である。

SD 4溝跡　調査区西部の北西から中央部の調査区南側へ延びる溝跡で、2箇所で屈曲している(第52図)。上端幅92～321cm以上、下端幅54～241cm以上、深さ10～28cmである。北側で狭く、南側で広くなっており、南半はSD 2溝跡に西側が切られていることから上端幅・下端幅ともに不明である。底面には凹凸がみられ、北半では溝跡が延びる方向と同一方向の溝状の落ち込みが認められる。底面は北から南へ向かって低下する。S 9付近とS20付近に屈曲部があり、方向はS 9付近より北ではN－33°－W、S 9付近からS20付近まではN－1°－E、S20付近より南ではN－28°－Wである。検出長は79.8mであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと考えられる。断面形は開いたU字形を呈しており(第56図)、堆積土は3層に大別される。上層は褐灰色を呈し、上部のシルト質粘土と下部の粘土に細分される。中層は灰褐色の粘土、下層は褐灰色の粘土である。

SD 2溝跡、SK 3・4土坑に切られている。

堆積土中より弥生土器、土師器、石器が出土している。

［石器］

石器は、石錐、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、礫石器などである。第4分冊第213図1～3におもな石器を図示した。

**第213図**の1と2は石錐である。用いられている石材は1がチャートであり、2は珪質頁岩である。

第213図1は基部と尖端部の境が明瞭であり、尖端部の断面形はa面側が平坦でb面の中央に平坦部をもつ逆台形状を呈している。尖端部は両側縁ともb面側の後、a面側へ剥離を施して作り出されている。

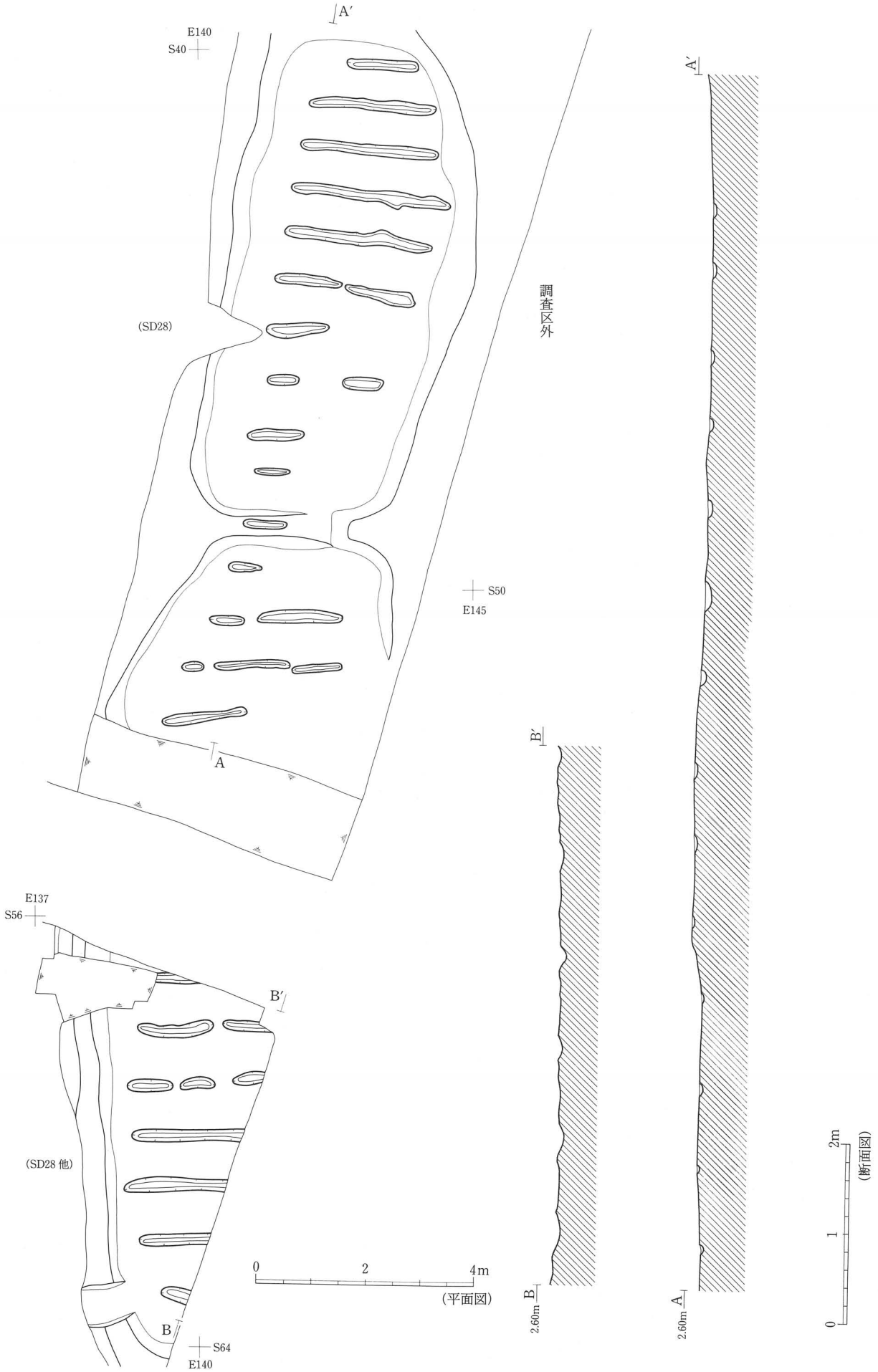
第213図2は両端に尖端部が作り出されている棒状の石錐である。中央の基部と尖端部の境はやや不明瞭であるが、側縁にわずかな段差が認められることから確認は可能である。尖端部は上端側が長く、厚みをもっている。断面形は不整な菱形を呈する。下端側は上端側に比べ薄く作り出されていることから、断面形はやや扁平な菱形を呈している。

第213図3は表面に自然面を残す剥片を素材とした掻器である。素材剥片の打面は細部調整によって失われている。刃部は素材剥片の主要剥離面側からの細部調整によって作出されており、刃角は70～80度である。基部は表裏両面への細部調整によって整形されている。石材は珪質頁岩が用いられている。

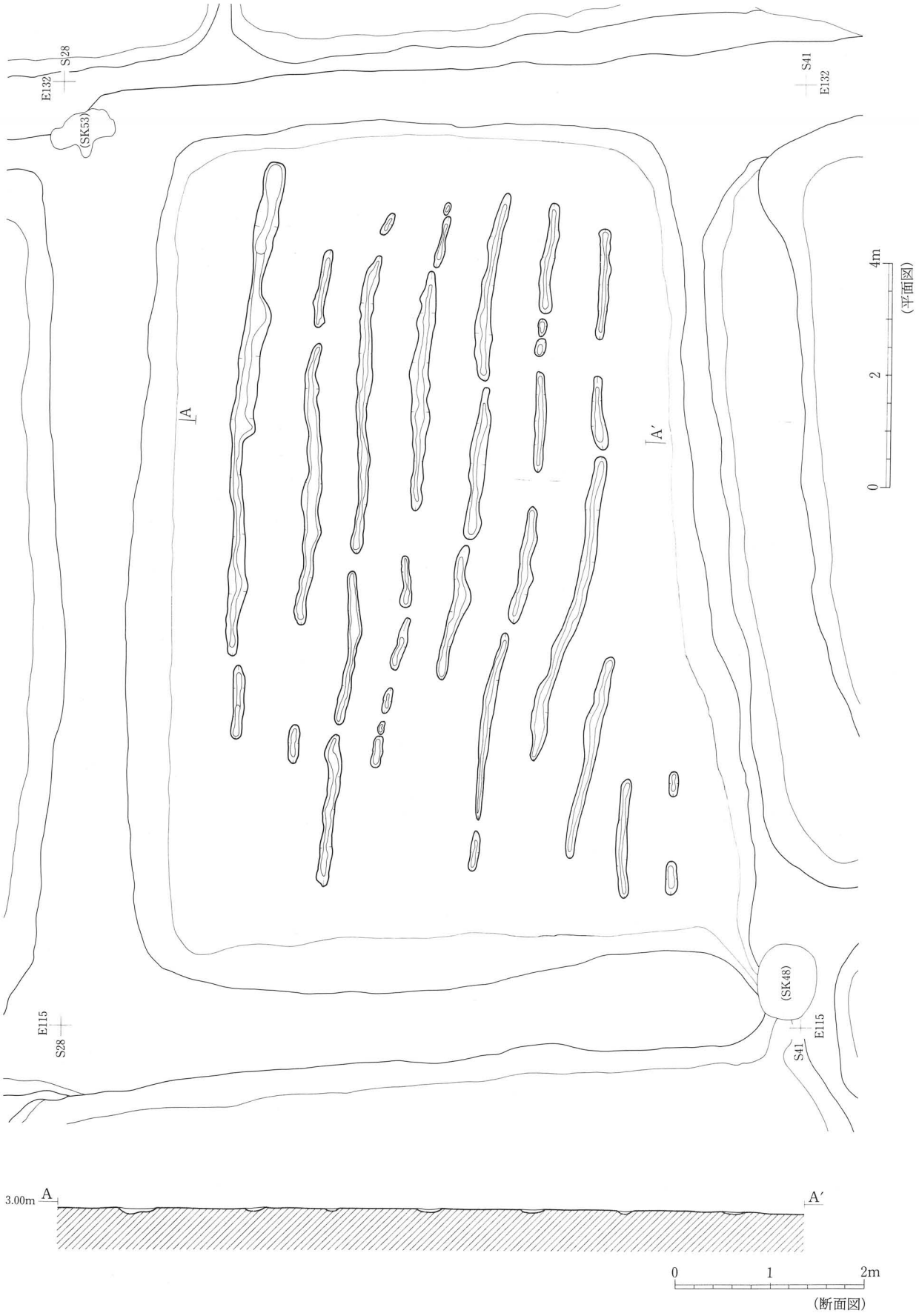
SD36溝跡　調査区南端の中央部から東部にかけて東西方向に延びる溝跡で(第52図)、上層の第IIa層水田跡に伴う水路のSD26溝跡と、第IIc層水田跡の水路SD31溝跡などに切られており、上端幅・下端幅などの詳細は不明である。上端幅は544cm以上、下端幅は361cm以上で、深さは70～77cmである。底面はほぼ平坦で、残存する下端の標高は西から東へ向かって低下している。方向はE－4°－Sである。検出長は62.1mであるが、西側はさらに調査区外へ続くものと考えられる。東側は上層の水田跡に伴う溝跡に切られており、不明である。断面形は開いたU字形と推定され(第56図)、堆積土は4層に大別される。1層目は褐灰色の粘土、2層目はにぶい黄橙色の粘土質シルト、3層目は黄灰色の粘土である。4層目は上部の褐灰色粘土と、下部の灰色粘土に細分される。

堆積土中より弥生土器、石器類が出土している。

［石器］


A′
E140
S40
(SD28)
調査区外
S50
E145
A
E137
S56
B′
(SD28 他)
B
S64
E140
0
2
4m
(平面図)
B′
B
2.60m
A′
A
2.60m
0
1
2m
(断面図)

第54図　SD32 溝跡


E132
S28
(SK53)
S41
E132
A
A′
4m
2
0
(平面図)
E115
S28
(SK48)
E115
S41
3.00m
A
A′
0
1
2m
(断面図)

第55図　SD33 溝跡

石器は、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、礫石器などである。第４分冊**第223図**１に剝片を図示した。ａ面中央には擦痕を伴う磨痕が残されており、ｂ面は自然面であるが、折れ面を除き表裏両面に光沢が観察される。大型板状石器の刃部の一部と考えられる。石材は珪質頁岩である。

⑧畠として利用された区画

畠として利用された区画は３区画確認され、その詳細を第54図と第55図に図示した。

区画30と31にまたがってみられる小溝状遺構群を一連のものとして捉え、一括して SD32 溝跡として記述する（第54図）。22条の小溝が確認されており、幅８～32cm、深さ0.5～9.5cm で、２～5cm の深さのものが多い。小溝の断面形は浅いＵ字形を呈しており、堆積土は浅黄色の砂質シルトである。区画30と31を分ける畦畔上の小溝を除き、すべて区画内で完結している。最長の小溝の長さは2.89m である。方向はＥ－２°－Ｓを中心に、Ｅ－8.5°－Ｎから Ｅ－14.5°－Ｓまで若干のばらつきがみられる。小溝間の距離は68～102cm である。区画30と31の耕作土は第Ⅳａ層下面で検出された SD30 溝跡の堆積土４層であり、それを覆う３層が自然堆積土であることから、小溝状遺構群は畠の畝間と考えられる。堆積土中より弥生土器が出土している。

区画25内では10条の小溝が検出されており、一連のものとして捉え、一括して SD33 溝跡とする（第55図）。

小溝は幅６～43cm、深さ0.5～6cm で、１～2cm の深さのものが多い。断面形は浅いＵ字形を呈しており、堆積土は基本層位第Ⅲ層の浅黄色の粘土質シルトであり、わずかに基本層位の第Ⅱｃ層起源のブロックを含んでいる。小溝はすべて区画内で完結しており、所々で途切れているが、最長の小溝の長さは11.96m である。方向はＥ－３～４°－Ｓのものが多く、Ｅ－３°－Ｎから Ｅ－13°－Ｓまで若干のばらつきがみられる。小溝間の距離は52～71cm である。

小溝は区画内で完結しており、堆積土が自然堆積土である基本層位第Ⅲ層であることから、小溝状遺構群は畠の畝間と考えられる。堆積土中より弥生土器、細部調整剝片、剝片などが出土している。

## (2) 溝跡

水田跡に伴う水路と考えられる溝跡の他に１条の溝跡が検出されており、東西方向の大畦畔上に位置している。

SD47 溝跡　調査区東部の南半、E119～132S61～65 区で検出された東西方向に延びる溝跡であり、東端で北側に短く屈曲する（第52図）。上端幅82～236cm、下端幅35～180cm、深さ3.5～16cm である。西側で狭く、東側は徐々に広くなり、E131 付近で北へ屈曲する。総延長は14.52m である。底面はほぼ平坦で、西から東へ向かって低下しており、屈曲した北端、E131S62 付近には長軸165cm、短軸106cm、深さ36cm の落ち込みが認められる。方向は E131 付近より西ではＥ－12°－Ｓ、東ではＮ－12°－Ｅである。断面形は大きく開いたＵ字形を呈し（第56図）、堆積土は２層に分けられ、上層は黒褐色のシルトであり、下層はにぶい黄橙色の粘土質シルトである。

SX43 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より石器・石製品類が出土している。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石斧、石鏃、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、砥石などである。第４分冊の第209図５・７・12に主な石器を図示した。

**第209図**５は瑪瑙を石材とした細部調整剝片である。細部調整は表裏両面に施されており、尖頭部の作出を意図したものと考えられるが、幅に対して厚みがあることから石鏃などの製作を途中で中止した未成品の可能性がある。

第209図７は扁平片刃石斧の刃部の一部分である。使用による刃こぼれによって生じた破片であり、末端がステップ・フラクチャーの状態の曲げ剝片である。図示した裏側には刃面が残されており、研磨面に右下がりの擦痕を伴

っている。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第209図12は大型板状石器である。両側面と上端面は折りとり面であり、わずかに剝離も施されている。刃部は素材の縁辺をそのまま利用しており、表裏両面に光沢が明瞭に観察される。用いられている石材は凝灰岩である。

### (3) 土坑

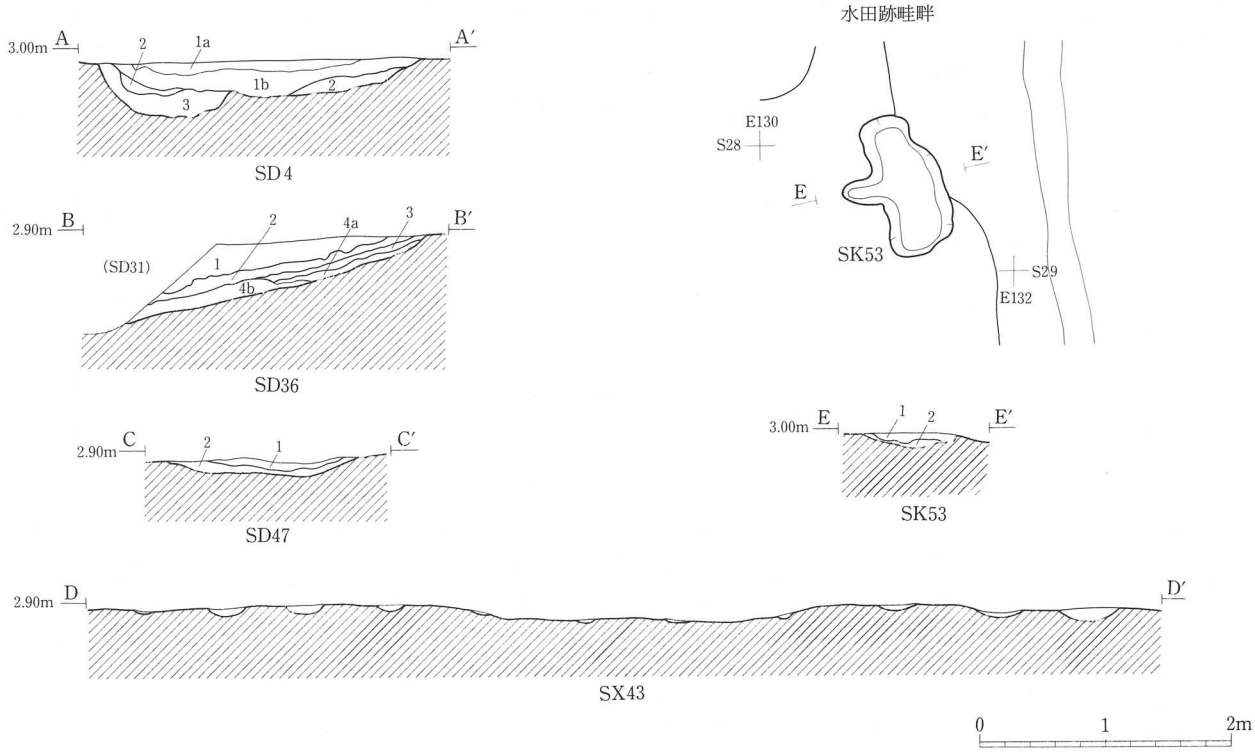
SK53 土坑　調査区東部の北端 E130～131S27～28 区で検出された土坑である(第56図)。畦畔の接続部に位置している。長軸115cm、短軸52cm の不整長方形で、西側に25cm ほどの張り出し部か造られている。深さは 6 ～9cm である。断面形は開いたU字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられ、上層は灰黄褐色の粘土質シルト、下層は灰褐色のシルト質粘土である。下層には焼土を小ブロック状に全体的に混入している。

底面付近より焼けた骨片が多く出土している。

堆積土中より弥生土器が出土している。

### (4) 性格不明遺構

SX43 性格不明遺構　調査区東部の南半、E119 から E128 までピット状の遺構が11基、東西方向に並ぶ遺構である(第




第56図　SD4・36・47 溝跡、SK53 土坑、SX43 性格不明遺構断面図

SD4 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 7.5YR5/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑をまばらに含み、上部にシルトをわずかに含む。 |
| 1b | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含み、わずかに砂のブロックを含む。 |
| 2 | 5YR5/2 灰褐色 | 粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑を多く含む。 |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 黄灰色粘土、暗オリーブ褐色シルト質粘土をブロック状に含む。 |

SD32 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y7/3 浅黄色 | 砂質シルト | 黄灰色粘土をブロック状に含む。酸化鉄、マンガンを多く含む。 |

SD33 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y7/3 浅黄色 | 粘土質シルト | 第Ⅲ層、第Ⅱc層土をブロック状に含む。 |

SD36 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 層上部に浅黄橙色シルトを小ブロック状に含み、最下部に灰褐色粘土を層状に含む。 |
| 2 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 粘土質シルト | 層中部に褐灰色粘土を層状に含む。 |
| 3 | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘土 | 浅黄橙色シルトを粒状にまばらに含む。 |
| 4a | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 浅黄橙色シルトを粒状に多く含む。 |
| 4b | 7.5Y4/1 灰色 | 粘土 | 浅黄橙色シルトを粒状に多く含む。 |

SD47 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | マンガンを含む。 |
| 2 | 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 粘土質シルト | にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。 |

SK53 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | マンガン斑をまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 焼土を粒状もしくは、小ブロック状に多く含む。 |

SX43 性格不明遺構

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 粘土質シルト | にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を含む。 |

第54～56図　土層註記

52図)。ピットは長軸48～84cm、短軸23～50cm、深さ3～15cmの南北方向に長い楕円形もしくは円形に近い楕円形を呈している。ピットとピットの間は26～52cmである。断面形は開いたU字形を呈し、堆積土はにぶい黄橙色の粘土質シルトである（第56図)。

SD47溝跡に切られている。

遺物は出土していない。

## 3．第Ⅳａ層出土遺物

基本層位の第Ⅳａ層からは、縄文土器、弥生土器、磁器、陶器、土製品、石器・石製品類、金属製品が出土しており、その大部分は耕作などによる他層からの混入と考えられる。

基本層位の第Ⅳ層は調査中に2つに細分されることが確認された層である。細分以前に出土した遺物は第Ⅳ層として一括した取り上げを行っているため、第Ⅳａ層と第Ⅳｂ層の両者から出土した遺物が含まれている可能性が考えられるが、上層である第Ⅳａ層に併せて掲載・報告することとした。

**［縄文土器］**

縄文土器は12点図示した(第3分冊第10図6～17)。

6は並行沈線に反転沈線を加えた文様が施されている。文様内に縄文を施文している。

7～11・14は瘤状小突起を貼付しているものである。沈線で文様を描いた後、瘤状小突起で充填している。9は微隆起線文風の文様を横方向に施している。

12は外面に4本からなる並行直線文を施しその下部に縄文を施文している。口唇部と内面の口縁部に沈線が施されている。

13は口唇部に突起を付し垂線を加えている。外面は並行直線文(3本確認)の間にキザミを連続施文している。15は第9図13と同一個体である。

16は二叉の低い突起による波状口縁を呈する。突起と突起を結ぶように弧状の沈線が連続して描かれる。突起の下には三叉文が配されている。文様内に縄文が施文されているが、手法については特定できなかった。

17は口縁部に横方向の沈線が描かれ（3本確認)、文様内に縄文を充填している。

**［弥生土器］**

弥生土器は1点図示した（第3分冊第138図8)。蓋で伏鉢形のものである。調整は外面の無文部分と内面、つまみ部の内面はミガキ調整、つまみ部の外面にヨコナデ調整が施される。文様は縄文が施されている。

**［磁器］**

磁器は2点図示した(第3分冊第152図1・2)。中国青磁で龍泉窯系の花瓶(1)と碗(2)である。

**［陶器］**

陶器は7点図示した(第3分冊第152図3～9)。肥前の陶胎染付碗(3)、常滑の甕(5・7・8)、在地産の鉢(4)と甕（9)、宮城県白石窯と思われる擂鉢(6)である。

**［土製品］**

土製品は1点図示した(第3分冊第153図5)。鼓形の耳飾りで、両側とも凹んでいるが深さが異なる。赤彩されている。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、尖頭器、削器、ピエス・エスキーエ、ノッチ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、管玉、石製品、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊第153図から第159図

に主な石器・石製品を図示した。

**第153図**および第154図１～４は石庖丁の成品と未成品である。成品は第153図１～８であり、用いられている石材は１と３が緑泥石片岩、２と６は結晶片岩、４は珪化凝灰岩、５と７は粘板岩、８は絹雲母片岩である。

第153図１は外弯刃半月形の石庖丁であり、２片の接合した、ほぼ完形の成品である。わずかに接合部分の一部と側縁の１端を欠損している。器体の研磨面下に整形時の剝離面と調整時の敲打痕が表裏両面に観察されることから、敲打による調整は器体全体には及んでおらず、整形時の剝離面が部分的に残された状態で次の紐孔穿孔に関わる作業に移行したものと考えられる。紐孔穿孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われている。紐孔の位置は器体中央ではなく、平坦なｂ面から見て右寄りに位置している。光沢は表裏両面に全体的に確認されるが、ａ面では器体中央から背部にかけての右半で明瞭であるのに対して、ｂ面側では左半に顕著で、背部付近にも明瞭に観察される。

第153図２は器体の中央、約３分の１程度が残存しており、一方の紐孔の一部を残している。器体の研磨面下に整形時の剝離面と調整時の敲打痕が認められる。紐孔穿孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって行われている。光沢は表裏両面に観察されるが、ａ面側がより明瞭である。

第153図３は器体の外弯刃半月形の石庖丁であり、３分の１ほどを欠損している。器体の研磨面下に整形時の剝離面と調整時の敲打痕が認められる。紐孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって穿孔されている。光沢は表裏両面に観察され、ｂ面全体とａ面の器体中央から刃部にかけて顕著である。

第153図４～８は石庖丁の一部が残存する資料である。４・５は器体の中央部のみが残存しており、背部と２つの紐孔が部分的に残されている。４の研磨面下には調整時の敲打痕が確認されるが、５では整形時の剝離面が認められるのみであり、紐孔の穿孔には４では穿孔前の敲打による窪み部形成が伴っているのに対して、５は直接、回転穿孔を行っている。５の表裏両面には光沢が観察される。６は刃部の一部のみ残存しており、ａ面には光沢が認められる。７は刃部と一方の紐孔が部分的に残存している。研磨面下に整形時の剝離面が観察され、紐孔穿孔には敲打による窪み部形成を伴っておらず、直接、回転によって穿孔されている。８は側縁の１端が残存しており、器体の研磨面下に整形時の剝離面と調整時の敲打痕が残されている。光沢は表裏両面で観察され、ｂ面側で顕著である。

第153図９～11は石庖丁の未成品である。用いられている石材は９と10が結晶片岩であり、11は緑泥石片岩である。

第153図９は剝離による整形、敲打による器体の調整、さらに部分的な研磨作業を経て、敲打による紐孔部の窪み部形成の後、回転穿孔まで製作作業が進行した未成品である。敲打による器体の調整と研磨作業はｂ面側でのみ確認される。本遺跡出土の石庖丁は敲打による器体の調整もしくは剝離による整形の後、紐孔穿孔に関わる作業に移行するものが一般的であり、部分的に背部や刃部に研磨を施す例はわずかに認められるが、この資料のように穿孔に関わる作業以前に器体中央に研磨を施す例はほとんどみられない。例外的な資料である。紐孔穿孔に関わる作業は、ａ面は敲打による窪み部形成の段階であるのに対してｂ面では回転へ移行しており、ｂ面側からの回転穿孔作業中の事故によって破損したものと考えられる。

第153図10は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行した未成品である。破損面は新鮮で、後世の破損と考えられる。ｂ面の一部と背部に研磨痕がわずかに観察される。

第153図11は破損した未成品であり、全体の４分の１程度を残している。製作作業は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで進行している。しかし、ｂ面に敲打痕が認められないことから、紐孔部まで残されていないので断定はできないが、器体調整のための敲打段階で破損した可能性が考えられる。

**第154図**１～４は石庖丁の未成品である。用いられている石材は１・３・４が珪化凝灰岩であり、２は結晶片岩である。

第154図１は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで製作作業が進行した未成品である。ｂ面には

節理面が残されている。破損面が新鮮であることから後世の破損によるものと考えられる。

第154図2は2片が接合した資料であり、1片は中世の溝跡の堆積土中から出土している。剝離による器体の整形段階で破損した未成品である。b面に節理面が残され、a面中央には素材剝片の剝離面が認められることから、3cmをこえる厚さの剝片が素材として用いられていることがわかる。

第154図3と4は剝離による器体の整形段階の未成品と考えられるが、4のa面中央には研磨痕がわずかに観察される。

第154図5～7は石斧であり、5は刃部の一部のみが残されている資料であるが、いずれも扁平片刃石斧である。用いられている石材は5がデイサイト質凝灰岩であり、6は緑泥石片岩、7は結晶片岩である。

第154図5は刃部の一部のみが残存する資料である。平坦ではない、膨らみをもった側面が形成されている。研磨面下に敲打痕が認められ、研磨面には擦痕が観察される。擦痕は刃面では刃縁に平行する方向であり、b面では短軸方向に近い右下がりの方向となっているが、右側面寄りには長軸方向に近い右下がりの方向で観察される。側面の擦痕も長軸方向に近い右下がりの方向である。

第154図6は完形の扁平片刃石斧である。平面形は隅丸長方形に近く、刃部幅と比べ基端幅が狭く作られており、最大幅は基部中央に位置している。a面は刃部から基部にかけて外弯しており、それに対してb面は平坦に近く、わずかに内弯している。断面形は長楕円形状を呈し、側面は形成されているものの平坦ではなく、膨らみをもっている。刃部はわずかに外弯するが、直線刃である。研磨面下には整形時の剝離面が部分的に残されており、研磨面には擦痕が観察される。b面では他の石斧にはあまりみられない短軸方向の長い擦痕が認められる。刃縁にはb面側に鈍い光沢が観察される。

第154図7は3片が接合した資料であり、他の2片は基本層位の第IVb層とSR 2自然流路跡の堆積土6層から出土している。刃部の1端を欠損する。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は長楕円形状を呈し、平坦ではない膨らみをもった側面が形成されている。研磨面下に整形時の剝離面が残されており、研磨面には長軸方向もしくはそれに近い右下がり方向の擦痕が観察される。刃部の形状は外弯刃である。

**第155図**は石斧の成品および未成品である。用いられている石材は1がデイサイトであり、2と10は輝緑岩、3は珪化凝灰岩、4・6・8・11・12はデイサイト質凝灰岩、5は斑糲岩、7は珪質頁岩、9は安山岩である。

第155図1は礫の一端を打ち欠いて得られた剝片を素材とした石斧であり、平面形は隅丸長方形を呈している。a面は刃部のみを研磨し、基部は自然面である。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。b面では剝離面全体を研磨しているが、研磨の程度は弱く、剝離面が明瞭に残されている。研磨面には短軸方向もしくはそれに近い右下がりの擦痕が認められるが、刃縁寄りでは長軸方向に観察される。このように剝片の形状を利用し、わずかに手を加えることによって製作された石斧は、本遺跡では他にはなく、特異な例である。a面の中央および基端付近には敲打痕が観察される。

第155図2は風化が著しく、全体の形状から石斧と判断はできるものの、詳細な観察は困難である。

第155図3は表裏両面ともに刃縁や側縁に欠損部分が多く認められるが、小型の扁平な石斧である。側面は形成されているが平坦ではなく、膨らみをもっている。研磨面下には整形時の剝離面が残されており、研磨面には長軸方向に近い左下がりの擦痕が観察される。

第155図4は基部の大半を欠損しているが、最大幅の位置は刃部にある。断面形は側縁をもつ凸レンズ状を呈している。基部の研磨面下には敲打痕が観察される。刃部は弧状を呈し、刃縁にはツブレが認められる。

第155図5は基端を欠損するノミ形石斧である。断面形は図示した面と両側面の中央が膨らむ隅丸方形を呈しており、最大幅は基部の中央に位置する。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。刃縁は平坦に研磨されて1～2mm幅の面が作られており、刃縁を仕上げるための作業に関わるものと考えられる。刃縁の形状をほぼ

決定し、強度を確保するためにある程度の厚みを残したものであり、この後、刃面を研磨して刃縁を作り出すための準備段階と考えられる。図示した面の裏面にも明瞭に刃面が認められることから、研ぎ直しによる刃部再生を意図したものである可能性が高い。

第155図6は石斧の未成品である。製作作業は剥離によって整形した後、敲打による器体の調整段階まで進行している。a面には部分的に自然面が残されている。

第155図7は全体の形状から石斧の未成品と考えられる。表裏両面に自然面が残されており、素材として扁平な礫が用いられている。両側縁に錯向状に剥離を施して整形を行い、折れ面に相対する側の端部には敲打痕が観察される。

第155図8～12は石斧の基部のみが残存した資料である。基端に残る敲打痕および剥離面、研磨面などと断面の形状から8・11・12は太型蛤刃石斧、10は扁平片刃石斧の基部と考えられる。

**第156図**には石鏃と石錐、石匙を図示した。

第156図1と2は石鏃である。ともに有茎の石鏃であるが、2は二重パティナが観察される。新しい剥離面にのみリングとフィッシャーを描き入れ、a面とd面に示した。尖端のa面左側と茎部に新たに剥離を施していることから、尖頭器の再加工の可能性が考えられる。用いられている石材は1が流紋岩であり、2は珪化凝灰岩である。

第156図3～6は石錐である。

第156図3は礫を打ち欠いて得られた剥片を素材とし、その一端に主要剥離面からの細部調整を施して尖端部を作り出している。尖端部の断面形は不整な台形状を呈している。粗粒の石材が用いられており、石材はデイサイトである。

第156図4は末端がウットラ・パセの状態の剥片を素材としており、打面側にわずかな細部調整を施して尖端部を作り出している。尖端部は幅3㎜厚さ3㎜で、断面の形状は三角形を呈し、使用による磨滅が観察される。a面には部分的に節理面が残されている。瑪瑙を石材としている。

第156図5は表面に自然面を大きく残す剥離面打面の剥片を素材とし、末端と左右両側縁に細部調整が施されている。尖端部はa面左側縁と末端により形成される端部に作り出されており、使用による磨滅が明瞭に観察される。打面とa面を分ける稜線上には部分的に研磨痕が残されている。粗粒の石材が用いられており、石材はデイサイトである。

第156図6は剥離面打面の剥片を素材とし、素材剥片末端の尖った形状を利用して、わずかに細部調整を施すことによって尖端部を作り出している。尖端部には使用による磨滅が認められ、磨滅は尖端部に相対する打点側にも観察されることから、両端が使用されたものと考えられる。用いられている石材は流紋岩である。

第156図7～9は石匙である。

第156図7は自然面打面の剥片を素材とした横型石匙である。つまみ部は打点を中心に作り出されており、つまみ部作出のためのノッチ状の凹みは浅く、長さに比べ幅のかなり広いつまみ部となっている。つまみ部以外の細部調整も浅く、表裏両面に施されている。つまみ部に相対する刃縁は直線的に作り出されており、刃角は40～45度である。珪化凝灰岩が用いられている。

第156図8は横型石匙である。剥離面打面の剥片を素材としており、素材剥片のバルブの大半はつまみ部作出のための細部調整によって失われている。つまみ部は両側ともa面ののちb面側に細部調整を施して作り出されている。全体は表裏両面に施された浅い細部調整によって木葉形に整形されており、つまみ部に相対する刃部の細部調整の方がつまみ部側よりも丁寧である。刃角は55～70度であり、つまみ部側は60～75度の角度に仕上げられている。用いられている石材は良質の珪質頁岩である。

第156図9は縦型石匙である。石刃状剥片を素材とし、打面側の両側縁に細部調整を施してつまみ部を作り出して

いる。つまみ部は素材剝片の打点を中心に作られており、ａ面左側はｂ面の後ａ面側に剝離を施し、右側は逆にａ面の後ｂ面側へ剝離を施して作出されている。つまみ部作出以外の細部調整は部分的であり、素材剝片の縁辺をほとんどそのまま残している。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

**第157図**には尖頭器、掻器、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剝片などの打製石器を図示した。

第157図１～５は尖頭器である。用いられている石材は１・２・４が珪質頁岩であり、３は瑪瑙、５は流紋岩である。

第157図１は表裏両面に細部調整が施された有茎の尖頭器であるが、全体的に剝離は粗く、縁辺の整形も充分になされていないことから未成品の可能性が考えられる。

第157図２は剝離面打面のバルブの発達した剝片を素材としており、基部には打点を含む打面が部分的に残されている。縁辺の整形が充分ではなく、未成品と考えられる。細部調整の剝離面と表裏両面の中央に残された素材剝片の剝離面は色調や表面の状態・質感などが異なり、焼けた剝片が偶然、素材とされたのか、あるいは加熱処理が施された可能性が考えられる。

第157図３は横長剝片を素材としており、素材剝片の打面は細部調整によって失われている。尖頭部は素材剝片の１端が尖った形状を利用して、末端と打面側の表裏両面に細部調整を施して作り出されている。

第157図４は表面に自然面を残す剝片を素材とし、おもに主要剝離面側への細部調整によって整形が行われている。ｂ面の中央には素材剝片の剝離面が残されている。細部調整は粗く、先頭部の作出も明瞭ではないことから未成品の可能性が考えられる。

第157図５は表裏両面への細部調整によって全体が整形されており、両面の中央には素材剝片の剝離面が残されている。尖頭部付近でもっとも厚くなることから、未成品もしくは尖端部を欠損した石錐の基部と考えられる。

第157図６は掻器である。ｂ面の一部に自然面を残しており、粗い剝離によって刃部が形成されている。刃角は75～80度である。石材はデイサイトが用いられている。

第157図７は表面に自然面を部分的に残す双面打面の剝片を素材とした削器である。素材剝片の末端に主要剝離面側から細部調整を施し、刃部を作出している。刃角は65～75度である。用いられている石材は流紋岩である。

第157図８は表面に自然面を部分的に残す剝離面打面の剝片を素材とした細部調整剝片である。打面から表裏両面へ細部調整が施されている。石材はチャートである。

第157図９は削器である。剝離面打面の縦長剝片を素材とし、表裏両面の右側縁に粗い剝離が連続して施されている。角度はａ面右側縁が65～80度、ｂ面右側縁は75度前後である。石材は珪質凝灰岩が用いられている。

第157図10は掻器である。素材剝片の打面は細部調整によって失われているが、ｂ面右側からの加撃によって剝離されている。細部調整は刃部と左右両側縁に施されており、刃角は70～80度である。石材はデイサイトである。

第157図11は瑪瑙を石材とする剝片を用いた削器である。素材剝片の打面側と末端およびａ面右側縁に細部調整が施されている。角度は打面側は80～85度であり、末端では80度前後である。ａ面右側縁の細部調整は直角に近い。

第157図12は削器である。表裏両面に素材剝片の剝離面が残されているが、打面は細部調整によって失われている。打面側には表裏両面への細部調整によって内弯した刃部が形成されている。素材剝片の末端とａ面右側縁にもｂ面側からの剝離によって刃部が形成されており、末端では80度前後、右側縁は85度前後の角度である。石材はチャートが用いられている。

第157図13は表面の右側縁に自然面を残す剝片を素材とした削器である。細部調整は素材剝片の末端からｂ面右側縁にかけて施されており、65度前後の刃部が形成されている。また、細部調整は打面側にも施されており、素材剝片の打面は除去されている。ａ面中央には火熱による火ハネの面が広がっている。石材はチャートである。

第157図14は扁平で小さな自然礫の一端に細部調整を施して刃部を作り出した削器である。細部調整は表裏両面に

施されており、刃部は若干内弯している。石材は瑪瑙が用いられている。

第157図15はピエス・エスキーエである。a面左側縁に自然面を残す剥片を素材とし、表裏両面の上端縁と下端縁にツブレ状の細部調整が認められる。b面は両極剥離による剥離面である。石材は珪質頁岩である。

**第158図**の1～6は相対する縁辺に細部調整が認められるピエス・エスキーエである。用いられている石材は1～3が珪化凝灰岩であり、4は流紋岩、5はデイサイト、6は瑪瑙である。

第158図1には上端縁と下端縁、左右両側縁が対になる、2対の細部調整が認められる。a面中央の広い剥離面は両極剥離による剥離面である。断面形は横断面、縦断面とも凸レンズ状を呈する。

第158図2はa面右側縁に自然面を残す剥片を素材としており、上端縁と下端縁、b面左側縁下端寄りと右側縁上端寄りが対になる、2対の細部調整が認められる。

第158図3は自然面打面の剥片を素材としており、a面の右側縁に自然面、下端縁には節理面が残されている。a面左側の剥離面とb面右側の剥離面は両極剥離による剥離面であり、打点の位置関係から同時に形成されたものと判断される。上端縁と下端縁左側、上端縁とa面右側縁下端寄りが対になる、2対の細部調整が認められる。

第158図4は調整打面の剥片を素材としており、素材剥片はバルブの発達した厚みのある剥片である。上端縁と下端縁、左右両側縁が対になる、2対の細部調整が認められる。

第158図5は表面に自然面を大きく残す剥片を素材とし、上端縁と下端縁、左右両側縁が対になる、2対の細部調整が認められる。両側縁に比べ上端縁と下端縁のツブレは著しく、平坦に近い面を形成している。

第158図6には上端縁と下端縁、a面左側縁下端寄りと右側縁上端寄りが対になる、2対の細部調整が認められる。

第158図7は大型板状石器に多用されるデイサイトを石材としており、細部調整が施され、縁辺には敲打痕が残されている。敲打痕は縁辺の所々に観察されるが、表裏両面と下端面を分ける稜線上に顕著であり、a面およびb面には敲打による損傷の剥離面を伴っている。下端面とb面左側面を分ける稜線には回転によると考えられる磨滅痕が認められる。

第158図8は縁辺のほぼ全周に浅い細部調整がまばらに施された細部調整剥片である。全体の形状と用いられている石材から大型板状石器の可能性を考えたが、光沢をもつ鋭角な刃部が確認されないことから、細部調整剥片として記述した。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第158図9～13は大型板状石器に多用される石材を用いており、敲打痕の観察される細部調整剥片である。用いられている石材は9と11がデイサイト質凝灰岩であり、10はデイサイト、12と13は珪化凝灰岩である。

第158図9の表裏両面には自然面が残されており、折りとりと剥離によって長方形に近い形状に整形されている。敲打痕は短辺に観察され、下端縁に著しい。

第158図10は折りとりと剥離によって整形され、両側面は折りとり面である。上下両端縁に敲打痕が明瞭に観察される。a面下端縁は特に敲打が著しく、平坦な面を形成している。敲打に伴う損傷の剥離面はほとんどb面側にのみ認められることから、a面下端縁が対象物に接するように敲打作業を行ったものと考えられる。また、a面下端縁に比べやや狭い範囲であるがb面上端縁にも平坦面を形成する敲打痕が認められ、a面側に敲打に伴う損傷の剥離面が観察されることから、b面上端縁を接触面とした同様な作業が行われたものと考えられる。

第158図11のa面右側面は折りとり面であり、左側縁にはb面側からの細部調整が施されている。敲打痕はb面右側縁の上端寄りと下端寄りに観察され、下端の尖端部にも認められる。

第158図12は縁辺を剥離もしくは折りとりによって整形し、尖端部を作出している。敲打痕は尖端部に観察され、表裏両面に敲打に伴う損傷の剥離面が残されている。

第158図13は縁辺を両極剥離による折りとりや剥離によって整形し、それによって形成された3ヶ所の角に敲打痕が残されている。

第158図14は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。a面左側面と上端面は折りとり面であり、整形のための細部調整が右側縁の刃縁寄りにわずかに施されている。刃部の表裏両面には光沢が明瞭に観察される。

**第159図**の1～4は大型板状石器である。

第159図1は礫の1端を打ち欠いて得られた、表面が自然面の剝片を素材としている。左右両側縁の表裏両面に細部調整を施し、平面形が隅丸三角形状を呈するように整形されている。上端付近の細部調整によって鋭角になった部分は敲打によってつぶされている。刃部は素材剝片の末端をそのまま利用しており、表裏両面に明瞭な光沢が観察される。石材は大型板状石器に多用される安山岩などではなく、玄武岩が用いられており、他には類例がない。

第159図2は薄く剝がれた礫片を素材とし、a面には広く自然面が残されている。長辺の1辺に光沢が顕著であり、b面側には磨滅した部分も観察される。石材は安山岩である。

第159図3はa面の右側面に自然面を残した剝片を素材とし、素材剝片の側縁の一方を刃部として使用している。刃部の表裏両面には光沢が認められるが、b面では剝離面に切られ、わずかに残されている程度である。刃部よりも新しい剝離面が連続して施されていることから、別の石器への転用の可能性が考えられる。石材は板状節理を有する安山岩である。

第159図4は折りとりと剝離によって整形され、左側面と上端面は折りとり面である。縁辺の3ヶ所に敲打痕が認められるが、鋭角な部位にのみ施されていることから整形に伴う刃つぶしと考えられる。刃部の表裏両面に光沢が観察される。用いられている石材は凝灰岩である。

第159図5と6は1端を欠損する碧玉製の管玉である。穿孔はともに上下両端から行われている。断面形は円形ではなく隅丸方形状を呈し、面と面を分ける稜線も観察される。5の側面には仕上げの研磨に伴う長軸方向の擦痕が観察され、残存する端面の研磨痕下には整形時の剝離痕が残されている。また、6の側面の研磨痕下にも整形時の剝離痕が認められる。5の端面の周縁には、連ねられた他の玉との接触によるものと考えられる擦り減りが部分的に観察される。

第159図7はいわゆる独鈷石の破損品と考えられる(注)。ほぼ全面が敲打痕によって覆われており、一部破損しているが、短軸方向に一周廻って凸帯が作り出されている。a面の中央には長軸方向の擦痕をわずかに伴う磨痕が観察されるが、凸帯部分にも認められることから転用によるものと考えられる。石材は凝灰岩が用いられている。

(注)本遺跡の概要報告（荒井1995）では「有角石斧」として報告しているが、刃部作出は明瞭ではなく、実見して頂いた岡本孝之氏から有角石斧（岡本氏の「足洗型石器」）にはみられない石材であり、独鈷石（岡本氏の「白河型石器」）に類する形状であるとのご教示を得たことから独鈷石として報告する。

第159図8と9は砥石である。用いられている石材は8が砂質凝灰岩であり、9は珪質凝灰岩である。

第159図8は3片の接合した資料であり、一部を欠損している。b面に剝離面が部分的に残されており、剝離によって部分的に整形されているものと考えられる。a面の中央は使用によって緩やかに凹んでおり、明瞭な磨痕が観察される。また、a面の右側面と下端面およびb面にも磨痕が認められるが、a面に比べ磨痕の程度は弱い。3片のなかでもっとも大きなa面左側の破片の右側面には溝状の凹みが残されていることから、破損後、転用されたものと考えられる。

第159図9は砥石の一端が部分的に残存する資料であり、4面の側面が使用され磨痕を残している。b面左端を残し、焼けた痕跡が観察される。

**[金属製品]**

金属製品は小刀、古銭、鉄釘等がある。第4分冊第295図18～20に主なものを図示した。

**第259図**18は鉄釘である。頭部から中央部にかけて残存しているが尖端部を欠損する。断面角形の和釘である。

第259図19は小刀である。茎から刀身にかけての一部と先端近くを残存しており、ほかはすべて欠損している。茎には錆とともに木質部が部分的に残存する。

第259図20は外径2.5cmの古銭である。表面の遺存状態は良好ではないが、北宋銭の皇宋通寶である。初鋳年は宝元2年（1039年）である。

## 4．第IVb層出土遺物

基本層位の第IVb層からは、弥生土器、陶器、石器・石製品類が出土しているが、その大部分は他層からの混入と考えられる。

［弥生土器］

弥生土器は1点図示した（第3分冊第138図9）。円盤形の蓋である。調整は摩滅により不明で、文様は轡形文が描かれている。2個一対の穿孔がある。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、尖頭器、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、砥石、礫石器、礫片などである。第4分冊第160図および第161図の1～6に主な石器を図示した。

**第160図**1～4は石庖丁の成品と未成品である。用いられている石材は1が珪化凝灰岩、2と3はデイサイト質凝灰岩、4は結晶片岩である。

第160図1は外弯刃半月形の石庖丁であり、2片の接合した、ほぼ完形の成品である。わずかに接合部分とa面の一部を欠損している。器体の表裏両面の研磨面下に整形時の剥離面と調整時の敲打痕が残されており、特に背部側で明瞭である。敲打による調整は器体全体にはおよばず、整形時の剥離面が部分的に残された状態で次の紐孔穿孔に関わる作業に移行したものと考えられる。紐孔は敲打によって窪み部を形成した後、回転によって穿孔されている。紐孔と紐孔の中央を結んだ線は刃縁と平行ではなく大きな角度をもっており、刃部の研ぎ直しによる器体の変形の可能性が考えられる。光沢は表裏両面に観察されるが、b面で顕著である。

第160図2は器体の3分の1ほどを欠損する未成品である。製作作業は剥離による整形、敲打による器体の調整作業を経て、敲打による紐孔部の窪み部形成の後、回転穿孔まで進行している。b面では、a面の右側の紐孔に対応する位置に紐孔穿孔のための窪み部は形成されていないが、a面左側に対応する位置ではすでに回転穿孔段階まで進められている。回転穿孔作業中の事故によって破損したものと考えられる。

第160図3は縁辺に剥離を施して器体の整形作業を行っている段階の未成品であり、2分の1ほどを欠損している。表裏両面は自然面もしくは節理面である。

第160図4は器体の2分の1ほどが残存する未成品である。製作作業は剥離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで進行しているが、敲打痕はb面ではほぼ全面に認められるのに対して、a面にはまったく残されていない。また、a面は剥離による整形作業段階まででは平坦な面が形成されておらず、さらに紐孔穿孔に関わる作業に移行するためには敲打による器体の調整が必要と考えられる。したがって、b面への敲打による器体の調整作業中の事故によって破損したものと判断される。

第160図5～7は石斧である。

第160図5はノミ形石斧の基部の中央が部分的に残存している。断面形は隅丸方形を呈しており、側面が明瞭に形成されている。研磨面下には敲打痕が観察され、研磨面には右下がりの擦痕が認められる。石材は輝緑岩である。

第160図6は扁平片刃石斧の基端側が残存する資料である。a面では研磨痕下に剥離面が観察される。しかし、折

れ面から施されたｂ面の剝離面は研磨痕を切っており、破損した後、転用されたものと考えられる。用いられている石材は黒色頁岩である。

第160図７は石斧の未成品である。製作作業は剝離による整形を経て、敲打による器体の調整段階まで進行している。ａ面中央には自然面が残されている。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第160図８は凸基無茎の石鏃である。剝離面打面の剝片を素材としており、ｂ面には素材剝片の主要剝離面が部分的に残されている。石材は瑪瑙が用いられている。

第160図９は表面が自然面の剝片を素材とした細部調整剝片である。素材剝片を中央で折りとり、打面付近に主要剝離面側への細部調整をわずかに施している。石材はデイサイト質凝灰岩である。

第160図10は尖頭器である。表裏両面の中央に素材剝片の剝離面が残されている。細部調整によって両側縁および基部の整形を行っているが、ｂ面中央の基部寄りに突出した部分が残されており、未成品の可能性が考えられる。用いられている石材は瑪瑙である。

第160図11は剝離面打面の剝片を素材としたピエス・エスキーエである。ａ面の上端縁とｂ面の下端縁とで対になる１対の細部調整が認められる。石材は流紋岩である。

第161図の１と２は折れ面で接合する削器である。３は接合時の図であり、細部調整の部位と整形された形状などから横型石匙の一部であった可能性が考えられる。２は１と別個体になった後、上下両端縁にさらに細部調整を加えている。用いられている石材は珪質頁岩である。

第161図４と５は使用による敲打痕が残された細部調整石器であり、敲打具と考えられる。石材は大型板状石器に多用されるデイサイト質凝灰岩である。

第161図４は折りとりと剝離によって整形され、両側縁に敲打痕が観察される。ａ面右側縁の敲打痕がもっとも著しく、平坦な面を形成している。敲打痕は下端縁中央にも観察され、ａ面には敲打に伴う損傷の剝離面が認められる。

第161図５は折りとりと剝離によって四辺形に整形され、角の２ヶ所に敲打痕が残されている。下端の尖端部の敲打痕が顕著である。

第161図６は大型板状石器である。ａ面右側面は折りとり面であり、刃部以外の縁辺にはｂ面側への細部調整が施されている。刃部では表裏両面に剝離を施しているが、ａ面側により多くの剝離面が認められる。ａ面の刃部の右側とｂ面の刃部中央付近に刃縁にほぼ平行する擦痕を伴う磨り面が観察される。光沢はｂ面の刃部左端に確認される。石材は板状節理を有する安山岩が用いられている。

## 第６節　近世の遺構と遺物

### １．第IIｃ層上面検出遺構と出土遺物

第IIｃ層上面で検出された遺構は、水路を伴う水田跡、土坑、性格不明遺構である（第57図）。水田跡の区画は基本的に直下の第IVａ層水田跡の区画を踏襲しており、いくつかの畦畔が取り払われ、大きい水田区画となった部分も認められる。また、畦畔の幅は第IVａ層水田跡の畦畔と比べて狭くなっており、１区画あたりの面積は第IVａ層水田跡よりも広くなっている。

#### (1)　水田跡

水田跡は調査区全域に広がっていたものと考えられるが、標高の高い調査区西部北半は後世の耕作によって上部

を削平されており、畦畔の部分的な確認にとどまっている。検出された水田区画は、部分的なものも含め、30区画である（第57図）。

①畦畔

畦畔は水田土壌である第IIc層を盛り上げて造られている。水田と水田を区画する畦畔の規模は幅63～141cmであり、それほど大きな差は認められないが、水田跡に伴う水路であるSD31溝跡に隣接する畦畔と水田域東端の畦畔は幅2m前後の大畦畔である。調査区東端にも水路を伴っていたものと推定されるが、後世の溝跡に切られていたため、明確に検出することはできなかった。水田域東端の大畦畔の東側では、大畦畔に取り付く畦畔は確認されなかったことから、水路の一部である可能性が考えられる。

下層の第IVa層水田跡で農道と考えられた大畦畔は、第IIc層水田跡では水田と水田を区画する通常の畦畔となっているが、区画15の北東角にみられた島状の高まりは痕跡的に残されている。

畦畔の上部は上層水田跡の耕作によって削平されているため、当時の畦畔の高さは不明である。残存する高さは2～15cmである。

②畦畔の配列

基本的にはN－5°－W～N－17°－E方向の畦畔と、ほぼ直交するE－8°－S～E－2°－N方向の畦畔によって構成されているが、調査区西部の畦畔の方向は若干異なっており、N－21°－W方向と、ほぼ直交するE－14～26°－N方向に延びている。畦畔の方向の変化は上層の第IIa層水田跡に伴う水路であるSD2溝跡を境に起きていることから、SD 2溝跡に切られた水路が存在した可能性が考えられる。

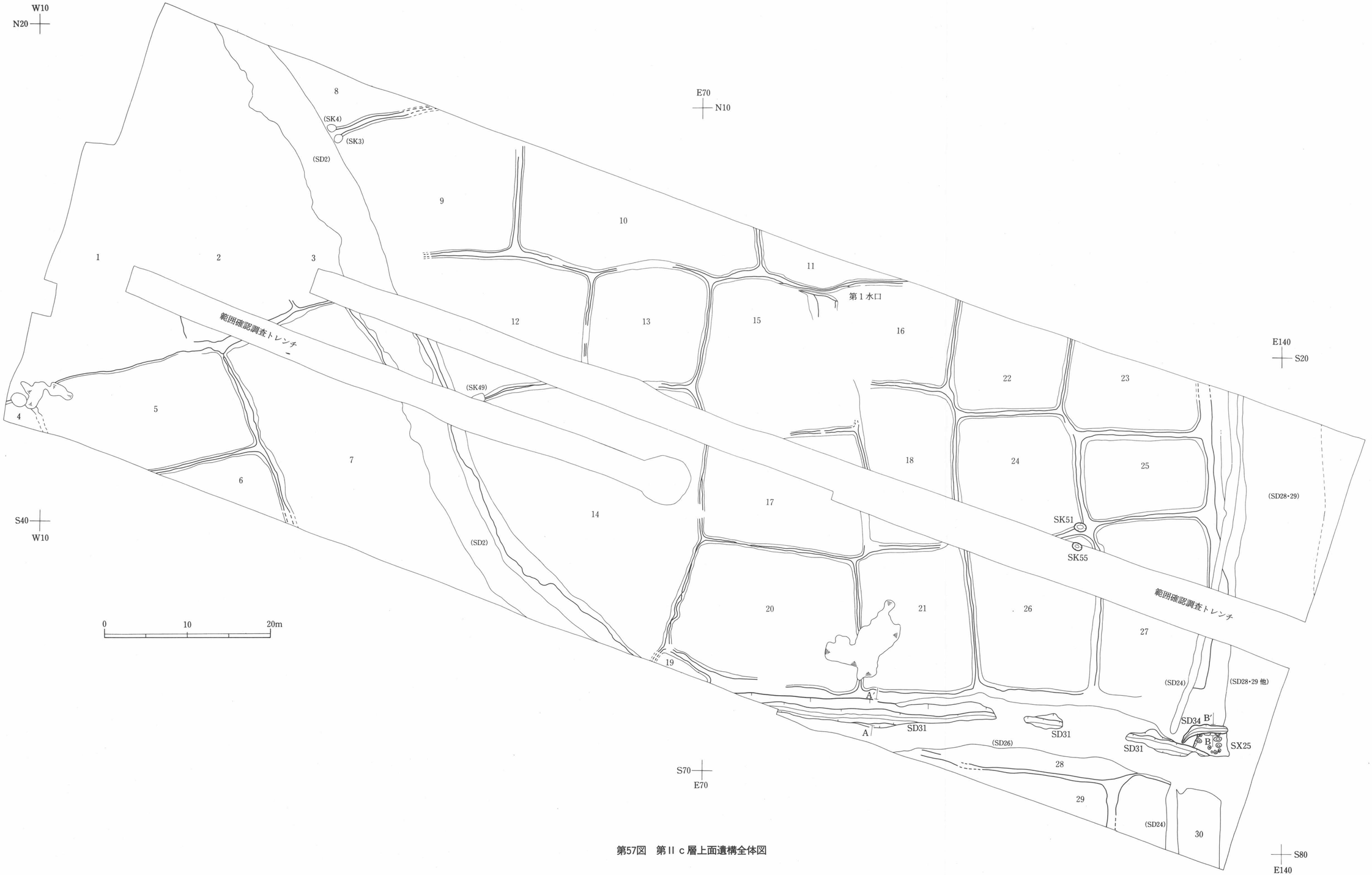
畦畔の交わり方は下層の第IVa層水田跡と同様である。南北もしくは東西に通る畦畔に対してT字形に接合されており、交差する場合でも十字形に直交せず、区画16の南東角と区画17の北東角、区画22の南東角と区画24の北東角にみられるように、わずかにずれて取り付けられている。

③水田区画の形状と規模

区画の形状は方形を基調としており、長軸を南北方向とする区画と、東西方向の区画の両者が認められる。

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 | 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ――― | 22.4m以上 | ――― | 16 | 13.9m | 11.4m | 145.0m²以上 |
| 2 | ――― | 13.2m | ――― | 17 | 19.3m | 14.7m | 246.4m² |
| 3 | ――― | 6.5m | ――― | 18 | 18.8m以上 | 10.4m | 190.7m² |
| 4 | 4.5m以上 | 3.9m以上 | 10.6m²以上 | 19 | 6.4m | 2.0m以上 | 7.2m²以上 |
| 5 | 22.8m | 12.7m | 254.0m²以上 | 20 | 22.6m | 15.6m | 318.8m² |
| 6 | 13.2m以上 | 9.2m以上 | 57.1m²以上 | 21 | 16.6m | 13.2m | 216.1m² |
| 7 | 45.1m以上 | 16.2m | 529.9m²以上 | 22 | 13.1m以上 | 13.3m | 141.2m²以上 |
| 8 | 13.4m以上 | 12.1m以上 | 65.6m²以上 | 23 | 15.4m | 10.7m | 147.5m²以上 |
| 9 | 21.6m | 17.2m以上 | 291.9m²以上 | 24 | 14.4m | 14.2m | 193.0m² |
| 10 | 28.4m | 14.9m以上 | 275.6m²以上 | 25 | 14.4m | 9.6m以上 | 123.9m² |
| 11 | 16.3m以上 | 7.7m以上 | 47.9m²以上 | 26 | 17.4m | 14.6m | 244.7m² |
| 12 | 22.8m | 18.7m | 285.6m² | 27 | 20.7m | 13.1m | 264.8m² |
| 13 | 14.0m | 13.7m | 178.5m² | 28 | 27.9m以上 | 2.6m以上 | 52.4m²以上 |
| 14 | 33.1m | 28.6m | 642.8m² | 29 | 24.6m以上 | 5.4m以上 | 60.7m²以上 |
| 15 | 18.7m | 17.6m | 278.0m² | 30 | 12.6m以上 | 10.7m以上 | ――― |

第3表　第IIc層上面水田跡　水田区画計測表




第57図　第Ⅱｃ層上面遺構全体図

第IVａ層水田跡では、第IVａ層下面の溝跡の影響によって他の水田区画と規模や形態の異なる特異な形状の区画が造られていたが、第IIｃ層ではその水田を区画する畦畔が取り払われ、隣接する区画とともに大きな水田区画となっている。その結果、区画14のみが三角形に近い形状を呈しており、面積も642.8m²と他の区画と比べ突出した広さである。区画14を除いた水田１区画の面積は200m²前後もしくはそれをを超えるものが多く、完結した区画のなかでは、最小は区画25の123.9m²であり、最大は区画11の318.8m²である。

④水田土壌

水田土壌は基本層位の第IIｃ層であり、灰黄褐色を呈するシルト質粘土である。層厚は5cm前後で、層下面には凹凸が認められる。酸化鉄の斑紋が確認され、マンガン粒を含んでいる。層下部には、部分的に基本層位の第III層を小ブロック状に含んでいる。

⑤全体的な水田面の傾斜

水田面の標高は2.82～3.16mであり、全体的な傾斜は北側が高く、南側に向かって徐々に低下しているが、東西方向での高低差はそれ程みられない。最も標高の低い区画は区画14である。

⑥水口

検出された確実な水口は１箇所である。

**第１水口**は区画15と区画16を画する島状の高まりを断ち切って、E82S12からE86S12付近に設けられており、底面は西が高く東へ向かって低下している(第58図)。上端幅は37～63cmで、下端幅は15～24cmである。西側よりも東側が広く、E85付近から東側の水田に向かって大きく広がっている。

⑦水路跡

水田跡に伴う水路として検出された溝跡は１条であるが、畦畔の配列などから上層の水田跡に伴う水路の位置にも設けられていたものと推定される。

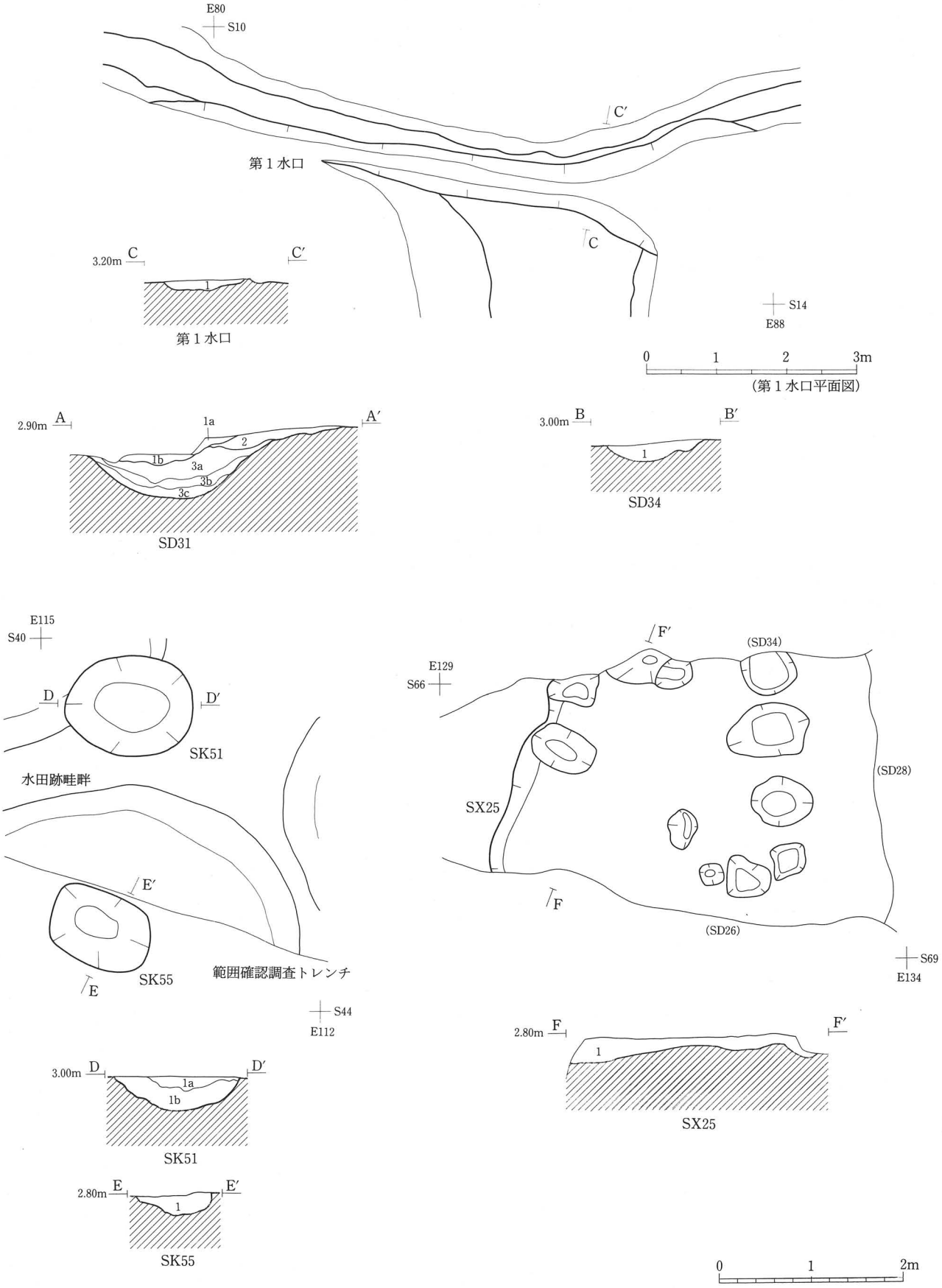
SD31溝跡　調査区南端の中央部から東部にかけて東西方向に延びる溝跡で(第57図)、上層の第IIａ層水田跡に伴う水路跡であるSD26溝跡に切られており、部分的に残存しているのみである。上端幅は342cm以上、下端幅は31～80cmで、深さは65～76cmである。底面はほぼ平坦で、西から東へ向かって低下している。方向はE－６°－Sであるが、E100からE125にかけて北側に弯曲している。検出長は57.9mであるが、西側はさらに調査区外へ続くものと考えられるが、東側は上層の水田跡に伴う水路跡のSD26溝跡に切られて不明である。断面形はU字形を呈しており、壁面の中位にみられる変換点から上部では緩やかな傾斜となっている（第58図)。堆積土は３層に大別される。上層は上部の灰黄褐色シルト質粘土と下部の黄灰色粘土に細分され、中層は褐灰色の粘土である。下層はさらに３層に細分され、上部と中部はオリーブ灰色の粘土であるが、上部には層の中位に白色粘土が帯状に認められる。下部は暗オリーブ灰色の粘土である。

堆積土中より、弥生土器、大型板状石器、剝片などが出土している。

## (2) 溝跡

水田跡に伴う水路と考えられる溝跡の他に１条の溝跡が検出されている。

SD34溝跡　調査区東部の南半、E128～134S64～66区で検出された東西方向に延びる溝跡であり、西端で南側に短く屈曲し、幅が狭くなる(第57図)。上端幅85～117cm、下端幅21～49cm、深さ20～28cmである。検出長は5.5mであるが、さらに東側へ続いていたものと考えられる。底面にはわずかな凹凸が認められ、西側が低くなっている。方向はE－５°－Nである。断面形は開いたU字形を呈し(第58図)、堆積土は褐色の粘土を多量に含む灰色の粘土である。




第58図　SD31・34 溝跡断面図、第1水口、SK51・55 土坑、SX25 性格不明遺構

第１水口

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 粘土質シルト | 第III層、第IVａ層をブロック状に含む。酸化鉄斑、マンガン斑を多量に含む。 |

SD31 溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 10YR4/2 灰黄褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含む。 |
| 1b | 2.5Y4/1 黄灰色 | 粘　　土 | 白色の粘土粒子をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘　　土 | 酸化鉄斑、マンガン斑を多く含む。 |
| 3a | 2.5GY5/1 オリーブ灰色 | 粘　　土 | 白色粘土を帯状に含む。 |
| 3b | 5GY5/1 オリーブ灰色 | 粘　　土 | |
| 3c | 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 | 粘　　土 | |

SD34 溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5Y6/1 灰色 | 粘　　土 | 褐色粘土を多量に含む。 |

SK51 土坑

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 5Y5/1 灰色 | 粘　　土 | 黒褐色粘土、酸化鉄をブロック状に含む。 |
| 1b | 5Y5/1 灰色 | 粘　　土 | 酸化鉄をブロック状に含む。 |

SK55 土坑

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | シルト質粘土 | 褐色土や黒色土をブロック状に含む。 |

SX25 性格不明遺構

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR7/1 明褐灰色 | 粘質シルト | 酸化鉄を多く含む。 |

第58図　土層註記

SD35 溝跡に切られ、SX25 性格不明遺構を切っている。

堆積土中より弥生土器、大型板状石器などが出土している。

### (3)　土坑

**SK51 土坑**　調査区東部の中央 E115～116S40～41 区で検出された土坑である（第58図）。畦畔の接続部に位置している。長軸142cm、短軸108cm の楕円形で、深さは34cm である。断面形は開いたＵ字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰色の粘土であるが、上部に黒褐色の粘土をブロック状に含んでおり、２層に細分される。

堆積土中より、弥生土器、剥片、礫片などが出土している。

**SK55 土坑**　調査区東部の中央 E115～116S42～43 区で検出された土坑である（第58図）。上部を確認調査によって削平されている。長軸110.5cm、短軸84cm の楕円形で、検出面からの深さは21.5cm である。断面形は開いたＵ字形を呈しており、底面には凹凸が認められる。堆積土は暗灰黄色のシルト質粘土であり、基本層位の第Ｖｃ層および第VI層を起源と考えられるブロックを含んでいる。

堆積土中より、弥生土器が出土している。

### (4)　性格不明遺構

**SX25 性格不明遺構**　調査区東部の南半、E129～E133S65～68 区で検出された遺構である（第58図）。南北両側と東側を溝跡に切られており、東西方向で432cm、南北方向で293cm 残存している。深さは11～19cm である。底面には凹凸が著しく、11箇所のピット状の落ち込みが確認される。最も深い落ち込みは底面から約14cm の深さである。堆積土は明褐灰色の粘土質シルトである。

SD26・34・35 溝跡に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。

## ２．第IIｃ層出土遺物

基本層位の第IIｃ層からは、縄文土器、弥生土器、磁器、陶器、石器類、金属製品が出土しているが、耕作などによって他層から混入した遺物が多いものと考えられる。

**［陶器］**

陶器は１点図示した（第３分冊第152図10）。古瀬戸の瓶子で、部位は脚部である。

**［石器類］**

石器類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、石匙、削器、ピエス・エスキーエ、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、

石核、礫石器、礫片などである。第４分冊第151図の８・９および第152図におもな石器を図示した。

**第151図**８・９は石庖丁の未成品である。

第151図８は剝離による整形、敲打による器体の調整段階を経て、敲打による紐孔部の凹部形成の後、穿孔のための回転作業段階まで製作作業が進行している。外弯刃半月形の石庖丁の未成品である。紐孔は貫通していない。ａ面右側の紐孔部では表裏両面とも回転段階まで作業が進行しているが、左側は敲打によって凹部を形成した段階であり、回転までは進行していない。したがって一方の紐孔部をある程度の深さになるまで作業を進め、残る一方を敲打によって凹部を形成する作業中に事故が起き、破損したものと考えられる。全体の３分の１ほどを欠損する。器体調整のための敲打は部分的で、ごくわずかに確認される程度である。ｂ面の器体中央には研磨痕が部分的に認められる。石材はデイサイト質凝灰岩が用いられている。

第151図９は２片の接合した資料であり、１片はSD ２溝跡の堆積土中より出土している。植物の根の周囲に沈着した褐鉄鉱の帯が付着しており、破損面は他の面に比べ新鮮である。また、後世の傷も２片にまたがって観察されることから、破損は何らかの製作作業中の事故によるものではない。製作作業は、剝離による整形の後、敲打による器体の調整段階まで進行している。器体のほとんどは敲打痕に覆われており、整形時の剝離痕は敲打痕下にわずかに観察される程度である。ｂ面右側に敲打によるわずかな凹みが認められ、紐孔部の予定位置を示すものと考えられる。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

**第152図**１は基部の基端寄りを欠損する石斧である。最大幅の位置は刃部にあったものと考えられる。断面形は側面をもつ凸レンズ形を呈している。研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が認められ、研磨面下に敲打痕が観察される。破損後、転用されており、刃部、両主面、両側面および折れ面に敲打痕が残されている。さらに刃部には敲打による損傷の大きな剝離面も残されている。石材は輝緑岩である。

第152図２は尖端と基部の片側を欠損する石鏃である。薄手の剝片を素材とし周縁に施した細部調整によって整形されており、素材剝片の剝離面は表裏両面の中央に広く残されている。流紋岩を石材としている。

第152図３は横型石匙である。表裏両面に素材剝片の剝離面を残し、ａ面左側面は自然面が残されている。素材剝片の打面は剝離面打面であり、つまみ部の先端に部分的に確認される。刃部作出のための剝離はおもにｂ面からａ面側に施されている。刃部の大部分には特にｂ面側に後世の破損がみられるが、刃角は残存部位で65～70度である。つまみ部は素材剝片の打面側に作られており、両側ともａ面ののちｂ面側に細部調整を施して作り出されている。石材は珪化凝灰岩である。

第152図４は剝離面打面のバルブが発達した剝片を素材とした削器である。左右両側縁から打面にかけて表裏両面に浅い細部調整が施されており、ａ面左側縁では60～65、右側縁は50～55度の角度を形成している。珪質頁岩を石材とする。

第152図５は剝片の一端に尖端部を作り出した石錐である。素材剝片の打面側と末端側に細部調整を施し、その延長の一端に錯向剝離によって尖端部を作出している。細部調整によって形成された側縁は、ａ面右側縁では80～85度と急角度であるが、左側縁は65～70度で右側縁に比べやや鋭角である。石材は流紋岩が用いられている。

第152図６は細部調整を施された刃部が尖端を作って交わる尖頭削器である。素材剝片の両側縁に裏面から表面側に85～90度の急角度な細部調整を施し、素材剝片の末端部で尖端を作って交わっている。石材は珪質頁岩である。

第152図７は素材剝片の打面側と末端側に剝離を施した細部調整剝片である。ａ面左側に自然面を部分的に残している。細部調整は表裏両面に施されているが、全体的に粗く、細部調整の施された縁辺の正面観も整ったものではないことから何らかの石器の未成品もしくは失敗品と考えられる。石材はデイサイトが用いられている。

第152図８は上端縁と下端縁が対になり、１対の細部調整が確認されるピエス・エスキーエである。両端がつぶれ、断面四辺形に近い方柱状を呈している。用いられている石材はチャートである。

第152図９は表面の大部分が自然面に覆われた剝片を素材とした尖頭削器である。素材剝片末端の表裏両面に細部調整を施しており、70～80度の角度を形成している。珪質頁岩が用いられている。

第152図10～12は磨痕や敲打痕が観察される細部調整剝片である。大型板状石器に多用される石材が用いられており、10は珪化凝灰岩であり、11と12はデイサイト質凝灰岩である。

第152図10は周縁に浅い細部調整が施され、ａ面左側縁の表裏両面にわずかな擦痕を伴う磨痕が認められる。擦痕は磨痕の広がる方向に対してほぼ直交に近い方向である。

第152図11はａ面右側縁から上端縁にかけてと、ｂ面の上端縁の一部および下端縁中央に敲打痕が観察される。特にａ面右側縁の下端寄りの敲打痕は著しく、ｂ面側に敲打に伴う損傷の剝離面が残されている。敲打具として使用されたものと考えられる。

第152図12は折りとりによって平面三角形に整形された剝片を素材とし、角の２ヶ所に磨痕もしくは敲打痕が残されている細部調整剝片である。表裏両面の下端縁の右端には磨痕が認められ、ａ面下端縁の左端には敲打痕が観察される。

［金属製品］

基本層位の第IIｃ層から出土した金属製品には古銭、鉄釘等がある。第４分冊第295図10～17におもな金属製品を図示した。

第295図10～13および15は鉄釘である。すべて欠損品であるが、10～13は尖端部側を残存している。錆によるわずかな膨らみが認められるが、すべて断面角形の和釘である。

第295図14と16は用途不明の鉄片であり、16は実測面の裏面の２分の１ほどを欠損しているが、そのほかの面はすべて残存している。

第295図17は外径2.4cmの古銭である。表面の遺存状態は良好ではないが、北宋銭の熙寧元寶である可能性が高い。初鋳年は熙寧元年（1068年）である。

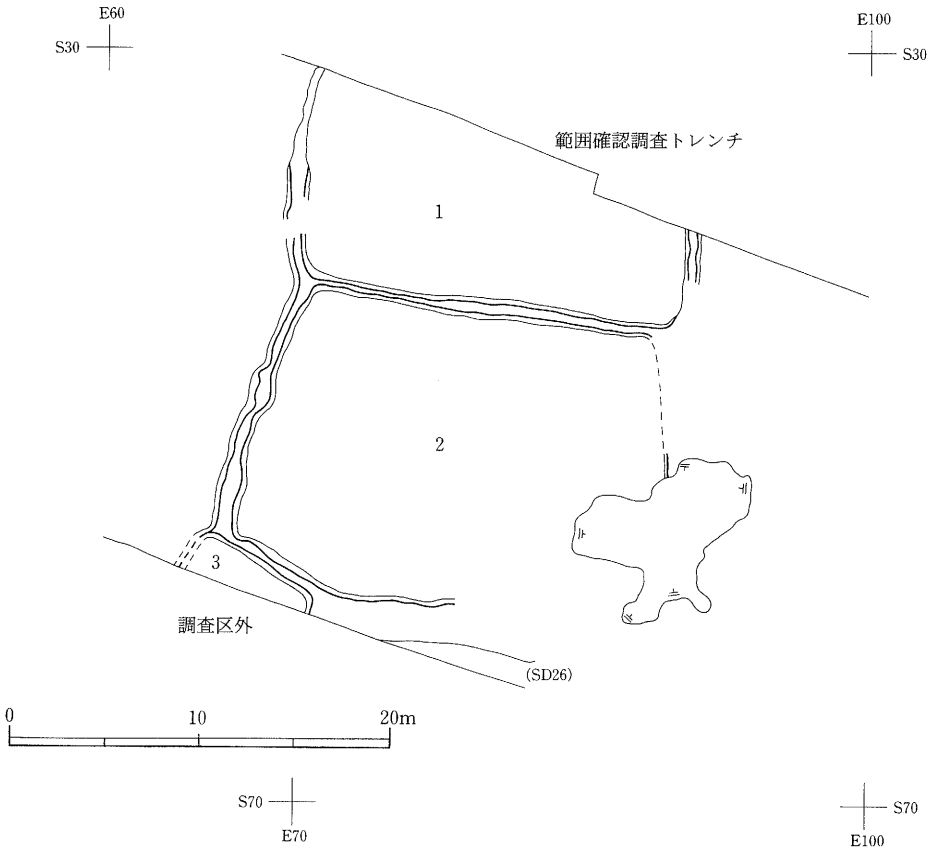
## ３．第IIｂ層上面検出遺構

第IIｂ層上面で検出された遺構は水田跡である（第59図）。第IIｂ層は調査区中央部南半の限られた範囲内に分布する層であり、水田跡はその分布域でのみ検出されている。この位置は、弥生時代に形成されたSR １自然流路跡とSR ２自然流路跡の合流する箇所にあたり、自然流路跡の底面が最も低くなる場所である。そのため第IIｂ層を含む基本層および自然流路跡の堆積土は、ほかの箇所に比べ全般的に厚く堆積している。したがって第IIｂ層は、この箇所では層厚の厚さにより上層の水田耕作の影響を免れて残存した可能性が高く、それ以外の大部分では上層の耕作によって失われているものと考えられる。よって第IIｂ層水田跡は、本来は第IIｃ層水田跡と同様に調査区全域に広がっていたものと推定される。

検出された第IIｂ層水田跡の水田区画は３区画である。直下の第IIｃ層水田跡の区画を踏襲しており、第IIｃ層水田跡の区画17・19・20の位置にあたっている。

①畦畔

畦畔は水田土壌である第IIｂ層を盛り上げて造られており、水田と水田を区画する畦畔の規模は幅46～150cmである。ただし、調査区南端を東西方向に延びる畦畔は、上層の第IIａ層水田跡に伴う水路であるSD26溝跡に切られて詳細は不明であるが、幅2mを超える大畦畔と推定される。この大畦畔の位置の南側には、直下の第IIｃ層水田跡でも水路（SD31溝跡）が造られていることから、第IIｂ層水田跡においても水路が設けられていた可能性が考えられる。




第59図　第Ⅱb層上面遺構全体図

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|
| 1 | 19.8m | 11.4m 以上 | 165.3m²以上 |
| 2 | 21.6m 以上 | 11.2m | 301.3m² |

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|
| 3 | 6.6m | 2.1m 以上 | 10.7m²以上 |

第４表　第Ⅱb層上面水田跡　水田区画計測表

②畦畔の配列

畦畔は部分的にしか残されていないが、南北方向のN－2°－EとN－17.5°－Eの畦畔と、東西方向のE－8°－SとE－10°－Sの畦畔がみられる。区画２と３を画する畦畔は大きく南に振れており、E－33°－Sの方向である。

畦畔の交わり方は南北に延びる畦畔に対してT字形に接合されている。

③水田区画の形状と規模

区画の形状が確認できるのは区画２だけであるが、方形を基調としているものと考えられ、面積は301.3m²である。

④水田土壌

水田土壌は基本層位の第Ⅱb層であり、暗灰黄色を呈するシルト質粘土である。層厚は4cm前後で、層下面には凹凸が認められる。酸化鉄の斑紋が確認され、小さいマンガン粒を含んでいる。

⑤全体的な水田面の傾斜

水田面の標高は2.90～3.03mであり、全体的な傾斜は北側が高く、南側は低い。水田面の標高が最も低い区画は

区画２である。

## ４．第ＩＩｂ層出土遺物

基本層位の第ＩＩｂ層からは、縄文土器、弥生土器、磁器、陶器、土師質土器、土製品、石器・石製品類が出土している。

［磁器］

磁器は１点図示した（第３分冊第152図11）。中国青磁で龍泉窯系の碗である。

［土師質土器］

土師質土器は１点図示した（第３分冊第152図12）。香炉で底部から脚部にかけての残存である。脚部はふっくらとした作りである。

［土製品］

土製品は１点図示した（第３分冊第153図19）。紡錘車で中央部が少し膨らむ円盤形をしている。中央に貫通孔がある。文様は両面にあり、縁辺と中央部に円を描き、放射状に沈線を施している。

［石器・石製品類］

石器・石製品類は、石庖丁片、石斧、石鏃、石錐、石匙、削器、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、石臼、砥石、礫石器、礫片などである。第４分冊第151図の２～７に主な石器・石製品を図示した。

**第151図**２は基端側を欠損するノミ形石斧である。２片が接合しており、１片は基本層のIV層から出土している。著しく風化しており、製作や使用に関わる痕跡などの詳細な観察は困難である。最大幅の位置は基部にあったものと推定され、断面形は台形を呈している。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第151図３は尖端部が作出された縦型の石匙である。表裏両面の中央に素材剥片の剥離面を残し、刃部は表裏両面への細部調整によって形成されている。刃角はａ面左側が65～75度、右側は55～60度であり、左側縁に比べ右側縁がより鋭角である。つまみ部はａ面左側はｂ面ののちａ面側に、右側はａ面ののちｂ面側に剥離を施して作り出されている。石材は黒色頁岩が用いられている。

第151図４と５は有茎の石鏃である。４は他の石鏃と比べ身部の幅が広く、剥離も粗い。また、茎部は長く、その中心線は身部の中軸線上から外れている。さらに素材剥片の剥離面を表裏両面に残していることから未成品の可能性が考えられる。石材は流紋岩である。５は薄手の剥片の周囲に浅い細部調整を施して整形されており、素材剥片の剥離面が表裏両面に残されている。石材は珪化凝灰岩である。

第151図６は縁の一部がわずかに残存する石臼の上半（上臼）の縁辺の破片と考えられる。推定直径21cm、縁の幅は約3cm である。縁の下臼と接する面には４条の溝が刻まれているが、磨り減りによって明瞭ではなく痕跡的に観察される程度である。石材はデイサイトである。

第151図７は一端を欠損する砥石であり、表裏両面および両側面に磨痕が認められる。ａ面中央には頻繁な刃物の研ぎによる断面Ｕ字形の溝が長軸方向に残されている。石材は珪質凝灰岩が用いられている。

［金属製品］

基本層位の第ＩＩｂ層から出土した金属製品には古銭、鉄釘、鉄砲玉などがある。第４分冊第295図１～９におもな金属製品を図示した。

**第295図**１～５は鉄釘である。すべて欠損品であるが、断面角形の和釘である。１はほぼ完形に近く、尖端部をわずかに欠損するのみである。２は頭部を残存している。

第295図６と７は用途不明の鉄片であり、６は１端の広がる台形状の平面形態を呈しているが、広端縁と狭端縁は

平行ではない。厚みはほぼ一定である。7は破片資料である。

第295図8と9は古銭である。8は外径2.5cmの永樂通寶であるが、1端を欠損している。9は3分の1ほどが残存しており、推定外径は2.3cmである。景と寶の上半部が残されていることから北宋銭の景祐元寶と考えられる。景祐元寶の初鋳年は景祐元年（1034年）である。

## 5．第IIa層下面検出遺構と出土遺物

調査区東端において、第IIa層上面水田跡の水路（SD26・28溝跡）に切られる溝跡を3条検出した（第60図）。この位置では第IVa層下面で大規模な溝跡（SD30溝跡）が確認されていることから、継続的に水路が設けられていたものと考えられる。したがって、この2条の溝跡は、第IIa層水田跡の耕作によって削平され、部分的な確認にとどまった第IIb層水田跡に伴う水路跡の可能性が考えられる。しかし、調査区東部においては基本層位第IIb層は分布していないことから断定はできないため、第IIa層下面検出遺構として報告する。

SD29溝跡　調査区東端のE135～145S25～63区で検出された南北方向に延びる溝跡である。第IIa層上面水田跡に伴う水路であるSD28溝跡に切られていることから、北半の東側の下端は確認されなかった。また、東側の上端は、ごく一部分での検出にとどまっている。さらに調査区の南半では、SD35・43溝跡などにも切られており、西側の上端、下端のみの部分的な確認となっている。上端幅は確認された北半のごく一部分で約9.85mであり、下端幅は不明である。深さは60cm前後である。検出総長は38.4mであるが、さらに調査区外の南北へ続いていたものと考えられる。方向はN－3°－Eであり、SD28溝跡に切られて詳細は不明であるが、断面形は逆台形を呈していたものと考えられ、東側では一旦立ち上がった後、平坦に近い緩やかな傾斜が3.6m以上続いて上端へと至る（第50図）。底面は、SD28溝跡に切られずに残された範囲内では、ほぼ平坦である。堆積土は5層に分けられ、1層目と3層目はにぶい黄褐色の粘土、2層目と4層目は褐灰色の粘土と、互層状になっている。最下層である5層目は黒褐色の粘土であり、直径5～10cmの灰黄褐色の粘土をブロック状に含み、わずかに未分解の植物遺体が認められる。

堆積土中より土師器、弥生土器、大型板状石器などが出土している。

SD28・35・43溝跡に切られ、SD30溝跡を切っている。

SD35溝跡　調査区東部の南半、E123～125S59～82区で検出された南北方向に延びる溝跡である（第60図）。第IIa層上面水田跡の水路（SD26・28溝跡）に切られていることから、分断された形で検出されている。

上端幅101～175cm、下端幅33～62cm、深さ70cm前後である。検出総長は20.4mであるが、さらに調査区外の南側へ続いていたものと考えられる。また、上層の溝跡に切られていることから、北側にも延びていた可能性がある。方向はN－4°－Eであり、断面形は開いたU字形を呈している（第61図）。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられ、上層は黄灰色のシルト、中層と下層は灰色の粘土質シルトである。上層は灰白色のシルトと互層になっており、下層には黒褐色の粘土と灰白色のシルトをブロック状に含んでいる。

SD28溝跡に切られ、SD34溝跡を切っている。

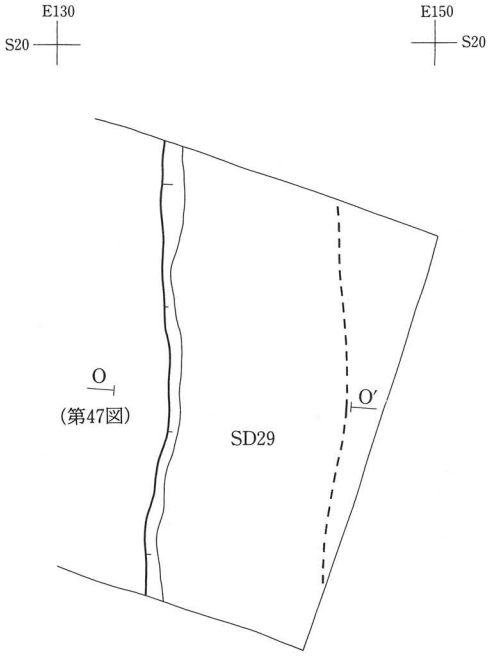
堆積土中より弥生土器、大型板状石器などが出土している。

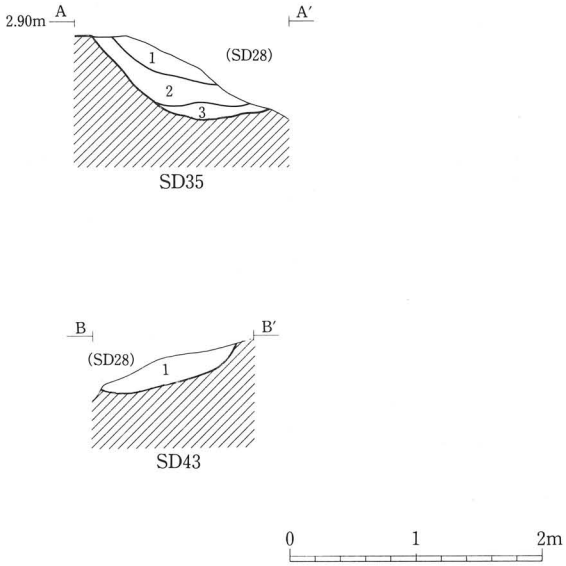
SD43溝跡　調査区東部の南半、E136～138S56～69区で検出された南北方向に延びる溝跡で（第60図）、上端幅34～134cm、下端幅16～53cm、深さ16～45cmである。検出総長は13.1mであるが、さらに調査区外の南側へ続いていたものと考えられる。また、上層の溝跡に切られていることから、北側にも延びていた可能性がある。方向はN－1.5°－Eであり、断面形は開いた浅いU字形を呈している（第61図）。底面はほぼ平坦であるが、断面図を作成し

た中央付近で最も低くなる。堆積土は灰色の粘土であり、灰黄色の粘土質をブロック状に含んでいる。

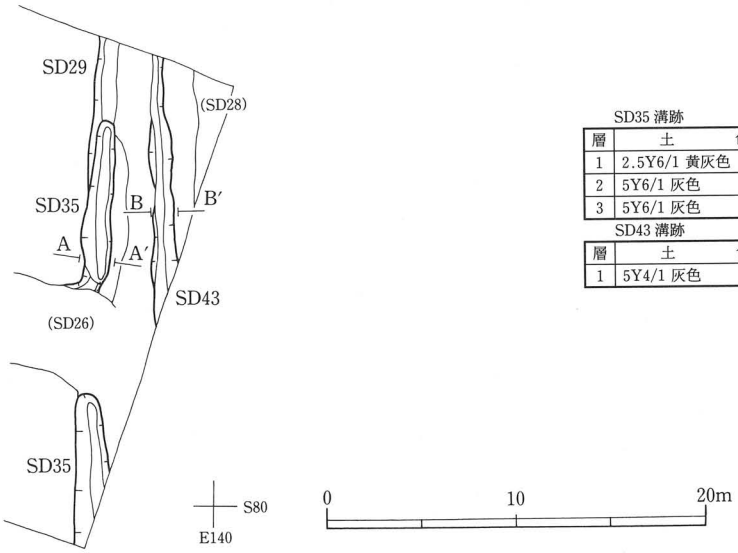
SD28 溝跡に切られている。

堆積土中より弥生土器が出土している。




第61図　SD35・43 溝跡断面図




SD35 溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y6/1 黄灰色 | シ　ル　ト | 灰白色シルトと互層。 |
| 2 | 5Y6/1 灰色 | 粘 質 シ ル ト | 黄灰色粘土を斑状に含む。 |
| 3 | 5Y6/1 灰色 | 粘 質 シ ル ト | 黒褐色粘土ブロックと灰白色シルトブロックを多く含む。 |

SD43 溝跡

| 層 | 土　　色 | 土　性 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 5Y4/1 灰色 | 粘　　土 | 灰黄色粘質シルトをブロック状に含む。 |

第61図　土層註記

第60図　第 II a 層下面遺構全体図

## 6．第IIａ層上面検出遺構と出土遺物

第IIａ層上面で検出された遺構は、水路を伴う水田跡、溝跡、土坑である(第62図)。水田跡の区画は基本的に第IIｃ層水田跡の区画を踏襲しているが、いくつかの畦畔を取り払い、大きな区画となっている部分もみられる。また、畦畔の位置を5m程ずらして、畦畔によって画された隣接する区画の大きさを変更した箇所が１箇所確認されている。１区画あたりの面積は第IIｃ層水田跡よりも広い。

### (1) 水田跡

畦畔および水田面の上部は現代の耕作によって削平されており、畦畔の高さを検出することはできなかった。水田跡は調査区全域に広がっていたものと考えられるが、標高の高い調査区西部北半では区画の部分的な確認にとどまっている。検出された水田区画は、部分的なものも含め28区画である(第62図)。また、調査区東端で水口２箇所と打ち込み杭の集中する箇所が１箇所確認されており、これを区画を示すものと考えた場合は、４区画を加えることとなる。

①畦畔

畦畔は水田土壌である第IIａ層とわずかな色調の違いによって確認され、さらに両端に酸化鉄の集積が観察されたことから田面と区別することが可能であった。しかし、区別が困難な箇所もみられ、部分的な検出にとどまった畦畔もある。また、畦畔内には畦畔痕跡として下層の第IIｃ層もしくは第IIｂ層が帯状に確認されており、部分的に第IVａ層も認められる。水田と水田を区画する畦畔の規模は幅25～103cmであり、それほど大きな差は認められないが、水田跡に伴う水路であるSD26溝跡に隣接する畦畔と、SD28溝跡よりも西側の水田域の東端に位置する畦畔は幅150～180cmの大畦畔である。

下層の第IVａ層水田跡の区画15の北東角にみられた島状の高まりは、第IIｃ層水田跡の場合に比べ、より痕跡的になり、わずかに幅の広い畦畔に見える程度である。

②畦畔の配列

基本的にはN－15°－W～N－19°－E方向と、ほぼ直交するE－８°－S～E－12°－N方向の直線的な畦畔によって構成されるが、区画９・11・12を分ける東西方向の畦畔は緩く弧を描いている。また、SD２溝跡の西側の畦畔は、SD2溝跡の延びる方向もしくはそれに直交する方向に造られており、SD２溝跡の東側の畦畔と比べ真北方向に対して大きく傾いている。

畦畔の交わり方は下層の第IIｃ層水田跡と同様に、南北もしくは東西に通る畦畔に対してＴ字形に接合され、交差する場合でも十字形に直交することはほとんどなく、わずかにずれて取り付けられている。

③水田区画の形状と規模

区画の形状は方形を基調としており、長軸を南北方向とする区画と、東西方向の区画の両者が認められる。

第IIｃ層水田跡の区画９と11および区画12と13を画する南北方向の畦畔は取り払われ、東西に長い、広い水田区画が造られている（第IIａ層水田区画９・11)。また、第IIｃ層水田跡の区画16と18を分ける東西方向の畦畔も取り払われ、約5m南側に造り直されている。

水田１区画の面積は、SD２溝跡に隣接する区画９・11・12と、その東側の区画とでは大きな差が認められ、区画９・11・12が500m²を超えているのに対して、東側の区画では最も広い区画18でも312.5m²であり、ほかの区画はすべて300m²未満である。面積が把握できる区画のなかで最小の区画は区画23であり、面積は128.9m²である。

④水田土壌

水田土壌は基本層位の第IIａ層であり、褐灰色を呈するシルト質粘土である。層厚は6cm前後で、層下面には凹

第62図　第Ⅱａ層上面遺構全体図

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|
| 1 | 12.2m 以上 | 10.8m | 131.8m²以上 |
| 2 | 20.1m | ——— | ——— |
| 3 | 4.1m 以上 | 4.9m 以上 | 10.3m²以上 |
| 4 | 23.1m | 13.6m | 268.3m²以上 |
| 5 | 13.1m 以上 | 10.4m 以上 | 67.9m²以上 |
| 6 | 26.9m | 17.3m | 464.1m² |
| 7 | 15.3m | 12.3m | 70.8m²以上 |
| 8 | 16.2m 以上 | 11.5m 以上 | 66.8m²以上 |
| 9 | 44.6m | 17.3m | 568.3m²以上 |
| 10 | 19.9m 以上 | 8.2m 以上 | 67.1m²以上 |
| 11 | 35.6m | 17.5m | 515.5m² |
| 12 | 33.6m | 30.2m | 732.2m²以上 |
| 13 | 19.4m | 19.4m | 293.3m² |
| 14 | 16.1m | 14.6m | 196.1m²以上 |

| 区画 | 長　軸 | 短　軸 | 面　積 |
|---|---|---|---|
| 15 | 20.2m | 15.1m | 276.4m² |
| 16 | 14.4m | 9.5m | 139.2m² |
| 17 | 6.7m | 2.3m 以上 | 11.6m²以上 |
| 18 | 22.2m | 17.7m | 312.5m² |
| 19 | 17.4m | 12.9m | 222.0m² |
| 20 | 13.9m 以上 | 13.7m | 146.3m²以上 |
| 21 | 10.7m | 9.5m 以上 | 112.8m²以上 |
| 22 | 14.7m | 13.7m | 194.9m² |
| 23 | 14.7m | 9.4m | 128.9m² |
| 24 | 17.9m | 14.9m | 247.1m² |
| 25 | 21.6m | 17.9m | 277.8m² |
| 26 | 8.1m 以上 | 1.9m 以上 | 4.8m²以上 |
| 27 | 19.0m | 2.3m 以上 | 43.5m²以上 |
| 28 | 25.3m 以上 | 4.7m 以上 | 57.9m²以上 |

**第5表　第II a 層上面水田跡　水田区画計測表**

凸が認められる。マンガン粒を多く含んでおり、直径5mm ほどの大きさのマンガン粒もみられる。層下部には酸化鉄の斑紋が確認される。

⑤全体的な水田面の傾斜

前述のように、現代の耕作によって畦畔および水田面の上部が削平されていることから、当時の高低差は不明である。検出された第II a 層上面の標高は2.91～3.14m である。

⑥水口

水口は 3 箇所で検出されている。

**第 1 水口**は E103S60 区付近に設けられており（第63図）、東西方向の畦畔を断ち切って、区画24から付属する水路である SD26 溝跡へと注ぎ込んでいる（上端幅29～97cm、下端幅14～36cm）。SD26 溝跡側が広がっている。

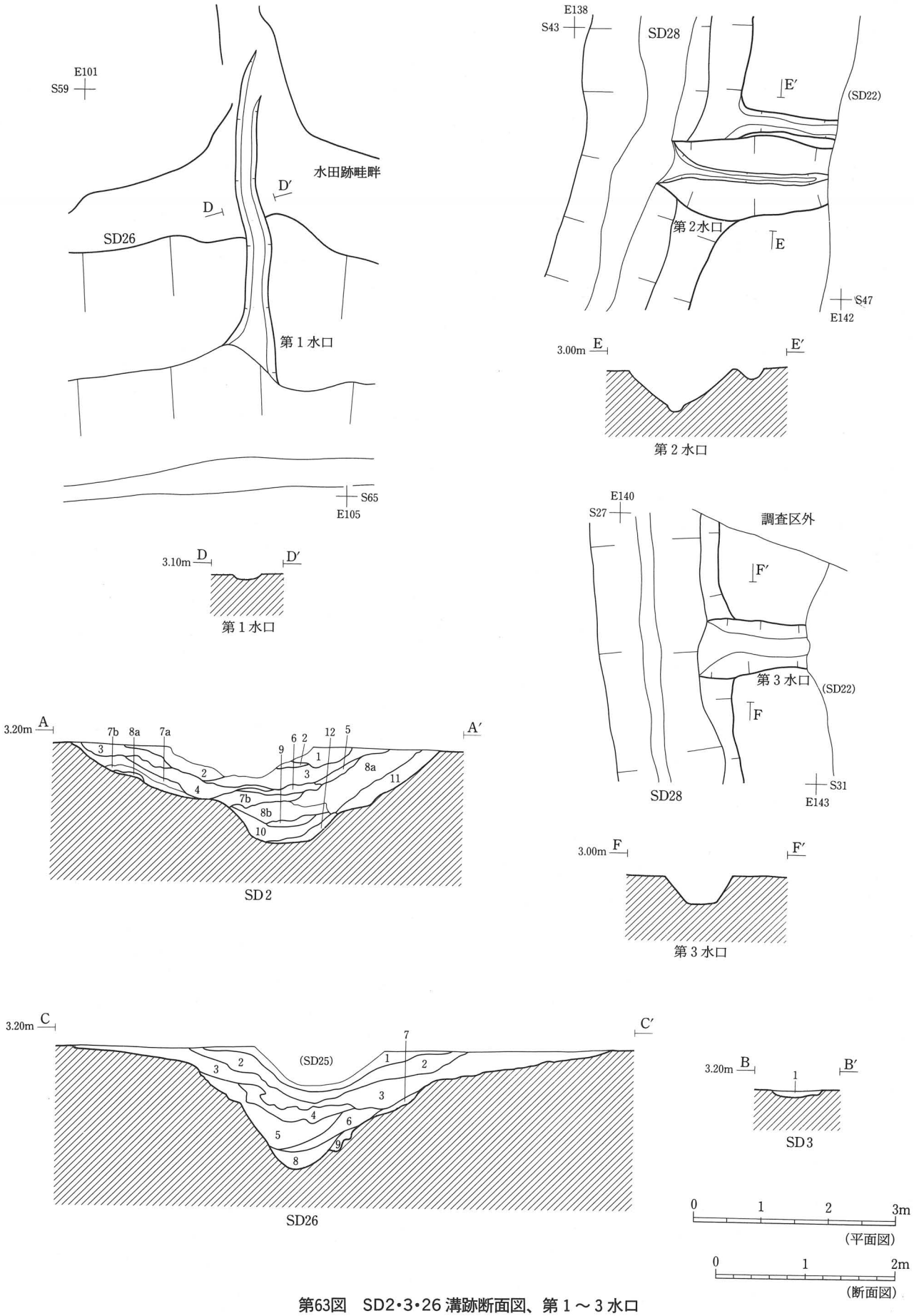
**第 2 水口**は E141S45 区付近に設けられており（第63図）、東西方向に延びる幅の狭い溝と広い溝が隣接して造られている。北側の幅の狭い溝の上端幅は27～36cm、下端幅は 8 ～11cm であり、南側の広い溝は断面形がV字状を呈し、底面付近に屈曲点を持ち、幅の極端に狭い下端となっている。上端幅83～103cm、下端幅 5 ～9cm である。幅の広い溝がより低い位置まで延びている。東側を後世の SD22 溝跡に切られており、SD28 溝跡へと注ぎ込んでいる。

**第 3 水口**は E142S29 区付近に設けられており（第63図）、第 2 水口と同様に、東側を後世の SD22 溝跡に切られ、SD28 溝跡へ注ぎ込む水口である（上端幅62～90cm、下端幅26～36cm）。SD28 溝跡側に広がっている。

⑦水路跡

水田跡に伴う水路として 3 条の溝跡が検出されている。北西から南東へ延びる SD 2 溝跡と、東西方向の SD26 溝跡、調査区東端に位置し南北に延びる SD28 溝跡である。SD 2 溝跡は調査区南端で東側の方向へ向かっていることから、東西方向の SD26 溝跡に取り付くか、あるいは同一の溝跡である可能性が考えられる。しかし、調査区内では確認できなかったため別遺構として報告する。

SD2 溝跡　調査区西部の北西から中央部の調査区南側へ延びる溝跡で、N13 付近と S49 付近の 2 箇所で屈曲している（第62図）。上端幅330～622cm、下端幅21～90cm、深さ80～139cm である。底面には所々に凹凸があり、全体的




第63図　SD2・3・26 溝跡断面図、第1～3水口

には北西から南東へ徐々に低下している。方向はN13付近より北ではN－40°－W、N13付近からS49付近まではN－24°－Wであり、S49付近より南では東側に振れてN－50°－Wの方向である。検出長は約88.4mであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと考えられる。断面形は逆台形を呈しており、中位に屈曲部が認められる。壁面の立ち上がりは底面から中位までは急激であるのに対し、中位より上部では緩やかな傾斜となりわずかに弯曲しながら上端へ至る（第63図）。堆積土は12層に大別され、中位の7・8層はさらに2層に細分される。堆積土の上部から中部にかけては、灰褐色あるいは灰黄褐色の粘土・粘土質シルトであり、下部は褐灰色の粘土もしくは砂である。混入量に違いはあるが、全体的に微砂～粗砂を含んでいる。

SD 4溝跡を切っている。

堆積土中より、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、木製品類、石器・石製品類、金属製品が出土している。

［磁器］

磁器は11点図示した（第3分冊第146図3～6・9～14、第147図7）。肥前染付の筒形碗（3）・碗（4～6）・皿（9～12）・角皿(13)、肥前の水滴(14)、切込の染付鉢（第147図7）である。

［陶器］

陶器は15点図示した（第3分冊第146図1・2・7・8・15～18、第147図1～6・8）。唐津の碗（第146図1）・皿（第146図2）、肥前の灰釉碗（第146図7）・蓋（第146図8）、京・信楽系の碗（第146図15）、瀬戸・美濃の灰釉端反皿（第146図16）・灰釉丸皿（第146図17）・灰釉輪花皿（第146図18）、美濃の織部大鉢（第147図1）、志野の鉄絵向付（第147図2）、大堀相馬の鉄釉流し灰釉腰折碗（第147図3）・灰釉折縁輪花皿（第147図4）、小野相馬の灰釉鉄釉掛け分け碗（第147図5）・灰釉皿（第147図6）、産地不明の匣鉢（第147図8）である。

［瓦質土器］

瓦質土器は1点図示した（第3分冊第147図9）。香炉である。

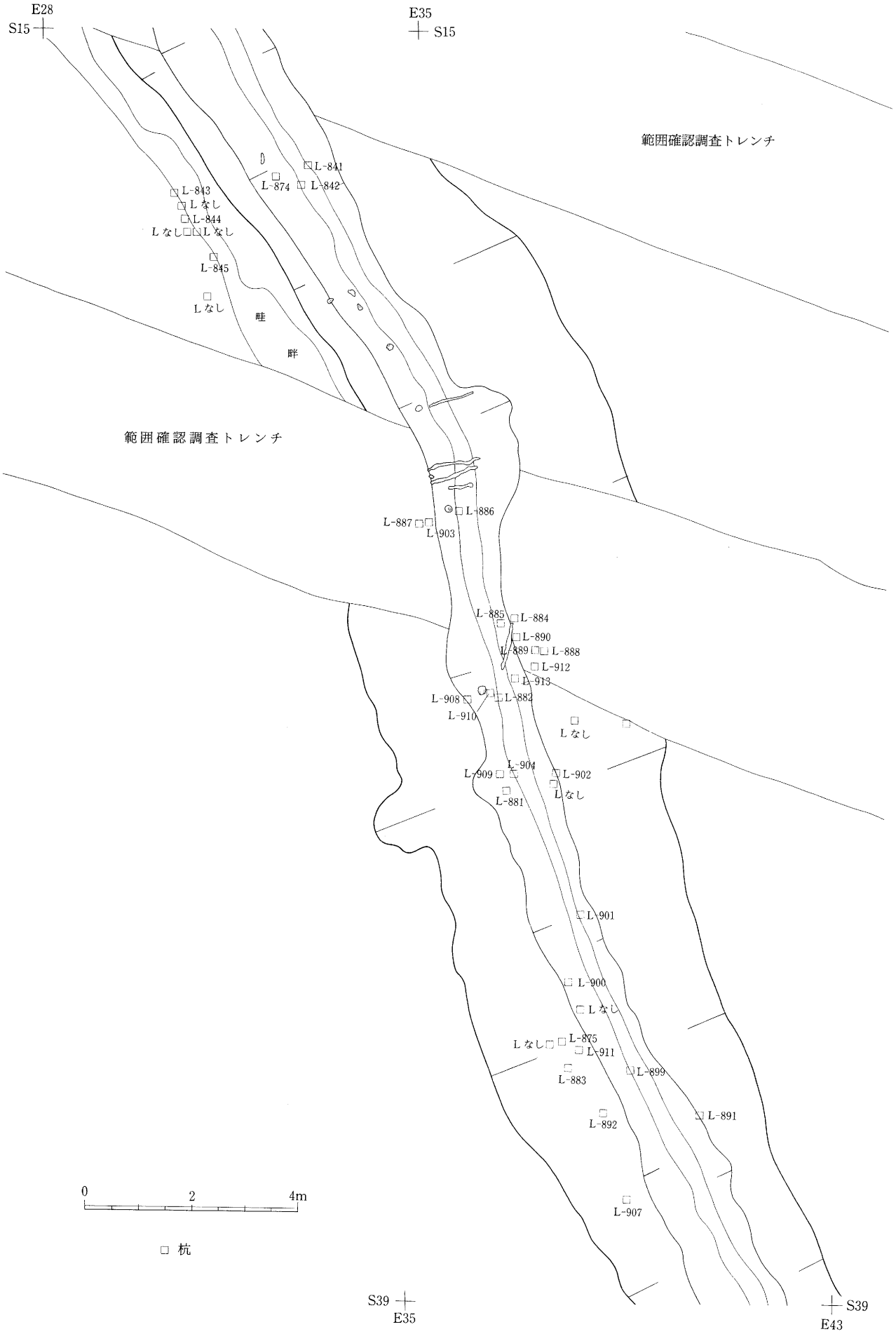
［木製品類］

木製品類は、漆器椀・蓋、不明漆器、箸、櫛、下駄、打ち込み杭、不明木製品などである。第4分冊第118図から第126図に図示した。

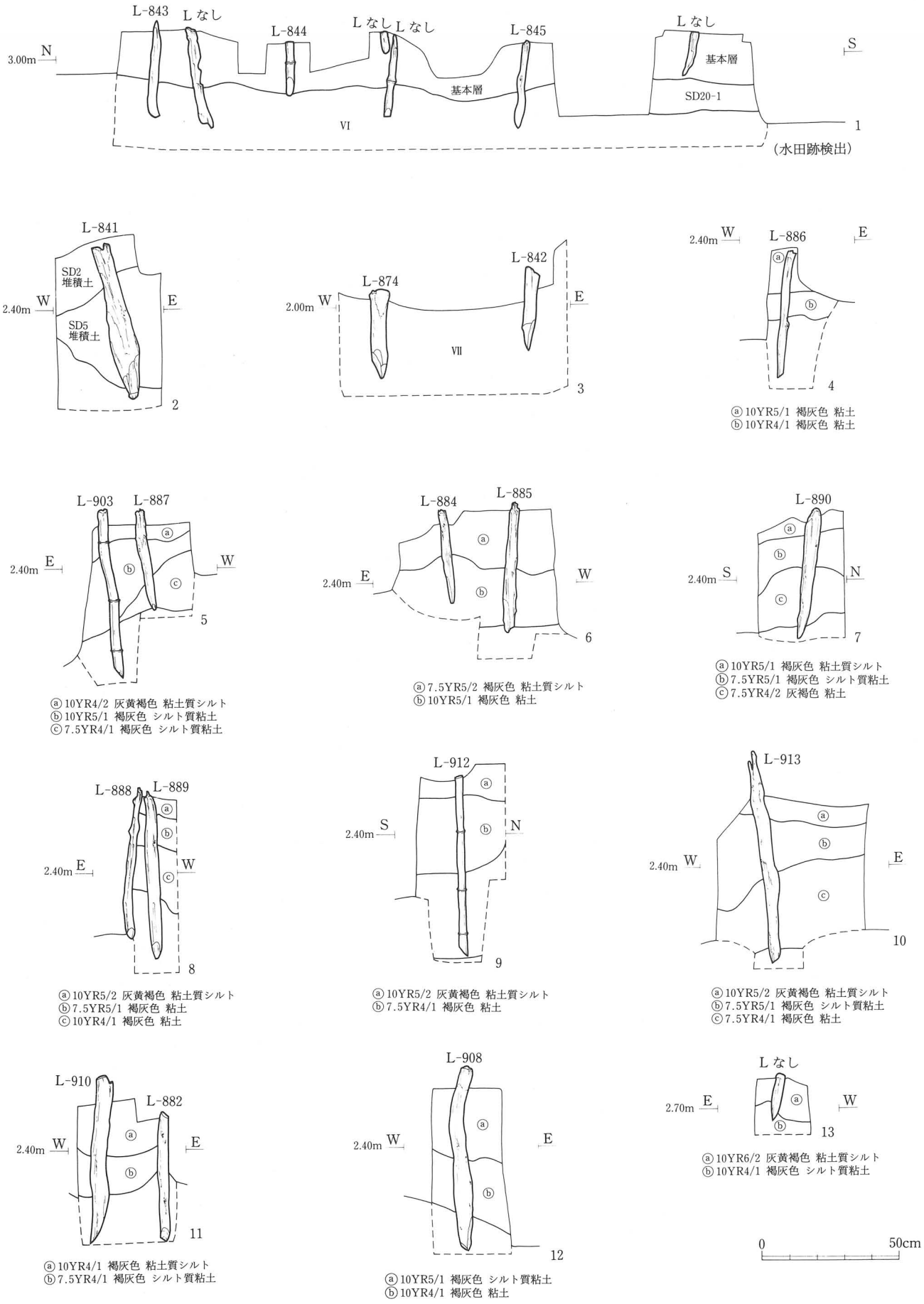
**第118図**1～16は漆器椀であり、17・18は蓋である。樹種同定を行っていない10を除き、すべてブナ属の一種が用いられている。椀の形態は様々で、高台から内弯して立ち上がるもの、水平にのびて屈曲して立ち上がるもの、屈曲点をもち稜線が形成されるものなどがみられ、立ち上がり方も急激なものと緩やかなものがある。底部の厚さもまちまちであり、器壁とほぼ同じ厚さのものから3倍近くのものまでみられる。椀に使われている漆には赤と黒があり、文様の有無をあわせると以下のような組合せになる。内外面ともに赤漆が施された、文様のないものが半数を占めている。

| 内面 | 外面 | 文様の有無 | 点数 |
|---|---|---|---|
| 黒漆 | 黒漆 | － | 3点 |
| 赤漆 | 黒漆 | 赤1・銀1 | 2点 |
| 赤漆 | 黒漆 | － | 2点 |
| 赤漆 | 赤漆 | 金・黒 | 1点 |
| 赤漆 | 赤漆 | － | 8点 |

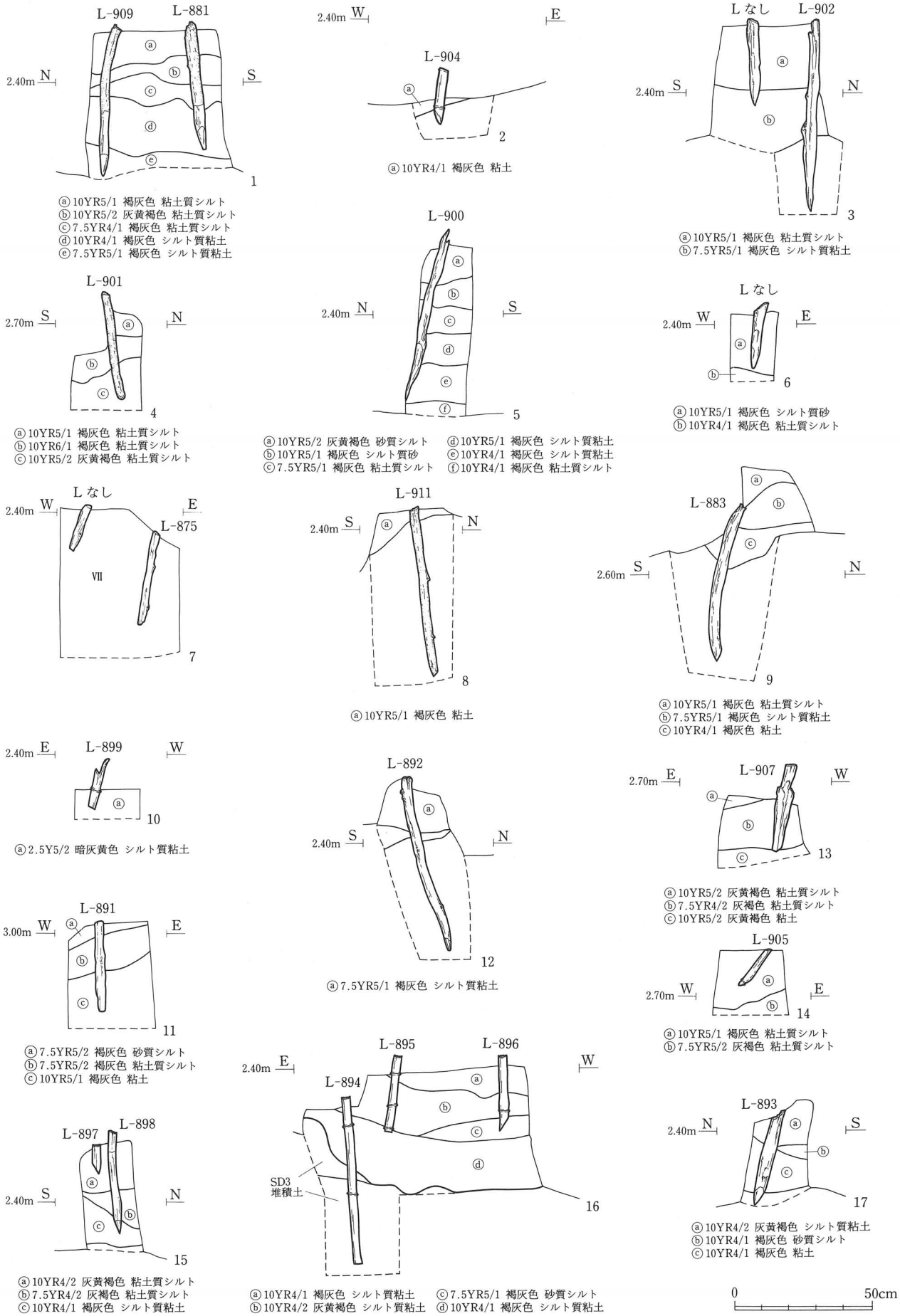
外面は黒よりも赤がわずかに多く、内面は8割以上、赤である。外面が黒の場合は内面は赤と黒の両者がみられ、外面が赤の場合は内面はすべて赤である。外面が赤で、内面が黒という椀は1点もない。高台内にも黒漆が施されているものは7点あり、文字が確認されるものも7点である。高台内の文字には「池田」、「木田」、「九エ門」など




第64図　水田跡、SD2 溝跡木製品出土状況




第65図　水田跡、SD2 溝跡検出杭断面図




第66図　SD2 溝跡検出杭断面図

がみられる。

第118図１の内面には赤漆地に亀が描かれており、甲羅は黒で、それ以外は金である。

第118図２の外面には黒漆地に赤で丸に草花文が描かれている。３単位と推定される。

第118図５の外面には銀で丸に五・三の桐と推測される文様が３単位描かれている。

蓋は２点確認されている。17は内外面とも黒で、つまみ内にも黒漆が施されており、18の外面には銀で梅花文と考えられる文様が描かれている。

**第119図**１は内外面に黒漆を施した脚付きの容器と推定され、脚の失われた底部である。直径は約27cm と推定される。用いられている樹種はヒノキである。

第119図２は何らかの部材と考えられ、上下両端を欠損している。表裏両面には茶褐色の漆が施され、ａ面左側面は黒漆である。ｂ面には盲孔が２孔確認され、中央の盲孔には木釘がわずかに残存している。別の部材と木釘によって結合されていたものと考えられる。ネズコの柾目材が用いられている。

第119図３は内面に褐色がかった赤漆が施された、外面黒漆塗りの漆器である。破片資料であり、大型の皿と考えられ、円形と想定すれば、推定直径約37cm である。樹種はブナ属の一種である。

第119図４～18は箸である。破片資料を含め15点確認され、径５～6mm で断面形は多角形状を呈している。用いられている樹種はアスナロ７点、ネズコ６点、ヒノキ２点であり、アスナロとネズコがほぼ同数で、両者で85％以上を占めている。完形資料は４点確認され、長さは21cm 前後（14・18）と24cm 前後（15・17）に分かれる。14・16・18は最大径が中央部にあり、両端を削って細くしているのに対して、15は中央部と両端で太さはほとんど変わらず、両端縁に切断面をそのまま残している。

**第120図**１は櫛であり、一端と歯の大部分を欠損する。棟は丸みを持ち、櫛目の切り込み上端の線も棟に平行して弯曲している。樹種はアサダである。

第120図２は不明木製品である。断面形は方形を呈し、１面に加工を施して側面から見て斜めに削り落としている。ｃ面からａ面に向けた釘孔の貫通孔が認められ、別の部材に結合されていたものと考えられる。

第120図３～７は差歯下駄の台と歯である。

第120図３と４は台であり、３は中央から爪先側を欠損しており、４には両側縁と裏面に部分的な破損が認められる。４の前歯は部分的に残存している。後歯側の緒孔の位置は、３が後歯の爪先側に穿たれているのに対して、４では後歯の踵側に空けられている。

第120図５～７は歯の破損資料であり、いずれも接地する下端側が広がる台形状を呈している。

第120図８～16は不明木製品である。

第120図８は四分割材を立方体に加工しており、焼けて炭化した面が確認される。

第120図９は半割材の木表側を削って平坦に整形しており、その一端に加工痕が観察される。

第120図10は心持ち材の両端に同じ面から加工を施し、側面からみて先端側が細くなっている。

第120図11は分割材から８の字状に作り出した不明木製品である。２分の１程を欠損しているが、穿たれた２つの孔の推定直径は2.5cm である。側面から見てわずかな弯曲が観察される。同様な木製品の完形資料は SD26 溝跡の堆積土中から出土している（第４分冊第133図５）。

第120図12は分割材の一端に両側面からの加工によって尖端部が作り出されている。一端を欠損する。用途は不明である。

第120図13は断面正方形に整形されていたと推定される不明木製品である。１面を欠損している。部分的に墨痕が観察される。

第120図14は長さ36.1cm、幅1.4cm の竹材の両端に小孔が各１孔、穿たれている。

第120図15は柾目の板材である。上端がわずかに斜めに切られている。

第120図16は両側縁を欠損しており、全体の形状は明らかではないが、柾目の板材に抉りを入れた木製品である。用途は不明である。

**第121図**1・2は樹皮の残る心持ち材を素材とし、一端に加工を施して杭の先端状に尖らせた木製品である。1の上端には長さ約5.0cm、幅2.5cmほどの抉り部が作られている。2の上端には大別2面の加工痕が観察される。

第121図3は心持ち材の一端に施された1面の加工によって尖端部が作り出されている。

**第122図**1は両端と中央に加工痕の残された心持ち材である。中央部の加工痕は全周を削り取っており、断面形は多角形を呈している。用途は不明である。

第122図2～10は竹の先端に加工を施して尖端部を作り出した打ち込み杭である。すべて上端を欠損している。尖端部は大別1面の加工によって作出されているものがほとんどであるが、8は2面加工によって作り出している。5は同一面に異なる方向からの加工を施している。

**第123図**～第126図は打ち込み杭である。ほとんどの杭は上端を欠損しており、**第125図**4にわずかに上端縁が残されているのみである。分割材を素材とした杭は3点確認されるが（**第124図**1・7、**第126図**5）、ほかの28点はすべて心持ち材である。尖端部の作出は大別4面もしくはそれ以上の加工によるものが20点と最も多く、大別1面の加工による杭は6点であり（第123図3・5、第124図6、第125図6、第126図1・2）、大別2面加工の杭は2点（第125図2、第126図7）、大別3面加工の杭は3点（第123図4、第125図4、第126図4）確認される。

第124図3は尖端部に段が1段作られ、平坦な先端面を持つ特異な形態であり、転用の可能性が考えられる。

第124図4の先端は切断痕状であり、意図的に尖端部を作出したものとは考えにくい。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石庖丁、石斧、石鏃、石錐、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、管玉、石臼、砥石、硯、墓石、礫石器、礫片などである。第4分冊の第211図と第212図に主な石器・石製品を図示した。

**第211図**1は一部分が残存する石庖丁の成品であり、一方の紐孔の周辺が残されている。研磨面下に器体調整のための敲打痕が観察される。b面は剝落した破損面である。石材は粘板岩が用いられている。

第211図2～6は石斧の成品と未成品である。用いられている石材は2がデイサイト質凝灰岩であり、3は斑糲岩、4と6は珪化凝灰岩、5は輝緑岩である。

第211図2は基部の大半を欠損する太型蛤刃石斧であり、欠損面はa面の刃部までおよんでいる。最大幅の位置は基部にあり、断面形は楕円形を呈している。側縁には研磨が施されておらず、器体調整時の敲打痕がそのまま残されている。刃縁にはわずかな刃こぼれが認められるものの鋭利な状態を保っている。研磨面下の敲打痕は刃面では観察されないが、刃面から離れるにしたがって明瞭に認められるようになる。

第211図3は基端の一端を欠損する扁平片刃石斧である。平面形は、側縁がわずかに外弯する台形状を呈している。側面は形成されているが平坦ではなく、膨らみをもっている。a面は刃部から基端にかけて外弯しているが、b面はほぼ平坦である。研磨面下には部分的に整形時の剝離面が残されており、研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕を伴っている。a面の研磨面は10面を超える面に分けられ、多面体状を呈している。

第211図4は扁平片刃石斧の基端のみが残存する資料である。研磨面下に部分的に整形時の剝離面が残されており、研磨面には短軸方向の擦痕が観察される。断面形は側縁を有する凸レンズ状を呈し、側面は形成されているものの平坦ではなく、わずかな膨らみをもっている。側面の研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。

第211図5は刃部の一方を残存する扁平片刃石斧である。断面形は扁平なカマボコ形を呈していたものと推定され、膨らみをもった側面が形成されている。a面の縦断面形は外弯しているが、b面は平坦である。a面の側縁近くの研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察され、b面には短軸方向の擦痕が残されている。

第211図6は扁平片刃石斧の未成品と考えられる。基部中央のみが残存しており、刃部側は節理面で失われている。剝離による器体の整形の後、部分的な研磨が施されている。研磨面にはおもに長軸方向に近い擦痕が観察される。

第211図7と8は石錐であり、7は珪化凝灰岩、8は珪質頁岩を石材としている。

第211図7は有茎の石鏃に類似する形態の石錐である。尖端部と基部の境は明瞭であり、尖端部には回転による磨滅痕が観察される。

第211図8の表裏両面には素材剝片の剝離面が残されており、素材剝片の末端に尖端部を作り出している。尖端部と基部の境は明瞭で、尖端部を欠損しているが、残存部の断面形態は菱形を呈している。

第211図9は形状と用いられている石材から管玉の未成品と考えられる。剝離によって整形されているが、いずれの側面にも自然面が残されており、素材にはそれほど大きくない礫が用いられている。剝離による整形の後、研磨を施しており、研磨面には長軸方向の擦痕が明瞭に観察される。e面には頻繁な打撃によってツブレ状を呈する部分が認められる。

第211図10と11は板状節理を有する安山岩を石材とした大型板状石器である。

第211図10のa面右側面は折りとり面であり、ほかの部位には細部調整を施して整形を行っている。

第211図11のa面左側面とb面は自然面である。a面右側面を折りとり、上端縁には粗い細部調整を施して不整な四辺形に整形している。a面の刃部にわずかな光沢が観察される。

**第212図**1は硯である。墨池側の端部が残存しており、それ以外はすべて欠損している。両側面および端面に整形時の擦痕が認められる。石材は片麻岩である。

第212図2～5は砥石である。用いられている石材は2と3が珪質凝灰岩であり、4は砂質凝灰岩、5はデイサイトである。

第212図2はおもにa面全体とb面の中央を使用しており、a面には中央部には長軸方向の擦痕が認められ、両端では短軸方向の擦痕が観察される。b面の左右両側の磨痕は部分的で、整形時の剝離面を残している。

第212図3は表裏両面と両側面の使用された砥石である。一端を欠損する。c面の中央は使用面であるが、左右両側は整形時に削られた加工面と考えられる。a面の磨痕には短軸方向の擦痕が認められ、c面中央には長軸方向の擦痕を伴っている。

第212図4は自然礫を砥石として使用したものであり、表裏両面と折れ面であるc面に磨痕が残されている。a面の磨痕がもっとも著しく、b面とc面では部分的である。表裏両面の磨痕には長軸方向もしくはそれに近い右下がりの擦痕が観察される。c面の磨痕はa面寄りにわずかに残されているのみである。a面には刃先などを研いだものと考えられる2条の溝が確認され、溝の下端の中心はともに右へ片寄っている。粗目の石材が用いられている。

第212図5は自然礫を半割した面を使用しており、使用によって半割面の高い部分のみが磨られており、低い部分には割れ面を残している。用いられている石材はやや粗目の石材である。長辺の一方を欠損している。

第212図6は楕円形を呈する礫の片面中央に磨痕が残されている礫石器である。磨痕には長軸方向の擦痕が観察され、ほぼ平坦であるが中央でわずかに凹んでいる。石材は安山岩である。

第212図7は楕円形を呈する扁平な礫を素材とし、表裏両面と1側縁に磨痕が残された礫石器である。一端を欠損している。磨痕は平坦な面を形成しており、表裏両面および側面で2～3面に分けられる稜線が明瞭である。石材は多孔質で軟かい珪質凝灰岩が用いられている。

第212図8は墓石であり、下端左側が部分的に残されている。研磨によって形成された平坦面には、いずれも上端を欠損しているが「日」と「右衛門」の文字が刻まれている。「日」の行には命日が刻まれていたものと考えられ、「右衛門」は俗名の一部である。石材は安山岩が用いられている。

**［金属製品］**

SD 2溝跡の堆積土中から出土した金属製品には、煙管吸口、古銭、用途不明金具などがみられる。第4分冊**第295図**21～23に図示した。

第295図23は外径2.7cmの寛永通寶である。新寛永であり、背文に波を鋳出していることから初鋳年は明和6年(1769年)と考えられる。

**SD26溝跡**　調査区南端の中央部から東部にかけて東西方向に延びる溝跡で(第62図)、上端幅446～636cm、下端幅25～66cm、深さは130～142cmである。底面はほぼ平坦で、西から東へ向かってわずかに低下しており、SD28溝跡と接続する東端で、長さ約6.1m、幅1.9～2.5mの方形に大きく広がっている。方向はE－6°－Sである。検出長は58.6mであるが、さらに調査区外の西側へ続くものと考えられる。断面形は、底面から中位の上部までは開いたV字形を呈し、屈曲して大きく開いている(第63図)。堆積土は9層に分けられ、壁面際にみられる砂層の7層を除いて灰色～灰黄褐色を呈する粘土である。

SD28溝跡と接続する東端で大きく広がった箇所の中央には、底面から15～20cm上位に、約160cmの長さに切り揃えられた建築部材が5本、南北方向に据え付けられている(第72図)。建築部材は82～107cmの間隔で並べられており、西端から東端の建築部材までの距離は363cmである。また、橋脚施設と考えられる柱穴状のピットが5箇所確認され、北西のピットには直径約21cmの表面に加工を施した芯持ち材が133cm程の長さで残存している。

SD31・36溝跡を切っている。

堆積土中より、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、木製品類、石器・石製品類、金属製品、が出土している。

**[弥生土器]**

弥生土器は1点図示した(第3分冊第138図5)。壺で頸部は直立し、屈曲して口縁部は外へ開く。外面調整は口縁部にヨコナデ調整、頸部と胴部にミガキが施されている。内面はケズリ調整とその後にミガキ調整が施されている。文様は胴部上端に3本からなる並行直線文が描かれている。

**[磁器]**

磁器は4点図示した(第3分冊第149図1・4・6・7)。中国青磁で龍泉窯系の碗(1)・皿(4)、肥前の染付碗(6・7)である。

**[陶器]**

陶器は12点図示した(第3分冊第149図2・3・5・8～16)。古瀬戸の灰釉平碗(2)、唐津の灰釉大鉢(3)、唐津系の灰釉呉器手碗(5)、美濃の灰釉甕(8)、岸窯系の鉄釉擂鉢(9)、大堀相馬の鉄釉流し灰釉小杯(10)・灰釉腰折碗(11)・灰釉碗(13)、小野相馬の灰釉碗(12)・灰釉鉢または香炉(15)、産地不明の鉄釉小壺(16)である。14は大堀相馬と思われるもので器種は不明である。

**[木製品類]**

SD26溝跡の堆積土中より出土した木製品類には、漆器椀・蓋、不明漆器、鉢、箸、下駄、容器部材(桶側板・円板状木製品)、建築部材、打ち込み杭、不明木製品などがみられる。第4分冊第130図から第136図に図示した。

**第130図**1～11は漆器椀であり、13は蓋である。椀に用いられている樹種はすべてブナ属の一種であり、蓋はトチノキである。椀の形態は様々で、高台から内弯して立ち上がるもの、水平にのびて屈曲して立ち上がるもの、屈曲点をもち稜線が形成されるものなどがみられる。底部の厚さもまちまちであり、器壁とほぼ同じ厚さのものから2倍を超えるものまで含まれる。椀に使われている漆には赤と黒があり、内面赤漆で外面黒漆が5点、内外面ともに赤漆が施されているものは6点である。外面に文様が描かれているものは1点のみである。

すべての椀の高台内には漆が塗られており、文字が確認されるものは4点である。高台内の漆は黒漆9点、赤漆2点であり、圧倒的に黒漆が多い。高台内の判読可能な文字は「九エ門」と「三瓶」であり、他の2点は欠損によ

り不明である。底部に貫通孔が１孔穿たれているものは２点確認される。

第130図３の高台内の文字「九エ門」は、SD2溝跡の堆積土中から出土した第118図13にも確認され、同一の文字と考えられる。

第130図４の外面には黒漆地に萩が描かれている。

第130図13の蓋の内面には赤漆が塗られ、外面にはつまみ内を含め黒漆が施されている。つまみ上端を欠損する。

第130図12は鉢であり、内外面に木地ロクロ痕が観察され、破損面に焼けて炭化した部分が確認される。用いられている樹種はブナ属の一種である。

第130図14は上下両端を欠損しているが、何らかの部材と考えられる、全面に黒漆の塗られた木製品である。釘孔が１孔穿たれており、それと並んで上端側に盲孔が１孔確認される。樹種はアスナロである。

第130図15～20および**第131図**１～６は箸である。破片資料を含め12点出土しており、径は５～７㎜で、断面形は多角形状を呈している。用いられている樹種はネズコ５点、アスナロ４点、ヒノキ３点であり、点数に大きな違いは認められない。完形資料は２点確認され、長さは21cm前後に近く、１が22.1cm、２が20.9cmである。ともに中央部と両端の太さはほとんど変わらず、両端縁に切断面をそのまま残している。

第131図７はネズコの柾目材を用いた刃物の柄である。末端は斜めに整形され、段面形は隅丸長方形である。上端寄りには、上に山形を加えた六の文字が彫り込まれている。

第131図８・９は台と歯を一木から作り出した連歯下駄である。ともに側縁を部分的に欠損しているが、全体の形状を把握することは可能である。平面形は長方形を呈し、８はネズコの半割材を素材として木表側に歯を作り出しており、９はスギの追い柾目の板材を素材としている。歯の幅は台と同じ幅である。鼻緒孔は中央に穿たれており、８が縦に長い長方形を呈しているのに対して、９では円形の小孔である。後歯側の緒孔は、ともに後歯の踵側に接する位置に空けられている。８は緒孔の一方を欠損し、残る一方も部分的に欠損しているため不明であるが、９はａ面側では後歯にあたる位置から斜めに穿たれている。９の台には鼻緒孔の両脇に使用による指の跡の摩り減りが観察され、右足用と判断される。

第131図10・11と**第132図**１は歯の残存する差歯下駄である。第131図10は前歯、後歯ともに残存しているが、台の踵側の一端を欠損している。11は台と後歯が残されている。第132図１は台の後歯の位置から踵側を欠損する。歯の摩り減り方と鼻緒孔の両脇に残された使用による指の跡から、第131図10は左足用、11は右足用と判断される。10と11の後歯側の緒孔は、ともに後歯の踵側に接する位置に空けられている。

第131図10の前歯は、後歯に比べて厚みがあり、用いられている樹種はネズコである。台と後歯の樹種（ケヤキ）とは異なっていることから付け替えられたものと考えられる。

第131図11の後歯は台から一旦開いた後、両側縁が平行に作られていたものと推定される。

第132図２～６は差歯下駄の歯である。すべて破損資料であり、接地する下端側が広がる台形状を呈している。

第132図７は平面形が逆台形を呈する板状の木製品である。両側縁側が1.8～2.5cm幅で１段削り込まれており、それぞれ３孔の小孔が穿たれていることから、容器の部材と考えられる。中央の上端寄りには長方形の別木がはめ込まれている。樹種は本体がクリであり、はめ込まれた別木はアスナロである。

第132図９～15は平面円形を呈する厚さ0.55～1.4cmの円板状木製品であり、桶・樽・曲物などの底板もしくは天板と考えられる容器部材である。用いられている樹種はヒノキもしくはヒノキ科が６点であり、アスナロとネズコは１点ずつである。完形に近い資料は15のみであるが、推定直径は10cm前後（13～15）、18cm（12）、24cm（11）、27cm前後（８・９）、32cm（10）と寸単位で作られているものと考えられる。８と９は側面のｂ面側に盲孔が観察され、別の部材と木釘によって結合されていたものと推定される。14と15は5mmを若干上回る程度の厚さであることから、柄杓の底板の可能性がある。

第132図16～18は桶もしくは樽の側板である。15の左側面には別の部材と結合した際の木釘が１ヶ所残されており、外面の両端寄りには「たが」の痕跡が認められる。18の内面には底板位置の直上に付着物が観察される。

**第133図**１～13は用途不明の木製品である。

第133図１は分割材を素材とし、断面円形に整形した棒状の木製品である。一端には側面から見て斜めに削り落とされた加工面がみられ、加工痕寄りの断面形は隅丸方形を呈している。何らかの柄と考えられる。

第133図２は分割材を断面多角形状に整形し、残存する一端は中央部よりも細く、薄く仕上げられており、直径約1cmの孔が穿たれている。

第133図３はアスナロを用いた細い板材であり、一端に３孔、残る一端に１孔の釘孔が残されている。

第133図４は心持ち材の両端にていねいな加工痕が認められる木製品である。半面を欠損する。図示した面には細かな刃物のキズが残されている。

第133図５はSD２溝跡の堆積土中より出土した第120図11と同様な形状の木製品である。５～5.5cmの孔が２孔穿たれて８の字状を呈している。

第133図６は小さな角材に縦長の方形孔を穿った木製品である。方形孔は中央ではなく、一端に寄って空けられている。何らかの部材と考えられる。１側面を欠損する。

第133図７は直方体に整形された木製品である。部材と考えられる。

第133図８はヒノキを用いて輪状に弯曲した形状に整えられたと推定される木製品であるが、破損が著しく全体の形状は不明である。

第133図９は薄い板材の破片であり、弯曲度の異なる弧状に整形された２縁辺が認められ、小孔の一部が確認される。何らかの部材と考えられる。

第133図10は角柱状に整形された木製品であり、一端が太く、残る一端を細く仕上げている。太い側の端面には３条の刻みが確認される。

第133図11は幅5.15cmの板材に９～10cmの間隔をおいて方形孔が穿たれている。棚などの部材と推定される。

第133図12は両側縁を欠損し、両端に焼けて炭化した部分の確認される板材である。b面に釘穴が認められることから釘結合の容器部材の可能性が考えられる。

第133図13は角柱状を呈する細い木製品である。一端のみ残存している。

**第134図**と**第135図**はSD28溝跡に接続する位置に、50～80cm間隔をおいて、溝跡に直交する方向で底面に敷設された木製品である。建築部材の転用と考えられ、160cm前後（156.0～160.9cm）のほぼ同じ長さに鋸によって切断されている。５点とも１面に手斧による加工痕が明瞭に残されており、第135図２には加工面に対して斜め方向に、長さ14cm、幅4cm、深さ4.5cmのホゾ穴が作られている。

**第136図**１はSD28溝跡に接続する位置に設けられた、橋脚施設と考えられる柱穴状の遺構のひとつから出土した柱材と考えられる直径約22cmの心持ち材である。下端は鋸によって切断された平坦面であり、側面には手斧による加工痕が部分的に残されている。上端を欠損する。

第136図２～５は心持ち材の打ち込み杭である。いずれも上端を欠損している。

**［石器・石製品類］**

SD26溝跡の堆積土中から出土した石器・石製品には、石庖丁、石鏃、石錐、石匙、削器、細部調整剥片、大型板状石器、剥片、石核、砥石、碁石、礫石器、礫片などがある。第４分冊第220図１～９におもな石器・石製品を図示した。

**第220図**１～３は石庖丁であり、１と２は成品の破損品、３は未成品である。用いられている石材は１が珪化凝灰岩であり、２は粘板岩、３はデイサイト質安山岩である。

第220図１は一方の紐孔の一部と背部を部分的に残しているが、ｂ面は剝落した破損面である。研磨面下に器体調整時の敲打痕が残されている。紐孔は敲打による窪み部形成を伴わない直接回転による穿孔と観察されるが、残存部分が少なく断定はできない。ａ面全体に光沢が認められる。

第220図２は側縁部分の１端であり、表裏両面とも部分的な研磨が施されているが、剝離面を大きく残している。背部と刃部は長軸方向の研磨によって仕上げられており、側縁にも研磨痕が認められる。

第220図３は剝離によって整形され、敲打による器体の調整整形へ移行した段階の未成品である。ａ面にわずかに敲打痕が観察される。

第220図４は黒色頁岩を石材とし、扁平で小型の円盤状に整形されている。碁石と考えられる。

第220図５は縦型石匙である。剝離面打面の剝片を素材とし、素材剝片の打面側につまみ部を作り出している。つまみ部はａ面左側はａ面ののちｂ面側へ、右側はｂ面ののちａ面側へ剝離を施して形成されている。つまみ部作出以外の細部調整は、ａ面左側縁のつまみ部寄りを除き、ｂ面からａ面側へ施されている。刃角は45～55度である。ａ面の右側縁から末端にかけて光沢が観察され、ｂ面左側縁にも光沢が認められる。石材は珪質頁岩である。

第220図６は双面打面の剝片を素材とした削器である。ａ面に部分的に自然面が残されている。両側縁におもにａ面からｂ面側へ細部調整を施し、刃部を作出している。ｂ面右側縁は65～70度であるのに対して、左側縁では80～90度と急角度である。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第220図７は剝片の打面側と末端を折りとり、１側縁に細部調整を施して刃部を作り出した削器である。刃角は70～75度である。ｂ面には刃部以外に打面側の折りとり面と右側縁からわずかな剝離が施されている。石材は流紋岩が用いられている。

第220図８と９は砥石であり、８は１端を欠損する。石材はともに珪質凝灰岩が用いられている。９の表裏両面と側面には部分的に製作時の加工痕が残され、上下両端面には磨痕は確認されず、加工痕のみが残存している。まだ使用のそれほど進んでいない砥石である。それに対して８は充分に使い込まれており、厚みは９の厚みの５分の１程度になっている。しかし、ｂ面側には９と同様な製作時の加工痕が残されており、幅も９に近似し、同じ石材が用いられていることから８と９は規格品であった可能性が考えられる。

［金属製品］

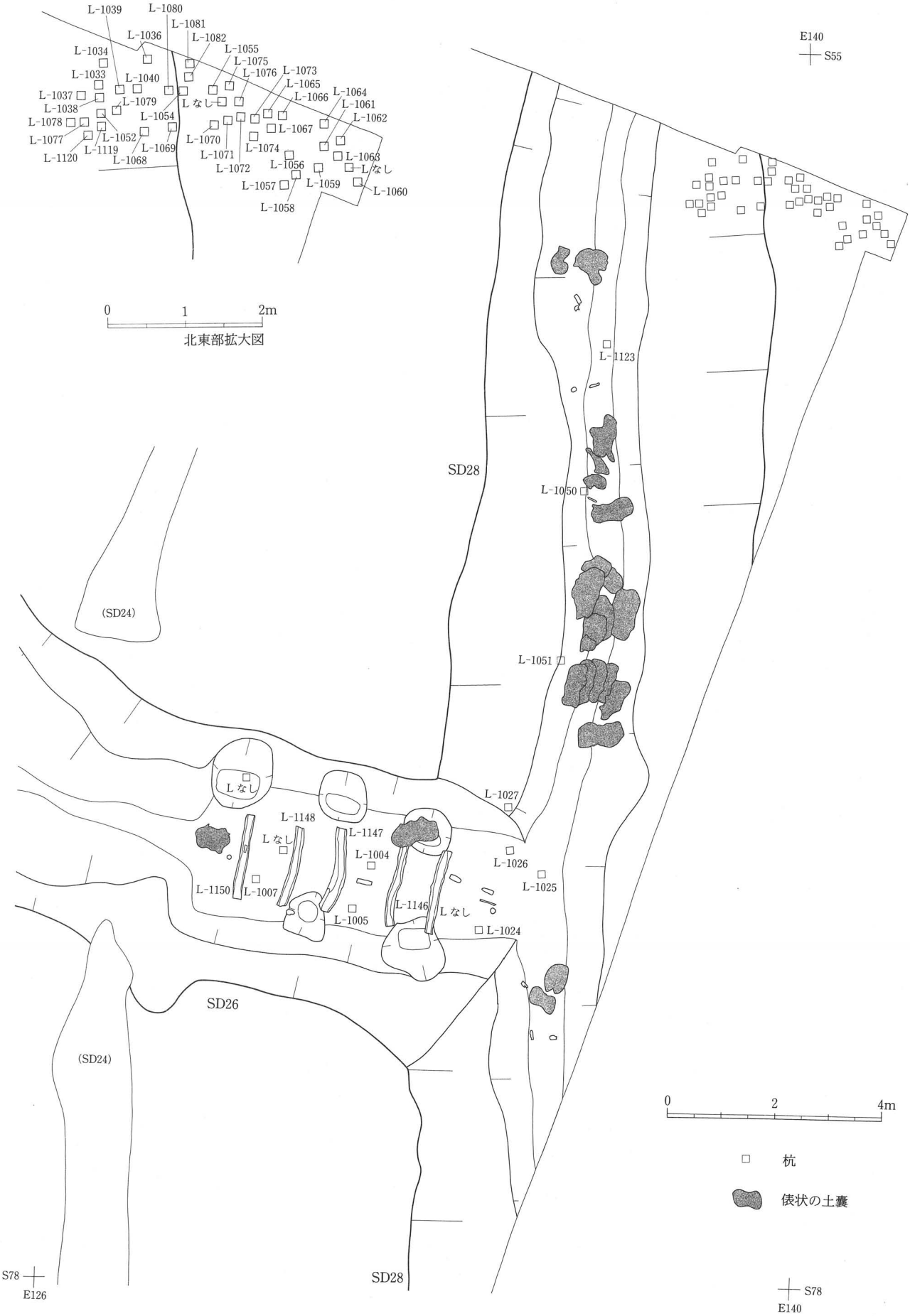
SD26 溝跡の堆積土中から出土したおもな金属製品を第４分冊第297図１～13に図示した。

**第297図**１～13は鉄釘である。１を除くほとんどが断面角形を呈する和釘である。断面形はやや扁平な長方形に近い。１は他の鉄釘と比べて細く、用途が異なるものと考えられる。２～５はほぼ完形である。６は尖端部を欠損しており、欠損部付近でねじれている。７～９は尖端部の残存する資料であり、９は幅に対する厚さのあまりない扁平な鉄釘と考えられる。

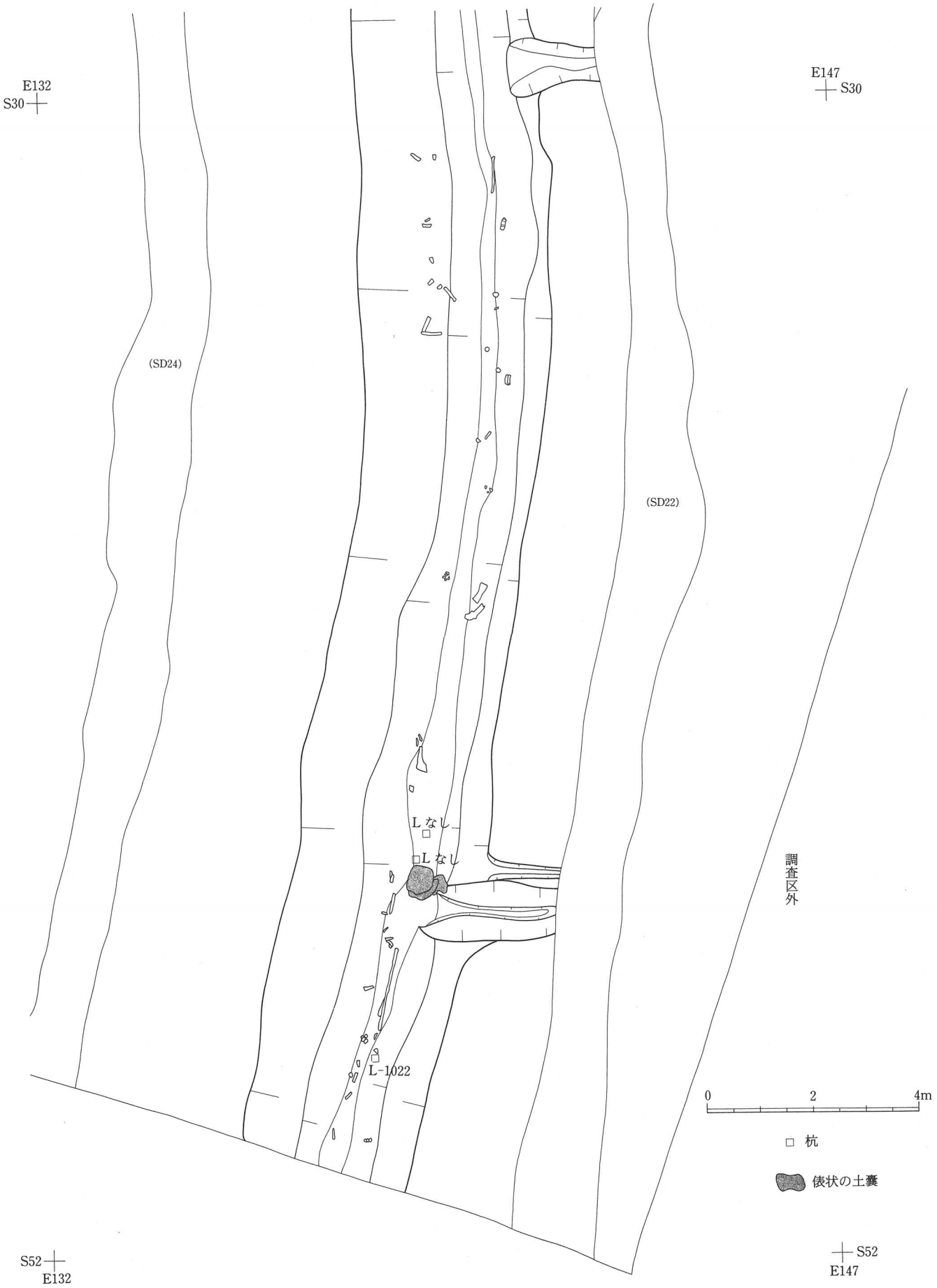
**SD28 溝跡**　調査区東端で検出された南北方向に延びる溝跡で（第62図）、上端幅3.21～5.23m、下端幅20～82cm、深さ114～139cm である。底面はほぼ平坦であるが、北から南へ向かってわずかに低下している。方向はＮ－６°－Ｅである。検出長は56.4m であるが、さらに調査区外の南北へ続くものと考えられる。断面形は不整なＵ字形を呈しており（第50図）、最深部は東側に寄った位置にある。底面からの立ち上がりは、東側では中位に屈曲部が認められるのに対して、西側では一旦立ち上がり、中位に1.5m ほどの平場がみられ、その後、上端へと立ち上がっている。堆積土は４層に分けられ、いずれの堆積土も酸化鉄を斑状に含んでいる。１層目は灰黄褐色の粘土であり、層下部はシルト質粘土に近い。２層目は灰黄褐色のシルト質粘土、３層目は黒褐色の粘土、４層目は褐灰色の粘土である。

SD29、SD30 溝跡を切っている。

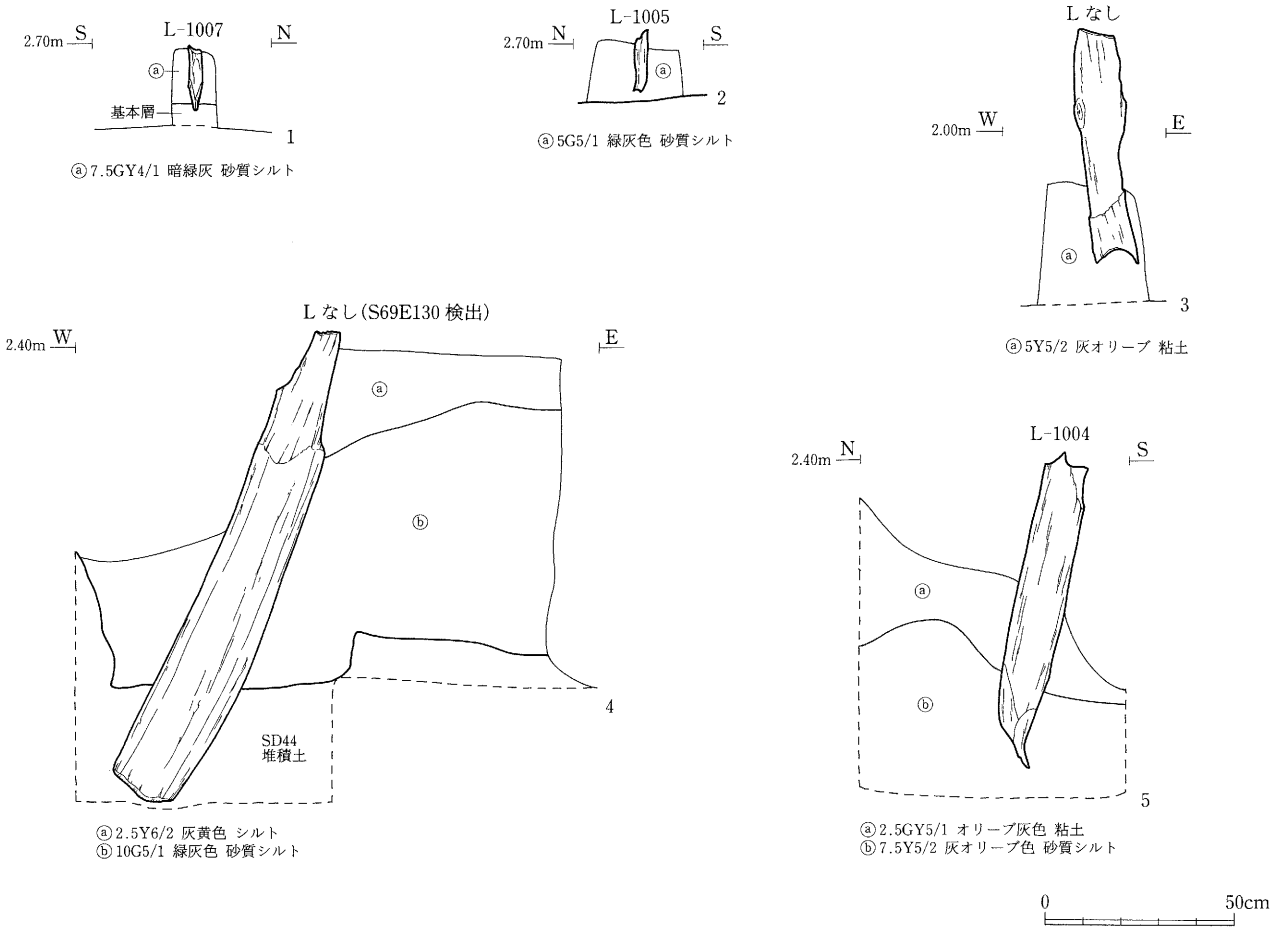
SD28 溝跡の東側の肩の、E140S57 区付近には打ち込み杭が約40本集中する箇所がみられる。また、南半の SD26 溝跡が接続する付近の底面には、俵状の土嚢が部分的に積み重ねられた状態で出土している。




第67図　SD26・28 溝跡木製品出土状況




第68図　SD28 溝跡木製品出土状況




第69図　SD26 溝跡検出杭断面図

堆積土中より弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦質土器、石器・石製品類、木製品類、金属製品が出土している。

**[磁器]**

磁器は2点図示した（第3分冊第149図17・19）。肥前染付の碗（17）・皿（19）である。

**[陶器]**

陶器は12点図示した（第3分冊第149図18・20、第150図1～9・12）。瀬戸の鉄釉仏共器（第149図20）、美濃の鉄絵笠原鉢（第149図18）、岸窯系の灰釉香炉（第150図1）・鉄釉香炉（第150図2）・灰釉流し鉄釉壺（第150図6）、大堀相馬の灰釉碗（第150図3・5）・灰釉鉄釉掛け分け丸碗（第150図4）・鉄絵碗（第150図7）、小野相馬の灰釉香炉（第150図8）、産地不明の鉄釉擂鉢（第150図9）・黒釉甕（第150図12）である。

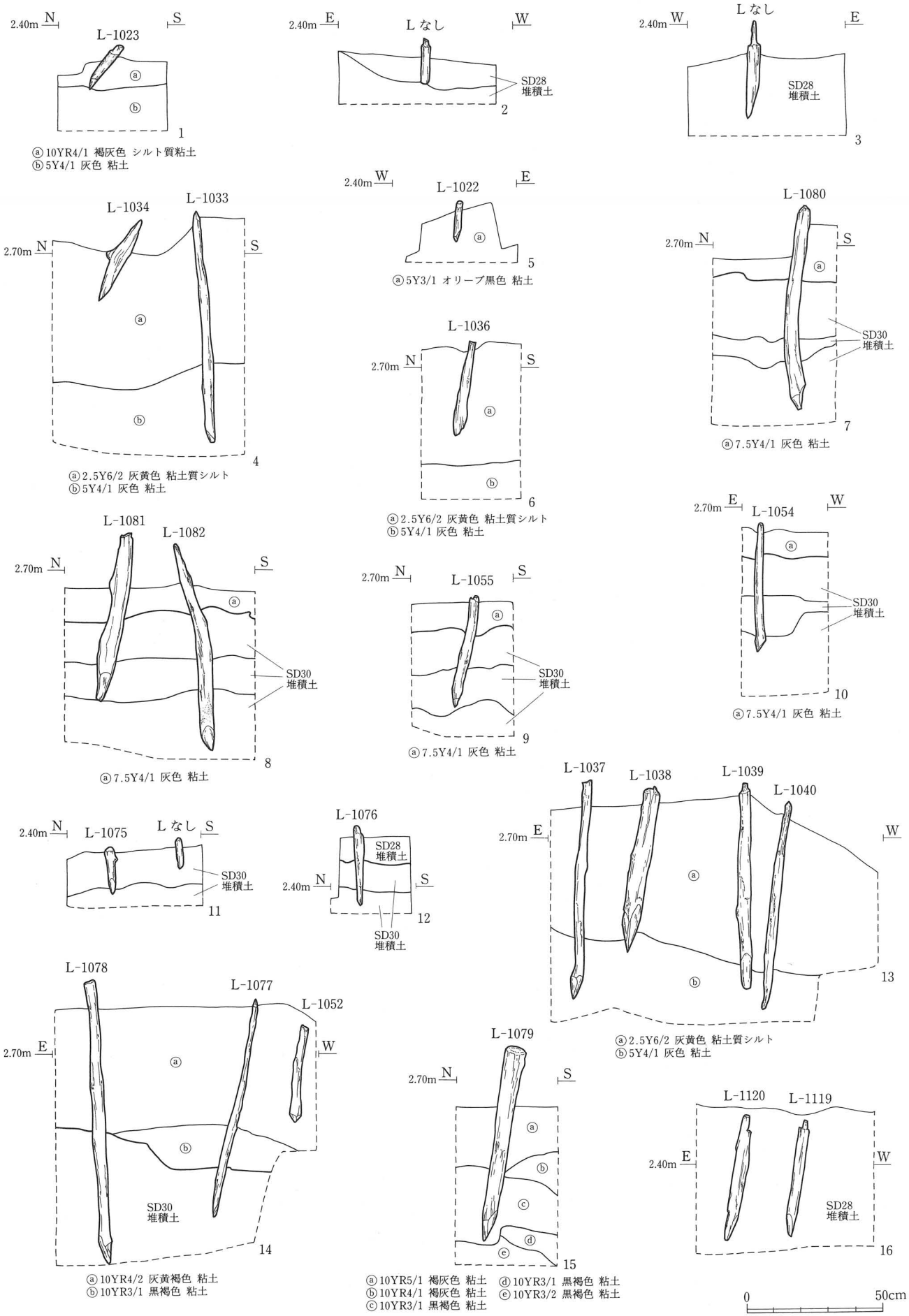
**[瓦質土器]**

瓦質土器は2点図示した（第3分冊第150図10・11）。甕（10）と鉢（11）である。

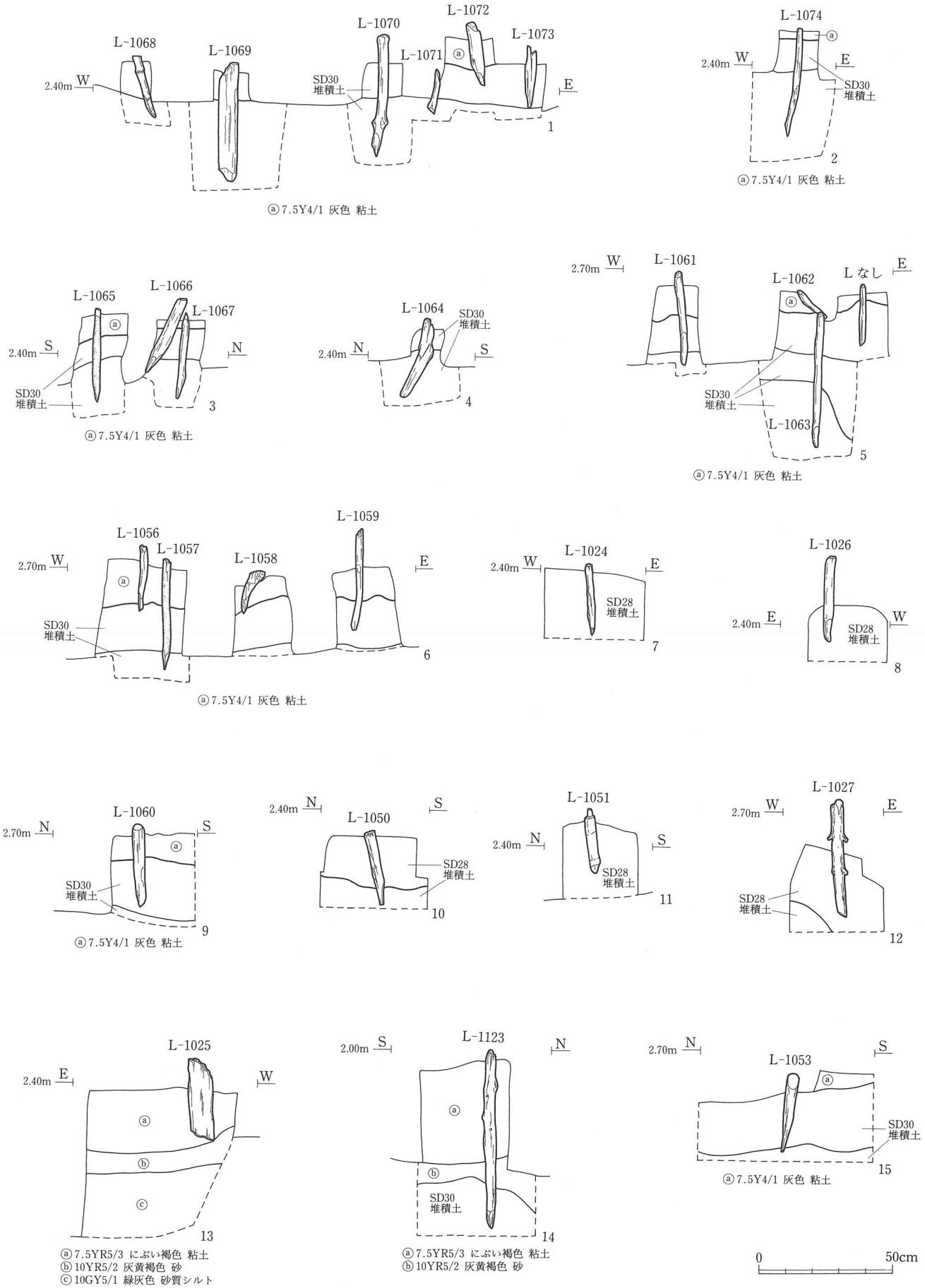
**[木製品類]**

SD28 溝跡の堆積土中より出土した木製品類には、漆器椀・蓋、皿、箸、下駄、柄杓、容器部材（桶側板・円板状木製品）、打ち込み杭、不明木製品などがみられる。第4分冊第137図から第148図に図示した。

**第137図**1・2と第145図1～3・5は漆器椀であり、第137図3・4は蓋である。用いられている樹種はすべてブナ属の一種である。椀の形態は高台から内弯して立ち上がっており、不明瞭ではあるが、屈曲点をもち稜線の形成




第70図　SD28 溝跡検出杭断面図 (1)




第71図　SD28 溝跡検出杭断面図 (2)

されるものもみられる。底部の厚さは器壁とほぼ同じ厚さか、やや厚めである。椀に使われている漆には赤と黒があり、内面赤漆で外面黒漆が4点、内外面ともに黒漆1点、内外面ともに赤漆1点である。外面に文様が描かれているものはみられない。すべての椀の高台内には黒漆が塗られており、文字の確認されるものが2点含まれている(**第145図**1・2)が、判読できない。2点の蓋には、つまみ内を含む内外面に黒漆が施されている。第137図3のつまみ内には赤で書かれた「吉」の文字が見られるが、貫通孔によって一部失われている。4のつまみ内には赤い小さな丸印が確認される。

第145図4は口径9.0cm、器高9.5mmの小皿である。漆が塗られた痕跡は確認されない。

第137図5は箸に類似する形態の木製品であるが、両端を欠損し、樹種は他の箸には見られないスギが用いられていることから異なる種類の木製品の破片の可能性も考えられる。

第145図6～16は箸である。完形資料は6のみであり、ほかはすべて破片資料である。直径は4～7mmで、断面形は多角形状を呈し、用いられている樹種はアスナロ7点、ネズコ4点である。完形資料である6の長さは23.7cmであり、中央部と両端の太さはほとんど変わらず、両端縁に切断面を残している。

第137図6～8と第146図1・3・4・8は台と歯を一木から作り出した連歯下駄である。第146図8は歯の上端にわずかに台の部分が残されており、木取りの観察と合わせて連歯下駄と判断した。

第137図6の台の平面形は長方形を呈しており、歯の下端は台の幅よりも広く作られている。後歯側の緒孔は後歯の前に位置している。

第137図7は平面形が踵側の狭い楕円形を呈しており、1側縁を欠損する。歯の下端は台の幅よりも広く作られており、後歯側の緒孔は歯の前に位置している。前歯と後歯の高さは極端に異なっている。前歯には台表からの木釘が3ヶ所残され、割れた部分にも木釘の痕跡が認められることから、破損もしくは摩り減りによって低くなった前歯に別木を打ち付けて高さを調整したものと考えられる。歯の下端は台の幅よりも広く作られている。

第137図8は緒孔の部分をすべて欠損している。歯は2枚の独立した歯ではなく、端縁に連続して両端縁から斜めに削られて作り出されている。台裏の中央は側面から見て「コ」の字形に抉り込まれている。板材から作り出されたものと考えられる。

**第146図**1と3は部分的な欠損がみられるが、台の平面形は長方形を呈していたものと考えられる。後歯側の緒孔は後歯の後に位置している。前後の歯から端縁までの距離が異なっており、前歯側が短く、後歯側が長い。

第146図4は後歯側の緒孔から踵側を欠損している。緒孔の一部が残され、後歯はまったく残存していないことから、後歯の前に緒孔が穿たれていたものと判断される。

第146図8は後歯のみが残存する資料であり、木表側に作り出された台は欠損している。c面の上端側に台の緒孔へと続く溝が確認され、両側面には赤漆が部分的に残されている。

第146図2・5は歯が部分的に残された差歯下駄である。2の遺存状況は良好ではなく、周縁のほとんどを欠損する。台の平面形は長方形と推定され、後歯側の緒孔は歯の後に位置している。前歯はホゾ孔周辺にわずかに残る程度である。

第146図5の台のホゾ孔には前歯のホゾの部分が残されている。後歯側の緒孔は後歯の踵側に接する位置に穿たれている。

第137図9～11と第146図6・7・9～11は差歯下駄の歯である。第137図9を除き、破損資料であり、接地する下端側が広がる台形状を呈している。第137図9にはホゾは作り出されていない。

第137図12・13は桶・樽などの底板もしくは天板と考えられる容器部材である。側面のb面側に盲孔が観察され、13には木釘が残存している。木釘によって別の部材と結合され、円形の板に仕上げられていたものと考えられる。推定直径は12が22cm、13が30cmである。13のc面には点々と漆が残されている。

**第147図**１は曲物柄杓の側板であり、樺皮紐で綴じ合わせた部分で破損し、広がった状態である。ａ面左端の上端寄りに柄を取り付けるための縦約1cm、横2cmほどの長方形の孔が作られ、右側の下端寄りには直径約５㎜の小孔が穿たれている。したがって失われた柄は断面形が横に長い長方形を呈し、尖端部をもち、先端が下がるように斜めに取り付けられていたものと考えられる。小孔の周囲は樺皮紐で綴じ合わせられており、穿孔によって側板が遊離することを防いでいる。復元した際の直径は12.8cm、器高は10.0cmである。

第147図２～６は平面円形を呈する、厚さ0.5～1.3cmの円板状木製品であり、桶・樽・曲物などの底板もしくは天板と考えられる容器部材である。完形資料は２のみであり、直径は11cmである。ａ面および側面に加工痕が観察され、ａ面の加工面には工具の刃こぼれによる条線状のキズが確認される。

第137図14と**第138図**１～７および第147図７は桶もしくは樽の側板である。

第138図１のａ面には別の部材と結合した際の木釘が１ヶ所残されている。

第138図４と７には横木を差し込むための孔が穿たれている。

第138図８～12、**第139図**１～４および第147図８～13は不明木製品である。

第138図８、第139図１～４および第147図13の板材は何らかの部材と考えられる。

第138図８は一端を斜めに切り落としている。

第139図１～３は部分的な破片資料であり、１には焼けて炭化した面が確認される。

第139図４は一端がわずかに広い板材である。図示した面の左下の角に小孔が２孔穿たれており、上方の孔に隣接して盲孔が確認される。

第147図13は長方形を呈する板材であり、中央下端寄りには２孔一対の小孔が確認される。

第139図１は建築部材の可能性がある。

第138図９は板目材を素材とした隅丸長方形を呈する厚さ約2.5cmの板材であり、一端をわずかに欠損している。残存する側の端部には小孔が２孔穿たれており、その外側に隣接して木釘が残されている。欠損する端部寄りには小孔が中央に１孔確認される。また、残存する端部寄りには小孔が１孔、木釘が５ヶ所確認される。さらに両側縁中央部の、欠損する側の端部寄りにも２個一対になる形で、ａ面左側縁で３対、右側縁で２対の木釘と木釘の抜けた小孔が認められる。両端を除いて小孔と木釘の位置関係を観察すると、下駄の緒孔の位置と類似しており、下駄のような緒を付けた履物の可能性が考えられる。

第138図10は一端の広がる板目の板材であり、端部は弧状に整形されている。狭い端部側を欠損する。

第138図11は分割材を素材としており、断面形が楕円形を呈するように削り出した木製品の一端である。用途は不明である。

第138図12はヒノキの分割材を素材とし、一端がわずかに広がる円筒形に整形している。両端面は平坦である。その形態から栓の可能性が高い。

第147図８は竹材が用いられており、内面のフシは除去されている。一端に加工を施し、３ヶ所の尖端部を作り出し、残る一端は長軸に直交して切り落とされている。尖端部を突き刺して使用する花立てと考えられる。

第147図９はヒノキを用いた、長さ13.5cm、厚さ4mm弱の薄い板材であり、両側縁を欠損する。両端には小孔が穿たれており、残された端縁の形状から一方は直線的に、残る一方は弧状に整形されていたものと推定される。

第147図10は貫通孔が１孔穿たれた木製品である。焼けて全面が炭化している。クロマツの分割材を素材としている。

第147図11はアスナロの分割材を素材とし、断面方形に整形されている。側面から見て両端を斜めに切り落としており、両端縁をわずかに欠損している。何らかの部材と考えられる。

第147図12はブナ属の一種の柾目材を素材とした木製品であり、一端に尖端部が形成されている。一端のみ残存す

る破片資料であり、側面の片側も欠損している。断面形は楕円形を呈する。用途は不明である。

第139図５～９と**第140図**～第144図および第148図は打ち込み杭であり、そのほとんどは上端を欠損している。心持ち材を素材としたものが多く、分割材あるいは半割材を素材とした杭は少ない。竹材を用いた杭もみられる。竹材を素材とした杭を除き、尖端部は大別４面もしくはそれ以上の加工面によって形成されているものが多く、大別１～３面の杭は少ない。加工面に刃こぼれによる条線状のキズが確認される杭があり（第140図１～３・５、**第141図**４・５、**第143図**１～７）、同一工具によって加工された可能性が考えられる。

第139図５・６と第148図１～４は竹材の打ち込み杭であり、尖端部は大別１面の加工によって形成されているが、第139図６と第148図１の尖端部の主要な加工面の裏側にわずかな加工が観察される。

第139図７は心持ち材素材であるが、ｂ面側に割り裂き面が観察される。

第140図１と５は分割材を素材とし、第140図６・７と第143図１は半割材を素材としている。第140図６の尖端部の加工は短く、切断痕に近い形状であり、７は焼失によって形成された尖端部を利用している。

第140図４は心持ち材を素材としているが、側面は割り裂かれており、断面形状は多角形を呈する。

第141図１と第142図６は分割材を素材としており、第141図１の上半には焼けて炭化した面が確認される。

第141図６は先端を欠損しているが、ｂ面側に尖端部形成の加工とは異なる加工面が確認され、先端側にわずかな段を形成している。

**第144図**４は大別１面の加工によって尖端部を形成しており、先端側は焼けて炭化している。

**［石器・石製品類］**

石器･石製品類は、石斧、石鏃、石錐、石匙、削器、細部調整剝片、大型板状石器、剝片、石核、砥石、礫石器、礫片などである。第４分冊第220図10～12に主な石器を図示した。

**第220図**10は素材剝片の両側縁に細部調整を施して形成された刃部が､素材剝片の打面側に向かって尖端を作って交わる尖頭削器である。細部調整はおもにｂ面側に施されており、素材剝片の末端にも確認される。用いられている石材は珪化凝灰岩である。

第220図11と12は石斧の破損品である。用いられている石材は11が泥質頁岩であり、12はデイサイト質凝灰岩である。

第220図11は基端と刃部を欠損しており、基端側は節理面による欠損である。明瞭な側面は形成されていない。研磨面下には整形時の剝離面と器体調整時の敲打痕が観察され、剝離、敲打、研磨の製作工程を経過したことが確認される。

第220図12は太型蛤刃石斧の主面が使用によって剝離した破片である。刃部側からの力による破損面であり、中央で短軸方向に稜線状の高まりが形成される特徴的な剝離面である。研磨面下には整形時の剝離面と器体調整時の敲打痕が残されており、研磨面には長軸方向に近い右下がりの擦痕が観察される。

**［金属製品］**

SD28溝跡の堆積土中からは、古銭、鉄釘などの金属製品が出土している。第４分冊第297図14～20におもな金属製品を図示した。

**第297図**14と15は寛永通寶である。ともに背文のない新寛永である。

第297図16～20は鉄釘である。すべて断面角形を呈する和釘である。16のみ完形の資料であり、17と18は尖端部側を、19と20は頭部側を欠損している。16～18は頭部の形状が類似しており、頭部はつぶれておらず、他の鉄釘とは用途が異なるものと考えられる。

### (2) 溝跡

水田跡に伴う水路と考えられる溝跡の他に、溝跡がもう１条検出されている。

SD ３溝跡　調査区中央部の南半、E45～65S41～44 区で検出された東西方向に延びる、浅い溝跡であり、西端で南側に短く屈曲している（第62図）。上端幅16～61cm、下端幅８～42cm、深さ２～7cm である。検出長は東西方向で19.5m、西端で南側に短く屈曲する部分が2.1m の計21.6m である。底面はほぼ平坦であり、東側から西側へわずかに低くなっている。方向はＥ－１°－Ｎである。断面形は開いたＵ字形を呈し（第63図）、堆積土は褐灰色のシルト質粘土である。

SD ３溝跡は水田区画15と18を画する東西方向の畦畔の西側に位置していることから、隣接する畦畔は検出されなかったが、水田区画にかかわる溝跡である可能性が考えられる。

堆積土中より土師器が出土している。

### (3) 土坑

SK ２土坑　調査区西部の中央 E31～33S27～29 区で検出された土坑である（第72図）。長径194cm、短径169cm の不整円形で、深さは63cm である。断面形はＵ字形を呈しており、上端で開いている。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に分けられ、上層は色調のわずかな違いによって、さらに２層に細分される。上層の上半は灰褐色の粘土であり、下半は酸化鉄斑を全体的に含む褐灰色の粘土である。下層は灰褐色のシルト質粘土であり、層の下部に灰白色の粘土質シルトの小ブロックを含んでいる。

堆積土中より弥生土器、陶器が出土している。

**［陶器］**

陶器は１点図示した（第３分冊第152図16）。大堀相馬の灰釉鉄釉掛け分け丸碗である。

SK ３土坑　調査区西部の北側 E25～26N ５～６区で検出された土坑である（第72図）。長径112cm、短径90cm の楕円形で、深さは30cm である。断面形は開いたＵ字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰褐色の粘土質シルトであり、褐灰色のシルトをブロック状に含んでいる。

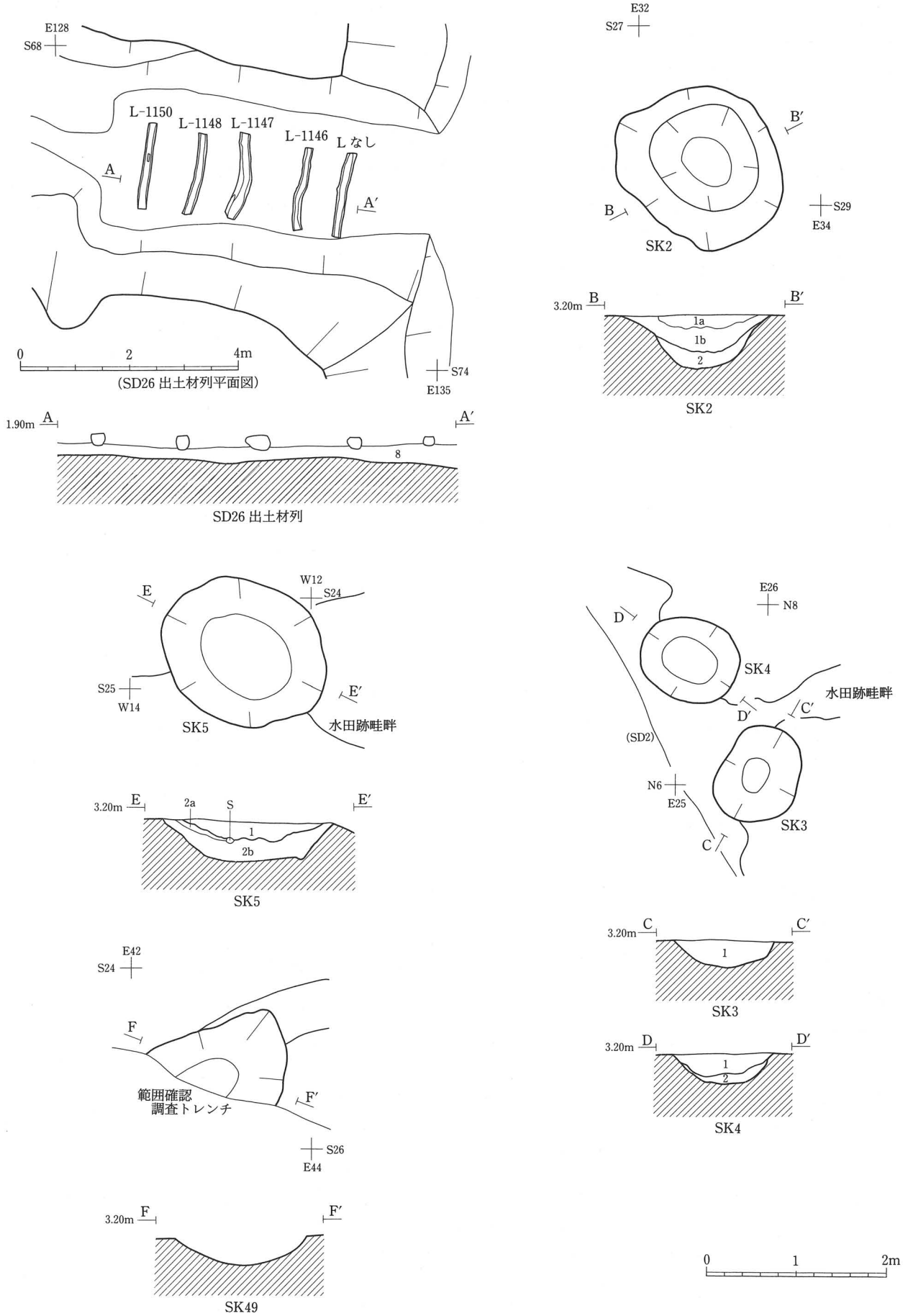
堆積土中より弥生土器、剝片が出土している。

SK ４土坑　調査区西部の北側 E24～25N ６～７区で検出された土坑である（第72図）。長径110cm、短径92cm の円形に近い楕円形で、深さは34cm である。断面形は開いたＵ字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に分けられる。上層は灰褐色の粘土質シルトであり、暗褐色のシルトと明褐色のシルト質粘土をブロック状に含んでいる。下層は褐灰色の粘土であり、層の上部には暗褐色のシルトと明褐色のシルト質粘土が層状に認められる。

堆積土中より剝片が出土している。

SK ５土坑　調査区南西角の W11～13S23～25 区で検出された土坑である（第72図）。長軸192cm、短軸154cm の円形に近い楕円形で、深さは44.5cm である。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に分けられ、下層はさらに２層に細分される。上層は褐灰色のシルト質粘土であり、灰褐色のシルト質粘土をブロック状に含み、炭化物の薄層が認められる。下層は褐灰色の粘土であり、上部には灰褐色のシルト質粘土を含んでいる。

堆積土中より弥生土器、石製品が出土している。




第72図　SD26 溝跡出土材列、SK2～5・49土坑

SD2 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土質シルト | 細砂をまばらに含む。 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色 | シルト | 細砂を層状に含む。 |
| 3 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土質シルト | 微砂を含む。 |
| 4 | 7.5YR5/1 褐灰色 | 粘土質シルト | 植物遺体を含む。 |
| 5 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土質シルト | 微砂を多く含む。 |
| 6 | 2.5Y5/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 部分的に微砂を含む。 |
| 7a | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土 | 微砂を部分的に少量含む。 |
| 7b | 7.5YR5/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 細砂、粗砂を多量に含む。 |
| 8a | 5YR5/2 灰褐色 | 粘土 | 層の下部に微砂を含む。 |
| 8b | 7.5YR4/1 褐灰色 | 粘土 | |
| 9 | 7.5YR5/1 褐灰色 | 細砂 | 薄い層状である。 |
| 10 | 10YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 層の中央に微砂を薄い層状に含み、微砂を少量含む。 |
| 11 | 10YR4/1 褐灰色 | 粘土 | 黒褐色粘土をブロック状、小ブロック状にまばらに含む。 |
| 12 | 7.5YR5/1 褐灰色 | 微砂 | 溝中央部に粗砂を含む。 |

SD3 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR5/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 酸化鉄斑、マンガン斑をまばらに含む。 |

SD26 溝跡

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 2.5Y6/1 黄灰色 | シルト質粘土 | 微砂を多く含む。 |
| 2 | 7.5YR4/2 灰褐色 | 粘土 | 溝中央部に植物遺体をわずかに含む。 |
| 3 | 2.5Y5/1 黄灰色 | 粘土 | |
| 4 | 10YR5/2 灰黄褐色 | 粘土 | 細砂を多量に含む。 |
| 5 | 7.5Y4/1 灰色 | 粘土 | 溝中央部でグライ化している。 |
| 6 | 7.5Y5/1 灰色 | 粘土 | 灰黄色の粘土を粒状に部分的に含む。 |
| 7 | 10YR6/2 灰黄褐色 | 細砂 | |
| 8 | 7.5Y4/1 灰色 | 粘土 | 底面に粗砂を含む。遺物を少量含む。 |
| 9 | 10Y4/1 灰色 | 粘土 | 細砂を多量に含む。 |

SK2 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1a | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土 | 層上部にマンガン斑をまばらに含む。 |
| 1b | 5YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 層上半にマンガン斑、酸化鉄斑をまばらに含む。 |
| 2 | 5YR5/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 層下半に灰白色粘土質シルトを小ブロック状に含む。 |

SK3 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土質シルト | 黒褐色シルト、酸化鉄を多量に含む。褐灰色シルトを小ブロック状に含む。 |

SK4 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 粘土質シルト | 暗褐色シルト、明褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む。 |
| 2 | 7.5YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 層上部に暗褐色シルト、明褐色シルト質粘土を層状に含む。 |

SK5 土坑

| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色 | シルト質粘土 | 灰褐色シルト質粘土をブロック状に含む。炭化物の薄い層を含む。 |
| 2a | 7.5YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 部分的に灰褐色シルト質粘土を含む。 |
| 2b | 5YR5/1 褐灰色 | 粘土 | 酸化鉄斑を層の中部に多く含む。 |

第63・72図　土層註記

**［石製品］**

第４分冊第209図８は石製品である。一端を欠損しているが、長方形に整形されており、長辺の一方に磨痕が認められる。軟質の珪質凝灰岩を石材としている。

SK49 土坑　調査区西部の中央 E42～43S24～25 区で検出された土坑である（第72図）。宮城県文化財保護課による確認調査時は確認されていなかったため南半を確認調査トレンチによって切られており、全体の形状は不明である。残存する長軸の長さは84cm であり、さらに南側へ続いていたものと考えられる。短軸は118cm、深さは34.5cm である。断面形は開いたU字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、灰黄褐色の粘土質シルトである。基本層位の第IIａ層と第IVａ層を起源とするブロックを含んでいる。

堆積土中より弥生土器が出土している。

## ７．第IIａ層出土遺物

基本層位の第IIａ層からは、縄文土器、弥生土器、磁器、陶器、石器・石製品類が出土しており、その大部分は他層からの混入と考えられる。

**［陶器］**

陶器は３点図示した（第３分冊第152図13～15）。美濃の志野丸皿（13）、肥前の鉄釉碗（14）、小野相馬と思われる灰釉皿（15）である。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は、石鏃、石錐、大型板状石器片、剝片、石核、石製品、礫石器、礫片などである。第４分冊第151図１に第IIａ層出土の石製品を図示した。扁平な楕円形に整形されており、表裏両面および側面の全周に粗い擦痕が残されている。用いられている石材は砂質凝灰岩である。

**［縄文土器］**

この他に、II層として取り上げた縄文土器を1点図示した（第3分冊第10図18）。鉢で浮彫風に雲形文を描いている。

文様内に縄文を施文している。

## 第７節　その他の遺物

現代の水田耕作土である基本層位の第Ⅰ層から出土した遺物や、本遺跡内より表面採集された遺物の中から主なものを図示した。

**［縄文土器］**

縄文土器は５点図示した（第３分冊第10図19～23）。瘤状小突起を貼付しているものである。沈線で文様を描いた後、瘤状小突起で充塡している。19の瘤状小突起には小さい突起と中ぐらいの突起とがある。20には中央が凹むボタン状貼付文も貼付されている。22・23は大きめの突起が貼付され、22はその左右両側に先の尖った工具で刺突を加えている。20・21は摩滅により縄文が施文されていたかは不明である。19・22・23に縄文はない。

**［土師器］**

土師器は１点図示した（第３分冊第145図14）。甑の把手と思われる。

**［石器・石製品類］**

石器・石製品類は第４分冊第294図に図示した。

**第294図**１～４は石庖丁の破損品であり、１～３は成品の中央部が残存している資料である。

第294図１と２の研磨面下には整形時の剝離痕と器体調整時の敲打痕が観察され、紐孔は敲打による窪み部形成の後、回転によって穿孔されている。３は遺存状態が良好ではなく、加工痕などの詳細な観察は困難である。４は部分的に刃部が残されている資料であり、研磨面下に器体調整時の敲打痕が残されている。用いられている石材は１が粘板岩であり、２は珪質頁岩、３はデイサイト質凝灰岩、４は黒色頁岩である。

第294図５～７は石斧の破損品である。用いられている石材は１と３が輝緑岩であり、２は黒色頁岩である。

第294図５は基部中央から基端にかけてを欠損する太型蛤刃石斧である。最大幅の位置は刃部にあるが、基部もほとんど変わらない幅である。側面が明瞭に形成されており、断面形は側縁を持つ厚みのある凸レンズ状を呈している。刃部は弧状を呈する。研磨は刃面と側面に施され、側面の研磨面下にはわずかに器体調整時の敲打痕が残されているが、刃面の研磨はていねいで敲打痕はほとんど観察されない。残存する表裏両面の基部には研磨は施されておらず、調整時の敲打痕が明瞭に残されている。

第294図６は扁平片刃石斧の刃部と基部の一部を残存する資料である。刃部は弧状を呈している。表裏両面の研磨面には右下がりの擦痕が観察され、刃縁付近の擦痕は刃縁と平行する方向である。側面は形成されているものの平坦ではなく膨らみをもち、研磨面には長軸方向の擦痕が認められる。表裏両面の研磨面下には器体整形時の剝離面が残されている。

第294図７は抉り部から刃部にかけてと基端の一部を欠損する抉入柱状片刃石斧である。断面形は幅よりも厚さがわずかに上回る胴膨らみの方形を呈している。抉り部の研磨面には右下がりの擦痕が観察され、研磨の及ばなかった部分には調整時の敲打痕が残されている。表裏両面と両側面の研磨面には右下がりの擦痕を伴っており、基端面では横方向の擦痕が認められる。破損面は刃部側からの力によるものであり、使用による破損と考えられる。

第294図８は鏡形の石製模造品である。２分の１近くを欠損しており、孔は１孔を残存するのみであるが、２孔穿たれていたものと考えられる。平面形はほぼ円形に近く整形されていたものと推定されるが、側面の研磨方向が短軸方向であるため、厳密には多角形状を呈していたものと考えられる。表裏両面の研磨面には擦痕を伴っている。ａ面には擦痕と方向の異なる弱い線刻が２条認められ、ｂ面には明瞭な線刻が残されている。ｂ面の線刻は孔の外側をめぐるように六角形状に施されていたものと推定される。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

第294図９は先端と基部を欠損する尖頭器である。表裏両面に細部調整を施して尖端部を作出しており、ｂ面の中央には素材剥片の剥離面が残されている。用いられている石材はデイサイト質凝灰岩である。

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たかだBいせき |
| 書名 | 高田B遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 仙台市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第242集 |
| 著者名 | 荒井　格・赤澤靖章・松本秀明・鈴木三男・能城修一・吉川純子・守田益宗・㈱古環境研究所・岡田文男・森　勇一 |
| 編集者名 | 荒井 格・赤澤靖章 |
| 編集機関 | 仙台市教育委員会 |
| 所在地 | 〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１ |
| 発行年月日 | 2000年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| たかだ いせき<br>高田B遺跡 | せんだいし わかばやしく<br>仙台市若林区<br>につぺ あざせんかりだ<br>日辺字千刈田 | 04100 | 01440 | 38度<br>12分<br>20秒 | 140度<br>55分<br>39秒 | 1991.05.15<br>～<br>1993.10.15 | 8,800 | 道路建設に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 高田B遺跡 | 集落跡<br>水田跡<br>自然流路跡<br>遺物包含層 | 縄文時代<br>弥生時代<br>古墳時代<br>平安時代<br>中世<br>近世 | 竪穴住居跡<br>掘立柱建物跡<br>水田跡<br>溝跡<br>小溝状遺構群<br>道路跡<br>土坑<br>遺物包含層 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品・木製品・石器・石製品・金属製品 | |

仙台市文化財調査報告書第242集

**高田B遺跡**

**第1分冊　本文編**

２０００年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 022(214)8893～4

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24—24 TEL 263—1166